

— The Another Origin

—

青葉空太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界に生きる少年は、この世に生を受けた時からあまりに強大過ぎる力をその身に宿していた。

そのせいで他者からは化け物と忌避され、誰にも認められない孤独な日々を送っていた。

しかしそんなある日、少年は一人の女性と出会う。

女性は少年を恐れることなくその手を握り、共に歩んで行くことを約束する。

それが後にあらゆる世界の存亡を揺るがす、運命の歯車が回り始めた瞬間だった。

これは、本来なら実在する筈のなかつた可能性の物語。

人でも神でもない——もう一つの原典を巡る物語。

目次

プロローグ	1
第1章 YES！ ウサギが呼びました！	
第1話 ようこそ、箱庭の世界へ！	11
第2話 トリトニスの大滝	35
第3話 世界の果て	71
第4話 サウザンドアイズ	97
第5話 白き夜の魔王	119
第6話 ノーネーム	148
第7話 打倒魔王	174
第8話 箱庭の騎士	205
第9話 英雄の末裔	231
第10話 FAIRYTALE in	
PERSEUS	254
第11話 星降る夜に	283
第2章 あら、魔王襲来のお知らせ？	
第12話 火龍誕生祭	320
第13話 黄昏の街と逃走劇	357
第14話 不穏な知らせ	387
第15話 飛鳥の決意	423
第16話 造物主達の決闘	453
第17話 THE PIED PIP	
ER of HAMELIN	484

第18話	審議決議	514
第19話	真実の伝承	553
第20話	再開	579
第21話	それぞれの戦い	610
第22話	決着	640
第23話	明日に希望を	674
第3章	そう……巨龍召喚	
第24話	南側の収穫祭	709
第25話	地域支配者	750
第26話	湯殿の会話	789
第27話	日向の過去	817
第28話	嵐の中の邂逅	844
第29話	アンダーウッド	873

RE KING		1046
OS ORBIT in VAMPI		
第34話	SUN SYNCHRON	1007
第33話	黄金の豎琴	973
第32話	バロールの死眼	945
第31話	戦場	910
第30話	襲来	

プロローグ

ふわりと、花の香りを含むやわらかな春風が頬を撫でた。

鮮やかに咲き乱れる桜の並木道を歩きながら、少年——天道日向はてんどうひなた呟いた。

「あれから、もう二年か」

ふと、空を仰ぐ。

麗らかな春の青空は透き通るように澄み渡り、たゆたう純白の雲はとても居心地が良さそうだ。

そんな天然のキャンパスの中に、日向はとある人物の姿を描き出す。

記憶の中のその人物は、彼に向かって朗らかに笑いかけていた。

「まったく、どこに行っただか」

ふつと、哀愁を交えた苦笑を浮かべる。

それまで長い間をずっと共に過ごしていたその人物は、ある日を境に突然日向の前から姿を消した。

後を追おうにも、そのための手がかりとなりそうなものが不自然なほどに見つからな

かったのだから仕方がない。

国内に居ればまだいいが、生憎と彼女の行動範囲はワールドクラス。

闇雲に探すのは、いささか以上に無理がある。

そんなわけで、素直に待つほか無いのだが——そうこうする内に早二年。

気がつけば、日向は十七歳になっていた。

「ちやんと飯とか食べてるのかなあ？ あの人、家事に関しては本当に壊滅的だったからな」

思わず当時の出来事を振り返る。

掃除をしようとすればなぜか空き巣に入られたあとみたいになり。

洗濯をしようとすればなぜか家中が水浸しになり。

台所に立てば全てが瞬く間に焦土と化した。

そんな人だったから、日向は心配で仕方が無かった。

それに、どうにも自分のためだけに作る料理は味気ない。

振る舞う相手が居ないので、最近はおっぱら簡単な食事で済ませるようになってしまった。

まあ、一人少ない分だけ確かに楽ではあるのだが、やはりどこか物寂しい。

誇張でもなんでもなく、まるで色褪せた世界を生きているようだ、日向は感じてい

た。

「……いや、それも当然か」

元々、自分の世界に色を与えてくれたのは彼女だ。

どうしようもなく無機質でモノクロだった日々と心を、その手で鮮やかに彩ってくれたのは彼女だ。

なぜなら彼女だけが、この世界でただ一人——自分を認め、必要だと言ってくれたのだから。

「……つまらないな」

ぼつりと、日向は本音をこぼした。

彼は求めていた。

自分を許容してくれる世界を。

自分が平凡でいられる日常を。

それは十七年間、日向が抱き続けた夢。

そして十七年間、叶うことのなかった夢。

日向はただ、誰かと笑い合いたいだけだった。

皆と同じ歩幅で、日々を歩んで行きたいだけだった。

それなのに、世界は彼を認めない。

日向の身に宿る強大過ぎる力が、決してそれを許さなかった。それならいつそ、全てを投げ出してしまおう。

己の望むままにこの力を振るい、自分自身で日常を非日常へと変えてしまおう。それは、幼い頃から幾度となく考えたこと。

彼女がそばに居てくれた間だけは満たされていたが、それでも心の奥にぽっかりと空いた空虚な部分だけは、ついで埋まることはなかった。

こうして彼女が居ない今、その穴は再び広がり始める。

日に日に大きくなっていくそれに、耐えきれなくなりそうなこともある。

それでも瀬戸際で踏み止まっていられるのは、過去に交わしたたった一つの約束ため。

彼女との、大切な誓いのためだ。

彼女は言った。

『いいかいひー君。いつか、君を認めてくれる世界が、君を必要としてくれる人々が、きつとどこかに現れる。君のその力は、絶対に呪いなんかじゃない。君は決して、いなくてもいい存在なんかじゃない。君のその力は、誰かのために振るえる力だ。そして君は、それが出来る優しい心を持っている。私が言うんだから間違いないさ。だから、もしもそんな世界に、そんな人々に出会えたのなら——』

「君の力で、守ってあげてね……か」

思い出して、日向は懐かしげに笑う。

彼女の言葉は全てが詭弁だ。

自分は決してこの世界には認められないし、彼女以外は誰も、自分を必要とすることはない。

日向はそれが現実であると知っていた。

それこそが現実であると悟っていた。

それでも――

「――それでも、あの人の言葉なら、なぜだか信じられるような気がするんだよな」
だからこそ、日向は胸の奥底に刻み込む。

もしも本当にそんな世界があるのなら、自分は必ずそこへ行こうと。

もしも本当に自分を必要としてくれる人々が居るのなら、命を賭して守ろうと。

本来ならそれは、意味を成さなはずだった虚しい決意。

泡沫のように儂く消えて無くなるだけのはずだった、覚悟のこもった強き意思。

しかし、そんな彼の切なる想いを――とある世界は聞き届ける。

「……うん？」

ざあつと、桜の木々が一斉に揺れた。

数多の花弁が軽やかに空へと舞い上がる最中、不意にその中を漂う一枚の封書が目に入る。

ひらひらと風にたゆたうそれは、やがて寸分違わず日向の手に落ちてきた。

首を傾げながらも手首を返して裏面を見れば、そこには達筆でこう書かれていた。

『天道日向殿へ』

——と。

その宛名を目にした瞬間、ずっと燻っていた彼の心に火が点いた。

火は瞬く間に炎となり、全身を焼き尽くすかのごとく燃え盛る。

胸の奥から抑えきれない衝動が沸き起こり、鼓動は早鐘のように高鳴った。

「……ハ、ハハハ」

自然と、笑い声がこぼれた。

封を切る必要はなかった。

中身を確認するまでもなかった。

なぜなら、日向には確信があった。

これは、自分の望みを叶えるものだ。

これこそが、彼女が示していたものなのだ。

だからこそ、日向は迷わない。

たとえ生まれ育った故郷を捨て去るとしても。

たとえもう二度と、帰って来られなくなるのだとしても。

その先に、自分が望む世界があるのなら。

そしてそこに、自分を必要としてくれる人々が居るのなら。

拒む理由などありはしない。

「……」

ふと、日向は背後に振り返る。

桜が舞い散る並木道の向こうに、人の気配はない。

それでも日向は、まるで誰かに語りかけるように呟いた。

「……もしもここで躊躇したりなんてしたら、あなたは俺を叱るんだろうな」

『ふふ、当然じゃないか』

一陣の風によつて、不意に、そんな言葉が聞こえた気がした。

日向はしばしの間、その風を感じるように瞳を閉じ、

「——ありがとう、義母かあさん。行ってきます！」

朗らかな笑みで、そう告げた。

『ああ。行ってらっしゃい、ひー君』

そして遂に封を開け、中に描かれた文章を読み始める。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族と、

友人と、

財産を、

世界の全てを捨て、

我らの『箱庭』はこにわに來られたし』

刹那、日向の目に映る世界は劇的な変貌を遂げた。

突如として沸き起こった浮遊感と共に、自分が空へと投げ出されたことを理解する。

あまりに唐突過ぎる展開に目を白黒させるが、咄嗟に落ち着いて周囲の状況を確認する。

凄まじい風圧に耐えながら、世界にその双眸を向け——心を奪われた。

「……………」

言葉が出なかった。

圧倒的なその光景に、日向はただただ見惚れることしか出来なかった。視線を向けた先。

地平線の彼方に見えるのは、まるで世界の果てを彷彿とさせるような断崖絶壁。そして眼下に映るのは、縮尺を見間違うほど巨大な天幕に覆われた未知の都市。その時、その瞬間、日向の前に広がるのは——完全無欠に異世界だった。

「……ハハハ、ハハハハハハッ!!!」

日向は歓喜する。

感動に胸が打ち震え、全てが確証に昇華する。

彼女の言葉は正しかった。

彼女の言葉は本当だった。

なぜなら、こうして現実が証明しているのだから。

だからこそ日向は、万感の想いを込めて叫ぶ。

ここは、自分を認めてくれる世界。

ここが、自分の望んでいた世界。

そして——

「……それが、俺の生きるべき世界だッ!!!」

この日、日向は久しぶりに。

心の底から笑ったのだった。

第1章 YES! ウサギが呼びました!

第1話 ようこそ、箱庭の世界へ!

「きゃー!」

「わっ!」

「ハーハッハッハぐぼあッ!」

待望していた世界との邂逅に思わず我を忘れて高笑いしていた日向は、案の定なんの備えも出来ないまま、上空4000mの落下を経て下方の湖にダイブした。

冷たい水の中で文字通り頭を冷やした日向は、水中でブクブクと泡を立てながら考える。

(……どうやら、俺以外にも何人か呼び出されていたみたいだな。それにしても、落下してきた高度と衝撃の度合いが比例してないのはどうしてだ?)

冷静に状況を分析するが、とにかくこのままでは息が保たないと思い、急いで水面まで浮上する。

「——ぷはあっ! はあ、はあ、ゲホッ、ゴホッ! ……あー、マジで死ぬかと思った」

呼吸を整えたところで、不意に落ちてきた空を見上げてみる。

じつと目を凝らしてみれば、なにやら薄い水膜のようなものが幾重にも展開されていた。

恐らくあの水膜が緩衝材の役割を果たしたお陰で、落下のスピードが緩和されたのだろう。

まか不思議な技術に好奇心をくすぐられるが、そこでつんぎくような絶叫が耳朶を叩いた。

「ニヤ、ニヤア！ フンニヤアアアアアアア!？」

声のした方を見れば、そこにはどうやら三毛猫と思わしき小動物が、バタバタと湖面でもがきながら溺れていた。

犬掻きならぬ猫掻きで必死に泳ごうとはしているが、このままでは逆に三途の川を渡り切りそうだ。

たまたまそばで浮かんでいた日向は三毛猫の元まで泳いでいくと、ヒョイと水中から抱き上げた。

「よつと。大丈夫か？」

『ゲホツ、ゲホツ！ じ、じぬがどおぼた……！ 助けてくれておおきにー!』

「はは、どういたしまして」

種族の壁で言葉は理解出来ないが、何となく感謝している様子で「ニャーニャー」と鳴いている三毛猫に、日向も朗らかな笑顔で応じる。

ややあつて、そんな彼らの元に慌てた様子で一人の少女が泳いできた。

「三毛猫! 大丈夫!?!」

心配そうに三毛猫の安否を気遣う少女。

年端のほどは十四といったところだろうか。

可憐な顔立ちと、短い亜麻色の髪が印象的な少女だ。

日向は目に見えて不安の色を浮かべる彼女に、安心させるような柔らかな口調で説明した。

「ああ。少し水を飲んでるけど、心配はいらないと思うよ。君がこの子の飼い主か?」

「えっと、はい。三毛猫は私の友達……です」

「そっか。なら友達が無事で良かったな。ひとまずはこのままあそこの岸まで泳ごう。友達は俺が連れていくよ」

「う、うん」

少々戸惑いながらも少女が頷いたことを確認して、日向は三毛猫を頭に寄せた。

「そんなわけだから、少しそこでくつろいでいてくれ」

「にゃー」

わかったと告げるように頭上で一鳴きする三毛猫。

その後、日向たちは目的の岸边に到着する。

無事に上陸したところで、日向は頭から三毛猫を下ろして手渡した。

「それじゃ、後は君に任せるよ。風邪を引かないように早めに乾かしてあげてな」

「うん。……三毛猫を助けてくれて、本当にどうもありがとう」

『アンタええ人やなあ。この恩は忘れんわ』

「気にしなくていいさ。困った時はお互い様だ」

ペコリと三毛猫を抱えながら頭を下げる少女に、日向も朗らかに笑って答える。

そうして一息吐いたところで、日向は自分たちよりも先に上がっていた二人の人物に目を向けてみた。

一人は気品の中にもどこか気の強そうな雰囲気漂わせる令嬢然とした少女で、艶やかな長い黒髪を水滴で綺羅と光らせている。

もう一人は頭に炎のシルエツトが描かれたヘッドホンを着けた金髪学ランの少年で、これまた全身をビッシヨリと水で濡らしていた。

彼らは濡れた服を絞りながら、自分たちの扱いに対して盛大に苦言を呈している。

「招待者は一体何を考えているの!? まさか問答無用に引きずり込んだ挙げ句、空に投げ出すなんて！」

「激しく同意だぜクソツタレ。こんなもんあの水膜を少しでも逸れてたら速攻でゲームセツトじゃねえか。これなら石の中に呼び出された方がまだ親切つてもんだ」

「……いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

そこで思わず待ったをかける黒髪の少女。

確かに常識と照らし合わせれば、石の中に呼び出されるなどそれこそ絶対絶命だろう。

「いや、俺は問題ない」

「うん。まあそれなら俺も大丈夫だな」

そんな彼女の至極当たり前の指摘に対し、さも当然とばかりに答える少年。

それを日向も肯定する。

少女は驚いたように目を丸くさせ、次いで呆れたように息を吐いた。

「そう。随分と丈夫な身体をお持ちなのね」

そう言つて少女は濡れた髪を掻き上げる。

するとそれまで三毛猫を乾かしていた少女が、コテンと小首を傾げて呟いた。

「(ハハ)……一体どこなんだろう?」

その疑問に、金髪の少年が応答する。

「さあな。まあ落ちてくる途中に世界の果てみたいなものが見えたし、どこぞの大亀の

背中じゃねえか？」

「なるほどな。それなら、他にも三頭の象とかがいたりしてな」

「……へえ？」

ピクリ、と金髪の少年が反応する。

まさか切り返しが来るとは思わなかった。

碧眼の双眸を細め、興味深そうに日向の姿を一瞥する。

すると他の二人にも関心が沸いたのだろう。

この場にいる全員の顔を順次見直し、

「わざわざ尋ねるまでも無いと思うが、一応確認までに聞いとくぞ。ひよつとしてお前たちにも変な手紙が？」

「ええ。その予想で正解だけど、まずはその『オマエ』って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以降は気をつけて。それで、その猫を抱いているあなたと、その隣の黒髪のあなたは？」

「……春日部耀。以下同文」

「天道日向。日向でいいぞ」

「そう。よろしく春日部さん、それに日向君。最後に、野蠻で凶暴そうなそのあなたは？」

黒髪の少女——もとい久遠飛鳥は、次に金髪の少年に問いかけた。

その明らかに失礼な物言いを意にも介さず、少年は軽薄そうな笑みで答える。

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蠻で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用量を守った上で適切な対処で接してくれよお嬢様?」

「そう。取り扱い説明書をくれたら考えあげるわ、十六夜君」

「ハハッ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

そう言つて心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

賑やかにそうだと朗らかに笑う天道日向。

そんな彼らを物陰から伺う黒ウサギは思う。

(う、うわあ……なんだか問題児ばかりみたいですねえ)

自分たちで召喚しておいてアレだが……彼らが協力する姿は、客観的にも想像出来そうにない。

黒ウサギは沈鬱そうに重くため息を吐くのだった。

「……で？ 呼び出されたはいいけど何で誰もいねんだよ。こういう場合テンプレだと、招待状に書かれてた箱庭とかいうものを説明する奴が出て来るもんじゃねえのか？」

ケツ、と苛立たしげに吐き捨てる十六夜。

飛鳥も優雅に腕を組んで同意する。

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

(まったくです)

ぼつりと述べた耀の台詞に、こつそりとツツコミを入れる黒ウサギ。

もつとパニックになってくれれば飛び出しやすいのだが、場が落ち着き過ぎているせいでどうにもタイミングが計りづらいのだ。

「そうだな。ならいつそ盛大に慌てふためいて、この辺一帯を消し飛ばしてみるか？」
(な、なんですとっ!?)

日向の物騒な発言に、思わずシャキン！ とウサ耳を逆立てる黒ウサギ。

「ヤハハ！ オイオイなんだよそれ、ちよつと面白そうじゃねえか！」

「そうね。私もそろそろ我慢の限界が来ていたところよ。鬱憤を解消するには丁度いい

かもしれないわ」

「……確かに」

次から次へと日向の提案に賛同の姿勢を見せる三人。

黒ウサギは慌ててあわわと狼狽え出す。

(い、いやいやいや! ちよつと何てことを気軽にのたまつていらつしやるのですかこの問題児様方は! というかあれ!? それでは黒ウサギもピンチなのですよ!?)

冗談ではないと内心で悲鳴を上げた黒ウサギは、意を決して姿を見せようと試みる。

が、直後に放たれた日向の言葉に、その動きをピタリと静止した。

「ま、そういう冗談は置いとくとしてだ。そろそろ、そこに隠れている誰かさんにでも話を聞いてみないか?」

(バ、バレてたー!?)

ピコーン! と仰天したようにウサ耳を伸ばす黒ウサギ。

そんな彼女の動揺を尻目に、他の三人も矢継ぎ早に続く。

「なんだ、日向君も気づいていたの?」

「まあな。というか十六夜もだろ?」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ? そつちの猫を抱いてる奴も気づいてたみたいだしな」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「……へえ？ 面白いなお前」

軽薄に笑うも、十六夜の目は笑っていない。

彼らは理不尽な招集を受けた腹いせに、殺気を込めた冷やややかな視線をとある方向に向ける。

その視線の先では、茂みからびよっこりと青いウサ耳が飛び出していた。

この時、四人の内心が一致していたことは言うまでもない。

((（頭隠してウサ耳隠さず……）))

何ともお粗末なウサギである。

そんな日向たちの呆れの一方でビクウツ！ と震えた黒ウサギは、慌てて爽やかな笑顔を取り繕いつつ、ひよこつと草むらから現れた。

「ア、アハハ。いやですよ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると、黒ウサギは死んじやいますよ？ ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じて、ここはひとつ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいのでございますヨ？」

そんな彼女に対する日向たちの返答は、以下の通りだった。

「断る」

「却下」

「お断りします」

「聞くだけ聞こう」

「あつは、取りつくシマもないですね♪ って最後の人だけちよつぱり優しい!」

バンザイー、と降参のポーズをとり、続いてウサ耳を逆立てて驚く黒ウサギ。

しかしその目は冷静に彼らを値踏みしていた。

(最初の御三方は肝つ玉に關しては及第点です。この状況でNOと言える勝ち気は買いですね。まあ、扱いにくいのは難点ですけども。最後の御方に關しては……うう。ありますがございます)

黒ウサギはおどけつつも、日向たちにどう接するべきかを少し感動しながら考えている——と、不意に耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、彼女の青いウサ耳を根元から驚掴むと、

「えい」

「フギャツ!」

思いつき引つ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを! 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮

無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きにかかるとはどういう了見ですか!」

「好奇心の成せる業^{わざ}」

「自由にもほどがあります!」

「へえ? このウサ耳つて本物なのか?」

興味を引かれた十六夜が、右から掴んで同じように引つ張る。

「……じゃあ私も」

「それじゃあ俺も」

そこに若干そわそわとした飛鳥が加わり、続いて日向も便乗した。

「ちよ、ちよつと待——!」

結局、左右から無遠慮にウサ耳を引つ張られた黒ウサギは声にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊したのだった。

——ちなみに、最後に手を伸ばしてきた日向にビクビクと怯える黒ウサギだったが、思いのほか優しく撫でてもらうだけだったので、思わず涙ぐんでいたのは余談である。

——一時間後、黒ウサギは涙を流して泣いていた。

「うう……しくしく、しくしく」

「36?」

「かけ算じゃありませんよ! 落ち込んでいます!」

「悪い悪い。それで? 何をそこまで悲しんでるんだ?」

「この状況に決まっていますよう。日向さん以外誰も話を聞いてくれないですし……」

現在、日向以外の三人はそれぞれが実に思い思いに過ごしていた。

十六夜は湖畔の岩場で寝転がり、

飛鳥は指先で自分の髪をクルクルと弄り、

耀は三毛猫とじやれている。

実に三者三様の有り様である。

「あ、あの……皆さん? そろそろ本気で黒ウサギの話を聞いていただきたいのですが」

「嫌だ」

「うわーん! 日向さーん!」

「よしよし。元氣出そうな黒ウサギ。試しに俺からも頼んでみるから」

日向の胸でしゃくりを上げる黒ウサギは、うるうると瞳を潤ませながらも首を振る。

「ぐす。お気持ちは嬉しいのですが、この方々には普通に頼み込む——」

「皆、そろそろ黒ウサギの話を聞かないか?」

「チツ、しょうがねえな」

「まったく、仕方ないわね」

「はあ、気は進まないけど」

「——だけでは、つてなぜっ!?!」

急に態度を一変させた三人に思わずツツコム黒ウサギ。

「お、おかしいのです! 差別です! なんて日向さんの時だけアツサリ承諾するんですか!?!」

「まあまあ」

「いいからさっさと進めろ」

酷い扱いの落差に憤然と抗議する黒ウサギだが、日向からの宥めと十六夜からのまくし立てにしぶしぶにながらも引き下がる。

経緯はどうあれせうやくを訪れた説明のチャンス、ここを逃せばまた数時間にも及ぶ説得劇を敢行する羽目になりかねない。

黒ウサギは気を取り直して咳払いをすると、大きく両手を広げて宣言した。

「おっほん! それでは、心の準備はよろしいですか御四人様? 定例文で言いますよ? 言いますよ? さあ、言います! ようこそ、我らが『箱庭の世界』へ! 我々は御四人様にギフトを与えられた者だけが参加出来るゲーム——通称『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせて頂くかと思ひ召喚いたしました!」

黒ウサギの説明に、まずは耀が小首を傾げて尋ねる。

「ぎふとげーむ?」

「そうです! すでにお気づきでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません! その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます! “ギフトゲーム”はその“恩恵”を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は、強力な力を持つギフト保持者たちがオモシロオカシク生活するために作られたステージなのでございますよ!」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギに、今度は飛鳥が挙手して問う。

「まず、初歩的な質問からしていいかしら? あなたの言う“我々”とは、あなたを含めた誰かなの?」

「YES! 異世界から呼び出されたギフト保持者は、箱庭で生活するにあたって数多とある“コミュニティ”のいずれかに必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきますっ! そして“ギフトゲーム”の勝者はゲームの“主権者”^{ホスト}が提示した賞品をゲットできるという至ってシンプルな構造となっております」

順を追ってこの世界の説明をしていく黒ウサギに、続いて日向が疑問を投じる。

「“主権者”というのは誰のことなんだ?」

「様々ですね。暇を持って余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催するようなゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございませぬ。特徴として前者は自由参加が多いですが、〃主催者〃が修羅神仏だけあつて凶悪かつ難解な物が多く、命の危険もあるでしょう。しかし見返りは大きいです。〃主催者〃次第ですが、新たな〃恩恵〃^{ギフト}を手にすることも夢ではありません。後者はチップを用意する必要があり、参加者が敗退すればチップは全て主催者のコミュニティに寄贈される仕組みです」

「後者はずいぶん俗物ね……チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・名誉・権利・人間……そしてギフトを賭けることも可能です！ 新たな才能を他者から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能です。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

黒ウサギは愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を仄めかせる。

挑発とも取れるその発言に、同じく飛鳥は挑発的な声音で問う。

「なら、最後にもう一つだけ質問させてもらつていいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうすれば始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければOKです! 商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているので、よろしければ参加していただくさいな♪」

飛鳥はピクリと眉を上げる。

「……つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら?」

お? とウサ耳を反応させて驚く黒ウサギ。

「ほほう? 中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の、二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか! そんな不逞な輩はことごとく処罰します。が、しかし! 『ギフトゲーム』の本質は全くの逆! 一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手に入れることも可能だということですね」

「そう。中々野蠻ね」

「ごもつとも。しかし『主催者』は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰ぬけは、初めからゲームに参加しなければいいだけの話なのでございます」

黒ウサギはあちら方の説明を終えたのか、そこで一端会話を区切る。

「さてさて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんをいつまでも野外に放り出しておくのは忍びないです。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺が質問していいいだろ」

するとそれまで静聴していた十六夜が、威圧的な声と共に立ち上がる。

ずっと刻まれていた軽薄な笑みが消えていることに気づいた黒ウサギは、身構えるように聞き返した。

「……どういった質問ですか？ ルールですか？ ゲームそのものですか？」

「そんなものはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ黒ウサギ。ここでお前に向けてルールを問いただしたところで、何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは……ただ一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は黒ウサギから視線を外し、巨大な天幕によって覆われた都市を見つめる。

そして、何もかも見下すような声音で一言、

「この世界は……面白いか？」

ただ一言、そう問うた。

その質問に、日向たちも無言で返答を待つ。

彼ら呼んだ手紙には、確かにこう書かれていたのだ。

——「家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い」——

その言葉に見合うだけの催しがあるのかどうかこそ、四人にとつては何よりも重要なことだった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

彼女の答えに十六夜は再び軽薄な笑みを浮かべ——日向もまた、内心で歓喜するのだった。

それから更に時を跨ぎ、ちょうど太陽が中天と地平の中頃辺りに差しかかる頃。

箱庭についての説明にひとまずの区切りをつけた日向たちは、黒ウサギの案内を元に一路、俗に「外門」と呼ばれる地点を目指していた。

しばらく街道を歩いていると、やがて道の先に大きな門が見えてくる。

そこで黒ウサギは片手を振り上げると、前方に佇む幼い少年に向かって呼びかけた。

「ジン坊ちゃーん！ 新しい方たちを連れてきましたよー！」

ジンと呼ばれた少年は、ブカブカのローブに跳ねた緑色の髪が特徴的な人物だった。黒ウサギの声に気づいた彼は、居住まいを正しつつ柔らかな笑みで彼女たちを迎えた。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性御二人が？」

「はいな！ こちらの御四人様が——」

クルン、と笑顔で振り向く黒ウサギ。

ガチン、とそのまま固まる黒ウサギ。

「あ、あれれれれ〜？ 黒ウサギの記憶が確かなら、もう御二人いませんでした？ 少し目つきが怖くて、かなり口が悪くて、それはもう『俺問題児！』ってオーラを全身から放っている殿方と、唯一それなりに話を聞いてくれて、黒ウサギの素敵耳を優しく撫でてくださいった紳士的な殿方が」

言葉の端々に日向と十六夜に対する評価の差をチラチラと見え隠れさせながら、黒ウサギはこの場に残っている飛鳥と耀に問いかけた。

「ああ、もしかして十六夜君と日向君のこと？ 彼らならさつき『ちよつくら今から世界の果てを見てくるぜ！』と言って意気揚々と駆け出しに行つたわよ。あっちの方に」

あっちの方に。

そう言つて飛鳥が指差したのは、上空から見えた断崖絶壁。

口を開けて呆然となった黒ウサギは、ハッと我に返つて問いただす。

「ななな、何で止めてくれなかつたんですか!」

「あら、止めたわよ。日向君が」

「ほえ? そうなのですか?」

「うん。凄くキラキラした顔で『イザヨイ。戻つて来ーい』つて言いながら追いかけて行つた」

「それ明らかに口だけですよね?! 便乗して着いて行く気満々ですよね?! どうして黒ウサギに教えてくれなかつたんですか!」

「頼む! もうこれ以上黒ウサギに迷惑はかけられない! 十六夜は必ず俺が連れ戻すから、二人は黙つていてくれ!」と日向君に頼まれたんだもの」

「え、そんな。まさか日向さんは、本当に黒ウサギのたを思つて——」

「あ、それと最後に『ははは! やっぱりごめんな黒ウサギ!』とも言つてた」
「つてやつぱり日向さんも行きたかつただけじゃないですかー!!」

ガツクシ、と前のめりに膝をつく黒ウサギ。

ほんの数時間前まで新たな人材を心待ちにしていたというのに、いざ蓋を開けてみればコレである。

よりによつてどうして端から端までこうにも問題児ばかりが揃うのか。

「加えて唯一まともかもしれないと日向には期待していただけに、受けるダメージもひとしおだった。」

そんなorzとなつた黒ウサギの隣で、ジンは顔を蒼白にして叫ぶ。

「た、大変です！　『世界の果て』にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が！」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを宿した獣を指す言葉で、中でも『世界の果て』には強力なギフトを所持した者たちが多くいます。万が一にも遭遇すれば最後、生身の人間ではとても適いません！」

「あら、それは残念。ということ、彼らはもうゲームオーバーなのかしら？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？　斬新だね」

「で、ですから！　冗談を口にしてている場合では……！」

「ジンはあれやこれやと事態の深刻加減を訴えるが、当の二人はさらりと受け流すだけである。」

「そんなやり取りを横目で見つつ、黒ウサギは盛大にため息を吐いて立ち上がった。」

「はあ……ジン坊ちゃん。誠に申し訳ないのですが、御二人様のご案内をお任せてしてもよろしいでしょうか？」

「あ、うん。黒ウサギはどうする?」

「問題児様方を捕まえに参ります。事のついでに——『箱庭の貴族』とまで謳われるこの黒ウサギを馬鹿にしたことを、骨の髄まで後悔させて差し上げますッ!!」

悲しみを払拭した黒ウサギは全身から怒りのオーラを漲らせると、艶のある長い青髪を徐々に淡い緋色へと染めていく。

やがて毛先まで完全に変色させた彼女は空中高くに跳び上がると、外門の脇に置かれた彫像を次々と駆け上がってその柱に水平に取り付き、

「一刻ほどで戻ります! 皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ!」

淡い緋色の髪を戦慄かせ、足場に亀裂が走るほどの強烈な踏み込みで瞬く間に弾丸のごとく跳び去って行った。

巻き上がる風から長い髪を庇うようにして押さえていた飛鳥は、すでに見えなくなつた黒ウサギの背中を見つめて呆れたように呟いた。

「……箱庭の兎は随分と速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「兎たちは箱庭の創設者の眷属。その実力は言わずもがな、様々なギフトに加え特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り心配ないとは思うのですが……」

ジンの心配を余所に、飛鳥は「そう……」と空返事をする。

「なら黒ウサギもご堪能くださいと言っていたし、お言葉に甘えて先に箱庭へ入るとしましよう。エスコートはあなたがしてくださるのかしら？」

「あ、はい。コミュニティのリーダーを務めているジン＝ラツセルです。齢十一になつたばかりの若輩ですが、どうぞよろしくお願いします。御二人のお名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

ジンが礼儀正しく自己紹介して一礼すると、飛鳥と耀もそれにならつて一礼する。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうですね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取ると、胸を躍らせるような笑顔で箱庭の門をくぐるのだった。

第2話 トリトニスの大滝

飛鳥たちが箱庭へ足を踏み入れたその同時刻。

鬱蒼と大小様々な木々が生い茂り、強力無比な幻獣たちが巣くう。『世界の果て』付近に位置する樹海の中を、高速で走り抜ける2つの人影があつた。

「ヤハハハハハハ！ おいおいマジかよ！ この世界に来てから早々に嬉しいサブプライズだ！ まさか俺の脚力に付いてこられる人間がいるとはな！ やるじゃねえか日向！ 冗談抜きでビックリだぜ！」

高らかに笑い声を上げながらそう告げたのは、並み居る幻獣たちの縄張りを我が物顔で疾走中の問題児が筆頭、逆廻十六夜だ。

「ハハハハハハ！ そいつはソックリそのまま俺の台詞だぜ十六夜！ まさか俺と同等の身体能力を持った人間が実在するなんて夢にも思ってみなかつたぞ！ そもそもお前は本当に人間か!？」

「ヤハハ！ おうよ！ 生物学上はな！」

そしてその十六夜と併走するのが、同じく問題児の一員、天道日向である。

こちらにも非常に良い笑顔で樹海の中を爆走していた。

この近辺をテリトリーとする幻獣たちにすれば領地侵害も甚だしいが、それでも彼らに勝負を仕掛ける猛者はいない。

何せ日向と十六夜はほぼ音速に近い速度で樹海の中を駆け抜けているのだ。

幻獣たちも迂闊に手を出すべき相手では無いと判断したのだろう。

物陰で息を潜めながら、ひっそりと彼らの動向を見守っていた。

そんな事情でさしたる足止めも無いままにひたすら樹海を邁進していると、やがて草葉の隙間に微かな光が見えてきた。

どうやらようやく森林地帯を抜けるようだ。

高まる期待に胸を躍らせながら、2人はより一層大地を踏み込む足に力を込め、見えた光の向こう側へと飛び出した。

そして――

「……………いつは」

「……………すごいな」

視界が開けた先には、*“世界の果て”*にある断崖絶壁まで続く巨大な大河川が待ち受けていた。

川辺に立った日向と十六夜は、それぞれが遙か遠くに見える対岸を見据え、

「これは正に圧巻の規模だな。川幅だけでも、向こう岸までざっと3kmぐらいはあるぞ?。」

「ああ。落下中に一度目にしてはいたが、間近に来ると更にデケエな」

連綿と広がる膨大な量の流水は、淀みなくせせらぎを奏でて流れている。

水面は磨き抜かれた鏡面ののようにキラキラと陽光を反射しており、水質は純度の高い水晶のように冴え澄んでいた。

「しつかしまあ、流石は異世界。見たこともない植物や魚がうようよ生息してやがる」

「そうだな。次に来た時は、こうした特有の生態系をのんびりと観察してみるのも楽しそうだな」

「お、なかなか趣味が合うじゃねえか」

愉快そうにヤハハと笑う十六夜。

日向はそんな彼の隣でなんとなく川辺に落ちていた石を拾うと、そこでピンと閃いた。

「そうだな。なあ十六夜。折角だからここで一つ、試しに俺とお前でギフトゲームをしてみないか?。」

「何?。」

ピクリ、と十六夜が片眉を上げて日向を見る。

その双眸には僅かに疑惑の念が浮かんでいた。

「……どういうつもりだ？」

「何、百聞は一見に如かずって言うだろ？ 黒ウサギから説明は受けたものの、実際に体験してみたほうがノウハウも分かりやすいしな。それに何より——面白そうだろ？」

日向はニヤリと笑みを浮かべる。

十六夜はしばし思案するような素振りを見せると、やがて日向を睨みつけ、

「おいおい、あんまりふざけたことを抜かすなよ日向。そんなもん全然興味あるし超面白そうじゃねえか良しやろう今やろうさあやろう！」

「ノリノリだな」

ヤハハハ！ と楽しそうに哄笑を上げる十六夜。

了承を得た日向は手にした石を指で挟み、十六夜の前に提示すると、

「ゲームの内容は簡単だ。目の前の大河流に石を投げて、水面を跳ねた回数を競い合う。単純に言えば水切りだな」

「おう、異論はないぜ。……けど、そうだな。どうせ勝負するなら、罰ゲームの1つでも無いと盛り上がり欠けるんじゃないやねえか？」

「なら負けた方は、後で黒ウサギに誠心誠意今回の件を謝罪する——なんてのはどうだ？」

「その賭け受けたー！」

方針が決まったところで、両者は宣誓を行う。
すると彼らの手元に2枚の羊皮紙が出現した。

『ギフトゲーム名 “PLAY DUCKS AND DRAKES”

・ルール説明

- ・両者共に投石のチャンスは一度。
- ・投じる石の選択は自由。
- ・勝敗は投じた石が河川に沈むか、
対岸にたどり着くまでに水面を
跳ねた回数がより多かつた者。
- ・投石者に対して意図的な妨害を
行うのは禁止。(第三者含む)
- ・敗者は黒ウサギに対して誠意を
込めた謝罪を行う。

宣誓 上記のルールに則り、

『天道日向』 『逆廻十六夜』 の
両名はギフトゲームを行います。』

条件を確認した日向と十六夜は、それぞれ手にした羊皮紙を再度見つめて口を開く。

「ふーん。コイツが黒ウサギの言つてた『契約書類』^{ギアスロール} ってやつか」

「みたいだな。……で、どちらから行く?」

「んじゃ、俺から行かせてもらおうぜ」

名乗り出て、十六夜は足下から手頃な石を手に取った。

その石を右手で弄びながら河辺に立つ。

呼吸を整えた十六夜は、やがて大きく軸足を前に出し、

「ヤハハ! 行くぜオラアツ!!!」

全力で、構えた腕を振り抜いた。

ズババババババババババババババババツツ!!!

と石が水面を切り裂くように突き進む。

秒速数千回転と初速数キロメートル毎秒という馬鹿げた数値で投げ込まれた石は、瞬

く間に河川を横断して対岸の大地に爆撃のごとく着弾した。

「おー、いったなー」

「ま、こんなもんだろ」

額に手を翳しながら感心する日向と、満足そうにパンパンと両手を叩く十六夜。

しばらくして、河川は次第に元の落ち着きを取り戻す。

「よし、次は俺だな」

そこで今度は日向が河辺に立った。

その手に持つ石も最初に拾ったものとは違い、新たに形の良いものを見つけたものだ。

「ま、俺には及ばねえだろうけどな」

「上等だ！ 罰ゲームの内容忘れんなよ！」

十六夜の煽りで更に闘争心を燃やす日向。

日向は大きく水平に腕を振りかぶると、全身のバネと駆動を利用しながら渾身の投擲を行う。

十六夜と遜色ない回転と速度で投げ込まれた石は、さながら砲弾のように水面をどこまでも抜けていく。

——一方、その頃。

視点は変わり、大河の水中にて。

(……む？ 何事だ？)

ちょうど十六夜の投擲が終わった時分。

それまで川の中で安らかに眠っていた白き蛇神は、ふと水面の騒がしさで目を覚ました。

(この気配は……人間か？ おのれ、人間風情が私の安眠を妨げるとは忌々しい……！)

安眠中に叩き起こされて若干イライラしている白き蛇神は、腹いせに元凶の人間を少々懲らしめてやろうと画策する。

(フッフ、愚かな人間共め。神格持ちたる我を怒らせたこと、骨の随まで後悔させてくれるわ……！)

そうと決まれば善は急げとばかりに、蛇神は人間の気配がする河辺付近に移動した。

その心境はさながら獲物を前にした蛇そのものである。

(ククク、まずはこの姿を見せて恐れおののく様を嘲笑つくれよう。人間共の間抜けな姿が目には浮かぶわ)

やがて準備を終えた蛇神は、そこで遂に河辺に姿を現す——！

パッシャーン!!!

『矮小なる人間よ。我が眠りをぐふあーっ!?』

「えっ?」

日向はキョトン、と呟いた。

前方の河川に向けて音速を遙かに凌駕するスピードで投擲された石は、突如水中から渦を巻くようにして現れた蛇神の胴体に直撃した。

もちろん水切りはそこで終わり、石に衝突された蛇神も静かに水中へ沈んでいった。『両者とも投石終了。』

結果 逆廻十六夜：3417回

天道日向：92回

ルールに則り、逆廻十六夜を勝者とします』

静謐な河辺に、勝敗を定めるアナウンスが響く。

同時に2人の『契約書類』が発光し、それぞれ勝者と敗者を証明する書類に変化した。

「……………えー」

再びポツリと呟く日向。

背後で見物していた十六夜は、河辺で固まる日向の隣に歩み寄って声をかけた。

「……………おい、日向。何だ今の」

「……………さあ? 一体何だったんだらうな?」

要領を得ないやり取りに、十六夜は小さく肩を竦める。

「ま、何はともあれ、勝負は俺の勝ちだな」

「禁じられているのは意図的な妨害のみ、か。はあ……まあ、仕方ないな」

素直に敗北を認める日向。

十六夜は気を取り直すように踵を返し、

「んじゃ、とつとつ “世界の果て” まで行くぞ」

「ああ、そうだな」

そうして元居た川辺から下流に向かって歩き出す2人。

そこに復活した蛇神がツツコンだ。

『待たんかああああああああ!! 貴様等ああああああ!!!』

突如響いた絶叫と共に静謐な川面の一部が半円球状に浮き上がり、巨大な水柱となつ

て立ち昇る。

渦巻く水柱を弾き飛ばして、日向たちの前に再び白き蛇神が顕現した。

蛇神は矢継ぎ早に訴える。

『なぜ平然とこの場から立ち去ろうとしているのだ! 失礼にもほどがあるだろう!』

「コレは、巨大な蛇……か?」

「へえ、デカイ上に喋れる蛇とは珍しいな」

日向と十六夜の反応に、蛇神は鼻を鳴らして応える。

『フン、当然だ。我は主から神格を与えられし、このトリトニスの大滝に住まう水神。ただの蛇と同列に扱われては、それこそ我の尊厳に關わるというものよ』

「それで？ その水神とやらが俺たちに何の用だ？」

十六夜の問いかけに、蛇神は憤怒の表情を浮かべて牙を剥いた。

『とぼけるな！ 睡眠中の我を巧みに水上へと誘い出した挙げ句、何やら砲弾のようなモノで打ち倒そうとするとは！ この卑怯者共が！ 恥を知れ恥を！』

「……えーっと、実は俺たち、この河辺で水切りのギフトゲームをやってたんですけど

……」

『え？！』

蛇神が素っ頓狂な声を上げる。

『水切り？！』

「はい」

『じゃあ、私の体に当たったのは？』

「俺が投げた石ですね。すいませんでした」

『……』

日向は心なしか、女性が顔をカアツと赤らめる姿を幻視した。

『ふ、ふふふ、ふぎけるな！ そんな根拠も無い話を誰が信じると』
「ここに『契約書類』があるんですけど……」

日向は「敗北」と書かれた契約書類を見せる。

その下にはペナルティの詳細が記載されていた。

内容はもちろん、黒ウサギに誠心誠意謝罪を行うというものである。

それを見た蛇神は更に狼狽した。

『な、だ、だが！ 人間如きが、たかが石ころひとつ投げた程度でアレ程の威力を發揮出来るわけがなからう！』

「いや、本当に普通に投げただけで……」

『クツ！ 人間め！ 性懲りもなく我をたばかる気か……！』

「いや、あの、だから本当に……」

『ええい！ 黙れ黙れ！ 良からう！ それほどまでに真実を吐いていると言うのなら、この我自ら試してやろうではないか！』

「……試す？」

日向は首を傾げて問いかける。

蛇神はそれまでの雰囲気から一転、厳かに語った。

『そうだ。我が貴様らに試練を与えてやる。』力『知恵』、勇気『、どれでも好きな

ものを選ぶがいい。その試練を乗り越えることが出来たならば、貴様らの言うことを信じ、恩恵も授けてやろう』

「てことだそうだが……どうする？」

隣で日向が問うと、十六夜は軽薄な笑みを浮かべて応えた。

「おいおい、たかが蛇如きが言つてくれるじゃねえか。そもそもオマエに、俺たちを試せるだけの力があるのか？」

『……なんだと？』

「当然だろ？ 実力の無いヤツに試されてやるほど、こつちも暇じゃないんでね」

十六夜の明らかに挑発的な物言いに、蛇神はスツと瞳を細める。

『付け上がるなよ小僧。たかが人間風情に、我が劣るとでも？』

「さあな。文句があるなら証明してみせろよ。オマエが本当に、俺たちを試せるだけの実力の持ち主かどうかをな！」

『——いいだろう。その自惚れ……後悔することになるぞ、小僧オ！』

荒ぶる怒号と共に、蛇神の周囲に何柱もの竜巻く水柱が立ち昇り始める。

舞い上がる水飛沫を浴びながら、日向は呆れたように呟いた。

「おいおい、どうするんだよ十六夜。完全に怒り狂つてるじゃないか。これじゃ話し合いいにもならないぞ」

「ヤハハ！ 何だよ、先に喧嘩をふっかけて来たのは向こうだぜ？」

「いやいやいやいや、あの蛇神は単に試練を選べとしか言つてなかつただろ」

「そうだったか？ まあ細かいことはどうでもいいだろ」

屈託なく笑う十六夜に、日向はため息を吐く。

やがて準備を終えたのか、白き蛇神が宣戦布告とばかりに裂帛の咆哮を上げた。

『いくぞ小僧！ 神格たる我の力、とくとその身に受けるがいい！』

蛇神の意志に呼応するかのように、竜巻く水柱が日向と十六夜へ襲いかかる。

それを2人は拳の一振りでも爆散させると、すぐさま十六夜が大地を砕く勢いで跳躍し、蛇神の眼前に躍り出た。

『なっ!?!』

「おいおいこんなもんか？ 期待外れもいところだぜ！」

そう吐き捨てながら、十六夜は蛇神の眉間にその山河を打ち砕く拳を叩き付けた。

余りの威力に蛇神は吹っ飛び、背中を滝の岸壁で強打しながら倒れ伏す。

無反応で水中に沈んでいく蛇神の姿に、日向は思わず同情の念を浮かべた。

「……うわー、容赦の欠片も無かつたな。もう少し手加減しても良かったんじゃないか？」

「『強きを挫き、弱きも挫く』が俺の信条だ」

「お前は鬼か」

「日向さん！ 十六夜さん！」

舞い散る水飛沫の中で会話していると、どこからか

聞き覚えのある声がある人の耳朶に飛び込んできた。

振り返れば案の定、そこには青い長髪を緋色に染めた黒ウサギがいた。

「あれ？ お前黒ウサギか？」

「何だかさつきと印象が……髪の色？」

駆け付けた黒ウサギは彼らの無事にほっと安堵するが、それ以上に沸き立つ憤慨に怒髪天を衝くようにしてズズイと身を寄せて問い詰める。

「どうしたもこうしたもありませんよ！ 御二人共、一体どこまで来てるんですか！」

「ご覧の通り『世界の果て』さ。まあそんなに怒るなよ」

「これが怒らずにいられますか！ 大体日向さんも、十六夜さんを止めに行つたはずではなかったのですか!？」

「すいませんでしたツ!!」

「……へ？」

突然盛大に頭を下げだした日向に、黒ウサギは一瞬キョトンとする。

「本当に！ 申し訳ありませんでした！」

「え？ え？」

尚も謝り続ける日向に、黒ウサギはそれまでの怒りも忘れて困惑したようにオロオロする。

「ひ、日向さん？ どうされたのですか？」

「この通り！ 心から反省しています！」

「い、いえ、あの、何もそこまで必死に謝らなくても……」

「クツ！ こうなったらもう土下座しか……！」

「わ、分かりました分かりました！ 許しますから、地面に手を突こうとしないでくださいー！」

激しくプライドとせめぎ合いながらも、渾身の覚悟で土下座を敢行しようとする日向。

黒ウサギは慌てて引き止めた。

体勢を戻した日向は一転して朗らかな笑みを浮かべ、

「ふう、危なかった。許してくれてありがとうな、黒ウサギ」

「い、いえ。それよりも、黒ウサギにはどうしてあそこまで必死に謝ろうとしているのかが気になって仕方がないので……」

「ああ、それはな……」

日向は「契約書類」を見せながら、黒ウサギに事情を説明する。

「——と、いわけなんだ」

「な、なるほど。納得したのですよ」

事情を聞いて、ホッと胸をなで下ろす黒ウサギ。

「もしや危ない人なのでは……？」 と思っただけに、本当に良かったと安堵した。

気がつけば、日向の契約書類には「ペナルティ遂行済み」の表記が付け加えられていた。

そこでそれまで彼らのやり取りを心底面白そうに観賞していた十六夜が、話題を変えるように口を開く。

「しかしいい脚だな。遊んでいたとはいえ、こんな短時間で俺たちに追いつけるとは思わなかった」

「むっ、当然です。黒ウサギは『箱庭の貴族』と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが——」

あれ？ と黒ウサギは小首を傾げる。

（この黒ウサギが半刻以上もの時間、追いつけなかった……？）

度々話題に出ているが、兎は箱庭の世界、創設者の眷属である。

彼らの駆ける姿は風より速く、その力は生半可な修羅神仏では手が出せないほどだ。

そんな彼女に気づかれることなく姿を消したことや、追いつけなかったことも、思い返してみれば人間とは思えない身体能力だった。

「ま、まあ、それはともかく！ 日向さんも十六夜さんも、御無事で良かったデス。道中で出会ったユニコーンから御二人が水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神？ ——ああ、アレのことか？」

へ？ と黒ウサギは硬直する。

十六夜が指を差したのは、川面にうつつすらと浮かぶ白くて長いモノだ。

黒ウサギが理解する前に巨体が大きく鎌首をもたげると、

『まだ……まだ終わっておらんぞ、小僧オ！』

先ほど十六夜によって打ちのめされた蛇神が、圧倒的な憤怒を携えて復活した。

「蛇神……！ ってどうやったらかんんに怒らせられるんですか御二人共!？」

「まてまて、誤解なんだ。挑発したのは十六夜で、俺は何もしてない……はず、たぶん、恐らく、いやきつと」

「全然信憑性がありませんよっ!？」

日向の独白も何のそのと、十六夜はケラケラと笑って事の顛末を語る。

「いや、なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとか上から目線で素敵なことを言ってく

れたからよ。俺を試せるのか試させてもらったのさ。結果はまあ、残念なヤツだった
が」

「お前、絶対に友達いないだろ」

日向のツツコミを尻目に、怒りに震える蛇神は大口を開けて咆哮する。

『貴様ら……思い上がるなよ人間！ 我がこの程度のことですぐ倒れるか！』

蛇神は鋭利に研ぎ澄まされた牙を剥き、ギラリと眼孔を光らせる。

すると周囲に旋風が巻き上がり、先ほどよりも大きな水柱が立ち昇り始めた。

「御二人共、下がってください！」

黒ウサギは咄嗟に2人を庇おうとするが、十六夜の鋭い視線がそれを阻んだ。

「何を言ってるやがる。下がるのはテメエだろうが黒ウサギ。これは俺と日向が売って、
ヤツが買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ」

「どう考えても俺は巻き込まれただけだと思うんだが」

「ヤハハ！ そいつは気の毒にな！」

日向の非難するような物言いにおどける十六夜だったが、黒ウサギに向けた視線には
本気の殺意が籠もっていた。

黒ウサギも始まってしまったゲームには手出しできないと気づいて歯噛みする。

十六夜の言葉に、蛇神は息を荒くして応えた。

『心意気は買つてやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様らの勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まつて終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

求めるまでも無く、勝者は既に決まっている。

その傲慢極まりない台詞に黒ウサギも蛇神も啞然とする。

その中でただひとり、日向だけが呆れた笑みを浮かべていた。

『……フーン！ その戯言が貴様らの最後だ！』

蛇神の一喝に応じて、周囲の水が巻き上がる。

元より展開されていた水柱は更に何百トンもの水を吸い上げると、徐々に重なり合つていく。

やがて形成されたのは、もはや蛇神の背丈をも超える3本の竜巻く水柱だった。

それぞれが生き物のようになねり、蛇のように襲いかかる。

この力こそ時に嵐を呼び、時に生態系さえも崩す「しんかく神格」のギフトを持つ者の力であつた。

「日向さん！ 十六夜さん！」

黒ウサギが叫ぶがもう遅い。

竜巻く水柱は川辺を抉り、木々をねじ切り、彼らの身体を激流に呑み込む——と、そ

ここで日向が静かに一步前に踏み出し、

「あーもーッ! こうなつたらやつてやるよコンチクシヨオオオオ!!!」

怒りと共に、迫り来る水柱を殴りつけた。

瞬間、突如発生した暴力の嵐は、その拳の一振りで薙ぎ払われる。

「嘘?!」

『馬鹿な!?!』

驚愕する2つの声。

それはもはや人智を遙かに超越した力である。

蛇神は全霊の一撃を弾かれ放心するが、その隙を見逃す十六夜ではない。

すぐさま大地を砕いて地響きと共に跳躍し、蛇神の懐へと飛び込んだ。

そして獰猛な笑みを浮かべ一言、

「ま、中々だったぜオマエ」

そう言つて蛇神の胴体を蹴り打った。

蛇神は衝撃に巨体を空高く打ち上げると、やがて重力にともなつて水中に落ちる。

その余波で川が氾濫し、水で森が浸水した。

全身を濡らした十六夜は、バツが悪そうに川辺に戻る。

「クソ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代ぐらいは出るんだろうな黒ウサギ」
「自業自得だな。ざまあみろ」

「うっせ」

冗談めかして言う十六夜に、同じく悪戯が成功したような笑みでからかう日向。
だがしかし、黒ウサギの心中はそれどころでは無かった。

（人間が、神格を倒した!? それもただの腕力で!? そんなデタラメが——!）
ハッと黒ウサギは思い出す。

彼らを召喚するギフトを与えた『主催者』^{ホスト}の言葉を。

『彼らは間違いなく——人類最高クラスのギフト保持者よ、黒ウサギ』

黒ウサギはその言葉を、リップサービスか何かだと思っていた。

信用できる相手だったが、ジンにそう伝えた黒ウサギ自身も『主催者』の言葉を眉唾
に思っていたのだ。

（信じられない……けど、本当に最高クラスのギフトを所持しているなら……! 私た
ちのコミュニティ再建も、本当に夢じゃないかもしれない!）

黒ウサギは内心の興奮を抑えきれず、胸の鼓動が速くなるのを感じていた。
「うん? どうしたんだ黒ウサギ?」

「え? きゃあつ!」

ふと我を取り戻すと、いつの間にやら日向の顔が目の前まで迫っていた。

驚き、その場から全力で飛び退く黒ウサギ。

置き去りにされ、思わず固まった日向が呟く。

「…………え？　もしかして俺つて嫌われてる？」

「おいおい、あの黒ウサギがここまで露骨に避けるなんて相当だぞ。一体何したんだよ日向？」

「いや、全く身に覚えがない」

反射的に飛び退いてしまった黒ウサギは、ハッと今し方の行動を省みる。

そして意味を理解すると、慌てて日向に誤解を解いた。

「い、いえ！　違うのですよ日向さん！　今のはいきなりで驚いたと言いますか何と言いますか！　決して日向さんが嫌いだとか、そういう訳ではないので安心してください！」

「そ、そうか？　それならいいんだが……」

黒ウサギの慌てように少し面食らいながらも、嫌われているようではないと分かりほっと安堵の息を吐く日向。

それを傍から見ていた十六夜は、いぶかしげに眉をひそめて問いかけた。

「けど、何をポーっとしてたんだ黒ウサギ？　あんまり隙を見せてると、胸とか脚とか揉

むぞ?。」

「な、ば、おば、貴方はお馬鹿です!? 200年守ってきた黒ウサギの貞操に傷をつけるおつもりですか!？」

「え、何それ超傷つけない」

「お馬鹿!!、いいえお馬鹿!!」

疑問形から確定形に言い直した黒ウサギは、思わずサッと日向の後ろに身を隠す。

それを見た十六夜は呆れたように呟いた。

「仲が良いんだか悪いんだか、どっちかにしろよ黒ウサギ」

「え? きゃあつ!」

十六夜の指摘に黒ウサギが上を見上げると、そこで振り返った日向と視線が合った。

その瞬間に再び飛び退く黒ウサギ。

「……やっぱ俺って嫌われてる?」

ひとり傷ついた日向は、誰に向けるともなく静かにそう呟いたのであった。

——箱庭二一〇五三八〇外門・内壁。

——ペリペッド通り・噴水広場。

黒ウサギと別れ、先んじて箱庭の都市へと足を踏み入れたジン・飛鳥・耀の3人は、噴水広場で営業しているカフェの1つ「六本傷」のテラスで席に着いていた。

紅茶の注がれたティーカップを優雅に傾けながら、飛鳥はふと箱庭の上空を見上げて問いかける。

「ねえ、ジン君。どうして外側から天幕の中に入ったのに、天井には自然と空も太陽も見えるのかしら？」

「箱庭を覆っている天幕は、内側から見ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は、陽の光を直接浴びられない種族のために設置されているものですから」

「あら、それは気になる話ね。この都市には吸血鬼でもいるのかしら？」

「はい、もちろん」

「そ、そう」

軽い冗談のつもりで言ったのだが、予想外の返答にやや戸惑う飛鳥。

無意識に首筋を押さえたのは、自分が血を吸われている場面を想像したのだろう。

この都市で生活して行くことに若干の不安を覚えた彼女であった。

『にしても、この世界はホンマに凄いなお嬢。さつき注文を取ってくれた猫耳鍵尻尾の姉ちゃんも、ワシと言葉が通じとったし』

「うん。来て良かったね三毛猫」

微笑みながら膝上の三毛猫と話す耀。

その様子を隣から伺っていた飛鳥は、瞳を丸くして驚いた。

「春日部さんはもしかして……猫と会話が出来るの？」

耀はコクリと首肯する。

「うん。生きているなら誰とでも話せる」

「それは心強いギフトですね。この箱庭の都市において、幻獣との言語の壁というのはとても大きいですから」

感心したように説明するジン。

多種多様な種族が存在するこの箱庭で、耀の持つ能力は確かに魅力的なものだった。

飛鳥は羨望の眼差しを彼女に向ける。

「そう……春日部さんには素敵な力があるのね」

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。よろしく春日部さん」

「う、うん。飛鳥はどんな力を持つてるの？」

「私？ 私の力は……まあ酷いものよ。だって」

「おんやあ？ どの誰かと思えば東区画の最低辺コミュ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか」

品の無い上品ぶった声がジンを呼ぶ。

聞き覚えがあったのか、ジンは顔をしかめて返事をした。

「僕らのコミュニティの名前は『ノーネーム』です。『フォレス・ガロ』のガルドⅡがスパ―」

「黙れ、この名無しめ。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなど出来たものだ——そうは思わないかい、お嬢様方」
ガルドと呼ばれた巨軀のピチピチタキシードの男は、そう言つて遠慮無用に3人の座るテーブルの空席に腰掛けた。

その無礼な振る舞いに、飛鳥と耀は冷やややかな視線を送る。

「失礼ですけど、同席を求めらばまず氏名を名乗つた後に一言添えるのが礼儀ではなくて?」

「おっとこれは失礼を。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ『六百六十六の獣』の傘下である」

「烏合の衆の」

「コミュニティのリーダーをしている、つてマテやゴリア!! 誰が烏合の衆だ小僧オオ!!!」

ジンに横槍を入れられたガルドは瞬く間に豹変し、耳元まで大きく裂けた口と肉食獣

のような鋭い牙を露わにする。

ギョロリと剥かれた瞳が、激しい怒りと共にジンを睨む。

「口慎めや小僧オ……紳士で通っている俺にも聞き逃せねえ言葉はあるんだぜ……？」

「森の守護者だった頃の貴方なら相応の礼儀で返したでしょうが、今の貴方はこの二一〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」

「ハッ、そういう貴様は過去の栄華にすぎる亡霊と変わらんだろうが。自分たちの現状が分かって」

「ハイ、ちよつとストップ」

険悪な2人の会話を遮るように手を上げたのは飛鳥だった。

「少し気になることがあるのだけれど……ねえ、ジン君？ 先程からガルドさんが指摘している、私たちのコミュニティが置かれている状況——とはどういうことなのかしら？」

「そ、それは」

言葉に詰まり、ジンは自分が大きな失敗を犯してしまったことに気づく。

それは黒ウサギと口裏を合わせて隠していたことだった。

その動揺を見て取ったガルドは、ニヤリと笑って口を挟む。

「私から御説明しましょう」

「なっ!? ガルド＝ガスパー!」

ジンは思わず声を上げる。

ここでコミュニティの現状を暴露されるのは何としても避けたかった。

しかしガルドはギロリと鋭い視線を向けて制すると、侮蔑を込めた声音で釘を刺す。

「黙れ、コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務だろうが。その義務を放棄している貴様にとやかく言う資格は無い———どうでしょうか、レディたち?」

飛鳥はいぶかしげな目で一度だけジンを見る。

ジンは俯いて黙り込んだままだ。

「……そうね。お願いするわ」

「承りました。ではまず大前提として、コミュニティは活動する上で箱庭に“名”と“旗印”を申告しなければなりません。もしコミュニティを大きくしたいのなら、旗印を持つコミュニティに両者合意で『ギフトゲーム』を仕掛ければいいのです。現に私はそうやってコミュニティを大きくしましたから」

ガルドは笑みを浮かべると、胸に刺繍された虎の紋様を指差しながら説明する。

それを見た飛鳥は、周囲を見渡して問う。

「と言うことは、この近辺はほぼ貴方たちが支配しているということかしらっ!」

広場周辺の商店や建物には、皆ガルドの胸に刻まれた紋様と同様のものが飾られていた。

ガルドはクツクツと笑って答える。

「ええ、その通りです。こちら一帯で未だ我々の傘下に入っていないのは、本拠が他区か上層にあるコミュニティと——奪うに値しない名も無きコミュニティぐらいのものですね」

嫌みを込めた視線でジンを見る。

ジンはやはり、顔を背けたままローブをグツと掴んでいた。

「さて、ここらが本題です。実は貴女たちの所属するコミュニティは——数年前まで、この東区画最大手のコミュニティでした」

「あら、意外ね」

「とはいえリーダーは別人でしたけどね。当時、彼らのコミュニティはギフトゲームにおける戦績で人類最高の記録を持っていた。それに加え北と南の主要コミュニティとも親交が深く、その勢力は箱庭の上層まで食い込む、まさに東区画最強のコミュニティだったそうです」

ガルドは一転してつまらなそうな口調で語る。

現在この付近で最大手のコミュニティである彼にはどうでもいい話なのだろう。

「『人間』の立ち上げたコミュニティではまさに快挙ともいえる数々の栄華を築いた彼らのコミュニティはしかし！……やがて決して敵に回してはいけなモノに目を付けられた。そして彼らはたった一夜で滅んだのです。『ギフトゲーム』が支配するこの箱庭の世界、最悪の天災によって」

「天災？」

飛鳥と耀は同時に聞き返した。

それほど巨大な組織を滅ぼしたのが、ただの天災というのはあまりにも不自然に思えたのだ。

「これは比喩にあらず、ですよレディたち。彼らはこの箱庭で最大にして唯一にして最悪の天災——俗に『魔王』^{まおう}と呼ばれる者たちです」

「その魔王とかいうものに、ジン君たちのコミュニティは滅ぼされたというの？」

「ええ。魔王は総じて相手をギフトゲームに強制参加させる術を持ちます。それによって彼らのコミュニティは、文字通り全てを奪われたのです」

ジンのローブを握る手に力が籠もる。

ガルドはさらに言葉を続けた。

「『名』も『旗印』も、主力陣の全てをも失い、残ったのは膨大な居住区画の土地だけ。考えてもみてください。名乗ることを禁じられたコミュニティに、一体どんな活動が出

来ます？ 商売ですか？ 主催者ホストですか？ しかし名も無き組織など信用されません。

加えて人材の無い以上、ギフトゲームに参加することも不可能です」

「まあ、確かにそうでしょうね」

「でしょう？ 唯一残っている人材は黒ウサギの彼女ぐらいでしょうが、私はあの子が不憫でならない。こんな名ばかりのリーダーとそのコミュニティのために、毎日身を粉にして走り回っているんですから。実質彼らのコミュニティは、彼女ひとりによって支えられていると言っても過言ではありません」

「……っ」

ジンは悔しそうに顔を歪める。

その姿をチラリと見た飛鳥は、目線を戻してガルドに問う。

「事情は分かっていたわ。それでガルドさんは、どうして私たちにそんな話を懇切丁寧に聞かせてくれるのかしら？」

飛鳥の含みを持たせた問いかけに、察したガルドは笑顔で応えた。

「では、単刀直入に言います。よろしければ黒ウサギ共々、私のコミュニティに入りませんか？」

「なっ?! いきなり何を言い出すんですガルド!! ガスパー!!」

「黙れ、ジン!! ラッセル。そもそもテメエが名と旗印を新しく改めていれば、最低限の人

材はコミュニケーションに残っていたはずだろうが。それを貴様の我が儘でコミュニケーションを追い込んでおきながら、どの面下げて彼女たちを招き入れるってんだ？」

「そ、それは……」

痛いところを突かれて怯むジン。

それ以上に、飛鳥たちに対する後ろめたさと申し訳無さで黙り込んでしまう。

「分かったら口をつぐんで大人しくしている——で、どうですレディたち？」

にこやかに尋ねるガルドに、飛鳥は即答した。

「結構よ」

は？ とジンとガルドは揃って自らの耳を疑う。

飛鳥は何事も無かったようにティーカップの紅茶を飲み干すと、耀に笑顔で話しかけた。

「春日部さんは、今の話をどう思う？」

「別にどうも。私はこの世界に友達を作りに来ただけだから」

「あら、それは意外。なら私が友達1号に立候補してもいいかしら？」

耀は一瞬だけ驚いた顔を見ると、しばし考える。

その後、小さく笑って頷いた。

「……うん。飛鳥は私の知る女の子たちとはちよつと違うから大丈夫かも」

『良かったなお嬢……お嬢に友達ができて、ワシも涙が出るほど嬉しいわ』
ホロリと泣く三毛猫。

話そつちのけで盛り上がる彼女たちに、青筋を浮かべたガルドが再度問いすがろうとしたその刹那、

「お、お言葉ですがレデ」

「黙りなさい」

ガチン！ とガルドの下顎が不自然に閉じる。

困惑する彼を余所に、飛鳥は優雅にカップを置いて告げた。

「私は裕福だった生活も、約束された将来も、全てを捨てて箱庭に來たのよ。それを今更、たかだか一地域を支配しているだけのお山の大将に組織の末端として迎え入れてやる——などと言われて魅力を感じるとでも思ったのかしら？ だとしたら自身の身の丈を理解した上で出直してきなさい、このエセ虎紳士」

パチン。

とそこで飛鳥が指を弾くと、ガルドの口を拘束していた支配が解ける。

唾然としていたガルドは我に返るや否や、漲る憤怒に自身の姿を黒と黄色の毛並みをしたワータイガーに変幻させ、そのまま飛鳥に襲いかかった。

「デメエー！ この小娘がアアア!!!」

しかし次の瞬間、立ち上がった耀がガルドの右腕を掴み込むと、その細腕からは考えられないような腕力で彼を地面に組み伏せた。

「なっ!?!」

「……喧嘩はダメ」

飛鳥はゆっくり席を立つと、そのままガルドの目の前に佇んで語りかける。

「そんなことよりも、少し尋ねたいことがあるのよ。ねえガルドさん？ 貴方、何かを隠し事をしていないかしら？」

「な、何?」

突然の問いに狼狽えるガルド。

飛鳥は気にせず言葉が続ける。

「相手にギフトゲームを無理矢理強いることが出来るからこそ、この箱庭で『魔王』という存在は恐れられている。ならそれが出来ない貴方たちは、一体どうやって両者合意の上で相手にギフトゲームを挑めたのでしょうか?」

サアツとガルドの顔から血の気が引き、瞬く間に蒼白となる。

そもそもコミュニティそのものを賭したゲームなど、そうそう執り行われるはずがない。

それにも拘わらずこれほどまで多くのコミュニティを傘下に置いている『フォレス』

ガロ”には、表沙汰に出来ない何かがあるのは明白だった。

飛鳥は美麗に微笑み、再び支配の言霊を紡ぎ出す。

「それじゃあガルドさん。ゆつくりと話を聞かせてもらおうかしら？」

「——ッ!？」

必死に抵抗を試みるが、ガルドの口は強制的にこじ開けられ、自らが犯した罪を白日の下に晒してゆく。

彼が「フォレス・ガロ」の存続を賭けて飛鳥たちにギフトゲームを挑まれるのは、それから程なくしてのことだった。

第3話 世界の果て

「ほんつ、とくくとくに！ 申し訳ありませんでした！」

「あ、ああ」

「ほらほら！ この通り全然触れますよ！ 全然イヤじゃないですよ！」

「わ、分かった分かった。分かったから少し落ち着こう。な？」

現在、蛇神との苛烈(?)な激戦(?)を終えた後。

日向にあらぬ心的ダメージを与えてしまった黒ウサギは、必死にその誤解を解こうと励んでいた。

今は彼の両手を握ってブンブン上下に振り回している。

その姿は若干空回りしているように見えなくもない。

現に日向もどう対応しているか分からず、黒ウサギの行動に困った笑みを浮かべていた。

「そんなに謝らなくても、もう気にしてないよ黒ウサギ。誤解だってことは分かったからさ」

「うう、ですが……」

それでも不安そうに日向を見つめる黒ウサギ。

彼女の上目遣いは、それだけで異性をノックアウトさせるには十分過ぎる破壊力だ。

日向は大きいため息を吐くと、不意に真面目な表情黒ウサギの両肩を掴み、

「黒ウサギ」

「は、はいなっ!？」

急に真剣な顔と声音で名前を呼ばれ、思わず胸をドキリとさせる黒ウサギ。

日向は静かに語り始めた。

「いいか？ 悪いのは黒ウサギじゃない」

「え？」

「黒ウサギはただ驚いたただけだ。オーケー？」

「い、YES」

「ならむしろ諸悪の根源は、黒ウサギが驚くような原因を作った人物にあるとは思わな
いか？」

「た、確かに……!？」

「つまりだ。この場合真の悪者とは……」

「わ、悪者とは？」

日向はそこで一旦言葉を区切る。

やがてカツ！ と瞠目すると、

「黒ウサギにセクハラを働いた人物！ 即ち、逆廻十六夜だ！」

「な、なるほど！」

「おい待てやコラ」

十六夜が心底異議を唱えたそうに呼び止めるが、すでに黒ウサギのウサ耳には入らなかった。

「そうですそうです！ 全ては十六夜さんがセクシャルハラスメントお馬鹿なせいなのです！」

「ほう？ 責任転換の挙げ句人を馬鹿にするとはなかなか良い度胸じゃねえか黒ウサギ。マジでその胸揉みしだいてやろうか？」

「あ、あー。ところで十六夜さん。かなり強烈な一撃でしたけど、その蛇神様は生きてます？」

（逃げたな……）

明後日の方向を見ながら白々しく話題を変える黒ウサギ。

十六夜は小さく肩を竦め、

「ま、命までは取ってねえよ。戦いならともかく、殺すのは別段面白味もないしな。〃世

界の果て”にある滝を拜んだら、素直に箱庭に戻るさ」

「それならギフトだけでも戴いておきましょう。ゲームの内容はどうあれ、御二人は勝者です。蛇神様もきつと文句はないでしょうから」

「そうなのか？」

日向が首を傾げて問いかける。

黒ウサギは頷いて補足した。

「YES。神仏とギフトゲームを競い合う時は、基本的に3つの中から選ぶんですよ。最も標準的なのは“力”と“知恵”と“勇気”ですね」

「へえ。そう言えば、確かに最初はそんなことを言ってたな。十六夜のおかげで内容を聞く暇も無かったけどな」

「ヤハハ。褒めても何も出ねえぞ？」

「ハハハ。断じて褒めてないから結構だ。と、それはさて置き。今の話から推測するに、今回の場合はさしずめ“力”の分野に相当するのかな？」

「YES！ まあ、それでも普通力比べをする際には相応の相手が用意されるものなんですけども……何せ御二人はご本人を打倒されましたから。きつともの凄いギフトを戴けますよ！ これで黒ウサギたちのコミュニケーションも、今より力を付けることが出来ま
すよ」

ルンルン♪ とまるで小躍りでもしそうな足取りで蛇神に歩み寄る黒ウサギ。

しかしそんな彼女の行く手を、どこか剣呑な面持ちの十六夜が阻んだ。

黒ウサギはサツと反射的に胸を隠し、

「ど、どうしたんですか十六夜さん? ……ハッ! ま、まさか本当に黒ウサギの胸を揉みしだこうと!?!」

「いい加減その話題から離れるこの駄ウサギ。心配しなくても、それはまたの機会にする」

「犯行予告?! 安心できません!」

「まあまあ」

興奮する黒ウサギを宥める日向。

黒ウサギは不承不承ながらも十六夜に対して問いかけた。

「むうく……それではどうされたのですか十六夜さん。怖い顔をされていますが、何かお気に障りましたか?」

「別にイ? お前の言うことは正しいぜ。勝者が敗者から賞品を受け取るのは、ギフトゲームとしては間違いなく真つ当なんだろうよ——けどな、黒ウサギ」

ふつと、十六夜から軽薄な声と表情が完全に消える。

応じて、黒ウサギも表情を硬くした。

「……お前、何かとても重要なことをずっと俺たちに隠してるだろ？」

その瞬間、黒ウサギの胸中は心臓を掴まれたように飛び跳ねる。

それでも動揺を悟られぬよう、辛うじて表面だけは取り繕って返答した。

「な、何のことでしょうか？ 箱庭のことならお答えすると約束しましたし、ゲームのことともし」

「十六夜の指摘はそこじゃないさ、黒ウサギ」

不意に放たれた日向の言葉にまたもや大きく意表を突かれる黒ウサギ。

思わず声が震えそうになるが、努めて素面を保ち冷静な声音で問い返す。

「……どういふことですか？」

訝しげに日向を見つめる黒ウサギ。

日向はポリポリと頬を搔いて苦笑を浮かべ、

「まあ、あんまり言いたくなさそうだったんで、俺としては無理に聞き出すつもりも無かったんだけどな。それでもあえて言わせてもらえば……そうだな。なあ黒ウサギ。どうしてお前たちは、俺たちを呼び出す必要があったんだ？」

「——ッ！」

何気なく告げられたその一言に、黒ウサギは今度こそ内心の動揺を隠せなかった。

何せ今の問いは、これまで彼女が意図的に伏せていたものだったからだ。

黒ウサギはギュツと胸の前で手を握り、何とかして誤魔化そうと試みる。

「そ、それは……先ほど説明した通りでございませう。黒ウサギたちは皆さんにオモシロオカシイ生活を楽しんでいただこうと」

「おためごかしは止める、黒ウサギ」

だが黒ウサギの思惑は、十六夜の鋭い眼光と舌鋒に台詞半ばで制される。

伺えば十六夜の表情は、先ほどよりも一層の険しさを含んでいた。

「確かに初めは俺も純粹な好意か、もしくは与り知らない誰かの遊び心で召喚されたんだと思っていた。俺は大絶賛暇の大安売りをしていたし、日向にしたって、それなりの理由を以てこの世界に来ることを容認したんだらうよ。他の2人にしても然りだ。だからオマエの事情なんて気にしてなかったんだが——なんだかな。俺には、黒ウサギが必死に見える」

黒ウサギの瞳は揺らぎ、虚を突かれたように見つめ返す。

十六夜はさらに言葉を続けた。

「これは俺の勘だが……黒ウサギのコミュニケーションは弱小のチームか、もしくは訳あって衰退しているチームか何かじゃねえのか？　だから俺たちは組織を強化するために呼び出された。そう考えれば今までの行動や、俺がコミュニケーションに入ることを拒否した時に本気で怒ったことにも合点がいく——どうよ？　全問正解だろ？」

「つ……！」

黒ウサギは内心で痛烈に舌打ちした。

この時点でそれを知られてしまうのはあまりに手痛い。

苦勞の末に呼び出した超戦力、手放すようなことは絶対に避けたかった。

「んで、この事実を隠していたってことはだ。俺たちにはまだ他のコミュニケーションを選ぶ

権利があると判断出来るんだが、その辺どうよ？」

「……」

黒ウサギは黙り込む。

それを見た日向が、困ったように苦笑した。

「黒ウサギ。沈黙は是なり、だぞ？」

「まあいいさ。それなら俺は他のコミュニケーションに行くまでだ」

「や、だ、駄目です！ 待ってください！」

踵を返そうとした十六夜を、黒ウサギは慌てて呼び止める。

足を止めた十六夜は、振り返った後に促した。

「なら、包み隠さず本当のことを話せ。少なくともそれを聞くまでは、俺がお前たちのコ

ミュニティに入ることは絶対ないぜ？」

黒ウサギは盛大に思い悩む。

今のコミュニケーションの状態を話すには、あまりにリスクがデカ過ぎた。

(せめて気づかれたのがコミュニケーションの加入承諾を取ってからならよかったのに……！)

それを得た後ならば、仮にコミュニケーションの現状を知られたとしてもそう簡単に脱退することはできない。

当初の考えではそうしてなし崩し的にコミュニケーションの再建を手伝ってもらおう心算だったのだが……何せくじ運が悪かった。

相手は世界屈指の問題児集団なのだ。

悩みに悩んだ黒ウサギは、せめてもと十六夜に言質を求める。

「……話せば、協力していただけますか？」

「ああ、面白ければな」

ケラケラと笑うが、その目はやはり笑っていない。

「ひ、日向さんは？」

「んー……じゃあ、とりあえずは十六夜と同意見で」

黒ウサギは諦めたように肩を落とすと、ウサ耳をへによりと垂らして大きなため息を吐いた。

「はあく……分かりました。それではこの黒ウサギもお腹を括って、精々オモシロオカ

シク、我々のコミュニティの惨状を語らせていただくようじゃないですか」

「なんだか急に投げやりになったな」

日向は思わず苦笑する。

黒ウサギはコホン、と咳払いをすると、改めて自分たちの境遇を語り始めた。

「まず、私たちの組織には名乗るべき『名』がありません。よって呼ばれる時は名前の無いその他大勢、『ノーネーム』と言う蔑称で称されます」

「へえ……その他大勢扱いかよ。それで？」

「次に私たちには、コミュニティの誇りである旗印もありません。この旗印というのはコミュニティのテリトリーを示す大事な役割も担っています」

「なるほど。まさに無い無いづくしってわけか」

「YES。そして『名』と『旗印』に続いてドドメに、中核を成す仲間たちは1人も残っていません。もつとぶつちやけてしまえば、ゲームに参加出来るだけのギフトを持つているのは122人中、黒ウサギとジン坊ちゃんだけで、後は10歳以下の子供ばかりなのですヨ！」

「もう崖っぷちだな！」

「ホントですわー♪」

2人の無慈悲な言葉にウフフと笑う黒ウサギは、ガクリと膝をついてうなだれる。

口に出してみると本当に自分たちのコミュニティが末期なのだなーと思わずにはいられなかった。

そこに日向が、少々不思議そうに尋ねる。

「けど、どうしてそんなに子供だらけなんだ？ まさか日銭稼ぎに託児所をやってるって訳でもないんだろ？」

黒ウサギは沈鬱そうに頷いた。

「彼らの親は、『名』や『旗印』と同じく奪われたのです。箱庭を襲う最大の天災――

『魔王』によって」

「ま、……マオウ!？」

黒ウサギの発言に日向と十六夜は声を揃えて驚くが、内心は対照的だった。

日向はまた大層な存在がいたもんだと呆れ交じりに苦笑を浮かべ、一方の十六夜はまるでショーウィンドに飾られる新しいおもちゃを見た子供のように目を輝かせている。

我慢ならずといった様子で、十六夜は興奮気味に問い詰めた。

「魔王！ なんだよそれ、魔王って超カッコイイじゃねえか！ 箱庭にはそんな素敵

ネーミングで呼ばれる奴がいるのか!？」

「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があると……」

「そうなのか？ けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰

からも咎められることの無いような素敵に不敵にゲスイ奴なんだろう？」

「なんだか、俺にはお前の方が魔王と呼ぶに相応しいような気がしてきたぜ……」

日向の呟きもさておき、黒ウサギは十六夜の疑問に回答を述べる。

「ま、まあ……確かに倒したら多方面から感謝される可能性はございます。また条件次第では隷属させることも可能ですし」

「へえ？」

「魔王は『主催者権限』^{ホストマスター}という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたが最後、誰も断ることが出来ません。私たちは『主催者権限』を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは……コミュニティとして活動しているために必要な全てを奪われてしまいました」

これもまた比喻ではない。

黒ウサギたちのコミュニティはその地位も名誉も仲間も、全てを奪われたのだ。残されたのは空き地だらけと化した廃墟と、幼い子供たちだけである。

しかし十六夜は同情する素振りもなく、ふと思いついた疑問を投げかけた。

「ふーん。ま、確かに名前も旗印も無いってのは不便だな。何より縄張りを主張できないのは手痛いだろ。新しく作ったら駄目なのか？」

「そ、それは」

黒ウサギは言い淀んで両手を胸に当てる。

十六夜の指摘は正しい。

名も旗印も無いコミュニティは誇りを掲げることができず、名に信用を集めることもできない。

この箱庭の世界において名と旗印が無いということは、周囲に組織として認められないのと同義である。

だからこそ黒ウサギたちは、異世界から同士の召喚という最終手段に望みを掛けていたのだ。

「か、可能です。ですが改名はコミュニティの完全解散を意味します。しかしそれでは駄目なのです！ 私たちは何よりも……仲間たちが帰ってくる場所を守りたいのですから……！」

仲間の帰る場所を守りたい。

それは黒ウサギが初めて口にした、掛け値の無い本心だった。

「魔王」とのゲームによって居なくなった仲間たちの帰る場所を守るため、彼女たちは例え周囲から蔑まれることになろうとも、コミュニティを守るといふ誓いを立てたのだ。

「茨の道ではあります。けど私たちは仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建

し……いつの日か、コミュニティの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。そのためには御二人のような強大な力を持つプレイヤーを頼るほかありません！　どうかその力を、我々のコミュニティに貸していただけないでしょうか……!?!」

「……ふうん。魔王から誇りと仲間をねえ」

「それが黒ウサギたちの目的か……」

深々と頭を下げ、懇願する黒ウサギ。

しかしそんな彼女の必死の告白にも、十六夜は気のない声で返す。

日向もまた、何かを思案するようにどこか遠くを見つめていた。

そんな彼らを見て黒ウサギは肩を落とし、思わず泣きそうな表情になる。

(もしここで断られたら……私たちのコミュニティはもう……!)

黒ウサギは唇を強く噛み締める。

こんなことになるのなら、初めから話せば良かったと今更ながら後悔する。

そんな彼女を尻目に、肝心の2人は三分間たつぷりと黙り込んだ後、同時に呟いた。

「いいな、それ」

「よし、なら黒ウサギのコミュニティに加入するか」

「……はっ」

黒ウサギは思わず素っ頓狂な声を上げる。

それを見た十六夜は不満ありげに指摘する。

「HA? じゃねえよ。だから協力するって言ってんだ。もつと喜べ黒ウサギ」

「え……あ、あれれ? 今の流れってそんな流れでございました?」

「さあ? あれ、それともやっぱり俺たちはいらなのか? それなら他のコミュニケーションに行く——」

「だ、駄目です駄目です、絶対に駄目です! 日向さんも十六夜さんも、私たちには必要です!」

「素直でよろしい。ほれ、さつさとあのへびを起こしてとギフトを貰ってこい。その後は川の終端にある滝と、”世界の果て”を見に行くぞ」

「は、はい!」

十六夜に促されると、黒ウサギは嬉しそうに跳躍して蛇神の上に乗る、顎の辺りに移動する。

遠巻きに何かを話す姿を眺めていると、直後に青い光が周囲に満ち始めた。

やがて光の源が蛇神の頭から黒ウサギの手に移ると、ピョンと跳ねて2人の前に戻って来る。

「きゃーきゃーきゃー♪ 見てください! こんな大きな水樹の苗を貰いました! コレがあればもう余所のコミュニティから水を買う必要もなくなります! みんな大助

かりです！」

ウツキヤ〜♪ と奇声を上げながら、黒ウサギは水樹と呼ばれる苗を抱きしめてクルクルと嬉しそうに跳び回る。

2人にコミュニケーションや箱庭の事情は分からないが、彼女にはとても重要なものらしい。

水を差すようで悩んだが、日向は気になったことを尋ねた。

「喜んでるところ申し訳ないんだが、1つだけ聞いてもいいか？」

「どうぞどうぞ！ 今なら1つと言わず3つでも4つでもお答えしますよ〜♪」

「それは三段腹なことだな」

「誰が三段腹ですか！」

「そうだぞ十六夜。せめて二段腹と」

「そういう問題でもありませんよ!?!」

ダブルでぼける2人に全力でツツコミを入れる黒ウサギ。

怒ったり喜んだり、忙しいウサギである。

日向は悪い悪いと謝りつつ、疑問の続きを口にする。

「まあ、別に大したことじゃないんだけどな。そんなに欲しかったんなら、どうして黒ウサギがああ蛇神に挑まなかったんだ？ 黒ウサギなら余裕で倒せるだろ？」

お？ と少し驚いたような反応を見せた後、一転して冷めた目をする黒ウサギ。

「ああ……そのことでございませうか。説明しますと、それはウサギたちが『箱庭の貴族』と呼ばれることに由来します。ウサギ達は『主催者権限』と同じく『審判権限』^{ジャッジマスター}と呼ばれる特権を所持できるのです。『審判権限』を持つ者がゲームの審判を務めた場合、両者は絶対にギフトゲームのルールを破る事が出来なくなり……いえ、正しくは破ったその場で違反者の敗北が決定します」

「へえ？ そいつはいい話だな。つまり黒ウサギと共謀すれば、ギフトゲームで無敗になれる」

十六夜の思いつきに、黒ウサギは首を横に振る。

「いえ、それは違います。ルール違反⇨敗北なのです。ウサギの耳は箱庭の中核と繋がっております。つまり黒ウサギたちの意志とは無関係に敗北が決定して、チップを取り立てることが出来るのです。それでも無理と判定を揺るがすと……」

「揺るがすと？」

「爆死します」

「爆死するのか」

2人揃っての反応に、黒ウサギは大きく頷いて説明を続ける。

「それはもう盛大に。『審判権限』の所持はその代償としていくつかの『縛り』がござ

います」

——1つ。ギフトゲームの審判を務めた日より数えて15日間はゲームに参加できない。

——2つ、〃主催者〃側から認可を取らなければ参加できない。

——3つ、箱庭の外で行われているゲームには参加できない。

「……と、まあ他にも色々ありますけど。蛇神様のゲームに挑めなかった大きな理由はこの3つですね。それに黒ウサギの審判稼業はコミュニティで唯一の稼ぎでしたから、必然的にコミュニティのゲームに参加する機会も少なかったのデスよ」

「なるほどな」

「実力があってもゲームで使えないカードじゃ仕方ないか」

日向は頷いて納得し、十六夜は肩を竦めて川辺を歩き始める。

目的は世界の果てにあるトリトニスの大滝だ。

身の丈程もある水樹の苗を抱えた黒ウサギも、それに続いて小走りで追いつく。

「そう言えば、その苗結構重そうだな。俺が代わり持つよ」

「え？ あ、ありがとうございます」

優しげに笑う日向に少しだけ照れながら、黒ウサギは水樹の苗を手渡した。

そこで彼女は、先ほどよりずっと疑問に思っていたことを口にだす。

「あの、黒ウサギも1つ、御二人にお聞きしたいことがあります」

「却下。嘘。どうぞ」

「右に同じく」

「え？ ああ、はい。御二人はどうして黒ウサギたちに協力してくれるのです？」

その問いに、最初に応えたのは十六夜だ。

「んー……答てもいいけど、ただ答えるのはつまらんな。質問を変えるが、黒ウサギはどうして俺が『世界の果て』を見てみたいのだと思う？」

黒ウサギは大腿で歩きつつ、大仰に考えたふりをして回答する。

「やっぱり……面白そうだからでしょうか？ 十六夜さんは自称快樂主義者ですし」

「半分正解。なら、俺はどうして面白いと感じたんだろうな？」

むむくと今度は半分本気で悩む黒ウサギ。

「ハイ、タイムアウト」

「制限付き!? だ、駄目ですよ！ ゲームの時間制限は最初に提示されない限り違反です！」

「マジか？ じゃあ黒ウサギは爆死するののか？」

「お気の毒に……君のことは忘れない」

「なんで私が爆死するんですか!?!」

黒ウサギをからかいながら、3人は川辺を進んで行く。

日向、十六夜、飛鳥、耀の4人が箱庭の世界に呼び出されてからすでに4時間が経つ。陽は徐々に落ちて夕暮れになろうとしていた。

「なら、日向はどうだ？ どうして俺が『世界の果て』を見たいんだと思う？」

「んー、そうだなあ……」

質問が回ってきた日向は、別段真剣に考える様子もなく、地平線に沈む太陽を眺めて答える。

「これは十六夜のつていうよりも、俺自身の答えになりそうな気がするけど……強いて言うなら、『心を満たしたいから』かな」

「ほう」

日向の解答に、十六夜は素直に感心したような声を漏らす。

未だ納得のいかない黒ウサギは自分だけ仲間外れにされたようで焦り、堪らずに正解を求めた。

「そ、それで結局のところ、十六夜さんが『世界の果て』を見たい理由ってなんです？」
「そうだな。一言で言つちまえば日向の言う通りなんだが……簡単に説明すると『ロマンがあるから』だな。俺の元居た世界は先人様方がロマンというロマンを掘り尽くして、俺の趣向に合うものがほとんど無かつたんだよ。だからこの世界になら、俺並に凄

いものがあるかもしれないと思ったのさ。事実、それはすぐに見つかつたしな」

そう言つて十六夜は日向へ目を向ける。

その獲物を見つけた肉食獣のような視線に、日向はおどけるように肩を竦めた。

「だからつまり『世界の果て』を見に行くのは、生きていくのに必要な感動を補充しに来たつてところかな」

「な、なるほど。十六夜さんはロマンのあるものを見て感動したいのですね」

「ああ。感動に素直に生きるのは、快樂主義の基本だけ？」

「そうですね……んん？ あれ、じゃあ十六夜さんが黒ウサギに協力してくれるのは、「だいたい陽が暮れてきたな。日が落ちると虹が見えないかもしれないし、急ぐぞ」

河辺を歩く速度を変えた十六夜に、日向と黒ウサギは慌てて追いつく。

日向はそんな彼の背中を見つめながら、「素直じゃないな」と小さく呟いて苦笑した。
(ロマンがあるから……か)

沈む太陽を眺めながら、日向は心中で思う。

黒ウサギ曰く、この箱庭の太陽は天動説に基づいて廻っているらしい。

その太陽までもが神造で、箱庭の上層部には太陽の主権を賭けたゲームまであるそう
だ。

——全ての常識が非常識で、全ての日常が非日常足り得る世界。

それがこの「箱庭」の世界なのだ。

十六夜は日向の答えを自分と同じく「ロマンを求める」という解釈で捉えたが、厳密に言えば少し違う。

日向が得たいのは感動ではなく、自分の存在を肯定してくれる原動だ。

自分に匹敵する存在が無かったために世界に否定され続けた彼は、それを見つけることで自らを肯定したのである。

無論純粋な感動を求める心も確かにあるが、根本的な部分で十六夜のソレとは異なっていた。

しかし――

「お………」

十六夜が歓声を上げる。

彼らがつどり着いたトリトニスの大滝は、夕焼けの光を浴びて朱色に染まり、跳ね返る激しい水飛沫が数多の虹を創り出していた。

楕円形のようにも見える滝の河口は遙か彼方まで続いており、流水は「世界の果て」を通って無限の空に投げ出されている。

絶壁から舞い散る激しい水飛沫と風に煽られながら、黒ウサギが説明した。

「どうですか？ 横幅の全長は約2800mもあるトリトニスの大滝でございます。こん

な滝は御二人の故郷にもないのでは？」

「……ああ、素直にすげえな。ナイアガラのざつと2倍以上の横幅ってわけか。この世界の果ての下はどんな感じになってるんだ？ やっぱり大亀が世界を支えているのか？」

一部の天動説の下地では、世界は球体ではなく水平に広がり、大亀の背中に背負われているというものがある。

十六夜はそれが気になっているのだろう。

同じく興味の沸いた日向は、楽しそうに断崖絶壁に顔を出す。

「どれどれ……って、下にも空があるぞ？」

日向が覗いた先には大亀の姿は無く、絶壁の下も夕焼けで染まった空が広がっていた。

それを見た黒ウサギが苦笑しながら説明する。

「残念ながら、この世界を支えているのは『世界軸』と呼ばれる柱でございませぬ。何本あるかは定かではありませんが、1本は箱庭を貫通しているあの巨大な主軸です。この箱庭の世界がこのように不完全な形で存在しているのは、どこかの誰かが『世界軸』を1本引き抜いて持ち帰った、という伝説もあるのですが……」

「ハハ、それはすげえな。ならその大馬鹿野郎に感謝しねえと」

そんな2人のやり取りを見やりつつ、日向が思いついたように問いかけた。

「トリトニスの大滝、って言ったよな。ここを上流に遡れば、もしかしてアトランティスがあつたりするのかな?」

「さて、どうでしょう。箱庭の世界は恒星級の表面積という広大さに加え、黒ウサギは箱庭の外のことはあまり存じあげません。しかし……箱庭の上層にコミュニティの本拠を移せば、閲覧できる資料の中にそういうものもあるかもですよ?」

「ハッ。オイオイ、知りたければそこまで協力しろってことか?」

「いえいえ。十六夜さんがロマンを追求するのであれば、という黒ウサギのささやかな勧めでございますヨ?」

「それはどうもご親切様」

そう言つて絶景を楽しむためのポイントを探し始めた十六夜は、ふと思ひ出したように尋ねる。

「そう言えば、結局日向が黒ウサギたちに協力する理由って何なんだ?」

「あ! 黒ウサギも聞きたいです!」

「ん? ああ、別に大した理由じゃないけどな」

太陽が沈むにつれてより色濃く朱色に染まるトリトニスの大滝を見つめながら、日向は微笑んで答える。

「1番の理由は、純粹に黒ウサギたちの力になりたいと思つたからだな。正直なところ、黒ウサギに心を動かされた」

「そ、それはどうも、ありがとうございますのですヨ……」

不意打ち気味の日向の台詞に、ウサ耳まで真つ赤に染めて照れる黒ウサギ。

十六夜はそれを面白そう眺めつつ、再度日向に問いかけた。

「んで？ 一番じゃない理由は？」

「あ……それこそ、本当に大したものじゃないんだけどな」

頬をかいて苦笑しながら、日向は地平線を見据えて懐かしそうに瞳を細める。

思い出すのは彼女の記憶。

自分に全てを与えてくれた人との、共に歩んだ大切な思い出。

世界で唯一自分を認めてくれた人と交わした、たった1つの約束だ。

彼女は言った。

『——いつか、君を認めてくれる世界が、君を必要としてくれる人々が、きつとどこかに現れる。君のその力は、絶対に呪いなんかじゃない。君は決して、いなくてもいい存在なんかじゃない。君のその力は、誰かのために振るえる力だ。そして君は、それが出来る優しい心を持っている。私が言うんだから間違いないさ。だからもしそんな世界に、そんな人々に出会えたのなら、君の力で守ってあげてね』

そして、彼は望んでいた。

自分を許容してくれる世界を。

自分が平凡でいられる日常を。

それは17年間、日向が抱き続けた夢。

そして17年目にして、ようやく叶った夢。

だからこそ、日向は新たに誓いを立てる。

自分を認めてくれる世界があつた。

自分を必要としてくれる人々がいた。

ならば自分は命を賭けて——「黒ウサギたち」を守ろうと。

「けどまあ今は——」

——今だけは、素直に世界を楽しもう。

今だけは心の赴くままに、この感動を享受しよう。

なぜなら自分を認めてくれる存在は、もうすぐそばにあるのだから。

だからこそ日向は、朗らかに笑って告げたのだった。

「約束をしたからな。俺はその約束を、絶対に守りたいんだ」

第4話 サウザンドアイズ

——箱庭二一〇五三八〇外門。

——ペリペッド通り・噴水広場。

日は完全に暮れ落ちて、箱庭の都市にはすでに夜の帳が下りていた。

街中を道行く住民の姿もまばらとなり、家屋の窓にはポツポツと明かりがつき始めている。

この外門は“世界の果て”と向かい合わせになっているため、他の地域と比べてもあまり栄えているとは言い難い。

昼時ですら閑散としてることが多く、夜にもなれば自然と静まり返ることがほとんどだ。

しかしこの日だけは、普段とは少々違った装いを呈していた。

「な、な、な、何やつちゃってんですかこのお馬鹿様方あああああ!!!」
スパパパーンツ!!

と、軽快なハリセンの音が3発連続で響き渡る。

あの後無事に日向と十六夜を連れ戻し、噴水広場で飛鳥たちと合流を終えた黒ウサギは、それまでの経緯を聞くや否や案の定ウサ耳を逆立てて怒りだした。

「本当にもう！ どうしてこの短時間で『フオレス・ガロ』のリーダーと接触した挙げ句、更には喧嘩を売るような状況になっているんですか!?!」

「あ、ちなみにゲームの日は明日だから」

「!?!」

「舞台も敵の領地内」

「!?!」

「内容も向こうが指定すると……」

「!?!」

次々と明かされる新事実にも、黒ウサギはバクバクと口を開け閉めさせる。

やがて顔を俯げ、徐々に肩を震わせ始めた。

今すぐにも怒髪天を衝きそうな勢いだが、それでも何か止むに止まれぬ事情があったのではないかと期待して、

「……御三人共、何か申し開きはありますか?」

「ムシヤクシヤしてやりました。今は反省しています」

「この問題児様方ああああああ!!!」

ズパパアアアアンツ!!!

と更に激しくハリセンを走らせる結果になった。

黒ウサギは軽く半泣き状態で訴える。

「もう！ もう！ 一体どうするんですか！ ゲームの日取りが明日では、準備している時間もお金もありませんよ！」

噛みつかんばかりに食ってかかる黒ウサギ。

その前でツーンと顔を背けている飛鳥たち。

そんな彼らのやり取りを控えて見守っていた十六夜は、ニヤニヤと笑いながら口を挟んだ。

「そんなに腹を立てるなよ黒ウサギ。お嬢様たちにしたって、別に誰彼構わず喧嘩を仕掛けたわけでもねえんだろ？ 大目に見てやればいいじゃねえか」

「そ、そういうわけにもいきません！ 十六夜さんは面白ければいいと思っただけなんですよ？ この契約書類

“を見てください”

黒ウサギは手に持った羊皮紙を十六夜に向ける。

そこには次のように記述されていた。

1、参加者側が勝利した場合、主催者側は

参加者側の言及する全ての罪を認め、

箱庭の法で正しい裁きを受けた後、

コミュニティを解散する。

2、主催者側が勝利した場合、参加者側は

主催者側の罪を今後一切黙認する。

「……あー、これは本当に自己満足だな」

書類の内容を覗き込んで確認した日向は、苦笑して黒ウサギの言葉に同意する。

十六夜も同じく肩を竦め、

「ま、俺もそれについてちや異論はねえよ。今回の顛末を聞く限り、その『フォレス・ガロ

』ってコミュニティはすでに沈みかけの船だ。鼠が住処を捨てて逃げ出すのも時間の

問題だろ」

「そうだな。何せ各コミュニティから攫っていた子供たちを手に掛けたことを、よりに

もよって公の場で公表させられたんだ。確たる証拠がある以上、言い逃れだって出来な

いだろうしな」

日向と十六夜は事態を整理した上で客観的な見解を述べる。

しかしそんなことは百も承知だと、飛鳥は傲慢な態度で自らの胸中を告げた。

「ええ、確かに貴方たちの言う通りよ。こうして私たちが手を下さずとも、いずれあのエセ虎紳士はその罪を糾弾されていたでしょう。だけどそれには時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのに、そんな時間をかけたくないの」

飛鳥の意見にも一理ある。

もともと箱庭の法は、あくまで箱庭の都市内でのみ有効とされるものなのだ。

都市の外は無法地帯と化しており、様々なコミユニティがそれぞれ独自の裁量で生活している。

仮にそこへ逃げ込まれば、箱庭の法で裁くことは不可能だろう。

しかし「契約書類」による強制執行であれば、たとえ世界の果てまで逃げようともその強力な「契約^{ギアス}」の力によって縛られるため、今回の張本人であるガルドIIガスパーを必ず追いつめることが可能となる。

黒ウサギもそれを理解しているからこそ、飛鳥たちを頭ごなしに叱ることが出来ないでいるのだ。

だが結局悩みに悩んだ末、黒ウサギは彼女たちの言い分を認めることにした。

無論全てに納得した訳ではないが、少なくとも今回の件に関して言えば、それほど大事には至らないだろうという打算があったからだ。

その理由とは言わずもがな、日向と十六夜の存在である。

彼ら両名のどちらかでもプレイヤーとしてゲームに参加すれば、ガルド程度の相手であれば万が一にも勝利が揺らぐことは無いだろう。

それは彼らに対する掛け値の無い、黒ウサギの正当な評価だった。

そんなわけで黒ウサギは、期待を込めた目線を2人に向けたのだが――
「は？　言っとくけど、俺は参加しねえよ？」

彼女の心積もりは、怪訝な顔で発された十六夜の言葉によって、もの見事に打ち碎かれた。

「当たり前よ。アナタなんて参加させないわ」

その言葉にフン、と鼻を鳴らして応える飛鳥。

黒ウサギは慌てて2人の間に割って入る。

「だ、駄目ですよ！　御二人はコミュニティの仲間なんですから、ちゃんと協力しないと――」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

しかし黒ウサギの呼びかけは、十六夜の真剣な声によって制された。

「いいか？ この喧嘩は、コイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺らが手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」

「あら、分かってているじゃない」

十六夜の発言に満足気に微笑む飛鳥だったが、黒ウサギの心中はそれどころではない。

今回のギフトゲームに対する心配度が一気に跳ね上がった彼女は、最後の希望とばかりに未だ明確な意志を示していない、もう一人の人物に望みを掛けた。

「あの、ひ、日向さん！ 日向さんはもちろん参加しますよね！ ねー！」
ズズイと日向の前に身を乗り出し、上目遣いに懇願する黒ウサギ。

言外に「お願いしますう！ 日向さんだけが頼りですう！」と訴えてくる黒ウサギに、日向は若干目のやり場に困りながら、苦笑気味に返答した。

「まあ、俺も基本は十六夜と同意見だけだな……飛鳥たちが必要なら参加するよ」
それに対する飛鳥の回答は、やはり決まりきっていた。

「気持ち嬉しいけど、結構よ」

「だってさ」

「ああああ……もう、好きにしてください」

……まで彼らに振り回されっぱなしの黒ウサギは、もはやまともに言い返す気力も

残っておらず、もうどうにもなれと諦めの境地で肩を落とす。

その様子を見かねた日向が慰めるように彼女のウサ耳を優しく撫でると、黒ウサギは「びなだぎょん」と本気で泣きながら彼の胸に抱きついた。

そんな彼女の様子を見た問題児たちは少しだけ、本当に少しだけ今後は自重しようかと、心の中でそつと謝罪をしたのだった。

「それでは、そろそろ参りましょうか。本当は皆さんのために素敵なお店を予約していたのですけども……色々と予想外の出来事が多すぎて、本日はお流れとなってしまうました。また後日、改めてきちんと歓迎を」

「別に無理しなくてもいいわよ。コミュニティの現状なら、すでに根ほり葉ほり聞いているから」

驚いた黒ウサギはすかさずジンに向き直る。

彼の浮かべる申し訳なきげな顔に、すでに飛鳥たちはコミュニティの事情を知っているのだと理解する。

ウサ耳まで赤くした黒ウサギは、恥ずかしそうに頭を下げた。

「も、申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引けたのですが……黒ウサギたちも

必死だったのです」

「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかったもの。春日部さんはどう?」

黒ウサギは恐る恐る耀の顔をうかがう。

耀は無関心なまま首を左右に振った。

「私も怒ってない。そもそもコミユニティがどうの、というのは別にどうでも……あ、けど」

思い出したように迷いながらも呟く耀。

ジンは身を乗り出しながら提案する。

「どうぞ気兼ねなく聞いてください。僕らに出来ることなら最低限の用意はさせてもらいます」

「そ、そんな大それたものじゃないよ。私はただ……毎日三食お風呂付きの寢床があればいいな、なんて思っただけだから」

カチン、とジンの表情が固まった。

この箱庭では水1つ手に入れるにも金銭を支払うか、あるいは数キロmも離れた先の大河から汲んで来なければならぬ。

現状日々の生活を送るのがやっとの“ノーネーム”では、当然お風呂に使えるような余分な水など無かった。

察した耀は慌てて取り消そうとしたが、先に黒ウサギが嬉々とした顔で水樹を持ち上げた。

「それなら大丈夫です！ 日向さんと十六夜さんがこんな大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！ これで水を買う必要もなくなりますし、水路を復活させることも出来ます♪」

満面の笑みで語る黒ウサギの言葉に、ジンと耀は一転して表情を明るくした。

また口には出さずとも、隣で話を聞いていた飛鳥も安堵したように息を吐く。

女性である彼女たちからしてみれば、食事はともかくお風呂の有無は死活問題に関わるのだろうか。

ここは自分たちの暮らしていた世界とは違うのだと、改めて実感を得た瞬間だった。

「でも、それならよかったわ。今日は理不尽に湖へ投げ出されたから、お風呂には絶対に入りたいと思っていたところよ」

「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「あう……それは黒ウサギの責任外のことなのですよ……」

飛鳥や十六夜の責めるような視線に、思わずウサ耳を伏せる黒ウサギ。

ジンは隣で苦笑する。

「あはは……それじゃあ今日は、このままコミュニティへ帰る？」

「あ、ジン坊ちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら『サウザンドアイズ』に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。この水樹のこともありますし」

日向たち四人は首を傾げて聞き直す。

「『サウザンドアイズ』？ それもコミュニティの名前なのか？」

「YES。『サウザンドアイズ』とは多くが特殊な『瞳』のギフトを持つ者たちの群体組織。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフトの鑑定と言うのは？」

「もちろん、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定することです。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出処は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギだったが、当の日向たちは複雑な表情を浮かべて返す。思うところはそれぞれあるだろうが、拒否する声は上がらなかった。

やがて5人と1匹は、足並みを揃えて『サウザンドアイズ』に向かい始める。

「……自分の力の正しい形、か。さて、何か分かるかな？」

そんな日向の呟きは誰に届くことも無く、流れる風の中に溶けて消えたのだった。

商店に向かいながら進む石造りの通りでは、脇に埋められた街路樹が美しい桃色の花を散らしていた。

日が暮れて月と街灯ランプに照らされているその並木を、飛鳥は不思議そうに眺めて呟く。

「桜の木……ではないわよね？ 花卉の形が違うし、そもそも真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合いの入った桜が残っていてもおかしくないだろ」

「……今は秋だったと思うけど」

「皆どうしたんだ？ 今は普通に春なんだし、桜が咲いてるのも当たり前だろ？」

ん？ と4人は顔を見合わせて首を傾げる。

黒ウサギは笑って説明する。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など、所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ？ パラレルワールドってやつか？」

「近しいですね。正しくは立体交差平行世界論というものなのですけども……今からコ

レの説明を始めますと1日2日ではしきれないので、またの機会ということに」

そう言つて曖昧に言葉を濁す黒ウサギに、日向は顎に手を添えて考えるように問いかけた。

「要約すると、この箱庭はあらゆる時間軸と世界線の象徴である……と考えられるのか？」

「確かに、そうとも言えるかもしれませんが」

「なるほど……まるでアカシックレコードだな」

「ヤハハ！ 確かにな。それなら本当に、この世界を支える大亀がどこかにいたりしてな」

「そうだな。あるいは、自らの尾を食らう蛇……とかな」

何気なく口にした日向の言葉は、誰の耳にも残らず静かに消えて無くなった。

若干置いてけぼりの飛鳥と耀であったが、そうこうしている内にどうやら目的地の店まで着いたらしい。

商店の旗には、蒼い生地に向かい合う2人の女神像が記されている。

あれが「サウザンドアイズ」の旗なのだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着の女性定員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、「まっ」

「待った無しです御客様。　　うちは時間外営業はやっていません」

……かけることすら出来なかった。

黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。

流石は超大手の商業コミュニティ。

押し入る客の拒み方にも隙が無い。

「なんて商売つきの無い店なのかしら」

「ま、まったくです！　　閉店時間の5分前に客を閉め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。　　出禁です」

「で、出禁!?　　これだけで出禁とか御客様を舐めすぎなのでございますよ!」

キヤーキヤーと喚く黒ウサギに、店員は冷めた眼と侮蔑を込めた声で告げる。

「なるほど、　　『箱庭の貴族』であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。　　中で

入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」

「……………」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。

しかし十六夜は、躊躇うことなく身分を名乗る。

「俺たちは『ノーネーム』って名前のコミュニティなんだが」

「ほほう。それはどこの『ノーネーム』様でしょう。よかつたら旗印を確認させていた

「だいてもよろしいでしょうか？」

ぐっ、と十六夜は黙り込む。

黒ウサギが言っていた「名」と「旗印」がないコミュニティのリスクとは、正にこのような状況のことだった。

「ま、まずいです。『サウザンドアイズ』の商店は『ノーネーム』御断りでした。このままだと本当に出禁にされるかも」

力のある商店だからこそ、彼らは客を選ぶ。

信用できない客を扱うリスクを、彼らは決して冒さない。

全員の視線が黒ウサギに集中する。

彼女は心の底から悔しそうな顔を浮かべ、自分たちには「名」も「旗印」も無いと語ろうして——ふと視線を向けた時、日向がじつと女性定員を見つめていることに気がついた。

「あ、あの、どうしたんですか日向さん？」

思わず問いかける黒ウサギ。

日向は半ば反射的に答えた。

「ん？ ああいや。この人って凄く綺麗なのに、顔をしかめて勿体ないなと思ってき。笑った顔の方がきつと魅力的なのにな」

「はい？」

「おお？」

「え？」

「あれ？」

「……………は？」

日向の予想外の発言に、黒ウサギ、十六夜、飛鳥、そして最後に女性定員の順に、全員が一瞬鳩が豆鉄砲をくらったような顔になる。

「……………ハッ！」

そのまま静寂が場を包み込むこと数十秒。

ふと我に返った日向は、自分が無意識とは言えいかにとんでもない発言をしてしまったかによくやく気づき……………が、時すでに遅しであった。

「な、なななななな！」

ボンッ！ と顔を真っ赤に染めて、壊れた人形のように声を震わす女性店員。

これまで仕事ひとすじでそういった経験はあまり無かったため、日向の台詞は不意打ちも相まって想像以上に堪えたようだ。

珍しく動揺を露わにしながら、日向は慌てて周囲に誤解を解く。

「い、いや違う！ 今のは違うぞ！ 断じてそういう意味じゃなく、いわゆる言葉のあや

的なアレで……!」

必死に弁解する日向だが、そこでニヤニヤと悪戯を思いついたような笑みを浮かべた十六夜が、わざとらしく呟いた。

「へえ、なるほどな。日向はこういうタイプが好みなのか」

「なっ、十六夜テメエ!」

思わず抗議の声を上げようとするが、ここで反応すればそれこそ相手の思う壺である。

状況を悪化させないよう鋼の精神で耐える日向。

しかしそんな彼の努力も虚しく、今度は女性陣から更なる追い打ちが放たれた。

「い、今のは黒ウサギも、思わずドキツときたのですよ」

「え、ええ。日向君も言うわね」

「……日向って、実はジゴロ?」

3人が3人とも、それぞれが日向に乙女としての感想を述べる。

耀に限っては失礼極まりないことを言っていた気もするが、それ指摘する余裕は無い。

このままでは確実に不名誉なレッテルを張られてしまうと焦った日向は、意を決して最後の言い訳——もとい釈明を試みようとしたその瞬間、

「いや、だから違」

「いいいいやつほおおおお！ 久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

突如店内から絶叫と共に爆走してきた着物風の服を着た白い髪の少女が、もの凄い勢いで黒ウサギに抱き（もしくははフライングボディーアタック）ついて、そのままクルクルと空中を4回転半ひねりして街道の向こう側にある浅い水路まで吹き飛んだ。

「きゃあー………！」

ポチャン。

という音と共に遠ざかる悲鳴。

そして言い逃れる機会を完全に失い呆然とする日向。

一言で言えば混沌カオスだった。

「ぬわははは、ようやく来おったか黒ウサギ！」

「し、白夜叉様!? どうしてあなたがこんな下層に!？」

フライングボディーアタックで黒ウサギを強襲した白い髪の少女は、そんな空気も構い無しに黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付ける。

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろうに！ フフフ、フホフホホ！ やっぱり黒ウサギは触り心地が違うのう！ ほれ、ここが良いかここが良いか！」

スリスリスリ。

「し、白夜叉様！ ちょよ、ちょっと離れてくださいまし！」

白夜叉と呼ばれた少女を無理やり引き剥がし、頭を掴んで店に向かって投げつける。クルクルと縦回転した少女を、十六夜が足で受け止めた。

「てい」

「ゴバア！ お、おんし、飛んできた初対面の美少女を足で受け止めるとは何様だ！」

「十六夜様だけ。以後よろしくな和装ロリ」

ヤハハと笑いながら自己紹介する十六夜。

一連の流れの中で呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉へ話しかける。

「貴女はこの店の人？」

「うむ？ おお、そうだと。この『サウザンドアイズ』の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

いつの間にか立ち直っていた女性店員が、どこまでも冷静な声音で釘を刺す。

濡れた服やミニスカートを絞りつつ水路から上がってきた黒ウサギは、複雑そうに眩

いた。

「うう……まさか私まで濡れる羽目になるなんて」

「因果応報……かな」

『お嬢の言う通りや』

悲しげにウサ耳をへによらせる黒ウサギ。

反対に濡れても全く気にしない白夜叉は、店先で日向たちを見回してニヤリと笑った。

「ふふん。おんしらが黒ウサギの新しい同士か……って、どうしてその童は地面に手を突いて打ちひしがれておるのだ？」

白夜叉は視線を少し戻して、未だ立ち直れずにいる日向のことを問いかける。

十六夜は全く気にした様子もなく前に出ると、至極簡潔に答えを述べた。

「気にするな。ただの年増好きだ」

「だれが年増好きだ！」

「だれが年増ですか！」

日向と女性店員が揃ってツツコム。

ちなみに女性店員はまだ20代前半である。

2人の剣幕に少々面食らった白夜叉だが、すぐに気を取り直すと「ふむ……」と頷い

て言葉が続けた。

「1つ言っておくがな。こやつは決して年増などではなくまだピチピチの20代で普段から割烹着で肌を隠しておるためかその体にはシミひとつ無く女性らしい胸の膨らみも主張しすぎない程度に育ち黒ウサギとはまた違った色香をは」

「オーナー!?!」

真面目な顔で馬鹿なことを真剣に語る白夜叉。

再び顔を真っ赤に染めた女性店員は堪らずに叫ぶ。

今日ほど上司と部下という関係を恨めしく思ったことはない。

女性店員に諫められた白夜叉は、今度こそ真面目な雰囲気でも口を開く。

「おほん。まあその話は置いておいて、異世界の人間が私の元に来たと言うことは……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません! どういう起承転結があつてそんなことになるんですか!」
ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

どこまで本気か分からない白夜叉は笑つて彼らを店に招く。

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「いいのかよ?」
「ノーネーム」はお断りのはずじゃなかったのか?」

十六夜は女性店員に視線を向けて皮肉気に返す。

彼女は一つ咳払いすると、居住まいを正して返答した。

「ま、まあ、オーナーの言うことであれば仕方ありません。非常に不本意ではありませんが、あなた方の入店を許可しましょう」

チラリ、とそこで女性店員は日向へと僅かに視線を向ける。

しかしふと目が合うとすぐさま逸らし、若干頬を染めながら再び大きく咳払いをした。

「そ、それでは、どうぞ中へお入りください」

「えっと、じゃあ……失礼します」

女性店員に促され、店の暖簾を潜る日向。

そんな2人の姿を、十六夜たちはニヤニヤと面白そうに眺めているのだった。

第5話 白き夜の魔王

「悪いが店の方はすでに閉店時間なのでな。おんしらの用件については、私の私室で聞くしよう」

日向たちは和風の廊下を歩き、縁側で足を止めた。

白夜又は自室の障子を開いて5人と1匹を招き入れる。

やや広めの個室には香らしきものが焚かれており、通り抜ける風に紛れてふわりと彼らの鼻孔を撫でた。

掛け軸の前の上座に腰を下ろした白夜又は、大きく背伸びをした後で日向たちに向き直る。

「さてと。まずは正式に自己紹介といこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている『サウザンドアイズ』幹部の白夜又だ。そこにいる黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニケーションが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている、器の大きい美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい。お世話になっておりますよ本当に」

「何だか、随分と投げやりだな」

黒ウサギの返事に日向は思わず苦笑する。

その隣で、耀がコテンと小首を傾げて問いかけた。

「その“外門”って何？」

「箱庭の階層を示す、外壁にある門のことです。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者たちが住んでいるのです」

口頭で説明しつつ、黒ウサギは室内に置いてあるボードに箱庭の概略図を描き込んでいく。

彼女が描いた箱庭を空から俯瞰した図は、外壁から数えて7つの階層に別れていた。

「このように、箱庭の都市は全部で7つの支配層に別たれているのです。そして今我々がいるこの七桁く六桁を下層、五桁を中層、残りの四桁以下を総じて上層と呼び、四桁にもなれば名のある修羅神仏が割拠する完全な人外魔境となっております♪」

愛らしい笑顔でガイドを行う黒ウサギ。

日向たちはそんな箱庭の構図を前にして、

「……超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「お嬢様に一票」

「確かに、どちらかと言えばバームだな」

うん、と一斉に頷き合う。

身もふたも無い感想にガクリと肩を落とす黒ウサギ。

対照的に、白夜又は呵々と哄笑を上げた。

「ふふふ。なかなか上手いこと例える。その表現で言うのなら、今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番皮の薄い部分に当たるな。更に詳しく述べるならば、東西南北四方の区切りの東側にあたり、外壁のすぐ外側 “世界の果て” と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティに所属こそしていないものの、強力なギフトを所持した者たちが潜んでおるぞ。——その水樹の持ち主などな」

白夜又は唇に薄く笑みを浮かべ、黒ウサギが持つ水樹の苗に目を向ける。

彼女が指すのは、先ほど日向と十六夜がトリトニスの大滝で出くわした、あの白き蛇神のことだろう。

白夜又はズズイと身を乗り出して問い詰める。

「して黒ウサギよ。一体誰が、どのようなゲームで勝つたのだ？ 知恵比べか？ 勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は日向さんと十六夜さんがここへ何う前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

ふっふーん♪ と黒ウサギは誇らしげにウサ耳を伸ばして話す。

しかし事情を聞いた白夜叉は、たまげたとばかりに瞠目した。

「なんと!?! クリアではなく直接倒したとな!?! ではその童たちは神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギにはそうは思えません。神格ならひと目見れば分かるはずですし」

「むむ、確かにの。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、あるいは両者の種族間によるほど崩れた力量関係がある場合だけのはず。種族の差で言うなら蛇と人では五十歩百歩だぞ」

白夜叉の述べる「神格」とは生来の神そのものではなく、種の最高位に存在を昇華させる恩恵を示す。

蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。

人に神格を与えれば現人神や神童に。

鬼に神格を与えれば天地鳴動の鬼神と化す。

神格を宿せば他のギフトも強化されるため、箱庭にある多くのコミュニティはこの神格を得ることを第一目標とし、各々の目的や上層を目指すために切磋琢磨しているのだ。

「ところで白夜叉様は、あの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、あやつに神格を授けたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だかの」
小さな胸を張り、呵々と豪快に笑う白夜叉。

しかしその発言を耳にした日向たちは、瞳に物騒な光を灯して問いただす。

「へえ？ ならお前は、あの蛇より強いのか？」

「ふふん、当然だ。私は東側の『階層支配者』だぞ。この東側四桁以下のコミュニティでは並ぶものがない、最強の主権者なのだからの」

——『最強の主権者』——。

その一言に、日向たちは一層目の色を輝かせた。

「ほほう、それは良いことを聞いた。つまりはもしも俺たちが貴女のゲームをクリア出来れば、俺たちのコミュニティはこの東側で最強のコミュニティになれるのか？」

「無論、そうなるのう」

「そりゃ景気の良い話だ。探す手間が省けた」

「ええ。そうと分かれば話は簡単だわ」

「うん」

4人は爛々と闘争心を高ぶらせる。

白夜叉はそれを察知すると、愉快そうに高らかと笑い声を上げた。

「くくく。やれ、抜け目のない童たちだ。依頼をしておきながら、私にギフトゲームで挑

むと?」

「ヤハハ、察しが良くて助かるぜ」

「ああ。是非とも挑ませてもらいたい」

「……え? ちよ、ちよつと皆さん!」

慌てる黒ウサギを、白夜叉は右手で制す。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね。そういうの好きよ?」

「ふふ、そうか。……しかし、ゲームの前に1つ確認しておくことがある」

「あん?」

「何だ?」

白夜叉は着物の裾から“サウザンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が描かれたカードを取り出し、壮絶な笑みで一言。

「おんしらが望むのは“挑戦”か——もしくは“決闘”か?」

刹那、日向たちの視界は爆発的な変貌を遂げた。

それぞれの視覚は意味を無くし、数多の情景が脳裏で回転し始める。

垣間見えたのは、金色の穂波が揺れる草原。

白い地平線を覗く丘。

静謐な森林に佇む水面。

記憶にない場所が次々に流転を繰り返し、足下から日向たちを呑み込んでいく。
やがて放り出されたのは、純白の雪原と凍る湖畔。

そして——太陽が水平に廻る世界だった。

「……………!?!」

日向たちは同時に息を呑んだ。

箱庭に呼び出された時とはまるで違う。

たった目の前で起きた出来事は、最早言葉などという安易なものだけで表現出来る御技ではない。

遠く薄明の空で瞬く星はただひとつ。

緩やかに世界を水平に巡る、白い太陽のみだ。

まるで星をひとつ、世界をひとつ造り上げたかのような奇跡の顕現。

啞然と棒立ちする日向たちを眼前に据え、白夜叉は

「今一度名乗りなおい、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練に対する『挑戦』か？ それとも対等な『決闘』か？」

『魔王・白夜叉』。

少女の笑みとは思えぬその凄みに、日向たちは再び息を呑む。

——“星靈”とは、惑星級以上の星に存在する主精靈のことを指す。

妖精や鬼、悪魔などの概念の最上種であり、同時にギフトを“与える側”の存在でもある。

十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じながら白夜叉を睨み、厳しそうに笑みを浮かべた。

「水平に廻る太陽と……そうか。白夜と夜叉。あの空を水平に廻る太陽やこの土地は、お前を表現してるってことか」

その隣で日向もまた、白夜叉の存在を理解する。

「なるほどな、言い得て妙とはこのことだ。白夜叉——とは、よく言ったものだな」

彼らの言葉に白夜叉はバサリと扇を広げ、圧倒的な威厳を以てそれに応えた。

「いかにも。この白夜と湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の1つだ」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方に漂う雲海が瞬く間に裂け、薄明の太陽が晒される。

“白夜”の星靈。

十六夜の述べる白夜とは、フィンランドやノルウェーといった特定の経緯に位置する北欧諸国などで観測される、太陽が沈まない現象である。

そして「夜叉」とは、水と大地の神霊を指し示すと共に、悪神としての側面を持つ鬼神。

数多の修羅神仏が集うこの箱庭で、最強種と名高い「星霊」にして「神霊」。

彼女は正にこの箱庭の代表とも言えるほど——強大な「魔王」だった。

「この莫大な土地が、ただのゲーム盤……!?!」

「その通りだ。して、おんしらの返答は?」 「挑戦」であるならば、手慰み程度に遊んで

やる。しかし「決闘」を望むのならば話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうでは

ないか」

「……ッ……!」

飛鳥と耀、そして自信家の十六夜でさえ即答できずに返事を躊躇う。

彼女が如何なるギフトを駆使しているのかは定かではない。

しかし勝ち目が無いことだけは明らかだ。

それでも自分たちで喧嘩を売った手前、このような形で取り下げるのはプライドが大

きく邪魔をした。

しばしの静寂の後——諦めたように笑う十六夜が、せめてもの意地を張ろうとしたと

ここで、

「おいおい、嘘はいけないな——元・魔王様?」

虚空に響いた日向の一言に、全員が目を見開いた。それはまた、白夜又本人さえも例外ではない。

しかしすぐさま落ち着いた所作で扇を口元に寄せると、見定めるような視線を向けて問いかける。

「私が元・魔王だと?」

「ああ、その通りだ」

白夜又の鋭い眼光が日向を射抜く。

それでも日向に臆した様子は微塵もない。

「なぜそう思うのだ?」

「ま、簡単な話だよ。貴女は『白夜』の星霊であると同時に……『夜叉』でもあるからだ」

ピクリ、と白夜又は眉を上げる。

続いて扇の下で口の端を吊り上げると、依然として日向に向ける鋭い視線はそのままに、どこか興味深さを含んだ声音で問い返した。

「ふむ、根拠を聞こうかの?」

「まず、白夜の星霊。白夜とは即ち太陽であり、転じて貴女は太陽の星霊でもあると言える。前提として、これに間違いは無いな?」

「然り」

「よし。なら次に肝心の夜叉についてだが……夜叉とは本来、古代インド神話に登場する人を食らう鬼神であり、また同時に水と大地を司る神霊としての側面を持つ——が、実は更にもうひとつの顔がある」

「ほう、それは？」

「後に仏教へ包括され、護法善神の一尊となった側面だ」

その瞬間、ハツと顔を上げる十六夜。

何かに気がついたような彼は、口元に悪い笑みを浮かべて首肯する。

「なるほど。そいつは確かに矛盾してるな」

十六夜の言う通り、白夜又はその存在に——言い換えれば、その霊格自体に決定的な矛盾を孕んでいる。

論理の説明も終盤に近づいた日向は、次第に事の核心へ迫る。

「護法善神とはすなわち、梵天や帝釈天を代表とした仏教を守護する神々のことで、六道輪廻のひとつである天部に住まうとされている。しかしその存在は人々から信仰を受けるものの、厳密には仏に及ばず、格としては仏陀に劣るとされているんだが……あれえ？ おかしいよな？」

「太陽」の星霊ともあろう貴女が、なぜその程度の霊格に甘んじているんだ？」

——静寂。

日向が言葉を終えた先に訪れたのは、まるで凍てついたような静けさだった。

そんな誰もが閉口する最中、不意にひとりの少女がその堰を切り、扇の下で僅かにたたえていた微笑を、次第に哄笑へと変えていった。

「……くっ、くははは、くはははははは！」

高らかに笑い声を上げたのは、他でもない白夜叉であった。

日向は意味を悟り、スツと表情を和らげる。

その後ろでは黒ウサギが、信じられないと言わんばかりの表情で彼の背中を見つめていた。

「天晴れ！ 誠に天晴れだ！ よくぞ玄妙なる知識思考を以てこの白夜叉の存在を暴き仰せた！ これはもう、素直に称賛を送るしかないの！」

扇を広げて呵々大笑と惜しめない賞賛を自らに送る白夜叉に対し、日向はおどけるように肩を竦めて苦笑する。

「まあ、実は最初の部分は殆どがハツタリだったんだけどな」

「カツカツカ！ よいよい。それも立派なお主の力と言えようさ。よもやこうも簡単に私の本質を見抜かれるとは思わなんだ。本当に大したものだ」

「全くだぜ。ただの年増好きじゃなかったんだな。見直したぞ日向」

「おい十六夜。お前、覚悟は出来てんだろうな？」

「ヤハハ！ いいぜ！ いっちよやるか!？」

「お、御二人共落ちて置いて下さいまし！ とは言え、これには黒ウサギもビックリなのです！」

ここぞとばかりに騒ぎ始める日向たち。

しかし未だに状況が掴めていない飛鳥と耀が、納得いかないとばかりに声を上げた。

「ちよ、ちよつと待ってもらえるかしら？ 展開が早すぎで、何が何だかさっぱり分からないのだけど」

「……つまり、どういうこと？」

「ふむ、そうじやの。どうせじやし、おんしが最後まで説明してやったらどうだ？」

「ん？ ああ、ならそうするか」

白夜叉に促された日向は頷くと、彼女たちに向き直って説明を始める。

「そうだな。まず、白夜叉が白夜——即ち太陽の星霊であり、同時に夜叉の神霊である……つてところまでは大丈夫か？」

「え、ええ」

「よし。それじゃあ肝心なのはここからだ。黒ウサギから聞いた話によると、神霊というのは生来のもので後天的なもので別れるんだそうだ」

生来の神霊は箱庭で最強種の一角とみなされるが、一定の信仰を得ることでも神霊として顕現することが可能である。

「なら白夜又はどちらなのかと考えれば、これはまず後天的でしかありえない」
「どうして?」

「前述の通り、白夜又は星霊でもあるからだ。星霊は神霊と違って、必ず先天的な存在だからな」

「なるほど」

先にも述べたが、星霊とはすなわち惑星級以上の星に存在する主精霊を指し、神霊と並ぶ箱庭最強種の一角である。

無論霊格Ⅱ星の格そのものであり、太陽の体現者である白夜又は、まさに最強の星霊と称して何ら過言なき存在だろう。

一般に、

神霊は“時間”と“概念”を、

星霊は“空間”と“質量”を司るとされているが、誕生と同時に双方を宿すことは極めて不可能に近い。

よって白夜又は先天的な星霊である以上、彼女が神霊になったのは、必然的に後天性である可能性が高いのだ。

この辺りがいわゆるハツタリだったのだが、結果は日向の予想通りであったというわけである。

「そして、ここで質問。太陽の星霊と一介の宗教に属する神霊。果たしてその霊格はどちらの方が大きいと思う?」

「それは……星霊の方かしら?」

「その通り。太陽とは昔から宗教なんて関係無しに、人々から神聖視されていた程だからな。たかだか一宗教からしか信仰を集められない夜叉の霊格とは、文字通り格が違うだろう。最悪の場合、純粋な星霊時よりもその霊格は劣りかねない」

「だけど、どうしてそれで、白夜叉が元・魔王だと分かるの?」

「それなんだけどな……重要なのは、ならどうして白夜叉は、自らの霊格を落としてまで後天的に神霊になったのか? ということだ」

飛鳥と耀は首をかしげる。

日向はさらに説明を続けた。

「じゃあ質問を変えよう。もしも2人が魔王だったとして、わざわざ他の組織の下に付くか?」

「それは……たぶん付かないわね。魔王を名乗る以上、それなりにプライドがあるはずだもの」

「だろ？ それも白夜叉のように強大な力を持つ魔王なら尚更だ。なのに白夜叉は仏門に下った。それはどうしてだろうな？ そう考えた時に、俺はとある仮説を立てたんだ」

「仮説？」

「ああ。もしかして白夜叉は『星霊』であつた時には確かに魔王だつたが、何らかの出来事か心変わりをきっかけに、魔王を辞めた、あるいは辞めなければならない状況となつて仏門に下り、その結果仕方なく霊格を落とすことになつたのではないか——つてな」

「……ああ！ なるほど！」

「それで元・魔王なんだね」

「そういうことだ」

そこまできて、ようやく飛鳥と耀は得心がいったと頷いた。

日向の言う白夜叉が仏門に下る原因となつた出来事とは、例えるならば隸属などが挙げられる。

何者かに打ち破れた結果、その人物によつて仏門に帰依させられたという可能性だ。無論これはあくまで可能性のひとつであり、真相は白夜叉本人でなければ分からない。

それでもここまでの推理を打ち立てたあたり、日向が如何に規格外であるかが分かるだろう。

白夜又は何々と哄笑を上げ、日向の推測が正しいことを認める。

「ふむ、やはり素晴らしいの。ひとつ付け加えておくが、仏門に帰依したのは私自らの意志だ」

「そうなのか？」

「そりゃまたどうして」

日向と十六夜が揃って尋ねる。

彼女は苦笑しつつ、曖昧な言葉で濁した。

「そこはまあ、あれだ。長い人生の中では色々あるということだ。それよりも、結局おんしらは『試練』と『決闘』……どちらを選ぶのだ？」

「ま、日向のお陰で意趣返しは出来たしな。今回は大人しく試されてやるよ、元・魔王様」
軽薄な笑みに皮肉を交えて答える十六夜。

既に一杯喰わせることが出来たからか、そこに先ほどまでの気負いは無い。

しかし『試されてやる』とは随分可愛らしい意地の張り方があったものだ、白夜又は腹を抱えて高らかに笑った。

「そうだな。俺も素直に試されるよ」

「ええ、仕方ないわね」

「右に同じ」

彼に続き、日向たちも尊大な態度で試練を選ぶ。

4人の精一杯の見栄張りに、白夜又は満足そうに頷いた。

そんな彼らの様子を冷や冷やと見守っていた黒ウサギは、ホッと胸を撫で下ろす。

「も、もう！ お互いにもう少し相手を選んでください！ 〃階層支配者〃に喧嘩を売

る新人と、新人に売られた喧嘩を買う 〃階層支配者〃だなんて、冗談にしても寒すぎま

す！」

「カッカッカ、まあ良いではないか。さてと、ではおんしらの試練をどうするか……」

その時、彼方にある山脈から甲高い雄叫びが聞こえてきた。

獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に、いち早く反応したのは耀だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……あやつか。おんしらを試すには打ってつけかもしれないの」

湖畔を挟んだ向こう側の岸にある山脈に、チョイチョイと手招きする白夜叉。

すると体長5メートルはあるかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如く

日向達の前に現れた。

驚の翼と獅子の下半身を持つその獣を見て、耀が驚愕と歓喜の籠もった声を上げる。

「グリフォン……嘘、本物!？」

「フン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。力と知恵と勇氣の全てを備えた、ギフトゲームを代表する獣だ」

すると白夜叉の手に一枚の輝く羊皮紙が現れる。

『ギフトゲーム名 驚獅子の手綱』

・プレイヤー一覧 天道 日向

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件

グリフォンの背に跨がり、湖畔を舞う。

・クリア方法

力 知恵 勇氣 のいずれかで

グリフォンに認められる。

・敗北条件

降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホスト

マスターの名の下、ギフトゲームを

開催します。

『サウザンドアイズ』印』

内容を読み終えた途端、耀がピシリと指先まで綺麗に伸ばして宣言する。

「ここは私が」

「いやいや俺が」

「ふざけんな俺が」

「いいえ私が」

「で、では黒ウサギが！」

「」「」「どうぞどうぞどうぞ」「」「」

「しまった!?! っってお約束は止めなさいこのお馬鹿様方っ」

スパパパパン。

と4人の頭を軽めにハリセンで叩く黒ウサギ。

耀は頭をさすりながらも、真面目な顔で呟いた。

「だけど、私は本気。これは私にやらせて欲しい」

「ふむ。だいたい自信があるようだが、コレはかなりの難物だぞ？」

「済まんが」

「大丈夫。問題ない」

白夜叉からの忠告を歯牙にもかけない耀。

その瞳はキラキラと輝いて目の前のグリフォンを見つめている。

そんな彼女の様子を日向たちは苦笑を浮かべ、

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気をつけてな」

「頑張ってね春日部さん」

「うん、頑張る」

力強く頷き、耀はグリフォンの元まで歩み寄る。

「えーと、初めまして。春日部耀です」

『!?!』

ビクンッ！

とグリフォンの肢体が盛大に跳ねた。

その双眸からは警戒心が薄れ、新たに戸惑いの色が浮かび上がる。

「ほう。あの娘、グリフォンと言葉を交わすか」

白夜又は感心したように扇を広げた。

陸と空、双方の王者の因子を宿すグリフォンの背に跨がる方法は、大きく分けて2つある。

1つ目は、力比べや知恵比べで勝利し、屈服させて跨がる方法。

2つ目は、王であり誇り高い彼らにその心を認められて跨がる方法だ。

そして耀の選んだ方法とは、

「私を貴方の背中に乗せて……誇りを賭けて勝負しませんか？」

『……何……!?!』

後者であった。

途端にグリフォンの声と瞳に闘志が宿る。

気高い彼らにとって“誇りを賭けろ”とは、最も効果的な挑発だ。

耀は返事を待たずに交渉を続ける。

「貴方が飛んできたあの山脈。あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回して、この湖畔を終着点と定めます。貴方は強靱な四肢と翼で空を駆け、湖畔までに私を振るい

落とすことが出来れば勝ち。逆に、最後まで背に乗っていられば私の勝ち。……どうかな？」

耀は小首を傾げて返答を待つ。

グリフォンは訝しげに大きくフンと鼻を鳴らすと、尊大な口調で問い返した。

『娘よ。お前は私に“誇りを賭けろ”と持ちかけた。

確かに娘ひとり振るい落とせないようでは、私の名誉は失墜するだろう。——だがな娘。誇りの対価に、お前は一体何を賭ける？』

「命を賭けます」

即答だった。

息もつかせぬ申し出に、飛鳥と黒ウサギは慌てて彼女を呼び止める。

「ま、待ちなさい春日部さん！ 命を賭けるだなんて正気なの!？」

「だ、駄目です耀さん！ 危険過ぎます!！」

「貴方は誇りを賭け、私は命を賭ける。……それじゃ駄目かな？」

『……ふむ……』

ますます慌てる飛鳥と黒ウサギ。

それを白夜叉と十六夜が厳しく制す。

「双方、下がらんか。これはあの娘が切り出した試練だぞ」

「ああ、無粋な真似はやめときな」

「そういうわけには参りません！ 同士にこんな分の悪いゲームをさせるなど——！」

「大丈夫だよ」

振り向き、耀は小さく笑みを浮かべる。

その表情に気負いはなく、むしろ勝算ありと思わせるような顔つきだ。

グリフォンはしばし考える素振りを見せた後、頭を下げて背中に乗るよう促した。

『乗るがいい、若き勇者よ。鷲獅子の疾走に耐えられるか否か、その身を以て試してみ』

『よ』

「ありがとう。あ、ちょっと待って」

耀はふと思い出したように呟くと、急ぎ足で日向の前に駆け寄る。

日向は首を傾げると、

「どうした？」

「えっと、三毛猫を預かって欲しいんだ」

真つ直ぐに日向を見つめて告げる耀。

そんな彼女の頼み事を、日向は朗らかに笑って引き受けた。

「ああ、任せとけ。全力で挑んで来い」

『頑張つてなお嬢！』

「うん。それじゃあ行つてきます」

耀はグリフオンの元に戻り、手綱をしつかり握り締めて獅子の胴体に跨がる。

鷲獅子の強靱で滑らかな肢体を撫でつつ、満足そうに囁いた。

「始める前に一言だけ。……私、貴方の背中に跨がるのが夢のひとつだったんだ」

『——そうか』

こそばゆいとばかりに苦笑した後、グリフオンは翼を三度羽ばたかせる。

そして前傾姿勢を取るや否や、大地を踏み抜くようにして薄明の空に飛び出した。

強烈な圧力に苦しみながらも、耀は感嘆の声を漏らす。

「凄い……！ 貴方は、空を踏みしめて走っている!!!」

鷲獅子の巨体を支えるのは翼ではない。

旋風を操るギフトで空を疾走しているのだ。

力学の法則を無視して空を駆けるその姿は、まさに“幻獣”の名に相応しいものだった。

『娘よ。もうすぐ山脈に差し掛かるが……本当に良いのか？ この速度で山脈に向かえば』

「大丈夫。それよりいいの？ 貴方こそ本気で来ないと、本当に私が勝つよ？」

「……よかろう。後悔するなよ小娘！」

刹那、大気が揺らいだ。

驚獅子は翼も用いて旋風を操り、遙か彼方の山頂が瞬く間に近づいてくる。

常人であれば拉げてしまいそうな衝撃の中、しかし耀は歯を食いしばって耐えている。

グリフォンは背中から聞こえる僅かな吐息に、驚嘆とも困惑ともいえる感情が湧き始めた。

（なるほど……相応の奇跡を身に宿しているという事か……い）

耀も日向や十六夜と同じく、人類最高クラスのギフト保持者なのだ。

頂から急降下する際、グリフォンの速力は倍に近いものまで迫る。

旋回を交えて耀をふるい落とそうとする度に、彼女の下半身は空中に投げ出されるように泳ぐ。

「っ……っ!!」

耀は必死に手綱を握り、グリフォンは必死に振り落とそうと旋回を繰り返す。

やがて雪原の地平ギリギリまで急降下して大地と水平になるように振り回すと、それが最後の山場だった。

山脈からの冷風も途絶え、残るは純粹な距離のみである。

勢いもそのままに、凍る湖畔の中心まで疾走したグリフォン。

耀の勝利が決定したその瞬間——彼女の手が手綱から離れた。

『何!?!』

「耀さん!?!」

反射的に助けに行こうとした黒ウサギの手を、十六夜が掴む。

「は、離し——」

「待て! まだ終わってない!」

その時、突然耀の周囲に風が集い始めた。

落下しながら、耀は先程まで空を疾走していた感覚を思い出す。

(四肢で……風を絡め、大気を踏みしめるように——)

フワリと、耀の体が翻る。

慣性を殺すような緩慢な動きはやがて彼女の落下速度を衰えさせ、遂には湖畔に触れることなく飛翔した。

「……なっ」

その場にいた全員が絶句する。

その力は間違いなく、旋風を操り空を駆けるグリフォンのギフトであったからだ。

大地に降り立った耀は顔を上げ、ブイツと指を2つ立てると、

「ビクトリー」

無表情ながらも、どこか勝ち誇った表情で宣言した。

「やっぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類のものだったんだな」

軽薄な笑みで耀の力を考察する十六夜に、耀はムツとして返す。

「……違う。これは友達になった証」

『見事。お前が得たギフトは、私に勝利した証として使って欲しい』

「ありがとう、大事にする」

グリフォンと言葉を交わした耀は、そのままある人物の元へ向かう。

『お嬢！ 怪我は無いか!?!』

「うん、大丈夫だよ」

腕に抱かれた三毛猫に返事をする耀。

少し顔を上げてみると、彼を抱えている日向と目が合った。

日向は朗らかに笑うと一言、

「よ、おかえり」

ただ一言、そう言って耀を迎えた。

そして、その言葉に対する返答もまた、たったひとつだ。

「うん………ただいま」

そう言つて微笑んだ彼女の姿は、まるで小さな華が開いようで、
耀がその時見せた表情は、この世界に来てから一番清々しいものだった。

第6話 ノーネーム

「いやはや大したものだ。このゲームはおんしの勝利だの。……ところで、おんしのギフトは先天性か？」

耀が見事にグリフォンの試練をクリアした後、ふと白夜叉は彼女に問いかけた。

耀はフルフルと左右に首を振り、

「ううん。父さんから貰った木彫りの彫刻のおかげだよ」

『お嬢の親父さんは彫刻家やっとなります。親父さんの作品で、ワシらはお嬢と話せるんや』

「ふむ。ちよいと見せてもらえるかの？」

耀は頷くと、首元からペンダントとして下げていた

丸い木彫り細工を取り出した。

預かった手の平大の木彫りをジツと見つめる白夜叉。

彼女は最初に何かを悩み込むように顔をしかめ——次第に表情を驚愕の色で染めつくした。

「ほう、材質は楠の神木か。神格は残っていないようだが、この中心を目指す幾何学線と中心の空白は……もしや系統樹か？ ならばこの図形はこうで、同時に円形が収束するのは——いや、これは……これは、凄い！ 本当に凄いぞ娘!! これが真に人造ならば、おんしの父は神代の天才だ!! これは真正正銘 “生命の目録” と称して何ら過言なき逸品だ!!」

興奮に声量を上げる白夜叉。

耀は小首を傾げて問う。

「系統樹って、生物の発祥や進化の系譜なんかを示すアレ？ だけどそれなら前に生物学者の母さんが作ったものを見たことがあるけど、その時はもつと樹の形をしてたよ？」

「うむ。それはおんしの父親が表現したいモノのセンスが成す業わざよ。この木彫りをわざわざ円形にしたのは生命の流転、輪廻を表現したものだ。中心が空白なのは、流転する世界の中心だからか、生命の完成が未だ見えぬからか、それともこの作品そのものが未完成だからか——うぬぬ、久しく想像力が刺激されるぞ！ おんしさえよければ私が買いたいぐらいだの！」

「ダメ」

耀はあっさり断って木彫を取り上げる。

白夜叉はお気に入りの玩具を取り上げられた子供のようにしよんぼりした。

「それで白夜叉様、耀さんのギフトはどのような力を持つているんです？」

「それは分らない。詳しく調べたいのなら鑑定士に、それも上層に住む者でなければ鑑定することは不可能だろう」

「え？ 白夜叉様でも鑑定出来ないのですか？ 今日は鑑定をお願いしたかったですけど」

黒ウサギの言葉にゲツ、と気まずそうな顔をする白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいいところなのだがの」

白夜叉はゲームの賞品として依頼を無償で引き受けるつもりだったのだろう。

しばらく考える素振りを見せ、ふっと思いついたように顔を上げた。

「ふむ。何にせよ、主^{ホスト}催者^トとして、『星^{ホシ}霊^{レイ}』のはしくれとして、見事試験を乗り越えたおんしらには『恩^{オン}恵^ヱ』を与えねばならん。ちよいと贅^{ズイ}沢^{タク}な代物だが、コミユニティ復興の前祝いとしては丁度良かろう」

パンパンと2つ拍手を打つ。

すると日向たちの目の前に、光り輝く4枚のカードが現れた。

カードにはそれぞれの名前と、各々に宿るギフトの名称が記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜

ギフトネーム // コード・アンノウン
正体不明 //

ワインレッドのカードに久遠飛鳥

ギフトネーム // 威光
威光 //

パールエメラルドのカードに春日部耀

ギフトネーム // ゲノム・ツリ
生命の目録 //

// ノーフオーマー //

サンシャインイエローのカードに天道日向

ギフトネーム // コード・エラー
認識不能 //

それぞれが名とギフトネームが示されたカードを受け取る。

黒ウサギは驚いたような、興奮したような顔で4人のカードを覗き込んだ。

「ギフトカード!」

「お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉?」

「意表を突いてクリスマスプレゼントだな」

「ち、違います! というかなんで皆さんそんなに息が合っているのです!? このギフ

トカードは顕現しているギフトを収納可能で、それも好きな時に再顕現させることの出

来る超高価なカードなのですよ！」

「つまり、素敵アイテムつてことでオツケーか？」

「だからなんで適当に聞き流すんですか！ あーもうそうです、超素敵アイテムなんです！」

黒ウサギに叱られながら、日向たちはそれぞれのカードを物珍しそうに見つめる。

そこに白夜叉が説明を加えた。

「そのギフトカードとは、正式名称を『ラプラスの紙片』——即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとは、おんしらの魂と繋がった『恩恵』の名称。鑑定は出来ずとも、それを見れば大体のギフトの正体が分かるというもの」

「へえ？ じゃあ俺のはレアケースなわけだ？」

「うん？ ならこれはどういう意味なんだ？」

へ？ と白夜叉が十六夜と日向のギフトカードを覗き込む。

そこには確かに『正体不明』と『認識不能』の文字が表示されていた。

白夜叉は怪訝に眉を擡める。

「……いや、そんな馬鹿な」

パシッと白夜叉は彼らの手からギフトカードを奪い取る。

何やら尋常ならざる雰囲気を感じた2人は、沈黙して事の成り行きを静観する。

「『正体不明』に『認識不能』だと……？ いややありえん。全知である『ラプラスの紙片』がエラーを起こすはずなど」

「何にせよ、鑑定は出来なかつたってことだろ。俺的にはこの方がありがたいさ」

「ま、確かに分からないものは仕方がないな」

そう言つて、十六夜と日向は白夜叉からギフトカードを取り上げる。

しかし白夜叉は未だ納得できていないのか、探るような視線を2人を向けていた。

(ギフトを無効化した……？ いや、まさかな)

ふと思いついた可能性を、すぐさま苦笑と共に切つて捨てる。

修羅神仏の集うこの箱庭で、無効化のギフトなど大して珍しくもない。

だがそれは、単一の能力に特化した武装などに限ればの話だ。

日向や十六夜のように蛇神を打倒する程の強大な奇跡を身に宿す者が、奇跡を打ち消す御技を宿すことは大きく矛盾する。

それが同時に2人も現れたなどという非現実的な可能性を認めるよりは、『ラプラスの紙片』に問題があると考えた方がまだ納得ができた。

やがてギフト鑑定を終えた日向たちはゲーム盤から元の世界に戻ると、暖簾の下げられた店前に移動した後で一礼する。

「今日はどうもありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦する時は対等な条件で挑むのだから」

「ああ。吐いた唾を呑み込むなんて、恰好付かねえからな。次は渾身の太舞台で挑むぜ」
「覚悟しとけよ白夜叉？」

「ふふ、よかろう。楽しみにしている。……ところで」

白夜叉はスツと真剣な顔で日向達を見る。

「今更だが、1つだけ聞かせてくれ。おんしらは黒ウサギたちのコミュニティの現状を把握しているのか？」

「あん？ ああ、名前とか旗とかの話か？ それなら聞いたぜ」

「ならそれを取り戻すために、『魔王』と戦わねばならんことも？」

「もちろんだ。全てを承知した上で、俺たちは黒ウサギたちに協力することにした」

「そうか。……ふむ、黒ウサギは良き同士と巡り会えたようだの」

白夜叉は優しい笑みを黒ウサギに向ける。

彼女の苦勞を誰よりも知っているからこそ、色々と思うところがあるのだろう。

しかし次の瞬間、白夜叉は一転して厳しい表情になると、日向たちへ脅しとも忠告ともつかない言葉を投げかけた。

「じゃが、だからこそ言っておく。仮に今後、おんしらが魔王と一戦交えることがあるとすれば……その娘2人は確実に死ぬぞ」

咄嗟に返そうとする飛鳥と耀だったが、白夜叉の放つ有無を言わせない威圧感に押し黙る。

「……………」忠告ありがと。肝に命じておくわ」

白夜叉はそれだけを伝えると、再び柔らかな笑みに戻った。

「うむ、くれぐれも用心するようにな。私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに来るといい」

こうして日向たちは、〃サウザンドアイズ〃支店を後にするのだった。

——〃ノーネーム〃居住区画の門前。

白夜叉と別れてからおおよそ半刻後。

噴水広場を越えてからしばらくすると、日向たちは目的地であるコミュニティの入り口に到着した。

門の上部を見上げてみると、以前は旗が掲げられていたと分かるような面影がある。

「この先が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館はここから更に歩かねばならないので御容赦ください。この近辺にはまだ戦いの名残がありますので……」

「戦いの名残？ 噂の魔王とかいう素敵なネーミングの奴との戦いか？」

「……YES」

「それは都合が良いわ。箱庭最凶最悪の天災が残した傷跡、この目で見せてもらおうかしら」

白夜叉との一件以降、飛鳥はご機嫌斜めだった。

プライドが高い彼女は、自分虫のように見下された事実が酷く腹に据えたのだろう。

黒ウサギは躊躇しつつも門を開く。

途端にブワツと、乾いた風が吹き抜けた。

咄嗟に砂塵から顔を庇う日向たち。

しばらくして風が止み、視界が開けたそこには——無尽の荒野が広がっていた。

「……なに、コレ」

眩いた耀の声は、無意識に少し震えていた。

飛鳥も音を立てずに息を呑む。

荒廃した街並みに十六夜は無言で目を細め、日向も凄惨な光景に顔をしかめた。

十六夜は木造の廃墟に歩み寄り、周囲の残骸をその手に取る。

少し握ると、木材は乾いた音と共に崩れ去り、サラサラと風に流れていった。

「……おい、黒ウサギ。魔王とのゲームがあつたのは——今から何百年前の話だ？」

「僅か3年前でございます」

「ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきった街並みが3年前だと？」

——そう。

彼女たちのコミュニケーションは、まるで永劫の時を経て廃壊したように滅んでいたのだ。とてもではないが3年前まで人が住み、栄えていたとは思えない。

触れたそばからポロポロと崩れ落ちる家屋の残骸を握り締め、剣呑な面持ちで日向は告げる。

「これは……ありえないな」

「ああ、断言するぜ。たとえどんな力がぶつかり合ったとしても、こんな壊れ方はない。この荒廃した街並みは、膨大な時間を費やして自然崩壊したようにしか思えない」

十六夜は日向と同じくありえないと結論付けながらも、目の前の廃墟に心地よい冷や汗を流していた。

飛鳥と耀も、廃屋を目にして複雑そうに口を開く。

「ベランダのティーセットがそのままテーブルに出ているわ。これじゃまるで、それまで生活していた人間がフツと消えたみたじゃない」

「生き物の気配もまるでない。整備されず放置された人家なのに、獣が寄り付かないな

んで」

彼女たちの感想は、日向や十六夜のそれよりも遙かに重く険しいものだった。

黒ウサギは目を逸らし、朽ちた街路を進む。

「……魔王とのギフトゲームは、それほどまでに未知の戦いだったのでございます。彼らがこの土地を取り上げなかったのは、魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持った人間が現れるや否や遊び半分でゲームを挑み、二度と逆らえないよう徹底的に屈服させます。そのせいで僅かに残った仲間たちも皆心を折られ……コミュニケーションから、箱庭から去って行きました」

大規模なギフトゲームの際、白夜叉のようにゲーム盤を用意する理由がコレである。力あるコミュニケーションと魔王がぶつかれば、その傷跡は醜くその地に刻まれる。

魔王は敢えてそれを楽しんだのだ。

黒ウサギは感情を押し殺した目線で風化した街並みを進み、飛鳥と耀も険悪な表情でそれに続く。

しかし十六夜だけは瞳を爛々と輝かせ、不適な笑みを浮かべて呟いた。

「『魔王』——か。ハッ！ いいぜいいぜ、いいなあオイ。想像以上に面白そうじゃねえか……！」

その言葉をウサ耳にした黒ウサギは頼もしさを覚えるも、同時に胸中で不安を抱く。

彼らは自らの意思で自分たちに協力すると言つてはくれたが、果たしてそれは本当に正しい選択と言えたのだろうか。

もしかすると、逃れられない破滅の道に、無関係な彼らを巻き込んでしまっただけではないのか。

思わず胸の前で両手を握り、沈鬱な表情でウサ耳を伏せる黒ウサギ。

しかしそんな時。

彼女の頭にポン、と誰かの手が置かれた。

「ひ、日向さん?」

振り向けば、その手の持ち主は日向だった。

日向は柔らかに笑みを浮かべながら、

「なあ、黒ウサギ。黒ウサギたちのコミュニティの、昔の風景を覚えてくれないか?」

「え?」

突然の申し出に少しだけ戸惑う黒ウサギ。

それでも意識を切り替えると、やがて当時の風景を思い出すように語り始めた。

「そうですね……当時の「ノーネーム」には、本当に沢山の人がいました。それこそ、人種も種族も関係なく、皆が同じ旗の下で共に助け合い、笑い合つて日々を過ごしていたのです」

黒ウサギは在りし日の光景を見つめるように瞳を細め、懐かしげに微笑んで話を続ける。

「水路にはいつもなみなみと水が流れていて、農園区には季節の実りの彩りが。そして至るところで、旗が靡いております」

そこで僅かにウサ耳を伏せる。

目の前に広がる非情な現実、容赦なく黒ウサギの胸を締め付けた。

深く悲しみに暮れる彼女の隣で、日向は荒廃した街並みを見据えると、

「そうか。なら俺も、その景色を見てみたい」

その一言に、黒ウサギは瞳を丸くした。

「え?」

「うんうん。そんなに幸せそうに語られたら、嫌でも見てみたくなった」

「え? え?」

黒ウサギは日向の意図が分からず、戸惑ったようにオロオロとする。

そんな彼女に、日向は朗らかに笑いかけた。

「だからさ。俺はその景色を見るために、全力で黒ウサギたちの力になるよ。そしていつか、全てを取り戻したその時は——一緒に笑おうな」

「日向さん……」

黒ウサギは意外そうな顔をして——やがて、満面の笑みで頷いたのだった。
「YES! 約束するのですよ!」

——「ノーネーム」居住区画の水門前。

日向たちは廃墟を抜け、徐々に外観が整った空き地が立ち並ぶ場所に出た。

彼らはそのまま居住区を素通りし、水樹と呼ばれる苗を貯水池に設置するのを見物に向かう。

貯水池にはどうやら先客がいたらしく、ジンとコミユニテイの子供たちが清掃道具を持って水路の掃除を行っていた。

「あ、みなさん! 水路と貯水池の準備は整っています!」

ワイワイと騒ぐ子供たちは、黒ウサギが帰って来たと見るや否や途端に彼女の傍に群がる。

「黒ウサのねーちゃんお帰り!」

「眠たいけどお掃除手伝ったよ!」

「ねえねえ、新しい人たちって誰!」

「強い!?! カッコいい!?!」

「YES! とても強くて可愛い人たちですよ! それにとびきりカッコいいです! 皆に紹介するから一列に並んでくださいね」

パチン、と黒ウサギが指を鳴らすと、子供達は一糸乱れぬ動きで横一列に並ぶ。

数は20人前後だろう。

中には猫耳や狐耳の少年少女もいた。

(ははは、これは随分と賑やかになりそうだ)

(つーか、マジでガキばつかだな。半分は人間以外のガキか?)

(じ、実際に目の当たりにすると予想以上に多いわ。これで6分の1ですって?)

(……私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ)

日向たちは四者四様の感想を心中で呟く。

子供が苦手にせよ何にせよ、これから彼らと生活していくなら不和を生まない程度に付き合っていかなければならない。

コホン、と仰々しく咳き込んだ黒ウサギは、皆に日向達を紹介する。

「右から順に天道日向さん、逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さんです。皆も知つての通り、コミュニティを支えるのは力あるギフトプレイヤーたちです。ギフトゲームに参加できない者たちはギフトプレイヤーの私生活を支え、励まし、時に彼らのために身を粉にして尽くさねばなりません」

「あら、別にそんなのは必要ないわよ？ もっとフランクにしてくれても」

「駄目です。それでは組織は成り立ちません」

飛鳥の言葉を、黒ウサギは厳しい音で断じる。

日向は真剣な面持ちで呟いた。

「同じコミユニティの一員である以上、その立場は明確にしておかなければならない……か」

黒ウサギはコクリと首肯する。

「そうです。コミユニティはプレイヤーたちがギフトゲームに参加し、彼らのもたらす恩恵で初めて生活が成り立つのでございます。これは箱庭の世界で生きていく以上、避けることが出来ない掟。子供のうちから甘やかせば、この子たちの将来のためにもなりません」

「……そう」

黒ウサギは有無を言わさない気迫で飛鳥を黙らせる。

それは今日までの3年間、たったひとりでコミユニティを支えていた者だけが知る厳しさなのだろう。

飛鳥は一瞬、自分に課せられた責任の重圧に膝を落としかける。

しかし先ほどの日向の言葉を思い出すと、望むところだ——と、口を結んで決意を新

たにするのだった。

「ここにいるのは子供たちの年長組です。ゲームには参加出来ないものの、見ての通り獣のギフトを持つている子もおりますから、何か用事を言い付ける時にはこの子供達を使つて下さいな。みんなも、それでいいですね？」

「「よろしくお願いします！」「」」

キーン、と耳鳴りがするほどの大声で、20人前後の子供たちが叫ぶ。

その凄まじい声量に、日向たちはまるで音波兵器のような感覚を受けた。

「ああ、皆よろしくな！」

「ハハ、元気がよくていいじゃねえか」

「そ、そうね……」

(本当にやっていけるのかな、私)

日向と十六夜は楽しそうに笑っていたが、他の2人はなんとも言えない複雑な表情を浮かべていたのだった。

——その後。

無事に水樹の苗を植え付けたお陰で、本拠と別館限定ながらも、全盛期の『ノーネー

ム”のようになみなみと水が水路を満たした。

途中、黒ウサギの不可抗力とも意図的ともつかない配慮の無さで十六夜が本日三度目のずぶ濡れ体験をしそうになるというアクシデントはあったものの、子供たちを初め、コミュニティの全員が、水路を大量の水が満たしていく光景に歓喜していた。

これまで水を確保する方法とえば、コミュニティの子供たちが数キロメートルも先の川までわざわざバケツで汲みに行くという手段をとっていただけに、喜びも一段と大きいのだろう。

そんな顔合わせを含めたイベントを終えて日向たちが屋敷に着いた頃には、すでに真夜中になっていた。

月明かりのシルエツトで浮き彫りになる本抛の館は、まるでホテルのような巨大さだ。

耀は本抛となる屋敷を見上げて、感嘆したように呟いた。

「遠目から見てもかなり大きいけど……近づくとも一層大きいね。どこに泊まればいい？」

「コミュニティの伝統では、ギフトゲームに参加できる者には序列を与え、上位から最上階に住むことになっております……けど、今は好きなところを使っただいて結構でございませよ。移動も不便でしようし」

「そう。そこにある別館は使っていないの?」

飛鳥は屋敷の脇に建つ建物を指さす。

「ああ、あれは子供たちの館ですよ。本来は別の用途があるのですが、警備の問題でみんなここに住んでいます。飛鳥さんが120人の子供と一緒に館でよければ」

「遠慮するわ」

飛鳥は即答した。

いくら苦手ではないにせよ、そんな大人数を相手にするのは流石に御免なのだろう。しかし、そこで日向が片手を上げて提案した。

「あ、なら俺は別館でもいいか?」

その言葉を隣で聞いた飛鳥は、信じられないと言った様子で日向を見る。

また黒ウサギも、自分で許可したものの本当に別館を希望するとは思っていなかったのか、少々狼狽えながらも確認した。

「か、構いませんが、本当によろしいので? 本拠と違って、別館は大分騒々しいと思いますか」

「ああ、大丈夫だ。部屋はあるんだよな?」

「は、はい。それなら問題ありませんが……」

戸惑う黒ウサギに、ニヤニヤと笑う十六夜が面白そうに話しかける。

「ま、本人が希望してるならいいんじゃないか？ 日向なら子供たちに手を出す心配もねえだろ」

「おい、ちよつと待て十六夜。それは一体どういう意味だ？」

「そうね。日向君なら心配いらわないわ」

「なあ飛鳥、それ別に信頼してるからじゃやないよな？ 絶対別の理由からそう判断してるよな？」

「むしろ今後大人の女性が仲間になる可能性を考えて、日向は別館の方がいいと思う」
「耀!？」

不本意な性癖の持ち主であると思われる日向は必死に意義を申し立てるが、当の3人は右へ左へと受け流す。

どうやら彼らの中で、日向がそっち系の趣味であることはすでに決定事項らしい。

必死の弁解に耳を貸さない問題児たちを前に、自身問題児の一員である日向はがつくりと頭を垂れてうなだれる。

「俺が何をしたらって言うんだ……」

「ア、アハハ……。く、黒ウサギは別に気にしてませんよ？」

「……それってつまり、俺がそっち系の趣味なのは認めるってことだよな……？」

墓穴を掘った黒ウサギの言葉に、日向はより一層落ち込むのだった。

そんなコミュニティへの質問や日向の趣味嗜好についてはさておき、『今はとにかくお風呂に入りたい』という女性陣からの強い要望の下、黒ウサギは早速湯殿の準備を始めることにした。

そしてしばらく使われていなかった大浴場を見ると、途端に真っ青になり、

「い、一刻ほどお待ちください！　すぐに綺麗にいたしますからー！」

子供たちと共に慌てて掃除に取り掛かった。

それはもう凄惨なことになっていたのだろう。

十六夜や飛鳥、耀の3人はその合間に宛がわれた部屋を物色し、日向は部屋を準備するのにもうしばらく掛かるとのことだったので、暇だからと黒ウサギたちを手伝うことにした。

これから別館に住まう身として、子供たちと親睦を深める良い機会だと思ったのだろう。

やがて掃除を終えた日向と黒ウサギが来客用の貴賓室に向かうと、なぜか耀に抱かれた三毛猫が十六夜に向かってにやーにやーと凄い剣幕で鳴いていた。

日向は耀に問いかける。

「なあ耀、三毛猫はどうして十六夜に吠えてるんだ？　心なしか怒ってるような気がするんだが」

「え？ うん、ちよつとね」

言葉を濁す耀に首を傾げながらも、日向は三毛猫に歩み寄り、すりすり彼の喉仏を撫でた。

「ほれほれ、そう毛並みを逆立てるなって」

『止めんといてくれや！ この小僧はお嬢をオマエ呼ばわりしたんや！ いっぺん痛い目に合わせんとワシの気が収まらな……って、あ、ちよ、そこは弱、ああ、あああゝゝ』

日向に撫でられ、恍惚とした表情で喉を鳴らす三毛猫は、すぐに怒りを忘れて心地良さそうに身を委ねる。

そんな彼の姿に、耀は思わず苦笑を浮かべた。

「それにしても、耀は本当に動物の言葉が分かるんだな」

「うん。そのお陰で色んな動物と友達になれた」

動物と会話の出来るギフト。

耀の持つソレは確かに羨ましいものであるかもしれないが、人によつては不気味に見られることもあるだろう。

飛鳥は少しだけ聞きにくそうに質問する。

「出すぎたことを聞くけど……春日部さんに友達が出来なかったのはもしかして」

「友達は沢山いたよ。ただ人間じゃなかっただけ」

それ以上の詮索を拒否する声音に、飛鳥は口を塞ぐ。

しかし耀の言葉に思うところがあつたのか、日向は彼女に提案した。

「なら、これからは人間の友達も沢山作らないとな。とりあえず、俺もそのひとりに立候補してもいいか？」

日向の申し出に、耀は瞳を丸くする。

「日向が、私の友達に？」

「ああ。もしかしてダメか？」

耀は無言でしばらく考えた後——ふっと、小さな華が咲いたように微笑んだ。

「……うん。日向ならいい。友達になってください」

「ははは、そこは素直に『友達になろう』でいいんだぞ？ 何にせよ、これからよろしくな」

「……うん、よろしく」

2人は互いに笑い合う。

すると耀は小さな声で、

「……ありがとう、日向」

こっつそりと、自分を氣遣つてくれた友人に礼を述べた。

それを傍から見ていた飛鳥は、「ふん」と鼻を鳴らして不満そうにそっぽを向く。

「言っておきますけど、春日部さんの友達1号は私なんですからね」

ふいつ、と顔を逸らしたまま、頬を染めて呟く飛鳥。

そんな彼女に対して、耀は嬉しそうに感謝の言葉を口にする。

「ありがとう飛鳥。これからもよろしくね」

「……こちらこそ」

相変わらずそっぽを向きながらも、飛鳥は口元をへの字に結んで小さく応えた。

それを見た黒ウサギが声を上げる。

「あつ！ それなら黒ウサギも、耀さんとお友達になりたいのですよ！」

「うん。黒ウサギも友達になろう」

「んで、十六夜はどうするんだ？」

「仕方ねえな。俺も立候補させてもらいますよつと」

「……十六夜は遠慮したいかも」

「おい待てどういう了見だコラア！」

「ふふ……冗談。十六夜もありがとう」

「……チツ」

耀にからかわれ、十六夜はバツが悪そうに舌打ちをする。

それを見た日向たちは盛大な笑い声を上げた。

その中で耀が浮かべていた笑顔は、これまでで一番明るいものだった。

『お嬢、良かったなあ！ ワシも嬉しいわ！』

「うん。そうだね三毛猫」

この時、この箱庭に来て本当に良かったと、耀は心の底から思ったのだった。

「さて、大変お待たせしましたが、湯殿の用意ができました！ まずは女性様方からどうぞー！」

「ありがと。それでは先にもらうわよ、日向君に十六夜君」

「俺は2番風呂が好きな男だから問題ねえよ」

「俺もちよつとやることあるし、構わないぞ」

男性陣の了承を得ると、女性陣は真つ直ぐ大浴場へ向かう。

やがて静謐の訪れた貴賓室で、十六夜はゆっくりとソファから腰を上げた。

「さてと——今のうちに、外の奴らと話をつけておくか？」

日向もまた、その瞳を細めて応える。

「ああ。そんじゃま、行くとするか」

そうして2人は、揃って貴賓室を後にするのだった。

第7話 打倒魔王

夜空は十六夜の月が浮かんでいた。

黒ウサギに招かれた本抛の館を出た日向と十六夜は途中で別れ、子供たちが眠る別館の正面と裏口で待機していた。

日向はやれやれとため息を吐きながら、

「おい、いい加減覚悟を決めて出てきたらどうだ？ 生憎と裏にも仲間がいるから、仮に陽動や時間稼ぎを考えているなら早めに諦めた方が賢明だぞ？」

ザア、と夜風で木々の葉が揺れる。

一見して人の気配はないものの、日向は誰かに語りかけるように独り言を続ける。

「ここを襲うのか、襲わないのか。優柔不断は駄目だと両親に教わらなかったか？ いやまあ、俺は教わらなかったけどさ」

ザザア、ともう一度だけ夜風が木々の葉を揺らす。

やはり誰かが隠れているようには見えない。

思わず日向が肩を竦めたその刹那、

ズドガアアアンツ!!!

と、別館の裏側からまるで爆撃のような音が断続的に木霊した。

日向はすぐに犯人の顔を連想するが、あまりの容赦の無さに思わず相手に同情する。「さて、こっちはどうしたものかな……」

一向に進展する様子のない現状に日向は頭を悩ませていると、不意に背後で声が出た。

「ひゃっ！ い、今の凄い音は……？」

「うん？」

振り返ると、寝間着を着た獣人の少女が地面に尻餅をついて倒れていた。

日向は記憶の中を探り、目の前の少女が年長者組の一員であったことを思い出す。

そのまま彼女の元まで歩み寄ると、そっと手を差し伸べた。

「ほら、大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます！」

少女は日向の手を取って立ち上がると、慌てて頭を下げて感謝を告げる。

ピコピコと動く狐耳と、二俣の尻尾が特徴的だ。

パンパンと軽く叩いて服の汚れを払ってやりつつ、日向は少女に話しかけた。

「えーと、君は確か……」

「は、はい！ リリとおんもしまひゅ！」

言い間違えた上に盛大に囁んだ。

恥ずかしそうに赤面してパタパタと尻尾を振るうリリ。

そんな彼女に思わず苦笑を零しつつ、日向は再度問いかけた。

「ははは。よろしくな、リリ。それでリリは、こんな夜更けにどうしたんだ？ 確か子供

たちは、そろそろ寝ている時間だろう？」

「は、はい。私もそのつもりだったんですけど、たまたま日向様が表にいるのを見かけ

て」

「それで、出てきたと？」

「ご、ごめんなさい！ 黒ウサギのお姉ちゃんから、日向様は別館で眠ると聞いていたの

で。もしかしたら入りづらいのかなあって思ってた」

「ああ、なるほど。そういうことか」

「どうやらリリは、日向が別館に入りたくても入れないでいるのだと勘違いをしていた

らしい。

確かにこんな夜中に別館の前で立っていれば、このコミュニケーションに来て間もない日向

が別館に入ることを躊躇していると思っても不思議はない。

日向はリリの頭を撫でながら、優しく笑って礼を述べた。

「ありがとうな、リリ。俺のことを気遣ってくれて」

「あう……いい、いえ！ それで日向様は、ここで何をしていたんですか？」

「ああ、それはな——」

「あん？ 何やってんだ日向？」

日向がどう説明しようか少し考えていると、不意に聞き慣れた声が鼓膜を叩いた。

視線を向けてみれば、そこには予想通り満足そうな笑みを浮かべる十六夜と、その後を慌てて追いかけて来るジンがいた。

「そっちはもう終わったのか。首尾は？」

「上々だ。宣伝もバツチリしといたぜ」

「ま、待つてください十六夜さん！ まだ話は終わっていませんよ！」

まるで何かの段取りを確認し合うかのように言葉を交わす日向と十六夜。

その隣でジンが必死に十六夜に呼びかけているが、少なくとも今の彼に取り合うつもりはないようだ。

「あ、ジン君！」

「え？ リリ？ どうして別館の外に？」

するとジンの姿を見つけたリリが、咄嗟に彼の名前を口にした。

ジンもリリに気づいて目を丸くする。

そんな2人の様子を、十六夜はニヤニヤと悪戯好きそうな笑みを浮かべてからかった。

「何だ？ 御チビの彼女か？」

「ふえっ!？」

「ち、違いますよ！ リリは年長組の子供で、僕らのコミュニティーの一員です！」

十六夜の問いかけに、頭から湯気が出そうなくらい表情を真っ赤に染めて驚くりり。

ジンも同じく頬を赤らめるが、それでもハツキリと否定した。

コホン、とわざとらしく咳払いをして、ジンはリリへと向き直る。

「だけどリリ。こんな夜中に外を出歩いているなんて危ないじゃないか。他の皆はもう寝てる時間だろ？」

「あう、ごめんなさい……」

ジンの説教に、リリはへにやりと狐耳を伏せる。

しかし、その隣で日向が助け船を出した。

「いや、リリは俺が別館に入れないでいると心配して出てきてくれたんだ。だから今回はあまり責めないでやってくれないか？」

「え？」

日向の言葉に、ジンは意外そうな顔をする。

「そうなの？ リリ」

「う、うん」

戸惑いながらもリリは頷く。

それでジンも納得したのか、それ以上の追求は止めにした。

「ま、確かにもう夜も遅いしな。俺は大丈夫だから、リリも別館の中に戻っていいぞ？」

寝ぼけた顔も可愛いだろうけど、子供はよく寝てこそ育つものだからな」

「か、可愛い……」

カアツと顔を赤くして俯くりり。

彼女は忙しなく二尾を振りながら、3人に向けて頭を下げた。

「そ、それではお言葉に甘えて失礼します。日向様に、ジン君と十六夜様もお休みなさい

！」

「ああ。お休み」

「お休みリリ」

「ヤハハ。おう、また明日な」

パタパタと別館に戻るリリの姿を見送ると、日向は振り向いて口を開く。

「さて、それじゃあそろそろ片付けるか」

「何なら俺がやってやろうか？」

「お前はもう少し加減を覚えろ」

夜中にあんな爆撃のような音を響かせては、近所迷惑にもほどがある。

中では子供たちも寝ているため、あまり騒がしくするのは気が咎めた。

そこで日向は一度小さく深呼吸をすると、地面を踏み抜く音と共に一瞬で姿を消失させる。

すると間もなくして、雑木林の奥から何者かの困惑した声が響いてきた。

「な、なんだ貴様——ぐはっ!」

「お、おいどうし——ごはっ!」

「ちくしょう! 一体どこか——ぶはっ!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい——おぶへっ!」

一度悲鳴が上がる毎に、十六夜たちの前に暗がりから侵入者たちが吹き飛んでくる。

やがて静寂が訪れたかと思うと、ガサリと木の葉を揺らして日向が戻ってきた。

「よし、これで全部だな」

うずたかく積まれた人の山を前にして、やり遂げたように清々しい笑みを見せる日

向。

それを見たジンは思わず身震いした。

確かに派手さでは十六夜に劣るだろうが、容赦の無さでは互角か、もしくはそれ以上だ。

ちなみに表面にこそ出さないものの、飛鳥から攫われた子供たちのことを聞いて以来、内心でかなり怒っている日向であった。

「さて、まず最初に言っておくことがある。アンタたちが『フォレス・ガロ』に人質として捕らわれていた子供たちのことだけだ……残念ながら、もうこの世にはいない」
「……………なっ」

突然の宣告に、侵入者たちは驚愕する。

日向は構うことなく言葉が続けた。

「奴らはこれまで、人質を攫ったその日に殺していたそうさ。当然、今までアンタたちが他のコミュニティから攫っていた子供たちもな」

「そ、そんな……嘘だ……」

受け入れがたい事実、彼らは呆然となって膝をつく。

これまで人質のために断腸の思いで自らの手を汚してきたというのに、その人質の命が既に無いと知った衝撃は計り知れないだろう。

そんな彼らに向かって、日向は確かめるように語りかける。

「なあ、アンタたちは悔しいか？ 大切な子供を手にかげられ、コミュニケーションの“旗印”まで奪われて。アンタたちは“フォレス・ガロ”を、叩き潰されて欲しいと思う程に憎んでいるか？」

「あ、当たり前だ！ 俺たちがアイツらのせいでどんな目にあつてきたか……！ だが……！」

ぐつと唇を噛みしめる侵入者たち。

日向は真剣な顔で頷くと、更に続けた。

「アンタたちの気持ちはよく分かる。何せ奴らの背後に控えているのは魔王だ。その魔王にまで目を付けられる可能性がある以上、うかつに手を出すことも出来ないだろう。——けれど安心してくれ。アンタたちの無念は、俺たちリーダーが晴らしてくれる！」

「えっ!？」

「ひ、日向さんまで!？」

日向はジンの元まで歩み寄ると、その肩を掴んで侵入者たちの目の前に押し出す。

「このジン坊ちゃんは、魔王を倒すためのコミュニケーションを作ると仰っている！」

「ま、魔王を!？」

侵入者たちにとよめきが走る。

聞いたこともないコミュニケーションに困惑しているのだろう。

「そうだ！ 俺たちは魔王のコミュニティ、その傘下も含め全てのコミュニティを魔王の脅威から守る！ そして守られるコミュニティは口を揃えてこう言っただけほしい！

「押し売り・勧誘・魔王関係御断り。まずはジン＝ラッセルの元にお問い合わせてください
いゝとー！」

「ま、待つてください日向さむぐつ!?」

日向は抗議しかけたジンの口を塞ぐ。

そして大仰に腕を広げると、盛大に声を上げて宣言した。

「明日ジン＝ラッセル率いるメンバーが、アンタたちの仇を取ってくれる！ その後の心配も勿論無用だ！ なぜなら俺たちのジン＝ラッセルが、『魔王』を倒すために立ち上がったのだから！」

「おお……！」

侵入者たちは感極まったように声を漏らす。

「ジンは腕の中で必死にもがくが、日向の腕力に押さえつけられて口を利くことも出来ない。」

「さあ、今すぐコミュニティに帰るんだ！ そして仲間のコミュニティに言いふらせ！

「俺たちのジン＝ラッセルが『魔王』を倒してくれると！」

「お、おおー！」

「わ、分かったぜ！ 明日は頑張ってくれジン坊ちゃん！」

「ま……待っ……！」

ジンの叫びも届かず、あつという間に走り去る侵入者たち。

つい先ほど十六夜にも同じことをされていたジンは、呆然自失となって膝を折るのだった。

本拠の館の最上階・大広間に日向と十六夜を引きずってきたジンは、堪りかねたように叫んだ。

「どういいうつもりですか！」

「まあそう怒るなよ。『打倒魔王』が『打倒全ての魔王とその関係者』になっただけだろ？」

軽薄そうに笑う十六夜に対して、ジンは怒りの籠もった声音で抗議する。

「笑い事じゃありませんよ！ 魔王の力はコミユニティの入り口を見て理解できたでしよう！」

「もちろん。あんな面白そうな力を持った奴とゲームが出来るなんて最高じゃねえか」

「お……面白そう？ では十六夜さんは、自分の趣味のためにコミユニティを滅亡に追

「いやるつもりですか？」

ジンの口調は険しい。

それ程までに十六夜の主張は聞き捨てならないものだった。

もしもこのまま自分の娯楽のためにコミュニティを危険に晒すのであれば……たとえどんな大戦力でも迎えることは出来ない。

しかしそこで、それまで静観していた日向が口を開いた。

「落ち着けリーダー。これは作戦だ」

「作戦？」

「ああ、それもコミュニティに必要な不可欠のな」

日向の言葉に、ジンは訝しげな視線を浮かべて問う。

「どういうことですか？」

「まず先に確認しておきたいんだけどな。ジンは俺たちを呼び出して、一体どうやって魔王と戦うつもりだったんだ？ あの廃墟を作った相手や、白夜又みたいな力を持つ

が“魔王”なんだろう？」

ぐつとジンは黙り込む。

正直な話、まだコミュニティのリーダーとして未熟な彼は、具体的な方針があった訳ではない。

それでも幼い知恵を駆使して必死に回答を絞り出す。

「まず……水源を確保するつもりでした。新しい人材と作戦を的確に組めば、水神クラスは無理でも水を確保する方法はありましたから。けどそれに関して御二人が想像以上の成果を上げてくれたので、素直に感謝しています」

「おう、感謝しつくせ」

ケラケラと笑う十六夜をサラッと無視して、ジンは続ける。

「これだけの才有る方々が揃えば、どんなギフトゲームにも対抗できるはず。そうしてゲームをクリアして、堅実に力を付けていこうと思っていました。なのに……それなのに、十六夜さんは自分の娯楽のためだけにコミュニティを危機に晒すような真似をした！日向さんもです！魔王を倒すためのコミュニティなんて馬鹿げた宣誓が流布されたら最後、魔王とのゲームは不可避になるんですよ!? そのことを本当に分かっているのですか!？」

ジンは叫ぶと同時に大広間の壁を強く叩いた。

よほど腹に据えかねたのだろう。

しかし日向と十六夜は表情を冷たくし、そんな彼に侮蔑を込めた視線を向ける。

「ハッ。呆れた奴だ。そんな机上の空論で再建がどうの、誇りがどうのと言ったのか

よ」

「全くだな。失望したぞジン」

「な、」

「ギフトゲームに参加して力を付ける？ そんなもんは大前提だ。俺たちが聞いているのは、魔王にどうやって勝つかだ」

「だ、だからゲームに参加して力を付けて」

十六夜の言葉に狼狽えるジンに、日向がさらに追い打ちをかける。

「なら、以前のコミュニティはギフトゲームに参加して力を付けていなかったのか？」

「そ、それは……」

「加えて聞くけどな。前のコミュニティが大きくなったのは、ギフトゲームだけだったのか？」

「……いえ」

コミュニティを大きくするために必要なのは強大なギフトと、強大なギフト保持者。つまりは人材だ。

己の才を頼りに生きているギフト保持者が、名のあるコミュニティに席を置きたいと願うのは当然の流れである。

しかしこのコミュニティには——肝心の名も旗印も無い。

言葉に詰まるジンを前に、日向は間を置かずに畳み掛ける。

「今のままじゃ物を売買する時に、無記名でサインするのと変わらない。〃サウザンドアイズ〃であの女性店員が、〃ノーネーム〃を客として扱わなかったのも当然だ」

「あれ？ 何だかえらく庇うじゃねえか」

「お前は少し黙ってろ」

ニヤニヤと笑う十六夜を日向はバツサリと切り捨てる。

気を取り直すと話を続けた。

「〃ノーネーム〃は所詮、名前の無いその他大勢でしかない。だから信用するのは危険なんだ。その大きなハンデを背負ったまま、ジン。お前は先代のコミニティを超えなきゃならないんだぞ？」

「先代を……超える……!?!」

ジンはその事実にも、金槌で頭を叩かれたような気がした。

思わず押し黙るジンに、十六夜は呆れ果てたように声をかける。

「その様子だと、ホントに何も考えてなかったんだなオマエ」

「……………」

ジンは悔しさと、言葉にした責任の大きさと顔を上げることができなかった。

しかし日向と十六夜は悪戯っぽい笑顔でポン、とそれぞれジンの両肩に手を置くと、

「さて、俺たちには名も旗も無い訳なんだが」

「となると他にはもう、リーダーの名前を売り込むしかないよな？」

ハツとジンは顔を上げた。

同時に彼らの意図を悟り、驚愕に目を見開く。

「僕の名前を担ぎ上げて……コミュニティの存在をアピールするということですか？」

「ああ、悪くない手だろ？」

自慢げに笑う十六夜の顔を、ジンは先ほどとは違った視線で見つめ直す。

日向は更にこの作戦の有用性を説明する。

「けどそれだけじゃ、噂を広めるためにはインパクトが足りない。だからこそジンⅡ
ラッセルという少年が、『打倒魔王』を掲げ、その一味に勝利したという事実があれば――
それは必ず波紋となって広がるはずだ。そしてそれに反応するのは魔王だけじゃない
」

「そ、それは誰に？」

「同じく、『打倒魔王』を胸に秘めた者たちに、だ」

この広い箱庭の世界に、日向たちと同じく、『打倒魔王』を裡に掲げた者たちは必ずいるはずだ。

もしも彼らを引き入れることが出来たのであれば、目下最大の問題である人材不足も解決する。

ジンは想像もしていなかった具体的な作戦に、胸を高鳴らせていく。

「今のコミュニケーションに足りないのはまず人材だ。俺と日向で大抵は何とかなるだろうが、それでも足りない。俺たち並になんて贅沢は言わないが、せめて俺たちの足下並みは欲しい。けど伸るか反るか御チビ次第。他にカッコいい作戦が有るなら、協力は惜しまないぜ？」

軽薄に笑う十六夜の顔を、ジンは見つめ直す。

そこに先ほどまでの怒りはない。

2人の作戦は確かに筋が通っている。

しかし同時に懸念もあったジンは、それを踏まえた上でとある条件を提示した。

「1つだけ条件があります。今度開かれる『サウザンドアイズ』のゲームに、御二人だけで参加してもらえませんか？」

「なんだ？ 俺たちの力を見せろってことか？」

「それもありません。ですが理由はもうひとつ。このゲームには僕らが取り戻さなければならぬ、とてもな大事なものが出品されます」

ジンの言葉が示すところを正確に理解した日向は、意外そうな声音で問いかける。

「まさか……昔の仲間か？」

「はい。それも元・魔王だった仲間です」

その瞬間、十六夜の瞳が光った。

軽薄な笑いには凄みが増し、危険な香りのする雰囲気を漂わせ始める。

「へえ？ つまりお前らは、魔王に勝利し隷属させた経験があるのか。そしてそんな強大なコミュニケーションでさえも滅ぼせる——仮称・超魔王とも呼べる超素敵ネーミングな奴も存在している、と」

「そ、そんなネーミングでは呼ばれていません。魔王にも力関係はありませんし、十人十色です。魔王とはあくまで『主催者権限』^{ホストマスター}を悪用する者達のことですから」

『主催者権限』そのものは箱庭を盛り上げる装置のひとつでしかなかった。

それを悪用されるようになって『魔王』という言葉が出来たのだとジンは語る。

「ゲームの主催は『サウザンドアイズ』の幹部の一人です。商業コミュニケーションですし、僕らを倒した魔王と何らかの取引をして仲間の所有権を手に入れたのでしよう」

「なるほどな。とにかく俺と十六夜で、その仲間を取り戻せばいいんだな？」

「はい、その通りです」

「あいよ。んじや、話はここまでだな」

十六夜が席を立つ。

そのまま大広間の扉を開けて自室に戻ろうするが、そこでふと思いついたように呟いた。

「ああ、そうだ。日向はともかく、御チビが明日のギフトゲームで負けたら俺……コミユニティを抜けるから」

「……え？」

パタン、と扉が閉められる。

後には固まって身動きひとつしないジント、苦笑を浮かべた日向だけが残っていた。

「ハハハ。ま、頑張れリーダー」

——翌日。

早朝に本拠を出発した“ノーネーム”の面々は一路、“フォレス・ガロ”のコミユニティを目指して歩いていった。

道中で例の“六本傷”のカフェで働く猫耳獣人の女性に話を聞いたところ、ガルドはギフトゲームの舞台を専用の舞台区画ではなく、居住区画に設定したらしい。

その不可解な行動に警戒心を強めながらも、やがて目的地に到着した日向達は、現地の変わり果てた様子に目を疑った。

それというのも、居住区画がまるで森のように豹変していたのだ。

鬱蒼と生い茂る木々を見てジンは眩く。

「これは……『鬼化^{きか}』してる？ いや、まさか」

ジンはそつと木々に手を伸ばすと、その樹枝はまるで生き物のように脈打った。訝しげに眉をひそめる彼を尻目に、門柱まで歩み寄った飛鳥が声を上げる。

「見て、ここに『契約書類^{ギヤスロール}』が貼ってあるわよ」

近寄った一同はすぐさま文面に目を通した。

『ギフトゲーム名 『ハンティング』』

・プレイヤー一覧 久遠 飛鳥

春日部 耀

ジン||ラツセル

・クリア条件

ホストの本拠内に潜む

ガルド||ガスパアの討伐。

・クリア方法

ホスト側が指定した特定の武器で

のみ討伐可能。

指定武具以外は「契約」によって
ガルドⅡガスパーを傷つけること
は不可能。

・敗北条件

降参か、プレイヤーが上記の勝利
条件を満たせなくなった場合。

・指定武具

ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、

「ノーネーム」はギフトゲームに

参加します。

「フォレス・ガロ」印

「ガルドⅡガスパーの身をクリア条件に……指定武具で打倒!?!」

「こ、これはまずいです!」

ジンと黒ウサギが悲鳴のような声を上げる。

飛鳥は心配そうに問いかけた。

「このゲームはそんなに危険なの？」

「いえ。ゲームそのものは単純ですが、問題はこのルールです。これでは飛鳥さんのギフトで彼を操ることも、耀さんのギフトで傷をつけることも出来ません……！」

飛鳥は眉をひそめて黒ウサギに問う。

「……どういふこと？」

「『恩恵』ではなく、『契約』の力でその身を守っているのです！ 彼は自らの命をクリア条件に組み込むことで、御二人の力を克服したのでございます！」

これは飛鳥たちのミスだった。

ルールを決めるのが『主催者』である以上、白紙のゲームを承諾するのは自殺行為に等しい。

ここに来て、これまでジンが一度もギフトゲームに参加して来なかった経歴が仇となった。

「敵は命がけで五分に持ち込んだってことか。観客にしてみれば面白くていいけどな」

「気軽に言ってくれるわね……だけど、条件はかなり厳しいわよ。指定武器が何なのかも書かれていないのだし」

飛鳥は険しい表情で「契約書類」を覗き込む。

それを見た黒ウサギと耀は、飛鳥の手をギョツと握って励ます。

「だ、大丈夫でございませよ！　『契約書類』には『指定』武器としっかり書いてありま

す！　つまり最低でも何らかのヒントが無ければルール違反で失格です！　この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも！」

「うん。心配しないで飛鳥。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

「……ええ、そうね。むしろあの外道のプライドを粉碎するためには、コレぐらいのハンデがあつて丁度良いかもしれないわ」

愛嬌たっぷりな励ます黒ウサギと、やる気を見せる耀。

飛鳥も2人の檄で奮起する。

その傍らで、十六夜はジンに昨夜のことを話していた。

「この勝負に勝てないと、俺たちの作戦は成り立たない。予定に変更は無いぞ。いいな御チビ」

「……分かつてます。絶対に負けません」

決意の籠もった表情で頷く。

やがて準備が整った彼らに対して、日向が最後に言葉を送る。

「ま、このメンバーならやれるさ。そのガルドつて外道を、完膚無きまでに叩きのめして

いっ」

頷き、3人は門を開くのだった。

ギフトゲーム開始から30分。

門前で待っていた日向、十六夜、黒ウサギの元に、突如獣の咆哮が響いた。

森に忍び込んだ野鳥たちは一斉に飛び立ち、一目散に逃げていく。

「い、今の凶暴な叫びは……?」

「ああ、間違いない。虎のギフトを使った春日部だ」

「あ、なるほど。ってそんな訳ないでしょう!」

「耀……遂にアレを使ったのか」

「ええっ!? ま、まさか本当に耀さんが!」

「冗談に決まってるだろ」

「このお馬鹿様方!!」

スパアーン! と彼らの脳天にハリセンを振り下ろす黒ウサギ。

肩を竦めた十六夜は、門からはみ出た奇妙な枝をへし折って笑う。

「今の咆哮といい、この舞台といい、前評判よりも面白いゲームになってるじゃねえか。見に行ったらまずいのか？」

「お金をとって観客を招くギフトゲームも存在しておりますが、最初の取り決めにならない限りは駄目です」

「なら、例えば『ジャッジマスター審判権限』とそのお付きつてことにしたらどうなんだ？」

「いえ、それも駄目です。というのも、ウサギの素敵耳はここからでも大まかな状況が分かかってしまうのですよ。状況が分からない隔絶空間でもない限り、進入は不可能です」
「へえ。便利なウサ耳なんだな」

日向は黒ウサギのウサ耳を優しく撫でる。

思わず顔を赤くして縮こまる黒ウサギ。

しかしそれを聞いた十六夜はチツ、と舌打ちをすると、手の中で蠢く枝を砕きながら呟いた。

「……貴種のウサギさん、マジ使えね」

「せめて聞こえないように言ってくださいよ！ 本気でへこみますから！」

「まあまあ」

ペしペしペしと涙目で十六夜を叩く黒ウサギ。

そんな2人を苦笑混じりに仲裁する日向。

その時、突如居住区画を覆っていた木々が一斉に霧散した。

樹によって支えられていた廃屋が倒壊していく音を聞いて、黒ウサギが真つ先に走り出す。

「おいおい黒ウサギ、そんなに慌てる必要はねえだろ？」

「いえ、黒ウサギの聞き間違えでなければ、恐らく耀さんがかなりの重傷を負っています！」

「——ッ！ それは確かに急がないと、な！」

黒ウサギに追い付いた十六夜と日向は事情を聞くや否や、更に加速して朽ちる森の中を駆け抜けていく。

風よりも速く走る3人は瞬く間にジンたちの元まで辿り着いた。

「く、黒ウサギ！ 早くこっちに！ 耀さんが危険だ！」

廃屋に隠れていたジンは、日向たちを呼び止めるために叫ぶ。

黒ウサギは耀の容体を見て思わず息を呑んだ。

右腕から酷く流血しており、このままでは血液不足に陥りかねない。

「今すぐコミュニティの工房に運びます。あそこなら治療器が揃っていますから。御三人は飛鳥さんと合流してから共に帰ってきて下さい！」

「いや、俺も行く。この状態の耀を激しく動かすのはマズいだろう。俺が本拠まで運ぶ

から、黒ウサギは先に行つて治療の準備をしておいてくれ」

「YES! では、よろしくお願いします!」

頷き、黒ウサギは全速力で工房に向かった。

彼女が踏み込んだ地面にはクレーターの様な亀裂が走り、通つた後には土煙が渦を巻いて立ち昇る。

以前に日向や十六夜を追いかけた時とは比べものにならない脚力だ。

「よし、なら俺も黒ウサギの後を追う。十六夜、後のことは頼んだぞ」

「おう、任せとけ」

日向は耀を抱きかかえると、短く十六夜に確認する。

そして振り向き走り出そうとした所で、ふと思ひ立つたようにジンを見た。

「そうだ。ジン、よく頑張つたな」

「え?」

日向はそれだけを告げると、返事を聞くこともなく大地を踏みしめて駆け出した。

黒ウサギ程の速度ではないが、その分耀に負担をかけない姿勢を保つ。

しばらく進んだところで、耀が僅かに意識を取り戻した。

「ん……日向?」

「お? 気が付いたか?」

薄らと瞳を開いた耀に、日向は朗らかに笑いかける。

「もう大丈夫だ。後は俺たちに任せて、今はゆっくり休んでくれ」

「……うん」

再び薄れゆく意識に身を任せ、耀は深い微睡みの底へ落ちていく。

それでも腕の中で抱かれる彼女は、心なしか安心したような表情を浮かべていたのだった。

「今より『フォレス・ガロ』に奪われた誇りをジン＝ラッセルが返還する！ 代表者は前へ！」

一方その頃。

無事に飛鳥と合流した十六夜とジンは、居住区画から鬼化していた木々が消えたのを知り集まって来た多くの人々の前で、旗印の返還式を行っていた。

総勢100人は超えるだろうという衆人環視の中で委縮するジンを、十六夜は背中を叩いて前に出させる。

「流れは作った。手渡す時に、しっかり自己主張するんだぜ？」

「わ、分かりました」

十六夜はそつとジンに耳打ちをすると、そこで舞台の上から足を降ろす。

脇で見ていただけの飛鳥も日向たちの企みに気づき、不敵な笑みで声をかけた。

「面白いことを考えているようね?」

「さて、何のことかなお嬢様」

悪戯が成功したかのような子供っぽい笑顔を交わす2人。

そんな彼らの目の前で、ジンは順調に旗印を返還していく。

「ルル・リエー」のコミュニケーション——そしてこれが旗印です」

「もうルル・リエー」とは二度と……二度と、名乗れないと……掲げられないと思つていたのに……ありがとう!　ありがとう……!」

「次はコミュニケーション「マッドドッグ」——旗印を受け取ってください」

「ああ、心から感謝するぜジン坊ちゃん!　この恩は俺たちの旗が掲げられる限り忘れない!」

次々と返還されていく旗印。

ある者は狂喜して走り踊り、ある者は旗を掲げて走り回り、ある者は失つた仲間の名前を叫びながら泣き崩れていた。

その光景を見て、十六夜と飛鳥は確信する。

この「箱庭の世界」において、コミュニティの名と旗印は何ものにも代えられないものなのだ。

やがて最後のコミュニティに旗印を返還したジンと十六夜は、全員の前に立つて宣言する。

「名前と旗印を返還する代わりに、いくつか頼みたいことがある。お前たちの旗を取り戻した、このジンⅡラツセルのことを今後も心に留めておいて欲しいというのが一つ。そしてジンⅡラツセルの率いるコミュニティが、「打倒魔王」を掲げたコミュニティであることも覚えておいて欲しい」

その言葉に、衆人が一斉に騒然とした。

「噂は本当だったのか!？」「まさか、あんな子供達が……?」「しかし、彼らは神格を倒したそうじゃないか」とそれぞれの困惑を口にする。

ざわざわと波紋が広がる中、十六夜は演説を続ける。

「お前たちも知っているだろうが、俺たちのコミュニティは「ノーネーム」だ。魔王に奪われた名と旗印、それらを自らの力で奪い返すため、これからは魔王やその傘下と戦うことはあるだろう。しかし組織として周囲に認められないと、コミュニティは存続出来ない。だから覚えていて欲しい。俺たちは「ジンⅡラツセルの率いるノーネーム」だ。そして名と旗印を取り戻すその日まで、彼を応援して欲しい」

多くの人々が見守る中、ジンは一歩前に出る。

「ジン＝ラツセルです。今日を境に聞くことも多くなると思いますが、よろしくお願ひします」

そんな彼らに、衆人から歓声が上がります。

万雷の喝采と激励の言葉に見送られ、この日、前代未聞の“打倒魔王”を掲げる新たなコミュニティが、その産声を上げたのだった。

第8話 箱庭の騎士

——「ノーネーム」本拠。

——別館の工房。

「フオレス・ガロ」との決着がつき、十六夜たちが旗印を返還している頃。

ひと足先に本拠へ戻った日向と黒ウサギは、別館の工房で耀の治療に専念していた。

「……………どうだ？ 黒ウサギ」

ベッドで横たわる耀の隣に立ち、日向が静かに問いかける。

それまで真剣な面持ちで医療用のギフトや機材を操作していた黒ウサギは、最終チエツクを終えるとホッと安堵の笑みを浮かべた。

「YES。これでもう安心なのですよ。後はこのまま安静にしていれば、直に目を覚ますはずですよ」

「そうか……………」

日向も気が抜けたように息を吐く。

「お疲れさん、黒ウサギ」

「いえ、同士を助けるのは当然ですから」

そう言つて互いに笑みを浮かべる。

そこでコンコン、と工房の扉がノックされた。

「邪魔するぞ。春日部の容体はどうだ？」

入つてきたのは、返還式を終えて戻つてきた十六夜たちだった。

「ああ。もう心配はいらないそうだ」

「そう、良かった……」

日向の返答に、飛鳥は胸をなで下ろす。

日向はそのまま十六夜を見て、

「それで、そっちは上手くいったのか？」

「おう。御チビもなかなか様になつてたぜ」

そう言つてジンの背中を叩く十六夜。

ジンは恥ずかしそうにしながらも、日向と黒ウサギに声をかけた。

「それじゃあ、後は僕が看病します。耀さんが怪我をしたのは、僕にも責任がありますか

ら」

真面目な表情で申し出るジン。

そこに飛鳥も同意した。

「そうね。それなら私もここに残るわ。日向君と黒ウサギは、一度ゆっくり休んでちょうだい」

「では、お言葉に甘えさせて頂きます。もし何かありましたら、直ぐに知らせてくださいまし」

「ええ、分かったわ」

こうして日向と黒ウサギ、そして十六夜は工房を後にする。

本館に戻った3人は、談話室でくつろぎながら会話する。

「しっかし、春日部のあの傷がものの数日で直るとはな。流石は神様の箱庭ってことか」「そうだな。それにあの治療法なら、後に傷が残ることもないんだろ?」

「YES! ただ出血が激しいので、増血を施しました。輸血となると、専門のコミュニケーションに依頼しなければなりませんし」

黒ウサギは申し訳無さそうにウサ耳を伏せる。

「ノーネーム」の財政難は相も変わらず悩みの種なのだ。

「ま、金がかからない方法があるならそつちでいいだろ。それで、例のゲームはどうなった?」

「そう言えばそろそろだったな。確か事前に申請が必要なんだっけ? 大丈夫なのか黒ウサギ?」

そこで日向と十六夜は、以前ジンが口にした仲間が景品に出されるというゲームの話題を持ち出した。

彼らが参加してくれると聞いて大喜びしていた黒ウサギは、一転して泣きそうな顔になる。

「ゲームが延期だど？」

「……はい。黒ウサギも先ほど知ったのですが、このまま中止の線もあるそうです」
「……マジか」

黒ウサギはウサ耳を萎れさせ、口惜しそうに顔を歪めて落ち込んでいる。

十六夜は肩透かしを食らったようにソファで寝そべり、日向もまた席に腰掛けながら、不満そうに顔を顰めた。

「なんてつまらないことをしてくれるんだ。白夜叉に言っただうにかならないのか？」

「どうにもならないでしょう。どうやら巨額の買い手が付いてしまったようですから」
十六夜の表情が目に見えて不快そうに変わる。

日向もそんな身勝手な理由での取り下げに、憚ることなく愚痴を零した。

「一度はゲームの景品として提示したものを、金を積まれたからと引き下げるのか？」
「主催者」^{ホスト}にあるまじき行為だな」

十六夜も盛大に舌打ちをしつつ、日向の言葉に同意する。

「全くだぜ。……チツ、所詮は売買組織ってことかよ。〃サウザンドアイズ〃は巨大なコミュニティじゃなかったのか？ プライドはねえのかよ」

「仕方がありませんよ。〃サウザンドアイズ〃は群体コミュニティです。白夜叉様のように直轄の幹部が半分、傘下のコミュニティの幹部が半分です。今回の主催は〃サウザンドアイズ〃の傘下コミュニティの幹部、〃ペルセウス〃。双女神の看板に傷が付くことも気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回ぐらいやるでしょう」

達観したような物言いの黒ウサギだが、悔しさで言えば彼らの何倍も感じている。それでも冷静でいられたのは、箱庭においてギフトゲームは絶対の法律だからだ。ギフトゲームによって奪われた仲間たち。

だがそんな彼らを取り戻せるのも、またギフトゲームだけなのである。

だからこそ今回は、純粹に運がなかったと諦めるしかなかった。

「まあ、次回を期待するか。ところでその仲間ってのはどんな奴なんだ？」

十六夜からの問いかけに、黒ウサギはしばし考えるような素振りを見せる。

数瞬の後、人物像を語り始めた。

「そうですね……一言でいえば、スーパープラチナブランドの超美人さんです。指を通すと絹糸みたいに肌触りが良くて、湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラするので」

「へえ。それは見応えがありそうだな」

「それはもう！ 加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛いがつてくれました。近くに居るのであれば、せめて一度だけでもお話したかったですけど……」

日向の反応に嬉しそうに答える黒ウサギだが、言葉を重ねる毎に、次第に表情も沈んでいく。

しかし沈黙が訪れた室内で、不意に聞き覚えのない第三者の声が見事に響いた。

「おや、嬉しいことを言ってくれるじゃないか」

「——っ!」

ハツと窓の外に視線を向ける日向たち。

そこにはにこやかに笑う金髪の少女が、コンコンとガラスを叩きながら浮いていた。飛び上がって驚いた黒ウサギは、慌てて駆け寄って窓を開く。

「レ、レティシア様!」

「様はよせ黒ウサギ。今の私は他人に所有される身分。『箱庭の貴族』ともあろうものが、モノに敬意を払ってでは笑われるぞ?」

黒ウサギが錠を開けると、レティシアと呼ばれた金髪の美少女は苦笑しながら談話室に入った。

美麗な金の髪を特注の大きなリボンで結び、赤いレーザージャケットに拘束具を彷彿

とさせるロングスカートを着た彼女は、黒ウサギが先輩と呼ぶには随分と幼く見える。「こんな場所からの入室で済まない。ジンに見つからずに黒ウサギと会いたかったんだ」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れるので少々お待ちください！」

久しぶりに仲間と会えた事が嬉しかったのか、黒ウサギは小躍りするようなステップで茶室に向かう。

やがて日向や十六夜の存在に気がついたレティシアは、彼らの奇妙な視線に小首を傾げた。

「どうした？ 私の顔に何か付いているか？」

「別に。前評判通りの美人……いや、美少女だと思って。目の保養に観賞してた」
「右に同じく。けど、本当に綺麗な金髪だな。黒ウサギが褒め称えるのも納得だ」

おどけるように語る2人を見て、レティシアは心底楽しそうに哄笑を上げる。

口元を押さえながら笑いを噛み殺し、なるべく上品に装って席に着いた。

「ふふ、なるほど。君たちが日向に十六夜か。白夜叉から話は聞いているよ。しかし観賞するなら黒ウサギも負けていないと思うのだが。あれは私とは違う方向性の可愛さがあるぞ」

「あれは愛玩動物なんだから、観賞するより弄ってナンボだろ」

「だな。弄られてこそその黒ウサギだ」

「ふむ、否定はしない」

「否定してください！」

紅茶のティーセットを持ってきた黒ウサギが口を尖らせて怒る。

温められたカップに紅茶を注ぐ際も少し不機嫌な顔だ。

「レティシア様と比べられれば世の女性のほとんどが観賞価値のない女性でございませぬ。黒ウサギだけが見劣るわけではありませんっ」

「いや、全く負けちゃいねえぜ？ 違う方向性で美人なのは否定しねえよ。好みで言えば黒ウサギの方が断然タイプだからな」

「……そ、そうですか」

不意打ち気味の言葉に思わず頬を赤くしつつ、チラリと日向を見る黒ウサギ。

その視線に気がついた日向は、首を傾げて問いかける。

「うん？ どうした黒ウサギ？」

「あ、いえ、その……日向さんは、どのように思うのかなくと……」

だんだんと声を小さくしていく黒ウサギに、日向は苦笑しながらも素直に答えた。

「その面と向かって聞かれると、こっちも少しばかり恥ずかしいけどな。それでも、正直に答えるなら……黒ウサギも十分に魅力的だよ」

「あ、ありがとうございます」

カアツとウサ耳まで真っ赤に染める黒ウサギ。

自分から聞いたにもかかわらず恥ずかしさに耐えきれなくなった彼女は、慌てて話題の矛先を変える。

「と、ところで、レティシア様はどうしてここに？」

忘れてはならないが、現在のレティシアは仮にも他人にも他人に所有される身分。

その彼女が主の命もなく来たということは、相応のリスクを負ってこの場にいるのだろう。

ならばただ会いに来た訳ではないはずだ。

それなら彼女はジンにも顔を見せたはずである。

ジンに聞かれてはまずい話をしに来たと推測するが、レティシアは苦笑して首を振った。

「なに、別に用があるというほどのものじゃない。新生コミュニティがどの程度の力を持つているのか、それを見に来たんだ。ジンに会いたくないというのは、単に合わせる顔がないからだよ。お前たちの仲間を傷つける結果になってしまったからな」

黒ウサギはその言葉にハツとなる。

予想はしていたが、件のガルド戦で鬼化していた木々は、やはり彼女の仕業によるも

のだった。

箱庭創始者の眷属である兎が「箱庭の貴族」と呼ばれるように、箱庭の世界でのみ太陽を浴びられる彼女らもまた、「箱庭の騎士」と並び称される存在だ。

そんな彼らのもたらす恩恵はあらゆる儀式を省き、互いの体液を交換し合うことで鬼種化を成立させることが出来る。

「吸血鬼？ なるほど、だから美人設定なのか」

「ああ。流星に安直過ぎる気はするけどな……けど、王道と言えば王道だしな」

「は？」

「え？」

「いや、いい。続けてくれ」

「そうそう、こつちの話だからさ」

十六夜はヒラヒラと手を振り、日向も何でもないと続きを促す。

そんな彼らにレティシアは小首を傾げるも、気を取り直して説明を続けた。

「実は黒ウサギたちが『ノーネーム』としてコミュニティの再建を掲げたと聞いた時、なんと愚かな真似を……と憤っていた。それがどれだけ茨の道か、お前に分からないはずが無かったからな」

「……………」

「コミュニティを解散するよう説得するため、ようやくお前たちと接触するチャンスを得た時……看過出来ぬ話を耳にした。神格級のギフト保持者が、同士としてコミュニティに参加したとな」

黒ウサギの視線が反射的に日向と十六夜の2人に移る。

恐らく白夜叉にでも聞いたのだろう。

四桁の外門に本拠を持ち、フロアマスター階層支配者^{フロアマスター}でもある彼女が最下層である七桁の外門に足を運んでいたのは、秘密裏にレティシアをここまで連れてくるためだったのだ。

「そこで私は1つ試してみたくなった。その新人たちが、コミュニティを救えるだけの力を秘めているのかどうかを」

「結果は？」

黒ウサギが真剣な双眸で問う。

レティシアは苦笑しながら首を振った。

「生憎、ガルド程度では当て馬にもならなかったよ。ゲームに参加した彼女たちはまだまだ青い果実で判断に困る。……こうして足を運んだ方がいいが、さて。私はお前たちに何と声をかければいいのか」

困った風に語る彼女を、十六夜を呆れたように笑った。

「違うね。アンタは言葉をかけたくて古巣に足を運んだんじゃない。古巣の仲間が今

後、自立した組織としてやっていける姿を見て、安心したかっただけだろ？」

「……ああ。そうかもしれないな」

十六夜の言葉に首肯する。

現在、危険を冒してまで古巣に来たレティシアの目的は、何もかもが中途半端に終わっていた。

自嘲が拭えない彼女に、十六夜は軽薄な声で続ける。

「その不安、払う方法が一つだけあるぜ」

「何？」

レティシアは不思議そうに小首を傾げるが、意図に気づいた日向は苦笑を浮かべて釘を刺す。

「おいおい、あまり無茶なこととはするなよ？」

「心配いらねえよ。ま、話は実に簡単だ。アンタは“ノーネーム”が魔王と戦えるのが不安で仕方がない。ならその身で、その力で試せばいい。——どうだい、元・魔王様？」

十六夜はスツと立ち上がる。

日向はやれやれと肩を竦めるが、彼の思惑を理解したレティシアは弾けるような哄笑を上げた。

「ふふ……なるほど。それは思いつかなんだ。実に分かりやすい。下手な策を弄さず、初めからそうしていればよかったのかもしれないな」

「ちよ、ちよつと御二人様？」

「諦めろ黒ウサギ。もう手遅れだ」

慌てふためく黒ウサギに、日向は無情に宣言する。

問題児と吸血鬼との一戦は、こうして幕を上げたのだった。

「それで、勝負の内容はどうする？」

「どうせただの腕試しだ。趣向を凝らす必要もない。互いにランスを一打投擲し、それを受け合う」

「そして最後まで立っていた者の勝ち、か。いいね、シンプルイズベストだ」

両者は互いに笑みを交わす。

場所は本拠にある中庭だ。

談話室の窓から十間ほど離れたその場所で、相対する2人は天と地とで別れていた。

背に漆黒の翼を生やして夜空を飛ぶレテイシアを見上げ、そばで観戦する日向は興味

深げに問いかける。

「へえ？ 箱庭の吸血鬼は翼が生えてるのか？」

「ああ。翼で飛んでいるわけではないがな」

「そつか。けどまあ、これで十六夜は制空権を奪われたってことだな。ちなみに今の心境は？」

「別に構わねえぜ？ ルールにもそんな条件はなかったしな」

からかうような日向の言葉に、軽薄な笑みで応える十六夜。

立ち位置からして不利な戦いだが、十六夜は気にせず構えを取る。

——ギフトゲームにおいて、対戦者が未知数であると考えるのは基本である。

例えば、鳥が自由に空を駆けることを猿が不満を漏らしたところで、ギフトゲームでは空すら飛べない猿が悪いとしか弁のしようがないのだ。

未知の相手が見せる新たな一手に、自らの持つギフトで如何に対抗するかを競うことこそ、ギフトゲームの真髄であり醍醐味なのである。

そしてその醍醐味を正確に理解している十六夜を、レティシアはまず評価した。

(なるほど。気構えは十分。あとは実力が伴うか否か……！)

満月を背負うレティシアは微笑と共に黒い翼を広げると、金と赤と黒のコントラストで彩られたギフトカードを取り出した。

それを見た黒ウサギが蒼白になって叫ぶ。

「レ、レテイシア様!?! そのギフトカードは」

「落ち着け黒ウサギ。始まった以上、これはもうあの2人の戦いだ。口を挟むのは無粋だぞ?」

「しかし……!」

諫める日向に對して、それでも黒ウサギは看過出来ないと反論する。

そんな彼らのやり取りを尻目に、レテイシアは輝くギフトカードから長柄の武器を取り出した。

「この槍を受け止められなければ敗北だ。悪いが先手は譲ってもらうぞ」

「好みにしな」

好戦的な笑みで応える十六夜を眼下に、レテイシアは投擲用に作られたランスを掲げる。

「ふっ——!」

彼女は呼吸を整え、翼を大きく広げた。

全身をしなせさせた反動で打ち出すと、その衝撃で空気中に視認できるほど巨大な波紋が広がる。

「ハアアッ!!」

怒号と共に放たれた槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線に十六夜目掛けて突貫する。

それを見た日向は、訝しげに眉をしかめた。

「ん？　これは……」

しかしランスは、勢い衰えず十六夜に迫る。

流星の如く大気を揺らして舞い落ちる槍の先端を前に、十六夜は牙を剥いて笑うと、
「カッ——しゃらくせえ！」

殴りつけた。

「——……は？」

素つ頓狂な声を上げるレティシアと黒ウサギ。

しかしこれまた比喻ではない。

鋭利に研ぎ澄まされ、大気の壁を易々と突破する速度で振り落とされた投擲槍は、そのたつた一撃で拉げて砕け、さながら散弾銃のように無数の凶器となつてレティシアに向けられたのだ。

（ま、まずい……！）

瞬時にレティシアの背筋が凍る。

これは受けられない。

なら避けなければ。

しかし思考に身体が追い付かない。

いや、追い付いたとしても意味がなかった。

鬼種の純血である彼女なら、たかが銃弾如きなら振り払うことも出来ただろう。

しかし第三宇宙速度に匹敵する馬鹿馬鹿しい速度で迫る凶弾を退けることなど、今の彼女には不可能だった。

(……これほどか……)

着弾する間際、彼女の口元に苦笑が零れる。

尋常外の才能を目の当たりしたレティシアは自分の憶測の甘さに恥じ入るが、しかし同時に安堵もしていた。

(だが……これほどの才能を持つ彼らとならばあるいは……)

後悔の中にも一抹の希望を浮かべ、レティシアが血みどろになって落ちる覚悟を決めた時——誰かが、彼女の体を抱き止めた。

「え？」

「よっ！」

レティシアが小さく声を漏らした瞬間、彼女を抱えた日向は大きく片足を振り上げると、迫り来る豪槍に向かって叩きつけた。

両者のぶつかり合う衝撃は凄まじく、生じた爆風が彼らの髪を靡かせる。

互いに規格外の威力を備えた双方は僅かな時間だけ拮抗すると、やがて打ち負けた槍は盛大なクレーターを形成して下方の地面に激突した。

「ふう、やれやれ。間一髪だな。大丈夫か？」

「あ、ああ……」

槍を打ち落とした日向は、レティシアを抱えたまま地面に降り立つ。

そこへ慌てた様子の黒ウサギと、心底面白そうな笑みを浮かべた十六夜が近寄って来る。

「レティシア様！ お怪我はありませんか!？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「ヤハハ！ おいおい日向、お前やつぱり面白いな」

「うっせ。てかお前、俺が助けに入ることが分かっててワザと手加減しなかつただろ？」
「さて、なんのことやら」

冷やかな視線を向ける日向に、肩を竦めておどける十六夜。

そんな時、依然日向に抱えられたままのレティシアが、少々戸惑いながらも口を開いた。

「すまないんだが、その……そろそろ降ろしてはもらえないだろうか？」

「え？ ああ、悪い悪い。それにしても、本当に綺麗な髪だな。このまま手放すのが惜しいくらいだ」

「そ、そうか……」

日向の台詞に若干頬を染めるレティシアだったが、降ろされると同時にコホン、と咳払いをして気を取り直す。

そこで黒ウサギが、確認も取らずに彼女の手からギフトカードを取り上げた。

「あ、く、黒ウサギ！」

「ギフトネーム・ロード、オフ、ウツァン、パイア純潔の吸血姫……やはりギフトネームが変わっている。鬼種のギフトは残っているものの、神格のギフトが残っていない。これではレティシア様の力も、以前の10分の1以下でしかありません」

「っ……………」

さっと目を背けるレティシア。

十六夜は呆れたように鼻で笑った。

「ハッ、どうりで齒ごたえが無いわけだ。他人に所用されたらギフトまで奪われるのかよ」

「いえ。いくら隷属させたからといって、魂の一部である“恩恵”をそう易々と奪うことは出来ません。それこそ、本人同意でもなければ——」

黒ウサギが言葉が続けようとしたその時、異変が起きた。

突如満月の夜に不可思議な輝きが満ちたかと思うと、同時に日向たちの遙か後方から褐色の光が射し込んだのだ。

それを見たレティシアはハツとして叫ぶ。

「あの光……ゴーゴンの威光!? まずい、見つかった!」

焦燥の混じった声と共に、彼女は光から庇うように3人の前に立ちふさがる。

光の正体を知る黒ウサギは、悲痛の叫びを上げて遠方を睨んだ。

「あれは……ゴーゴンの首を掲げた旗印!? だ、駄目です! 逃げて下さいレティシア様!」

黒ウサギの静止も虚しく、褐色の光を全身で受けたレティシアは瞬く間に石像となつた姿で現れる。

更に光の射し込んだ方角から、翼の生えた空駆ける靴を装着した騎士風の男達が大量して押し寄せてきた。

「いたぞ! 吸血鬼は石化させた! すぐに捕獲しろ!」

「おい! 例の『ノーネーム』もいるようだがどうする!?」

「邪魔するようなら構わん、斬り捨てろ!」

空を駆ける騎士達の言葉を聞いた十六夜は不機嫌そうに、尚且つ獰猛に笑って呟く。

「まいったな。生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜ばばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか、2人はどっちだと思おう？」

「冷静に叩き潰すに一票」

「冗談言ってる場合ですか!? と、とりあえず本拠まで逃げてください!」

レティシアのことは気になるが、仮にも現在の彼女は所有物。

どうすることも出来ないと言った黒ウサギは、残った2人の安全を最優先に考える。

しかし聞こえてきた騎士達の会話に、その動きをピタリと止めた。

「ふう……危うく取り逃がすところだったな」

「ああ。今回の交渉相手は箱庭の外とは言え、一国規模のコミュニテイだ。もしも奪われでもしていたら、我ら『ペルセウス』とて無事では済まなかったからな」

「箱庭の外ですって!」

黒ウサギは驚愕に声を上げる。

彼らが『サウザンドアイズ』の幹部のひとつであるコミュニテイ『ペルセウス』であることは使用しているギフトからも分かっていたが、吸血鬼であるレティシアを箱庭の外に連れ出すなどと聞こえては、思わず抗議をせずにはいられなかった。

「一体どういうことです! 彼らヴァンパイアは——『箱庭の騎士』は、箱庭の中でし

か太陽の光を受けられないのですよ!? そのヴァンパイアを箱庭の外へ連れ出すなんて……!」

「我らの首領が取り決めた交渉。部外者は黙っている」

騎士は突き放すように語り、翼の生えた靴で空を舞う。

しかし黒ウサギは、そんな騎士達に深い憤りを込めて叫んだ。

「こ、この……! これだけ遠慮無用に無礼を働いておきながら、非礼を詫びる一言もないのですか!」

本来なら本拠への不当な侵入はコミュニティへの侮辱行為であり、世間体にもよろしくない。

信頼が命の商業コミュニティである「サウザンドアイズ」ならばこんな暴挙はしなだらう。

これは明らかに「ペルセウス」が「ノーネーム」を見下した上での行為である。

激昂する黒ウサギを、しかし騎士たちは鼻で笑った。

「ふん。こんな下層に本拠を構えるコミュニティに礼を尽くしては、それこそ我らの旗に傷が付くわ。身の程を知れ「名無し」が」

バチコン! と黒ウサギの堪忍袋が爆発する音がする。

彼女は騎士たちを睨むと、らしくない物騒な笑顔で罵った。

「ふ、ふふふ……いい度胸です。多少は名のあるギフトで武装しているようですが、そんなレプリカを手にしたくらいで強くなつた気ではないのですか？」

「何!？」

今度は騎士たちが怒声を上げる。

黒ウサギは青髪を淡い緋色に変幻させ、高く舞い上がらせて威嚇した。

「ありえない……ええ、ありえないですよ。天真爛漫にして温厚篤実、献身の象徴とまで謳われた『月の兎』を、これほどまでに怒らせるなんて……!」

瞬時に一帯の空気が重圧に変わり、激しい威圧感が騎士たちを襲う。

たじろぐ彼らを前に黒ウサギが右腕を掲げた刹那、空気が裂けるような甲高い音が響き渡る。

まるで雷鳴のような爆音が周囲一帯を支配し、彼女の右手には閃光のように輝く槍が掲げられていた。

それを見た騎士たちに動揺が走る。

「雷鳴と共に現れるギフト……ま、まさか『インドラの槍』!? そんな話はルイオス様から聞いていないぞ!!」

「あ、ありえん! 最下層のコミユニティが神格を付与された武具を持つなど……!？」
「本物のはずがない! どうせ我らと同じレプリカだ!」

そんな彼らの動揺を尻目に、稲妻のほとばしる槍を逆手に構えた黒ウサギは、「その目で真贋を見極められないなら——その身で確かめるがいいでしょう！」

熱膨張した空気が、激しい雷鳴を轟かせた。

同時に黒ウサギの髪がプリズムを放ち、緋色から再び蒼に染まる。

インドラの槍を黒ウサギがいぎツ！ と天に向かって撃ち出そうとすると、そこで日向と十六夜が、

「てい」

「フギャー！」

同時に彼女のウサ耳を引っ張った。

すつぽ抜けたインドラの槍は雷鳴と共に明後日の方向に飛んでいき、解放された稲妻と熱量は数キロメートルに渡って箱庭の天幕を照らすに終わった。

「お・ち・つ・け・よ！ 白夜又と問題を起こしたくないんだろ？ つか俺が我慢してやってんのに、ひとりでお楽しみとはどういう了見だオイ」

「フギャア!!? って怒るところはそこなんですか!?!」

「それだけじゃないぞ黒ウサギ。今後レテイシアを取り戻すにしても、ここで向こうに手を出したら一気に形成が不利になる。レテイシアのためにも、今はその怒りを抑えるべきだ」

「うう、それはそうですが……っていい加減痛いですよ十六夜さん！　いつまでウサ耳を引つ張っているんですか!？」

「気にするな。ただの八つ当たりだ」

「せめて誤魔化してくださいよ!？」

気がつけば、いつの間にか騎士たちの姿は消えていた。

涙目でウサ耳を押さえる黒ウサギの頭を、日向は苦笑と共に優しく撫でてやりつつ口を開く。

「さて、なら行くとしますか」

「ああ。他の連中も連れて行きたいところだが、春日部のこともあるしな。看病は御チビに任せて、お嬢様辺りに声をかけるか」

「ちよ、ちよっと待つてください！　一体どこに向かうつもりなんです?？」

若干頬を染めながらも問いかけてきた黒ウサギに、日向は笑って返答する。

「いるだろ?　事情に詳しくそうなのがもうひとり」

「……ああ!？」

黒ウサギも気づいてハツとした。

十六夜はそんな彼女を見ると、ここからが正念場であることを告げる。

「ま、最悪その場でゲームになる可能性だつてありえるしな。頭数は多い方がいいだろ。」

分かつたらさつきとお嬢様を呼んでこい」

「わ、分かりました！」

こうして日向・十六夜・飛鳥・黒ウサギの4人は燦然と夜空に輝く満月の下、
ザンドアイズ”二一〇五三八〇外門支店を目指すのだった。 ”サウ

第9話 英雄の末裔

夜も更け、空には満天の星々が瞬いていた。

一晩遅れの満月が箱庭を照らしている。

「こんなにもいい星空なのに、出歩いている奴はほとんどいねえな。俺の地元なら金とれるぜ」

「本当だな。俺が元居たところでも、ここまで綺麗な星空を仰げる機会はそうそうない」
足早に歩みを進めながら、十六夜と日向は感慨深げに呟いた。

彼らの生きていた時代は、自然という存在を犠牲にすることで人々が安寧を得ていた時代だ。

だからこそ、こうして人里で見上げる満天の星空はとても新鮮に感じられた。

対照的に戦後間もない時代から来た飛鳥にとって、この星空は疑問の対象だった。

「あれだけ鮮やかな月なのに、星の光が霞んでいないのはどうしてかしら？」

「箱庭の天幕は、星の光を目視しやすいように出来ていますから」

「そうなの？ だけどそれ、何か利点があるのしら？ 太陽の光から吸血鬼などの種を

守るため、という話なんかはまだ分かるのだけど」

わざわざ星の光を際立たせたることに、何か特別な意味があるとは思えない。

焦るように小走りをしていた黒ウサギは一旦歩幅を緩めると、

「ああ、それはですね」

「おいおいお嬢様。その質問は無粋だぜ」

「そうだぞ。『夜に綺麗な星空が見えますように』っていう職人たちの粋な計らいなの
よ」

「あら、それは素敵なお心遣いね。とてもロマンチックだわ」

「……そ、そうですね」

黒ウサギは彼らの推察をあえて否定しなかった。

本当は別に理由があるのだが、話せば長くなるし、何より今は他にやるべきことがある。
る。

納得してくれたのであれば、ここで無理に説明する必要もないだろう。

再び小走りに戻ろうとして、

「……ま、それだけって訳でもなさそうだけどな」

「え？」

不意に発された日向の言葉に、黒ウサギはピクリとウサ耳を反応させる。

しかしその意味を尋ねる前に、とうとう目的地まで着いてしまった。

“サウザンドアイズ”支店の門前に訪れた4人を、いつぞやの無愛想な女性店員が出迎える。

「お待ちしておりました。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」

「……ほほほ〜う？ 黒ウサギたちが来ることは承知の上、ということですか。あれだけ遠慮無用に無礼を働いておきながら、よくも『お待ちしておりました』なんて言えたものデス」

「……詳細は聞き及んでおりません。中でルイオス様からお聞きください」

まるで他人事のような返答にまたもや腹を立てそうになる黒ウサギだが、そこで日向が肩に手を置いて口を挟んだ。

「まあまあ落ち着け黒ウサギ。そんなに語勢を強めるなんて、いつものお前らしくないぞ？ 別にこの人に非があるわけでもないだろう？」

「そ、それはまあ、そうですねけれども……そう簡単に納得は出来ないのをごさいますよ」

「だからこそ、早く中でそのルイオスって奴に文句を言ってやらないとな」

「うう、その通りなのです。……店員さんも、申し訳ありませんでした」

「いえ、どうかお気になさらずに」

日向に指摘され、確かに大人気がなかったとウサ耳を萎れさせる黒ウサギ。

その頭を日向は苦笑して撫でながら、

「ほら、元氣を出せ黒ウサギ。交渉の席でそんな顔をしてたら、相手につけ込まれるぞ？」

「日向君の言う通りよ。名前から見てどうやら先方は男性らしいし、むしろ逆に籠絡させるぐらいの気概で行きなさい」

「わ、わかりました！」

「ヤハハ。というわけで、作戦名は『黒ウサギの美脚でエロエロ色仕掛け作戦』に決定だな」

「異議なし！」

「YES！ つて異議ありますよ!? 何ですかそのお馬鹿過ぎる作戦は!?!」

ギヤースカと喚きながら騒々しく暖簾を潜っていく黒ウサギたち。

最後に日向が入ろうとしたところで、

「……お心遣い、感謝いたします」

通り過ぎる直前、ポツリと女性店員が囁いた。

日向は軽く頷いて謝意を受け取ると、仲間が続いて店内に進む。

そのまま案内された離れに向かうと、室内で迎えたルイオスは黒ウサギを視界に収めた途端盛大に歓声を上げた。

「うわお！ ウサギじゃん！ 噂には聞いてたけど、まさか本当に東側に居るなんて思わなかった！ つかミニスカにガーターソックスってかなりエロいな！ ねえ君、うちのコミュニティに来ない？ 今なら三食首輪付きで毎晩可愛がるぜ？」

ルイオスは地の性癖を隠す素振りもなく黒ウサギの全身を舐め回すように視姦してはしゃぐ。

黒ウサギは思わず背筋に悪寒が走り、慌てて日向の背中に身を隠す。

飛鳥はそんなルイオスに憚ることなく不快感を露わにすると、毅然な態度で言い渡した。

「これはまた、随分と典型的な外道が出たわね。先に断っておくけど、この美脚は私たちの物よ。それでもお近づきになりたいと言うのなら、それなりの誠意を見せてもらおうかしら？」

「ちよ、飛鳥さん!？」

黒ウサギが慌てて飛鳥に食ってかかる。

飛鳥はヒソヒソと彼女のウサ耳に耳打ちした。

（ほら、今こそ作戦を遂行する時よ黒ウサギ）

（ええっ!!? む、無理です無理ですっ! 生理的に絶対無理ですっ!）

（おいおい、何も本気でお前の美脚を犠牲にしようだなんて考えてねえよ。あくまでも

主導権を握るためのキツカケさえ掴めればそれでいい)

(そ、それはそうかもですけど……)

(安心しろ黒ウサギ。いざって時は、絶対に俺たちが助けてやるから)

(……わ、分かりましたっ!)

同士の後押しで決心をつけた黒ウサギは、チラリと日向の後ろから太ももを覗かせ、「ふ、ふふふ。もしも黒ウサギのお願いを聞いてくれたら、この美脚に触れるかもしれないのですよ♪」

「それは誠かつ!」

「別の人が引つかかった!」

物凄い勢いで座敷を立つ白夜叉。

彼女は鼻息を荒くして問いつめる。

「ほれほれ、どうした? 早ようそのお願いとやらを言うがよい。私の全権力を駆使して叶えてやるぞ? フフフ、遂にこの時が来たのだ。かねてよりの念願であった黒ウサギの持ち得る美脚の素晴らしさを隅から隅まで味わい尽くすという私の欲望が今こそ叶」

「うわけないでしょうこのお馬鹿様ああああああああああ!!!」

スパアアアアアッ!!!

と全力でハリセン一閃。

叱られた白夜又はしょんぼりと頭をさすりながら、

「堅いことを言うなよう。ちゃんと優しくするぞ?」

「その発言がすでに危ねえよ」

「ああ、変態だな」

「何だ?! おんしらだつて男ならば、黒ウサギの美脚を一度は堪能してみたいと思うだろう!」

「フツ、否定はしない」

「だから否定してくださいこのお馬鹿様方あああああああああ!!!」

スパパアアアアアアアアアア!!!

と更に全力でハリセン一閃。

今日の黒ウサギは短気だった。

肝心のルイオスはすでに完全に蚊帳の外だ。

彼は日向たちのやり取りを唾然と見つめていると、唐突に笑い出した。

「ぶつ、あつははははははは! え、なにになに? 君らもしかして“ノーネーム”っていう芸人のコミュニケーションか何かなの? もしそうならまとめ“ベルセウス”に來いってマジで。もちろん、その美脚は僕のベッドで毎夜毎晩好きにだけ味わせてもらうけど」

「お断りでございます。黒ウサギは礼節も知らぬ殿方に肌を見せるつもりはありません」

黒ウサギが嫌悪感を吐き捨てるように言うのと、隣の十六夜がからかうに問いかける。

「ふーん？ 俺はてつきり見せるために着てるのかと思つていたが？」

「そ、そんなわけないじゃないですか！ こ、これは白夜叉様が開催するギフトゲームの審判をさせて頂く時に、この格好を常備すれば賃金を3割増しにすると言われて嫌々……」

「へえ、嫌々そんな服を着せられてたのか。……おい白夜叉、これはひと言いわせてもらうぞ」

「全くだな。俺も貴女に言っておきたいことがある」

「ほう、なんだ小僧ども」

キツと白夜叉を睨む十六夜と日向。

両者は凄んで火花を散らすと、同時に右手を掲げ、

「超グツジョブ」

「うむー」

ピシッ！ と親指を立てて意志疎通する3人。

話が進まず、ガクリと項垂れる黒ウサギ。

そんな状況を見かねたのか、女性店員が静かに部屋の障子を開けて助け船をだす。

「あの……御来客の方も増えましたし、よろしければ店内の客間に移りましょうか？」

この人数では流石に手狭でしょうし」

「いい、YES。そうして頂けると助かります」

こうして一度仕切り直すことになった一同は、女性店員に連れられて客室の方に向かうのだった。

「ノーネーム」の面々は、「サウザンドアイズ」の幹部と向かい合う形で座敷に座る。

対面に腰を下ろしたレイオスは、相変わらず下卑た視線で黒ウサギを見ていた。

黒ウサギは悪寒を感じつつも、レイオスを無視して白夜叉に事情を説明する。

「——『ペルセウス』が私たちに対して無礼を働いたのは、以上の内容となります。ご理解いただけましたでしょうか？」

「う、うむ。『ペルセウス』の所有物・ヴァンパイアが『ノーネーム』の本拠に無断で踏み入り、その敷地を荒らしたこと。またそれを捕獲する際における数々の暴挙と暴言。しかと聞き届けた。正式に謝罪を望むのであれば後日」

「結構です。あれだけの暴挙と非礼の数々。最早我々の怒りはそれだけでは済みません。『ペルセウス』に受けた屈辱は、両コミュニティの決闘をもつて決着をつけるべきかと」

両コミュニティの直接対決。

それこそが黒ウサギの狙いだった。

レティシアが敷地内で暴れ回ったというのは、勿論ねつ造だ。

しかし彼女を取り戻すには、なりふり構っていたのでは間に合わない。

黒ウサギたちに有利な手札はあまり無いのだ。

少しでも使えるカードは全て切る必要があった。

「『サウザンドアイズ』にはその仲介をお願いしたく参りました。もしも『ペルセウス

』が拒否するようであれば、『主催者権限^{ホストマスター}』の名の下に」

「いやだ」

唐突にルイオスは宣言した。

「……はい？」

「いやだね。決闘なんて冗談じゃない。そもそもあの吸血鬼が暴れ回ったという証拠は

あるの？」

「それなら彼女の石化を解いてもらえば」

「駄目だね。あいつは一度逃げ出したんだ。出荷するまで石化は解けない。……それに、口裏を合わせないとも限らないだろ？　ねえ、元お仲間さん？」

嫌味たらしく笑うルイオス。

しかし筋が通っているだけに反論できない。

「だいたい、あの吸血鬼が逃げ出した原因はお前たちだろ？　実は盗んでいたりして」

「な、何を馬鹿なことをツ！　一体どこにそんな証拠が」

「だ・け・ど。事実、あの吸血鬼はアンタらのところに居たじゃないか」

黒ウサギはぐつと黙り込む。

それを衝かれては言葉が出なかった。

黒ウサギの主張にしろ、ルイオスの主張にしろ——第三者がいけないという点では同じなのだ。

「どうしても決闘に持ち込みたいなら、ちゃんと検査をしないとね。まあもつとも？　ちゃんと検査されて一番困るのは全く別の人だろうけど」

「そ、それは……！」

黒ウサギは視線を白夜叉に移して押し黙る。

彼女の名前を出されては、流石に手が出せない。

この3年間“ノーネーム”を存続出来ていたのは、間違いなく彼女の支援があつたか

らだ。

今回の一件で更なる苦勞はかけたくなかった。

「それじゃま、そろそろ帰つてあの吸血鬼を外に売り払うとするかね。愛想の無い女は嫌いだからさ、僕。特にアイツは体もほとんどガキだしねえ。けどほら、見た目だけなら可愛いから。その手の愛好家にしたら堪らないだろ？ 気の強い女を裸体のまま鎖に繋いで組み伏せ啼かす、なんてのが好きなヤツもいるし？ 太陽の光つていう天然の牢獄の下、永遠に玩具として扱われる美少女つてのもエロくない？」

「いや、お前の方がキモい」

「同感だ」

「おいそこの金髪と黒髪。お前ら後で表に出ろ」

口を挟んだ十六夜と日向を睨みつけるも、ルイオスは気を取り直して話を続ける。

「けどまあ、アイツも心底可哀想なヤツだよな。箱庭から売り払われるだけに飽きたらず、恩知らずな上に恥知らずな仲間のせいでギフトまでも魔王に明け渡すことになっちゃったんだから」

「なんですつて？」

反応したのは飛鳥だ。

彼女はレティシアの状態を知らなかったために驚きも大きい。

黒ウサギも口には出さないものの、その表情からはハッキリと動揺が見て取れる。ルイオスはそこにつけ込んだ。

「いやあ、報われない奴だよ本当に。『恩恵』はこの世界で生きていくのに必要不可欠な生命線。魂の一部だ。それを馬鹿でマヌケな仲間の無茶を止めるために捨てて、ようやく手にした自由も仮初めのモノ。他人の所有物なんていう極めつけの屈辱に耐えてまで駆けつけたつてのに、その仲間はアツサリと自分を見捨てやがるときたもんだ！ 果たして目を覚ましたあの女は、一体どんな気分になるんだろうね？」

「……え、な」

黒ウサギは途端に絶句する。

そしてみるみる蒼白に染まり始めた。

同時に幾つもの謎が解け、レティシアがどれだけの代償の払い、自分たちの元まで駆けつけたのかを理解する。

ギフトを手放し、力を落としてまで——魂を砕いてまで、彼女は自分たちを守ろうとしたのだ。

ルイオスにはこやかに笑うと、茫然自失な黒ウサギに向けてスツと右手を差し出した。

「ねえ、黒ウサギさん。このまま彼女を見捨てたら、コミュニテイの同士として義が立た

ないんじゃないのかい？」

「……？ どういうことですか？」

「取引をしようよ。吸血鬼を『ノーネーム』に返してやる。その代わり、僕は君が欲しい。君は生涯、僕に隷属するんだ」

「なっ……!？」

「一目惚れってヤツ？ それに『箱庭の貴族』という泊も惜しいし」

再度絶句する黒ウサギ。

飛鳥もこれには我慢ならず、座敷から立って怒声を上げた。

「これまで散々外道外道とは思ってたけど、まさかここまでだとは思わなかったわ！

もう行きましょう黒ウサギ！ こんな奴の話を聞く義理はないわ！」

「お、お待ちください飛鳥さん！」

黒ウサギの手を掴んで退室しようとする飛鳥。

しかし黒ウサギは座敷を出ない。

彼女は瞳は困惑している。

ルイオスの提案に揺らいでいることは明白だ。

手応えを感じたルイオスは嫌らしい笑みを浮かべてまくし立てた。

「ほらほら、君は『月の兎』だろ？ 仲間のために、煉獄の炎に身を投げ出すのは本望だ

ろ？ 何せ君たちにとって、自己犠牲は本能だもんなあ？」

「……………」

「ねえほらどうしたの？ ウサギは義理とか人情とかそういうのが命よりも大好きなんだから？ 安っぽい命を安っぽい自己犠牲ヨロシクで帝釈天に売り込んだんだろ!? 箱庭に招かれた理由が献身なら、種の本能に従って安い喧嘩を安く買っちゃまうのが筋だよな!? ええほらどうなんだよ黒ウサ」

「黙りなさい！」

ガチン！ とルイオスの下顎が不自然に閉じる。

見かねた飛鳥の力が原因だ。

「っ……………!!?!」

「貴方は不快だわ、そのまま地に頭を伏せてなさい！」

困惑するように口元を押さえたルイオスは、飛鳥の支配の言葉に従って徐々に体勢を前傾に歪め出す。

しかし強制力に逆らって無理やり上体を起こすと、事態を理解した彼は強引に言葉を紡いだ。

「おい……………女。そんなのが、通じるのは——格下だけだ、馬鹿がッ!!」

激昂したルイオスは完全に拘束を振り切ると、立ち上がると同時に懐からギフトカー

ドを取り出した。

そして光と共に現れた鎌をその手に取ると、飛鳥に向けて振り下ろす。

あわや直撃、というところで刃を受け止めたのは、隣で座っていた十六夜だった。

「な、なんだお前……!」

「十六夜様だよ色男。喧嘩なら利子付けても買うぜ? もちろんトイチだけだな」

軽薄に笑い、掴んだ柄を蹴って押し返す。

ルイオスは堪らず跳び退いた。

しかし瞬時に体勢を立て直し、再び身構える。

ピリピリと一触即発な雰囲気は漂う中で、それまで静観していた日向が厳しい声で

たしなめた。

「止めろ。俺たちは争いにじゃなく、話し合いに来たんだ。飛鳥も向こうの挑発に乗る

な」

しかし当の飛鳥は納得がいかないとばかりに異議を唱える。

「日向君! 貴方はこんな外道が許せるの!?!」

「あんな飛鳥。こういう場は先に手を出した方が負けなんだ。ひとまずは気持ちを落ち

着かせろ」

「そんなこと出来るわけがないでしょう! ここまで黒ウサギの想いを踏みにじられ

て、日向君はなんとも思わないの!? 見損なっ——!?!」

怒りのままに日向を咎めようとするが、しかしその先の言葉が続けることは出来なかった。

ゴクリと、思わず息を呑む。

なぜなら、彼女は目にしてしまったのだ。

日向が、本気で激怒しているその姿を。

一見しただけでは、普段と何も変わらない。

無表情で、静かに腰を落ち着けているその様子は、むしろいつにも増して冷静沈着に見えるだろう。

それでも真つ直ぐにルイオスを見据えるその瞳の奥では、圧倒的な憤怒の念が渦巻いていた。

この場でルイオスに憤りを抱いているのは、決して飛鳥だけではないのだ。

彼女はそれ以上二の句を継げることが出来ず、悔しそうに唇を噛んで閉口する。

そこにこれまで成り行きを見守っていた白夜叉が、呆れたように釘を刺した。

「日向の言う通りだ。このうつけ者どもが。話し合いで解決出来ぬなら、門前に放り出すぞ」

「……チツ。けどその男の言う通り、先に手を出したのはその女だけどね?」

尚も殺気立つルイオス。

黒ウサギも静かに首肯した。

「ええ、分かっております。これで本日の一件は互いに不問ということにしましょう。

……それと」

彼女はギュツと胸の前で両手を握ると、震える声でルイオスに告げた。

「……それと、先ほどの話ですが……少しだけお時間をください」

その言葉に驚愕した飛鳥は、反射的に叫ぶ。

「なっ、待ちなさい黒ウサギ！ 貴女、この男の物になっても構わないと言うの!？」

「……仲間と相談するためにも、どうかお時間を」

「オーケーオーケー。ならこっちの取引ギリギリ期日まで……そうだね。1週間だけ待ってあげる」

爽やかに笑うルイオス。

黒ウサギはそれだけ告げ、足早に座敷を出た。

飛鳥はすぐにその後を追いかける。

そんな彼女たちを見送り、十六夜は呆れたように肩を竦ませた。

「白夜叉は恵まれてるな。気難しい友人とゲスい部下に挟まれるなんて、滅多に経験出来ないぞ」

「全くだの。羨ましいなら代わってやるぞ?」

「ヤハハ、遠慮しとくぜ」

控えめに笑うと、座敷から腰を上げて黒ウサギたちの後に続こうとする。

障子を開けて退室しようとしたところで、ふと思いついたようにルイオスに向けて問いかけた。

「ああ、そういや…… “ペルセウス” のリーダーってお前か?」

「ああ? そうだけど、今さら何聞いてんの?」

先ほどのこともあり、不機嫌そうに返すルイオス。

十六夜はしばらくルイオスを見つめた後、酷く落胆したようにため息を吐いて踵を返した。

「おい、今のため息は何?」

「名前負けしすぎ。期待した俺が馬鹿だった……そういう意味さ」

「ハッ。今なら安い喧嘩でも安く買うぜ?」

口調に明確な怒気を孕ませながら、ルイオスは再び鎌を取る。

彼とて “ペルセウス” を率いる男。

並み居る修羅神仏を押しつけて五桁の外門に本拠を構えているのだ。

その実力は事実、並の人間とは一線を画す。

先ほどは力負けしたかもしれないが、本気で戦えば自分が敗北するなどは微塵も思っていない。

挑発を受け、十六夜は片眉を上げて見つめ直す。

それでもやはり、興味なさそうに視線を外して座敷から退室していった。

「クソツ、何なんだよアイツは！ この僕を偉そうに見下しやがって！」

「はあ。全く、どいつもこいつもやれやれだの。……それで、おんしはまだ帰らんのか？」

子供のように憤慨するルイオスを余所に、白夜又は未だ座敷で座る日向に問う。

正直なところ、まだ短い付き合いでも彼なら真つ先に黒ウサギの後を追うであろうと予想していたので、内心気にはなっていたのだ。

問われた日向は気づいたように返事をした。

「ん？ ああ、少しこの男に用があつてな」

その発言を耳にして、ルイオスはつまらさなそうに聞き返した。

「は？ 何？ お前も僕に文句があんの？」

「ああいや。別に文句なんて大層なものじゃないさ。……ただ、これだけは伝えておくうと思つてな」

「あ？ なんだよ」

日向はスツと立ち上がる。

そして射殺するような凍てつく眼光を浮かべて一言、

「……テメエ如きに、黒ウサギは絶対に渡さねえ」

その後“サウザンドアイズ”支店から退出した日向は、ひとり本拠に向けて帰路に就く。

街灯ランプで仄かに照らされる夜の道は、昼間とはまた違った趣を見せている。

周囲に他人の気配は無く、脇を流れる水路の水音がサラサラと鼓膜にせせらぎを奏でた。

そんな風に道を進んでいると、不意に桃色の花卉を散らす街路樹に、十六夜が背中を預けて佇んでいた。

十六夜は日向に気がつくつと、軽薄な笑みを浮かべて歩み寄る。

「よお」

「なんだ、まだ帰ってなかったのか？」

「まあな。夜の花見つてのも、なかなか乙なもんだ」

ヤハハと静かに笑う十六夜。

しかし次の瞬間、スツと目を細める。

「で、やるんだろ?」

瞳の奥に明らかな戦意の炎を灯しながら、十六夜は不敵な笑みで問いかけた。

その一言で彼の言わんとするところを理解した日向は、苦笑混じりに返答する。

「どうやら、お前も知ってるみたいだな」

「まあな。元々は奴らの主催するギフトゲームに参加する予定だったんだ。相手のことを調べておくのは、プレイヤーとして当然だろ?」

「ま、それは確かに同感だ」

「つーわけで、俺も手伝ってやるよ。大体——こんな面白そうなこと、独り占めなんてさせねえぜ?」

ニヤリと、十六夜は悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべる。

つられて、日向も口角を吊り上げた。

「面白そう……か。確かにな」

2人は笑みを交わし合う。

期限はたったの1週間。

その間に勝利のピースをかき集め、あのルイオスを——“ペルセウス”を叩き潰す。

誰もが正気を疑うだろう。

誰もが不可能と断じるだろう。

しかし人々は知らない。

彼らが、世界屈指の問題児たちであることを。

信じられぬのであれば、見せつけてやろうではないか。

あの下らぬ自己犠牲にその身を投じようとしている少女に。

完璧に、完璧に、完膚無きまでに。

彼らの召喚した同士が完全無欠の『希望』足り得ることを、この手で証明してやろうではないか。

「さてと、それじゃあいつちよやるとしますか。へマするなよ十六夜?」

「ヤハハハ! おいおい、誰に向かって言ってるんだよ。お前こそ大丈夫か? 何なら休ん

でていいだぜ?」

「ハッ! 上等だ。何なら競争でもするか?」

夜空に輝く満月の下、彼らはその手を取り合った。

——奇跡は、ここから紡がれる。

第10話 FAIRY TALE in PERSEUS

ルイオスとの対談から3日後。

黒ウサギはジンから謹慎処分を受けていた。

この日は定期降雨により、箱庭の天幕にはどんよりと暗雲が立ち込めている。

自室の窓に滴る雨粒をそつと指でなぞりながら、黒ウサギはガラスに映る自分を見つめた。

(ルイオスさんから提示された期日まで、残り4日。レティシア様を救い出すためにも、黒ウサギは……)

この数日間、黒ウサギの脳裏には終始、あの日ルイオスに持ちかけられた取引のことが浮かんでいた。

自分が彼の物になればレティシアは助かる。

その代わり、自分はもう二度と“ノーンーム”には戻れないだろう。

それでも、たとえどんなに辛く困難な未来が待ち受けているとしても、大切な同士を見捨てるという選択肢を、黒ウサギに選ぶことは出来なかった。

（日向さんたちとも、お別れになってしまおうのですよね……）

それなのに、何度覚悟を決めようとしても、皆の顔を思い出す度に決心が大きく揺らいでしまう。

そして黒ウサギは再び鬱々と悩み出し、堂々巡りになっていた。

「うゝ、一体どうすれば……」

ウサ耳を抱えてうんうん唸っていると、コンコンと控えめなノックが室内に響いた。

だが憂鬱気味な黒ウサギは、

「はいはい。鍵もかかっていますし、中にはだーれもいませんよー」

「……今のは入室許可を得たとみてもいいのかしら？」

「そうじゃないかな？」

ウサ耳に聞こえたのは飛鳥と耀の声だ。

そのままガチャガチャとドアノブを捻る音がする。

「あら、本当に鍵がかかっているわ」

「ん……ホントだ。こじ開ける？」

物騒な会話を聞いた黒ウサギは、観念したように席を立った。

「はいはい、開けます開けます！ 御二人はもう少しソフトというか、オブラートにですね」

「いつそ壊したらどう?」

「そうだね」

バキンッ!

「オブラアアアアト!」

「五月蠅い」

ぴしやりと言われて引き下がる。

黒ウサギはウサ耳を垂れさせ、破壊されたドアノブを片手にしくしくと泣いた。

「そ、それで、御二人はどうされたのですか?」

「黒ウサギにクツキーを届けに来たのよ」

「年長組の子供たちが『早く黒ウサギのお姉ちゃんが元気になりますように』って」

その言葉を境に、3人は複雑な表情で黙り込む。

コミュニティの誰ひとりとして、黒ウサギの犠牲を望んでいる者などいないのだ。

「本当に、子供って卑怯だと常々思うわ。あんな泣きそうな顔で懇願されたら、断れるわけないじゃない」

「皆、黒ウサギに居なくなっただけで欲しくないんだよ」

それでも、黒ウサギは沈鬱そうにウサ耳を伏せる。

「ですが黒ウサギが身を差し出さねば、レティシア様は箱庭の外に……」

「そのことだけでも、何か他に方法はないの？ 連中が黒ウサギ以外の代物で交渉に乗るか……もしくは、吸血鬼の彼女を賭したゲームを受けてもいいと思えるような、そんな都合の良いものとか」

「ほ、本当に都合のいいものですね」

とは言え今はそれを考えるしかない。

黒ウサギは顎に右手を添えて考える。

「……いえ、やはり難しいと思います。そもそも『ペルセウス』とは、組織内の権力が極端にリーダーへと偏っているコミュニケーションなので。『ペルセウス』を動かすということは、必然的にルイオスさんを動かすことと同義です。しかし彼が納得するほどのものとなると、今の黒ウサギたちの手元には……」

「なら別の視点から考えてみよう。ルイオスが主導権を握っているにもかかわらず、『ペルセウス』が動かざるを得ないような代物ってない？」

む？ と考え込む黒ウサギ。

ひとつだけ思い当たるモノがあった。

「御二人は、ペルセウスのゴーゴン退治を御存じですか？」

「え？」

黒ウサギの唐突な質問に驚きながらも、飛鳥と耀はただとどしく答える。

「ペルセウスは星座の名前しか知らないわ。ゴーゴンは蛇の髪を持つ化け物だったかしら？」

「はい。そのゴーゴンを暗殺したのが、ペルセウスという騎士なのです」
「そうなんだ。でも、その伝説がどうしたの？」

耀は小首を傾げて問いかける。

頷き、黒ウサギは神妙な面持ちで話を続けた。

「実は、力あるコミュニティは自分たちの伝説を誇示するために、伝説を再現したギフトゲームを用意することがあります。彼らは特定の条件を満たしたプレイヤーにのみ、そのゲームへの挑戦を許すのです。自らの持つ伝説と——旗印を賭けて」

飛鳥は光明を得たように息を呑んだ。

「は、旗印……！　そうだわ、それを奪えば交渉材料になるかもしれない！」

「はい。ですが、伝説に挑むのですから相応の資格が問われます。提示された2つのギフトゲームを乗り越え、その証を示さねばなりません。いずれも厳しい試練です。クリアにどれだけの年月がかかるか……残念ではございますが、黒ウサギたちにそれだけの時間は——」

「邪魔するぞ」

その時、ズドガアン！　と十六夜がドアを蹴り破って入室してきた。

その後から呆れた表情の日向も姿を見せる。

2人の登場に驚いた黒ウサギは声を上げた。

「いい、十六夜さん！ それに日向さんも！ 今までどこに、つて破壊せずに入れないのでございませうか貴方たちは?!」

「一応言つとくけど、俺は何もしてないからな?」

日向の言葉もウサ耳に入らず、もはや完全に壊れたドアを見て涙目でツツコム黒ウサギ。

しかし十六夜は悪びれることなく肩を竦ませた。

「だって鍵かかってたし」

「あ、なるほど！ じゃあ黒ウサギの持つてるドアノブは一体何なんですこのお馬鹿様!!!」

ブン！ と黒ウサギはドアノブを力一杯投げつける。

十六夜はヤハハと笑いながら、脇に抱えていた大風呂敷で受け止めた。

そんなやり取りを見ていた飛鳥が、声を上げて問いただす。

「2人とも、こんな大変な時に一体どこへ行っていたのよ!」

「まあ、ちよつと野暮用でな」

日向が苦笑して答える。

見れば、彼の手にも十六夜と同じく大風呂敷が握られていた。それを不思議に思つた耀が尋ねる。

「日向も十六夜も、その大風呂敷に何が入つてるの?」

「ヤハハ、ゲームの戦利品だ」

「見るか?」

2人は少し広げて飛鳥と耀に中身を見せる。

すると彼女達の表情が見る見る内に変つた。

元々大人しく表情の変化に乏しい耀でさえも、今は目を見開いて瞳を丸くしている。

「………これ、どうしたの?」

「だから戦利品だつて言つてるだろ」

「まさか、2人ともここ数日姿を見せなかつたのつて、これを取りに行つてたからなの?」

「まあな。若干骨は折れたけどな」

その言葉に飛鳥と耀は顔を見合わせると、何かを意志疎通したかの様に頷き合う。

日向と十六夜は訳の分からないままでいると、唐突に飛鳥が日向の耳を、耀が十六夜の耳を引つ張つた。

「ふふ、なるほど。だけどねえ2人とも?」

「そういう面白いことは、私たちにも伝えるべき」

「ヤハハ、そりゃ悪かった」

「次はちゃんと声をかけるから、今回は大目に見てくれないか？」

4人は悪戯っぽく笑みを交わす。

まさに問題児といった風の彼らの顔は、新しい遊びを見つけた子供のように輝いていた。

最後に日向と十六夜は、大風呂敷を黒ウサギの前に突き出し、

「つーわけでだ黒ウサギ」

「逆転の一手を持ってきたぞ？」

その言葉に、黒ウサギは信じられないといった表情で彼らを見つめる。

「まさか……あの短時間で、本当に？」

「ああ。ま、ゲームそのものよりも時間との戦いが問題だったけどな。日向が間に合うか冷や冷やしたぜ」

「それはこっちの台詞だ。何はともあれ、結果オーライだな」

そう言つて2人はからかい合う。

黒ウサギは思わず泣きそうになるのを堪えて、そんな彼らにお礼を述べた。

「ありがとう……ごさいます。これで胸を張つて“ペルセウス”に戦いを挑めます」

「礼を言われる事じゃねえさ。面白いのはここからだからな」

「十六夜の言う通りだ。だからもう、二度と自分を犠牲にしようだなんて思うなよ？」

「……はい！」

彼女はぎゅつと2つの風呂敷を抱きしめる。

中を確かめる必要などない。

黒ウサギにはもう中身が何か分かっていた。

(コミユニティに来てくれたのが皆さんで……黒ウサギは本当に良かったと思つてます)

黒ウサギは溢れそうな涙を拭き、勢い良く立ち上がる。

その瞳には何の迷いも見られない。

4人の顔を見回した黒ウサギは、高らかに宣言したのだった。

「ペルセウスに宣戦布告します。我等の同士・レティシア様を取り戻しましょう！」

——箱庭二六七四五外門

——“ペルセウス”本拠。

白亜の宮殿の門を叩いた。『ノーネーム』一同を中に迎え、謁見の間で両者は向かい合う。

「我々『ノーネーム』は——『ペルセウス』に決闘を申し込みます」

「なに？」

ルイオスの表情が途端に不満げに変わる。

てつきり交渉を呑んだものと期待していただけに、黒ウサギの返答に眉をしかめた。

黒ウサギは毅然と交渉を続ける。

「決闘の方式は『ペルセウス』の所持するゲームの中で最も高難度のモノで構いません」

「……え？ なに？ そんなつまらないことを言いに来たの？ ……はあ、もういいよお前ら。それなら予定通り、あの吸血鬼は売り払って」

——ドサツ、と黒ウサギはルイオスの前に2つの大風呂敷を広げる。

風呂敷の中からは『ゴーゴンの首』の印がある紅と蒼の2つの宝玉が転がり出た。

それを見て傍で控えていた騎士達は、眼をひん剥いて叫び声を上げる。

「ば、馬鹿な！ これは『ペルセウス』への挑戦権を示すギフト!」

「まさか名無し風情が、海魔クラウゼンとグライアイを打倒したというのか!」

それを聞いた日向と十六夜は首を竦ませて応えた。

「ああ、あの太タコか。そこそこ面白くはあったけど、あれじゃへビの方がマシだ」
 「俺は老婆たちだったからなあ。何だか老人虐待みたいで心が痛んだぞ」

その言葉を聞いたルイオスは歯噛みするが、やがて不快感を露わにして言った。

「ハツ……いいさ、相手をしてやるよ。元々このゲームは思い上がったコミュニケーションに身の程を知らせるためのもの。二度と逆らう気が無くなるぐらい徹底的に……徹底的に潰してやる」

華美な外套を翻して憤るルイオス。

それを睨み、黒ウサギは宣戦布告する。

「我々のコミュニケーションをことごとく踏みにじった無礼や暴挙の数々。最早言葉は不要でしょう。『ノーネーム』と『ペルセウス』。ギフトゲームにて決着をつけさせていただきます」

ギアスロール
 // 契約書類 // 文面

『ギフトゲーム名』 『FAIRYTALE in PERSEUS』

・ プレイヤー一覧 天道 日向

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・ “ノーネーム”ゲームマスター

ジン||ラツセル

・ “ペルセウス”ゲームマスター

ルイオス||ペルセウス

・ クリア条件

ホスト側のゲームマスターの打倒。

・ 敗北条件

プレイヤー側のゲームマスターによる

降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤーが上記の勝利条件を満たせ

なくなつた場合。

・ 舞台詳細・ルール

*ホスト側のゲームマスターは本拠・白

亜の宮殿の最奥から出てはならない。

*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。

*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、同時にゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うが、ゲームを続行する事はできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、

“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

『ペルセウス』印』

“契約書類”に承諾した直後、眩い閃光が日向たちの視界を埋め尽くした。

周囲の空間が湾曲し、次元の歪みは彼らを呑み込むようにギフトゲームの入り口へ誘う。

「……これは、宮殿の門？」

しばらくして辺りの場景が再び輪郭を取り戻すと、全員がいつの間にか宮殿の門前まで戻されていた。

しかし背後に振り返り、ここはすでにゲームの舞台であることを理解する。

白亜の宮殿は周辺ごと箱庭の世界から切り離され、未知の空域で浮遊する宮殿に変貌していた。

「ここは最早、箱庭であって箱庭でない場所なのだ。」

「姿を見られれば失格、ね。つまりペルセウスを暗殺しろってことか？」

「まあ、伝承に則るならそういうことだろうな」

目の前に佇む白亜の宮殿の全貌を見上げ、十六夜と日向がそれぞれ考察を口にする。

その横で、ジンは付け足すように指摘した。

「ですが、それならルイオスも睡眠中だということになります。流星にそこまで甘くはないと思いますが」

「YES。そのルイオスは恐らく、最奥で待ち構えているはずデス。とはいえ、まずは宮殿を攻略することが目下の指針。伝説のペルセウスとは違い、黒ウサギたちハデスのギ

フトを所持しておりません。不可視のギフトを持たない我々には、綿密な作戦が必要で
す」

「ああ、不可視のギフトなら持つてるぞ」

「へ？」

真面目な顔でゲームの筋道を説明していた黒ウサギは、日向の台詞にキョトンとする。

我に返ると、慌てて問いつめた。

「え、え？ 日向さん、今何と仰いました？」

「だから、不可視のギフトならここにあるぞと」

再度言葉にして、日向はギフトカードの中から光と共にひとつの兜を取り出した。

それは紛れもなく、以前「ペルセウス」の騎士たちが使用していたハデスのギフトそのものだった。

黒ウサギは仰天して声を上げる。

「こ、これは正しく「ハデスの兜」のレプリカです！ で、ですが、日向さんは一体どこでコレを……？」

「グライアイの試練でな。何でも彼女たちから聞いた話によると、もともとグライアイや海魔のゲームは、クリアすることでペルセウスの武具のレプリカが授けられるという

ものでもあつたらしい。まあ、ここ最近はその制度もほとんど機能してなかったみたいだけだな」

日向は右手で「ハデスの兜」を持ち上げて語る。

飛鳥を話を戻すように話題を振った。

「何にせよ、これでかなりゲームクリアが楽になったのではないかしら？ その兜を被れば、姿を消すことが出来るのでしょうか？」

「ああ。但し事情があつてな。この兜が恩恵を発揮するのは、もって30分が限度だぞうだ」

「……？ どうして？」

耀が小首を傾げて問いかける。

日向は苦笑して返答した。

「何でも、コレは失敗作らしくてな。だからギフトを発動できるのも1回のみ。その後は至つて普通の兜に戻るんだぞうだ」

「ならその効力が消えない内に、さつさと必要数の兜を揃えることが最善だな。とにかく姿を見られる前に、ゲームマスターに辿りつかねえと」

「そうね。そしてそのためには、主に3つの役割分担が必要になるわ」

飛鳥の指摘に耀が頷く。

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索敵、見えない敵を感知して撃退する役割。最後に、失格覚悟で囷と露払いをする役割」

「春日部は鼻が利く。耳も目もいい。不可視の敵は任せませ」

「なら、俺はこの兜を被って耀のサポートだな」

十六夜と日向の提案に、黒ウサギが続く。

「黒ウサギは審判としてしかゲームに参加することができません。ですからゲームマスターを倒す役割は、日向さんと十六夜さんにお願ひします」

「あら、じゃあ私は囷と露払い役なのかしら？」

むっ、と少し不満そうな声を漏らす飛鳥。

だが飛鳥のギフトがルイオスを倒すに至らないことはすでに知れていることだ。

何より彼女のギフトは、不特定多数を相手にする方がより力を発揮できる。

しかし、それが分かかっていても不満なものは不満なのだろう。

少し拗ねた口ぶりの飛鳥を日向が諭す。

「悪いな飛鳥。譲つてやりたいのは山々だが、今回の勝負は絶対に勝たなきゃならない。あの男の相手は、どう考えても俺や十六夜が適してる」

「……ふん、いいわ。今回は譲つてあげる。ただし、負けたら承知しないから」

「ああ、任せとけ」

日向は朗らかに笑って応える。

しかし黒ウサギは、険しい顔で首を振った。

「残念ですが、必ず勝てるとは限りません。油断しているうちに倒さねば、非常に厳しい戦いになると思います」

日向たちの目が一齐に黒ウサギに集中する。

飛鳥がやや緊張した面持ちで黒ウサギに問う。

「……あの外道、それほどまでに強いのか？」

「いえ、ルイオスさんご自身の力はさほど。問題は彼が所持しているギフトです。もし黒ウサギの推測が外れていなければ、彼のギフトは——」

「隷属させた元・魔王様」

「そう、元・魔王の……え？」

日向と十六夜の補足に黒ウサギは一瞬、言葉を失った。

「ま、まさか、日向さんと十六夜さんは、箱庭の星々の秘密に気づいたというのですか……？」

驚愕に目を見開く黒ウサギに、日向が頷いて推測を述べる。

「まあな。もしもペルセウスの神話どおりなら、ゴーゴンの生首がこの世界にあるはずがない。あれは戦神に献上されているはずだからな。それにも関わらず、奴らは石化の

ギフトを使っている。——星座として招かれたのが、箱庭の“ペルセウス”。ならさしずめ、ルイオスの首に下げられているのは、アルゴルの悪魔つてところだろ？　ちなみに、十六夜はいつから気づいてたんだ？」

「ま、このまえ星を見上げた時に推測して、ルイオスを見た時にほぼ確信したって感じだ。後は手が空いた時にアルゴルの星を観測して、答えを固めたつてところだな。機材は白夜叉が貸してくれたし、難なく調べることが出来たぜ」

そう言つてヤハハと愉快に笑う十六夜。

そんな彼らを前にして、黒ウサギだけがことの異常さに気がついていた。

それでも、信じがたいことのはずなのに、なぜか黒ウサギはこの2人ならばあり得るのかな？　と不思議に納得をしてしまう。

この箱庭に召喚して以来、彼らには驚かされっぱなしであると、彼女は呆れを通り越してどこか嬉しそうに笑うのだった。

「全く。御二人共、頼もしい限りでございますよ」

「ハッ！　そういう言葉は、最後までとつとくもんだぜ黒ウサギ」

「だな。それじゃま、いっちょ始めるとしますか」

黒ウサギの言葉を背に受けながら、2人は揃つて入り口の正面に立つ。

そして互いに拳を構えると、その山河を砕く一撃を同時に振り抜いた。

轟音と共に、宮殿の門が粉々に砕け散る。

彼らの挑むギフトゲームは、こうして幕を上げたのだった。

正面の階段前広場は、飛鳥の奮戦で大混戦となっていた。

真正面から挑んだ日向たちを捕らえに来た騎士たちを、飛鳥はあらかじめ「ノーネーム」の貯水池から持ち出しておいたギフト——水樹によつて阻んでいるのだ。

「ええい、小娘ひとりは何を手間取っている！」

「不可視のギフトを持つ者は残りのメンバーを探しに行け！　ここは我々が押さえるぞ！」

発見された時点で、飛鳥はすでにゲームマスターへの挑戦資格を放棄している。

彼女の役割はあくまで囷。

しかしただ逃げ回るだけでは華に欠けるし、何より敵に背を向けるなど自分の性分が許さない。

そこで飛鳥は決意した。

どうせ囷役を全うするならば、いつそ騎士たちが自分を無視できないようにしてやる

うと。

そのための方法を考えた彼女は——白亜の宮殿を破壊することにした。

「ふふ……不可視の人間を除けば、だいぶ集まってきたかしら？」

続々と詰め寄せてくる騎士たちを見渡すと、飛鳥は伸びる水樹の枝に腰をかけ、命令を下す。

「今よ！ なぎ払いなさい！」

飛鳥の言葉に支配された水樹は、瞬間圧倒的な水量で迫る騎士たちを押し流し始める。

その激流は建物の内部をことごとく満たしていき、華美な装飾や名画と共にあらゆるものを呑み込んでいく。

“ギフトを支配するためのギフト”

飛鳥の持つ“威光”はこの場において、その力を十全に發揮していた。

それでも、今はこの水樹を操るので精一杯だ。

己の才能を悟り、その力の正しい使い方を見出し出した今でも、彼女はその事実が不満だった。

ルイオスの件を見ても明らかのように、未だ格上の存在を相手取るのには、今の飛鳥では余りに無力だ。

彼女が宝物庫のギフトではなく、コミュニケーションの生命線である水樹を持ち出したのも、水樹しか彼女の命令に従わなかったからである。

プライドの高い飛鳥はそんな現状に齒噛みするも、同時に新たな決意を胸に浮かべていた。

(まあ、今はいいでしょう。コレぐらい反発してくれないと張り合いがない。これから、様々な奇跡を支配出来るようになってみせるわ)

飛鳥はフン、と息を吐きながら、迫り来る騎士たちを水樹に命令して襲わせていく。彼女の役割は道の確保と囷だ。

今はただ、その役目を全力で全うしなければならぬ。

(だから悔しいけど、日向君に十六夜君。今回は貴方たちに任せるわ。負けたら承知しないんだから)

そんな飛鳥の想いに呼応するかのように、水樹は脈打ち、その水量を増すのだった。

飛鳥が敵の大部分を引き受けている隙に、日向・十六夜・耀・ジンの4人は姿を見られないよう慎重に宮殿の奥まで進んでいく。

先頭では耀がその優れた五感を發揮して、周囲の索敵を行っていた。

「――！ 日向、あの角を曲がってすぐのところ、人の気配がする。たぶん、姿を消して待ち伏せてる」

「了解」

耀に敵の居場所を知らされた日向は、気配を消すと瞬時に移動し、指定された地点に拳を振るう。

「よっ」

「はっ!？」

待ち伏せていた不可視の騎士は、同じく“ハデスの兜”で不可視となった日向に後頭部を打たれて気絶する。

倒れると同時に兜の外れる音がすると、騎士は姿を現した。

日向は間もなく十六夜たちが近寄ってきたことを確認すると、兜を外して話しかける。

「まさにジャストポイントだったな。流石は耀だ」

「うん。索敵なら任せて」

耀は小さく笑って頷く。

十六夜は落ちた兜を拾いながら、

「よし。ならここからは俺も参戦して、3人で不可視の敵を叩くぞ。日向の兜の時間制

限もあるし、前哨戦をチマチマやってても意味がない。本命はレイオスの野郎だからな。春日部には悪いが、早いところ最低限だけ揃えて再奥に向かった方がいい」「うん、私のことは気にしなくても大丈夫」

耀はフルフルと頭を振る。

派手に動けば不可視の敵も捕らえられるだろうが、耀も失格となるだろう。

だがそんなことに拘って勝機を逃すわけにはいかない。

「悪いな、いいところ取りみたいで。これでもお嬢様や春日部にはソレなりに感謝してる」

「そうだな。今回のゲームなんて、2人がいなきや攻略出来そうになかった」

「だから気にしなくていい。埋め合わせは必ずしてもらおうから」

耀は平坦な声音で取り立てを断言する。

思わず笑いそうになった日向と十六夜だが、今はそんな場合でもない。

「それじゃあジンは見つからないよう、安全な物陰で隠れててな」

「死んでも姿を見られんなよ?」

「は、はい!」

ジンが隠れたことを確認すると、十六夜も日向と同じく不可視のギフトで姿を消す。

そして耀と共に3人で白亜の宮殿を駆け回り始めようとしたその時――

「わっ!?!」

突然、前触れもなく耀が吹き飛んで傍にあつた壁に叩きつけられた。

日向と十六夜が即座に反対方向へそれぞれ蹴りと拳を入れるが、何かに当たつた形跡はない。

周囲を警戒しつつ、日向は脳裏で思考する。

(まさか……レプリカじゃなく、本物を使っている奴がいるのか……!?)

日向の推測は正しかった。

本来であれば耀の五感で発見されているはずの敵は、これだけ接近していながらも一切の気配を感じさせない。

それ程までに完璧な隠形が可能なギフトなど、正しく本物の「ハデスの兜」ぐらいしか存在しないはずなのだ。

(これは……面倒だな。耀はもちろんだが、このままじゃ俺と十六夜も危険だ。何かのはずみで兜が取れたりでもしたら……)

耀が襲われた時、日向も十六夜も敵の気配に全く気づくことが出来なかつた。

気配はおろか初期動作すら察知できないともなれば、流星の彼らでも油断は出来ない。

「おい日向！ 春日部を連れて一旦引くぞ！」

「ああー！」

倒れた耀を拾い上げた十六夜は、一旦身を引いて体勢を立て直そうとする。

だが不可視の敵は、それを見計らっていたかのように十六夜を襲った。

姿の見えている耀を抱き上げれば、自然と十六夜の位置も把握されてしまうのだ。

巨大な鈍器らしきもので横なぎに吹き飛ばされた十六夜は、堪らずに耀を手放してしまふ。

耀は一瞬空中をさま迷うが、慌てて日向が抱き止めた。

「十六夜！ 大丈夫——ぐっ?!」

耀を抱えたまま十六夜に安否を問おうとするが、そこへ狙いすましたように敵の鈍器が日向を襲う。

わき腹を強打されるが、何とか完全に打ち込まれる前に飛び退いて衝撃を緩和した。

「十六夜！ 俺は春日部を安全な場所に避難させる！ それまで相手を頼めるか！」

「おう！ 任せとけ！」

互いに姿の見えない日向と十六夜は、声を上げて意思を疎通する。

足止めを任せた十六夜は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、

「ヤハハ！ これなら不可視も何も関係ねえだろ！」

山河を打ち砕く拳を、地面に向かって叩きつけた。

その威力は宮殿の床を放射状に割り砕き、巻き上がる土煙で耀の姿を隠す。

確かにこの状況ならば、不可視の敵も耀を見つけてくることは出来ないだろう。

「ん……日向」

「耀、大丈夫か？ 今すぐ安全な場所に――」

土煙に紛れてこの場を引こうとする日向。

しかし耀は、首を横に振るって否定した。

「待つて。私に考えがある」

「……本当か？」

「うん。私が合図したら、その場所に攻撃して」

日向は一瞬、耀の提案を受け入れるべきが逡巡する。

しかし真つ直ぐに自分を見つめる耀を見て、日向も覚悟を決めた。

「分かった。信じるぞ」

「うん。……ありがとう」

日向に下ろされた耀は、そこでそつと目を閉じた。

それと同時に、日向の耳朵に微かな耳鳴りのようなものが聞こえてくる。

耀には劣るものの、常人より遙かに高性能な五感を持つ日向だからこそ感じるレベルの微弱な音波だ。

そしてその音波の発生源こそ、他でもない耀であった。

彼女は口元から音波を発し、その反響を利用して相手の位置を探っているのだ。

やがて視界が晴れ、耀の姿を捉えた不可視の騎士は、それに気づくことなく勝負に出た。

左方向から耀に目掛けて突進を仕掛ける。

瞬間、耀が声を張り上げた。

「左方向、今すぐ!」

彼女の言葉に応えた日向は、言われた地点にすかさず拳を叩き込む。

その一撃は今度こそ相手を捉え、鎧の碎かれる音と共に虚空から苦悶の音が漏れた。

数本の柱を砕きながら吹き飛ばされた敵を見て、日向は咄嗟に叫ぶ。

「十六夜!」

「分かってる!」

十六夜は壁に衝突した不可視の騎士に飛びつくと、すぐさま問答無用に兜を剥ぎ取った。

見れば、姿を現した騎士はレイオスの側近にいた男だった。

「へえ? これだけの一撃を受けて、よく気を失わなかったな」

「……ふん。我らの鎧を甘くみるな。しかし無鉄砲な一撃で負けたのならともかく、ギ

フトを真正面から打ち破られての敗北だ。——見事。お前たちには、ルイオス様に挑むだけの資格がある」

膝を突き、倒れる側近の騎士。

これで手に入れた不可視のギフトは3つ。

ようやくルイオスに挑戦する準備が整った。

耀と日向はすぐさま十六夜の元に駆け寄る。

「しっかし、春日部もよくソナー探知なんて思いついたな」

「ああ。耀のおかげで倒せたな」

「えっへん」

日向と十六夜の誉め言葉に胸を張る耀。

そこへ神妙な面持ちのジンが告げた。

「ともあれ、これでルイオスに挑戦する目処が立ちました。日向さん、十六夜さん、準備

はいいですか？」

「ハッ！ 愚問だぜ御チビ。とつとと行ってケリをつけるぞ」

「ああ。きつと黒ウサギも待ってるだろうしな」

「うん。3人とも頑張ってる」

こうして日向たちは不可視のギフトを手に、白亜の宮殿の再奥を目指すのだった。

第11話 星降る夜に

——白亜の宮殿・最上階。

階段を上ると、そこには満天の星空が広がっていた。

白亜の宮殿の最奥、最上階には天井がなく、さながら闘技場のような円形の舞台になっっている。

それまで不安に苛まれながらも最奥で待っていた黒ウサギは、現れた3人の姿を見た途端慌てて傍まで駆け寄った。

「日向さん、十六夜さん、ジン坊ちゃん！」

「よ、待たせたな黒ウサギ」

「ヤハハ。あんな変態野郎と一緒に居たんじゃ、さぞかし息も詰まったろ？」

「ええ、まあ……って何を言わせるんですか！ 本当に心配してたんですからね!」

「ま、まあまあ。黒ウサギも落ち着いて」

ムツキヤー！ と両手を上げて猛抗議する黒ウサギを、ジンが苦笑を浮かべて落ち着かせる。

十六夜はそんな黒ウサギを放置すると、円形の舞台を見回した。

「それで？ あの変態野郎はどこだ？」

「口を慎め、この『名無し』が」

声は頭上から聞こえてきた。

見上げれば、宙に浮かぶレイオスが侮蔑の眼差しで日向たちを見下ろしていた。

「ふん。たかが『名無し』風情の足止めも満足に出来ないとはね。ホントに無能な奴ら。今回の件で纏めて粛正しないと」

決して見間違いないではない。

その両足には、確かに翼があった。

膝まで覆うロングブーツより生まれる、光り輝く対の翼が。

「まあでも、これでこのコミュニティが誰のおかげで存続できているのか分かっただろうね。自分たちの無能っぷりを省みてもらうには、いい切っ掛けだったかな」

バサツ、と翼をはためかせる。

その一度の羽ばたきでレイオスは風を追い抜くと、落下速度の数十倍の勢いで日向たちの前に降り立った。

「なにはともあれ、ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手を楽しみましょう。……あれ、この台詞を言うのって初めてかも」

それは全て騎士たちが優秀だったからだ。

今回のように準備が整わない段階での突然の決闘でなければ、ここまで容易に階下を突破することは出来なかつただろう。

「まあ、不意を打つての挑戦だったんだ。騎士たちも良くやった方さ。それに何より、俺たちには最初からコレがあつたからな」

そう言つて日向は右手に持つていた物をルイオスに向かつて投げつけた。

ルイオスはそれを受け止めると、いぶかしげに手元へ視線を落とす。

「コレは……『ハデスの兜』のレプリカだ?! どうしてお前らが持つている!?!」

「グライアイたちから預かつてきたのさ。その兜を、お前に渡して欲しいってな」

「何だと? クソツ、あの老婆どもめ。よくも勝手に余計な真似を……!」

配下の行動に怒りを表すルイオスだったが、そこに日向が声をかけた。

「アンタ、その兜には見覚えがあるじゃないか?」

「……は? 当然だろ。この兜は僕らコミュニティを代表するギフトだ。見覚えのない方が可笑しいだろう」

「グライアイたちから聞いた話によるとな、どうもその兜は失敗作らしいんだ」

「なに?」

「もう一度聞く。その兜に、見覚えはないか?」

日向は真剣な声音で再び問う。

名無し風情が何を偉そうにと憤りかけたルイオスだが、ふと再度手にした兜を見て、そこで何かに気がついた。

「うん？ この側面の装飾の歪みは……」

過去の記憶を掘り返し、ルイオスはハツとする。

日向は頷いて話を続けた。

「どうやら、思い出したみたいだな」

「この兜は、まさか……」

「そうだ。それは、アンタが造った兜だ」

日向の言葉に、ルイオスは衝撃を受けたように瞳を見開く。

「な、に……?」

「当時ペルセウスの跡継ぎだったアンタは、次期頭首として先代からコミュニティを代表するギフト——その“ハデスの兜”のレプリカを製作するよう言い渡された。それでも最初は満足に出来ず、未熟な腕ながらも何とか完成させたのが……その兜だ」

ルイオスの脳裏に当時の記憶が蘇る。

確かにコレは自分がまだ幼い頃、“ペルセウス”の頭首となる以前に初めて製作したものだ。

狼狽するルイオスを見つめ、日向は更に話を続ける。

「しかしその兜は、完全なレプリカには程遠い失敗作だった。恩恵を完全に付与させることが出来ず、一度でも使用すればただの兜に戻ってしまう欠陥品。だが曲がりなりに、それは自分が初めて自らの手で完成させた作品だ。処分や解体してしまうのは、アンタも気が咎めた。だからこそアンタは、それをグライアイたちにプレゼントすることにしたんだろ？ 当時彼女たちは、アンタの遊び相手でもあったそうだからな」

「……フン。あの老婆どもめ、余計なことをベラベラと。それで？ お前は僕に何が言いたいの？」

「グライアイたちからの伝言だ。『これ以上、誇りに背くような真似は止めて欲しい。昔の優しかった心を取り戻して欲しい』——ってな」

「アイツらが、僕にそんなことを……？」

「ああ」

「そうだったのか……」

日向の話を聞いて、ルイオスは顔を伏せる。

俯くその表情は、まるでこれまでの行いを悔やんでいるかのように歪んでいた。

同じく話を聞いて涙ぐんでいた黒ウサギは、そこでルイオスに声をかけた。

「グライアイさんたちの言う通りなのです！ こんな無益な争いはもう止めて、互いに

手を取り合いました！　そうすればきつと平和な解決方法が——」
「——ぷっ、くくく、あつはははははは!!」

唐突に、ルイオスは笑い出した。

腹を抱えて哄笑を上げる彼に、十六夜は厳しい視線で問いかける。

「何がそんなに可笑しいんだ？」

「くくく、いやあ参ったね。まさかアイツらがそんな勘違いをしてるとは思わなくてさ」
「か、勘違い？」

ジンは思わず小首を傾げる。

ひとしきり笑ったルイオスは、一転して馬鹿にするような笑みを浮かべ、

「ここだけの話、先代は怒らせると恐くてね。アイツらに兜をやったのは、体のいい証拠隠滅だったのさ」

「なっ……!!」

「それに遊び相手だった？　ああ、確かに遊んでたよ。アイツってば醜い上に、目も歯も3人で1つを共有しているような哀れな奴らだったからさ。からかうのが楽しくてね」
「な、何ということ……!!」

ルイオスの発言に、黒ウサギは怒りでウサ耳を逆立たせた。

しかしルイオスは嘲笑うかのように兜を見て、

「こんなもの、とつくの昔に存在自体を忘れてたよ。返してくれたんなら、もう要らないし捨ててもいいよね？」

カランと、レイオスの手から兜が落ちた。

そこでレイオスは再び翼を羽ばたかせ、日向たちの頭上に飛び上がる。

「さあ、無駄話は終わりだ。ゲームマスターとして、お前らに引導を渡してやる！」

傲慢な笑みで決戦の開幕を告げるレイオスを見上げ、日向は最後に呟いた。

「……グライアイたちは、こうも言ってたよ。もしもアンタの目が、それでも覚めないようならその時は……』ぶっ飛ばして、その曲がった性根を叩き直してやってくれ——つてさ」

「ハッ！ やれるものならやってみる！」

レイオスの翼がもう一度羽ばたく。

彼は『ゴーゴンの首』の紋が入ったギフトカードを取り出すと、光と共に燃える炎の弓を取り出した。

「……炎の弓？ ペルセウスの武器で戦うつもりはない、ということでしょうか？」

「当然。空が飛べるのに、なんで同じ土俵で戦わなきゃいけないのさ」

小馬鹿にするように天へと舞い上がったレイオスは、首にかかったチョーカーを外し、付属している装飾を掲げて答える。

「メインで戦うのは僕じゃない。僕はゲームマスターだ。僕の敗北はそのまま『ペルセウス』の敗北になる。そこまでリスクを負うような決闘じゃないだろ？」

「っ……！」

黒ウサギは慢心しないルイオスに焦りを感じ始めていた。

もしも彼女の予想通りならば、ルイオスの持つギフトはギリシャ神話の神々に匹敵するほどの凶悪なギフトだろう。

まともに戦ったところで勝てる可能性は低く、ルイオスが油断している間に短期決戦を仕掛けるのが最善手であると考えていた。

しかし曲がりになりも、彼はコミュニケーション『ペルセウス』を率いるリーダーなのだ。たとえ相手が格下であっても、無用な危険を犯しはしない。

「貴様らに見せてやろう。伝承に語り継がれる悪魔の力を！」

ルイオスの掲げたギフトが光り始める。

星の輝きのようにも見間違えう光の波は、強弱を付けながらひとつひとつ自身の封印を解いていく。

日向と十六夜はとっさに構えた。

ジンと黒ウサギを背後に庇いながら、いつでも戦えるよう臨戦態勢をとる。

やがて輝きが一層強くなり、ルイオスは獰猛に叫んだ。

「目覚めろ——『アルゴールの魔王』!」

瞬間、光は褐色に染まり、日向たちの視界を染めていく。

すると白亜の宮殿に共鳴するかのような、甲高い女の声が響き渡った。

「ra……Ra、GEEEEEEYAAAAAaaaaaa!!!」

それは最早、人の言語野で理解できる叫びではない。

冒頭こそ謳うような声であつたが、それさえも中枢を狂わせるほどの不協和音だ。

現れた女は体中に拘束と捕縛用のベルトを巻いており、女性とは思えない乱れた灰色の髪を逆立たせていた。

やがて両腕を拘束するベルトを引き千切ると、彼女は半身を反らせて更なる絶叫を上げる。

黒ウサギは堪らずウサ耳を塞いだ。

「ra、GYAAAAAaaaaaa!!!」

「な、なんて絶叫を」

「——! 避ける! 黒ウサギ!」

「つたく、よそ見してんじやねえ!」

えつ、と硬直する黒ウサギ。

日向は黒ウサギを、十六夜はジンを抱きかかえると、すぐさまその場から飛び退いた。直後、空から巨大な岩が雪崩のように落下してくる。

二度三度、と続く落石を避ける日向達を見て、ルイオスは高らかに嘲った。

「いやあ。飛べない人間って不便だよねえ。落下してくる雲も避けられないんだから」
 「く、雲ですって……!?!」

ハッと周囲に眼をやる黒ウサギ。

雲が落下してきているのは、なにもこの闘技場の上だけではない。

「アルゴールの魔王」と呼ばれた女の力は、このギフトゲームに用意された世界全てに対して石化の光を放ったのだ。

瞬時に世界を満たすほどの光を放出した女の名を、黒ウサギは戦慄と共に口にした。

「星霊・アルゴール……！ 白夜叉様と同じく、星霊の悪魔……！」

——「アルゴル」とはアラビア語で「ラス・アル・グル」を語源とする、
 「悪魔の頭」という意味を持つ星のことだ。

同時にペルセウス座で、「ゴーゴンの首」に位置する恒星でもある。

ゴーゴンの魔力である石化を備えているのはそういう経緯があるのだろう。

ひとつの星の名を背負う大悪魔。

箱庭最強種の一角——“星霊”がペルセウスの切り札だった。

「今頃は君らのお仲間も部下も全員石になっているだろうさ。ま、無能にはいい体罰かな」

不敵に笑うルイオス。

なんの防御もしていない日向たちが無事なのは、単に彼の遊び心によるものだろう。

挑発とも取れるその情けに、日向と十六夜は静かに闘志を漲らせた。

「……下がってろ御チビ。守ってやる余裕はなさそうだ」

「すいません……本当に、何も出来ず」

「ま、気にするなって。それより、例の件を覚えてるか？」

ジンは慌てて頷く。

日向の言う例の件とは、彼らが“打倒魔王”を掲げたコミュニティとして活動をしていく計画のことだ。

当初の思惑ではレティシアを取り戻すことで魔王に対抗しようと考えていたジンであつたが、彼女は今回の件で既に多くのギフトを失っており、その希望も水泡に帰してしまつた。

ならば今の“ノーネーム”に残る戦力は、最早彼らがこの世界に召喚した日向たちのみ。

彼らに賭けるべきか、賭けざるべきか——ジンは深く考え込むと、やがて決心したように顔を上げた。

「日向さん、十六夜さん。僕らにはまだ貴方たちがいます。貴方たちが本当に魔王に打ち勝てる人材だというなら——この舞台で、僕たちにそれを証明して下さい」

今こそ、この2人の真価を見極める。

ジンの真つ直ぐな瞳と返事に、日向と十六夜は笑って応えた。

「OK。よく見てな御チビ」

「ああ。それと黒ウサギもな」

「へっ?」

突然の呼び掛けに、黒ウサギは思わず気の抜けた返事をする。

そんな彼女に向けて、日向は宣言した。

「いつか、全てを取り戻せたら一緒に笑おう——あの言葉が嘘じゃないってことを、証明してやるからさ」

「あ……」

顔だけを後ろに振り向かせ、男らしく笑う日向の姿を見た黒ウサギは、思わず頬を紅く染める。

それでも、やがてスツと表情を引き締めると、真つ直ぐに日向を見つめて言葉を返し

た。

「……YES。もしも破ったら、承知しないのでございませうよ。」

「ハハッ……おう！」

そして、日向と十六夜は前に出る。

「さ、それじゃ準備はいいかよゲームマスター」

「二応、泣いて謝るなら今のうちだぞ？」

「ハッ。名無し風情が、精々後悔するがいい！」

「ra、GYAAAAAaaaaaa!!!」

輝く翼と、傷だらけの灰翼が舞う。

ルイオスはアルゴールよりさらに上空に飛び、陰に隠れながら炎の弓を引く。

蛇のように蛇行する軌跡の炎の矢を、十六夜は一喝することで迎え撃った。

「喝ッ!!」

たったそれだけで、炎の矢は消し飛ばされる。

データラメな肺活量である。

「チツ、うちのクラーケンを打ち倒すだけの實力はあるってことか！」

「俺は倒してないけどな！」

ルイオスが十六夜に気を取られた一瞬の隙をついて、日向がアルゴールに肉迫する。

「くつ、迎え撃て！ アルゴール！」

「R a A A a a a !!」

甲高い叫び声を上げながら、自身の豪腕を振り下ろすアルゴール。

日向はその拳を真正面から受け止めると、そのまま腕を絡めて肩に回した。

「ハッ、馬鹿め！ アルゴールの巨体を投げ飛ばせるわけないだろうが！」

「そいつは、どうか……ッ！」

日向の無謀に嘲笑を浮かべるルイオスだったが、次第に表情を驚愕に染める。

なんと日向が重心を前に傾ける毎に、アルゴールの体が徐々に浮き上がっていくではないか。

日向は最後に一歩足を踏み出すと、渾身の力を込めて遂にアルゴールを投げ飛ばした。

「ウオラアッ！ 行つたぞ十六夜！」

日向が正面に向かって叫ぶ。

投げ飛ばされたアルゴールの行き着く先には、獯猛な笑みを浮かべた十六夜が待ち構えていた。

「おいおい日向、お前やっぱ面白いな！ ちょっとマジで勝負したくなってきたぞ！」

「そういうことは全部終わってから言え！」

「ま、それもそうだなっ……とー！」

「Ra!?!」

ヤハハハ！ と哄笑を上げる十六夜はそんな日向とのやり取りもさておき、向かってくるアルゴールを全力で蹴り上げた。

その尋常ならざる脚力にアルゴールの体は浮き上がり、大きく裂けた口からは大量の息が吐き出される。

十六夜は息つく暇も無くアルゴールの上方に跳躍すると、そのまま体を一回転させ、彼女の後頭部に踵落としを叩き込んだ。

「Ra……GYAAAAAaaaaaa!!」

地面に激突したアルゴールは巨大なクレーターを形成し、堪らずに苦悶の絶叫を上げる。

空中で体勢を立て直した十六夜は倒れ伏しているアルゴールの背に降り立つと、そのまま幾重にも彼女の背中を踏みつけた。

「ハハ、どうした元・魔王様！ さっきのは本物の悲鳴みたいだったぜ!?!」

「LaAGYAAAAaaaa!?!」

十六夜が放つ攻撃は一撃ごとに闘技場全体に亀裂を走らせ、白亜の宮殿を砕いていく。

それを見て焦ったルイオスは咄嗟に炎の弓を仕舞い込むと、代わりにギフトカードから「星霊殺し」の名を持つギフト・ハルパーを取り出した。

「クソ！ 図に乗るな！」

「アンタがな」

光る翼を飛ばたかせ、未だアルゴールを捻じ伏せている十六夜に向かって突撃しようとしたルイオスは、突然の言葉にギョツとする。

慌てて周囲を見渡すと、日向が闘技場の壁の足場を踏み砕いて跳躍し、一気にルイオスの眼前へ躍り出た。

「なっ!?!」

「生憎といくら空中にいるからって、届かないわけじゃないんだよ！」

反射的にハルパーを構え防御の姿勢を取ったルイオスに、日向は問答無用とばかりに山河を砕く拳を振り下ろす。

辛うじて致命傷は避けられたものの、吹き飛ばされたルイオスは大気を突き抜けながら落下していき、地面に組伏せられたままのアルゴールに激突した。

第三宇宙速度に迫る速度で背後を打ち付けられたルイオスは盛大な嘔吐感を覚え、その下敷きとなったアルゴールもまた苦悶の絶叫を上げる。

タイミンク良くアルゴールの背から飛び退いていた十六夜は、同じく地面に降り立つ

た日向と並んで言い放つ。

「おいおい、まさかこの程度ってことはないだろうな!? ええ? 元・魔王様!」

「何か奥の手があるんだったら、今の内に出しておくことをオススメするぞ?」

余裕の態度を見せる2人に対して、何とか立ち上がったルイオスは狼狽して叫ぶ。

「き……貴様ら、本当に人間か!? 一体どんなギフトを持っている!」

無理もない疑問だった。

“星霊”を力で捻じ伏せ、天駆けるヘルメスの靴より速く走る人間など存在しない。

その疑問に答えようと、日向と十六夜は懐からギフトカードを取り出す。

「ギフトネーム・コード・アンソウ“正体不明”」

「同じくギフトネーム・コード・エラ“認識不能”——って、これじゃ分からないか」

苦笑する日向たちを見て、ジンが慌てて叫んだ。

「い、今のうちにトドメを! 石化のギフトを使わせては駄目です!」

星霊アルゴールの本領は身体能力ではない。

世界を石化させる程の強大な呪いの光こそ、彼女の真の力なのだ。

だが自分の力で捻じ伏せたいルイオスは、更に正面对決を選んだ。

「アルゴール! 宮殿の悪魔化を許可する! 奴らを殺せ!」

「R a A A a a a a!! L a A A A A!!」

謳うような不協和音が再び世界に響く。

途端に白亜の宮殿は黒く染まり、壁は生き物のように脈を打ち始めた。

宮殿全域にまで広がった黒い染みから、蛇の形を模した石柱が数多に生まれ、日向と十六夜に襲いかかる。

すでに周りが見えていないのか、ルイオスは狂気じみた形相で叫んだ。

「もう生きて帰さないッ！ この宮殿はアルゴールの力で生まれた新たな怪物だッ！

貴様らにはもはや足場ひとつ許されていないッ！ 貴様らの相手は魔王とこの宮殿の怪物そのものッ！ このギフトゲームの舞台に、貴様らの逃げ場は無いものと知れッ

!!!

ルイオスの絶叫と、魔王の謳う様な不協和音。

それに合わせて変幻する魔王は白亜の外壁を、柱を、蛇蝎の如き姿に変えて襲い掛かり、日向と十六夜の身体を覆う。

千の蛇に呑み込まれた2人は、その中心でポツリと眩いた。

「………なら、この宮殿ごと壊せばいいんだな？」

「え？」

にべもなく応えた2人に、ジンと黒ウサギは盛大に嫌な予感がした。

日向は拳を、十六夜は足を無造作に持ち上げ、黒く染まった魔宮に向かって振り下ろ

す。

それだけで千の蛇蝎は一斉に砕け、彼らの周囲から霧散した。

凄まじい衝撃は周囲の大気をも震撼させる。

直後に宮殿全域が揺れ、闘技場が崩壊し、瓦礫は4階を巻き込んで3階にまで落下した。

「わ、わわー！」

「ジン坊ちゃんー！」

崩壊に巻き込まれたジンに黒ウサギが叫ぶ。

彼女は審判としてしかゲームに参加出来なかったため、プレイヤーに直接手を貸すことが出来ない。

このままでは彼が危ないと焦った黒ウサギだったが、そこにひとつの人影が現れ、ジンを抱えて安全圏まで移動した。

「ふう、悪い悪い。ちよつとばかしやり過ぎた」

「――！ 日向さん！」

ジンを抱えた日向を見て、黒ウサギはほっと安堵する。

一方で翼を持つルイオス達は上空に逃げていたが、あまりの惨状に息を呑んでいた。

「……馬鹿な……どういふことなんだ!?! 奴らの拳は、山河を打ち砕く程の力があるの

か!？」

上空で怒りとも恐怖ともつかない叫びを上げるルイオス。

残った闘技場の足場から見上げる十六夜は、やや不機嫌そうに声をかけた。

「おいゲームマスター。まさかこれでネタ切れって訳じゃないよな？」

「……………」

ルイオスは屈辱で顔を歪ませる。

彼にとって本拠での正式なゲームは、これが初めてだった。

それがまさかここまで一方的に押されるなど、考えてもみなかつたのだろう。

しばし悔しそうに表情を歪めていたルイオスは——スツと真顔に戻る。

そして極め付けに凶悪な笑顔を浮かべ、

「もういい。終わらせろ、アルゴール」

石化のギフトを解放した。

呼応したアルゴールの口元に光が集い始める。

それと同時に、十六夜の隣ヘジンを救出した日向が戻って来た。

「さて、と。どうやら向こうも、そろそろ後がないみたいだな」

「……………カツ。ゲームマスターが、今さら狡いことしてんじやねえよ」

不満そうに吐き捨てる十六夜。

それを聞いたルイオスは、知ったことかとばかりに叫んだ。

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！ これで終わりだ！ 全て終わりだ！ 石化の光に吞まれて死に絶えるがいい！」

刹那、光がより一層輝きを増す。

ルイオスの言葉に呼応した星霊・アルゴールは謳うような不協和音と共に、遂に世界の全てを呑み込む褐色の光を放った。

これこそアルゴールを魔王に至らしめた根幹。

天地に至る全てを褐色の光で包み込み、灰色の星へと変えていく星霊の力だ。

やがて褐色の光に包まれた日向と十六夜は、真正面からその瞳を捉え――

「――……しやらくせえ!!!」

褐色の光を殴り飛ばし、踏み潰した。

……比喩は無い。

他に表現のしようもない。

アルゴールの放つ褐色の光は、天道日向の拳によって無効化され、逆廻十六夜の脚部によって跡形もなく碎け散った。

「ば、馬鹿な!？」

ルイオスが叫ぶ。

叫びたくもなるだろう。

階下から戦況を見守っていたジンと黒ウサギでさえ、驚愕の叫び声を上げていたのだから。

「……せ、『星霊』のギフトを無効化し、破壊した?」

「あ、あり得ません! あれだけの身体能力を持ちながら、ギフトを無効化、あるいは破壊するなんて!」

白夜叉が「ありえない」と結論付けた理由。

その2つの恩恵は、絶対に相反するギフトのはずなのだ。

この神々の箱庭において、『恩恵』を無効化するものなどさして珍しくは無い。

だがそれは、武具などの形で肉体と別に顕現している物に限る。

日向と十六夜は他に『恩恵』を持っていない。

それはギフトカードを見ても明らかだ。

なのに天地を砕く恩恵と、恩恵を無効化、あるいは砕く力が両立していることになってしまう。

だがそんな魂は、絶対にあり得ないはずなのだ。

「さあ、続けようぜゲームマスター」

「『星霊』の力は、まだまだそんなものじゃないんだろ?」

余裕の素振りですら挑発する十六夜と日向。

しかしルイオスの戦意はほとんど涸れていた。

“箱庭の貴族”はおろか、“白き夜の魔王”でさえ知らない出所不明・効果不明・名称不明と三拍子揃った、正真正銘のイレギュラー。

奇跡を身に宿しながら、奇跡を無効化、あるいは破壊する矛盾したギフト。

ルイオスはいえぬ存在を前に呆然としていた。

そこに黒ウサギがため息混じりに割って入る。

「残念ですが、これ以上のものは出てこないと思いますよ？」

「何？」

「どうしてだ？」

「アルゴールが拘束具に繋がれて現れた時点で察するべきでした。……ルイオス様は、星霊を支配するには未熟すぎるのです」

「っ!？」

ルイオスの瞳に灼熱の憤怒が宿る。

射殺さんばかりの眼光を放つルイオスだが……否定する声は上がらなかつた。

黒ウサギの言葉が真実だからだろう。

だがこの惨状を誰が予測できた。

数多のギフトで身を固め、さらには世界を石化出来るほど凶悪な星霊を抱えたルイオスが「名無し」風情に負けるなど、誰にも予想できまい。

「ま、所詮は七光りと元・魔王様。長所が破られれば打つ手なしってことか」

日向は拍子抜けしたように肩を竦める。

勝敗が決した瞬間だった。

黒ウサギはゲームの終了を宣言しようとするが——そこでふと、十六夜が思い出したように口を開いた。

「ああ、そうだ。もしもこのままゲームで負けたら……お前たちの旗印。どうなるか分かっているだろうな？」

「な、何？」

不意をつかれたように声を上げるルイオス。

それもそうだろう。

彼らの目的は旗印ではなく、レティシアではなかったのか。

「十六夜？」

十六夜の真意が分からずに、日向も隣で疑問の目を向ける。

しかし十六夜は、軽薄な笑みで言葉が続けた。

「そんなのは後でも出来るだろ？ そんなことより、旗印を盾にして即座にもう一度

ゲームを申し込む。——そうだなあ。次はお前たちの名前を戴こうか？」

ルイオスの顔から一気に血の気が引いた。

そこでようやく十六夜の言葉の意図に気づいた日向は、やれやれと肩を竦めて苦笑する。

そしてつくづく意地の悪い奴だな——と、改めて逆廻十六夜という人間の在り方を理解した。

十六夜は一片の慈悲もなく、凶悪な笑みのまま更にルイオスを責め立てる。

「その2つを手に入れた後『ベルセウス』が箱庭で活動できないように名も、旗印も、徹底的に貶め続けてやる。たとえお前たちが怒ろうが泣こうが喚こうが、コミュニティの存続そのものが出来ないぐらい徹底的に。徹底的にだ。……まあ、それでも必死に継りついちまうのがコミュニティってものらしいけど？ だからこそ貶めがいがあるってもんだよな？」

「や、やめろ……!」

ルイオスは今になってようやく気が付く。

自分たちのコミュニティは今まさに、崩壊の危機に立っているのだと。

「そうか。嫌か。——ならもう方法は1つしかないよな？」

一転して凶悪さを消し、今度はにこやかに笑う十六夜。

指先で誘うようにルイオスを挑発し、

「来いよ、ペルセウス。命懸けで——俺を楽しませろ」

獰猛な快樂主義者が、両手を広げてゲームの続行を促す。

彼はまだ遊び足らなかつたのだ。

獅子に狙われた子鹿のようなルイオスに、日向は心の中で合掌する。

自ら招いた組織の危機に直面したルイオスは、覚悟を決めて叫んだ。

「負けない、負けられない、負けてたまるか!! 奴らを倒すぞ、アルゴオオオオオ!!」

「RAGGAAaaaaa!!」

輝く翼と灰色の翼が羽ばたく。

コミュニケーションのため、敗北覚悟で2人は駆けるのだった。

それから間もなくして。

その後果敢に十六夜へと勝負を挑んだルイオスだったが、やはりその地力を埋めることは出来ず、完膚なきまでに叩きのめされて、地面の上に倒れていた。

「クソツ、クソツ……この僕が、こんな『名無し』共に……」

呪詛のように暴言を吐き出すルイオスのそばに、ふと日向が歩み寄った。

その手にはルイオスが投げ捨てた、すでに恩恵を失った「ハデスの兜」のレプリカがあった。

ルイオスは倒れたまま日向を見上げ、舌打ちした後で悪態をつく。

「……何だよ。何僕を見下してんだ」

「……グライアイたちは、最後にこう言ってたよ。『たまには、また顔を見せに来て欲しい。私たちはルイ坊のことを、本当の孫のように思っているから』——だってさ」

「……フン」

日向はそれだけ告げると、ルイオスの頭の横に兜を置いて去って行った。

しんと、静まり返る闘技場。

ルイオスは一度だけ兜を見つめると、頭上に輝く満天の星空を見上げ、

「……クソ。あの孫好きどもめ」

——ポツリと、そう呟いたのだった。

——その後、〃ノーネーム〃の本拠にて。

「「じゃあこれからヨロシク、メイドさん」」

「え？」

「え？」

「……………え？」

十六夜、飛鳥、耀の口を揃えての宣言に、黒ウサギやジンはもちろんのこと、よくやく石化を解かれ目を覚ましたレティシアも、思わず言葉を失い固まった。

「ははは……」

そんな彼らの直ぐかたわらで、日向は気の毒そうに苦笑する。

「『え？』じゃないわよ。だって今回のゲームで活躍したのって、私たちだけじゃない？

貴方たちは本当にくっ付いてきたただけだったもの」

「うん。私なんて力いっぱい殴られたし。あと石になったし」

「つーかそもそも挑戦権を持ってきたのは俺と日向だろ。所有権は俺たちで等分、2：

2：3：3でもう話は付いた！」

「俺は参加した覚えはないんだな」

堂々と意味不明な根拠を基に持論の正当性を説いていく問題児たち。

「い、一体何を言っちゃってんでございますかこの人たち!？」

黒ウサギは完全に混乱していた。

ついでに言えばジンは混乱していた。

ただひとり、当事者であるレティシアだけが冷静だった。

「んっ……ふ、む。そうだな。今回の件で、私は皆に恩義を感じている。コミュニティに帰れたことに、この上なく感動している。だが親しき仲にも礼儀あり、コミュニティの同士にもそれを忘れてはならない。君たちが家政婦をしろというのなら、喜んで引き受けようじゃないか」

「レ、レテイシア様!?!」

黒ウサギは今までにないくらい焦っていた。

まさか尊敬していた先輩をメイドとして扱わなければならいとは……と困惑している内に、飛鳥が嬉々として服を用意し始める。

「私、ずっと金髪の使用人に憧れていたのよ。私の家の使用人ったらみんな華も無く可愛げも無い人たちばかりだったんだもの。これからよろしく、レテイシア」

「よろしく……いや、主従なのだから『よろしくお願ひします』のほうがいいかな?」

「使い勝手がいいのを使えばいいよ」

「そ、そうか。……いや、そうですか? んん、そうでございますか?」

「黒ウサギの真似はやめとけ」

ヤハハと笑う十六夜。

意外に和やかな雰囲気を見て肩を落とした黒ウサギは、ダメ元でこの場にいる最後の問題児に泣きついた。

「日向さくん」

「まあ、本人が納得してるならいいんじゃないか？ それに……」

「そ、それに？」

「何だかんだで俺も、レティシアのメイド姿には結構興味があるからさ」

その無慈悲な言葉に、黒ウサギはガツクリと肩を落としたのだった。

——それから3日後の夜。

子供たちを含めた「ノーネーム」の面々は、水樹の貯水池付近に集まっていた。

その数、総勢127人とプラス一匹。

数字だけを見れば、中堅以上のコミュニケーションと呼んでも差し支えはないだろう。

黒ウサギはそんな彼らの前に立つと、愛らしい満面の笑みで宣言した。

「えーそれでは！ これより新たな同士を迎えた、「ノーネーム」の歓迎会を始めるのですよ♪」

ワアツと子供たちから歓声上がる。

本拠の館から運んだテーブルの上には、本当にささやかながら料理が並べられていた。

子供だらけでいささか賑やか過ぎる歓迎会ではあるものの、日向たちも悪い気はしていないかった。

果実水を注いだグラスを手に持ちながら、飛鳥はふと気にしたことを口にする。

「ふふ、こういう騒がしい歓迎会も悪くはないわね。だけど、どうして屋外での開催なのかしら？」

「あ、それは私も思った」

「黒ウサギなりに精一杯の意匠を、つてところじゃねえか？」

「はは、そうかもな。聞いた話だと、コミュニティの財政は今のところかなり厳しいらしい。だから豪華な食事や演出なんかは無理でも、せめて会場だけは華々しくしよう……なんて考えたのかもしれないな」

日向の言っていることは事実である。

現状、〃ノーネーム〃の懐事情は想像以上に悪い。

あと数日もすれば金蔵が底を尽くすほどだ。

これから本格的に彼らが活動へ乗り出したとしても、1000人を超える子供たちを支えるのは難しいかもしれない。

ましてやその中で魔王と戦い、なおかつ仲間の救出まで行わなければならないのだ。

こうして敷地内でワイワイと騒ぎ、お腹一杯に飲み食いするのも、実は贅沢に他なら

ない。

飛鳥自身もそのような惨状は聞いたので、黒ウサギの気遣いに苦笑しながらため息を吐いた。

「無理はしなくていいと言っておいたのに……馬鹿な子ね」

「そうだね」

耀も苦笑を浮かべて返す。

「そうして次第に歓迎会もたけなわになると、黒ウサギが大きな声で皆に注目を促した。

「さてさて、ここに皆さんお待ちかね！ 本日一番のビッグイベントが始まります！ 全員、箱庭の天幕に注目してください！」

黒ウサギの言葉に従い、日向たちを含めたコミュニティの全員が箱庭の天幕に目を向ける。

その日の夜も空には満天の星々が、まるで宝石箱の中身を散りばめたように燦然と輝きを放っていた。

覚めるような美しさの広がる夜空を見上げ、誰も彼もがしばし心を奪われている頃。

——異変が起きたのは、その直後だった。

「……あつ」

ふと、誰かが呟いた。

最初に一条の星が夜空を流れ、それからほどなくして、多くの星々が連続して流れた。すぐに全員が流星群だと気づき、思い思いに歓声を上げる。

黒ウサギは日向たちや子供たちへ伝えるような口調で語った。

「この流星群を引き起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士、異世界からの御四人が、この景色のキツカケを作ったのです」

「え？」

子供たちの歓声の裏で、日向たちが驚いたような顔をする。

黒ウサギは構わず話を続けた。

「箱庭の世界は天動説のように、全ての法則がここ、箱庭の都市を中心に回っておりま
す。先日同士が打ち倒した『ペルセウス』のコミュニティは、敗北により『サウザンド
アイズ』を追放されたのです。そして彼らは、あの星々からも旗を降ろすことになりま
した」

「……………なっ、」

日向たちは驚愕し、完全に絶句した。

飛鳥は再び空を仰ぎ、大きく息を呑んで叫ぶ。

「まさか……………あの星空から、星座を無くすというの!?!」

刹那、一際大きな光が星空を満たした。

間もなくして光が収まった時、確かにそこにあつたペルセウス座は——流星群と共に、跡形もなく姿を消していた。

この数日ですでに様々な奇跡を目の当たりにしてきた彼らだが、今度の奇跡は圧倒的にその規模が違う。

言葉が出ない日向たちとは裏腹に、黒ウサギは明るい笑みと声音で進行を続ける。

「今夜の流星群は『サウザンドアイズ』から『ノーネーム』への、コミュニティ再出発に対する祝福も兼ております。星に願いを掛けるもよし、皆で観賞するもよし、今日は一杯騒ぎましょう♪」

嬉々として杯を掲げる黒ウサギと子供たち。

しかし4人はそれどころではない。

「星座の存在さえ思うがままに出来るなんて……それではあの星々の彼方まで、その全てが、この箱庭を盛り上げるための舞台装置ということなの？」

「そういうこと……なのかな？」

それまでの価値観を大きく逸脱するほどの御業に出会い、飛鳥と耀は呆然とする。

一方で日向と十六夜は、流星群を眺めながら感慨くため息を吐いていた。

「アルゴルが食変光星じゃないところまでは分かっていたんだがな。まさかこの星空の

全てが箱庭のためだけに作られているとは思わなかったぜ……」

「ははは、だな。これは流石に想定外だ……」

——アルゴルが悪魔の星として語り継がれる理由。

それは十六夜が述べた通り、この星が変光星であるからだ。

連なる星々が互いにその身を重ね合い、光の波長を変える星。

それこそが変光星であり、アルゴルの魔性の正体。

「星の位置を自由に遊び、宇宙の彼方までをも支配するような……そんな絶大な何かが、

この箱庭の中にはあるってことか」

「ヤハハ。そいつはまた楽しみが増えたな」

そのまま感動を補充するように瞳を細めていると、元気な声が彼らを訪ねた。

「ふっふっふのふくん♪ どうですか？ ビックリしましたか？」

ピョンと跳んで黒ウサギが2人の元に来る。

十六夜は盛大に両手を広げて頷いた。

「ああ、素直にしてやられたぜ。世界の果てといい、水平に廻る太陽といい……色々と馬鹿げたものを見てきたつもりだが、まだこれだけのショーが残っていたなんてな」

日向も流れる星々を眺めながら、呆れたように苦笑した。

「ああ、俺も驚いたよ。星々さえも誰かの意思で弄ぶ、まさに神々の“箱庭”ってわけ

か。ここまで手の凝った造りにするなんて、一体この都市の創始者たちは何を考えているんだか……けれど、これで目標が出来たな」

「ああ。コミュニティの宣伝としては申し分ないし、掲げる指針としても上出来だ」

「おや？　どんな目標でございますか？」

日向と十六夜は星空を見上げ、消えたペルセウス座の位置へとその手を伸ばし――

「あそこに、俺たちの旗印を飾る」

今度は黒ウサギが絶句した。

「私たちの旗印を……あの星空に？」

「ああ。つーか日向、ハモんなよ」

「それはこっちの台詞だ。……けどま、どうだ黒ウサギ？」

「なかなか面白そうだと思わねえか？」

2人は不敵な笑みを黒ウサギに向ける。

そんな彼らを前に唾然としたままの黒ウサギ。

しかし途端に弾けるような笑顔を浮かべ、

「……YES。それは、とてもロマンが御座います」

「だろ？」

「はい♪」

「だからハモんなって」

星降る夜に、3人は顔を見合わせ笑い合う。

日向たちの道のりは険しい。

宿敵の魔王を倒し、“名”と“旗印”を取り戻す。

だが他の2人も、きつと反対はしないだろう。

そんな予感が日向と十六夜にはあつた。

—— “家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い” ——

それだけの対価を支払った問題児たちの物語は、これから紡がれていくのだから。

第2章 あら、魔王襲来のお知らせ？

第12話 火龍誕生祭

——箱庭二一〇五三八〇外門区画。

——“ノーネーム”農園跡地。

無人の農園区に、日向はひっそりと佇んでいた。

彼の視界の先には、見渡す限り荒廃しきった白地の土地が広がっている。

「……本当に、草木の一本すら生えてないな」

ヒュウと、日向の髪を乾いた風が靡かせた。

彼らがこの箱庭の世界に召喚されて早1ヶ月。

このひと月の間で、日向たちも箱庭での暮らしには大分慣れたと言っている。

ギフトゲームには日頃から恒常的に参加しているし、それによる勝ち星も上々だ。

毎日ご飯をお腹いっぱい食べられるようになって、子供たちの笑顔も増えてきた。

そして尚かつ、彼らのギフトゲームによる戦果は、決して目に見えるものだけでは無

い。

目に見えない部分でも、着実に成果を及ぼし始めていた。

——まず。

結論から言うと、彼らの誇る実力は、この下層七桁における一般的な水準を遙かに逸脱するものだった。

先ほどはギフトゲームでの戦績を上々であると表現したが、実際はそんなレベルではない。

常勝無敗、負け知らず。

正に連戦連勝の一言であつた。

日向たちが一度ギフトゲームに繰り出せば、どんな主催者もことごとく敗北を喫せられるのだ。

中には『調子に乗った小僧共にひとつベテランの格を見せてやろうかい』的なノリで、逆にゲームを仕掛ける猛者もいたのだが、結果は見事な返り討ちにあつた上、仮にもゲームを受けてやったんだから高めの報酬をよこせと泣きつ面に蜂を全力投球される始末。

そんな百戦百勝を地で行く彼らに、とあるウサギが喜びすぎてピョンピョンしたことは言うまでもない。

“ノーネーム”は現在、近隣の外門はおろか、六桁以上の外門にまで、その名声を瞬

く間に広め始めている。

そして無論、この状況に最も一役買ったのは、やはりあの“ペルセウス”との一件に他ならないだろう。

最下層の名無しが、五桁のコミュニティを打ち破った。

その一報は、下層五桁以下に存在する全てのコミュニティの注意を引く上で、圧倒的な起爆剤となったのだ。

いつかコミュニティの“名”と“旗印”を取り戻し、かつての仲間を取り戻す。

その目標に向けて、“ノーネーム”は確かな一歩を踏み出したのである。

——だが、それだけに。

日向の胸中には、ぬぐい去れない懸念があった。

一見全てが順調に見える今だからこそ、改めてこの農園区の現状を目にすることで、その懸念は更に深みを増す。

(……魔王)

この箱庭の世界における、唯一無二の天災。

その存在が、常に彼の念頭にはあった。

日向たちは未だ、本物の魔王の力を知らない。

白夜叉の実力は底が知れず、“ペルセウス”戦でのアルゴールはすでに弱体化した後

だった。

果たして自分たちは、全力の魔王に対抗することが出来るのだろうか。

そして――

（俺たちの掲げた“打倒魔王”という指針は、否が応でも多くの魔王を焼きつけることになる。そしてその危険性は、コミュニティの名声が高まれば高まるほど大きくなる。いつか、実際に魔王と戦うことになった時、俺は――）

――仲間のことを、守ることが出来るのだろうか。

日向は改めて、農園区へと目を向ける。

全盛期では一都市に匹敵するだけの食糧需要を纏めて担っていた農園区は、その面積も比例して膨大だ。

しかし今は、その全てがただの無惨な荒野へと成り果てている。

魔王の襲来から、すでに3年の月日が過ぎた今。

それだけの年月を経てなおこの状態であるということは、即ち土地そのものが完全に死滅しているということだ。

人の営みだけでなく、自然そのものまでもが、魔王の手によって蹂躪された。

その脅威をあえて言葉にするならば、正しく。

「――天災、だな」

日向の眩きは、何時になく真剣なものだった。

そう遠くない未来、いつか必ず訪れるであろう魔王との戦いに思いを馳せる。

(それでも、俺は……)

日向が覚悟を新たにしようとしたその時——不意に背後で声があった。

「あれあれ？　もしかして日向さん？」

「うん？」

向けられた声に振り向く日向。

そこには声の主の黒ウサギと、その隣に連れ立つレティシアが居た。

途端にそれまでの雰囲気を一転させ、日向は朗らかに笑いかける。

「おはよう黒ウサギ。レティシアも」

「YES！　おはようございます！」

「ああ、おはよう主殿」

パツと元気いっぱい目の明るい笑みで返す黒ウサギと、対照的に落ち着いた微笑みで返すレティシア。

そこで日向はレティシアの姿を一瞥すると、ほんの少し苦笑を浮かべて話しかけた。

「何だか、レティシアはもうすっかりメイドそのものだな」

「そうか？」

「ああ。その格好も、様になってるよ」

「フフ。お褒め頂きありがとうございます主殿」

レティシアは流麗な所作でスカートの両裾を摘み上げ、片足を半歩引いて礼をする。

その服装は出会った当初とは打って変わり、現在は青と白を基調としたメイド服で身を包んでいた。

飾りすぎない程度にフリルのあしらわれたメイド服は、彼女の愛用する大きなリボンとも似合っていて非常に可愛いらしい。

「この1ヶ月、メイドをやってみてどうだった？」

「ふむ……そうだな。こうして実際にメイド業へ従事してみると、いやいやどうして奥が深い。存外やりがいのあるものだ、認識を改めているところだよ」

「黒ウサギとしては、少々複雑な心境ではございますが……レティシア様がメイドになられてから、本拠の館が一段と清潔になった気がするのですよ」

「言われてみれば、確かにそんな気がするな。前より子供たちの清掃時間を延ばしたのか？」

「いや、より効率的な清掃の仕方を指導しただけだ。雑巾のかけ方ひとつ、箒の掃き方ひとつで、出来栄えは随分と違ってくる」

「おお、貫禄のある言葉だな」

「YES！ 流石はレティシア様です！」

思わず感心する日向と黒ウサギ。

しかしレティシアは静かに首を左右に振ると、真面目な顔で否定した。

「何の。私など、まだまだメイドしては未熟だよ」

「そうなのか？」

「ああ。何せ私の知る真のメイドとは、主の求めであれば茶席の世話はもちろん、料理や洗濯などの基本的な家事に加え、菜園の手入れに着替えの世話、知略策略謀略も用意し暗殺から一番槍まで完璧にこなすものらしいからな」

「ぜ、前半はともかく、後半はえらく物騒ですね」

真のメイド、恐るべし。

余りに過激すぎるその業務内容に、思わずたじたじになる黒ウサギ。

日向は面白そうに笑みを返した。

「ははは。まあ、レティシアに暗殺なんて物騒なことをさせるつもりは無いけどな。それに一番槍に関してだって、もつと他に適役そうな人物がいるし」

「ほえ？ 一体どなたですか？」

「十六夜とか？」

「なるほど」

すぐさま納得できた女性陣。

確かに十六夜ならば、むしろ喜び勇んで敵地に先陣を切りそうだ。

それも、ヤハハと笑い声を上げながら。

ひとしきり世間話が済んだところで、レティシアは日向に問いかけた。

「ところで、日向はここで何をしていたんだ？」

「ん？ ああ。見ての通り、農園区の見学にな。前々から話には聞いてたけど、一度実際に目にしておきたいと思っただ」

説明しつつ、日向は農園区に向き直る。

女性たちも隣に並んだ。

「そうか。ならば目的は同じだな。私も農園区の現状を確かめたいと、黒ウサギに付き添ってもらいこうして足を運んだのだが……」

レティシアは美麗な金髪を靡かせながら、悲しげに表情を歪めてしゃがみ込む。

「……酷いな。ここがあの農園区とは、にわかに信じがたい。石と砂利しかないじゃないか」

ほんの3年前まで豊潤な土壌があつた土地は、今や見る影もない。

黒ウサギはしゅんとウサ耳を伏せてうなだれた。

「……申し訳ありません。せめて水の都合が付けば、子供たちでも手を入れることが出来たのですが」

レティシアは足場の土をひと握り掬って確かめると、静かに首を横に振る。

「いや、気にするな。そもそもコレは、人の手でどうこう出来るものではないからな」

レティシアの言葉に、日向も頷いて続けた。

「そうだな。作物が育ち難いなんてものじゃない。土地そのものが完全に死んでしまっているんだ。これじゃ仮に水を与えたところで、生き物の住まう余地がない。地道に土壌を復活させようものなら、気の遠くなるような膨大な年月がかかるだろうな」

「……はい」

黒ウサギは沈鬱そうに返事をした。

箱庭における唯一にして最大の天災——“魔王”の傷跡は仲間や誇りのみならず、コミュニティの未来さえも奪うほどに強大なのだ。

レティシアはスツと立ち上がると、メイド服の砂利を払いながら険しい声音で口にする。

「驚異的な力だ。私も長く生きてきたつもりだが、これほどの力を持つ魔王となると、片手の指ほどしか出会ったことがない」

居住区、農園区、その双方は共に、まるで悠久の時を経たかのように奇怪な崩壊を遂

げていた。

ならば原因は明白だ。

黒ウサギは頷くと、神妙な面持ちで告げる。

「時間操作による土地の自壊……これほどまでに大規模なことが可能な種は『星霊』級以上。それも星の運行を支配する類でしょう」

「ああ。星の運行を司る星霊となれば、最強のフロアマスター・白夜叉か……もしくはかの黄金の魔王『クイーン・ハロウイン』と同クラスの怪物ということになる」

悪すぎる冗談だった。

あらゆる修羅神仏の集うこの箱庭において尚、最強と謳われる三大種。

——生来の神仏である神霊。

——鬼種や精霊、悪魔等の最高位である星霊。

——幻獣の頂点にして系統樹の存在しない、龍種の『純血』。

箱庭の最強種と名高いこれらの種は、もはや人智の及ぶ相手ではない。

ましてやそれらの最上位ともなれば、その脅威は推して知るべしであろう。

最悪と言っている事実には歯噛みする2人。

しかし言葉の中に聞き慣れない名称を耳にした日向は、ふと首を傾げて尋ねた。

「『クイーン・ハロウイン』って名前は初耳だな。そんなに凄い人物なのか？」

「それはもう！ 何せこの魔王が集う箱庭において、唯一“女王”の名を冠するほどの御人ですから。その身に秘める力は、正しく絶大の一言です」

「箱庭の黎明期において、太陽の主権を争い白夜叉と壮絶な死闘を繰り広げたのはあまりに有名過ぎる話だ。現にかの女王は、白夜叉に次ぐ6つもの太陽主権をその手に収めている」

「へえ、あの白夜叉に匹敵するほどの実力者ってことか……」

まだ見ぬ強大な存在を見据え、その名を胸に刻み込む日向。

そこでレティシアが確認するように黒ウサギへ問う。

「しかしこれ程の力を有しているなら、コミュニティの名前ぐらいは聞きそうなものが……何か分かったことは？」

「いえ。白夜叉様に聞いてみても、東側のコミュニティではないだろうという程度です」
「そうか……白夜叉がそう言うのなら、そうなのだろうな」

レティシアは苦笑しながらも、土地を荒廃させるほどの凄惨な御技に身震いしていた。

日向はそんな彼女の様子を見て取り、元気づけるように笑顔を見せる。

「ま、そんなに心配するなつて。この農園も、俺たちが元に戻してみせるさ」

「YES！ 日向さんの言う通りでございますよ！ 何せ今のコミュニティには、日向

さんを始め強力なギフト保持者が4人もいらつしやるのですから！ 皆様が力を合わせれば、この荒廃した土地を復活させることなど容易いのです！」

「シャキン！ とウサ耳を立てて拳を握る黒ウサギ。

「レティシアも微笑んで頷いた。

「……ああ、そうだな。私も、主殿たちを信じているよ」

2人の気遣いに、心から感謝の念を抱くレティシア。

するとその時、突然本拠に続く道の向こうから、慌てた絶叫が木霊してきた。

「く、黒ウサギのお姉ちゃあああああん！ たたた、大変——！！！」

揃って声のする方へ振り向く3人。

すると割烹着姿の狐娘リリが、今にも泣きそうな顔で駆け寄つて来た。

しかしあまりに慌て過ぎていたためか、途中で小石に躓いてしまい、そのまま日向の腹部にダイブする。

「わっぷ」

「おっと。大丈夫か？」

「あ、す、すいませんっ！ ありがとうございますございます日向様！」

羞恥でカアツと顔を赤くしたりりは、慌てて離れながら謝罪する。

そこで黒ウサギが、不思議そうに問いかけた。

「リリ、一体どうしたのですか？」

その一言で我に返ると、リリは急いで彼女に事情を話す。

「あの、実は、飛鳥様が十六夜様と耀様をつれて……あ、こ、これ、手紙っ！」

パタパタと忙しくなく2本の尻尾を振りながら、リリは黒ウサギに手紙を手渡した。

黒ウサギは頭に疑問符を浮かべながら、手元の文面に目を通し始め――

「……………」

「……………」

「……………」

次第にワナワナと震え始める黒ウサギ。

同時にウサ耳もかつて無いほど逆立ち始める。

しばらくして内容を読み終えた彼女は、

「……………」な、何を言っちゃってますかあの問題児様方はあああああああ!?!」

と、まるで悲鳴のような絶叫を上げた。

その様子を訝しんだ日向は、黒ウサギの横から手元の手紙をのぞき込む。

すると、そこにはこんな内容が書かれていた。

『黒ウサギへ。

北側の四〇〇〇〇〇〇外門と東側の三九九九
九九外門で開催する祭典に参加してきます。
アナタも必ず後から来ること。

あ、レテイシアもね。

私たちに祭りのことを意図的に黙っていた罰
として、今日中に私達を捕まえられなかった
場合、4人ともコミュニティを脱退します。

死ぬ気で捜してね。

応援しているわ。

P・S ジン君は道案内に連れて行きます』

文面を読み終えた日向は、不思議そうに憤慨している黒ウサギへと問いかけた。

「……なあ、黒ウサギ。北側の祭りって何だ？」

ぎくぐうっ！ と黒ウサギのウサ耳が跳ねる。

「……あと、俺たちに秘密にしていたって」

ぎくぎくぐくぐうっ！ と黒ウサギのウサ耳がさらに跳ねる。

彼女はキョロキョロと視線をさ迷わせながら、しどろもどろに答えた。

「え、えーと、何のことでしょうか？」

「黒ウサギ。今さら隠そうとしても、後が恐いだけだぞ」

「うう……」

レティシアの言葉が胸に突き刺さる黒ウサギ。

やがて、盛大に頭を下げた彼女は、

「も、申し訳ございませんでしたー!!!」

全力で、謝罪したのだった。

「なるほど、な。北側の境界壁で開催される、“火龍誕生祭”。その招待状が白夜叉から送られてきて、それをたまたま飛鳥たちが発見した——と」

「……YES」

「そして黒ウサギたちは、元々大祭のことを俺たちには秘密にしているつもりだったと」
「うう……YES」

「あちゃー……」

涙目になる黒ウサギを見て、日向はどうしたものかと頬をかく。

最初に口を開いたのはレティシアだった。

「日向。あまり黒ウサギを責めないでやってくれ。彼女も決して悪気があったわけじゃないんだ」

「責めるも何も、別に怒ってないよ。ただまあ、飛鳥たちは違うんだろなあ。きっとかなり怒ってると思うぞ」

「あうあう……」

罪悪心で胸がいっぱいになる黒ウサギ。

日向は苦笑すると、そんな彼女の頭を優しく撫でた。

「まあ、そんなに落ち込むなって。今回の件は別に、黒ウサギだけが悪いってわけじゃない。路銀が足りなかったのは仕方が無いし、どちらかと言えば、俺たちの普段の行いの方に責任がある」

「日向さん……」

黒ウサギは、上目使いに潤んだ瞳で日向を見る。

日向は朗らかに笑って言葉が続けた。

「だからま、これを機に全力で説教してやれよ。そんなもって、ほんの少しでも罪悪感があるんなら、黒ウサギの方からも謝ればいい。それで全部解決だ。だろ？」

日向はニツと笑って黒ウサギに言う。

黒ウサギはしばし呆然とすると、やがてゴシゴシと勢いよく涙を拭う。

そして、力強く頷いた。

「……YES！ 絶対に問題児様方を捕まえて、お説教をしてみせるのですっ！」

「ああ、その意気だ」

——こうして、問題児たちと黒ウサギとの、壮絶な鬼ごっこが開始されたのだった。

——箱庭二一〇五三八〇外門区画。

——ペリベッド通り・噴水広場。

黒ウサギの絶叫が農園区に響き渡る頃。

こつそりと本拠を抜け出した飛鳥たちは、噴水広場にあるカフェ「六本傷」のテラスで席に着いていた。

注文した品を待つかたわら、飛鳥はふと外門の近隣を見回して尋ねる。

「噴水広場に訪れる度に思うのだけど……あの外門の悪趣味なコーディネートは、一体誰がしているの?」

外門と箱庭の内壁の繋ぎ目である石柱には、巨大な虎の彫像が掘り起こされている。門の上部に刻まれている旗印は、今は無きコミュニティ「フォレス・ガロ」のものだ。彼女の疑問に、ジンはため息混じりに説明した。

「外門のデザインを決める権利は、地域の権力者が、『階層支配者』の提示するギフトゲームをクリアすることで手に出来ます。一種の、コミュニティの広告塔としての役割があるんですよ」

「……そう。それであの外道の名残りが残っているの」

フン、と不機嫌そうに後ろ髪を払う飛鳥。

運ばれてきた紅茶にひと口付けると、気を取り直すように微笑を浮かべて切り出した。

「それで、北側までではどのような道になるのかしら?」

紅いドレススカートからスラリと伸びる両足を組み直し、優雅な口調で問いかける。

隣の席で、耀は小首を傾げて提案した。

「んー……だけど北にあるって言うなら、とにかく北に歩けばいいんじゃない?」

「おいおい春日部、それは流石に無理があるぞ」

無計画過ぎる内容に苦笑いでツツコミを挟みつつ、十六夜は改めてジンに問う。

「それで？ 我らがリーダーは、何か素敵なプランは無いのか？」

その言葉にジンは盛大にため息を漏らすと、呆れたように返答した。

「予想はしてましたが……もしかして、北側の境界壁までの距離を知らないんですか？」
「知らねえよ。けどそんなに遠いのか？」

「……やっぱり、何も知らずに出発していたんですね。なら説明する前に聞いておきま
すけど。……皆さんは、この箱庭が恒星級の表面積だというのは知っていますか？」

「……え、恒星？」

飛鳥が素っ頓狂な声を上げる。

耀も無表情ながら、瞳を3度ほど瞬きする。

十六夜は首肯しながらも、ジンの言葉に眉をひそめた。

「その話なら、前に黒ウサギから聞いた。けど箱庭の世界は、ほとんどが野晒しにされて
いるって言ってたぞ。それに大小はあっても、この都市以外にも街はあると」

「ありますよ。しかしそれを差し引いても、箱庭はこの世界最大規模の都市。箱庭の世
界の表面積を占める比率は、他の都市とは比べ物になりません」

「比率？」

ジンの勿体つけた言い方に、飛鳥たちは全員が不穏な気配を感じ取る。

そもそも、都市の大きさを星の比率で表すことが出来る、という発想自体が全く無かったのだ。

「恒星の表面積つてどれくらい?」

耀の発した疑問に、隣に座る十六夜が答えた。

「仮に箱庭の世界の表面積を太陽と同等だと仮定した場合……地球の約130000倍つてところだな」

予想外すぎる回答に、耀は目を丸くする。

実にお馬鹿な数字である。

十六夜は警戒心を滲ませながら、続けてジンに問いかける。

「だがまさか、恒星の1割ぐらいを都市部が占めている……なんてことは言わねえよな?」

「そ、それは流石にあり得ませんよ。比率といっても、その数字は極少数になります」

「そ、そうよね。それで、この場所から北側の境界壁までは、どのくらいの距離があるの?」

飛鳥が回答を急がせる。

ジンは天を仰いで考えると、

「そうですね。ここは少し北寄りなので、大雑把でいいのなら……980000kmぐ

らいかと」

「「うわお」」

驚愕の事実には、飛鳥たちは揃って声を上げた。

「いい、いくらなんでも遠すぎるでしょう!?!」

カフェのテーブルを叩き、猛抗議する飛鳥。

ジンも負けじと怒鳴り返す。

「ええ、遠いですよ！ 箱庭の都市は中心を見上げた時の遠近感を狂わせるように出来てるため、肉眼で見た縮尺との差異が非常に大きいんです！ あの中心を貫く『世界軸』までの実質的な距離は、目に見えている距離よりも遙かに遠いんですよ！」

だから止めましょうってあれほど言ったじゃないですかーッ！ とジンが叫ぶ。

一方で、十六夜は冷静に箱庭について考察していた。

「なるほど。箱庭に呼び出された時、箱庭の向こうの地平線が見えたのは、縮尺そのものを誤認させるような仕掛けがあったからなんだな。てことは、北側まで980000km 持つてもマジな訳だ。……ちよつとばかし遠いな」

軽薄な笑みを浮かべる十六夜だが、流星に打つ手が思い浮かばないらしい。

『アストラルゲート境界門』

を使用するという手もあるが、それには莫大な使用料がかかる。

貧困を極める今の『ノーネーム』にとっては、難し過ぎる選択肢だ。

ジンは再び大きなため息を吐いた後、諭すような口調で語りかけた。

「今ならまだ笑い話で済みます。ですから皆さんも、もう戻りませんか？」

「断固拒否」

「右に同じ」

「以下同文」

ガクリ、と肩を落とすジン。

黒ウサギたちにあんな挑発的な手紙を残してきた以上、彼らも引くに引けないのだ。

3人は勢い良く立ち上がり、ジンのロープを掴んで走り出す。

「あんな事をして今更引けるものですか！ 行くわよ2人共！」

「おう！ こうなったら駄目で元々！ “サウザンドアイズ”へ交渉に行くぞゴラア

！」

「行くぞゴラア」

ヤハハ！ と自棄気味にハイテンションな十六夜と飛鳥に続き、その場の勢いで声を

出す耀。

ジンはダボダボのロープに首を絞められながら、そんな彼らに連れ回されるのであった。

事態を把握した後の黒ウサギたちの行動は迅速だった。

本拠内の探索を終えた子供たちが、口々に黒ウサギとレティシアに報告を告げる。

「食堂にはいなかったよ!」

「大広間、個室、貴賓室、全部見てきた!」

「貯水池の付近もないっ!」

「お腹すいた!」

「それはまた後でな。……それで、金庫はどうだ?」

「コミュニティのお金に手を付けた形跡はありません。しかし皆さんの自腹で境界壁まで向かえるはずがございません! うまくすれば外門付近で捕まえることが可能です!」

「なら黒ウサギは先に外門へ急げ。万一捕まえられずとも、"箱庭の貴族"であるお前なら境界壁の起動に金はかからない。私は"サウザンドアイズ"の支店に行く。招待状を出したのが白夜叉ならば、無償で北の境界壁まで送り届ける可能性もあるからな」
黒ウサギとレティシアは行動を確認し合い、頷く。

特に黒ウサギの瞳には、かつてないほどの激しい決意の炎が灯っていた。

「あの問題児様方……! 今度という今度は絶対に! 絶対に許さないのですよーッ

!!!

怒りのオーラで髪を淡い緋色に染め、本抛の外に出るや否や、土ぼこりを巻き上げて黒ウサギは爆走するのだった。

黒ウサギたちが躍起になって本抛の搜索をしている頃。

日向は「ノーネーム」を離れ、ひとり「サウザンドアイズ」の支店を目指していた。水路脇の桜に似た街路樹が立ち並ぶ石畳の街道を歩いていると、やがて目的地の目印である双女神の看板が見えてくる。

商店の入り口では、今日も割烹着姿の女性店員が、竹ぼうきでせっせと店前を掃いていた。

日向はそのまま歩み寄り、朗らかに挨拶する。

「こんにちは、今日もお勤めご苦労様です」

「ええ、ありがとございます——って、誰かと思えばあなたですか」

「どうも」

営業スマイルから一転、日向を見るなり露骨に嫌そうな顔をする女性店員。

彼女はじとつと日向を睨んで口を開く。

「毎回言っていますけど、うちは『ノーネーム』お断りです」

「まあまあ、そう言っているも利用させてくれるじゃないですか。本当にありがとうございます」

「まったく……」

女性店員は呆れたようにため息を吐いた。

しかし、すぐさま諦めたように言葉が続ける。

「……と、言いたいところではありますが、今回だけは、あなたが来たことに感謝しましょうか」

その一言で、日向は全てを理解した。

「ああ、やっぱり来てますか?」

「ええ。相も変わらず遠慮無用にズカズカと」

「あはは……どうもすいません」

居たたまれなくなつて、日向は思わず謝罪した。

女性店員はそつと竹ぼうきを壁に立てかけると、

「特別に案内してあげますから、とつとと連れ返ってください」

「いやあ……善処します」

たぶん無理だろうなと思ひながら、日向は当たり障りのない返事をした。

その後、女性店員に案内されて、「サウザンドアイズ」の店内を進む。歩みを進める傍ら、日向は軽く世間話を切り出した。

「そう言えば、この店ではギフトなんかも取り扱っているんですよね？」

「ええ、その通りです」

「例えば、どんなものがあるんですか？」

日向の質問に、女性店員は淀みなく答える。

「様々ですね。武具や日用品はもちろんですが、それ以外の物も数多くあります。例を挙げれば、あなた方のお仲間である吸血鬼の彼女も、以前はうちで扱われていた商品のひとつでした」

「なるほど、本当に色々あるんですね。ちなみにそう言った商品は、一般客でも買えるんですか？」

「ええ、買えますよ。無論、ギフトの購入に関しては、うちで発行している貨幣に限られますが」

「へえ、それまたどうして？」

女性店員は歩みを止めずに続ける。

「そもそも、箱庭の都市で発行されている貨幣は、全て同様の比率で金銀銅の物が造られます。我々はギフト以外の品に関して他のコミュニティの貨幣を用いた購入を許可し

ていますが、支払いには必ず我々の貨幣を扱っています。これは即ち、*「サウザンドアイズ」*とどれほどの交流があるのかを示す目安にもなるのです。——ギフトとは、恩恵であり奇跡の結晶。より多くの交流、より多くの信頼を持ったコミュニケーションにギフトを授けるのは、当然のことでしょう？」

なるほど、と納得したように頷く日向。

そもそも上層部は修羅神仏なのだ。

金だ銀だという物を欲しがることはないのだろう。

「……あれ？ それならどうして貨幣を発行して商売なんてしてるんですか？」

「ああ、あなた方はまだ箱庭に来たばかりで知らないのですね。説明しますと、幾つかの貨幣の発行元のコミュニケーションは、その流通と価値を競うギフトゲームをしているのですよ。自らの旗印を貨幣に刻んでいるのも、そのためです」

この箱庭の都市において、貨幣の価値は金の比重でもなければ銀の比重でもない。

貨幣に記された旗印だけが、その価値を決めるのだ。

「なるほど。金銀銅の価値・比重が全て平等なら、より多く流通しているコミュニケーションの貨幣は多くの支持を得ていることになる。……貨幣の流通を競うゲーム。流石は超大手の商業コミュニケーション。やるこのとの規模が桁違いですね」

「当然です」

素っ気なく返す女性店員だが、その様子はどこか誇らしげだ。

日向は納得したように話を続ける。

「けどこれで、『ノーネーム』お断りの理由も分かりました。流通を淀みなく行うためには、顧客の選別も必要だったって訳ですね」

「その通りです。ですから、今後うちには来ないように」

「そこを何とか」

いつの間にか商売話になっていたが、間もなく目的である白夜叉の私室に到着した。

女性店員はひとまず日向を待たせると、先んじて中にいる主に声をかけた。

「オーナー。お取り込み中のところ、大変申し訳ありません。不本意ですが、客人をお連れしました」

「うん？ 不本意な客人だと？ 一体誰だ？」

白夜叉が首を傾げると同時に、日向が障子の陰から姿を見せる。

「どうも、不本意な客人です」

「ひ、日向さん！」

朗らかに告げる日向に、ジンが驚いた声を上げる。

対照的に、十六夜は落ち着いた様子で話しかけた。

「よう。思ったより早かったじゃねーか」

「まあな」

そう言つて互いに笑みを交わす。

一方の飛鳥と耀は、不思議そうに問いかけた。

「だけど、いくら何でも早すぎないかしら？」

「どうやって、私たちの居場所が分かつたの？」

「まあ、選択肢は限られていたからな。後は客観的に考えて、その中でも一番可能性が高そうな場所に来てみれば、案の定ドンピシャだったつてわけだ」

日向が説明を終えると共に、縁側で控えていた女性店員が居住まいを正して立ち上がる。

「それではオーナー。私はこれで」

「おお、案内ご苦労だったの」

「俺からも、ありがとうございます」

「いえ、それでは」

短く返し、彼女はその後にした。

恐らくは、また店前の清掃に戻つたのだろう。

無難に挨拶が済んだところで、白夜又は日向に着席を促す。

「取り敢えず、日向も来たのなら都合だ。おんしも皆と並んでそこに座れ。丁度、おん

しらを北側に連れていくか否かで、話をしていたところだ」

「ああ、それじゃあお邪魔します」

日向が座敷に腰を下ろすと、不意に耀が小首を傾げて問いかけた。

「日向は、私たちを捕まえに来たんじやないの?」

「ん? ああ。仮に耀たちが、コミユニティの資金を使おうとかしてたら、確かに止めるつもりだったんだけどな。けどま、折角白夜叉が条件次第で連れいつてつてくれると言ってるんだ。黒ウサギにしても、路銀さえあれば言ってたしな。金を使わずに行ける方法がちゃんとあるなら、俺もわざわざ止めるつもりはないよ。それに今さら、鬼ごっこを止めるつもりも無いんだろ?」

「[[当然]]」

「ははは、悪いなジン。そう言うわけだ。まあぶつちやけ、俺も行きたいしな!」

「ああ……」

日向が味方ではないと知り、ガクリとうなだれるジン。

そんな彼らの様子を面白そうに見ていた白夜叉は、ここが機と見て話を始めた。

「さて、一応日向にも聞いておこうかの。今し方、この4人から、おんしたちが『打倒魔王』を掲げたことについては確認した。それは日向も同意することなのだな?」

「ああ、その通りだ」

「うむ。ならば話は早い。実はその『打倒魔王』を掲げたコミュニケーションに、東のフロアマスターから正式に頼みたいことがある。此度の共同祭典についてだ。よろしいかな、ジン殿？」

「は、はい！ 謹んで承ります！」

子供を愛でるような物言いではなく、組織の長として言い改める白夜叉。

ジンは少しでも認められたことに、パツと表情を明るくした。

「ふむ、ではどこから話そうかの……」

カン、と煙管きせるで紅塗りの灰吹きを軽く叩き、ひと息つく白夜叉。

そつと中庭に眼を向け、遠い眼をした後……ふと思いついたように話し始めた。

「ああ、そうだ。北のフロアマスターの一角が世代交代したのを知っておるかの？」

「え？」

「何でも急病で引退だとか。まあ亜龍にしては高齢だったからのう。寄る年波には勝てなかったと見える。此度の大祭は新たなフロアマスターである、火龍の誕生祭でな」

「龍？」

キラリと光る期待の眼差しを十六夜と耀の2人が見せる。

白夜叉は苦笑しつつ話を続けた。

「五桁・五四五五外門に本拠を構える『サラマンドラ』のコミュニケーション——それが北

のフロアマスターの一角だ。ところでおんしら、フロアマスターについてはどの程度知っておる？」

「私は全く知らないわ」

「私も」

「俺はそこそこ知ってる」

「俺もそれなりに……だな。要するに、下層の秩序と成長を見守る存在のことだろ？」

日向が確認するように説明する。

白夜又はひとつ領くと、詳細を語り始める。

「うむ。『階層支配者』^{フロアマスター}とは箱庭の秩序の守護者であり、下位のコミュニティの成長を促すために設けられた制度だ。主務は箱庭内の土地の分割・譲渡、コミュニティが上位の階層に移転できるかどうかを試す試練を行うなど多岐に渡っておる。そしてそんな箱庭の秩序を乱す天災・魔王が現れた際には率先して戦う義務があり、その義務と引き換えに、『階層支配者』は膨大な権力と最上級特権・『主催者権限』^{ホストマスター}を与えられているのだ」

「しかし、北は複数のマスターたちが存在しています。精霊に鬼種、それに悪魔と呼ばれる力ある種が混在した土地なので、それだけ治安も良くないですから……」

ジンはそれだけ付け加えると、悲しそうに目を伏せた。

「けど、そうですか。『サラマンドラ』とは親交があったのですけど……まさか頭首が替わっていたとは知りませんでした。それで、今はどなたが頭首を？ やつぱり長女のサラ様か、次男のマンドラ様が？」

「いや、当主は末の娘——おんしと同年のサンドラが火龍を襲名した」

「は？ ジンは小首を傾げて一拍、2度ほど目を瞬いた。

しかし次の瞬間、驚嘆して声を上げる。

「サ、サンドラが!? え、ちよ、ちよつと待つてください！ 彼女はまだ11歳ですよ!」

「あら、それを言うならジン君だって11歳で私たちのリーダーじゃない」

「それはそうですけど……!! いえ、 فقط」

「なんだ？ 御チビの恋人か？」

「ち、違つ、違います！ 失礼なことを言うのは止めてください!」

ヤハハと茶化す十六夜と飛鳥。

怒鳴り返すジン。

全く関心の無い耀が続きを促した。

「それで？ 私たちに何をして欲しいの?」

「そう慌てるな。実は今回の誕生祭だが、北の次代マスターであるサンドラのお披露目も兼ねている。しかしその幼さゆえ、東のフロアマスターである私に共同の主催者を依

頼してきたのだ」

「あら、それはおかしな話ね。北には他のフロアマスターたちが居るのでしょう？　ならそのコミュニティにお願いして共同主催すればいい話じゃない？」

「……うむ。まあ、そうなのだがの」

急に歯切れが悪くなる白夜叉。

ポリポリと頭をかいて言いくそうにしていると、察した日向が助け舟を出した。

「まあ、例えば幼い権力者を良く思わない組織がある——とか、ありきたりにそんな事情があるんじゃないか？」

「んー……ま、そんなところだ」

途端に飛鳥の顔が不愉快そうに歪む。

まさかそんな陳腐な話が絡んでくるとは思わなかったのだろう。

彼女の目に見えるほど強い怒りと、落胆の色が浮かんだ。

「……そう。神仏の集う箱庭の長たちでも、思考回路は人並みなのね」

「うう、手厳しい。だが全く持つてその通りだ。実は東のマスターである私に共同祭典の話を持ちかけてきたのも、様々な事情があつてのことなのだ」

申し訳なさそうに、苦々しい顔でうなだれる白夜叉。

重々しく口を開こうとした彼女を、日向が口を挟んで制した。

「ちよつと待った。その話、長くなりそうか？」

「ん？ んん、そうだな。短くともあと1時間程度はかかるかの」

「日向、どうしたの？」

耀が不思議そうに小首を傾げて問いかける。

日向は苦笑して答えた。

「忘れたのか？ 耀たちは今、鬼ごっこの中で中だつてこと」

ハッ、と一同は気づいた顔をする。

「俺がここに来れたんだ。黒ウサギたちが来るのも、時間の問題だと思っぞ？」

「そ、そうだわ！ 1時間も悠長にしていたら、黒ウサギたちに追いつかれてしまうじゃない！」

「……それはまずい」

あつという間に危機感を抱く問題児たち。

ジンは咄嗟に立ち上がると、

「し、白夜叉様！ どうかこのまま」

「ジン君、黙りなさい！」

ガチン！ と勢い良くジンの下顎が閉じる。

飛鳥の支配するギフトが働いたのだろう。

その隙を逃さず、十六夜が白夜叉を促した。

「白夜叉！ 今すぐ北側へ向かってくれ！」

「む、むう？ 別に構わんが……何か急用か？ とうか、内容を聞かずに受諾してよいのか？」

「構わねえから早く！ 事情は追々話すし何より——その方が面白い！ 俺が保証する！」

十六夜の言い分に白夜叉は瞳を丸くし、呵々と哄笑を上げて領いた。

「そうか。面白いか。いやいや、それは大事だ！ 娯楽こそ我々神仏の生きる糧なのだからな。ジンには悪いが、面白いならば仕方がないのう？」

「……!?……!?」

白夜叉の悪戯つぼい横顔に、声にならない悲鳴を上げるジン。

しかし何もかももう遅い。

暴れるジンを嬉々として取り押さえる十六夜たちと、それを隣で苦笑しながら見守る日向。

そんな彼らを余所に白夜叉は両手を前に出し、パンパンと2つ柏手を打つ。

「——ふむ。これでよし。これで望み通り、北側に着いたぞ」

「「「「——……はっ。」」」」

思わず目を点にする日向たち。

それもそうだろう。

北側までの980000kmというお馬鹿な距離を、あの一瞬で？

——という疑問はすぐに過ぎ去り、次の瞬間、4人は期待を胸に店外へと走り出したのだった。

第13話 黄昏の街と逃走劇

——北側の境界壁。

——箱庭四〇〇〇〇〇〇外門・三九九九九外門区画。

——“サウザンドアイズ”旧支店。

店を飛び出すと、途端に熱い風が頬を撫でた。

高台にある支店からは、街の一角が展望できる。

「い、これは……！」

眼下の街並みを見下ろした飛鳥は、不意に大きく息を呑んだ。

直後、興奮で胸を躍らせるように眩きを漏らす。

「赤壁と炎と……ガラスの街……!?!」

——そう。

東と北を区切って立つ、天を穿たんばかりの高大な赤壁。

あれが話に聞いた境界壁なのだろう。

そこから発掘される鉱石で彫像されたモニメントに、境界壁を削り出すようにして

建築したゴシック調の尖塔群のアーチと、外壁に聳える2つの外門が一体となった巨大な凱旋門。

遠目からでもキラキラと輝いて見える歩廊には、色とりどりのカットガラスが飾られている。

また昼間にもかかわらず街全体が黄昏時を思わせる色味を放っているのは、境界壁の影となる場所を朱色の暖かな灯火で照らす、巨大なペンダントランプが各所に点在しているためだ。

小さなキャンドルスタンドが二足歩行で街中を闊歩している光景を見て、十六夜も喜色の声を上げる。

「おいおい、流石は980000kmも離れてるだけあって、東とはずいぶん文化様式が違うじゃねえか！ 歩くキャンドルスタンドなんて奇抜なもの、実際に目にする日が来るとは思わなかったぜ！」

「フフ、どうやらお気に召したようだの。しかし東側と違うのは、何も文化だけではないぞ？ その外門から外に出た世界は、真つ白な雪原でな。それを箱庭の大結界と灯火で、常秋の様相を保っているのだ」

白夜又はふんすつ、と小さな胸を自慢げに張る。

その解説を聞いた日向は、素直に感心した。

「なるほど。厳しい環境ありきの発展てわけか。これは確かに見所が多そうだな」

「ああ。聞くからに東より面白そうだな」

「……むっ？ 日向はともかく、今の台詞は聞き捨てならんぞ小僧。東側にだって良い物は沢山あるつ。おんしらの住む外門が特別寂れておるだけだわいっ」

一転して拗ねたように唇を尖らせる白夜叉。

日向たちが本拠を構える東側の二一〇五三八〇外門区画は、*「世界の果て」*と向かい合っていることで、箱庭外で手に入る資源が極端に少ない。

そのため力の無い最下層のコミュニティでは、発展にも限度があるのだ。

一方で胸の高まりが収まらない飛鳥は、まるで子供のように瞳を煌めかせると、美しい街並みを指差して熱っぽく訴えた。

「ねえねえ皆、今すぐ降りましょう！ あのガラスの歩廊に行ってみたいわ！ いいでしょう白夜叉？」

「ああ、構わんよ。しばらく楽しんで来るといい。話の続きは夜にでもしよう。暇があるなら、このギフトゲームにでも参加していい」

ゴソゴソと、白夜叉は着物の袖からゲームのチラシを取り出して見せる。

日向たちがそれを覗き込もうとすると、

「見つけた——のですよおおおおおおおおお!!!」

ズドオン!!!

とドップラー効果の効いた絶叫と共に、背後で爆撃のような着地音。

思わず跳ね上がる日向たち。

恐る恐るそつちに視線を向けてみれば、その場には案の定、邪悪に笑う黒ウサギの姿が。

「フ、フフ、フフフフ……!　ようおおおおやく見つけたのですよお、この問題児様方……!」

ギ。
淡い緋色の髪を戦慄かせ、全身から怒りのオーラをこれでもかと噴出させる黒ウサギ。

その姿は帝釈天の眷属というよりは、むしろ仁王のそれである。

危険を察知した問題児たちの中で、真っ先に動いたのは十六夜だった。

「逃げるぞッ!」

「逃がすかッ!」

「え、ちよつと……」

十六夜は咄嗟に隣にいた飛鳥を抱きかかえ、展望台から飛び降りた。

耀も遅れじと旋風を巻き上げて飛翔するが、しかし数手遅かった。

黒ウサギは全身のバネで弾丸のごとく跳躍すると、ガツシリと彼女のブーツを握り締める。

「わ、わわ……」

「フフフ。耀さん、捕まえました。もう逃がさないのでございますヨ……？」

どこかぶつ壊れ気味に笑う黒ウサギ。

その様子を見て、日向は内心で決意した。

（ああ、俺は絶対、黒ウサギには逆らわないでいよう）

黒ウサギは空中で耀を引き寄せると、胸の中で強く抱き締めながら囁きかけた。

「後デタツプリト御説教タイムナノデスヨ。フフフ、御覚悟シテオイテクダサイネ」

「りよ、了解」

一切の反論を許さないカタコトの言葉に、耀は怯えながら返事をする。

今日の黒ウサギは普段よりバイオレンスだと、野生の直勘が見抜いたのだろう。

着地と同時に、日向に向かって勢い良く耀を投げつける黒ウサギ。

3回転半して吹っ飛んできた彼女を、日向は慌てて抱き止めた。

「きゃー！」

「うおつと!?! 容赦ないな黒ウサギ……」

「耀さんを確保しておいてください！ 日向さんは、モチロン黒ウサギノ味方デスヨネ？」

「あ、あつたりめーよ！ 耀のことは任せとけ！」

「ありがとうございます！」

脅迫してみた問いに、一瞬で態度を改める日向。

黒ウサギ超恐い。

この時、彼は本気でそう思った。

「白夜叉様は御二人をお願いします！ 黒ウサギは他の問題児様方を捕まえに参りますのでー！」

「お、おお？ うむ。何だか良く分からんが心得た。頑張るんだぞ黒ウサギ」

「はいー！」

あまりの剣幕に思わず首を縦に振る白夜叉。

黒ウサギは展望台からジャンプすると、怒涛の勢いで十六夜たちの後を追う。ゲームの開始から約2時間。

黒ウサギと問題児たちの追いかっこは、後半戦にもつれ込むのだった。

その後、〃サウザンドアイズ〃の店内にて。

日向と耀は招かれた座敷でお茶を啜りながら、今回の経緯を白夜叉に語った。

「……と、まあそういう訳なんだ」

「カツカツカ、なるほどのう」

大方の事情を聞き終えた白夜叉は、呵々と愉快そうに哄笑を上げる。

ひとしきり笑い終えた後、まるで子供のやんちゃを見守る母親のような面持ちで口を開いた。

「ふふふ。まあ日向はともかく、おんしらたちらしい悪ふざけだ。しかし〃脱退〃とは穏やかではない。ちょいと悪質だとは思わなんだのか？」

白夜叉は耀に視線を向けて問いかける。

自覚があったのか、彼女は気まずそうに頷いた。

「それは……うん。確かに少しだけ私も思った。だ、だけど黒ウサギだって悪い。お金が無いことをちゃんと説明してくれていたら、私たちだってこんな強硬手段には出なかつたもの」

「普段の行いが裏目に出た、とは考えられんかの？」

「うっ……そ、そうかもしれないけど。それも含めて信頼の無い証拠。少しは焦ればいい」

ぷいっと拗ねたようにそっぽを向く耀。

その姿をくつくつと笑う白夜叉。

日向も思わず苦笑する。

「まあ、確かに耀の気持ちも分かるんだよな。俺だって、大祭のことを黒ウサギたちから秘密にされていたと知った時は、少なからずショックを受けたし」

「……日向も?」

「そりゃあそうさ。信頼する仲間には隠し事をされて、思うところの無いはずがない。だけどな、耀」

日向は隣に座る耀を見つめ、真剣な顔で尋ねた。

「黒ウサギが何の理由も無しに、俺たちに隠し事をするような奴だと、本気で思うか?」
「それは……」

耀は僅かに逡巡するも、すぐに首を左右へ振った。

「ううん。思わない」

「だろ? だったらそこには、何かしらの原因があるはずだ。そしてその原因が、今回は俺たちにあつた」

「……」

何も言えず、耀は暗い顔で俯いた。

日向は微笑むと、ポン、と彼女の頭に手を置いて、

「はは、悪い悪い。別に耀を責めてるわけじゃないんだ。……たださ、心配しなくても、黒ウサギはちゃんと俺たちのことを信頼してるよ。それはこの1ヶ月間で、誰よりも俺たち自身が分かっているはずだ。そしてその信頼は、一方通行じゃないだろう？」

「……うん」

耀は顔を上げると、照れ臭そうに頷いた。

それに日向も笑顔で応え、明るい声で続ける。

「まあ、要するにアレだな。俺たちも、普段からちよつとだけはしやぎ過ぎたつてことだなー」

「うん。ちよつとだけね」

実際はちよつとどころの騒ぎでは無いのだが、そこに敢えてツツコム者は居ない。

耀は少しだけ考えるような素振りを見せると、

「だけど、一応、ちよつとだけお詫びをしようかな？」

「ああ。ちよつとだけな」

そこで2人は顔を見合わせ笑い合い、揃って白夜叉に視線を向ける。

「と、いうわけで白夜叉」

「何かちよつとしたお詫びが手に入るような、そんなギフトゲームはない？」

彼らの問いかけに、白夜又は大きく頷いた。

「あるとも。特に耀には、打ってつけのゲームがの」

「私に？」

耀は小首を傾げて問い返す。

白夜又はうむと首を縦に振り、着物の袖から先ほど見せようとしたゲームのチラシを取り出した。

早速2人は文面に目を通す。

『ギフトゲーム名 〃造物主達の決闘〃

- ・参加資格、および概要
- ・参加者は創作系のギフトを所持。
- ・サポートとして1名までの同伴を許可。
- ・決闘内容はその都度変化。
- ・ギフト保持者は創作系のギフト以外の使用を一部禁ず。
- ・授与される恩恵に関して

・ “階層支配者” 火龍にプレイヤーが
希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、

両コミュニティはギフトゲームを

開催します。

“サウザンドアイズ” 印

“サラマンドラ” 印』

ゲームの概要を確認した耀は、不思議そうに小首を傾げて疑問符を浮かべた。

「……………？ 創作系のギフト？」

「うむ。人造、霊造、神造、星造を問わず、製作者が存在するギフトのことだ。北では過酷な環境に堪え忍ぶため、恒久的に使える創作系のギフトが重宝されておつてな。その技術や美術を競い合うゲームが、しばしば開催されるのだ。そこでおんしが父から譲り受けたギフト “生命の目録” は技術・美術共に優れておる。人造とは思えんほどにな。その木彫りに宿る “恩恵” ならば、力試しのゲームでも勝ち抜けると思うのだが……」

「そっつかな？」

「うむ。これまた幸いなことに、サポーター役として日向もおる。本件とは別に、祭りを盛り上げるために一役買って欲しいのだ。無論勝者の恩恵も強力なものを用意する予定だが……どうかの？」

ムムム、とこめかみに指を当てて考える耀。

しばらく悩んだ彼女は、ひとつ白夜叉に尋ねた。

「ねえ、白夜叉」

「何かな？」

「その恩恵で……本当に黒ウサギと仲直りできるかな？」

きつと、それが本音だったのだろう。

不安そうな表情で問いかける耀に、白夜叉は優しく微笑んで頷いた。

「ああ、出来るとも。おんしらに、そのつもりがあるならの」

「……そっか。それなら、出場してみる」

「よっしゃ！ 決まりだな！」

日向も拳を打ち付けてやる気を見せる。

白夜叉は彼らが了承したことを見て取ると、静かに上座から腰を上げた。

「では、そうと決まれば善は急げだ。すでに昼時を回っておるし、ゲーム開始まであまり時間も無い。早速舞台会場に向かうとしよう」

「ああ、そうだな」

日向も同意して立ち上がる。

だがそこで、耀が真剣な面持ちで挙手をした。

「待って」

「ん？ どうしたのだ？ まだ何か質問があるのか？」

出端を挫かれ、不思議そうに尋ねる白夜叉。

彼女はより一層表情を引き締めると、

「……その前に、ここにあなたのお茶菓子食べてもいいですか」

日向と白夜叉は互いに苦笑し、再度座敷に腰を降ろすのだった。

「——すごく綺麗な場所。私の故郷には、こんな場所は無かったわ」

視点は移り、レンガとカットガラスで彩られた赤窓の歩廊の中心・龍のモニュメント前。

飛鳥は黄昏の街並みに映える真紅のドレススカートを翻しながら、楽しそうに呟いた。

一方の十六夜は、大きな翡翠色のガラスで造られた龍のモニュメントの周囲をグルグ

ルと回りながら鑑賞している。

一通り見終わると正面に戻り、そこで展示品の詳細が記された案内板に目を落とす。

『出展コミュニティ“サラマンドラ”』

タイトル：霊造のテクタイト結晶によつて

彫像された、サラマンドラ初代

頭首 “星海龍王” 様。

製作者・サラ』

その解説を読んだ十六夜はしばしの間沈黙すると、やがて疑うような眼差しで再びモニメントを見上げて口を開いた。

「霊造つてことは……オイオイ、人為的に造り出したテクタイト結晶つてことか？」

「そのテクタイト結晶とは何なの？」

「天然ガラスの一種さ。隕石の衝突時に発生したエネルギーと熱量によつて合成される希少鉱石。にしても……ふうん。この製作者のサラつて奴、面白そうだな。確か御チビの知り合いみたいだったし、機会があったら会つてみるか」

ニヤリ、と物騒な笑みを浮かべる十六夜。

そんな彼の横顔を不思議そうに見つめていた飛鳥は、ポツリと疑問を漏らした。

「前々から思っていたのだけど……十六夜君も日向君も、どうしてそんなに博識なの？」
「俺に関してはそうでもないさ。博識というよりは雑学程度だ。……お、歩くキャンドル発見！」

二足歩行で歩くキャンドルスタンドを見つけ、十六夜は面白そうに歓声を上げる。

どうやら彼らも美術展の作品らしく、首(?)から「ウィル・オ・UISP」という看板をぶら下げていた。

「歩くキャンドルランプに浮かぶランタン……ならカボチャのお化けはいないのかしら？ ハロなんとかってお祭りに出てくる妖怪なのだけど、十六夜君は知ってる？」

ワクワクと瞳を輝かせながら尋ねる飛鳥。

その問いかけに十六夜は驚き半分、呆れ半分で苦笑する。

「おいおい、箱入りが過ぎるぜお嬢様。カボチャの怪物つて、ジャック・オー・ランタンのことだろ？ 今時ハロウィンぐらい知っとけよ——と、そうか。確かお嬢様は、戦後間もない時代から来たんだっけか？」

十六夜が思い出したように訂正すると、飛鳥は少しだけ悲しげな表情を浮かべた。

「……そう。十六夜君の時代では、もうハロウィンは珍しいものではないのね」

「……悪いな。野暮なことを聞いちまって。お嬢様はハロウィンみたいなお祭りが好きなのか？」

「別に好きという程のものじゃないわ。ただ幼い頃に小耳に挟んだ時は……とても素敵
な催し物だと思ったの」

飛鳥は黄昏色の空を仰ぎ、まるで遠い場所を見るかのように双眸を細める。

「私が元居た場所は、本当につまらない所だったわ。財閥の令嬢と言えは聞こえはいいかもしれないけど、肝心の両親はもう居ないし……人心を操る力なんて持って生まれた
せいで、隔離のような形で寮制の学校に閉じ込められていたもの」

「……へえ？ それはお嬢様らしくねえな。さっさと抜け出せばよかったじゃねえか」

「そう、それよ。あの手紙が来なかったら、帰省に乗じて出て行くつもりだったわ。行き
先は……そうね。終戦を迎えたお祝いに、さつき話していたハロウインでも経験しに
行っていたわ」

歩廊の真ん中でおどけるように笑う飛鳥。

十六夜はそんな彼女の瞳の奥に、深い哀愁のような念を感じ取った。

飛鳥の鬱屈とした生活の裏には、外の世界や文化に対する強い憧れがあったのだら
う。

「お菓子くれないきゃ悪戯するぞ」
「Trick or Treat!!」——このフレーズ、とても可愛らしくて素敵
じゃない？ 私も仮装して、大人たちに苦笑いされながらお菓子を貰ってみたかつた
わ」

「大きなカボチャを被りながら？」

「そうそう！ ああだけど、そうね。今の私なら魔女でもいいわ。似合うと思わない？」
そうだな、と相槌を打つ十六夜。

飛鳥はクルリとスカートをなびかせ、一回転する。

その仕草は普段の落ち着いた彼女よりも、ずっと少女らしく見えた。

「私……箱庭に来て本当に良かったわ。こんな素敵な場所に来ることが出来たんだもの。噂のハロウインを経験することは出来なかったけど……実家で飼い殺しにされる人生なんかよりも、よっぽど明日に期待を持てる」

クルリクルリと歩廊の真ん中で回る彼女を、十六夜は静かに見つめていた。

しばらくして何かを考えるように虚空を見上げ……ふと思いついて口を開く。

「なあお嬢様。ハロウインが、元々は収穫祭だつてことは知ってるか？」

「え？」

「ついでに言うのだ。『ノーネーム』の裏手には莫大な農園跡地があつてだな。あの土地を復活させれば、コミュニテイにとつても大助かりだと思ふんだが……いかがなものだろうか？」

「え、ええ。そうね。それは知っているわ」

質問の意図が分からない飛鳥は、首を傾げて困ったような眼差しを向ける。

ニヤリと笑った十六夜は、彼女に顔を近づけ、

「農園を復活させて——いつか俺たちで、俺たちのハロウインをしよう——という提案なんだが、お嬢様はどう思う？」

瞬く間に飛鳥は目を丸くする。

十六夜の示す「俺たちのハロウイン」——その言葉の裏にあるものは、ひとつしかない。

「私たちのコミュニケーションで……ハロウインのギフトゲームを主催する、ということ？」

「ああ。今後も箱庭の世界で過ごす以上、やっぱり「主催者」^{ホスト}は経験しとかないとな」

彼の申し出に飛鳥は、パアツと顔を輝かせると、両手を合わせて喝采した。

「素晴らしい提案だわ！ それならコミュニケーションも助かるし、とても楽しそうなもの！」

「ハハ、流石に話が分かるなお嬢様！ じゃあ俺たちが最初に「主催者」をするギフトゲームは、ハロウインで予約しておこうぜ」

コクコクと何度も頷く飛鳥。

その瞳は彼女らしくない、熱っぽいものだった。

頬を緩ませ、はにかんで笑う飛鳥は、未来の主催を思い描いて夢心地に語る。

「私たちが主催するハロウイン……ふふ。じゃあ収穫祭を行うためにも、まずは農地を復活させないといけないわね」

「おうともよ。それにこの案なら、白夜叉にも借りが返せるしな」

「あら、どうして？」

「ハロウインは元々、太陽に1年の感謝をする祭りなんだ。宗旨は違うが、そんなことを気にする奴でもないだろ」

ヤハハと笑う十六夜。

飛鳥も納得したように微笑んだ。

「そうね。何だかんだで、彼女には黒ウサギ共々たくさんお世話になっっているんだもの。いつかお礼をするために、白夜叉を招くに相応しい『主催者』を指摘しましょう」

「とは言え、今まだ無理だけだな。まずは色々なギフトゲームに勝たないと」

「もちろん。こんな大きなお祭りなんだから。きっと凄いギフトが貰えるゲームがあるはずよ」

「YES！ 此度の祭典では耀さんの持つ『生命の目録』のような、創作系のギフトを競い合う二大ギフトゲームが進行中なのですよ！」

「へえ？ 何か強力な恩恵が貰えるのか？」

「それはもう！ 新たにフロアマスターとなったサンドラ様から直々に恩恵を賜るとなれば、よっぽどのものではないですよ！」

「そう。なら春日部さんに連絡して出場してもらおうかな。伝言お願いね、黒ウサギ」

「YES! 任されたのですよ♪ それではそれでは御二人様! 今から向かうので黒ウサギニオトナシク捕マツテクレマスヨネ?」

壮絶な笑顔で問う黒ウサギ。

2人は即答した。

「断る!」

瞬間、十六夜が歩廊にクレーターを打ち込む脚力でスタートダッシュ。

飛鳥は反対方向に逃げ出すが、空から舞い降りた金髪メイド服の吸血鬼、レティシアに飛びつかれて捕縛される。

「きゃー!」

「フフ。観念してもらおうぞ飛鳥」

黒い翼を折り畳み、美しい微笑を浮かべながらブクラブクラと抱きつくレティシア。

はたから見れば完全に姉と戯れる妹である。

飛鳥は仕方なさそうに両手を上げて降参すると、最後に一声、十六夜に向かって声高に叫んだ。

「十六夜君! アナタが最後の一人よ! 簡単に捕まったら許さないわ!」

「了解、任せとけお嬢様!」

ヤハハハハハハ! と笑いながら十六夜は赤窓の歩廊を駆け抜ける。

しかし黒ウサギも負けてはいない。

「箱庭の貴族」と呼び称される彼女の身体能力は、並の神仏ですら持て余すほどのものだ。

「逃がさないのです十六夜さんッ！ 今日という今日は堪忍袋が爆発しました！ 捕まえたら黒ウサギの素敵な御説教を長々と聞かせて差し上げますよーッ！！」

「ハッ、そりゃ魅力的な申し出だ！ 帝釈天の眷属の御説法、聞かせたいなら捕まえてみるー！」

十六夜は建造物を蹴り上がるように跳躍し、尖塔群の頭頂に登る。

黒ウサギも負けじと壁を垂直に走って追いかける。

騒ぎを聞き付けたギャラリーが、2人を指差して口々に叫んだ。

「アレを見ろ！ ウサギだ！ 月の兎ががいるぞ！」

「なぜ『箱庭の貴族』がこんな下層に!?!」

「誰かを追ってるのか!?! それにしても何て速さだ!！」

「だが追われている方も尋常じゃないぞ!?!」

ザワザワと騒ぎが広がる観衆の頭上で、屋根に登った両者は激しく睨み合いつつ距離を取る。

好戦的な笑みを浮かべた十六夜は、心底面白そうに哄笑を上げた。

「ハハハ！ やるじゃねえか黒ウサギ！ 手紙に書いたのは冗談だったんだが、焚き付ける材料としては申し分なかったみたいだな」

「ほほう？ ほほほう？ コミュニティの脱退を賭けた勝負を冗談半分で持ちかけた？ それはそれは、随分と笑えない話でございますねえ」

キツと黒ウサギは十六夜を睨む。

確かに組織の脱退を軽々しく口にするような者を甘やかしては、団体の統率は乱れるだろう。

親しき中にも礼儀あり。

今回の悪ふざけは、少々悪質に過ぎるものだ。

自覚があつたのか、十六夜は肩を竦ませた。

「ま、そうだな。確かに冗談にしては質が悪い。そこは素直に認めるさ」

「……大人しく降参すると？」

「馬鹿言え。ここまで盛り上げといて何もしないなんて、ギャラリーが許さねえよ」
クイツと親指で眼下を指す。

下では騒ぎに駆けつけた住人たちが、2人を見上げて歓声を上げていた。

「そこで一つ提案がある。俺と黒ウサギだけで、短時間のゲームをしないか？」

「え？」

「ふむ、そうだな。謝罪代わりに、そつちのチップは無しでいい。こつちのチップは——ん、何が欲しい？ 1回分の首輪とかか？」

「は——!？」

黒ウサギは驚きの余り、ウサ耳を大きく跳ねさせて息を呑む。

この自由奔放で天上天下唯我独尊を地で行く男に、1回分の首輪を付けることが出来るのだ。

彼女にとつては喉から手が出るほど欲しい権利ではあるが——それでも、黒ウサギは躊躇いがちに首を横に振った。

「それは……駄目でございますよ十六夜さん」

「なんだ？ たかが1回分の首輪じゃ不服か？」

「い、いえ、そうではなくです。十六夜さんの謝意は伝わりました。ま、まあ、黒ウサギの頭が少々固かったことも認めます。ですのでギフトゲームをするなら……それはやはり、対等の条件でなければ、と」

今度は十六夜が目を丸くして驚く。

つまりは黒ウサギも、1回分の首輪を十六夜に賭けるといふのだ。

「ペナルティーのあるゲームで得たギフトなんて頂いても、達成感は何れません。なのでやるのならば正々堂々！ そして真正面から、黒ウサギは十六夜さんに御説教をす

るのです！」

「……ハッ。黒ウサギのくせに生意気言いやがって」

物騒に笑う十六夜。

その瞳からは、すでに遊び心は消えている。

向かい合う2人が宣誓を交わすと、それぞれの手元に羊皮紙が舞い落ちた。

『ギフトゲーム名 “月の兎と十六夜の月”

・ルール説明

・ゲーム開始のコールはコイントス。

・参加者がもう1人の参加者を “手の

平で” 捕まえたら決着。

・敗者は勝者の命令を1度だけ強制される。

宣誓 上記のルールに則り、

“黒ウサギ”

“逆廻十六夜” の兩名は

ギフトゲームを行います。

』

「これはコミユニティ間の決闘ではなく、個人の間で取り引きされる『ギアスロール契約書類』です。決着と同時に勝者の紙は命令権へと変化し、敗者の紙は燃える仕組みです」

「へえ……?」

物珍しそうに羊皮紙を読み直し、ヤハハと笑う十六夜。

その後、制服のポケットから一枚のコインを取り出した。

「そんじゃま、早速ゲーム開始といこうぜ。コインが地面に着くと同時にスタートでいいんだな?」

「YES。トスは譲るのですよ」

「……ふうん? ずいぶん余裕じゃねえか」

「フッフ、当然です。今日こそはみっちり御説教をしてさしあげるのですよ!」

「ハッ、ぬかしやがれ!」

そして、賽は投げられる。

キンと高い金属音が響いた直後、旋風の如く駆け出す2人。

問題児と黒ウサギの追いかっこは、遂に最終ラウンドを迎えるのだった。

——境界壁・舞台区画。

——“火龍誕生祭”運営本陣営。

「それでは！、これよりギフトゲーム“造物主たちの決闘”第1回戦・第3試合を行います！、選手の方は、舞台上にお上がり下さい！」

司会の声が響くと同時に、盛大な歓声が会場を揺らした。

舞台袖に控える日向と耀は、互いに顔を見合わせて会話する。

「なあ耀。本当に俺のサポートはいらんのか？」

「うん、大丈夫。それに日向が出たら、私の出番が無くなっちゃうよ」

今回、選手はサポーターも含め、創作系以外のギフト使用が一部禁止されている。

しかし日向であれば、その身体能力だけで並大抵の相手は余裕で圧倒出来るだろう。

だが今回は白夜叉から祭りの盛り上げ役も頼まれているため、余り簡単に決着がつき過ぎてしまっても困るのだ。

だからこそ耀は、苦笑で日向の申し出を遠慮した。

「その代わり、三毛猫の世話をお願いしていい？」

「ああ、分かった。けど、どうして俺の力が必要な時は、遠慮せずに言うんだぞ？」

「うん。ありがとう」

『頑張つてなお嬢！ ワイも全力で応援しとるで！』

レティシアたちに便乗してきた三毛猫が、日向の腕に抱かれながら声援を送る。

耀は小さく笑つて頷くと、踵を返して舞台上へと歩みを向ける。

「それじゃあ、行つてきます」

「ああ、行つてこい！」

そう言つて彼らが別れた直後。

一際大きい歓声が、会場を揺らしたのだった。

一方その頃。

あえなく捕まった飛鳥はレティシアと共に、十六夜たちは反対側の歩廊を歩いてい
た。

小腹の空いた彼女たちは出店でクレープを購入し、飛鳥は手に持ったそれを物珍しそ
うに見つめている。

「どうした飛鳥？ 食べないのか？」

「いえ、そうではないのだけど……私の故郷には、こんな食べ物は無かつたから」

彼女が口をつけるかいや待てまだ早いのではないかと悪戦苦闘している内に、すでに半分ほど食を進めたレティシアはペロリと指を舐めて語りかけた。

「まあ、箱庭外の世界から来た人間のほとんどが飛鳥のような反応をするものだ。故郷とかけ離れた食文化、建築物、思想、種族 e t c ……だがそういつたものを全て楽しんでこそその箱庭だ。食はず嫌いは良くないぞ？ 人生経験は大いなる財産だ」

「わ、分かったわ」

意を決し、飛鳥は大きく口を開いて齧りつく。

途端に暖かく柔らかい生地の中から、一口サイズのバナナやチョコレートムースが溢れ出た。

初めて味わう甘美な舌心地に、飛鳥は思わず表情を綻ばせる。

「……美味しいわ」

「それはよかった。コレぐらいの食べ物で二の足を踏まれていたのでは、南側には絶対に行けないからなあ」

「そ、そう。そんなに南側の食事は凄いの？」

「凄いなんでもものじゃないぞ。向こうの料理はとにかくワイルドなんだ。斬る！ 焼く！ 齧る！ の三工程を食事だと説明された時は、流石の私も頭を抱えたよ」

フツと遠い目をするレティシア。

なぜか小さく身震いしている。

苦笑した飛鳥は、ふと鮮やかな切子細工のグラスを売る出店の棚に目を向けた。

「レティシア。あれは……何？」

ん？ と指差す方向に首を傾けるレティシア。

彼女も驚いたように足を止めた。

飛鳥の指の先では——手の平サイズしかない身長のとんがり帽子を被った小人の女の子が、切子細工のグラスをキラキラとした目で眺めていたのだ。

「あれは、精霊か？ あのサイズがひとりでいるとは珍しいな。『はぐれ』かな？」

「ああ。あの類の小精霊は群体精霊だからな。単体で行動していることは滅多にないんだ」

そう、飛鳥は相槌を打つ。

物珍しそうにとんがり帽子の精霊に近づくと、背後からの影に気づいたのか、精霊もひよいと振り返った。

自然と交差する両者の視線。

「……………」

途端に「ひゃっ！」と愛らしい声を立てて、とんがり帽子の精霊は逃げ出した。

飛鳥はクレープをレテイシアに預け、その小さな背中を追いかける。

「わっ、あ、飛鳥！」

「あげる！　ちよつと追いかけてくるわ！」

嬉々としてとんがり帽子の精霊を猛追し始める飛鳥。

しかしそれも仕方がない。

逃げられれば追いたくなるのは、問題児としては当前すぎる習性だろう。

レテイシアは困ったように笑うと、飛鳥に貰ったクレープを齧り、その背中を見送るのだった。

第14話 不穏な知らせ

無数に建ち並ぶ建造物の屋根上を、高速で立ち回る2つの軌跡があった。

(チツ、やっぱ走力は互角か)

後方に跳び退く黒ウサギを追尾しつつ、十六夜は内心で舌打ちする。

(そもそもこのゲーム内容……一見条件は五分つぽいが、実際は奴の方が数段有利だ)
追いかける傍ら、十六夜は以前話に聞いた「月の兎」の情報を思い出す。

彼女たち「箱庭の貴族」のウサ耳は箱庭の中核と直結しており、審判時ならばゲームの全範囲、プレイヤー時ならば半径1kmの範囲まで情報を収集することができる。

常に相手の言動や行動を把握でき、機動力まで互角とあつては、流石の十六夜でも勝機は薄い。

(なら俺が黒ウサギに勝つための最低条件は——奴を見失わないことだ！)

屋根瓦を踏み砕き、十六夜が黒ウサギに肉薄する。

対する黒ウサギも、負けじと脱兎のごとく後方へ跳ぶ。

聳え立つ時計塔を易々と駆け上がる両者を見上げ、観衆も熱気を込めた歓声を上げ

た。

「す、凄い！ あれが『月の兎』の力か！」

「しかしもう片方も尋常じゃないぞ！ 何者だ？！」

黒ウサギはクルリと後方に宙返ると、尖塔の頭頂に降り立った。

それを下から見上げた十六夜は、不満そうに訴える。

「オイコラ黒ウサギ！ スカートの中身が見えそうで見えねえぞ！ どういうことだ！？」

「あやや、怒るところはそこなのですか？」

黒ウサギは片手でスカートの裾をpushさえつつ、眼下の十六夜に笑いかける。

「フフン♪ 残念でしたね十六夜さん。実はこの衣装ですが、白夜叉様の御好意で絶対に見えそうで見えないという鉄壁ミニスカートなギフトを与えられているのですよ♪」

「はあ？ あの駄神、チラリストかよクソが！ こうなったら直接スカートに頭を突っ込むしか」

「黙らっしやいこのお馬鹿様!!！」

この上なく速攻で断じる黒ウサギ。

しかし次の瞬間ペロ、と愛らしく舌を出すと、悪戯っぽく呟いた。

「もつとも、そんなお馬鹿なことを言えるのもそこまで御座います」

「何?」

「黒ウサギの勝利なのですよ、十六夜さん♪」

突然の勝利宣言と共に、黒ウサギは小さく身体を縮こませると、全身のバネで超跳躍を行った。

眼下の歩廊目掛けて落下していく彼女を見て、十六夜は自身の失態を悟る。

(やべ、ミスった! このまま追って跳べば間違ひなく捕まる!)

空中では追う方より、待ち構える方が断然に有利だ。

かと言ってこのまま黒ウサギを見逃しても、その間に彼女は姿を隠してしまうだろう。

それでは十六夜の詰みだった。

「それじゃ、サヨウナラなのですよ♪」

遠くでにこやかに手を振る黒ウサギ。

進むも地獄、退くも地獄。

完全に悪手を掴まされた十六夜は、悔しそうに舌打ちすると——ニタアと物騒な笑みを浮かべた。

「……チツ。中々やるじゃねえか黒ウサギ。シンプルだが、お前のゲームメイクは面白いぞ。だがな——」

十六夜は瞬時を身をひるがえすと、盛大に右足を振りかぶり、
「——ここからは、俺のゲームメイクだッ!!」

それまで足場にしていた時計塔を——全力で蹴り飛ばした。

「……は？ え、ちよ、ちよつとお待ちなさいこのお馬鹿様あああああ!」

小躍りするほど余裕を見せていた黒ウサギは、その暴挙に一転、絶叫した。

巨大な時計塔の頭角は無惨にも瓦礫と化し、第三宇宙速度で迫る散弾の嵐となって歩廊を襲う。

下にいる観衆もまた、声を揃えて一斉に叫んだ。

「「あ、あの人間無茶苦茶だあああああああ!?!」」

堪らずに足を止めて、残骸を避ける黒ウサギ。

瓦礫の陰からヤハハと哄笑が響いてくる。

「つ、十六夜さん……!」

「射程距離だぜ、黒ウサギ」

舞い散る残骸を蹴り飛ばし、十六夜が右手が伸ばす。

それを間一髪手の甲で弾き、同様に伸びる黒ウサギの右手。

十六夜も手首で弧を描いて流し、今度は左手で掴みにかかる。

瓦礫が落ちるまでの刹那の時間、千手の攻防を繰り返す2人。

互いが互いの攻守に全身全霊を尽くす中、不意にギャラリーのひとりが悲鳴を上げた。

「た、建物が崩れるぞおおおおおおお!!」

ハツと見上げる十六夜と黒ウサギ。

時計塔の残骸によって倒壊した建物が、彼らの頭上から襲いかかる。

2人は同時に跳躍すると、揃って拳を振り上げた。

爆碎音と共に、倒壊した建物は跡形も残らず碎け散る。

と同時に、両者とも守りの手が1手遅れた。

その隙に掴みかかった2人の手は――

「あっ、」

パシッ。

と、全く同時にお互いの腕を掴み取った。

次の瞬間両者の「契約書類^{ギアスロール}」が発光し、勝敗を定める。

『勝敗結果：引き分け。』

「契約書類」は以降、命令権として使用可能です」

「……トク。」

いぶかしげに眉をひそめる十六夜。

黒ウサギはあややと苦笑いを浮かべて説明した。

「あー……コレは、アレです。引き分けなので、互いに命令権を1つ得たみたいですが」

「はあ!? 納得がいかねえぞ! どう見ても俺の方が速かっただろ!」

「やや、そんなことは無いのですよ? 箱庭の判定は絶対です」

「ふざけんな! 今すぐ誤審を問いただして——」

「そこまでだ貴様ら!!」

厳しい怒号が赤窓の歩廊に響き渡る。

気づけば彼らは炎の龍紋を掲げ、蜥蜴の鱗を肌を持つ集団に囲まれていた。

北側の「階層支配者」——「サラマンドラ」のコミュニティが、騒ぎを聞きつけて

やって来たのだ。

黒ウサギは痛烈に痛そうな頭を抱え、両手を上げて降参するのだった。

——境界壁・舞台区画。

——「火龍誕生祭」運営本陣営。

十六夜たちは「サラマンドラ」のコミュニティに連行され、「火龍誕生祭」の運営本部に訪れていた。

境界壁を削り出すように造られた宮殿はゲーム会場と連結しており、その奥にある石畳を通過して本部へ渡る。

ゲーム会場は輪郭を円形に造られており、それを取り囲む形で客席が設けられているようだ。

現在は白夜叉の持っていたチラシのギフトゲームが催されており、その舞台では最後の決勝枠が争われていた。

『お嬢おとおおとおお！ そこや！ 今や！ 後ろに回って蹴飛ばしたれえええええええええ!!』

「気持ちに分かるけど、ちよつと落ち着こうな」

セコンドで日向の腕に抱かれながら、三毛猫が興奮気味に声援を送る。

ハタから見れば「にやー！ にやー！」と叫びながら必死に猫パンチを繰り返しているようにしか見えない彼を、日向は「どうどう」と苦笑して宥めていた。

そんな彼らの目前に広がる舞台では、「ノーネーム」に所属する春日部耀と、コミュニケーション「ロククイーター」に所属する自動人形オートマター、石垣の巨人との戦いが行われていた。

「これで、終わり……!」

鴛鴦グラフィオン獅子から貰ったギフトで旋風を駆る耀は、巨人の拳を舞うように躲して背後に回り、後頭部を一撃で蹴り崩す。

そのまま高く飛翔すると、自身の体重を「象」へと変幻させ、落下の勢いと自重で一気に巨人を押し倒した。

石垣の巨人がリングへ沈むと同時に、会場中から割れんばかりの歓声が起こる。

『お嬢おとおおおとおお！ うおおおおおおお！ お嬢おとおおおとおお！』
「よしよし、良かったな。だから少し落ち着こうな」

主人の雄姿に感極まり、滂沱の涙を流して勝ち鬨を雄叫ぶ三毛猫と、その頭をやんわりと撫でる日向。

そんな彼らの様子に気づいたのか、耀は目配せと共に片手を上げて微笑んだ。

それに日向もビシッ！ と親指を立てて笑顔を見せる。

決着がついたところで、宮殿からゲームを観戦していた白夜叉が、パンパンと大きく柏手を打った。

すると喧騒がピタリと止む。

満足そうに頷くと、会場に向けて宣言した。

「最後の勝者は、〃ノーネーム〃出身の春日部耀に決定した。これにて最後の決勝枠が埋まったかの。決勝のゲームは明日以降の日取りとなっておる。明日以降のゲームルールは……ふむ。ルールはもうひとりの〃主催者ホスト〃にして、此度の祭典の主賓から説明願おう」

白夜叉が振り返り、バルコニーの中心を譲る。

舞台会場が一望できるそのテラスに姿を現したのは、真紅の髪を頭上で結い上げ、荘厳で色彩鮮やかな衣装を幾重にも纏った幼い少女だった。

彼女こそ龍の純血種——星海龍王の龍角を継承した、新たなる“階層支配者”。

炎の龍紋を掲げる“サラマンドラ”の幼き頭首・サンドラである。

玉座から立ち上がった彼女は年相応の笑みを浮かべると、鈴の音のような凜とした声音で挨拶した。

「ご紹介に与りました、北のマスター・サンドラ＝ドルトレイクです。東と北の共同祭典・火龍誕生祭の日程も、今日で中日を迎えることが出来ました。さしたる事故も無く、進行に協力して下さった東のコミュニティと北のコミュニティの皆様には、この場を借りて御礼の言葉を申し上げます。以降のゲームにつきましては、御手持ちの招待状をご覧ください」

促された観衆は招待状をその手に取る。

すると書き記されたインクは直線と曲線に分解され、別の文章を紡ぎ始めた。

『ギフトゲーム名 “造物主達の決闘”』

- ・ 決勝戦参加コミュニティ
- ・ ゲームマスター “サラマンドラ”
- ・ プレイヤー “ウィル・オ・ウイスプ”
- ・ プレイヤー “ラッテンフェンガー”
- ・ プレイヤー “ノーネーム”
- ・ 決勝ゲームルール
- ・ お互いのコミュニティが創造したギフトを比べ合う。
- ・ ギフトを十全に扱うため、1人まで補佐が許される。
- ・ ゲームのクリアは、登録されたギフト保持者の手で行うこと。
- ・ 総当たり戦を行い、勝ち星が多いコミュニティが優勝。
- ・ 優勝者はゲームマスターと対峙。
- ・ 授与される恩恵に関して
- ・ “階層支配者”の火龍に対して、

プレイヤーが希望する恩恵を
進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、
両コミュニティはギフトゲームを
開催します。

“サウザンドアイズ”印

“サラマンドラ”印
』

決勝戦のルール説明が行われた後。

日向は白夜叉に呼び出され、宮殿内にある謁見の間へと赴いていた。

左右に控える門番に軽い会釈をすると、火龍のレリーフが彫られた重厚な石扉が開かれる。

入室すると、中には十六夜や黒ウサギ、そしてジンの姿も見受けられた。

白夜叉はバサリと扇を開いて出迎える。

「よく来てくれたの。試合後で慌ただしいが、ちよいと重要な話があるのでな。悪いが少しだけ付き合ってくれ」

「別に構わないさ。俺はしががないサポート役だし、特に疲れてもいないしな。その分、耀は休ませてやりたいから俺ひとりで来たんだが……何か問題はあるか？」

「いんや、どの道全員に話す予定だし。多少手間が増えるだけなら、今はこれだけで十分だ。それにこの場では、本題とは別に話し合わねばならぬ別件もあるのだな」

白夜叉は扇で口元を隠しつつ、チラシと十六夜に思わせ振りの視線を送る。

そこで全てを察した日向は、苦笑いで問いかけた。

「おい、一体何をやらかした？」

「ヤハハ。ご要望通り、祭りを盛り上げてやったぜ」

「胸を張って言わないで下さいこのお馬鹿様!!!」

スパアーン！

と黒ウサギのハリセンが奔る。

後ろではジンが痛そうな頭を抱えていた。

白夜叉は必死に笑いを噛み殺しつつ、努めて真面目な姿勢を保つ。

今は誕生祭の主賓、サンドラ嬢も傍に居るのだ。

彼女もはしたない真似は出来ないのだろう。

そこでサンドラの側近らしき軍服の男が前に出ると、日向たちを鋭い目つきで威嚇した。

「フーン！ “ノーネーム” の分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとはな！ 相応の厳罰は覚悟しているか!？」

「これマンドラ。それを決めるのはおんしらの頭首、サンドラである?」

白夜叉がマンドラと呼ばれた男をたしなめる。

サンドラは上座にある豪華な椅子から立ち上がると、問題の兩名に声を掛けた。

「“箱庭の貴族” とその盟友の方。此度は“火龍誕生祭” に足を運んで頂きありがとうございます。あなたたちの破壊した建造物の一件ですが、白夜叉様のご厚意で修繕してくださいました。負傷者は奇跡的に無かったようですので、この件に関して私からは不問とさせて頂きます」

チツ、と舌打ちをするマンドラ。

十六夜は意外そうに片眉を上げた。

「へえ、ずいぶん太っ腹だな?」

「うむ。仮にもおんしらには、私が直々に協力を要請したのだから。何より怪我人が出なかったことが幸いした。よって路銀と修繕費は、報酬の前金とも思っておけ」

ホツと胸を撫で下ろす黒ウサギ。

そんな彼女の苦勞に苦笑しつつ、日向は白夜叉に問いかけた。

「それで、俺たちを呼び出した本題は?」

「ふむ、そうなの……」

チラツ、と白夜叉が連れの者たちに目配せする。

サンドラも同士を退室させ、側近のサンドラだけがこの場に残った。

途端に彼女は硬い表情と口調を崩し、玉座を飛び出してジンに駆け寄ると、

「ジン、久しぶり！ コミュニティが襲われたと聞いて、随分と心配していた！」

「ありがとう。サンドラも元氣そうで良かった」

同じく笑顔で接するジン。

サンドラは一層はにかんで笑う。

「ふふ、当然。魔王に襲われたと聞いて、本当はすぐにも駆け付けたかったんだ。けど

お父様の急病や継承式のこと、ずっと会いに行けなくて」

「それは仕方ないよ。だけどあのサンドラがフロアマスターになっていたなんて——」

「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧!!」

マンドラは獯猛に牙を剥き、腰に帯刀していた剣をジンに向かって振り下ろす。

その刃が彼の命を刈り取る刹那、間に割って出た日向が蹴りで刀身を粉碎した。

「なっ!?!」

「……チャンスは一度だ。次はテメエに当てる」

普段の性格からは考えられないような、凍える双眸でマンドラを睨む。

ゴクリと息を呑む黒ウサギたち。

同じく割り込もうとした十六夜は拍子抜けしたように肩を竦め、軽薄な笑みをマンドラに向けた。

「オイオイ、知り合いの挨拶にしちや穏やかじゃねえな。止める気無かつただろ、オマエ」

「あ、当たり前だ！ サンドラはもう北のマスターになったのだぞ！ 誕生祭も兼ねたこの共同祭典に“名無し”風情を招き入れ、恩情を掛けた挙げ句、馴れ馴れしく接されたのでは“サラマンドラ”の威厳に関わるわ！ この“名無し”のクズが！」

睨み合う三者。

サンドラが慌てて止めに入る。

「マンドラ兄様！ 彼らはかつての“サラマンドラ”の盟友！ こちらから一方的に盟約を切ったにもかかわらずにそのような態度を取られては、我らの礼節に反する！」

「礼節よりも誇りだ！ そのようなことを口にするから周囲に見下されるのだと——！」

「これマンドラ、いい加減に下がれ」

呆れた口調で諫める白夜叉。

マンドラはそれでも煮え切らぬのか、非難の矛先を彼女に向けた。

「フン。『サウザンドアイズ』も余計なことをしてくれたものだ。同じフロアマスターとはいえ、越権行為にもほどがある。『南の幻獣・北の精霊・東の落ち目』とはよく言ったもの。此度の件も、東が北を妬んで仕組んだことではないのか？」

「マンドラ兄様ッ！」

サンドラが見かねて叱りつける。

明らかに失言が過ぎた。

しかし事情を知らない日向たちは、顔を見合わせて首を傾げる。

「白夜叉、噂って何のことだ？俺たちに協力して欲しいことと関係あるのか？」

うむ、と白夜叉は全員の顔を一瞥した後、着物の袖から一枚の封書を取り出した。

「この封書に、おんしらを呼び出した理由が書いてある。……己の目で確かめるがいい」

促されるまま、日向たちは受け取った文面に目を落とす。

そこにはただ一文、こう書かれていた。

『火龍誕生祭にて、魔王襲来』の兆しあり』

「……なっ、」

黒ウサギは絶句し、呻くような声を漏らす。

隣のジンも同様だ。

日向と十六夜だけが、冷静な面持ちで呟いた。

「……なるほどな。正に俺たち向きの依頼ってわけだ」

「ああ。けど正直意外だったぜ。てつきりマスターの跡目争いとか、そんな話題だと思ってたんだがな」

「何ツ!？」

十六夜の発言に牙を剥いて憤るマンドラ。

サンドラが慌てて落ち着かせる。

白夜又は無視して話を進めた。

「謝りはせんで。内容を聞かずに引き受けたのはおんしらだ」

「違いねえ……それで、俺たちに何をさせたいんだ？ 魔王の首を取れっていうなら喜んでやるぜ？」

「その前に、そもそもこの封書は何なんだ？」

「うむ。ではまずそこから説明しようかの」

白夜又は頷くと、神秘的な面持ちで語り始める。

「知つての通り、我々『サウザンドアイズ』は特殊な瞳を持つギフト保持者が多い。様々な観測者の中には、未来の情報をギフトとして与えておる者もいるのだ。これはその中でも、幹部のひとりが未来を予知した代物での」

「へえ。予言という名の贈り物^{ギフト}ってことか。ちなみに、その予言の信憑性は？」

「上に投げれば下に落ちる、という程度だな」

日向の問いに、白夜又は例えを挙げて返答する。

しかし十六夜は、その例えに怪訝そうな眼差しを向けた。

「……それ、本当に予言なのか？ 上に投げれば下に落ちるのは当然だろう？」

「予言だとも。なぜならそやつは『誰が投げた』も『どうやって投げた』も『なぜ投げた』も分かっている奴での。ならば必然的に『どこに落ちてくるのか』を予測するこ
とが出来るだろう？ これはそういう類の予言なのだ」

はっ？ と日向たちは言葉を失う。

それも当然だろう。

犯人も、犯行も、動機も、全て判明しているのに、未然に防ぐことが出来ないというのだ。

マンドラは顔を真っ赤にして叫んだ。

「ふ、ふざけるなッ!! それだけ分かっているながら、魔王の襲来しか教えぬだど!? 戯言で我々を翻弄しようという狂言だ!! 今すぐにでも棲み家に帰れッ!!」

「に、兄様……! これには訳があるのです……!」

憤慨するマンドラを尻目に、日向と十六夜は脳裏で情報を整理する。

やがてとある結論を導き出すと、十六夜は確認するように問いかけた。

「なるほど。事件の発端に一石投じた主犯はすでに分かっている……が、その人物の名前を出すことは出来ないんだな？」

「うむ……」

十六夜の言葉に、歯切れの悪い返事をする白夜叉。

日向は確信したように頷くと、ニュアンスを変えて問い直した。

「つまり今回の一件で、魔王がこの祭典に現れるよう仕向けた者が他にいる——けれどその人物は、口に出すことが出来ない立場の相手ってことか？」

ハツとジンも気がつき、サンドラを見る。

北側へ来る際、白夜叉との会話にはこうあつた。

『若い権力者をよく思わない組織がある』——と。

もしもその人物が『口に出すことも憚られる人物』だというのなら、それは——

「まさか……他のフロアマスターが、魔王と結託して“火龍誕生祭”を襲撃する?!」
想像するのも恐ろしいことだった。

秩序の守護者である“階層支配者”が、その秩序を乱すという。

白夜叉は悲しげに嘆息した後、静かに首を横に振った。

「まだ分からん。この一件はボス直々の命令でな。内容は予言者の胸の内ひとつに留めておくよう厳命されておる。故に私自身、まだ確信には至っていない。しかし、もし北

のマスターが大祭に非協力だった理由が、〃魔王襲来〃に深く関与していたなら——これは大事件だ」

唸る白夜叉と、絶句するジンと黒ウサギ。

十六夜と日向は納得したように相槌を打つ。

「ま、所詮はフロアマスターも脳味噌のあるひとりの何某だ。秩序を預かる者が謀をしないなんてのは、どこの世界でも幻想だな」

「ああ。仮に飛鳥が聞いていたら、いかにも不満を言いそうな話だ」

皮肉げに話す彼らの言葉に、白夜叉は真剣な声音で応じる。

「かもしれない。しかしなればこそ、我々は秩序の守護者として、その何某を正しく裁かねばならんのだ」

「けど目下の敵は、予言の魔王。ジンたちには魔王のゲーム攻略に協力して欲しいんだ」
サンドラの言葉に全員が首肯する。

魔王襲来の予言があった以上、これは新生〃ノーネーム〃の初仕事でもあるのだ。

ジンは事の重大さを受け止めるように、重々しい声で承諾した。

「分かりました。〃魔王襲来〃に備え、〃ノーネーム〃は両コミュニティに協力します」
「うむ、感謝するぞ。無事に魔王を退けた後、主犯には相応の制裁を加えると、我ら双女神の紋に誓おう」

「サラマンドラ」も同じく。——ジン、頑張つて。期待してる」
「わ、分かったよ」

ジンは緊張しながら了承する。

白夜叉は硬い表情を一変させ、哄笑を上げた。

「カツカツカ！ そう緊張せんでもよいよい！ 魔王はこの最強のフロアマスター、白夜叉様が相手をするゆえな！ おんしらはサンドラと露払いをしてくれればそれで良い。大船に乗った気でおれ！」

双女神の紋が描かれた扇を広げ、呵々大笑する白夜叉。

しかしジンが快諾する一方で、不満そうな顔振りの十六夜。

白夜叉は思わず苦笑を向ける。

「やはり露払いは気に食わんか、小僧」

「いいや？ 魔王つてのがどの程度か知るにはいい機会だし、今回は露払いでいいが——別に、どこかの誰かが偶然に魔王を倒しても、問題は無いよな？」

挑戦的な笑みを浮かべる十六夜に、隣の日向も諦めたように肩を竦める。

白夜叉は不適に微笑むと、鋭い眼差しで宣言した。

「よかろう。隙あらば魔王の首を狙え。私が許す」

頷き、日向たちはその場を後にするのだった。

一方その頃。

黄昏が過ぎ、夜の帳が下りる時間。

レティシアは焦燥の面持ちを浮かべ、飛鳥の行方を追っていた。

(くそ、私の失態だ！　いくら飛鳥でも、この時間帯にひとり危険過ぎる！)

漆黒の翼を広げ、空から市場を俯瞰しつつ、彼女は内心で歯噛みする。

北側に蔓延る悪鬼羅刹は、闇の中でこそ本性を現す者が多い。

この地域に食人の気がある鬼種や悪魔は少ないものの、現実の安全は保証できない。

(仮に飛鳥が向かうとすれば……そうだ、何か面白い展示物が公開されている場所は!?)

その閃きを頼りに、レティシアは境界壁の麓にある美術品の出展会場へと空路を向ける。

やがて岩壁を掘り進んで造られた会場の入り口に降り立った彼女は、翼を畳み、早速中へ入ろうとして、

「もしかしたらここに――」

「――ぎ、ぎやあああああああああ!!!」

突如響いた絶叫に、その思考を凍らせた。

途端、洞穴の中からわらわらと参加者たちが逃げ出して来る。

レティシアは逃亡者のひとりである犬耳の男の胸倉を掴み、声を荒げて事情を問う。
「中では何があった!? 答えろ!」

「か、影が……! 真っ黒い影と紅い光の群れが……!」
「影だと?」

「そ、そうだ。その影が長い髪の女の子と小さな精霊を追いかけて——」
ドン! と男を突き離す。

その少女と精霊が飛鳥たちである可能性は非常に高い。
阿鼻叫喚が渦めく中、次の異変は間もなく起きた。

「——!? なんだ、この音は……!?!」
衆人の悲鳴に次いで響く、不協和音を刻むリズム。

レティシアは不快げに耳を塞いだ。

「くっ! 急がなくては!」

翼を広げ、洞穴の回廊を突き抜けて飛ぶ。
程なくして、飛鳥と思われる声を聞いた。

「………つていなさい。落ちては駄目よ!」

「飛鳥!?! 何がっ——!?!」

駆けつけたレティシアは、言葉を切つて息を呑む。

彼女が展示会場で見たのは、洞穴を埋め尽くす何千、何万という魔性の群れ。そしてその中で小さな精霊を守つて戦う——久遠飛鳥の姿だった。

——境界壁・舞台区画・暁の麓。

——美術品・出展会場。

時は黄昏時まで遡る。

飛鳥は幼いとんがり帽子の精霊を肩に乗せ、境界壁の麓の街道を歩いていた。

「別に、取つて食おう、というわけじゃないの。ただ旅の道連れが欲しただけよ」

「ひゃ〜」

幼い精霊は飛鳥の肩で大の字に寝そべり、疲れた声を上げている。

飛鳥は売店で買ったクッキーを割ると、その欠片を精霊に分け与えた。

「はいコレ。友達の証よ」

「——!?!」

ガバツ！ と甘い匂いで起き上がる。

小さな彼女は自身の身の丈ほどのクッキーをシャリシャリとかじると、「キャツ

キヤツト」と愛らしくはしゃいで飛鳥の頭によじ登った。

「仲良くなったところで自己紹介しましょうか。私は久遠飛鳥よ。言える？」

「……あすか？」

「ええ、そう」

「あすか！」

元気に飛鳥の名を呼ぶとんがり帽子の幼い精霊。

飛鳥も満足そうに笑顔を見せた。

「ふふ、ありがとう。それじゃあ今度は、あなたの名前を覚えてもらえる？」

精霊は飛鳥の頭で立ち上がり、叫んだ。

「らってんふえんがー！」

「——？ ラッテン……？？」

やや驚いた顔をする飛鳥。

意味は分からないものの、この愛らしい精霊にしては少々厳ついイメージがある。

飛鳥は精霊を手の平に乗せて問いかけた。

「それがあなたの名前なの？」

「んー、こみゆー！」

「コミユ……コミユニテイの名前？　じゃああなたの名前は？」

「？」

意味が分からない、と言った様子で小首を傾げる幼い精霊。

(もしかして、個別の名前が無いのかしら……う?)

そこで飛鳥はレティシアの言葉を思い出す。

彼女たちは「群体精霊」と呼ばれる存在。

それならば、確かに集団名で呼ぶのが正しいのかもしれない。

それでも何だか煮え切らない飛鳥は、ふと閃いたように提案した。

「そうだわ。折角だから、私が名前をつけましょうか？」

「——？ んーん、らってんふえんがー！」

「ええ。だからそのラッテンフエンガーという名前の他に」

「んーん、まきえ」

とんがり帽子の精霊は、首を横に振って否定する。

「……マキエ？ それがあなたの名前？」

「んーん。らってんふえんがー！」

要領が掴めず、飛鳥は小さくため息を吐いた。

名前のことはひとまず隅に置いておき、彼女と一緒に出展会場を見て回る。

「……すごい数。こんなに多くのコミュニニティが出展しているのね」

展示品の前には、それぞれのコミュニティが持つ名前と旗印が下げられている。中でも目を引いたのは、キャンドルホルダーに旗印が刻まれた銀の燭台だった。

「製作・ウィル・オ・ウィスプ」？ あの歩くキャンドルを作ったコミュニティじゃない」

巧緻な細工で施された紋様は、旗印をモチーフにしたのだろう。

燃え上がる炎の印を刻んだ燭台は、まるで篝火のように温かく引き寄せられるようだ。

「コミュニティの旗印があるのと無いのでは、作品の表現も違うものなのね……」

そう言つてやや憂鬱そうにため息を吐く飛鳥。

（将来的に立派な『主催者』を目指すなら、やっぱり旗印が無いと締まりが無いわ。是が非でも魔王から取り戻さないとい）

内心で決意を一新しつつ、更に奥へと展示会場の回廊を進む。

ほどなくして、広い空洞に辿り着いた。

恐らくは、ここが会場の中心なのだろう。

より意匠が凝らされた出典物が陳列する中で、ふと中央に目を向けた飛鳥は大きく瞳を見開いた。

「あ、あれは……！」

他の全てを意識の隅に追いやってしまふほど、その作品に衝撃を受ける。

「紅い……紅い鋼の巨人？」

「おつきー！」

——そう。

大空洞の中心に佇む、紅い鋼で造られた巨人。

身の丈三十尺はあるだろう巨大なその寸胴は、この見事な作品たちが並べられる中でおお、ひとときわ圧倒的な迫力と存在感を放っていた。

「す、凄いわね。一体どこのコミュニティが……う？」

「あすか！、らってんふえんがー！」

とんがり帽子の精霊は目を輝かせ、飛鳥の肩から飛び降りる。

彼女の指差す看板には、確かに『制作・ラッテンフエンガー 作名・ディーン』と記されていた。

「まさか、アナタのコミュニティが作ったの？」

えっへん！ と胸を張るとんがり帽子の精霊。

人間より遙かに小さい彼らがこの巨軀の鉄人を造り上げるなど、生半可な労力ではなかつただらう。

飛鳥は心の底から感心したように呟いた。

「そう……凄いのね、『ラッテンフェンガー』のコミュニティは」

にはは、とはにかんで笑う幼い精霊。

よほど嬉しかったのだろう。

その姿に微笑みながら、飛鳥は再び周囲を見渡す。

「軽く見た感じだと、この紅い巨人だけじゃなく、大空洞に集められた展示品がメインの扱いみたいね。アナタたちのコミュニティがギフトゲームの勝者になるかもしれないわ」

はしやぎながら「らつてんふえんがー！」と叫び続けるとんがり帽子の精霊。

呆れながら摘まみ上げた飛鳥は再び彼女を肩に乗せ、他の展示品を見て回ろうと足を運ぶ。

——異変はその直後に起きた。

「……きゃ……!?!」

ヒュウ、と。

大空洞を一陣の風が吹き抜ける。

数多の灯火は一瞬で消え去り、飛鳥は小さく悲鳴を上げた。

「どうした!?! 急に灯りが消えたぞ!」

「気をつける、悪鬼の類かもしれない!」

「身近にある灯りを点けるんだ！」

周囲の観客たちも騒ぎ出し、混乱が波紋のように伝染する。

大空洞の最奥に不気味な光が宿ったのは、その時だった。

『ミツケタ……ヨウヤクミツケタ……!』

怨嗟と妄執を交えた怪異的な声が空洞内に木霊する。

飛鳥は咄嗟に傍にあつた燭台に備え付けのマッチで火を点けると、力を込めて叫んだ。

「この卑怯者！ 姿を隠さず出てきなさい！」

飛鳥の支配力のある声が響き渡る。

しかし犯人からの反応はない。

代わりに五感を刺激する笛の音色と、怪異的な声が響いて来た。

『——嗚呼、見ツケタ……! ムラッテンフェンガー! ノ名ヲ騙る不埒者ツ!!』

刹那、洞穴の細部からザワザワと這い寄るような音が聞こえ出す。

間もなく洞穴の暗闇から現れたのは——何千、何万という赤い瞳の大群だった。

途端に、観衆の1人が声を上げる。

「ね……ネズミだ!?! 一面全てが、ネズミの群れだ!!」

——そう。

地面を覆い尽くすほどの、蠢くネズミの大進行。

これには堪らず、飛鳥も背筋に悪寒が走った。

「で……出てきなさいとは言ったけど、いくら何でも出すぎでしょう!」

ひゃー、と悲鳴を上げるとんがり帽子の精霊。

飛鳥はネズミの大海に背を向けると、一目散に駆け出した。

「も、もういいわ! 自分たちの巣に帰りなさい!」

再び強制の言霊を口にする。

しかしネズミは止まるどころか、天井まで伝って飛鳥たちを追い立てる。

肩の上で震えているとんがり帽子の精霊に、1匹のネズミが襲い掛かった。

「ひゃ、」

「危ない!」

咄嗟に後ろへ跳び退く飛鳥。

慌てて出口へ向かおうとするも、我先にと逃げる観客たちが悲鳴を上げてひしめき合

う。

「どけえええッ!」

「きゃあ!」

「ど、どうなってるんだ!」

「お、俺が先だ！ 邪魔すんじゃねえ！」

「押すな押すなどけ！」

「駄目だ、もうそこまで来てる！ にげられ」

「いいから協力し合って逃げなさい!!!」

「一二分かりましたツツ!!!」

飛鳥の怒りと焦りの大一喝。

観客たちは一転し、一糸乱れぬ動きで洞穴内を爆走する。

彼女は最後尾でネズミの進行から逃れつつ、敵の存在をいぶかしむ。

(支配するギフトが消えたわけじゃない……!! ならどうして……!?)

苦し紛れにギフトカードから白銀の十字剣を取り出して振るうも、ネズミは恐れることなく跳び掛かる。

その奇妙な行動から、飛鳥はハッと気がついた。

(……まさか、この子が狙われている……!?)

肩に乗せた、幼い精霊に視線を落とす。

小さなとんがり帽子の精霊は、飛鳥にしがみついたまま泣きそうな顔で怯えていた。

「……………」

狙いがこの精霊ならば、肩から振り落とすだけで飛鳥は難を逃れるだろう。

しかしその怯え震える幼い姿を見捨てるなど、彼女の誇りが許さなかった。

飛鳥は脆弱な意思を振り払い、服の胸元を大胆に開けて精霊を中へと押し込んだ。

「むぎゅ!？」

「入っていなさい。落ちては駄目よ!」

飛鳥は意を決し、蠢く大地を駆け出した。

紅いドレスから覗く素肌は、すでに数ヶ所から真つ赤な鮮血が滲んでいる。

(出口まで、もうそんなに距離は無いはず……!)

必死に走る飛鳥の背に、いよいよ魔性の群れが差し迫ろうとしたその時——突如洞穴内を漆黒の影が這い尽くし、無尽の刃が顕現した。

「鼠風情が、我が同胞に牙を突き立てるとは何事だ!？ 分際を痴れこの畜生共ツ!!」

影は洞穴内を竜巻の如く駆け巡り、魔性の群れのことごとくを刻み尽くして呑み込んでゆく。

「か、影が……あの数を一瞬で……!？」

唾然と眩き振り返る飛鳥。

そこで2度驚嘆する。

駆けつけた声からレイテシアであることは分かっていたが、その容姿の変わりように絶句した。

愛らしい少女の顔は妖艶な色香が漂う大人の女性のものへと変貌し、美麗な金髪は愛用のリボン解いて眩い煌めきを放っている。

メイド服は真紅のレザージャケットに切り換わり、拘束具を彷彿とさせる奇形のスカートを穿いていた。

レティシアは伶俐な顔を怒りで歪ませ、吸血鬼の証である牙を獠猛に向いて叫び散らす。

「術者はどこにいるッ!? 姿を見せろッ!! このような往来の場で強襲した以上、相応の覚悟あつてのものだろう!? ならば我らが御旗の威光、私の牙と爪で刻んでやる! コミュニティの名を晒し、姿を見せて口上を述べよ!!!」

激昂したレティシアの一喝が轟いた。

しかし返事もなければ気配もない。

どうやら術者は逃げ去ったようだ。

飛鳥は息を呑みながら、激変した彼女の背中に声を掛ける。

「アナタ……レティシアなの?」

「ああ。それより飛鳥、何があつたんだ? 少数がいたとはいえ、鼠如きに遅れを取るとはらしくないぞ」

普段の口調で振り返るレティシア。

その表情は大人になっても温和なままだが、先ほどの力を垣間見た飛鳥はポカンとしながら呟いた。

「……アナタ、こんなに凄かったのね」

「は？」

と小首を傾げるレティシア。

しばらくして賛辞だと理解すると、やや不機嫌そうに返答する。

「あ、あのな主殿。褒められるのは嬉しいが、その反応は流石に失礼だぞつ。私はコレでも元・魔王にして吸血鬼の純血！ 誇り高き“箱庭の騎士”！ 神格を失ったとはいえ、畜生を散らすのは造作も無いこと。あの程度なら幾千万相手したところで問題は無いっ」

唇を尖らせ、拗ねたように語るレティシア。

その仕草は間違いなく普段の愛らしい彼女のものだ。

だが飛鳥の目には映らない。

彼女は俯いたまま、複雑そうに独り言ちた。

「それに比べて、私は何も……」

「あすかつ！」

キュポンツ！ と飛鳥の胸元から、とんがり帽子の精霊が飛び出る。

半泣きになりながらも、彼女は飛鳥の首筋に抱きついて歓喜の声を上げた。
「あすかっ！ あすかあっ……！」

「ちよ、ちよっと」

泣きそうな、でも嬉しそうな声を上げて抱きつくとながり帽子の幼い精霊。

彼女なりに感謝を示しているのだろう。

その様子にレティシアは苦笑しながら首を振った。

「やれやれ、すっかり懐かれたな。日も暮れて危ないし、今日のところは連れて帰ろう」

「そ、そうね」

飛鳥は戸惑いながらも小さく頷く。

これ以上の襲撃が無いとも言切れない。

彼女たちは朱色のランプが照らす街を進み、
“サウザンドアイズ”の店舗に戻ることになった。

第15話 飛鳥の決意

——境界壁の展望台。

——“サウザンドアイズ” 旧支店。

「お風呂へ駆け足ッ!! 今直ぐですッ!!」

店先で飛鳥を迎えた割烹着姿の女性店員は、彼女を見るや否や八重歯を剥いて大い喝。

「そんな薄汚れた格好で“サウザンドアイズ”の暖簾をくぐろうなどは言語道断！衣類をこちらへ！洗濯します！解れは修繕してあげますから感謝しなさい！

……は？ 生傷？ そんなものはお風呂に入れば治ります!! さっさと身を清めてください!! お店が汚れてしまうでしょうがッ!!」

スポポポポーンとあつという間に服を脱がされ、露天風呂のように空が開けた湯殿に放り込まれた飛鳥。

唖然とした顔でポツリと立ち竦む彼女の手には、いつの間にか渡された手拭いだけが握られていた。

「……別に、そこまで言わなかったっていいじゃない」

しかし汚れていたのは確かである。

飛鳥は気を取り直しかけ湯で身を清めると、つま先からそつと湯船に浸かっていく。チャポン、と肩まで沈み込むと、途端にドツと疲れが噴き出した。

「ふ〜」

思わず気の抜けた吐息が漏れる。

ふと自分の身体を見てみれば、傷口が見る間に回復し始めていた。

その劇的な効能に感心しつつ、飛鳥は夜空を見上げて考える。

(さっきのネズミ……どうして私のギフトが効かなかったのかしら?)

飛鳥の力が通用しなかった場面は、これまでも何度が存在した。

1度目は、「ペルセウス」のリーダー・ルイオス。

2度目は、「ノーネーム」の工房に眠る宝剣・聖槍・魔弓といったギフト。

例えを挙げれば一目瞭然だが、いずれも彼女より高い霊格をその身に宿したモノたちだ。

(「霊格」というものをまだ完全に理解したわけではないけれど……少なくともネズミに劣るってことはないはずよ)

飛鳥は黒ウサギから以前聞いた話を思い出す。

曰く「霊格」とは生命の階位であり、それを手にするには大きく分けて2つの方法が

存在する。

1つ、〃世界に与えた影響・功績・代償・対価によって得る〃

2つ、〃誕生に奇跡を伴う遍歴がある〃

本来であればただの人間に過ぎないはずの飛鳥が、なぜこれほどまでに高位の霊格を宿すことになったのか。

その原因を、黒ウサギは後者にあると見立てていた。

つまり飛鳥は、誕生の際に何かしらの特別な事情があつたのか、もしくは先祖に修羅神仏へ属する超常存在がいた可能性があるということだ。

彼女の力は未だ磨かれぬ原石のままだが、それでもかなり高い霊格を備えていると、黒ウサギは誇らしげに語っていた。

(なら……考えられる理由は1つ)

飛鳥は受け入れがたい事実には歯噛みする。

あの時、支配の力が通用しなかった原因。

それは即ち——彼女よりも強力な支配をすでに他者から受けていた、と考えるのが妥当だからだ。

(……選択、間違つたかしら)

ドボン！ と湯に深く沈み込み、ブクブクと膝を抱えて悩む飛鳥。

彼女の選んだ「ギフトを支配するギフト」というスタンスは、そもそも別途に強力なギフトが無ければ意味を成さない。

かといって、原石のままでは高位の恩恵は操つれない。

ならばやはり、この力は人心を操る方向性に伸ばすべきではなかったのか。

そんな考えが脳裏をよぎるが――

「……でも私は、そんなもの望んでないわ」

飛鳥はそのプライド以上に――正義感の強い少女だった。

心を歪めてまで相手から得る「^{YES}是」に、一体どれほどの価値があるというのか。

誇り高い彼女だからこそ、今日まで真っ直ぐに生きてこられたのだ。

飛鳥は湯船から立ち上がり、拳を握って宣言する。

「あの幼い精霊がいる限り、必ずまた襲ってくるはず！ その時に決着をつけてみせる

わ！」

「よし、その意気だ」

きやつ！ と突然聞こえたその声に、飛鳥は慌てて湯船に沈み込む。

キョロキョロと真っ赤な顔で辺りを見回し、狼狽えた声で問いかけた。

「そ、その声はもしかして日向君？」

「ああ。男湯に居るぞ」

声のする方に視線を向ければ、高い木製の仕切りが設けられていた。恐らくは、この仕切りの向こうに男性用の湯殿があるのだろう。

覗かれていたわけでは無いと知り、飛鳥は落ち着きを取り戻して問いかける。

「いつから入っていたの？」

「最初からだな」

「……変態」

「いや、何でだよ」

日向の苦笑したような声が響いてくる。

飛鳥は更に気になったことを尋ねてみた。

「日向君以外にも誰かいるの？」

「いや、俺だけだ。最初は十六夜とジンも居たけど、飛鳥が来る少し前に上がったよ」

「そう。日向君で、結構長風呂なのね」

「まあな」

クスリ、と飛鳥は笑みをこぼす。

すると今度は、日向の方から話が来た。

「それよりも、何かあったのか？」

「え？」

不意に投げかけられたその問いに、飛鳥は少しだけ瞳を丸くする。

「何だか、悩んでいるみたいだっからさ」

「……別に、何でもないわ」

思わず素っ気ない口調で返す飛鳥。

日向は気にせずに話を続けた。

「そっか。まあ、何でもないならそれでいいさ」

それだけ告げると、日向はそれ以上の詮索を止めた。

飛鳥は少しだけ迷った末、おずおずと口を開こうとして、

「あの、日向く——」

「飛鳥さん！ お怪我のほどは大丈夫でございませうか!？」

スパン！ と勢い良く湯殿の扉を開け放ち、黒ウサギが入ってきた。

素肌を手ぬぐいで隠した彼女は、慌てて飛鳥に駆け寄るが、

「待って待って黒ウサギ！ 家主より先に入浴とはどういう見でやつほおおーい!!」

「きゃああああ!!」

バシャン！ ズゴン!!

と同じく素っ裸な白夜叉に背後から飛びつかれ、頭から湯殿に突っ込んだ。

しかしすぐさまバシヤッ！ とめげずに湯船から立ち上がると、飛鳥の肩を掴んでポ

「ディチェックをしはじめる。」

「き、傷は大丈夫でございますか？ 細菌は問題ないですか？ 乙女の肌に痕が残るようなのも御座いませんか？ 痩せ我慢していませんか？ 本当に大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫よ。湯船に浸かったらすぐ治ったわ」

頬を赤らめて困っていると、白夜叉は飛鳥の素肌をまじまじと見つめて呟いた。

「……ふむ。飛鳥の身体は15歳とは思えん肉付きだの」

「は？」

素つ頓狂な声を上げる飛鳥と黒ウサギ。

白夜叉は顎に手を当てつつキラリ、と目を輝かせると、

「飛鳥の体は鎖骨から乳房まで豊かな発育をしているのにもかかわらず乳房から臍へのボデイラインには一切の崩れが無くされど触れば柔らかかな女人の肉であることは間違いないくしかも臀部から腿への素晴らしい脾肉を揉みほぐせば指と指の間に瑞々しい少女の柔肌が食い込むことは確定的に」

スパアーンツ!!

と木製の桶が2つ、白夜叉の顔面に直撃する。

冒頭から最後まで3秒とかからない高速の、いや神速のセクハラ発言だった。

「……ええ？ 何？ 白夜叉ってこんな人だったの？」

「ええ、まあ。凄い人ではあるのですが。それ以上に残念な御方なのでございます」
まるで生ゴミでも見るかのように冷めた視線を向ける飛鳥に、黒ウサギも諦めたように相槌を打つ。

するとそれまで静観していた日向が、男湯から呆れたように声をかけた。

「何だか、急に騒がしくなったな」

「あれれ？ 日向さんも御入浴中でしたか？」

「まあな」

日向が答えたところで、またもや女湯に繋がる脱衣場の扉が開け放たれた。
次に入ってきたのは耀にレティシア、そしてとんがり帽子の小さな精霊だ。

「あすか！」

スタタタタ、と走り寄った精霊は飛鳥の身体をよじ登る。

こそばゆいのを我慢しながら、飛鳥は耀たちに問いかけた。

「どうしたの？ 皆して入浴？」

「うん」

「たまにはいいなと思ってな。せつかく集まったのだから、今日のことや明日の予定を話し合っておこうと思立ったのだ」

「ああ、そういうこと」

「日向もいるなら丁度良い。悪いが、もう少しだけ入浴を楽しまないか？」
「了解」

2人きりの時から一転、騒がしくなった湯殿で、日向たちは話し合いを始めるのだつた。

一方その頃。

十六夜とジンは用意された来賓室で、例の女性店員と歓談に勤しんでいた。

彼らは浴衣姿で海苔煎餅を齧りながら、この店がどうやって転移したのか質問する。

客人の話し相手に嫌々ながらも指名された彼女は、仕方が無さそうに返答した。

「ああ、この店ですか？ 別に移動してきた訳じゃありません。境界門アストラルゲートと似通ったシステムと言えば分かります？」

「いや全然」

即答する十六夜。

店員はため息を吐き、少し碎けた口調で説明する。

「要約すると、数多の入り口が全て一つの内装に繋がるようになっていて、例えば蜂

の巢……ハニカム型を思い浮かべてくれれば分かりやすいはずですよ」
「なるほど。それで店内が外観よりも大きな内装になっていたんですね」

ジンは納得したように頷いた。

十六夜は興味津々な顔つきで続きを促す。

「へえ？　じゃあ本店も支店も全て兼ね備えている、ということか？」

「いえ、違います。けどそうね、語弊がありました。境界門と違う点はそこです。境界門は全ての階層に繋がっているのに対し、『サウザンドアイズ』の出入り口は各階層に1つずつハニカム型の店舗が存在しているの」

「ふうん。つまり『七桁のハニカム型支店』『六桁のハニカム型支店』って感じなのか」

「そう。無論、本店への入り口は1つしかありませんが」

頷く十六夜に、女性店員は言葉が続ける。

「この高台は立地が悪く、閉店となった過去の店。今回は白夜叉様が共同祭典に來られるということなり、一時的にこの店への出入り口を繋げ、私室部と店内の空間を別に分けているの。店内へと繋がる正面玄関は開かない仕組みになっているので悪しからず」

「あいよ……と、そうだ。最後に1つ聞いておきたいことがあるんだが」

「何ですか?」

途端に真剣味を帯びる十六夜に、緊張感を高める女性店員。

彼は少し間を空けた後、満を持して問いかけた。

「……ぶつちやけ、日向のことはどう思ってるんだ?」

ズルツとこける女性店員。

ジンは隣で苦笑している。

一転して悪戯好きそうな笑みを浮かべる十六夜に、彼女は呆れた声音で返事をした。

「……別に、どうも思っていないですよ。そもそも、私と彼には何の接点もありませんし」

「まるつきり無いわけでもないだろ? ギフトゲームで手に入れた金品は、いつもアイ

ツに換金させに行かせてるんだし」

「だから毎回彼が来ていたんですか……それでも、それはあくまで取り引き上での関係

です。私個人としての関わりは、やはりありませんよ」

「恋愛事に興味が無いのか?」

「そういう訳ではありませんが……今は仕事の方が大事ですし」

淡々と答える女性店員。

いつの間にやら恋愛談にふけていると、湯殿から飛鳥たちが上がってきた。

十六夜は備え付けの浴衣に着替えた女性陣を一瞥すると、ニヤリと笑って口を開く。

「……ほう、コレはなかなかいい眺めだ。そうは思わないか御チビ様？」
「はい？」

十六夜はキラン、と瞳を輝かせ、

「黒ウサギやお嬢様の薄い布の上からでも分かる二の腕から乳房にかけての豊かな発育は扇情的だが相対的にスレンダーながらも健康的な素肌の春日部やレティシアの髪から滴る水が鎖骨のラインをスウツと流れ落ちる様は視線を自然に慎ましい胸の方へと誘導することは確定的に」

スパアーン!!

と、本日2度目の桶ツツコミ。

もちろん耳まで紅潮させた飛鳥と、ウサ耳まで紅潮させた黒ウサギによるものである。

「変態しかいないのこのコミュニティは!？」

「白夜叉様も十六夜さんも皆お馬鹿ですツ!!」

「ま、まあ2人とも落ち着いて」

慌てて彼女たちを宥めるレティシア。

その裏側で、まるで同好の士を得たかのように握手を交わす十六夜^{変態}と白夜叉^{変態}。

「……君も大変ですね」

「……はい」

さらにその裏側で、虚しい哀愁を分かち合う女性店員苦勞人とジン苦勞人。

ところどころで様々な友情が築かれる中、ひとり無関心な耀は小首を傾げて問いかける。

「それで、十六夜たちは何をしていたの？」

「ん？ ああ、ちよつと歓談をな。内容はこの店員が日向と恋仲になりたいという」

「そんな事は一言たりとも言つてません!!」

顔を真っ赤にして叫ぶ女性店員。

しかしそれを聞いた女性陣は、獲物を見つけた狩人のように妖しく瞳を光らせた。

「あら、それは気になる話ね。ぜひ私たちを混じえた上で詳しく聞かせてもらいたいわ」

「うん。ちなみに拒否権は無し」

「何を言っているんですかアナタたちは!？」

意地の悪い顔をする飛鳥と耀に、盛大に嫌な予感がする女性店員。

彼女は黒ウサギに助けを求めぬ。

「ちよ、ちよつと、アナタからも何とか言つてください!」

「あ、いや、実は黒ウサギも、ちよつとだけ聞いてみたいかな……と」

気まづげに答える黒ウサギ。

齡200の彼女とて、月の兎としてはまだまだ恋に恋するお年頃。

恋愛事はいつだって興味の種なのだ。

「くっ！ し、しかし、私にはまだ仕事がありますし……」

「構わんよ。祭りの日くらいおんしも休め」

「オーナー!?!」

敬愛する上司にまで裏切られ、徐々に逃げ道を失う女性店員。

ジリジリと後ずさるが、飛鳥たちも逃がすものかとにじり寄る。

額に冷や汗を浮かべる彼女だったが——その時、不意に誰かと背中がぶつかった。

「……と、大丈夫ですか?」

「え?」

聞こえてきたのは日向の声だ。

そこで女性店員は閃いた。

この場を取められるのは、もはや彼を置いて他にいないと。

彼女は期待を胸に振り返るが——

「あ、アナタからも何とか言って下さい！ 私とアナタは、決してそういう関係ではな

……い……と」

言葉を失う女性店員。

なぜか放心したように日向を見つめて固まっている。

日向といえは風呂上がりで、服装も例に漏れず浴衣姿だ。

しかし金髪碧眼という日本人にしては少々変わった容姿の十六夜と比べて、日向の黒髪黒目は純粹な意味で似合っていた。

日向は首を傾げつつ、目の前でポカンとしたままの女性店員へ話しかける。

「あの……どうかしましたか？」

「……ええっ!? あ、いえ! その……」

一気に顔を真っ赤に染め上げ、わたわたと狼狽える女性店員。

不思議に思った日向は彼女に顔を近づけると、綺麗な蒼い瞳を覗き込んだ。

「大丈夫ですか? 何だか顔が赤いような……」

「あ、や……いい、い……!」

「……」

更に頬を紅潮させる女性店員。

次第に目元を潤ませた彼女は、スツと右手を振り上げると、

「いやー!」

「バチーン!」

と、日向の頬を全力で叩いた。

来賓室に乾いた音が響き渡る。

女性店員は赤い顔を俯けたまま、日向の背後をそそくさと走り去って行った。

顔を別の意味で真つ赤な手形に染めた日向は、しばしの間呆然とすると、

「……え？　なんで？」

と呟いた。

傍で成り行きを静観していた十六夜たちは、そんな彼らをニヤニヤと面白そうに見守っているのだった。

——その後。

気を取り直した一同は、来賓室で腰を下ろしていた。

レティシアは女性店員の様子を見てくると言つて席を離れており、この場には彼女を除いた「ノーネーム」の面々と白夜叉、そしてとんがり帽子の幼い精霊が集まっている。

上座に座る白夜叉は、テーブルの上に両肘を置くと、これ以上なく真剣な顔で、

「それでは皆の者よ。今から第一回、黒ウサギの審判衣装をエロ可愛くする会議を」

「始めません」

「始めます」

「始めませんっ!」

「からのく?」

「始めませんってば!」

アホな議題を挙げる白夜叉と、それに悪ノリする十六夜と日向。

速攻で断じる黒ウサギ。

日向は苦笑を浮かべて謝りつつ、白夜叉に先を促した。

「ははは、悪い悪い。まあ、冗談はこれぐらいにするとして、そろそろ本題に入ろうぜ白夜叉?」

「いや、満更本筋から逸れてもいないのだ。実は明日から始まる決勝戦の審判を、黒ウサギに依頼したくての」

「あやや。それはまた、唐突な御話でございますね。何か御理由でも?」

「うむ。おんしらが起こした騒ぎで、〃月の兎〃が来ていると公になってしまったの。明日からのギフトゲームで見られるのではないかと、期待が高まっているらしい。仮にも〃主催者^{ホスト}〃として、観客の要望にはなるべく応えてやりたいのだ。そこで黒ウサギには、正式に審判・進行役を依頼させて欲しいのだ。無論、別途の金銭も用意しよう」

なるほど、と全員が納得する。

黒ウサギはピンと姿勢を正すと、真面目な表情で頷いた。

「分かりました。明日のゲーム審判、及び進行は、この黒ウサギが務めさせて頂きます」
 「うむ、感謝するぞ」

満足そうに頷く白夜叉。

そこで耀が挙手して問いかけた。

「ね、白夜叉。私が明日戦う相手ってどんなコミュニティ？」

「すまんがそれは教えられん。『主催者』がそれを語るのはフェアではなかる？ 教え
 てやれるのはコミュニティの名前までだ」

パチン、と白夜叉が指を鳴らすと、それぞれの手元に昼間と同じ羊皮紙が現れる。

文面を見た飛鳥は、驚いたように目を丸くした。

「『ウィル・オ・ウイスプ』に——『ラッテンフェンガー』ですって？」

「うむ。この2つは珍しいことに六桁の外門、1つ上の階層からの参加だな。格上と思つてよい。詳しくは話せんが、余程の覚悟はしておいた方がいいぞ」

白夜叉の真剣な忠告に、コクリと頷く耀。

一方の日向は、『ギアスロール』
 『契約書類』を読んで呟いた。

「『ラッテンフェンガー』……なるほど、『ラッテンフェンガー』のコミュニティか。なら

明日の相手はさしずめ、ハーメルンの笛吹き道化だつたりするのかわ？」

え? と飛鳥が声を上げる。

しかしそれは、隣に座る黒ウサギと白夜叉の驚嘆の声で掻き消された。

「ハ、ハーメルンの笛吹き」ですか!」

「待て、どういふことだ小僧。詳しく聞かせろ」

2人の剣幕に、思わず瞬きする日向。

白夜叉は幾分声のトーンを下げ、質問を具体化した。

「ああ、すまんの。最近召喚されたおんしらは知らんのだな。——ハーメルンの笛吹

き」とは、とある魔王の下部コミュニティだったものの名だ」

「何?」

その言葉に真っ先に反応したのは十六夜だ。

日向たちも真剣な面持ちで話を伺う。

「魔王のコミュニティ名は『幻想魔道書群』^{グリムグリモワール}。全二〇〇篇以上にも及ぶ魔書から悪魔を

呼び出した、驚異の召喚師が続べたコミュニティだ」

「しかも一篇から召喚される悪魔は複数。特に目を見張るべきは、その魔書の1つ1つに異なった背景の世界が内包されていることです。魔書の全てがゲーム盤として確立されたルールと強制力を持つという、絶大な魔王でございました」

「——へえ?」

十六夜の双眸が鋭く光る。
黒ウサギは説明を続ける。

「けどその魔王はとあるコミュニティとのギフトゲームで敗北し、この世を去ったはずなのです。……しかし日向さんは、『ラッテンフェンガー』が『ハーメルンの笛吹き』だと言いました。童話の類は黒ウサギも詳しくないですし、万が一に備えてご教授して欲しいのです」

「そういうことだったのか」

納得したように頷く日向。

そこで彼は、2つ隣の十六夜と視線を交わす。

彼らはコクリと意志疎通すると、間に座るジンの肩をそれぞれ掴み、

「よし、事情は把握した」

「ならここは、我らが御チビ様にご説明願おうか」

「え？」

突然話を振られて困惑するジンに、日向と十六夜は左右でそつと耳打ちする。

「……大丈夫だ。こういう時のために、これまで頑張ってきたんだらう？」

「……早速見せ場が来たんだ。成果を見せてやれ」

「は、はい」

皆の視線が集まる中、コホンと咳払いするジン。

そしてゆっくりと話し始めた。

「ラッテンフェンガー」とはドイツという国の言葉で、意味はネズミ捕りの男を指します。このネズミ捕りの男とは、グリム童話の魔書にある「ハーメルンの笛吹き」を示す隠語です」

ふむ、と頷く一同。

「大本のグリム童話には、創作の舞台に歴史的考察が内包されているものが複数存在しています。『ハーメルンの笛吹き』もその一つ。ハーメルンとは、舞台になった都市の名です」

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き」には、原型となった碑文がある。

——1284年

聖ヨハネとパウロの日 6月26日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人の

ハーメルン生まれの子供らが誘い出され、

丘の近くの処刑場で姿を消した——

この碑文はハーメルンの街で起きた実在する事件を示すものであり、一枚のステンドグラスと共に飾られている。

後にグリム童話の一篇として、〃ハーメルンの笛吹き〃の名で綴られる物語となったのだ。

「ふむ。ではその隠語がなぜにネズミ捕りの男なのだ？」

「グリム童話の道化師が、ネズミを操る道化師だったとされるからです」

白夜叉の質問に滔々^{とうとう}と答えるジン。

そのかたわらで、飛鳥は静かに息を呑んだ。

(ネズミを操る道化師……ですって……?)

先の襲撃が脳裏を掠める。

そういえば襲われた際、不協和音のような笛の音を聞いた。

「ふーむ。〃ネズミ捕り道化〃と〃ハーメルンの笛吹き〃か……となると、滅んだ魔王

の残党が〃火龍誕生祭〃に忍んでおる可能性が高くなってきたのう」

「YES。参加者が〃主催者権限〃^{ホストマスター}を持ち込むことが出来ない以上、その路線はとても

有力になってきます」

「あん？　なんだそれ、初耳だぞ」

「どういうことなんだ？」

十六夜と日向の疑問に、白夜叉は思い出したように説明する。

「おお、そうだったな。魔王が現れると聞いて、最低限の対策を立てておいたのだ。私の

“主催者権限”を用いて、祭典の参加ルールに条件を付け加えることな。詳細はコレを見よ”

白夜叉がピツと白い指を振ると、日向たちの目の前に光り輝く羊皮紙が現れた。

『§ 火竜誕生祭 §

・参加に際する諸事項欄

1、一般参加は舞台区画・自由区画内でコミュニケーションのギフトゲームの開催を禁ず。

2、 “主催者権限”を所持する参加者は、祭典の “主催者” に許可なく入ることを禁ず。

3、 祭典区画内において参加者の “主催者権限” の使用を禁ず。

4、 祭典区域にある舞台区画・自由区画に参加者以外の侵入を禁ず。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホスト

マスターの名の下、ギフトゲームを

開催します。

“サウザンドアイズ”印

“サラマンドラ”印』

文面を読み終え、日向と十六夜はそれぞれ呟く。

「“参加者以外はゲーム内に入れない”、“参加者は主催者権限を使用できない”……か」

「確かにこのルールなら、魔王が襲ってきてても“主催者権限”を使うのは無理そうだな」
「うむ。まあ押さえるところは押さえたつもりだ」

そっか、と納得したように頷く2人。

一方の黒ウサギは、ジンに対して意外そうに声をかけた。

「けど驚きました。ジン坊ちゃん、どこで“ハーメルンの笛吹き”を知ったのです？」

「べ、別に。日向さんや十六夜さんに地下の書庫を案内している時に、ちよつと目に入っただけで……」

「ははは、謙遜してなくていいんだぞ？」

照れたように誤魔化すジンを、日向はガシガシと頭を撫でて褒めてやる。

ジンは困り顔になりながらも、どこか嬉しそうに笑っていた。

「ふむ、そうか。何にせよ情報としては有益なものだったぞ。サンドラの顔に泥を塗らぬよう監視はつけておくが——万が一の際は、おんしらの出番だ。頼むぞ」

“ノーネーム”一同は頷いて返す。

しかし飛鳥だけは、胸中で不安の影が渦巻いていた。

（“ラッテンフェンガー”が魔王の配下……？ なら、この子は——？）

彼女の膝上でやすやすと寝息を立てている、とんがり帽子の幼い精霊。

彼女もまた、自らの出自を“ラッテンフェンガー”だと語っていた。

だがこの小さな精霊が、そんな邪悪な存在であるとは思えない。

飛鳥はよほどそのことを皆に伝えようかと悩んだが、結局その場で口に出すことは出来なかった。

思い詰めたように、彼女は顔を俯ける。

その姿にただひとり、日向だけが密かに気づいていたのだった。

会議が解散となった後。

自室に戻ろうと廊下を歩いていた飛鳥の背を、後ろから日向が呼び止めた。

「飛鳥、ちよつといいか？」

「え、日向君？」

突然の背後からの呼び掛けに、飛鳥は少々驚いたように振り返る。

「どうかしたの？」

「んー……やつぱり、ちよつと気になってな。なあ飛鳥、本当は何か、悩み事があるんじゃないか？」

「……！　そ、それは……」

日向が頬を掻きながら答えると、飛鳥は気まずそうに視線を逸らす。

今も自分の手の中で眠るとんがり帽子の精霊のことを、ここで日向に話すべきか迷っていた。

「ごめんな、別に無理して打ち明けてくれなくてもいいんだ。飛鳥が話したくなったら話せばいい。ただ俺でよければ、いつでも相談に乗るからな。伝えたかったのはそれだけだ。それじゃあな」

日向は笑うと、手を振って踵を返そうとする。

飛鳥はきゅつと口元を結ぶと、意を決して彼の背中を呼び止めた。

「ま、待って日向君！」

「ん？ どうした？」

「その、実は……」

「……なるほどな。その子のコミュニティもまた、『ラッテンフエンガー』を名乗っているわけか」

「ええ。ただ私には、どうしてもこの子たちが魔王に関係しているとは思えないのよ」

「そうか……その子は、他にも何か言ってたか？」

「特に重要そうなことは何も……あっ」

日向の問いに、飛鳥は思い出したように口を開いた。

「確か……『マキエ』がどののと言っていたわ」

「『マキエ』？」

「ええ。日向君には意味が分かる？」

「んー……いや、流石に思い浮かばないな」

日向はしばし真剣な顔で考えるも、すぐさま苦笑しながら首を振った。

飛鳥は「そう」と呟くと、どこか不安そうに日向を見つめる。

「……ねえ、日向君。私は一体、どうしたらいいと思う?」

飛鳥の表情からは、様々な感情を感じ取れた。

この小さな精霊を信じるか否か、たとえ信じたとしても、果たして自分に守りきることが出来るだろうか。

日向は優しげに微笑むと、迷うことなく返答した。

「決まってるさ。飛鳥の好きにすればいい」

「え?」

飛鳥はキョトンとまぶたを瞬く。

日向はゆっくりと言葉を続けた。

「その子が魔王に関係しているにしろ、そうでないにしろ、飛鳥はその子のことを信じたかと思ったんだろ? なら最後まで、とことん信じ抜いてやればいいさ。誰に何と言われようが、自分の信じた道をどこまでも真っ直ぐに貫き通す。それこそが俺の知る、久遠飛鳥」って人間の在り方だよ」

飛鳥を瞳を丸くさせ、心底驚いたように啞然とする。

やがて小さく息を吐くと、呆れた顔で苦笑した。

「……ふふ、そうね。その通りだわ。先の分からないことをうじうじ悩んでいるなんて、私らしくないものね」

「ああ。飛鳥はいつもお転婆なくらいが丁度いいさ」

「あら、それは聞き捨てならないわね。これほど物静かなレディを捕まえてくすつ、と2人は苦笑する。

「……何だか、憑き物が取れたみたいだわ」

「それは良かった。ま、きつと大丈夫さ。それでも万が一間違えて、飛鳥が危険に晒されたその時は……」

「その時は？」

小首を傾げる飛鳥の前で、日向は朗らかに笑つて宣言する。

「その時は、俺が必ず守つてやるさ」

「……あつ」

その言葉に、飛鳥は少し頬を染めた。

思わず、視線を下に俯ける。

しかしすぐさま口元に笑みを浮かべると、自信たつぷりに顔を上げた。

「ふふふ、ありがとう日向君。でも結構よ。だって私は、万に一つも間違えないもの」
「ははは、確かにその通りだな」

飛鳥は傲慢な態度で言い渡す。

そこに先程までの杞憂は無い。

互いに言葉を交わす中で、飛鳥はそつと小さく呟いた。

「……本当にありがとう。日向君」

「ん？ 何か言ったか？」

「いいえ。何でも無いわ」

どこか嬉しそうに笑う飛鳥に、日向は首を傾げて疑問符を浮かべる。

彼女は背を向けて歩き出すと、最後に顔だけを振り向かせて声を掛けた。

「ふふ、それじゃお休み。日向君」

日向は一瞬呆然としながらも、同じく笑って言葉を返す。

「ああ。お休み」

日向は飛鳥の背中を見送った後、不意に窓の外へと視線を向けた。

月明かりが照らす夜陰の街は、昼間の喧騒が嘘のように静かな景観に満ちている。

街の至る所で仄かに輝くペンダントランプは、まるで夜空に浮かぶ星々のように暖かな光を放っていた。

日向たちが過ごす北側の1日は、こうして次第に更けていく。

誰も居ない廊下で独り佇んだ日向は、瞳を細めるとふつと小さく呟いたのだった。

「……『撒き餌』、か」

第16話 造物主達の決闘

——境界壁の展望台。

——“サウザンドアイズ”旧支店。

翌日の早朝。

宛てがわれた和室で耀が三毛猫と戯れていると、不意にふすまの向こうから声がした。

「耀、ちよつといいか？」

「……日向？ うん、平気だよ」

了承を受け、日向はふすまを開けて入室する。

部屋に入ると、まずは申し訳なきように謝罪した。

「おはよう。悪いな、こんな朝早くに押しかけて」

「おはよう。ううん、気にしなくていいよ」

耀は微笑んで首を横に振る。

と同時に、小首を傾げて問いかけた。

「それで、一体どうしたの？」

「ああ。……黒ウサギから聞いたよ。今日のゲーム、補佐の参加を断つたらしいな」

「……うん」

耀は日向から視線を外し、コクリと小さく頷いた。

その様子を見つめつつ、日向は言葉を続ける。

「昨晚白夜叉が言っていた通り、今回の相手は格上だ。それでも、本当にひとりで戦うつもりなのか？」

「うん。そのつもり」

日向とは目を合わさないまま答える耀。

日向は真面目な面持ちで確認する。

「それは、何か勝算があつてのことなのか？ それとも、何か自分なりにそうしたい理由でもあるのか？」

「……」

「もしそうなら、俺から言うことは何も無いよ。余計なお節介を焼いて悪かった。……けど、もしそうじゃないなら話は別だ」

何も言わず、耀は僅かに顔を俯ける。

その態度に、日向の予想は確信に変わる。

「なあ耀。もしかしてお前は……仲間^ニに頼る気が無いんじゃないのか？」

「……ッ！」

その一言に、彼女の瞳が明らかに揺れた。

それでも動揺を出さぬよう、努めて冷静に対応する。

「そ、そんなことないよ。『ペルセウス』戦の時だって——」

「あの時は総力戦だった。望む望まないに関わらず、俺たちは協力するしか無かった。けど今は違う。俺たちが協力するかしらないかは、そつくりそのまま、耀が俺たちの協力を必要とするかしらないかだ」

日向はいつになく強めの語調で語りかける。

それは、耀のことを大切に思うがゆえに。

「別に毎回協力し合えってわけじゃない。けどな耀。もしもお前が、仲間の協力が必要な時。それでもひとり挑んでいって、その結果お前自身が傷つくようなことがあった時。一番悲しむのは、他でもない。——お前の仲間である、俺たちなんだ」

「……あつ」

ゆつくりと、耀は瞳を見開いて日向を見る。

日向は物寂しそうな、それでいて心配そうな。

そんな表情を彼女に向けていた。

「……耀。俺はお前の力になりたいと、心の底から思ってる。そしてそれはきつと、飛鳥や黒ウサギ。十六夜だって同じなはずだ」

「そう、かな？」

「当たり前だろ？ それこそが仲間であり、同士であり——『友達』つてやつなんだからさ」

ハツと、耀は何かに気づいた顔をする。

気のせいか、その瞳に先ほどまでの動揺はない。

日向は頬を掻いて苦笑すると、最後の言葉を投げかけた。

「ごめんな、偉そうなことを言つて。実際のところ、俺もこの世界に来るまで、友達なんてひとりもいなかったんだ」

「え……？」

耀は信じられないと言つた面持ちで日向を見る。

「日向も？」

「ああ。こんな力のせいだな。だから俺にとつても、耀たちは生まれて初めて出来た、かけがえのない大切な友達なんだ。だからこそ、俺は皆の力になりたい。……けどこれは、俺の単なる独りよがりなのかもしれないな」

「ち、ちが、そんなこと——」

「はは、悪かったな、朝から時間をとらせちまつて。俺が言いたかったのはそれだけだ。試合頑張れよ。俺も皆と客席から応援して——」

そう言つて日向が踵を返そうとした時、彼の服の袖を、耀が摘まんで引き留めた。思わず、日向は耀の顔を見る。

「……けじゃない」

「耀？」

小さく呟いた彼女の言葉に、日向は首を傾げて問い返す。

耀は曇りのない双眸で顔を上げると、真っ直ぐ日向を見つめて告げた。

「日向だけじゃない。私も、日向や皆のこと、大切な友達だと思つてる。……ごめん、私の間違つてた。改めて言います。同士として、私に力を貸して欲しい」

真剣な眼差しで頼み込む耀に、日向は瞳を丸くすると……やがて、朗らかな笑みで頷いた。

「ああ。もちろんだ！」

——境界壁・舞台区画。

——“火龍誕生祭”運営本陣営。

割れんばかりの歓声の中、「ノーネーム」一同は運営側の特別席に座っていた。

一般の枠がすでに満席であるとのことで、本陣營のバルコニーから試合を観戦できるよう、サンドラが取り計らってくれたのだ。

十六夜はワクワクと決勝の開幕を待ちわびながら、ふと気になったことを隣の白夜叉に問いかけた。

「ところで白夜叉。黒ウサギが審判を務める許可は下りたのか？」

「うむ。黒ウサギには正式に審判・進行役を依頼させてもらったぞ」

「ふうん、そうか。けど仮に『箱庭の貴族』の審判が無くたって、ゲームは進行出来るだろ？ ならあいつがわざわざ審判をすることに意味があるのか？」

彼の疑問に、中央で座るサンドラが答える。

「『審判権限』を持つ『箱庭の貴族』が審判を務めたゲームは、即ち『箔』付きのゲーム。ルール不可侵の正当性は、箱庭の名譽ある戦いに昇華され、記録される。箱庭の中枢に記録されるということは、両コミニティが誇りの下に戦ったという太鼓判。これは、とても大事」

「へえ？ ならサンドラ——いや、サンドラ様の誕生祭は、見事箔付きのゲームに認定されたってわけだ」

呼び捨てにしようとした十六夜だが、マンドラの鋭い視線に肩を竦めて訂正する。

程なくして、黒ウサギが舞台中央に現れた。

彼女は胸いっぱい息を吸い込むと、円状の観客席に向かって元気に宣言する。

「皆様！ 大変長らくお待たせしました！ これより火龍誕生祭のメインギフトゲーム・“造物主達の決闘”の決勝戦を始めたいと思います！ 進行及び審判は“サウザンドアイズ”の専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギが務めさせて頂きます♪」

彼女が満面の笑顔を振りまいた瞬間、突如歓声以上の奇声が会場を震撼させた。

「うおおおおおお月の兎が本当にきたああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいい！ お前に会うためここまでできたぞおおおおお!!」

「今日こそスカートの中を見てみせるぞおおおおお!!」

ほとぼしる熱い情熱を叫ぶ観客たち。(主に男性)

黒ウサギは笑顔を見せながらもへにより、とウサ耳を萎えさせて怯む。

一方観戦席の十六夜は、そんな観客たちの声にハッと重要なことを思い出した。

途端に眉をしかめると、不満げな口調で白夜叉に問う。

「そういえば白夜叉。黒ウサギのミニスカートを見えそうで見えないスカートにしたのはどういう了見だオイ。チラリズムなんて趣味が古すぎるだろ。昨夜語り合ったお前の芸術に対する探究心は、その程度のものだったのか？」

「そんなことを語っていたの?」

お馬鹿じゃないの?

という飛鳥の意見は、彼らの耳には入らない。

「フン。所詮はおんしもその程度の漢おとしであつたか。それではあそこに群がる有象無象と
なんら変わらん。おんしは真に芸術を解する漢だと思つておつたのだがの」

「……へえ? 言つてくれるじゃねえか。つまりお前には、スカートの中を見えなくす
ることに芸術的理由があるというんだな?」

無論、と白夜叉は肯定する。

彼女は鋭い気迫を放ち、圧倒的な凄みを以て持論を展開し始めた。

「考えてもみよ。おんしら人類の最も大きな動力源とはなんだ? エロか? なるほど、
それもある。だが時にそれを上回るのが想像力! 未知への期待! 知らぬことか
ら知ることへの渴望!! 小僧よ、キサマほどの漢ならば、さぞかし数々の芸術品をその
目にしてきたことだろう!! その中にも、未知という名の神秘があつたはず!! 例えば
そう!! モナリザの美女の謎に宿る神秘性ツ!! ミロのヴィーナスの腕に宿る神秘
性ツ!! 星々の海の果てに垣間見るその神秘性ツ!! そして乙女のスカートに宿る神
秘性ツ!! それらの神秘に宿る圧倒的な探究心は、同時に至ることのできない苦渋!!
その苦渋はやがて己の裡においてより昇華されるツ!! 何者にも勝る芸術とは即ち――

「己が宇宙の中にあるッ!!」

ズドオオオオオオオオオン!!!

という効果音が似合いそうな雰囲気で、十六夜は瞳を見開いた。

「なッ……己が宇宙の中に、だと……!?」

自分の知らない新たな境地の存在に、まるで雷が落ちたような衝撃を受ける十六夜。白夜又は尚も己が芸術性を熱く語る。

「そうだッ!! 真の芸術とは己が内的宇宙に存在するッ!! 乙女のスカートの中身も同じなのだ!! 見えてしまえばただただ下品な下着たちも——見えなければ芸術だッ!!!」

ズドオオオオオオオオオン!!!

という効果音が似合いそうな顔で白夜又は言い切った。

やり遂げたかのような清々しい微笑みを浮かべる彼女の手には、2組分の双眼鏡。

「この双眼鏡で、今こそ世界の真実を確かめるがいい。若き勇者よ。私はお前が真の口マンに到達できる者だと信じておるぞ」

「……ハッ。元・魔王様にそこまで煽られて、ノらないわけにはいかねえな……!」

ガッ! と双眼鏡を受け取り、2人は一点の曇りもない真剣な双眸で頷き合う。

そしてスチャリと双眼鏡を装着すると、黒ウサギのスカートの裾を追った。

訪れるかもしれない、奇跡の一瞬を逃さないために。

「あ、あのー?」

「見るなサンドラ。馬鹿がうつる」

小首を傾げるサンドラの顔を、マンドラが片手でそつと隠す。

飛鳥は生ゴミを見るような冷えた目で、そんな彼らを空気と見なすことにした。

視点は移り、選手が控える舞台袖。

日向と耀は観客席からは見えない舞台袖で、ジンやレイシアと共に対戦相手の確認を行っていた。

「『ウィル・オ・ウィスプ』に関して、僕が知っていることは以上です。お役に立てればいいのですが」

「ありがとう。大丈夫。ケースバイケースで臨機応変に対応するから」

まるでどこかのキャッチフレーズのような応答に、思わず苦笑を浮かべる日向たち。三毛猫を胸に抱いたレイシアは、美麗に微笑んで声援を送る。

「しかし、相手は曲がりなりにも格上だ。くれぐれも油断だけはしないように。私たちも、舞台の袖から応援している」

「ああ、ありがとな。まあ折角の機会だし、精々六桁の実力を見せてもらおうとするさ」

『お嬢も頑張つてな!』

「うん。それじゃあ行つてきます」

そのやり取りを最後に日向と耀はジンたちと別れ、入場口の手前まで移動する。

舞台の上では、黒ウサギが開幕の宣言を行っていた。

「日向、準備はいい?」

「おうよ。俺たちの力、格上様に見せてやろうぜ」

「うん」

2人は互いに笑い合う。

それと同時に、黒ウサギが選手の入場を促した。

『それでは選手に入場して頂きましょう! 第1ゲームのプレイヤー・“ノーネーム”の春日部耀と、“ウィル・オ・ウィスプ”のアーシャ・イグニファトウスです!』

舞台の真ん中でクルリと回った黒ウサギは、入場口から迎え入れるように片手を広げて宣言した。

日向と耀は頷き合い、舞台上へと歩き出す。

2人が観客の前に姿を現した次の瞬間——突如耀の目の前を、高速で駆ける火の玉が横切った。

「Y A ッ F U F U F U U U U u u u u u u!!」

「わっ……!」

体勢を崩して倒れる彼女を、日向は肩に腕を回して抱き止める。

そのまま正面を見上げれば、火の玉の上に腰掛ける人影があった。

対戦相手のアーシャ・イグニファトスだ。

彼女は自慢の青髪ツインテールと白黒ゴスロリのフリルスカートを揺らしながら、愛らしくも高飛車な声で彼らの姿を嘲った。

「あつははははははは！ 見て見て見たあ、ジャック？ ノーネームの女が無様に倒れて驚いてる！ ふふふ。さあ、素敵に不敵にオモシロオカシク笑ってやろうぜ！」

「Y A T T U F U F U U U U U U U U U U U U U U U U ! !」

ドツと観客席の一部からも笑いが起きた。

対戦相手であるアーシャ以外にも、栄えある舞台に「ノーネーム」が立つことを不満に思っている者たちがいたのだろう。

しかし日向と耀は、大して気にせず言葉を交わす。

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう日向」

耀は礼を述べつつ立ち上がると、視線をアーシャが乗っている火の玉に移した。

その中心に浮かぶシルエットに、思わず釘付けとなつて言葉を漏らす。

「その火の玉……もしかして」

「はあ？ 何言ってるのオマエ。アーシャ様の作品をただの火の玉なんかと一緒にすんなし。コイツは我らが『ウィル・オ・ウィスプ』の名物幽鬼！ ジャック・オー・ランタンさー！」

「Y A ッ F U F U F U U U U u u u u u u !!」

アーシャは腰掛ける火の玉へと合図を送る。

すると火の玉は取り巻く炎陣を振りほどき、自らの姿を顕現させた。

その容姿に耀や日向のみならず、観客席までもがしばしの間呆然となる。

轟々と燃え盛るランプと、実体の無い浅黒い布の服。

そして人の頭部の数十倍はあろうかという巨大なカボチャ頭。

その容姿はまさしく、飛鳥が幼い日より夢見ていた、あのカボチャのお化けそのものだった。

「ジャック！ ほらジャックよ十六夜君！ 本物のジャック・オー・ランタンだわ！」

「はいはい分かっているから、落ち着けお嬢様」

らしくないほど熱狂的な声を上げて、十六夜の肩をグイグイと引っ張る飛鳥。

下の声が聞こえていなかったのは幸いだらう。

なぜなら眼下の舞台袖では、アーシャが日向たちを見下して嘲けり笑っていたから

「ん、大丈夫。気にしてない」

言葉通りに全く関心を見せない耀。

彼女は円上の舞台を見回すと、バルコニーにいる飛鳥たちに小さく手を振った。

飛鳥も気づいて手を振り返す。

その行動が気に食わなかったのか、アーシャは舌打ちと共に皮肉げな口調で問いかけた。

「大した自信だねーオイ。私とジャックを無視して客とホストに尻尾と愛想ふるってか？ 何？ 私たちに対する挑発ですかそれ？」

「お、十六夜たちあんな特等席から見てるのか。白夜叉かサンドラにでも融通を利かせてもらったのな？ 何にせよ、これじゃ情けない姿を見せる訳にはいかないな。頑張ろうな、耀」

「うん」

完全に無視して、2人は意気込みを新たにする。

アーシャは眉をピクピクと震わし、青筋を浮かべて叫び散らした。

「オ、オオオオウケエエエイ!!! オマエらが私を舐め腐りやがってんのはよおおお分かった！ ぜってえ試合で吠えづらかかしてやるからな！ 精々子犬みてえにプルプルと震えながら覚悟しとけよ！」

「聞いた日向？ 子犬みたいにプルプルとだつて」

「ああ。意外に例えが可愛いな」

「馬鹿にしてんのか！ オマエらホント承知しねえからな！ マジで叩き潰してやるかんな！ 謝るんなら今の内だぞ！」

「え、ごめん。何か言つた？」

「うがー！ー！！！」

八重歯を剥き出してダンダンと地団駄を踏むアーシャ。

黒ウサギもそんなやり取りで溜飲が下りたのか、宮殿のバルコニーに手を向けて厳かに宣言した。

『——それでは第1ゲームの開幕前に、白夜又様から舞台に関して御説明があります。ギヤラリーの皆様はどうかご静聴の程を』

刹那、会場からあらゆる喧騒が消えた。

「主催者」の言葉ホストを聞くために静寂が満ちる。

バルコニーの前に出た白夜又は静まり返つた会場を見渡し、緩やかに頷いた。

「うむ。協力感謝するぞ。私は何分、見ての通りのお子様体型なのでな。大きな声を出すのは苦手なのだ。——さて、それではゲームの舞台についてだが……まずは手元の招待状を見て欲しい。そこにナンバーが書かかれておらんかの？」

観客は一斉に招待状を取り出す。

手元のない者は慌てて鞆の中を捜し、置いてきた者はひたすらそれを悔いていた。

一喜一憂する観客たちの様子を温かく見つめる白夜又は、説明を続けた。

「ではそこに書かれているナンバーが、我々ホストの出身外門——『サウザンドアイズ』の三三四五番となっている者はおるかの？ おるのであれば招待状を掲げ、コミュニケーションの名を叫んでおくれ」

ざわざわと観客席がどよめく。

するとバルコニーから真正面の観客席で、樹霊コダマの少年が招待状を掲げていた。

「こ、ここにあります！ 『アンダーウッド』のコミュニケーションが、三三四五番の招待状を持っています！」

おおおっ！ と歓声が上がります。

白夜又はニコリと笑いかけ、バルコニーから霞のように姿を消すと、次の瞬間には少年の目の前に立っていた。

「ふふふ。おめでどう、『アンダーウッド』の樹霊の童よ。後に記念品でも届けさせてもらおうかの。よろしければ、おんしの旗印を拝見してもよろしいかな？」

コクコクと勢いよく頷く少年。

彼の差し出した木造の腕輪には、コミュニケーションのシンボルと思われる、巨大な大樹の

根に囲まれた街が描かれていた。

しばし旗印を見つめた白夜叉は微笑んで少年に腕輪を返すと、再びバルコニーの上まで戻る。

「今しがた、決勝の舞台が決定した。それでは皆のもの。お手を拝借」

白夜叉が両手を前に出す。

倅って観客も両手を前に出す。

パン！ と会場一致で拍手ひとつ。

その所作ひとつで——世界の全てが一変した。

変化は劇的だった。

日向たちの足下は虚無へと呑み込まれ、闇の向こうには流線型の世界が数多に廻っている。

その世界の1つに、以前耀が鷲獅子グリフォンと戦った舞台があることに気がついた。

(これは……白夜叉の力か……?)

御技の出どころに心当たりを付けた日向は、るっほ 埧堦の底に沈む感覚に身を任せ、やがて濾過ろかされるのを静かに待つ。

激しいプリズムを迸しらせながら、彼らだけが星の果てに投げ出された。

バフン、と少し意外な着地音。

見れば下地は樹木の上だ。

「ここは一体……耀、何か分かるか？」

「えつと……うん。どうやらここ、樹の根に囲まれた場所みたい」

——そう。

彼らの居る場所はただの樹木ではなく、上下左右全てが巨大な樹の根によって囲まれている大空洞だった。

耀が樹の幹だとすぐに判断できたのは、彼女の持つ強力な嗅覚が土の臭いを嗅ぎとつたからだ。

2人のやり取りを聞いていたアーシヤは、小馬鹿にしたように笑う。

「あらあらそりやあどうも教えてくれてありがとよ。そっか、ここは樹の根の中なのねー」

「それにしても、やつぱり白夜又は凄いな。こんなゲーム盤まで用意してるとは。けど、それに気づけた耀も流石だな」

「ううん、そんなこと無いよ」

「だから無視すんじゃないやねええええええ!!!」

うがー！ と再び喚くアーシヤ。

苛立ちが頂点に達した彼女は隣に浮かぶジャック・オー・ランタンと共に臨戦態勢に入るが、日向は苦笑を浮かべてそれを宥めた。

「悪い悪い。まあ冗談はさておき、試合を始めるにはまだ少し早いと思うぞ？」
「はあ？ どういうことだよ？」

「勝利条件も敗北条件も提示されていない。これじゃゲームとして成り立たない」
ムツとするアーシヤ。

だが2人の言い分に正当性を感じたのだろう。

互いに主催者側のアクションを待っていると、突如彼らの前で空間に亀裂が走った。

その中から出てきたのは、輝く羊皮紙を持った黒ウサギだ。

ホストマスター主催者権限によって制作された ギアスロール「契約書類」を振りかざした彼女は、書面の内容を

淡々と読み上げる。

『ギフトゲーム名 “アンダーウツドの迷路”』

・勝利条件

1、プレイヤーが大樹の迷路より野外

に出る。

- 2、対戦プレイヤーのギフトを破壊。
- 3、対戦プレイヤーが勝利条件を満たせなくなった場合。(降参含む)

・敗北条件

- 1、対戦プレイヤーが勝利条件の1つを満たした場合。
- 2、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

「――ジャッジマスター審判権限」の名において、以上が両者不可侵であることを、御旗の下に契りま

す。御二人共、どうか誇りある戦いを。ここに、ゲームの開始を宣言します」

黒ウサギの宣誓が終わる。

それが開始のコールだった。

両者は距離を取りつつ初手を探る。

勝利条件が複数ある以上、まずは明確な方針が必要だった。

しばしの空白の後。

まず先に動いたのは、小馬鹿にした笑みを浮かべるアーシャだった。

「睨み合っても進まねえし、先手は譲るぜ」

「ほう？　かなりの自信だな」

「ハッ！　当然。まあさっきの一件があるしね。後でイチャモン付けられるのも面倒だし？」

ツインテールを揺らしながら肩を竦め、余裕の笑みを浮かべるアーシャ。

すると日向の隣で、耀が静かに口を開いた。

「アナタは……『ウィル・オ・ウィスプ』のリーダー？」

「え？　あ、そう見える？　なら嬉しいんだけどなあ♪　けど残念なことに、アーシャ様はコミュニケーションのトップではないんだよなあコレが」

リーダーと間違われたことが余程嬉しかったのか、愛らしい満面の笑みで答えるアーシャ。

そんな彼女の様子を見た日向は、朗らかに笑って語りかけた。

「なんだ、そういう表情も出来るんだな」

「え？」

突然の言葉に、アーシャは一瞬完全に気の抜けた顔になる。

「妙に悪ぶってる時よりも、そっちの方が断然に魅力的だぞ?」

「……は? え、なあつ!」

しばし固まったアーシヤは、言葉を飲み下すと同時に顔を真っ赤に染めて狼狽えた。

「なななな、何言ってるんだよ!」

「ん? 素直に思ったことを言っただけだぞ?」

「い、いや、でも! だって……」

アーシヤは次第に威勢を無くしていくと、頬を染めて両手の指をつんつんさせながら独り言ちる。

「た、確かにアーシヤ様は可愛いしそういう気になっちゃうのは分かるけどでも流石に急すぎるっていうかそもそも心の準備が出来てないしそれにアイツは名無しでいや気持ちは嬉しいっていうかむしろ満更でもなくはないんだけど……」

ひとりつぶつぶと呟いているアーシヤに、日向は首を傾げて疑問符を浮かべる。

そこで彼の服が後ろからクイクイと引っ張られた。

「耀?」

「……今のうち」

なぜかいつもより声のトーンが数段低い気がする彼女の言葉に、日向戸惑いながらも「あ、ああ」と首を縦に振る。

そのまま背後の通路に疾走していく彼らを尻目に、相変わず自分の世界に浸るアーシヤ。

今は両手を頬に当ててクネクネと体を動かしている。

「いやでも禁断の愛っていうのも憧れるし身分違いの恋ってのもロマンチックで悪くないっていうかよく見れば顔も悪くないし別に仕方なくだけどそこまで言うんだったらそういう関係になってやらなくもないんだけど?」

「YA、YAツFUFUFUFUUUUUU……」

乙女オーラ全開の彼女に、隣で浮いているジャックは心なし可哀想なものを見るような雰囲気で肩を叩いた。

「あん? どうしたんだよジャック。今いいところ……って、アイツらは?」

キョトンとした目で周囲を見回す。

やがて自分だけ取り残されたことに気がつく、次第にワナワナと全身を震わせ始めた。

「ほ、ほう? ああそう。へえ、そうなんだ。つまりお前らは、とことんまであたしを馬鹿にしてくれるってわけかよ。ハッ、いいぜ。そっちがその気ならこっちだつて手加減なしだよコンチクシヨウが……!」

その瞬間アーシヤは顔を上げると、カツ! と目を見開いて怒りのままに絶叫した。

「ジャアアアアアアツク!!! 行くぞ! 樹の根の迷路で人間狩りだ!!!」

「Y A H O H O h o h o h o ~ ~ ~!!!」

まさに怒髪天を衝くが如くツインテールを逆立てて猛追を開始するアーシャ。

一方その頃、先を行く日向たちには少しだけ気まずい空気が流れていた。

「な、なあ耀。なんかさつきから機嫌悪くないか?」

「……別に。そんな事ない」

「い、いやでも、明らかに不貞腐れてるような気が——」

「待あああちいいいやああがあああれえええええ!!!」

その時、突如背後からまるで地獄の底から這い上がって来るようなおどろおどろしい

絶叫が木霊してきた。

その正体とは言わずもがな、鬼気迫る表情で彼らを猛追するアーシャである。

「よくも乙女の純情踏みにじりやがって! 焼き払えジャック!!!」

「Y A T F U U U U U u u u u u u u!!!」

大きく左手を振りかざすアーシャ。

ジャックの右手に提げられたランタンとカボチャの頭から溢れた悪魔の業火は、瞬く

間に樹の根を焼き払って日向たちを襲う。

しかし日向は振り向きざまに蹴りで炎を無効化し、耀は最小限の風を起こす事で炎を

誘導して回避した。

（な、何だ今の!? 私の炎を無効化した!? 女の方は風を操るギフトか!? クソ、コイツら思ったよりやるじゃねえか!）

アーシャはジャックの業火が届かない状況に舌打ちする。

対して日向たちは、すでにジャック・オー・ランタンの秘密に気が付き始めていた。

「あの青い炎……どうやら伝承通りで間違いないみたいだな」

「うん。試合前にジンが言ったのと同じ」

——Will^{ウィル}o^オ, wi^{ワイ}sp^スとJack^{ジャック}o^{オー}, lantern^{ランタン}の伝承。

前者の伝承は、無人の場所で突如、青白い炎が生まれる現象。

俗に鬼火と云われるものだ。

そして後者の伝承は、彷徨う死者の魂が形骸化された逸話。

いわゆる幽鬼と云われるものである。

しかしこの2つの伝承には、それぞれに共通した逸話が残っている。

その1つが、『2度の生を受けた大罪人の魂に、名も無き悪魔が篝火^{かがりび}を与えた』という

点だ。

伝承では、生前のジャックは二度の生を大罪人として過ごし、永遠に生と死の境界を

彷徨うこととなる。

そんな彼を哀れに思った悪魔が与えた炎こそ、ジャックのランタンから放たれる業火なのだ。

霊格を得る条件の1つに、“世界に功績を与える”というものがある。

そして黒ウサギ曰く、“伝承がある”ということは、即ち“功績がある”。

その法則に則るなら“ウィル・オ・ウィスプ”のコミユニティのリーダーは、伝承に登場する『生と死の境界に現れた悪魔』のはずだ。

「けど、あの子はリーダーじゃない」

「うん。なら彼女は、違う悪魔か種族のはず」

仮にアーシャの正体が生と死の境界を行き来できる程の力を持つ悪魔だったのなら、日向たちも覚悟を求められただろう。

初めの耀の質問は、それを確かめる意図があったのだ。

「あーくそ！ こうなったら片方を狙って手数で勝負だ！ 3発同時に撃ち込むぞジャック！」

「Y A ッ F U U U U U u u u u u u u u !!」

アーシャが耀に向かって右手をかざし、次に右手のランタンで業火を放つ。

先ほどより勢いを増した3本の炎。

対する耀は、鷲獅子のギフトすら使わずにそれら全てをすり抜けた。

「……………?!」

絶句するアーシヤ。

日向は移動しながら耀の隣で問いかける。

「耀、今のはどうやったんだ？」

「ん、臭いで分かった。やっぱりあの青い炎は、ジャックが出しているんじゃない。あの子の手で、可燃性のガスや燐を撒き散らしているんだ」

その解答に、彼らは今度こそ業火の正体を看破した。

“ウイル・オ・ウイスプ”の篝火の正体。

それは即ち——大地から溢れ出た、メタンガスなどの、可燃性のガスや物質の類である。

本来なら無味無臭の天然ガスだが、人間の数万倍もの嗅覚を持つ耀はその違和感を敏感に感じ取ったのだ。

驚獅子のギフトで軌道を曲げることが出来たのは、噴出したガスや燐を発火前に霧散させたためである。

アーシヤは種を見破られた事実には歯噛みした。

「くそ、やべえぞジャック……………このままじゃアイツらに逃げ切られる！」

「Yahoo……………」

走力では俄然、日向たちが勝っているのだ。

加えて耀は、その優れた五感で外からの気流を読みとり、すでに正しい道を把握している。

アーシャは離れていく彼らの背中を見つめ——諦めたように息を吐いた。

「……くそつたれ。悔しいが後はアンタに任せるよ。本気でやつちやつて、ジャックさん」

「分かりました」

え？ と耀が振り返る。

遙か後方にいたはずのジャックの姿はすでに消え失せ、耀のすぐ前方に霞の如く現れた。

「嘘」

「嘘じゃありませんよ。失礼、お嬢さん」

「させるかよー！」

ジャックの巨大な手が、風を切って耀に迫る。

間一髪両者の間に割り込んだ日向は、咄嗟にその手を蹴り飛ばした。

「耀、先に行け。コイツは俺が足止めする」

「……任せてもいいんだよね？」

「当たり前だろ？ だからしつかり勝ってこい」

「……うん！」

振り向かずに笑って宣言する日向。

耀もその言葉を信じると、旋風を纏って先へ進む。

対面のジャックも、視線は逸らさぬまま背後のアーシャへ語りかける。

「アーシャ、アナタも行きなさい。ここは私が引き受けます」

「悪いねジャックさん。本当は私の力で優勝したかったんだけど……」

「それはアナタの油断と怠慢が原因です。猛省し、この方々のゲームメイクを少しは見習いなさい。……とは言うものの、恋は盲目とも言いますし、仕方のないことかもしれないが」

「こ、こここ恋って！ 何言ってるんだよジャックさん!？」

「ヤホホ♪ ほらほら、急がないと先ほどのお嬢さんに先を越されてしまいますよ？」

それにここで良いところを見せれば、彼に好印象を与えられるか——」

「行つてきます!!!」

言い終わらぬ内に駆け出すアーシャ。

残された日向とジャックは、互いに距離を取りつつ睨み合う。

「……なるほどな。アンタこそが、本物のジャック・オー・ランタンってわけか」

「はい。アナタの御想像は正しい。私こそが生と死の境界に顕現せし大悪魔、ウイラ
ザ||イグニファトウス製作の大傑作！ 世界最古のカボチャのお化け……ジャック・
オー・ランタンでございます♪」

ヤホホ♪ と軽快に笑うジャック。

“造物主達の決闘”、決勝戦・第1ゲーム。

“ノーネーム”と“ウィル・オ・ウイスプ”のギフトゲームは、後半戦へともつれ込
むのだった。

第17話 The PIED PIPER of HA
MELIN

樹の根の大空洞にて、日向とジャックは相対する。

両者とも身構える姿に隙は無く、互いに初手を探りながら静かに睨み合っていた。気を抜かぬまま、日向は眼前で浮遊するカボチャの幽鬼に問いかける。

「……ひとつ、聞いていいか？ どうしてアンタは、これまで正体を隠してたんだ？」
純粹な疑問だった。

今でこそ明確な意思と魂をその瞳の炎に宿す彼が、なぜ先ほどまで心無き一介の作品を装っていたのか。

ジャックは笑い、軽快な口調で返答する。

「ヤホホ♪ 何、簡単な話です。アーシヤの成長のためですよ。あの子はまだ幼く、このように大きなギフトゲームに参加するのも今回が初めてのことですね。本来なら、私もお目付け役に徹している予定だったのですが……いやはや。やはり晴れ舞台は華々しく飾ってあげたいという親心が出てしまったようで」

ヤホホ……と少し照れたようにカボチャ頭を搔くジャック。

その姿は悪魔というよりは、我が子を想うひとりの父親のように見えた。

そんな彼に日向も笑みを浮かべると、どこか楽しそうに会話を続ける。

「ハハ、そういうことか。だからあの子は、あんなに張り切っていたんだな」

「ええ。アーシャは本来地災で亡くなり、自縛霊となつて彷徨^{さまよ}っていたところをウイラが引き取つた子でしてね。そんな彼女も、今では立派な大地の精霊として力を付け始めている。天然ガスを放出していたのも、地霊の一端というわけです」

「へえ。何というか、正しく伝承通りのコミュニティなんだな」

感心する日向の感想に、ジャックは嬉し^{しようれ}いそうな笑^{わら}いを上げた。

「ヤホホ、我々『ウィル・オ・ウイスプ』に纏^{しるべ}わる逸話をご存知とは、私も鼻が高いです。その通りです。我々の蒼き炎の導^{しるべ}は、報われぬ魂を導く篝火。彷徨う御霊を導く功績で、私たちは存在とコミュニティを大きくしてきたのです」

「そつか。アンタもそのウイラつて人も、子供想いの優しい悪魔なんだな」

「ヤホホ、恐れ入ります。……さて、そろそろ始めようか」

「ああ」

親しげな雰囲気から一転、2人の声が重くなる。

ジャックは瞳の炎を激しく揺らすと、両手を広げて高く叫んだ。

「御覽に入れて差し上げましょう！ 我ら蒼き炎の導を描きし旗印は、無為に命を散らした魂を導く篝火なのだ！ 救済の志は、神々に限られた領分ではないのだと——
!!!」

己が御旗を誇るように、カボチャの幽鬼は轟々と燃え盛る猛火を背にして宣言する。
「いざ来たれ！ その身に尋常外の奇跡を宿す少年よ！ 聖人ペテロに烙印を押されし不死の怪物——このジャック・オー・ランタンがお相手しましょう!!!」

業火の炎で大炎上する樹の根の空洞。

その燃える瞳より放たれる威圧感は、日向が箱庭で対峙したどの敵よりも強大なものだった。

これが「悪魔」と呼ばれる種。

世界に独立した靈格（そんざい）を認められた超常存在。

日向は好戦的に笑うと、自らも名乗ってついに開戦の狼煙を上げた。

「ハッ！ いいぜ、相手にとつて不足は無しだ！ “ノーネーム” 出身天道日向！
こつちも全力で行かせてもらおうぞ！」

刹那。

日向は驚異的な脚力で樹の根の足場を踏み砕き、ジャックの眼前に肉薄する。

巻き散る木片を背に、第三宇宙速度を遙かに凌駕する速度で瞬時に懐へ飛び込むと、

勢いに任せてその山河を砕く拳を振り抜いた。

しかし日向の打撃が決まる間際、ジャックの身体は大きく揺らぎ、陽炎のごとく消え失せる。

「ヤホホ！ 甘いですよ！」

一瞬で日向の背後に移動したジャックは、軽快に笑いながら両手に提げるランタンを振るう。

放出された業火は瞬間に周辺の樹の根を焼き尽くし、触れたそばから黒い炭へと変えていく。

「おっと！ やっぱその炎は厄介だな！」

「ヤホホ！ まだですよ！」

一度炎を避けた日向の頬を、途端に激しい熱風が撫で始めた。

高度を上げたジャックは頭上に3つの業火を秘めたランタン出現させると、炎の瞳をギョロリと向けて宣言する。

「受けてみなさい！ 我が召喚せし地獄の業火を！」

蓋を開くと同時に、荒ぶるの炎がこぼれ落ちて膨れ上がった。

まるで地獄の釜を彷彿とさせるかのような、灼熱の嵐が日向に迫る。

樹の根のごとくを焼き尽くし、立ちはだかる全ての存在を焦土に変えんと燃え盛

るそれを、日向は真正面から迎え撃った。

「——しゃらくせえ!!!」

地獄の業火と、日向の天地を穿つ拳がぶつかり合う。

その衝撃は凄まじく、余波は空洞を震撼させ、樹の根に巨大なクレーターを形成した。もうもうと立ち昇る黒煙の中、ジャックは更に2つのランタンを出現させる。

同時に煙幕が中心部から爆散され、右腕の袖を僅かに焦がした日向が姿を現した。

日向は再び業火を召喚させまいと、臆すること無くジャックの頭上へ跳躍する。

そのまま空洞の天辺に足を着けると、弾丸のような踏み込みと共に踵落としを叩き込んだ。

辛うじて反応したジャックは咄嗟に2つのランタンを防御に回すと、生じた爆風で両者は再び距離を取る。

「ヤホホ！　これは驚きました。まさか地獄の業火を素手で無効化されるとは。一体どんなギフトをお持ちで？」

「悪いな。実は俺にも把握し切れていないんだ」

日向は肩についた灰を払いながら苦笑する。

それを聞いたジャックは、心底愉快そうに哄笑を上げた。

「ヤホホホホ！　それはそれは、何とも不思議な話ですねえ。己が魂の一部でありなが

ら、あなた自身にもその本質が分からないと？」

日向は懐からサンシャインイエローのギフトカードを取り出と、そこに刻まれたギフト名を開示する。

「ああ。この通り出所不明・効果不明・名称不明の『コトド・エラー認識不可』だ。誰か腕のいい鑑定士を知っていたら、紹介して欲しいくらいだよ」

「ヤホホ！ あなたは本当に面白い人だ。願わくばこのまま談笑に耽っていたいところですが、生憎と今はギフトゲームの真つ最中。これ以上時間を掛けるのも何ですし、ここはひとつ、互いに全力の一撃を以て勝負を決めると致しませんか？」

「オーケーだ。そろそろ耀たちもゴールに辿り着く頃だしな。俺もちょうど試してみたいことがあるし、こっちも決着をつけようか」

合意し、2人は自身が放ちうる最高最強の一手を繰り出すための動作に入る。

ジャックは頭上に7つのランタンを。

日向は静かに瞳を閉じ、スツと右手を頭上に掲げる。

——その時、そんな日向の姿を観客席で目にした十六夜は、ふと怪訝そうに眉をひそめた。

(……うん？ あの構えは——)

一方で両者の緊張感が極限となり、遂に決着をつけようと同時に踏み出したその瞬間

——周囲がガラス細工のように碎け散り、景色が円形の舞台に帰還した。

日向とジャックは立ち止まって唾然とし、試合を見守っていた観客たちもまた、夢から覚めたように静まり返る。

その中でただひとり、黒ウサギだけが満面の笑みで宣言した。

『勝者、春日部耀!!』

ハッと観客席から声上がる。

次に割れんばかりの歓声が会場を包んだ。

堰を切ったように喧騒が沸き起こる舞台の中心で、氣勢をそがれた日向とジャックは苦笑する。

「ヤホホ、どうやら我々の負けのようですね」

「みたいだな。アーシャって子には悪いけど……」

「いえ、あの子にも良い経験になりました。私も久々に血湧き肉踊りましたよ」

「ああ、俺も楽しかった。ていうか、カボチャに血や肉があるのか?」

「ヤホホ! そう言えばありませんね!」

ジャックはカボチャ頭をピシヤリと叩き、こりや一本取られたと哄笑を上げる。

日向もそんな彼の冗談を愉快に思い、同じように笑みを浮かべる。

彼らが親しげに会話をしていると、少し離れたところから耀とアーシャが近付いてき

た。

「日向、お疲れ様」

「ああ、お疲れ様。勝てたのは耀のお陰だな」

「ううん。協力した私たち2人の勝利だよ」

耀は首を振ると、小さく笑って訂正する。

その言葉に日向は少しだけ意外そうな顔を見ると、すぐさま「だな」と答えて朗らかに笑った。

「うう。ごめんジャックさん。負けちゃった」

「謝る必要はありません。前半はともかく、後半のあなたは何ら恥じること無いゲームメイクをしていました。敗北したとは言え、胸を張っていいんですよ」

「……うん」

アーシャは頷くと、悲しげながらも少しだけ嬉しそうな笑みを浮かべる。

しかし次の瞬間にキツ！ と目尻を吊り上げると、ズンズンと日向たちの元に近づいてきた。

「おい、オマエ！ 名前は何ていうの？ それと出身外門は？」

「……二一〇五三八〇外門出身、春日部耀」

「耀だな！ 覚えといてやるから感謝しろ！ ……そ、それで、えつと、隣のあんたは？」

チラリと日向に視線を向けながら、頬を染めつつ尋ねるアーシャ。
その仕草に普段の強気は見受けられない。

日向は朗らかに笑って告げた。

「同じく二一〇五八〇外門出身、天道日向だ。よろしくな、アーシャ」

「うっ……い、一応言つとくけどな！　べ、別に私は、お前のことなんて全ツ然！　まったく！　これっぽっちも！　気にしてなんていないんだからな！　変な勘違いとかするんじゃないぞ！　分かったな!？」

「ありやりや、こりやまた随分と嫌われたな。けど俺としては、出来ればアーシャと仲良くしたいんだけどな」

「~~~~~ッ!」

明るい笑顔を向ける日向に、アーシャは顔を地獄の業火よりも真っ赤に染める。

思わずバツ！　と2人の元から飛び退くと、強気で高らかに宣言した。

「と、とにかく！　もう一度名乗つとくぞ！　私は六七八九〇〇外門出身、アーシャIIイグニファトウス！　次に会うようなことがあつたら、今度こそ私が勝つから覚悟しとけ！　……だ、だからその、えつと……ま、またな！　日向に耀!」

おっ？　とアーシャの台詞に日向と耀は首を傾げるが、その間に彼女はツインテールを揺らして脇目も振らずに去っていく。

ジャックはヤホホ！ と笑うと、2人に向かつて語りかけた。

「ああ見えて、あの子はとても優しい子なんですよ。良ければ友達になってあげてください」

「ああ、もちろんだ。耀もいいよな？」

「うん」

「ヤホホ！ ありがとう。宜しくお願いします」

そうして彼らは笑い合い、互いに握手を交わすのだった。

「見て見て！ やったわ十六夜君！ 春日部さんたちの勝利よ！」

「ヤハハ。そうだなお嬢様」

明るい声で喜ぶ飛鳥に、十六夜は軽薄な笑みで応える。

彼はふと先ほどの試合を思い出すが――

(……いや、まさかな)

と内心で自らの考えを切って捨てた。

そこで中央に控えていたサンドラと白夜叉が、彼らに賞賛の言葉を送る。

「シンプルなゲーム盤なのに、とても見応えのあるゲーム。本当に見事だった」

「うむ。今回のようにシンプルなゲームはどうしてもパワーゲームに成りがちだが、中々堂に入ったゲームメイクだったぞ。これなら優勝もあり得るかもしれないの」

この会場には最早、彼らを「ノーネーム」だと卑下する者はひとりもない。

皆が皆、素晴らしいゲーム内容に惜しみない喝采を上げていた。

「『ウィル・オ・ウイスプ』は六桁でも最上位の一角だから。加えて主力のジャックは業火と不死の烙印を持つ幽鬼。あやつらはそんな格上を相手に見事勝利を収めたのだ。

『ノーネーム』としては正に快挙とも呼べる戦果だぞ」

白夜叉は賛辞を述べ、十六夜たちに目を向ける。

「……………」

しかし、十六夜の思考はすでにゲームの舞台から離れていた。

彼の視線は遙か彼方、箱庭の空に向けられている。

十六夜は怪訝な面持ちで白夜叉に問う。

「……………白夜叉。アレはなんだ？」

「何？」

白夜叉も上空へ目を向ける。

観客たちも、何人か気づいたように声を上げた。

空の上から、まるで雨のようにばら撒かれる黒い封書。

黒ウサギはすかさず手に取って確かめる。

「黒く輝く『契約書類』……ま、まさか!？」

笛を吹く道化師の印が入った封蝋を開封すると、『契約書類』にはこう記されていた。

『ギフトゲーム名』The PIED PIPER

of HAMELIN

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・

四〇〇〇〇〇外門・境界壁の

舞台区画に存在している参加者

及び主催者の全コミュニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、

真実の伝承を掲げよ。

宣誓

上記を尊重し、誇りと御旗とホスト

マスターの名の下、ギフトゲームを

開催します。

《グリムグリモワール・

ハーメルン》印』

無数の黒い封書が舞い落ちる中、静まり返る舞台会場。

やがてひとりの観客が、膨張した空気が弾けるように叫んだ。

「ま、魔王が……魔王が現れたぞおおおおお——!!!」

——境界壁・上空2000m地点。

遙か上空、境界壁の突起に4つの人影があった。

ひとりは露出が多く、布の少ない白装束を纏う女。

彼女は二の腕程の長さのフルートを右手で弄びながら、舞台会場を見下ろして語る。

「プレイヤー側で相手になるのは……「サラマンドラ」のお嬢ちゃんを含めて5人つてところかしらね、ヴェーザー？」

「いや、4人だな。あのカボチャは参加資格がねえ。対戦相手だった黒髪の男もそれなりだったが、特にヤバイのは吸血鬼と火龍のプロアマスターだ。——あと事のついでに、偽りの「ラツテンフエンガー」も潰さねえと」

女の疑問に答えたのは、対照的に黒い軍服を着た、短髪黒髪のヴェーザーと呼ばれた男。

その手に握られた笛は白装束の女のものとは違い、長身の男と同等の長さである。

楽器としては明らかに常軌を逸した形状だ。

そして3人目は、外見がすでに人ではなかった。

陶器のような材質で造られた滑らかなフォルムと、全身に空いた風穴。

全長五十尺はあろうかというその姿を安易に例えるならば、擬人化した笛というところだろう。

顔面に空いた特に巨大な空洞は、絶えず不気味な鳴動を放っている。

その3体に挟まれる形で佇んでいるのは、白黒の斑模様まだらのワンピースを着た少女。斑模様の少女は三体の顔を一度ずつ見比べると、無機質な声で宣言した。

「——ギフトゲームを始めるわ。あなたたちは手筈通り御願い」

「おう、邪魔する奴は？」

「殺していいよ」

「イエス、マイマスター♪」

「……どうやら、噂の魔王様が現れたみたいだな」

空から降ってきた黒い封蠟を開封した日向は、中から取り出した『契約書類』を讀んで判断する。

舞台周辺はすでに大混乱となっており、観客たちは我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げていた。

「でも、魔王は白夜叉の力で『主催者権限』ホストマスターを使えないはずじゃなかったの？」

日向の隣で耀が尋ねる。

白夜叉が自身の『主催者権限』を使い、この『火龍誕生祭』で魔王対策にと定めてい

た幾つかのルール。

一、一般参加は舞台区画内・自由区画内で
コミュニティ間のギフトゲームの開催
を禁ず。

二、〃主催者権限〃を所持する参加者は、
祭典のホストに許可なく入る事を禁ず。

三、祭典区画内で参加者の〃主催者権限〃
の使用を禁ず。

四、祭典区域にある舞台区画・自由区画に
参加者以外の侵入を禁ず。

これらの条件を参加項目に組み込むことで、本来であれば魔王が〃主催者権限〃を行
使することはおろか、この大祭に足を踏み入れることすら不可能であったはずなのだ。

「考えられるとすれば、白夜叉の〃主催者権限〃が破られたか……あるいは、ルールに抵
触しない抜け道のような手段を用いられたかの二択だな」

「……そんなことが可能なの？」

日向の推測に、耀は再び小首を傾げて問いかける。

日向は上空を見上げると、真剣な眼差しで頷いた。

「前者はともかく、後者であれば可能性はある。この世に完璧なルールなんてそうそう無いからな。そこには大抵、何かしらの抜け穴や見落としがあるはずだ。つまり奴らは、俺たちの想定しえなかった方法で舞台上に上がり込んだことになる」

「でも、ならどんな方法を使ったんだろう？」

「さてな。けどもしかすると、それがこのゲームをクリアする手掛かりになる可能性も……」

「日向さん！ 耀さん！」

日向と耀が思考を巡らせていると、舞台の中央から黒ウサギが慌てて駆け寄ってきた。

舞台袖からもジンやレティシアが合流する。

「魔王が現れた。……そういうことでいいんだよな、黒ウサギ」

「はっ」

真剣な表情で頷く黒ウサギ。

メンバー全員にも緊張が走る。

とそこで、突然頭上から飛鳥を抱えた十六夜が飛び降りてきた。

「十六夜、どうしたんだ？」

「分からねえ。急に白夜叉が黒い風に呑み込まれたと思ったら、俺たちもバルコニーか

ら押し出されちゃった」

飛鳥を降ろした十六夜は、周囲の人影を見渡して呟く。

「……チツ。どうやら、サラマンドラの連中は観客席に飛ばされたみたいだな」

“ノーネーム”一同は舞台側へ。

“サラマンドラ”一同は観客席へ。

日向は更に状況を整理すべく、黒ウサギに質問を投げかける。

「黒ウサギ、白夜叉の“主催者権限”が破られた様子はあるのか？」

「いえ、ございません。黒ウサギがジャツジマスターを務めている以上、誤魔化しも利きませんから」

「へえ？ なら連中は、ルールに則った上でゲーム盤に現れているわけだ。……ハハ、流石は本物の魔王様。期待を裏切らねえぜ」

阿鼻叫喚が渦巻く会場の中で、軽薄な笑みを浮かべる十六夜。

しかしその瞳には、いつもの余裕が見られない。

皆が気を引き締める中、耀は緊張した面持ちで確認する。

「どうするの？ ここで迎え撃つ？」

「ああ。けど全員で相手するのは具合が悪い。それに“サラマンドラ”の連中も気に掛かる。アイツらは観客席の方に飛んでいったからな」

「となると、ここは役割を分けた方が良さそうだな」

日向の提案に、黒ウサギは厳肅な顔で頷く。

「では黒ウサギがサンドラ様たちを捜しに行きます。その間は日向さんと十六夜さん、レティシア様の3人で魔王に備えてください。ジン坊ちゃんたちは白夜叉様をお願いします」

「分かったよ」

ジンとレティシアが共に頷く。

対照的に、飛鳥の表情は不満に染まった。

「ふん……また面白い場面を外されたわ」

「そう言うなよお嬢様。『契約書類』には白夜叉がゲームマスターだと記述されてる。それがゲームにどんな影響を及ぼすのかも確かめねえと——」

「お待ち下さい」

不意に、彼らの背後から声が掛かる。

振り向くと、そこには同じく舞台上が上がっていた『ウイル・オ・ウイスプ』のアーシャとジャックの姿があった。

「おおよその話は分かりました。魔王を迎え撃つというのなら、我々『ウイル・オ・ウイスプ』も協力しましょう。いいですね、アーシャ」

「う、うん。頑張る」

前触れもなく魔王のゲームに巻き込まれたアーシヤは、緊張しながらも承諾する。

「では御二人は黒ウサギと一緒にサンドラ様を捜し、指示を仰ぐことにしましょう」

一同は視線を交わして頷き合い、各々の役目に向かって走り出す。

直後に、観客席から悲鳴が上がった。

「見ろ！ 魔王が降りてくるぞ！」

上空に見える4つの人影が落ちてくる。

その様子を見るや否や、十六夜は強く拳を打ち付けると、日向とレティシアに向けて叫んだ。

「んじゃいくか！ 黒い奴と白い奴は俺が、デカイのと小さいのは頼んだ！」

「よっしゃ！ 任せとけ！」

「了解した主殿」

日向は軽快に応え、レティシアは単調に返事をする。

ここに、魔王とのギフトゲームが開幕した。

「何!?!」

全力で跳躍した十六夜は秒を跨がず軍服の男の前に躍り出ると、第三宇宙速度を遙かに凌駕した速度で境界壁に叩きつけた。

そのまま男の頭を鷲掴み、壁面を水平に踏み抜きながら疾走する。

「ヤハハ！ 会いたかつたぜ魔王様！ 俺にも一曲恵んでくれよ」

「——ッ！ 舐めるな、この糞ガキ!!」

軍服の男が棍のような笛を一振りすると、途端に岩壁が生き物のように蠢き始め、十六夜の足を固定した。

男は紅く染まった唾液を吐き捨てながら、鋭い目付きで十六夜を睨む。

「ペツ、やってくれじゃねえか。まさか先手を取られるとは思わなんだ」

「そりやどうも。『意外性に富んだ男の子』ってのが通知表の評価でね。良くも悪くも、期待を裏切ることには定評があると自負してる」

ヤハハ！ と笑う十六夜は今、岩壁に対して垂直に立っている。

脛すねの辺りまで岩壁に突っ込んで立っている姿は、異様とも間抜けとも取れるだろう。

2人が言葉を交わす中、陶器の巨兵と斑模様少女は止まることなく落下していき、もうひとりの女は岩壁に掛りつつ軍服の男に叫んだ。

「ちよつとヴェーザー！ そんな奴さつきと片付けなさいな！」

「ラッテン、お前は先に降りてろ。マスターをひとりにしたら皆殺しにしちまうからな」

ラッテンと呼ばれた女は舌打ちと共に飛び降りる。

それを静かに見届けた十六夜は、軽薄に笑つて呟いた。

「ふうん。『ラッテン』に『ヴェーザー河』……つまりお前たちは、『ハーメルンの笛吹き』の伝承に基づく課程から生まれた悪魔——一三〇人の子供たちを生け贄に、殺し方を霊格化したものつてことか」

ヴェーザーの顔が驚愕に染まる。

十六夜の指すヴェーザー河とは、ハーメルンの付近を流れる大河のことだ。

悪魔という種は、その霊格（そんざい）を『世界に与えた影響・功績・代償・対価』などによつて得る。

故にグリム童話における『ハーメルンの笛吹き』が悪魔の霊格を得て顕現した理由を、十六夜は『一三〇人の子供たち』の生け贄によるものと推測したのだ。

「ハーメルンの伝承には数多の考察がある。人攫いのような人為的なものから神隠し、黒魔術の儀式など *etc.*……。その中に『ヴェーザー河』が含まれるのは——自然災害などの天災。例えばアンタがこの岩壁を歪ませた力は、土砂崩れや地盤の崩落などを形骸化した霊格だと推測できる。そしてクリア条件である『偽りの伝承を砕き、真実を掲げよ』とは、ハーメルンの事件の真実を暴け、という意味に解釈される。……どうだ？ 満点とは言わずとも八〇点は堅いだろ？」

ヤハハと得意げに笑う十六夜。

黙っていたヴェーザーは十六夜の姿を値踏みするように眺めると、頭を掻いて呆れたように苦笑した。

「チツ、ただの糞ガキかと思つたら、随分と頭が回るじゃねえか。……だがま、ルールがルールだしな。見所もあるし一応聞いておくが、」

「断る」

「早ええなオイ！」

「分かりきっている問答に付き合う趣味はねえからな。つーか幻滅させないでくれよ魔王様。こっちは魔王会いたさに異世界からやってきたんだぜ？」

真つ直ぐと、偽りの無い本音の言葉を向ける十六夜。

箱庭に訪れてからの1ヶ月——魔王のゲームに参加することが夢のひとつであったと、彼は胸を張つて告げた。

「……ほお？ そりゃ失礼したな坊主」

十六夜の返答に、何か思うところがあつたのか。

ヴェーザーは寧猛に笑うと、臨戦態勢を取つて答える。

「坊主の期待に応える意味で、ひとつ誤りを正す。——俺は魔王じゃねえ。ただの木っ端悪魔さ。俺らの魔王閣下は、先に落ちた2人のどちらかだ」

「そうかい。じゃあ前座をさっさと済ませねえと、魔王様に失礼って話だ」

「馬鹿を言え。前座はゲームを盛り上げるのが仕事だ。いいクライマックスは、良い前座がいるからこそ映えんだよ。——ま、坊主じや役者不足かもしれないがな」

呵ッ、と笑い、2人は同時に走り出す。

両者の激突は境界壁に巨大な亀裂を奔らせ、砂塵と共に岩塊を降らせた。

天を衝き、山河を打ち砕く十六夜の拳を、ヴェーザーは巨大な笛で受け止める。

十六夜は鬨ぎ合いながらも、その事実嬉々として叫んだ。

「ハッ！ こりや確かにいい前座になりそうだ……！」

「チッ、そりやこつちの台詞だ糞ガキ！」

怒号一閃。

上空1000m地点において、十六夜とハーメルンの悪魔の激闘が始まった。

「やらないさい、シュトロム」

「BRUUUUUUUUUM!!」

「うおっと！ レティシア、そつちは大丈夫か!？」

「ああ！ 問題ないぞ主殿！」

一方その頃。

地上で敵を迎撃した日向とレティシアは、落下してきた陶器の巨兵と、斑模様のワンピースを着た少女と対峙していた。

陶器の巨兵は全身の風穴から空気を吸い込み、四方八方に大気の渦を形成している。

「BRUUUUUUUUUM!!」

奇声に応じて鳴動する大気。

地上に起きた乱気流の渦が、周囲の瓦礫を次第に吸収し始めた。

日向は気流に引き寄せられるのを堪えつつ、先ほど斑模様の少女が口にした、目の前の巨兵の名について考える。

(シウトロムは確か——「嵐」だったな。ならコイツは、天災に関する悪魔の類か……)
シウトロムと呼ばれた陶器の巨人は、吸収した瓦礫の山を圧縮し、まるで臼砲きゅうほうのように射出した。

数多の残骸が、眼前で相対する日向に向かって襲い掛かる。

「BRUUUUUUUUUM!!」

「あらよつとー」

しかし次の瞬間、日向は迫り来る凶弾を真正面から殴り飛ばした。

第三宇宙速度を遙かに越える速度で撃ち返された瓦礫群は、凄まじい威力で陶器の巨

兵を粉碎する。

「BRUUUUUUUUUM……」

「悪いな。手間暇かけてる余裕はないんだ」

あつという間に巨兵を沈黙させるや否や、日向は頭上に目を向ける。

視界の先では、レティシアと斑模様の少女が壮絶な空中戦を繰り広げていた。

斑の少女は、無機質な表情を浮かべて呟く。

「……あなた、ホントに純血のヴァンパイア？」

「手厳しいな！ これでも精一杯闘っているつもりだが……！」

金糸の髪を解れさせ、苦々しい声で答えるレティシア。

少女は興味を失ったように瞳を細めると、気の無い声で告げた。

「もういいや、あなたはいらぬ。本命を捜すから、死んでいいよ」

無情にも死を宣告する斑の少女。

彼女は静かに片手を上げると、トドメの一撃を放とうとする。

しかしその刹那。

レティシアはリボンを解いて大人の姿へ変幻すると、翼を畳み急加速して少女の懐に

攻め込んだ。

「……あれっ、」

「謝らないぞ。騙される方が悪いんだからな」

不敵な笑みを浮かべるレティシア。

先程までの劣性が騙りかただったと気づくがすでに遅い。

彼女は金と黒のギフトカードから長柄の槍を取り出すと、疾風のごとき一刺しで少女の胸を貫いた。

「やったか——!?!」

「やってないわ」

抑揚のない声で返される。

驚くべきことに、レティシアの突き出した槍は微塵も少女に届いておらず、尖端は胸部に当たって拉げていた。

斑の少女は無造作に槍先を掴んでレティシアを引き寄せると、その手から黒い風を発生させて彼女の身柄を拘束する。

(な……何だ、この奇妙な風は……!?!)

不気味に蠢く生物的な黒い風は、徐々にレティシアの意識を蝕んでいく。

斑模様の少女はレティシアの胸倉と顎を掴むと、薄い微笑で囁いた。

「痛かった。凄く痛かった。だけど許してあげる。……あなたはいい手駒になりそう」

「悪いけど、うちのメイドそう易々と渡すわけにはいかないな!」

刹那、斑模様の少女を日向が側面から殴りつける。

少女は黒い風で防御を試みるも、瞬時に無効化され驚愕と共に吹き飛ばされた。

同時に黒い風が霧散して空中に投げ出されたレティシアを、日向は抱きかかえて下方の屋根に着地する。

「す、すまない主殿。お陰で助かった」

「気にするなつて。これでも一応主人だしな。メイドを助けるのは当然の——」

そう言つてレティシアの姿を見た瞬間。

カチン！ と日向は硬直した。

……ちなみに、日向が大人になつたレティシアを見るのは、この時が初めてであつたりする。

更にちなみに、彼女は未だに意識が朦朧としているのか、日向の腕の中で儂げな吐息を漏らしていた。

「——？ どうしたんだ日向？」

様子がおかしいことに気づいたレティシアが尋ねるも、日向は呆然と彼女を見たまま微動だにしない。

やがてたつぷりと時間をかけた後——ポツリと呟いた。

「……綺麗だ」

一瞬、言葉の意味が分からず首を傾げるレティシア。

しばらく考えて日向の台詞を理解すると——みるみる頬を赤く染めた。

「なっ、ばっ、馬鹿者っ!! こんな時に何を言っているんだ!!」

「……あっ! いや、今のは違——!?!」

「戦闘中に余所見とは余裕じゃない」

珍しく取り乱したレティシアの叱咤で、日向はようやく我に返る。

その瞬間、2人の元に黒い風が迫ってきた。

「——! しまっ——!」

「危ない!」

黒い風が日向たちに届く間際、突如上空から炎弾が放たれて相殺される。

斑の少女は日向たちを顧みず、そのまま意識を頭上に向けた。

「……そう。ようやく現れたわね」

上空で輝くのは、飾られたペンダントランプだけではない。

轟々と燃え盛る炎の龍紋を掲げた、北側の「階層支配者」——サンドラが、龍を模し

た炎を身に纏って見下ろしていた。

斑模様の少女はスカートを風で靡かせると、微笑を浮かべてサンドラを見上げる。

「待っていたわ。逃げられたのではと心配していたところよ」

「……目的は何ですか、ハーメルンの魔王」

「あ、ソレ間違ひ。私のギフトネームの正式名称は ブラック・パーチャー “黒死斑の魔王”よ」

「……二十四代目、“火龍”サンドラ」

「自己紹介ありがと。目的は言わずとも分かるでしょう？ 太陽の主権者である白夜叉の身柄と、星海龍王の遺骨。つまりあなたが着けている龍角が欲しいの」

だから頂戴？ とでも言いたげな軽い口調で、サンドラの龍角を指差す少女。

「……なるほど。魔王と名乗るだけあつて、流石にふてぶてしい。だけどこのような無体、秩序の守護者は決して見過ごさない。我らの御旗の下、必ずあなたを誅してみせる」
「そう。素敵ね、フロアマスター」

轟々と荒ぶる火龍の炎を、黒々とした不気味な暴風で受け止める。

2つの衝突は空間を歪め、強力な衝撃波となつて大気を揺らす。

砕け散つたペンダントランプの残骸は、まるで両者の戦いを彩るかのように鮮やかな煌めきを放つていた。

「……わ、我々も行こうか主殿」

「……あ、ああ。うん。そうだな」

苛烈を極める激戦の下で。

日向とレイシアは、お互いに真っ赤な顔で視線を逸らしているのだった。

第18話 審議決議

—— // 火龍誕生祭” 運営本陣営。

—— バルコニー入口前。

飛鳥たちが白夜叉の元へ向かうと、バルコニーへの通路を不気味に蠢く黒い風が阻んでいた。

先に進めぬことに歯噛みしつつ、飛鳥は扉の向こうの白夜叉へ向かって叫ぶ。

「白夜叉！ 中の様子はどうなっているの!？」

「分からん！ だが行動を制限されておるのは確かだ！ 連中の // 契約書類^{ギアスロール}には何か書いておらんか!？」

ハッと気づつき、手元の黒い // 契約書類” を見る。

途端に文字が曲線と直線に分解され、新たな文面を紡ぎ出した。

『※ゲーム参戦諸事項※』

・現在、プレイヤー側ゲームマスターの

参戦条件がクリアされていません。

ゲームマスターの参戦を望む場合、

参戦条件をクリアして下さい。』

「ゲームマスターの参戦条件がクリアされていないですって……?」

「参戦条件は!? 他には何が書かれておる!?!」

「そ、それ以上は何も書かれていないわ!」

白夜叉は痛烈に舌打ちした。

彼女が知る限り、このような形で星霊を封印できる方法はひとつしか無い。

「よいかおんしら! 今から言うことを一字一句違えずに黒ウサギへと伝えるのだ!

間違えることは許さん! おんしらの不手際は、そのまま参加者の死に直結するものと

心得よ!」

普段の温厚さからは考えられない、緊迫した声で言い放つ。

今はそれだけ非常事態なのだ。

飛鳥たちは息を呑んで白夜叉の言葉を静聴する。

「第一に、このゲームはルール作成段階で故意に不備を行っている可能性がある！これは一部の魔王が使う手だ！ 最悪の場合、このゲームはクリア方法が存在しない！」

「なっ……!?!？」

「第二に、この魔王は新興のコミュニティの可能性が高いことを伝えるのだ！」

「わ、分かったわー！」

とるものもとりにあえず、飛鳥たちは頷いた。

詳しく説明を受けている時間はない。

事は一刻を争うのだ。

「第三に、私を封印した方法は恐らく——」

「はあい、そこまでよ♪」

ハッと白夜叉がバルコニーへと振り返る。

そこには白装束の女——ラッテンが、3匹の火蜥蜴を引き連れて立っていた。

彼らは灼熱の吐息を乱れさせ、血走った眼まなこを浮かべている。

「あら、本当に封じられてるじゃない♪ 最強のフロアマスターも、そうなつちや形無し

ねえー！」

「おのれ……!?! サラマンドラ」の連中に何をした!?!」

「そんなの秘密に決まってるじゃない。いかに封印が成功したとしても、あの白夜叉相

手に情報を晒すなんて馬鹿な真似をするつもりは無いわ。……ところで、一体誰と話してたのかしら？」

そう言つてラッテンは扉を見る。

次に手に持ったフルートを指揮棒のように掲げると、火蜥蜴たちに命令を下して襲わせた。

「きゃあー！」

「飛鳥ー！」

火蜥蜴の1匹が飛鳥に迫る。

咄嗟に耀が割つて入り、体長2mはあるかという巨体を上段蹴りで薙ぎ払う。

「飛鳥、ジン！ 掴まつて！」

「え、ええ」

耀は鷲獅子のギフトで旋風を巻き起こし、飛翔して距離を置こうとする。

その様子を眺めたラッテンは、少なからず驚きの声を上げた。

「あら、人間？ それにしても今の力……グリフォンか何かかしら？ 随分と変わり種じゃないの。見れば顔も端正で可愛いし……よし、気に入った！ あなたは私の手駒にしましょう！」

ラッテンは廊下に飛び降りた耀たちを追わず、艶美に笑つてフルートに息を吹き込ん

だ。

宮殿内へ高く、低く——妙なる魔笛の旋律が響き渡る。

その音色は以前飛鳥が聞いた不協和音とは違い、甘く誘うように中枢神経を刺激した。

とりわけ優れた五感を持つ耀にとって、その音色は絶大な効果を及ぼしてしまう。筋肉が弛緩し、意識を蝕まれる感覚に、彼女は思わず顔を歪めた。

「あ……駄目だ、コレ……！」

「きゃっ！」

「耀さん!？」

堪らず旋風を消した耀は、辛うじて地面に着地する。

腰が砕けたように震える彼女は、渾身の力で飛鳥たちへ叫ぶ。

「アイツが来る……飛鳥、ジン！ 逃げて……！」

「馬鹿言わないで！ ジン君！」

「は、はい！」

強張った表情で返事するジン。

飛鳥は大きく息を吸い込むと、何かを決意したように呟いた。

「先に謝っておくわ。……ごめんなさいね」

え？ とジンは小首を傾げる。

飛鳥は一瞬だけ申し訳なきような顔をして、

「コミュニケーションのリーダーとして——春日部さんを連れて黒ウサギの元へ行きなさい」

同士の心を支配した。

それも偶発的ではなく、意図的に。

「……分かりました」

ジンの瞳から光が薄れ、言われるがまま耀を連れてこの場を去る。

飛鳥は自らの意志で、彼の誠実な心根をねじ曲げた。

後にジンが、飛鳥を残したことを大いに悔やむだろうと理解しながら。

(……本当にごめんね、ジン君)

逃げる彼らの背を、飛鳥はしばし哀しげに見つめ——背後から現れた敵に、溢れる怒

りを以て振り向いた。

「……あらら？ あなたひとり？ お仲間はい？」

「私に任せて先に逃げたわ。あなた程度の三流悪魔、私ひとりで十分ですって」

「……ふうん？」

ラッテンはスウツと目を細める。

飛鳥の表情を勘ぐるような視線から一転、不敵な笑みを唇に浮かべた。

「それは半分嘘ね。あなたの瞳は、背負わされた人間の瞳じゃない。自ら背負った人間の瞳よ。……うん、凄く好みかも。あーもう、予想外にいい人材が転がってるじゃない！ あっちこっち目移りしちゃうわねホント！」

屈託なく笑うラッテン。

飛鳥はその姿を油断せずに見据えたまま、脳裏で素早く思考する。

(……笛吹き道化の伝承は、“人とネズミを操る道化”。それに従うなら、他の種への強制力は小さいはず。同じ条件なら、私の支配力が勝るはず……！)

飛鳥は密かにギフトカードを手を取った。

そして緊張を解すように、大きく息を吸って呼吸を整える。

意を決したように目を見開くと、腹の底から大声で叫んだ。

「全員——そこを動かすなッ!!」

は？ と唾然とするラッテン。

しかしその直後、ガチン！ と火蜥蜴を含め彼女の身柄が拘束される。

千載一遇のチャンスに飛鳥はギフトカードから白銀の十字剣を取り出すと、一足跳びで敵の懐へ飛び込んだ。

ラッテンの心臓を狙い、破邪の力を持って突き出された白銀の剣の切っ先は、

「——っ……!! この、甘いわ小娘!!」

重なる金属音。

ラッテンは拘束を振り払い、圧倒的な後手をモノともせず、剣を弾いた。

全身全霊の一撃を容易く凌がれた飛鳥は、その勢いで側面を壁に打ちつけられる。

(こ、の……！……！) せめて春日部さんの半分も動けたら……！)

己の力の無さを、ここに来て再び痛感した。

飛鳥は「支配する者」であり、「行使する者」ではない。

彼女の身体は、ただの15歳の少女でしかないのだ。

自らの領分をわきまえなかった、必然の敗北だった。

「驚いた……不意打ちとはいえ、数秒も拘束されるなんて。かなり奇妙な力を持つてる

のね、あなた」

ズドンッ!!!

と笑いながら、飛鳥の腹部を蹴り上げるラッテン。

「……………!」

込み上げる嘔吐感を、飛鳥はプライドひとつで抑え込んだ。

痛烈に痛む腹部を押さえながらも、彼女は不敵な眼差しでラッテンを睨む。

「…………フッフ、綺麗な子。さっきの子もいいけど、総合ではあなたの方が素敵かな」

ズドンッ!!!

ともう一度腹部を蹴られ、飛鳥は意識を失った。

ラッテンは妖艶な微笑みを浮かべると、再び魔笛を口元に添える。

「さあ！ 我々、オベラグリムグリモワール・ハーメルン」のゲームはコレからが本番よ！
最高に過激な歌劇を始めましょう！」

奏でられる魔笛の旋律が、舞台会場に響き渡った。

人心を操る音色は参加者たちの意識を蝕み、同士討ちや破壊活動を強制する。

参加者側の主力はすでに交戦中にあり、彼女を止められる者はひとりもない。

思考を支配され、屈服を強要されたコミュニケーションが次々と脱落していき、半ば勝敗が決したと思われたその刹那——激しい雷鳴が轟いた。

「そこまでですー！」

魔笛を掻き消されたラッテンは、ハッと空を仰ぐ。

「今の雷鳴……まさか！」

彼女が見上げる先。

宮殿の屋上で幾度も雷鳴を鳴らしているのは、軍神・帝釈天より授かったギフト——
ヴァジュラ・プリカ擬似神格・金剛杵”を掲げた黒ウサギだ。

彼女は輝く三又の金剛杵を掲げ、高らかに宣言した。

「ジャッジマスター“審判権限”の発動が受理されました！ これよりギフトゲーム” The PIE

D P I P E R of H A M E L I N” は一時中断し、審議決議を執り行います！
 プレイヤー参加者側、ホスト主催者側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！ 繰り返します——」

——境界壁・舞台区画。

—— “火龍誕生祭” 運営本陣営・大広間。

宮殿内は多くの参加者で溢れていた。

集められた者の中には、負傷者の数も多い。

そんな中、合流した日向と十六夜は、互いに敵の情報交換し合っていた。

「ふうん。黒い風を操る斑口りと、巨大な陶器の化け物か。お前はどっちが魔王だと思う？」

「女の子の方だな」

十六夜の問いに、日向は即答した。

「というか、俺が最初に倒した相手が魔王だったら、このゲームはすでに終わってるだろ」

「ま、それもそうか。……それで？ 実際に戦ってみた感想は？」

「強いな」

これにも日向は即答した。

その答えに、十六夜は不敵な笑みを浮かべる。

「へえ、やっぱり強いのか。流石は魔王様、こっちの期待を裏切らねえな」

「お前の戦った方はどうなんだ？ 確かヴェーザーとか言ってたけど」

「そっちは問題ない。俺かお前、それかサンドラでもたぶん楽勝だ」

「そうか。となると問題は、仲間を操るラツテンって悪魔の対処と、やっぱり魔王のあの子だな」

「おう。とりあえず俺とお前は——」

2人でゲーム再開後の作戦を練っていると、そこへ黒ウサギとジンが心配そうに駆け寄ってきた。

「日向さん！ 十六夜さん！ ご無事でしたか!？」

「ああ、俺たちは平気だよ」

「それより他の面子はどうなってる?」

「残念ながら、御二人と黒ウサギを覗けば満身創痍です。飛鳥さんに至っては姿も確認できず……すみません、僕がしつかりしていれば」

「気にするな。ジンのせいじゃないさ」

悔しげに下げられたジンの頭に、日向が優しく右手を置く。

しかし現状が芳しくないのは確かだ。

耀とレティシアは敵との交戦で疲弊しており、すぐに戦いを始められる状態ではない。

状況を確認した黒ウサギは、苦々しい声を漏らす。

「白夜叉様の伝言を受け取り、すぐさま審議決議を発動したのですが……少し遅かったようですね」

「そもそも審議決議ってのは何なんだ？」

「『主催者権限』によって作られたルールに、不備がないかどうかを確認するために与えられたジャッジマスターが持つ権限のひとつでございます。それに一度始まったギフトゲームを強制中断できるわけですから、奇襲を仕掛けてきた魔王に対抗するための権限、という側面もあります」

「へえ、要するにタイムアウトみたいなものか。無条件でゲームの仕切り直しが出るなら、かなり強力な権限だな」

思わず感心の声を上げる日向。

しかし黒ウサギは複雑な表情で首を振った。

「いえ、そうとも限らないのですよ。審議決議を行ってルールを正す以上、これは『主催

者”と“参加者”による対等のゲーム。……えつと、単刀直入に説明しますと“このギフトゲームに一切の禍根を持たない”という相互不可侵の契約が交わされるのですヨ”

黒ウサギの説明に、十六夜は片眉を歪ませる。

「……つまりゲームで負ければ最後、他の“サウザンドアイズ”や“サラマンドラ”は報復行為を理由にギフトゲームを挑むことが出来ない、ってことか」

「YES。ですので、負ければ救援は来ないものと思ってください」

「ハッ、最初から負けを見据えて勝てるかよ」

「そうだな。勝てば何も問題ない」

十六夜と日向が互いに意気込んでいると、そこで大広間の扉が開いた。

広間に入ってきたのはサンドラとマンドラの2人だ。

今から行われる魔王との審議決議に、“ハーメルンの笛吹き”に詳しい同行者を募りに来たのだ。

その呼びかけに日向と十六夜は、

「ウチのジンⅡラッセルが誰より知ってるぞ！ めっちゃ知ってるぞ！ とにかく詳しいぞ！ 役に立つぞ！ この件で“サラマンドラ”に貢献できるのは“ノーネーム

”のジンⅡラッセルを置いて他にいないぞ！」

「え？ えつ？ ええつ?!」

とこれ以上ないくらいジンを持ち上げ、結果、見事審議決議への参加を勝ち取ったのだった。

その後、ゲーム中断からおよそ1時間。

両陣営は宮殿の貴賓室で対面した。

「ただ今よりギフトゲーム “The PIED PIPER of HAMELIN” の審議決議、及び交渉を始めます」

厳かな声で黒ウサギが告げる。

日向たちの向かいには白黒斑のワンピースを着た少女が座り、背後の両隣に軍服姿のヴェーザーと、白装束のラッテンが控えて佇んでいる。

一方参加者側の面子には、^{プレイヤー} “ノーネーム” から日向に十六夜、そしてジンの3人。

“サラマンドラ” からはサンドラ、そしてマンドラの2人だ。

黒ウサギを含め総計9人が、今この場で一堂に会していた。

「まず “主催者”^{ホスト} 側に問います。此度のゲームですが、」

「不備は無いわ」

斑の少女は、黒ウサギの言葉を遮るように吐き捨てる。

「今回のゲームに不備、不正は一切ないわ。白夜叉の封印も、ゲームのクリア条件も全て調えた上でのゲーム。審議を問われる謂われはないわ」

静謐な瞳とは裏腹に、ハッキリとした口調で話す斑の少女。

「……受理してもよろしいので？ 黒ウサギのウサ耳は箱庭の中枢と繋がっております。嘘を吐いてもすぐに分かってしまいますヨ？」

「ええ。そしてそれを踏まえた上で提言しておくけれど。私たちは今、無実の疑いでゲームを中断させられているわ。つまりあなたたちは、神聖なゲームにつまらない横槍を入れているということになる。——言ってること、分かるわよね？」

少女は涼やかな顔でサンドラを見る。

対照的に、サンドラは顔を歪めて歯噛みした。

「不正が無かった場合……主催者側に有利な条件でゲームを再開させろ、と？」

「そうよ。新たなルールを加えるかどうかの交渉はその後にしましょう」

「……分かりました。黒ウサギ」

「は、は、は」

少し動揺したように頷く黒ウサギ。

頭上を仰ぎ、ウサ耳をピクピクと動かし始める。

その隙に、日向は後ろで控えるマンドラに尋ねる。

「今の内に少し聞いておきたいことがあるんだが……一体どの程度ならゲームの不正に当たるとんだ？」

「……そんなことも知らずに同行したのか、貴様」

チツと舌打ちして、マンドラは説明する。

「貴様も知っているだろうが、ギフトゲームは参加者の能力不足・知識不足を不備としない。たとえ不死を殺せと言われようが、殺せぬ方が悪い。今回ならば、クリアに「ハーメルンの笛吹き」の伝承の知識が必要でも、知らぬ方が悪いとなる」

「へえ？ そりゃ理不尽だ」

十六夜が気のない感想を返す。

マンドラは取り合わず話を続けた。

「今回のゲームに不備があるとすれば、まず白夜叉の封印だ。参加を明記しておきながら、参戦は出来ぬと言う。これは看過できん。そこには明文化された要因が必要なのは」

「けど記されていたのは、『偽りの伝承を砕き、真実を掲げよ』の一文のみ、か。……なるほどな」

日向は顎に指を添えて思考する。

そこでこれまで瞑想していた黒ウサギが、気まずそうにウサ耳を伏せた。

「……箱庭からの回答が届きました。此度のゲームに不備・不正はありません。白夜叉様の封印も、正当な方法で造られたものです」

ギリ、と奥歯を噛む音がした。

これで参加者側は一気に不利となってしまう。

「当然ね。じゃ、ルールは現状を維持。問題はゲーム再会の日取りよ」

「日取り？ 日を跨ぐと？」

サンドラは意外そうな目を向けた。

他の参加者たちも同様だ。

明らかに劣勢である参加者側に、あえて時間を与えるというのだから当然だろう。

少女は気に止めず、黒ウサギの方へ視線を向ける。

「ジャツジマスターに問うわ。再会の日取りは最長でいつ頃になるの？」

「さ、最長ですか？ ええっと、今回の場合だと……1ヶ月でしょうか」

「じゃ、それで手を——」

「待った！」

「待ちな！」

「待つてくださいい！」

日向、十六夜、ジンが同時に声を上げる。

斑の少女は抑揚の無い声で返答した。

「……なに？ 時間を与えてもらえないのが不満？」

「いや。それ自体は確かにありがたいんだけどな」

「ああ。けど場合によるね。……俺たちは後でいい。おチビ、先に言え」

「はい。主催者に問います。あなたの両隣にいる男女は『ヴェーザー』に『ラッテン』だと聞きました。そして日向さんが倒したという陶器の怪物が『シウトロム』だと。ならあなたの名は……『黒死病』ではないですか？」

「ペストだ?!」

ジンの発言に一同の表情が驚愕に染まり、一斉に斑の少女を見る。

しかし無理もないだろう。

——『黒死病』とは、十四世紀から始まる寒冷期に大流行した、人類史上最悪の疫病である。

この病は敗血症を引き起こし、全身に黒い斑点が浮かび上がって死亡する。

グリム童話の『ハーメルンの笛吹き』に現れる道化が斑模様であったこと。

そして黒死病が大流行した原因である、ネズミを操る道化であったこと。

この2点から、一三〇人の子供たちは黒死病で亡くなったという考察が存在するのだ。

「その通り。だから君のギフトネームは、ブラック・パーチャー 黒死斑の魔王」なんだ」

「それで？ 回答は魔王様？」

「……ええ。正解よ」

涼やかな微笑で斑の少女——ペストは頷いた。

「お見事、名前も知らないそのあなた。よろしければ、コミュニティと名前を聞いても？」

「……『ノーネーム』のジン＝ラッセルです」

「そつ。覚えておくわ。……だけど確認を取るのが一手遅かったわね。私たちはゲーム再開の日取りを左右できると言質を取っているわ。もちろん、参加者の一部にはすでに病原菌を潜伏させている。ロックイーターのような無機生物や悪魔でもない限り発症する、呪いそのものを」

「っ……!?!」

最悪の事実だった。

彼女の撒いた呪いが黒死病と酷似するのであれば、発症するまで最短で2日。

1ヶ月もあれば、力の無い種は死滅してしまうだろう。

日向たちは今、戦わずして負けようとしているのだ。

「じゃ、ジャツジマスターに提言します！ 彼らは意図的にゲームの説明を伏せていた

疑いがあります！ もう一度審議を、」

「いけませんサンドラ様！ ゲーム中断前に病原菌を潜伏させていたとしても、その説明責任を主催者側が負うことはありません！ また彼らに有利な条件を押し付けられるだけです……！」

ぐつと言葉を堪えるサンドラ。

彼女の悔しそうな姿を涼やかな眼差しで見つめながら、ペストはこの場にいる参加者へ問う。

「ここにいる人たちが、参加者側の主力と考えていいのかしら？」

「……………」

「マスター。それで正しいと思うぜ」

黙り込む参加者に代わり、ヴェーザーが答える。

「なら提案しやすいわ。——ねえ皆さん。ここにいるメンバーと白夜叉。それらが、グリムグリモワール・ハーメルン」の傘下に下るなら、他のコミュニティは見逃してもいいわよ？」

「なっ、」

「私、あなたたちのことが気に入ったわ。サンドラは可愛いし。ジンは頭いいし。それに……不思議なギフトを持っている人もいるみたいだし？」

そう言いながら、不意にペストは日向を見つめて微笑んだ。

日向は何も言わず、その瞳を見つめ返している。

「私が捕まえた紅いドレスの子もいい感じですよマスター♪」

ラッテンが愛嬌たっぷりに言うと、〃ノーネーム〃のメンバーの顔が強ばった。

「ならその子も加えて、ゲームは手打ち。参加者全員の命と引き換えなら安いものでしょ?」

薄い笑みを浮かべ、愛らしく小首を傾げるペスト。

しかしその笑顔の裏にあるのは真逆の意。

従わなければ皆殺しだと、この少女は言外に言つてのけたのだ。

戦慄するような、幼くも美しい笑みに戸惑う一同。

しかし日向と十六夜、ジンの三人だけは、冷静に状況を分析していた。

ジンは機を伺っていたように、真剣な面持ちで問いかける。

「……これは白夜叉様からの情報ですが。あなたたち、グリムグリモワール・ハーメルン」はもしや、新興のコミュニティなのでしょうか?」

「答える義務はないわ」

即答だった。

しかしそれが逆に不自然さを浮き彫りにする。

日向はすぐさまその隙を見抜いて畳み掛けた。

「へえ、なるほど、新興のコミュニテイか。だから優秀な人材集めにあれほど貪欲だったんだな」

「……」

「おいおい、このタイミングでその沈黙は是と取るぜ？ いいのか魔王様？」

切り口を見つけ、挑発的に笑う十六夜。

ペストはそれまでの笑みを消し、眉をしかめて彼らを睨んだ。

「……だからなに？ 私たちが譲る理由は無いわ」

「いいえあります。だってあなたたちは、僕らを手に入れたいと思っっているはずですから。もし1ヶ月も放置されたら、きつと僕たち皆死んじゃいます。……だよねサンドラ」

「え？ あ、うん」

突然話を振られ、サンドラは地で返事をする。

慌てて正そうとするも、ジンは待たずにまくし立てた。

「そう。死んでしまえば手に入らない。だからあなたはこのタイミングで交渉を仕掛けた。実際に30日が過ぎて、その中で失われる優秀な人材を惜しんだんだ」

キツパリと断言する。

今回に限ってだが、ジンはこの解答に絶対の自信があった。

しかしペストは、それでも無然と言いつ返す。

「もう一度言うけど。だからなに？ 私たちには再開の日取りを自由にする権利がある。1ヶ月でなくとも……20日。20日後に再開すれば、病死前の人材を、」

「では発症したものを殺す」

ギョツと全員がマンドラへ振り向いた。

その瞳は真剣そのものだ。

「例外は無い。たとえサンドラだろうと、箱庭の貴族だろうと……無論、私であろうと殺す。フロアマスターである『サラマンドラ』の同士に、魔王へ投降する脆弱な者はおらん」

一同は絶句する。

仮にブラフだとしても、明らかに過激すぎる宣言だ。

しかし日向と十六夜は、ここでマンドラの発言に活路を見いだす。

日向は黒ウサギへ問いかけた。

「なあ黒ウサギ。ルールの改変はまだ可能か？」

「へ？ ……あ、YES！」

ピン！ とウサ耳を伸ばす黒ウサギ。

その言葉に頷き、十六夜は交渉を続ける。

「よし。なら交渉しようぜ。『黒死斑の魔王』。俺たちはルールに『自決・同士討ちを禁ずる』と付け加える。だから再開を3日後にしろ」

「却下。2週間後よ」

十六夜が提案するも、即断を下された。

しかし2週間は長い。

理想的な期間は、ゲームの謎解きも含めて1週間以内。

他に交渉材料は無いものかと日向は辺りを見回して……そこで黒ウサギと目が合った。

「今のゲームだと、黒ウサギの扱いはどうなってるんだ？」

「黒ウサギは大祭の参加者ではありませんでしたが、審判の最中だったので15日間はゲームに参加できないことになっています。……主催者側の許可があれば別ですが」

頷き、日向は再び交渉へ乗り出す。

「ならこうしよう。黒ウサギは参加者じゃないから、ゲームで手に入れることは出来ない。けど、参加者にすれば手に入る……というのはどうだ？」

「……………10日。これ以上は譲れないわ」

「ちよ、ちよつとマスター!? 『箱庭の貴族』に参戦許可を与えては……!」

「だって欲しいもの。ウサギさん」

焦るラッテンに素っ気ない一言で答えるペスト。

しかしまだだ。

あと少し、あと少しで五分にまで持っていていける。

だがこれ以上他に交渉するモノが見当たらない。

全員が最速で思考を巡らせる中——ジンは意を決して切り出した。

「ゲームに……期限を設けます」

「なんですつて？」

「再開は1週間後。ゲーム終了は……その24時間後。そして、ゲームの終了と共に主催者側の勝利とします」

ゴクリ、と黒ウサギやサンドラたちの息を呑む音が室内に響く。

「……本気？ 主催者側の総取りを覚悟するというの？」

「はい。1週間は死者が現れないギリギリのラインです。今後現れるであろう症状やパニックを想定した場合、精神的にも体力的にも耐えられるであろう限界。そして、それ以上は僕らも耐えられない。だから全コミュニケーションは、無条件降伏を呑みます」

「……………」

ペストは口元に手を当てて思索する。

これは確かに両者にとつて得となる申し出だ。

今後の準備や謎解きの時間が欲しい参加者側。

優秀な人材たちを無傷で手に入れたい主催者側。

1週間＋1日というタイムリミットは、まさに理想的な期限——では……あるのだが。

(……気に入らないわ)

ペストは不服だった。

一見合理的に話が進んでいるようで、実際は何もかもが参加者側の目論見通りになっている。

確かに彼女は若輩だ。

魔王を名乗れはするものの、同時にルーキーである点は否めない。

思うようにゲームメイクが出来ないのも、ある種仕方が無いことではあるのだ。

しかし、彼女が何よりも気に入らないことは、

「……ねえ、ジン。もしも1週間生き残れたとして、あなたは——いえ、あなたたちは、魔王に勝てるつもり？」

「勝てます」

脊髄反射で答えるジン。

彼自身、考えて答えた訳ではないので内心肝が冷えている。

しかしそれでも、同士の勝利だけは決して疑っていないかった。

「……………そう。よく分かったわ」

ペストは不機嫌な顔を一転させ、ニツコリと笑う。

そしてそんな花咲いたかのような、愛らしい笑顔で、

「宣言するわ。あなたたちは必ず——私のオモチヤにすると」

その瞳には、壮絶な怒りの色が宿っていた。

途端に黒く染まった風が室内を吹きぬけ、参加者たちの眼前から彼女——「黒死斑の

魔王」は配下と共に姿を消す。

後に残されたのは、1枚の黒い「ギアスロール契約書類」だった。

『ギフトゲーム名』The P I E D P I P E R

of H A M E L I N

プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・

四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の

舞台区画に存在している参加者

及び主催者の全コミュニケーション。

(“箱庭の貴族”を含む)

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉

(現在非参戦の為、中絶時の接触禁止)

・プレイヤー側・禁止事項

・自決及び同士討ちによる討ち死に。

・休止期間中にゲームテリトリー

(舞台区画)からの脱出を禁ず。

・休止期間の自由行動範囲は、

本祭本陣営より500m四方に限る。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・8日後の時間制限を迎えると

無条件勝利。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、

真実の伝承を掲げよ。

・休止期間

・1週間を、相互不可侵の時間として

設ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホスト

マスターの名の下、ギフトゲームを

開催します。

グリムグリモワール・

ハーメルン“印”

——境界壁・舞台区画・暁の麓。

——美術品・出展会場。

すでに無人となった境界壁の展示場。

ペストたちはそこに本陣を敷いていた。

幕間の退屈を慰めるには、様々な美術品が置かれたこの場所は最適であると考えたからだ。

ラッテンは白装束の尾ひれを揺らしつつ、嬉々としてペストに話しかける。

「ねえねえマスター！ これからの1週間、どんな風に過ごしますー？」

「別に。特に予定はないわ」

ハイテンションなラッテンと、対照的に冷め切った声で答えるペスト。

そこでヴェーザーが、ふと思いついたように問いかけた。

「おいラッテン。そういう結局『ラッテンフエンガー』の偽物は見つかったのか？」

「あー全然。ネズミ共は何か見つけたみたいだったけど、取り逃がしたみたい。まあゲームに参加してるっぽいし？ 8日後には全部分かるわよ」

互いに肩を竦ませる2人。

その後揃って美術品を物色しながら大空洞を回っていると、不意にペストが小首を傾げて呟いた。

「……あら？ 中心にあった鉄人形は？」

何となしに言った言葉。

しかしラッテンとヴェーザーは、瞳を丸くして起こった事実には驚愕する。

「う、嘘……!!? あんな巨大な鉄人形がパツと消えるはずないわ!」

「違う! 問題はそこじゃねえ! ああ鉄人形を造ったのは確か——!!!」

「コミュニケーション・^{ラッテンフェンガー}ネズミ捕りの道化」。

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き」を暗喩する何者かが造った巨躯の鉄人が、一切の痕跡を残さずまるで煙のように消え失せていた。

困惑する2人の元へ、追い打ちをかけるように複数のネズミが駆け寄ってくる。

「は、はあ!? あの紅いドレスの子も消えたあつ!? 何やってんのよこの無能共ツ!!」

「詮索は後だ! ラッテン、ネズミ共に探させろ! まだそれほど遠くには行っていないはずだ!」

「分かってるわよ! ああ、マスター! 不埒者は直ちに成敗しますゆえ、少々お暇を——」

「放っておきなさい。面倒くさいし、今日はもう疲れたわ」

ふあ、と小さな欠伸をひとつ。

そのままテーブルクロスに横たわって眠る姿勢を取るペスト。

勢いを挫かれて呆然となるラッテンとヴェーザーに、彼女はゾツとするような薄い笑みで、

「好きに泳がせなさい。邪魔者も偽物も——8日後に纏めて殺せばいいわ」
それだけでしょ？ ——と。

「黒死斑の魔王」は、悠然と微笑みを浮かべるのだった。

暗い意識の中、幼い声が聞こえてきた。

「あすかつ、あすかつ……！」

ぴちより、と滴が頬に落ちる。

そこで目を覚ますと、とんがり帽子の小さな精霊が必死に飛鳥の身体を揺すつていた。

「ひ、いつく……！ あ、あすか……あすかあ……！」

「……大丈夫よ。だから泣かないで」

「——！ あすかつ！」

しゃくりを上げていたとんがり帽子の精霊は、すぐさま飛鳥の顔へしがみつく。

よつぽど心配だったのだろう。

その顔は大粒の涙で濡れてくしゃくしゃになっていた。

「あなたが無事で良かった……咄嗟に服の中へ詰め込んだけれど、ほら。私の胸って黒

ウサギほど大きくないから」

らしくない自虐的な冗談を言ってしまうのは、彼女自身気が滅入っている証拠なのだろう。

それでもやがて意識がしつかりし始めると、飛鳥は上体を起こして周囲を見回す。境界壁の空洞なのか、展示場と似た材質の壁に囲まれているのを理解して、彼女は妙だと言を傾げた。

「私は、確か……そうよ、あの女に蹴り飛ばされて！」

ガバツ！ と盛大に立ち上がる飛鳥。

それにちよつぴり驚くとんがり帽子の幼い精霊。

その後精霊を掴まんで肩に乗つけた飛鳥は、出口を探して空洞内の散策を始めた。

人工的な場所なのか、所々に明かりとなる松明が飾られている。

念のためにそれらのひとつを手に取った飛鳥は、慎重に洞穴の中を進んでいき、やがて天井高くまであるような巨大な門の前まで辿り着いた。

「こんな場所に門……？」 それにこの紋章、確かどこかで見たような……」

門の全体には、旗印と思わしき文様が刻み込まれている。

光の差さないこの地下道で、これほど巨大な門に旗印の細工を施す巧緻な技術。

覚えがあるとするとするなら展示会場だ。

「……あすか」

とんがり帽子の精霊が、静かに飛鳥の名前を呼んだ。
そして、巨大な門の中心を指差す。
そこには一枚の羊皮紙が貼られていた。

『ギフトゲーム名 “奇跡の担い手”』

・プレイヤー一覧 久遠 飛鳥

・クリア条件

神珍しんちんてつ鉄製自動人形 “デイーン” の服従。

・敗北条件

プレイヤー側が上記のクリア条件を
満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、

“ はギフトゲームに

参加します。

“ラッテンフェンガー”印』

「これ…… ギアスロー 契約書類」？ まさか、

「あすか」

とんがり帽子の精霊は飛鳥の肩から飛び降りると、手頃な岩壁の突起に立つ。

幼い精霊は寂しそうな、切なそうな、でも少しだけ嬉しそうな、そんな瞳で飛鳥を見て——

「わたしから、あなたにおくりもの。どうかうけとってほしい。そして偽りの童話——
“ラッテンフエンガー” に終止符を」

声は目の前の精霊ではなく、四方八方から聞こえてきた。
洞穴の虚空から、岩肌の中から。

その時、飛鳥はこの小さな精霊が何者であるのかを思い出し、そして同時に直感した。
ここに——彼女の仲間たちがいたのだと。

「“群体精霊”。あなたたちは、大地の精霊か何かなの？」

「はい。私たちはハーメルンで犠牲になった一三〇人の御霊^{みたま}。天災によって命を落としたりした者たち」

—— “ウィル・オ・ウイスプ” のアーシャのように、天災や天変地異で亡くなった魂

は、時にその魂の形骸を肥やしとして新たな超常存在へと昇華する。

人の身から精霊へ。

転生という新たな生を経て、霊格と功績を手にした精霊群。

それが彼ら“群体精霊”の正体である。

「……私を、試していたの?」

「いいえ。この子とあなたの出会いは偶然であり、私たちにとつての最後の奇跡。そこに群体としての意識的介入はありません」

幼い精霊が飛鳥に惹かれたのは、故意ではなく。

彼女は、運命的にあなたに惹かれたのだと群体は語る。

「あなたには全てを語りましょう。1284年6月26日にあつた真実を。そして偽りのハーメルンの正体を」

「そして捧げましょう。我々が造り上げた最高傑作。星海龍王より授かりし鉱石で鍛え上げた、最後の贈^{ギフト}り物を」

「最早叶わぬ願いと思つておりました。しかし一三人目の同士が、あなたをここに連れてきた」

「“奇跡の担い手”と成りうるあなたを。幾星霜の旅路は、決して無駄ではなかつた……!」

巨大な門が音を立てて開く。

ヒラリヒラリと舞った『契約書類』は、そつと飛鳥の手に落ちた。

「決断はあなたに委ねましょう。我々のギフトゲームを……受けてくれますか？」

「……」

飛鳥は書類に視線を落とす。

そこにはまだ、彼女のコミュニケーションのサインがない。

ギフトゲームを受けるか否かの選択を、彼女自身に示して欲しかったのだろう。

飛鳥は書面を一通り確認し、スツと顔を上げる。

「ひとつだけ確認するわ。あなたたちの造ったギフトがあれば……奴らに勝てる？」

「あなたが使えば」

「あなたが従えれば」

「あなたが担うのなら」

「「必ずや、あなたを勝利させましょう」」

群体の声が空洞内に反響する。

ならば断る理由はない。

飛鳥は頷き、『契約書類』に筆を走らせてサインした。

「『ノーネーム』在籍、久遠飛鳥。あなたたちの挑戦、心して受けましょう」

光り始めた書類は門の中へと飛んでいき、導しるべのように軌跡を残す。

道標に従い、門の奥へと進む飛鳥。

するとドーム状に開けた大地の中心に、身の丈三十尺はあろうかという紅い鋼の巨人が佇んでいた。

「これは……展示会場にあつた?」

紅と金の華美な装飾に加え、太陽の光をモチーフにしたと思われる抽象画を装甲に描くその姿は、例えようもなくド派手だ。

加えて人間の倍はあろうかという巨大な拳と足。

寸胴な頭と体。

啞然と見上げる飛鳥に、群体の声が響く。

「決戦までの7日間。それまでに彼——『ディーン』を服従させること」

「それがこのギフトゲーム。あなたの『威光』で、鋼の魂に灯火を」

刹那、伽藍洞がらんどうの巨軀に熱が灯る。

鳴動する鋼は地響きを立てて、不気味なひとつ目を輝かせる。

紅い巨人は、天地を震撼させるような産声を上げた。

「————DEEEEEEEeeeeEEEEEN!!!」

伽藍洞の身体をしならせ、紅き鋼の巨人『デイン』が吼える。
死の病にも倒れない、永久駆動の魔神が立ち上がる。
対魔王に向けて、飛鳥の試練が始まるのだった。

第19話 真実の伝承

——境界壁・舞台区画・暁の麓。

——美術品出展会場・主催者側本陣営。

交渉から4日目。

ペスト、ラッテン、ヴェーザーの3人は、その後も展示場の奥の大空洞で過ごしていた。

ラッテンは気に入った美術品を大空洞の中心に集め、うっとり鑑賞に耽っている。

「ああ、いいわあ。流石はフロアマスターの誕生祭だけあって、造り手の気合いが違うわねえ。特にこの“ウィル・オ・ウィスプ”製作の燭台！ 悪魔の蒼炎をあえて銀の燭台に刻み込む挑戦的姿勢！ この見事な職人に“グリムグリモワール・ハーメルン”の旗印を刻ませたい！」

「そりゃ無理だ。それを造ったのはジャック・オー・ランタンだろ？ あいつは参加者じゃねえから、ゲームに勝っても俺らの傘下にや下らねえ」

ヴェーザーの素っ気ないツツコミに、ラッテンはぶすすと頬を膨らませる。

余談ではあるが、生前のジャックは鍛冶屋を営んでいたらしい。

「あーあー。残念だなー。ジャックも今から巻き込めないの？」

「馬鹿か。ジャックは俺たちと同じ方法で祭典に招かれてんだぞ。書き換えるのは種明かしをするのと同じだろうが」

「それはそうだけど。マスターはどう思いますー？」

「……カボチャは匂いが嫌い」

そこか。

マイペースなマスターに、側近の2人は苦笑した。

ペストは斑模様ワンプリースを整え、キャンドルランプの蜻蛉を静かに見つめている。交渉の席ではあれだけ饒舌だったというのに、普段の彼女は決して自分から口を開こうとしない。

そんな主を氣遣つてか、ラッテンはよく彼女へ話しかけていた。

「あれから4日。徐々に感染者が発症し始めているみたいですねえ」

「そうね」

無愛想に返すペスト。

ラッテンはやや拗ねたように唇を尖らせた。

「あーあ。何もかも順調なのに、消えた鉄人形と逃げ出したお嬢さんは見つからないですわねー。それにマスターは相手してくれないわ。暇だなー暇だなー。せめて『白雪』か『灰かぶり姫』の連中がいれば、傘下に入れた連中を使って面白可笑しいオペラでも演じさせたのにい」

「……? 『白雪』と『灰かぶり姫』?」

珍しくペストが自発的に問い返す。

ラッテンはパーツと表情を明るくして説明した。

「^{グリモア}魔道書シリーズのグリム童話出身で、私たちの姉妹になる魔書です。まあ賑やかな連中ではね。毎夜毎晩、楽団気取って馬鹿騒ぎしてたんですよ。魔法の靴を小人に履かせて、灼熱の上でタップダンスを踊らせたわね」

「ああ、アレは笑えたな。灰かぶりの奴は陰気だったが、ユーモアのセンスは中々だった」

くつくつと口を押さえて笑う2人。

共有する思い出が無いペストは、不思議そうに小首を傾げるばかりだ。

「……『^{グリムグリモア}幻想魔道書群』って、楽しいコミュニティだったの?」

「それはもう! 何せ前のマスターの場合は、魔王になった理由からして頭悪かったですよ」

「俺が魔王になり、怠惰な神々に代わって箱庭を華々しく飾ってやろう!」……つて感じの人でな。初めはとんだ外れくじを引かされたもんだと頭を抱えたが……いやいやどうして。最後のその一瞬まで、魔王の名に恥じない散り様だった」

2人の表情から笑みが消える。

幾星霜の彼方、過ぎた日を顧みる彼らの瞳は、少し寂しげなものになった。

「……ああ、そうだマスター。ひとつ、大事な話をしておきます」

「何?」

「あなたは魔王としてギフトゲームを開催しました。今後、多くのコミュニティにその命を狙われることになるでしょう。魔王として戦って戦って、そしてやがて——必ず没します」

「必ずな」

「……」

ペストは何も言わず、2人の言葉を静聴する。

「この神々の箱庭において、魔王とはそういうシステムだどご理解ください。いかに強大、いかに凶悪、いかに尊大であろうと……いずれ必ず、何者かに滅ぼされる。相手が英雄であるか、神仏であるかは問いません」

「なんつっても、上を見たらきりがねえ。上層は修羅神仏の蠢く魔境。しかし魔王とな

る以上、上を目指し続けなきや生き残れない。俺たちは箱庭の秩序の外に身を置く代償に、いずれ秩序を正す者に「滅ぼされる運命」を背負うのさ。……ま、前のマスターの受け売りだがね」

ヴェーザーは展示品の鉄柵に腰掛け、おどけるように肩を竦める。

「……2人は前のマスターが好きだったのね」

「いい男でしたから。本拠だつて、ノイシュヴァンシュタイン城に負けないぐらい豪華な造りのポポポーン！」と指先ひとつで召喚するような凄い人で——」

と、そこでラッテンは会話を止めた。

不意にそつぽを向いた主人を不思議に思い、彼女の顔を覗き込む。

するとペストは愛らしい顔を、ぶくつと膨らませて拗ねていた。

「……マスター？ どうしました？ 珍しく仕草が可愛いですよ？」

「そういうあなたは普段通りむかつくわね、ラッテン」

毒を吐いて展示場のベンチに座り、パタパタと足を揺らすペスト。

ラッテンも馬鹿ではない。

拗ねる理由が分からない訳ではないが、今は素直に嬉しかった。

「やーですねえマスター♪ 今の私たちはマスターにゾッコンですよー？」

「ああ。グリムグリモワールの名を担ぐ魔王なんざ、もうあんたを除けば他にいねえだ

ろうしな。……ゆえに、最後まで忠を尽くす。それだけは決して違わねえ」

たとえ、必滅を約束された魔の道であろうと。

その一瞬まで尽くしてみせると契約する。

仄かに揺れる蜻蛉の向こうで。

「ブラック・バチャー黒死斑の魔王」は静かに瞳を閉じ、その言葉を噛み締めた——その時だった。

「あゝ」

「!？」

ペストたちは驚愕して振り返る。

見れば、展示場の入り口にひとつの人影があった。

咄嗟に前へ出て臨戦態勢を取るラッテンとヴェーザーの背後で、ペストは訝しげに問

いかける。

「……あなたは、誰？」

緊張感が高まる中で。

人影は笑い、ハッキリとその言葉を告げたのであった。

「安心して下さい。私は——あなたたちの味方です」

——境界壁・舞台区画。

——“火龍誕生祭”運営本陣営・隔離部屋個室。

目を覚ますと、見慣れない様の壁が広がっていた。

それが天井だと理解すると、耀は発熱で朦朧とする意識の中で考える。

(私は……そっか。病気で倒れたんだ)

初めて体調に違和感を感じたのは、休戦期間に入ってから2日後のことだった。

それからは日を追うごとに症状が悪化し、ついに5日目の夜に限界が訪れてしまったのだ。

(飛鳥……大丈夫かな)

ふと、大切な友人に思いを馳せる。

自分たちを守るためにたったひとりで戦いへ臨み、敵に捕まってしまった彼女。

魔王側に連れ去られて以降、依然その消息は掴めぬままだ。

無事であると信じたいが、決して楽観視は出来ない状況にある。

(……私、なんにも力になれてない)

己の不甲斐なさを悔やみつつ、寝苦しさを感じた耀はベッドの上で寝返りを打つ。

そこで視界に映った人物に、彼女は瞳を丸くした。

「……日向？」

「ん？ ああ、起きたか。具合はどうだ？」

気が付き、日向は朗らかに笑う。

「どうやら、耀が眠るベッドの隣で本を読んでいたらしい。」

開かれた書籍が何かは分からないが、今回のゲームに役立たせる為のものだろう。

耀は少しだけ上体を起こし、ベッドの背もたれに寄りかかりながら問いかける。

「いつからここに？」

「んー、耀が昨日の晩に倒れてからかな」

つまりは1日中この部屋に居たということだ。

ずっと看病をしていたのか、彼のそばには水の張られた桶が置かれている。

自分の額に乗っている冷たく湿った手拭いに、耀は少しだけ頬を赤らめた。

「でも、隔離部屋なのに勝手に入って大丈夫なの？」

「ちゃんと許可は取ったさ。それに、俺に病原菌は効かないみたいだしな」

今回の病は、正確には病原菌ではなく呪いであると答えるのが正しい。

その効果がギフトの力である以上、日向には通用しないのだ。

相変わらずの無茶苦茶ぶりに、耀は思わず苦笑した。

「ごめんね。こんな大変な時に、私だけ何も出来なくて」

「気にしなくていいさ。今はとにかく、病気を治すことだけに専念していればいい」

「……うん」

日向の言葉に、耀は素直に頷く。

そこで日向は本を閉じて立ち上がると、病室の扉に向かって歩き始めた。

「それじゃ、耀はゆっくり休んでてな。ゲームのクリアは、俺たちに任せとけ」

「うん」

これにも耀は素直に頷く。

しかし最後に、扉から出ようとする日向に向かって声を掛けた。

「日向」

「ん？ なんだ？」

日向はドアノブに手を掛けながら、顔だけを振り向かせて応える。

耀は小さく微笑むと、

「看病してくれてありがとう。……頑張って」

感謝と共に声援を贈った。

その言葉に、日向も朗らかな笑顔を浮かべ、

「おう！ 任せとけ！」

そう言って扉を閉め、日向は病室を後にした。

日向を見送った後、耀は再びベッドへ潜り込む。

ベッドの中には、ずっと話を伺っていた三毛猫がいた。

『ホンマに大丈夫かなあ、お嬢』

「大丈夫だよきつと。日向たちなら、きつと大丈夫」

『……そやな』

どこか確信を以て言う耀に、三毛猫も首肯する。

「それより、三毛猫は私といて大丈夫なの？ 病気がうつるかも」

『何、お嬢が心配することやないよ。生まれからの14年間、ずっと一緒だったんや。お嬢の腕のなかで往生するのも悪くない』

にやーと鳴いて腕に潜り込む。

熱にうなされながらも耀は三毛猫を抱きしめ、戦いへ赴く同士たちを想いながら、次第に微睡みへ落ちていく。

（皆、頑張つて）

父から譲り受けたペンダントを握りしめながら、彼女は眠りに就くのであった。

耀の病室を退室した後。

日向が宮殿の廊下を歩いていると、そこで見覚えのあるツインテールが前方に見え

「そ、そっか。……良かった」

アーシャは安心したようにホッと胸をなで下ろした。

その様子を見た日向は、穏やかに微笑んで告げる。

「優しいんだな、アーシャは」

「へ？」

その言葉に、日向の顔を見たアーシャは——ボンツと顔を真っ赤にした。

「べ、べべべべ、別に！ 心配なんかしてないし！ ただ、あいつが死んだら試合のり

ベンジが出来ないってだけで……ほ、本当にそれだけなんだからなっ！」

「はいはい。アーシャは友達思いだな」

「だから私の話を聞けええええええええええ!!!」

まるでコントのようなやり取りを交わす日向とアーシャ。

彼女はガツクリと肩を落とした。

「はあ、何で私はこんな奴を……」

「ん？ 何か言ったか？」

「い、いや！ なんでもないっ！」

慌てて両手をブンブンと振るう。

日向はそんな彼女に首を傾げると、

「あれ？　アーシヤ、何だか顔が赤くないか？」

「え、そ、そう？　そんなことないと思うけど」

「まさか黒死病が……どれ」

そう言つてアーシヤの額に手を当てた。

「うーん、熱は無いみたいだな。良かった……つて、アーシヤ？」

ふと日向が彼女の顔をのぞき込むと、アーシヤは再び真っ赤になつて口をパクパクさせていた。

やがて何かが限界に達した彼女は、

「……ひ、ひ、日向のバカヤロー!!!」

「なんで!？」

と罵倒と共に慌てて走り去つて行つた。

そんな彼女の後ろ姿を、日向はただ啞然と見つめているのだった。

その後。

日向は気分転換にと、宮殿の外を散歩していた。

本来なら多くの人々で賑わっているはずの舞台区画も、今は閑散とした様相を呈して

いる。

魔王との交渉からすでに6日。

先ほど耀にはああ言つてのけたものの、未だにゲームクリアの目処は立っていない。歩きつつ、日向は『ギアスロール契約書類』に記されたルールについて考える。

(あの悪魔たちは全員、『ハーメルンの笛吹き』での一三〇人の子供たちの死因に由来する天災の名前を冠している。なら勝利条件にある『偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』とは、1284年6月26日のハーメルンで起きた事実をこれらの悪魔から考察しろ……という解釈に捉えられるはずだ)

日向は記憶の中にある、報告された悪魔たちの名前にを思い出す。

ラッテンⅡドイツ語でネズミの意。

ネズミと人心を操る悪魔の具現。

ヴェーザーⅡ地災や河の氾濫、地盤の陥没

などから生まれた悪魔の具現。

シウトロムⅡドイツ語で嵐の意。

暴風雨などによる悪魔の具現。

ペストⅡ斑模様の道化が、黒死病の伝染元

であるネズミを操ったことから推測。

黒死病による悪魔の具現。

いずれも永きに渡る歴史の中で、“ハーメルンの笛吹き”における子供たちの死因として提唱されてきた俗説だ。

この中から偽りの伝承と真実の伝承を見極めなければならぬ……のだが。

(どれが真実かと問われると、この問題の難易度は格段に跳ね上がる)

そもそも、“ハーメルンの笛吹き”の伝承に特定した真実は存在しないとされている。

どれが有力であるかに迫ることは可能だが、それが真実であると証明する手だてが無いのである。

(唯一偽物として有力なのはペストだが……それで他の3つが本物だと決めつけるのは安易過ぎる)

神隠し、暴風、地災。

そのどれもが刹那的な死因であるのに対して、黒死病だけが長期的な死因として描かれている。

日向はグリム童話で伝承の原型となった碑文から、ペストだけは偽物であると確信を得ていた。

——1284年

ヨハネとパウロの日 6月26日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、丘の近くの処刑場で姿を消した――

(この碑文から推測するに、「ハーメルンの笛吹き」は1284年6月26日という限られた時間内で一三〇人の生け贄が死ななければいけないはずなんだ)

黒死病の潜伏から発症までの期間は2日から5日。

一斉に同じ病状が発見され、一斉に子供たちが死なない限り、この「ハーメルンの笛吹き」の碑文は成立しないことになる。

ならば単純に「黒死斑の魔王」を倒せばいいのだとも考えられるが、それでは「ゲームマスターの打倒」という第一の勝利条件と被ってしまうことになる。

後者を盛大なブラフだと割り切ってしまうのは簡単だが、それは余りにも危険だろう。

(後者の条件も、部分的には解明できるんだけどな……)

そもそも、ハーメルンの魔王たちは一体どうやってこの祭典に侵入出来たのか。

その解答は、今回のゲームには参加者でも主催者でもないにもかかわらず、祭りに参加できる特別枠が用意されていたからだ。

――「主権者権限^{ホストマスター}」を所持する参加者は、

祭典のホストに許可なく入る事を禁ず。

—— 祭典区画内で参加者の「主催者権限」の使用を禁ず。

—— 祭典区域にある舞台区画・自由区画に

参加者以外の侵入を禁ず。

これらのルールに抵触せず、なおかつ独立した意思を持つ参加枠とはつまり、
 (—— 美術・工芸の出典物。ならあの悪魔たちの出現する媒介として最も考えられるものは……ハーメルンの碑文と共に飾られたステンドグラスだ)

こうして歩廊を歩いている最中にも、度々見かけるステンドグラス。

その中にはネズミを操る笛吹き男を描いたものや、伝染病によつて倒れる人々を描いたものも存在していた。

ここで思い出さなければいけないのは、勝利条件にある「偽りの伝承を砕き、眞実の伝承を掲げよ」の一文だ。

この記述から伝承は一对の同型状であり、また「砕き」「掲げる」ことが出来る物だと推測される。

その条件に最も合致するのが、このステンドグラスなのだ。

(つまり勝利条件を満たす方法とは、展示された偽りのステンドグラスを砕いて、本物を

掲げろってことなんだろうが……)

日向は天を仰いで苦笑を漏らす。

ここまでの推理をすでに終えていた日向だが、それは文字通りここまでなのだ。

偽りのステンドグラスを砕き、本物を掲げなければならぬと、ここまでは理解できたが、そもそも伝承の真偽があやふやで、ペスト以外のどのステンドグラスを砕いて掲げればいいのかも分からない。

加えてサンドラに確認したところ、この会場に設置されたステンドグラスは百枚以上にも昇るそうだ。

その中から偽りだけを見つけて砕くのは至難の技である。

加えて多くの人手が必要になるだろうが、現状の戦力は黒死病の発症者を除きすでに2割を切っている状態だ。

(ゲーム開始まで残り28時間。コミュニティを団結させるため、サンドラが方針を決めるとしても、後数時間が限度だろう)

現時点において最も深刻なのは、参加者たちの士気の低下だった。

次々と仲間が倒れていく中、謎解きに関しても答えが見えぬまま多くの議論が飛び交っており、意思の統率が出来ないでいるのだ。

このままでは最悪、それぞれのコミュニティが独断専行に走りかねない。

しかしそれではダメなのだ。

何よりも今回のゲームは、参加者たちの連携が要になるのだから。

日向は大きいため息を吐くと、頭を掻いて踵を返す。

「……仕方ない。そろそろ戻って、もう一度十六夜と謎解きを——」

「わぷっ」

と、その時。

日向が振り返ると、不意に誰かとぶつかつた。

腹部の辺りに軽い衝撃を感じた彼は、そのまま真下に視線を落とす。

するとそこには、両目に白い布を巻きつけた、白髪白装束の少女がいた。

「ああ、ごめん。大丈夫か？」

「あ、はい。こちらこそすいませんでした」

日向が少女に謝ると、白髪の少女もペコリと頭を下げた謝罪した。

日向はしやがみ込んで少女に怪我などがないか確認すると、ホツとひと息ついて話しかける。

「本当にごめんな。考え事をしていたせいで、周りが見えて無かつたみたいだ」

「いえ。こちらこそ不用意に後ろを歩いていたので、お互い様ですよ」

少女はニッコリと笑って答える。

その姿に日向も微笑んで立ち上がると、少しだけ逡巡した後で問いかけた。

「そっか。ところで、君がその目に巻いている布はもしかして……」

「はい、お察しの通りです。私って、小さい頃に目が見えなくなっちゃったんですよ」

少女は臆面もなく、明るい口調で答える。

初めから予想はしていたが、やはりこの少女は盲目であるらしい。

対照的に、日向は申し訳なさそうな顔をした。

「……悪いな。変なことを聞いて」

「大丈夫ですよ、気にしないでください。それに目が見えなくても、音や風の流れなんかで周囲の様子は分かるんですよ？」

「そうなのか？」

「そうなのです」

えっへん、と少女は小さな胸を張って主張する。

その姿が何だかおかしくて、思わず日向も笑ってしまった。

「実は、今もこの辺りを見て回っている最中だったんですよ。たとえ景色が見えなくても、色んな人たちの話し声を聞いているだけで楽しいですから。でも……」

そこで少女は言葉を区切る。

日向も周囲を見回した後で、苦笑を浮かべてそれに応えた。

「ま、確かにこの状況じゃ、人気なんて無いよな」

「はい。まだこの街にやって来たばかりですけど、街全体が暗い気持ちに包まれているのが分かります」

「そんなことが分かるのか？」

「はい。私って目が見えない分、少しだけ他人の感情なんか敏感なんですよ」

日向は少女の言葉に感心する。

確かにこの少女は目が見えていないのかもしれないが、それ以上に多くのことを感じ取っているのだ。

「さっきまでは、お兄さんの心もそんな感じでした」

「暗い気持ち……だったってことか？」

「はい。でも今は、少しだけ明るくなりましたよ」

そう言えば、と日向は気づく。

先ほどまでずっとひとりりで悩んでいたせいかな、この少女と話したお陰で思考も明瞭になったようだ。

納得していると、不意に少女が口を開いた。

「私は暗い気持ちになった時には、お天道様のことを思い浮かべるんですよ」

日向は首を傾げて問い返す。

「太陽を？」

「はい。お天道様は、いつだって皆を明るく見守ってくれているんです。こうして目の見えない私にも、誰にだって平等に光を照らしてくれるんです。だから暗い気持ちになった時は、お天道様に励ましてもらえばいいんですよ」

少女はどこか楽しそうに語る。

「私は目が見えないけれど、それでも、昔見たお天道様の優しい光は忘れません。たとえ見えなくなっても、その光はちゃんと私の中にあります。今でもちゃんと、私の心を優しく照らしてくれています。だから私は、暗い気持ちもへっちゃらなんです。たとえ光が見えなくなっても、全然怖くないんです」

「……そっか」

日向は優しくに微笑みながら、目の前の小さな少女の頭を撫でた。

なぜだか日向には、この少女がとても眩しく見えたのだ。

少女は少し照れたように頬を赤らめるが、それでも嬉しそうにはにかんだ。

「私は、いつかもう一度、お天道様を見ることが夢なんです。そしてちゃんとお礼を言いたいです。『こんな私でも、ずっと見守ってくれてありがとう』 光を照らしてくれてありがとう『って」

「ああ、きつと叶うさ」

日向は確信を以て答える。

日向が元いた世界では、盲目の治療法は存在しない。

しかしこの世界なら、このあらゆる奇跡に満ちた“箱庭”の世界ならば、必ず何か方法があるはずだ。

この少女の夢を守るためにも、必ずギフトゲームをクリアしようと、日向は強く誓うのだった。

「それじゃあ、私はそろそろ失礼します。またどこかで会いましょうね、お兄さん」

少女は再びペコリと頭を下げた後、街を染め上げる黄昏の中へと消えていった。

その後ろ姿を見送った日向は、不意に空を見上げて呟く。

「太陽はいつだって、皆を平等に照らしてくれる……か」

頭上では、太陽が明るく輝いている。

その光景を眺めながら、日向はふと思い出した。

(そう言えば、白夜叉も太陽の星霊だったな)

依然としてバルコニーに封印されたままの白夜叉。

結局彼女の参戦条件も分からず仕舞いだ。

(確か白夜又は、箱庭の太陽の主権を持っているんだっけか。太陽そのものの属性と、太陽の運行を司る使命を——)

——ん? と。

そこまで考えて、日向の脳裏に何か引つかかった。

(……太陽の運行……?)

どこかで似たような話を聞いた、と日向は首を傾げてみる。

それも昔の話ではない。

つい最近のことだ。

(確かサラマンドラの書庫で、十六夜と黒死病について調べていた時だったか)

思い出すや否や、日向は脳内で黒死病に関する知識をありつけたけ反復し始める。

そもそも「黒死病」とは、十四世紀から始まる寒冷気到大流行した人類史上最悪の疫

病のことだ。

この病は敗血症を引き起こし、全身に黒い斑点が浮かび上がって死亡する。

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き」に現れる道化が斑模様であったこと。

そして黒死病の流行元であるネズミを操る道化であったこと。

この2点から、「一三〇人の子供たちは黒死病で亡くなった」という考察が存在する

(……………十四世紀と寒冷期?)

日向が目を付けたのは、病状や潜伏期間ではなく、黒死病が流行した年代記だった。そもそも、ハーメルンの碑文には太陽を封印するような一文は出てこないのだ。

この碑文が描かれたのが、1284年。

しかし黒死病の大流行が始まったとされるのは、1350年以降の数百年。

つまり、黒死病の最盛期とハーメルンの碑文は——時代背景が合わないことになる。

(まさか……ペストは碑文のハーメルンとは、無関係な時代から来た悪魔なのか……!?)
なぜこれまで気づけなかったのか。

ペストは初めから、自分はハーメルンの魔王ではないと名乗っていた。

つまり彼女の持つ黒死病の属性は、ハーメルンとは無関係のものだったのだ。

「そうか、そうだったのか! 黒死病が大流行した寒冷の原因は……太陽が氷河期に入り、世界そのものが寒冷に見舞われたと推測されていた! つまりはこれが、白夜叉を封印したルールの正体か!」

日向は空に浮かぶ太陽を見上げて叫ぶ。

太陽の運行を司る白夜叉が封印されたのは、太陽の氷河期——即ち、太陽の力が弱まっていたとされる年代記をなぞったゲームルールが組み込まれていたためなのだろう。

日向は好戦的に笑い、「偽りの伝承」の意図を理解する。

「なら、あの悪魔たちは1284年のハーメルンじゃなく……ああクソツ！ 完全に騙されてよ。黒死斑ブラック・パーチャイの魔王”!! つまり君たちはグリム童話上の”ハーメルンの笛吹き

”ではあつても、本物の”ハーメルンの笛吹き”じゃなかったってことか……!!!」

バツ！ と日向は踵を返して走り出す。

目指すは”火龍誕生祭”の運営本陣営だ。

（ありがとな。君のおかげで、謎を解くことが出来た！）

日向は心中で感謝を告げる。

そんな彼の後ろ姿を、物陰から見つめる人影があつた。

——そして、28時間後。

本陣営に、活動できる全てのコミュニティが集結する。

”黒死病の魔王”との、ラストゲームが始まろうとしていた。

第20話 再開

——境界壁・舞台区画。

——“火龍誕生祭”運営本陣営・大広間。

黄昏時の夕日で染まる舞台区画の歩廊は、1週間の喧騒が嘘のように静まり返っている。

○。尖塔群の影も伸び、暗がりを深める宮殿の大広間に集まった人員の総数は僅か五〇

休戦前の段階ですでに屈服を強制されてしまった者や、ジャックなどの『出展物枠』は参加資格を持たないことが判明し、まだ病魔に冒されていないメンバーを出来る限り集めたのだが、それでも全体の1割未満だ。

ざわつく参加者たちの前に姿を現したサンドラは、不安をかき消すような凜然とした声で話す。

「此度のゲームの行動方針が決まりました。まだ動ける参加者の皆様には、それぞれ重要な役割を果たして頂きます。ご静聴ください。……マンドラ兄様、お願いします」

そばに控えていたマンドラは軍服を正すと、参加者側の行動方針を定めた書状を読み上げた。

「その1。3体の悪魔は『サラマンドラ』とジン||ラツセル率いる『ノーネーム』が戦う。

その2。その他の者は各所に配置された一三〇枚のステンドグラスの搜索。

その3。発見した者は指揮官の指示を仰ぎ、ルールに従って破壊、もしくは保護すること」

サンドラは頷き、参加者へ向き直る。

「ありがとうございます。——以上が、参加者側の方針です。魔王とのラストゲーム、気を引き締めて臨んで下さい」

おとお大広間に雄叫びが上がった。

ゲーム再開の間際ではあったが、明確な指針が出来たことで士気も高められたようだ。

病魔に蝕まれている者もいるが、そんなことは言っていられない。

魔王のゲームに勝利するため、参加者は一斉に行動を開始するのであった。

その頃。

宮殿のテラスへ出た黒ウサギは、ひとり舞台区画を俯瞰していた。

夕陽に染まる歩廊は至る場所にペンダントランプの破片が散乱しており、戦いの名残を留めている。

彼女は胸に両手を当てると、そつと静かに瞳を閉じた。

その手は、微かだが震えている。

「……っ」

「よっ、黒ウサギ」

ひゃっ！ と、黒ウサギはウサ耳と尻尾を跳ねさせた。

慌てて後ろへ振り向けば、日向が片手を上げたまま、苦笑を浮かべて佇んでいる。

「悪いな。驚かせるつもりは無かったんだ」

「い、いえ。日向さん御ひとりですか？」

「ああ。ジンと十六夜は、下でサンドラたちとゲームの方針を確認してる」

答えつつ、日向は黒ウサギの隣に立った。

黄昏時の美麗な街並みを見渡しながら、日向は彼女に問いかける。

「それで？ もうこれでもかかってぐらい思い詰めた顔をしてたけど、何か心配事か？」

「み、見られていたんですか」

気恥ずかくなつた黒ウサギは、思わずウサ耳を赤くして俯いた。

日向はふと、眩く。

「……飛鳥のことか？」

「——ッ！」

目の見えて動揺を現す黒ウサギ。

揺れる眼差しでゆっくりと日向に向き直つた彼女は、振り絞るように問いかけた。

「……どうして、分かつたのですか？」

「俺も、同じことを考えていたからな」

「日向さんも？」

日向は「ああ」と頷くと、どこか自嘲気味な笑みを浮かべる。

「『必ず守る』って約束したのにな。どうやら俺は、口先だけの男らしい」

「そ、そんなことはありませんッ!!」

黒ウサギが大きく叫ぶ。

目を丸くして日向が彼女を見てみれば、黒ウサギは泣きそうな表情を浮かべていた。

「黒ウサギ……」

「そんなことは、ありませんッ……! だつて日向さんは……皆さんは、黒ウサギたちに

希望を与えてくれました……!」

胸元で両手を握り締め、嘔み締めるように話す黒ウサギ。

夢げに顔を上げた彼女は、日向を見つめて微笑んだ。

「この1ヶ月間、日向さんたちが『ノーネーム』にもたらしてくれた恩恵の数々は、劇的に生活を変えてくれました。もう水不足で困ることはありません。食事のやりくりに困ることも少なくなりました。『お腹が空いた』と訴える子供たちを見て、心を痛めることも皆無です」

「……」

日向は何も言わず、黒ウサギの言葉を聞き入れる。

黒ウサギは大切なモノを慈しむかのように、思いの丈を告白した。

「元・魔王であるアルゴールを倒し、レティシア様を取り返して下さった時……黒ウサギは、大きく道が開けた思いでした。つい先日まで明日が見えず、現状を維持するしかなかったコミユニティに、暗雲が晴れたような……そんな錯覚さえ覚えたほどです」

遠くで沈む夕陽を見つめ、黒ウサギは当時の心情を打ち明ける。

そう、奪われた仲間が戻ってきた。

それは小さくとも、確かな前進だ。

3年間、止まっていたコミユニティの時間が動き出した。

希望が見えた。

明日が開けた。

これからは進むだけだ。

……そう、思っていた。

「初めて日向さんたちと出会ったあの日。あの廃墟で日向さんが言ってくれた言葉を、黒ウサギは生涯忘れることはありません。あの瞬間から黒ウサギは、この身を賭して皆さんの力になろうと誓ったのです。皆さんと同じ道を、共に歩いていこうと思ったのです。それなのに……！」

黒ウサギはぎゅつと唇を噛みしめる。

その声は、自然と震えていた。

「……日向さんは、白夜叉様の忠告を覚えていますか？」

「……ああ」

日向は首肯する。

あの日、白夜叉が飛鳥と耀に向けた言葉。

『魔王とのゲームの前に、力を付けろ。お前たちの力では——魔王とのゲームを生き残れない』

黒ウサギも、その言葉の重みは十分わかっているはずだった。

しかし彼女は今までその忠告を軽んじ、彼らにはコミュニティの生活のためだけにギ

フトゲームを紹介してきた。

いかに最高の才能を持っていたとしても、それでは高めようがない。

いつの日かコミュニティの名を、旗印を、仲間を取り戻すために力を貸してくれた彼ら。

無理難題を押し付けることも無く、笑って快諾してくれた同士の好意を、蔑ろにしてきたのだ。

「……『打倒魔王』を掲げると聞いた時。黒ウサギは皆さんの頼もしさに胸が震えました。しかしだからこそ！ この神仏が集う箱庭で生まれ育った黒ウサギだからこそ、教えられることがもつとあつたはず！ なのに、魔王と対峙するまで計画も立てずに安穩と過ごし、その結果……！」

飛鳥が敵に捕らわれ、耀は病に倒れた。

黒ウサギは情けなさで泣きそうになった。

コミュニティの中心は彼女だと言ってくれた彼らの心を、無下にしたと言っても過言ではない。

「……皆さんにはそれぞれ違う方向性の、素晴らしい才能が御座います。帝釈天の眷属の名に懸けて、それを保証いたします。黒ウサギは結局、皆さんの優しさに甘えていたのです」

ああ、そうだと。

彼らは優しくかったのだと、黒ウサギは思う。

自分たちが楽しいからだ。

面白いから協力しているのだと。

自分本位に理由を付けながら……その実、彼らは一度も正義を違えたことは無かった。

だから余計に、黒ウサギは飛鳥たちに申し訳なくて堪らなかつた。

黒ウサギは顔を上げ、ウサ耳を伸ばし、真つ直ぐに

日向と向き合う。

「……日向さん。ひとつ、お願いが御座います。聞いてもらえますか？」

「何だ？」

「魔王の相手は、この黒ウサギに任せてはいただけないでしょうか？」

真摯さの中に、確かな怒りを込めて黒ウサギは日向に頭を下げた。

「お願いします。どうしても……黒ウサギは、魔王に一矢報いてやらねば気が済みません」

ザワツと黒ウサギの髪が鬨志で戦慄く。

青い髪は淡い緋色の光に包まれ、軍神の眷属に相応しいオーラが全身を包む。

日向はそんな黒ウサギを見つめ——問いかけた。

「勝算は？」

「あります。いえ、むしろ最高の相性とも言えるギフトを、黒ウサギは所持しております。たとえ相打つことになろうとも、必ずや魔王の首を——」

「ならダメだ」

日向は即決を下す。

慌てて言い返そうとする黒ウサギを、日向は苦笑して宥めた。

「悪い。何というか、俺もちよつと悲観し過ぎていたみたいだ」

「日向さん？」

「でも、黒ウサギの言葉を聞いて思った。やっぱり俺は、皆のことを守りたい」

日向は顔を上げ、スツと右手を夕陽へ伸ばす。

「だけど、今回のことで確信したよ。皆を守る。それは俺ひとりの力じゃ無理なんだ。だから黒ウサギ、お前の力を貸して欲しい」

「黒ウサギの……力を？」

「ああ。そして黒ウサギだけじゃなく、十六夜や、ジンや、レティシアや、皆の力を貸して欲しい。そして魔王を倒して、全員で飛鳥を救い出すんだ」

グツと、伸ばした手を握りしめる。

そんな日向の言葉に、黒ウサギはしばし唾然とし——そつと、優しく微笑んだ。

「……YES。私も日向さんと……いいえ、皆さんと共に戦います」

「ああ。ありがとな、黒ウサギ」

日向は朗らかに笑って感謝を述べる。

とそこで、彼らの背後から声がかかった。

「ヤハハ。ずいぶんといい雰囲気じゃねえか、お二人さん？」

振り返る日向と黒ウサギ。

見ればそこには十六夜の他に、ジンやレティシアも立っていた。

「み、皆さん！ いつからそこにいらしたんですか!？」

「え、えーと、皆の力を合わせて、飛鳥さんを助け出そう……の辺りからかな」

黒ウサギの問いかけに、ジンが苦笑して答える。

その隣で、レティシアは美麗に微笑んで口を開いた。

「だが、日向の言う通りだな。皆で力を合わせれば、きつと魔王を退けられる。そして誰ひとり欠けることなく、また私たちのウチへ帰ろうじゃないか」

レティシアの言葉に、全員が頷く。

日向は仲間の顔を見回すと、一度静かに瞳を閉じる。

そして、ハッキリと宣言したのだった。

「必ず飛鳥を助け出して……全員で、*「ノーネーム」*に帰ろう！」
「「「おー！」」」

ゲーム開始時刻になり、主催者側は再開前の確認を行っていた。

布の少ない白装束を揺らし、ラッテンは配下のネズミから情報を受け取る。

「マスターマスター。どうやら連中、私たちの謎を解いちやったみたいですよー？」

その報告に、軍服姿のヴェーザーは黒い短髪を掻きながら愚痴った。

「チツ。ギリギリまで最後の謎は解かれないうと踏んでいたんだがな」

まだら
斑模様のワンピースを揺らして立ち上がったペストは、両手を後ろで組んで呟く。

「……構わないわ。最悪の場合は皆殺しにすればいいだけよ」

余裕の素振りを見せるペスト。

そんな彼女に、ラッテンは僅かな懸念を指摘する。

「そう言えば、結局4日前に現れたあの子、あれ以来姿を見せませんでしたねー。何だか私たちの仲間とか言っていましたけど、本当に信用していいんですか？」

「別に信用しているわけじゃないわ。適当に泳がせておけば、いずれ敵か味方かも判明するでしょ」

「それで、もしも敵だった場合は？」

「殺すだけよ」

ペストは即答する。

彼女は改めてラッテンとヴェーザーへ向き直ると、無機質な瞳で宣言した。

「——ハーメルンの魔書を起動するわ。謎が解かれた以上、温存する理由はないもの」

その言葉に、側近の2人は凶悪な笑みを浮かべて立ち上がる。

「ふふくん。いよいよもって盛り上がってきましたねーマスター♪」

「おい、油断するなよラッテン。参加者側には『箱庭の貴族』もいるんだからな」

厳しい声音のヴェーザーに、ラッテンは肩眉をしかめて問いかける。

「……やつぱり凄いの？ 『月の兎』って」

「ああ。一度戦っているところを見たが、並の神仏じゃ歯が立たん。アレは正真正銘の眷属だ。授けられているギフトの数が違う。俺やお前じゃ、とても抑えられんだろうな」

苦い顔で押し黙る。

そんな彼らに、ペストは微かに笑いかけた。

「そつ。なら魔書の他に、もうひとつ策を設けるわ」

「策？」

ペストは悠然と歩み寄り、綺麗な指先を伸ばしてヴェーザーの額に押し当てる。

「ヴェーザー。あなたに神格を与えるわ。開幕と同時に、魔王の恐怖を教えてあげなさい」

ゲーム開始の合図は、激しい地鳴りと共に起きた。

境界壁から削り出された宮殿は光に呑み込まれ、瞬くプリズムと共に参加者たちのテリトリーを包み込む。

やがて輝きが収まったところで見上げれば、天を衝くほど巨大な境界壁は跡形も無く消えていた。

代わりに、見たこともない別の街並みが舞台区画に広がっていたのだ。

「なっ……どこだここは!」

参加者の誰かが、驚愕の声を上げた。

周囲を見渡せば数多の尖塔群は劇的に変貌し、木造の街並みに姿を変えている。

黄昏時を彷彿とさせるペンダントランプの煌めきは無くなり、パステルカラーの建築物が一带を埋め尽くしていた。

ステンドグラスの搜索側に回っていたジンは、顔を蒼白にして叫ぶ。

「まさか、ハーメルンの魔道書の力……ならこの舞台は、ハーメルンの街!?!」
「何だとツ!?!」

マンドラがジンへ振り返った。

その間も周囲の混乱は広がり続け、士気高く飛び出した参加者側は出鼻を挫かれて足を止める。

「ハ、ハ、ハは一体!?!」

「それに今の地鳴りは!?!」

「まさか魔王の仕掛けた罠か!?!」

ザワザワと動揺が波紋のように広がっていく。

マンドラは舌打ちしながらも一喝した。

「狼狽えるな! 各人、振り分けられたステンドグラスの確保に急げ!」

「し、しかしマンドラ様! 地の利も無く、ステンドグラスの配置もどうなっているのか分からないままでは、」

「安心しろ! 案内役ならばここにいろ!」

ガシツ! とマンドラがジンの肩を持つ。

ジンは驚いた表情のままマンドラを見上げた。

彼は険しい顔でジンに耳打つ。

「知りうる限りで構わん。参加者たちに状況を説明しろ」

「け、けど、僕もそこまで詳しいわけでは、」

「だから知りうる限りで構わんと言っているだろうがッ。貴様が多少なりとも情報を持つている事はすでに知れ渡っている。お前の言葉ならば信用する者もいるだろう。とにかく動き出さねば、24時間などあつという間に過ぎるぞー!」

ぐつとジンも反論を呑み込む。

泳いだ視線は自然に日向や十六夜を捜していた。

彼らならば、ハーメルンの地理にも詳しいはずだからだ。

しかし、この場に2人の姿はすでに無かった。

そして時間制限がある以上、1分1秒を争うのも事実。

ジンは意を決したように捜索隊の前に立つ。

「ま、まずは……教会を探して下さい! ハーメルンの街を舞台にしたゲーム盤なら、縁ゆかりのある場所にステンドグラスが隠されているはず!」

「かは、各自発見した後で指示を仰いで下さい!」

ジンの一言で捜索隊が一齐に動き始める。

再び街全体を揺り動かす地鳴りが起きたのは、その直後だった。

ひとり集団から離れた十六夜は、己の獲物を探すようにハーメルンの街の屋根を跳躍して駆けていた。

地鳴りで揺れる足場を感じ、楽しそうに笑みをこぼす。

「へえ……？」 地精寄りの悪魔とは思ってたが、地殻変動そのものを引き起こすとは恐れ入った。そんな地力があつたなんてな。それにこの街の建築様式……ハッ、なるほど。ゴシック調の街からルネサンス調に変われば、そりゃ仕込んだ種も割れるって話だ」

街中で一番大きな建物に登り、十六夜は一帯を見回した。

夕陽で黄昏色に染まるハーメルンの街並みは、彼の知っている地理とはまた別の形で造り出されている。

十六夜の時代とは別の時代がモデルとなっているのだろう。

しかしその中でも、ハーメルンの伝承に基づいた場所だけは精巧に形成されていた。「街道は結構滅茶苦茶だが……あそこにあるのがマルクト教会に、ブンゲローゼン通りかな。押さえるところは押さえているってわけか。さて、どっちから向かうべきか――」

「――その前に、決着と行こうぜ坊主ッ!!」

一喝の直後、十六夜が足場にしていた家が真下から吹き飛んだ。

建築物の地盤ごと砕かれ、木造の建築は跡形も無く粉碎する。

声に反応した十六夜は反射的に上空へ跳び退いたが、追い打ちを掛けるように地面から飛び出したヴェーザーに顔を掴まれた。

「テメエ……！」

「前回のお返しだ！ 先手は譲ってもらおうぞッ!!」

棍に似た巨大な笛で、ヴェーザーは十六夜の腹部を強打する。

先日とは比べものにならない強大な力が宿った一撃は、超振動のように十六夜の身体を浸透した。

十六夜はハーメルンの街に流れるヴェーザー河の水面を水切りのように弾きながら、対岸の地面に打ちつけられる。

ペツ、と血反吐を吐き捨てて立ち上がった十六夜は、口元を拭いながらヴェーザーを睨んだ。

「……やるじゃえか。今のは相当効いたぞ」

「当たり前だ。前回と同じと思つて油断なんかすんじやねえぞ坊主。こつちは召喚されて以来、初めての神格を得たんだ。簡単に終わつちや興ざめするつてもんだ」

クツクツと牙を剥いて獰猛に笑うヴェーザーは、構えた棍を一閃に薙ぐ。

すると大地は地鳴りを始め、震動を起こし始めた。

「ああ、そうだ。これが『神格』を得た悪魔の力……！　クク、とんでもねえ坊主！　一三〇人ぼつちの死の功績なんざ比較にならねえ！　今の俺は、星の地殻そのものに匹敵する！」

豪快に両手を広げて宣言する。

比類なきその力は、十六夜や日向が戦った蛇神とは比べ物にならないだろう。

蛇が『神格』を得たモノと、悪魔が『神格』を得たモノとでは、その地力が圧倒的に違うのだ。

目に見えて立ち昇るヴェーザーの力に、十六夜は不敵な笑みを露わにした。

「ハッ……なんだよ。少し楽しめればそれでいいと思っていたのに、ずいぶんと俺好きなバージョンアップをしてきたじゃねえか。嬉しいぜ、本物の『ハーメルンの笛吹き』」

十六夜の言葉に、ヴェーザーも笑みを返す。

「謎を解いたのはやはりお前か、小僧」

「半分正解だな。確かに俺は解答に行き着いたが、それは何も俺だけじゃない」
「……ほう？　どうやらそっちには、他にも頭の回る奴がいるようだな」

肩を竦めて応える十六夜に、ヴェーザーは思わせぶりな視線を向ける。

有力な人材を求めている彼らにとって、有望株は自然と気になるのだろう。

「そーいや、参加者側の中に面白い奴がいるとマスターが言つてたな。もしかしてそいつか？」

「さて、どうだろうな。知りたきや自分で確かめな」

「ハッ、違いねえ」

笛を肩へと担ぎ直し、ヴェーザーはニヒルな笑みで応えた。

十六夜は眼前のヴェーザーを見据えながら、改めて謎解きの解を示す。

「けど、土壇場まで騙されてたぜ。お前以外のメンバーは全員偽者。十四世紀以後の黒死病の大流行と共に後付けされた、一五〇〇年代以降の『ハーメルンの笛吹き』の伝承だ。だっただからな」

——1284年。

ヨハネとパウロの日 6月26日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人

のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、

丘の近くの処刑場で姿を消した——

本来の伝承と碑文には、ネズミを操る道化が出現してこない。

ハーメルンの笛吹きにネズミとネズミを操る道化師が現れるのは、黒死病の最盛期で

ある一五〇〇年代からのことなのだ。

「グリム童話の魔書に描かれている、伝承とは異なる童話の悪魔。それが『ラッテンフェンガー』の『ネズミ捕りの道化』と呼ばれる偽のハーメルンの笛吹き。それにこのパステルカラーの街並み……『ヴェーザー・ルネサンス建築』って言うんだっけか？ これも十五世紀後期からの出現だ。最初からハーメルンの魔書を開かなかつたのは、年代を特定されたためだろ？ ゴシック調の造りが目立つ境界壁の街から、ルネサンス調の街に変われば異変は浮き彫りだ」

十六夜の質問に、ヴェーザーは肩を竦めることで返す。

「これで黒死病・ネズミ使いの2人は偽者だと断定できる。ハーメルンの笛吹きの考察に黒死病が現れたのは、斑模様であること以上に、伝染元のネズミが原因だったからだ」

「……」

「『シュトロム』も、本物と見せかけて実はフェイク。なぜなら碑文の『丘の近くで姿を消した』の一文の『丘』とは、ヴェーザー河に繋がる丘を指し、天災で子供たちが亡くなった象徴とされる。つまりシュトロムもまた、ヴェーザー河の存在を示す。あの巨兵は恐らく、お前たちが子飼いにしているハーメルンとは無関係の怪物か何かだろう。

——よってヴェーザー。アンタだけが、本来のハーメルンの笛吹きの碑文に沿った悪魔

だったということになる」

ピツとヴェーザーを指差す十六夜。

「そしてハーメルンの魔道書。あれは箱庭に召喚する際に、立体交差する時間軸のクロスポイントを、一八四〇年から一五〇〇年以降の『ハーメルンの笛吹き』に沿って発生させ召喚するギフト。もし召喚式である魔道書を破壊すれば……さて、何が起るだろうな？ 白夜叉の封印が解けて、お前たちは皆消えるとか？」

十六夜の考察に、ひたすら沈黙するヴェーザー。

その沈黙を是ととった十六夜は、最後にこう締めくくる。

「ハーメルンの伝承と黒死病の年代記が同一視させるようになった背景には、諸説あると考えていたんだが……お前が神格を得たことでひとつ、大きな候補が浮上した」

十六夜は背筋に心地良い汗を流しながら、魔王の正体を指摘する。

「ハーメルンの伝承にある道化師と、黒死病の伝承元のネズミ。この2つは共通した異名がある。その異名こそ、この世に死を運ぶ者。即ち……『死神』だ」

——神霊・『黒死斑の死神』

それがあの魔王の持つ、真のギフトネームだと十六夜は推測した。

考察を聞き終えたヴェーザーは、心底珍しい珍獣を見るようにまじまじと十六夜の顔を見つめ、

「はあー……おい、坊主」

「なんだ？ 訂正があるなら聞かぜ？」

「いや全然。つーかなんだ、アレだ。お前やつぱりこつち側に移籍しろよ。お前は絶対に、魔王側の方が舞台映えするぜ？」

半ば以上本気の勧誘を、十六夜は弾けるような笑いで否定した。

「悪いが御断りだ。魔王も面白そうだけど、今は他に目標があるからな」

「そうかよ。けどタイムアップを狙わせてくれるほど手ぬるい相手じゃねえしなあ……」

ヴェーザーは一転、鬼気迫る闘志を放出し、

「しようがねえ。やつぱ死んどけ坊主ツ!!」

「ハッ！ こつちの台詞だ木っ端悪魔ツ!!」

怒号を上げてぶつかり合う2人の衝撃は、一帯の土地全てに巨大な震動を奔らせる。

星の揺らぎの如く地響きを上げて大地を粉碎する両者の戦いは、こうして幕を上げたのであった。

一方その頃。

日向は宮殿のバルコニー地点まで戻り、木造建築の屋根上に佇んでいた。

周辺の景観は例外なくハーメルンの街並みと化しており、時折響く地鳴りから、すでに本格的な戦闘が開始されたのだと理解する。

「さて、と。ならこつちもそろそろ始めないとな」

その言葉を皮切りに、不意に日向は大きく息を吸い込んだ。

そして、大声を出して叫ぶ。

「おーい！ もし居るなら出て来てくれないか!? 悪いけど、俺もあんまりのんびりしていられる時間はないんだ！」

日向の言葉が盛大に周囲へ響き渡る。

反応は、その直後にあった。

「こんにちは、お兄さん」

ふと、背後から幼い声がかかる。

日向は動揺した様子もなく振り向くと、そこに立つ人物へ挨拶を返した。

「ああ、こんにちは。やっぱり君だったか」

日向の正面、屋根の向かい側に立っているのは、いつぞやの白髪白装束の少女であった。

彼女はニツコリと笑いかけると、透き通るような声で話す。

「でも、驚きました。どうして私がここに来ると思つたんですか？」

「まあ、ほとんど勘みたいなものだよ。この辺りには、白夜叉が封印されているからな。君なら、ここに来るんじゃないかと思つたんだ」

あの日、少女が太陽について語つた想い。

日向はその時のことを思い出して説明する。

彼女ならば、太陽の星霊である白夜叉の元に来るであろうと、日向は推測していたのだ。

「ふふふ、なるほどです。それじゃあ、私の正体についても分かっていたりしますか？」

日向はスツと瞳を細めると、真剣な表情で聞いた。

「これは、これはあくまで俺の推測だが。君は——一三一人目じゃないか？」

日向の言葉に、少女は笑顔で応える。

「やっぱり、お兄さんは凄いですね。いつから気付いていたんですか？」

「この場所に君が現れるまでは、俺もずっと半信半疑だったさ。ただ強いて言うなら……そうだな。キツカケは、君の台詞だ」

「私の台詞？」

「ああ。前に会つた時、君は言ったよな。『この街にやって来たばかり』……つてさ。そ

の頃、この街はギフトゲームによつてすでに出入りが制限されていた。なら君は、一体どうやつこの街に訪れたんだ？」

日向の言葉を静聴していた少女は、両手を組むと納得したように頷く。

「なるほど、確かに不用意な発言でした。でも、今から4日前に来たつていうのは本当なんですよ？ それだけは信じてもらえると助かります」

「信じるさ。恐らく君がこの舞台に現れた方法は、あの魔王たちと同じ原理だろう？」

「はい、その通りです。まあ、私は存在は想定外。所謂ところの、『イレギュラー』つて言うものだったんですけど」

少女は苦笑して日向の言葉を肯定した。

次いで意味ありげな微笑を浮かべると、今一度尋ねる。

「ならお兄さんは、私の靈格（そんざい）についても分かっていますか？」

日向は頷くと、ゆっくりと自身の考察を述べた。

「ああ。君の靈格は恐らく、『ハーメルンの笛吹き』の異説を基にして得られたものだろうか？ それなら、君が盲目であることにも合点がいく」

日向の述べる、『ハーメルンの笛吹き』における異説。

本来の物語は、笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、その姿を消したというのがありました。

しかし一部の考察によれば、子供たちの中には2人だけ生き残りがいたとされる。その生き残りとは、足が不自由なために他の子供たちよりも遅れた子供。

あるいは、盲目と聾啞——即ち、目の見えない子供と耳が聞こえない子供であったとされるのだ。

“伝承がある”ということは“功績がある”

霊格が世界に与えた影響・功績・代償・対価によつて得られる以上、彼女の霊格は、この異説の伝承を起源としたモノであると推測できる。

日向が少女を一三一人目と呼んだのも、そのためである。

「そして俺の予測が正しければ、君は恐らく人間じゃない。たぶん、ヴェーザーやラッテと同じく、一三〇人の死の功績を持つ悪魔の類だろう?」

その指摘に、少女は悲しそうに顔を伏せる。

やがて、徐々に話し始めた。

「お兄さんの言う通りです。確かに私は、人間ではありません。ですが悪魔というわけでもないんです。例えるなら……そうですね。悪霊が一番近いかもしれません」

「悪霊?」

「そうです。私の大本の霊格は、“ハーメルンの笛吹き”の異説で間違ひありません。けどそれは、とても小さな功績です。それで力を得たとしても、精々生き霊程度が限界

でしょう」

「だが君は、後天的に一三〇人の死の功績を手に入れることで、悪霊として再顕現したってことか？」

「はい。けどこれは功績というよりも、『呪い』と言った方が良さそうです」「呪い?」

日向は首を傾げて問い返す。

少女は切なげに微笑むと、己の誕生の由来を語った。

「ハーメルンの子供たちは、自然災害で死んだとされる説があります。しかし私の時代では、子供たちの死因は天災ではないんです」

「なら、その死因とはなんだったんだ?」

「黒魔術による……生け贄です」

少女は白い包帯の巻かれた目で、不意に空を見上げる。

心なしか日向には、その瞳に深い悲しみが浮かんでいるような気がした。

「人間が霊格を得る方法は、大まかに分けて2つあります。1つ目は、出生に何らかの特別な事情を持つ場合。2つ目は、生け贄や人柱などによって得る場合です。しかし私の世界では、この一三〇人の子供たちを生け贄に捧げた人物は、その功績を得る前に死んでしまいました。そして、行き場を失った子供たちの怨念や執念が向かった先。それこ

そが……私だつたんです」

「……」

日向は何も言わず、彼女の言葉を聞き届ける。

「私の中には、今も彼らの——幼くして命を落とした子供たちの、後悔や無念が息づいています。『ああ、もつと生きたい』、どうして僕たちが死ななきやいけないの？』、お母さんやお父さんに会いたい』。そして、その中でも特に強い思念の形は——」

——『どうして、君は死ななかつたの？』

「……つまりは、子供たちの生に対する執着心が、生き残りであつた君を恨み、怨念という形で引き寄せられた……つてことか？」

少女はこくりと頷いた。

「きつと皆は、私のことを恨んでいるんです。連れ去られた子供たちとは違い、生き残つた私のことを」

「でも、それならもうひとり、難聴の子供も生き残っていたはずだろ？、どうして君だけを恨むんだ？」

日向の問いかけに、少女は静かに首を振る。

「分かりません。どうして皆が、私の元に集まったのか。私には……その理由が分からないんです」

少女は悲痛な声音で答えた。

彼女は胸に手を当ててひと息つくつと、スツと纏う雰囲気やを和らげる。

「ひとつだけ、お兄さんには間違いがあります。正確には、私は一三二人目です」

「ん？ ということは、すでに一三一人目は存在している？」

「はい。元々はそれが原因で、このゲームに私という異説が入り込む隙を与えてしまったんです」

「へえ？ ちなみに、その人物って誰なんだ？」

「ふふふ。お兄さんも、たぶん一度は会っていると思いますよ」

日向は首を傾げ、思い当たる人物を探る。

可能性があるのは――

「……まさか、飛鳥と一緒にいたあの小さな精霊の女の子か？」

日向の解答に、少女はにっこりと微笑んだ。

「でも、あの子はちゃんと耳が聞こえる筈だぞ？」

「そうですね。これは私の憶測ですが……彼女はまだ幼く、周囲に耳を貸すことが得意ではありません。その性質が聾啞に類似するとされた結果、一三二人目として、盲目で

ある私が召喚されたのだと思います」

その解釈に、日向は思わず苦笑する。

「はは。何というか、凄く曖昧な結論だな」

「ふふふ、だから言ったじゃないですか。私の存在は『イレギュラー』だと。偶然に偶然が重なったからこそ、私はこの世界に召喚されてしまったんです」

「なるほどな。それで君は——どちら側なんだ？」

日向の問いに、少女はしばし沈黙した。

やがて花が咲いたような笑みを浮かべると、

「ごめんなさい。私は、お兄さんたちの敵です」

ハッキリと、そう宣言した。

「あの人たちの中にも——一人は違うみたいですけど、死んでしまった一三〇人の子供たちの霊格（そんざい）が宿っています。なら私は、彼らの敵になるわけにはいかないんです」

「……そっか」

日向は肯定も否定もせずに頷く。

そのままそつと瞑目すると——戦意を漲らせた。

「なら、俺は君と戦わなくちゃいけない。俺にも、絶対に譲れないものがあるから」

「はい。私も、自分の大切なモノのために戦います。……勝っても負けても、恨みっこは

無しですよ。お兄さん？」

満面の笑みで少女は語る。

それに対し、日向も朗らかに笑って応えた。

「ああ。俺も全力で——君を倒すよ」

沈みゆく太陽に見守られながら。

己が信じるもののために。

日向と少女は、その想いをぶつけ合うのだった。

第21話 それぞれの戦い

搜索隊は複数の分隊に別れ、ハーメルンの街に隠されたステンドグラスを探していた。

「見つけたぞ！ ネズミを操る道化が描かれたステンドグラスだ！」

「それは『偽りの伝承』です！ 砕いて構いません！」

ジンの指示でパリン、とステンドグラスが砕かれる。

彼は街道に描かれたネズミ模様を確認すると、周囲の建物を見回した。

「間違いない……ここがブンゲローゼン通り。一三〇人の子供たちが攫われた街道だ」

手元の地図を広げたジンは、これまでの情報を照合する。

「舞台区画でステンドグラスが展示されていた場所と、ハーメルンの街の展示場所はそれほどずれていない。つまり呑み込まれた、ではなく、ハーメルンの街を召喚したということ——？」

「はい、そこまでよ」

ハッと街道脇の家屋を見上げる。

屋根に立っていたのは、ネズミを操る神隠しの悪魔——ラッテンだった。

「お前はあの時の……！ 飛鳥さんをどうした!?!」

ジンが叫ぶが、彼女はクスクスと笑うだけだ。

やがて仰々しく辞儀をすると、手に持った魔笛を唇に添えた。

「ブンゲローゼン通りへようこそ皆様！ 神隠しの名所に訪れた皆様には、素敵な同士討ちを御体験していただきます♪」

直後、屋根の上から何十匹もの火蜥蜴が出現する。

操られた「サラマンドラ」の同士を見て、ジンは盛大に歯噛みした。

ゲームのルール上、同士討ちは双方失格となってしまう。

ただでさえ少ない人員がこれ以上減ってしまえば、搜索そのものに支障をきたしてしまっただろう。

ラッテンは構うことなく、フルートを振るって火蜥蜴たちに命令を下す。

「さあ！ 仲間同士で戯れてごらんなさいな！」

屋根から一斉に火球を吐き出す火蜥蜴たち。

参加者側も最早戦うしかないと意を決したその時——ほとぼし 迸る黒い影が、火球の雨を打ち砕いた。

「何ッ……!?!」

ラツテンの口元から笑みが消える。

頭上を見上げれば、輝くように揺れる光が刺し込んだ。

月明かりを背に煌々と靡く金髪。

純血の吸血鬼——レティシアが、翼を広げて彼女を見下ろしていたのだ。

「見つけたぞ、ネズミ使い」

射殺すような爛々とした双眸でラツテンを睨む。

そこに普段の温厚さは微塵も無い。

火蜥蜴たちの中心に佇むラツテンは、レティシアの美貌に歓声を上げた。

「うわおおお……！ 本物！ 本物の、純血の吸血鬼！ うわあ……超美人じゃない。

何あの煌めきまくってるスーパーラチナブロンド。ああだめ、今から興奮してきたか

も」

思わず恍惚とした表情を浮かべるラツテン。

その隙にギフトカードから取り出した長柄の槍を投擲するレティシア。

それをクルリとステップを踏むように避けたラツテンは、再度レティシアへ向き直

る。

「ふふ。いい感じに祭りっぽくなってきたじゃない。じゃ私も、切り札投入ジョーカーといこうか

しゅーっ」

途端に眼孔を鋭くすると、彼女は魔笛を唇に当て、演奏を始めた。

高く、低く、疾走するようにハイテンポなリズムの曲調は、これまでのどの魔笛とも違う。

まるで何かを目覚めさせるかのようなその旋律は、次第に大地を迫り上げると、陶器で出来た巨躯の兵士を数多に構築し始めた。

総勢はおよそ十体強。

舞台区画の各地に現れた陶器の怪物は、一斉に雄叫びを上げた。

「「「BRUUUUUUUUUM!!」」」

嵐の中心のように、全身の風穴から大気を吸い上げ放出する陶器の巨兵。

想像以上の戦力を投入してきたラッテンに、レティシアは緊迫した口調で問う。

「……あの陶器の巨兵。『ハーメルンの笛吹き』とは無関係の魔物だな?」

「まあねー。とある神様が造った泥人形のオマージュのレプリカのその眷属から派生した超雑種って奴? どちらにせよそんなご大層なモノじゃ御座いませんよ。どっかのパワー馬鹿と違って、私は神格も持ってませんしい?」

投げやりに呟くラッテン。

しかしレティシアは、彼女の言葉に驚愕した。

「神格だと……!?!」

「あれ？ 私たちの謎を解いたんじゃないの？ うちのマスター、あれで神霊の類なのよ。だから神格のひとつぐらいならどうか出来ちゃうわけ。……ひとつぐらいならね」

ケツ、と悪態をつけて不貞腐れる。

その間に、レティシアはジンへ問いかけた。

「ジン、大丈夫か？」

「大丈夫。特に怪我也無い」

「それは良かった。ここは私に任せて、ステンドグラスの搜索に急げ。あの巨兵が暴れ出せば、それどころではなくなるだろう」

頷き、ジンは搜索隊と共にこの場を離れる。

ひとり残ったレティシアは、すでに火蜥蜴たちによって周りを包囲されている。

そこに3体ものシュトロムが加わり、もはや完全に四面楚歌だ。

「ネズミ使い。飛鳥を攫ったのはお前か？」

「だったらどうするの吸血鬼さん？ 箱庭の騎士の力を見せてくれるのかしら？」

ラッテンは配下の魔物たちへ、いつでも襲い掛かれるよう臨戦態勢を取らせる。

しかしレティシアは怯まず、美麗に微笑んで返答した。

「残念ながら、今の私が所持しているギフトはどれも三流まがいのモノばかりだな。唯一戦力になりそうなのが……この『影』のギフトだけなんだ」

「影？」

ラッテンの視線は自然とレティシアの影に落ちる。

すると彼女の影は、無尽の刃へと姿を変えた。

いや、無数の刃が擦れ合うようなその様はむしろ――

「その影……『顎』？ いえいえちよつと待った！ そもそも吸血鬼に影は無いはずじゃ、」

「いかにも。コレでも昔は系統樹の守護者、『龍の騎士』^{ドラックル}まで上り詰めたことがあつてな。この『遺影』は、その時に信仰していた龍のモノだ」

ラッテンの余裕が一転する。

聞き間違いかと思考した一瞬の隙に、レティシアの影は膨張してその姿を変幻させた。

彼女は鋭利な眼差しをラッテンに向け、

「この前の御礼参りだネズミ使い。我が同士を傷つけた報いを、ここで受けるがいいツ！！」

無尽の刃は巨大な龍のアギトとなり、平面に広がって周囲を薙ぐ。

3体のシュトロムは龍の顎に噛み砕かれ、一撃で粉砕された。

間一髪跳び上がって避けたラッテンだが、上空から俯瞰したその影に驚愕する。

「龍の騎士に、無尽の刃を持つギフトですって……!?!? あなたまさか、神格を持った吸血鬼! 魔王ドラキュラだともいっの!?!?」

「懐かしい二つ名だが、それはとうに捨てた名だ。魔王ドラキュラと称された吸血鬼は、とつくの昔に倒されたんだよ。お前たち グリーム・グリモワール 幻想魔道書群^々 が没した数百年後にな!」

舌打ちと共に逃げ出すラッテン。

屋根の上を跳び回りながら、火蜥蜴たちを盾にして叫ぶ。

「くっ、蜥蜴共! 私を守りながら跳びかかりなさい!」

命令に従い、一斉に襲いかかる火蜥蜴たち。

レイシアはやむ得ず影を引つ込めて相手取る。

龍の遺影のギフトでは、破壊力が大きすぎて無傷で押さえることが難しいからだ。

ラッテンはその隙に路地裏へ下り、姿を隠しながら逃走した。

(何であんな大物がここに……!?!? たかが名無し風情のコミユニティに、一体どれだけの人材が集結しているの!?)

ブンゲローゼン通りから逃走したラッテンは一路、マルクト教会へ走る。

(教会の付近にはシュトロムを数体待機させてる。防衛線を張るにしても、まずはあそ

こへ……！)

ルネサンス調の街並みの中、ゴシック調の尖塔のある教会を指すラッテン。しかしマルクト教会では、すでに先客が待ち構えていた。

「——待っていたわ、偽りの『ハーメルンの笛吹き』。いえ、本物の『ラッテンフェンガー』」

その姿に、ラッテンは目を丸くする。

真紅のドレスを身に纏った飛鳥が、教会のステンドグラスを背に佇んでいたのだ。

「なっ……あなた、今までどこに」

「『ラッテンフェンガー』のコミュニティに匿われていたのよ。あなたを倒すためにね」

自信に満ちた顔つきで、長い髪と真紅のドレスを靡かせる飛鳥。

その肩には、例のどんがり帽子の精霊がいた。

己の真名を騙る怨敵を見つけたラッテンは、艶美な表情を歪ませ、フルートを指揮棒のように掲げて叫ぶ。

「とうとう姿を現したわね偽物……！ ハッ、丁度いいわ！ あなたを人質に吸血鬼を抑え込む！ 捕まえなさい、シュトロム！」

「BRUUUUUUUUUM！」

瞬く間に迫り上がる地盤。

姿を現した3体の巨兵は、教会の壁を打ち砕いて飛鳥を襲う。

しかし飛鳥はシュトロムを一瞥した後、悠々とギフトカードを掲げた。

「いいわ。まずは貸しをひとつ返させて頂きましょう。——来なさい、デーン！」

ワインレッドの輝きが教会を満たす。

ギフトカードからは無印の円陣が浮かび上がり、中から天地を揺るがすほどの雄叫びが響いた。

「——DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

主の呼び声に、紅い鋼の巨人は伽藍洞がらんどうの身体を大きくしならせて応える。

紅い巨軀の総身に太陽をモチーフにしたと思われる塗装と意匠を凝らし、圧倒的な存在感を放つ巨兵。

ラッテンはデーンに驚愕しながらも、シュトロムたちに命令を下す。

「か、構わないわ！ 圧殺しなさいシュトロム！」

シュトロムは嵐のように大気を揺らし、周囲の建造物を吸収し始めた。

飛鳥は余裕に満ちた表情のまま、シュトロムの一撃を優雅に待つ。

「迎え撃つよデーン。彼らに格の違いを見せつけて差し上げなさい」

デーンは不気味なひとつ目を揺らし、鈍く頷く。

瓦礫を溜め込んだシュトロムは、顔面に空いた巨大な空洞を白砲のようにして塊を撃ち出す。

その刹那、両者は同時に叫んだ。

「潰せ、シュトロムツ!!」

「砕きなさい、デイーンツ!!」

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!」

飛鳥の言葉で、デイーンの重鈍な動きが一気に加速する。

高速で襲う巨大な岩塊は、振り回される鋼の豪腕によつて全て叩き落とされた。

飛鳥は続いてデイーンに指示を出す。

「このステンドグラスは『真実の伝承』のひとつ! 壊しては元も子もないわ! 教会を出るわよデイーン!」

デイーンは承知したかのように鈍く唸り、伽藍洞の身体をしならせて壁を突き破る。

突進したデイーンは隣接するシュトロムの一体を押し倒し、打ち砕き、叩きつけて木っ端微塵に粉碎した。

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!」

雄叫びと共に暴れるその様は、正に鋼の魔人と称するに相応しい姿だろう。

ラッテンは戦慄きながらも、残りのシュトロムに命令を下す。

「背面の一体！一瞬でいいわ、押さえつけなさい！もう一体は嵐で牽制するのよ！」
ディーンの背面に立っていたシュトロムは、全身の風穴から空気を噴出して突進する。

もう一体は嵐のような乱気流を巻き上げ始める。

しかしその程度、紅い鉄人形には通用しない。

乱気流をモノともせず、突進を仕掛けたシュトロムを片腕で受け止めた。

ディーンの背面に立っていた飛鳥は一度離れ、乱気流に呑み込まれないよう教会の柱へ掴まりながら指示を出す。

「力の差を見せつけなさい、ディーン！」

一喝、ディーンはシュトロムの頭を掴んで捻じ伏せる。

陶器の巨兵は抵抗むなく、乾いた音と共に一撃で粉碎された。

これで残り一体。

最後のシュトロムを倒すために指示を出そうとした飛鳥は——ふと、ラッテンの姿がないことに気づく。

「……消えた……!?!」

失態に舌打ちしながらも、飛鳥は頭を振って周囲を伺う。

しかし気が付かない。

それもそのはず。

ラッテンはシウトロムの巻き上げた風で——上空に飛んでいたのだ。

(鉄人形と距離を置きすぎたわねお嬢さん……い・もらったッ！)

ラッテンは勝利を確信し、フルートの尖端を飛鳥の頭上目掛けて固定する。上を見上げ、間一髪気が付いた飛鳥だがもう遅い。

避ける暇もなく突き出された魔笛は、

「——潰しなさい、デイン」

高速で伸びた巨軀の豪腕に、握り潰された。

「ギッ——！」

「B u r ……!?!」

ズドンッ!!

と伸びた豪腕に掴まれたラッテンは、そのまま高速でシウトロムに叩きつけられる。

3体目のシウトロムもその一撃で粉碎し、デインは無骨な雄叫びを上げた。

普段の重鈍な動きとは裏腹に、戦闘時の動きは軽快ささえ垣間見える。

飛鳥の力が、スペック以上の力を引き出しているからだろう。

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

勝ち鬨を上げる紅い鋼の魔人。

ラッテンは今更になつて気が付く。

この巨軀の鉄人形が、どうやって大空洞の中心に搬入されていたのか。

あの僅かな時間に、どうやって大空洞から姿を消したのか。

その解答に至り、畏怖を込めた眼差しでディーンを見上げた。

「し、伸縮自在の鋼……！……龍種の『純血』のみが錬成できる、神珍鉄の魔人……！」

——神珍鉄製の自動人形。オートマター

かつて七人の魔王を総べた天に斉しき者『斉天大聖』が愛用したという、質量を自在に増減できる

神の鉱物。

それを地精の精霊群が鍛えて組み上げた鉄人形。

伽藍洞の中身とは裏腹に、その巨体に宿る重量は途方も無い。

飛鳥はコツコツと歩み寄り、瀕死のラッテンに微笑みかける。

「これで蹴られた貸しは無しにしましょう。喧嘩両成敗というやつね。……だけディーン

ブンには少し早いわ。まだ貸しをひとつ返してもらっていないもの」

パチン！ と飛鳥が指を鳴らす。

飛鳥の合図に頷いたディーンは、ラッテンを放して後ろへ下がった。

解放されたラッテンは崩れ落ち、ガクガクと膝を震わせて地面にへばり付く。

白装束を鮮血で染めた彼女は、トドメを刺さない飛鳥に疑問の眼差しを向けた。

「なっ……何を、」

「覚えているかしら？ 私は1週間前、あなたの音色で支配されたネズミたちによって敗北したわ。つまり貸しを返して頂くというのは……率直に言うと、一曲所望したいということよ」

スツと。

デイーンの巨大な手の平に腰かけ、細く長い指でラッテンを指差す。

「ゲームをしましょう。あなたに一曲分の演奏を許可します。その一曲で、私に服従しているデイーンを魅了してみなさい」

挑戦的な瞳には、ただ勝つだけでは意味が無いという強い意志が見て取れた。

敗北した相手のギフトを打ち破り、完全な形での勝利を望むと彼女は言うのだ。

「……なるほど、ね」

ラッテンは肩が上下する程乱れた息を、血反吐ごと飲み込むように吸って正す。

「いいわ……あなたのゲームに乗って、一曲奏でましょう」

彼女は魔笛を唇に当て、いつもの茶化した笑顔でウイंकした。

「幻想曲『ハーメルンの笛吹き』。どうかご静聴のほどを♪」

「いい加減、無意味だと分からないの？」

迫り来る轟雷と炎弾を、球体状に展開した黒い風で阻むペスト。

一向に好転しない戦況に、サンドラは大きく歯噛みした。

「やつぱりダメ！ 神格級のギフトが2つ同時に攻撃してもビクともしない！」

「確かに、タイムオーバーを狙っているのは明白ですが……少々妙な力でございますね」

サンドラに比べると、幾分か冷静な黒ウサギ。

というのも、彼女はペストの靈格に心当たりがあつたからだ。

黒ウサギは疲弊したサンドラを一瞥すると、屋根の上からペストへ問う。

「ブラック・パーチャイ黒死斑の魔王”。あなたの正体は……神靈の類ですね？」

「えっ？」

「そうよ」

「えっ!？」

悠々と問いへ答えるペスト。

サンドラは驚きながら2人の顔を交互に見る。

「日向さんから話を聞いた時、よもやとは思いました。あなたの持つ靈格は『ハーメルンの笛吹き』に記述された『一三〇人の子供の死の功績』ではなく、十四世紀から十七世紀にかけて吹き荒れた黒死病の死者——八〇〇〇万もの死の功績を持つ悪魔ではな

いか、と」

今度こそサンドラの表情は蒼白に変わった。

「八〇〇〇万の死の功績……!? それだけあれば、神霊に転生することも可能」

「無理よ」

「無理です」

同時にキツパリと否定され、サンドラはちよつぱりしよんぼりした。

「最強種以外が神霊になるために必要な功績は “一定数以上の信仰” でございます。いかに規格外の数の死を収集しようと、神霊に至ることは不可能でございますよサンドラ様」

「そ、そっか」

「ですが信仰の形は様々です。恐怖を以て奉られる神仏も決して少なくはありません。密教の悪神にはよくあることでございます。——しかしかすペスト。あなたは神霊に成り上がるための恐怖も信仰も足りなかった。後の医学が黒死病あなに対抗する手段を得ることとで、神霊には成りきれなかったのです」

「……」

「だからあなたは自分に最も近い存在で、恐怖の対象として完成されている形骸を欲したのです。……それが “グリム、ケリモワール 幻想魔道書群” の魔道書に記述された、まだら 斑模様の死神。あな

たは自分自身を神霊として呼び出すために——」

「残念ながら、所々違うわ」

へ？ と絶対の自信があつた推測を否定され、黒ウサギはウサ耳をへによらせる。

ペストは毛先を弄りながら、少し憂鬱そうに口を開いた。

「だけどそうね……時間稼ぎ程度に教えてあげる。私は自分の力で箱庭に来たんじゃない。私を召喚したのはかの魔王軍・『幻想魔道書群』を率いた男よ」

「なっ、」

「きつと私を手駒に加えたかつたのね。八〇〇〇万もの死の功績を持つ悪魔……いいえ。『八〇〇〇〇万の悪霊群』である私を死神に据えれば、神霊として開花させられると思つたのよ」

黒ウサギは思わずウサ耳を疑つた。

「ということとは……あなたは黒死病が神霊化したわけではなく、黒死病の死者の霊群ですと？」

「ええ。その代表が私。……しかしかの魔王は、私たちを召喚する儀式の途中で何者かとのギフトゲームに敗北し、この世を去つた」

そして幾星霜の月日が流れた。

何かの拍子で召喚式が完成され、時の彼方から呼び出されたのがペスト。

世界人口の3割が減少し、死の病が蔓延る恐慌時代からやって来た少女。

「私たちが『主権者権限』^{ホストマスター}を得るに至った功績。この功績には私が……いえ。死の時代に生きた全ての人の怨嗟を叶える、特殊なルールを敷ける権利があった。黒死病を世界中に蔓延させ、飢餓や貧困を呼んだ諸悪の根源——怠惰な太陽に、復讐する権限が……!!!」

あまり感情を表に出さないと思われていたペストは、初めて激情で語調を強めた。

彼女は八〇〇〇万の怨嗟の声に応えるため、この神々の箱庭で太陽に挑むのだという。

「太陽に復讐とは……流石は魔王。太陽の主権を持っている白夜叉様を狙った理由は、そこにあつたわけですか」

冷や汗を浮かべながら、黒ウサギは理解した。

ペストは先ほどまでの熱を消すと、泰然と構えて薄く笑う。

そして手元から黒い風を噴出させ、戦慄と共に宣言するのだった。

「……さ、ゲームを再開しましょう。あなたたち2人は大事な駒だもの。タイムオーバーのその瞬間まで、たつぷりと遊んであげる」

山河を打ち砕く両者の激突は、瞬く間に地形を塗り替えて瓦礫の山を築いていた。大地を捲り、河を操り、地殻変動に匹敵する威力で迫る水柱や岩塊を、十六夜は四肢の力ではね飛ばす。

「しやら、くせえ！」

その隙にヴェーザーは死角から十六夜の懐へ飛び込もうする。

しかしそれに気づいた十六夜も、岩塊を足場に跳び退いて距離を取る。

この俊足こそ十六夜最大の武器であり、身を守る術なのだ。

その後も激化する両者の戦闘。

だが十六夜は、ふっとその足を止めた。

ヴェーザーは警戒しながら彼に問う。

「どうした坊主？　まさか諦めたってわけじゃねえよな？」

「……気に入らねえな」

「は？」

「お前、ずっと本来の力を隠してるだろ？」

不満そうに吐き捨てる十六夜。

その身体は全身に細かい傷が付いてはいるものの、致命的な一撃は最初の一打しかない。

俊足に任せて動く十六夜と、それに合わせて待つヴェーザー。

捌め手を交えてはいるが、両者とも決定打に欠ける一進一退の攻防を繰り返していた。

しかし十六夜は気付いていたのだ。

ヴェーザーが、未だ明らかにしていない隠し玉を所持していることに。

「俺の懐に飛び込んだ時のお前の目。『この一撃さえ当たれば勝てる！』……そんな目をしているのが、ああああ気にくわねえ！」

一転して、好戦的な笑みで叫ぶ。

ポロポロになって肩で息をしていたヴェーザーは、呆れたように構えを解き、巨大な笛を肩に担いで息を吐いた。

「そんなこと言ってもお前……じゃあどうすんだよ」

「このままじゃ埒が明かねえ。だからお互いに、全力の一撃で決着を付けようぜヴェーザー」

ピツと、ヴェーザーを指差して宣言する十六夜。

ヤハハと笑う彼とは対照的に、ヴェーザーの表情は険しかった。

今の膠着状態は、彼にとっては歓迎すべき状況だ。

このまま延々と戦い続けられれば、いずれタイムオーバーが来るだろう。

——しかしだ。

この悪童を殺してしまうのは惜しいと考える反面、力の底がどこまであるのか見てみたいという期待感もあった。

ヴェーザーはしばし沈黙し、

「……………はあ」

ドツと、脱力したように肩を落とした。

黒髪の短髪をボリボリと無造作に掻き毟り、軍服の襟元を開くと、血走った眼で、

「OK。死ね、糞ガキ」

己の霊格を全解放した。

ヴェーザーは魔笛を掲げ、頭上で円を描くように乱舞し始める。

それに応じて、立っているのも難しいほどの地鳴りと震動が起こり始める。

今までの揺れとは比べ物にならない地殻の変動は、徐々にヴェーザーの魔笛の切っ先に集まる。

乱舞する魔笛に、地殻変動級のエネルギーが収束していく。

次第に揺れが収まっていく中、十六夜は腰を落とし、右腕を引き絞るように後ろへ下げらる。

腕力だけでなく、全身の駆動をフルに使った、生涯初めての全力に心が踊る。

「よしよしいいぞ……い……かなり期待できそうだ……!!!」

互いに次の一撃のため、身体を後方に捻る。

大地の揺れが収束されると同時に——必殺の一撃はぶつかり合った。

各所で戦闘が激化する中、日向は広々とした街道で静かに構えていた。

しかしその双眸に油断の色は無く、五感をフルに活用して周囲の気配を探っている。

不意に、彼の背後から円錐状の土槍が飛来した。

日向は敏感に察知すると、振り向き様に拳を振るってそれを砕く。

直後、左右後方から再び土槍が撃ち出された。

攻撃を凌いだ直後の僅かに生まれた隙をつく、絶妙なタイミングでの追撃。

咄嗟に跳躍することで回避するも、まるでその瞬間を見計らっていたように無数の土針が連射される。

いかに日向と言えど、空中では身動きの取りようが無い。

それでも彼は冷静に虚空を蹴り上げると、生じた風圧が防御膜となつて全ての土針を吹き飛ばした。

地面に着地するや否や、日向は攻撃が繰り出された地点へ瞬時に移動して拳を振り抜

く。

その一打で家屋の一軒が倒壊するが、すでに相手の姿は影も形も消え失せていた。

(この動き方……どうやらこっちの手は読まれているみたいだな)

そして、戦況は再び振り出しへ戻る。

すでに数度繰り返されているやり取りに、日向は身構えたまままで問いかけた。

「やっぱり、タイムアップ狙いか？」

「ふふふ、当然です。私にも彼我の実力差くらい分かりますから。ハッキリ言って、正面から戦ってもお兄さんには絶対に勝てません」

「そこで長期戦覚悟のかくれんぼか。それにしても、いささか堂に入りすぎてやしないか？」

日向は思わず苦笑する。

現在も少女は周囲の反響を利用して言葉を発しており、こちらに位置を悟らせない。

辺りには建造物が建ち並んでいるため、身を隠す場所ならいくらでもあるのだ。

ならば力ずくの手段に打って出たいところだが、真実の伝承のステンドグラスを破壊してしまう恐れがある以上、下手な行動を取ることとは出来ない。

恐らくはそれすら見越した上での戦略なのだろう。

洗練された戦い振りに、日向は素直に感心した。

「ふふふ、前にも言ったじゃないですか。私は目が見えない分、少しだけ人の感情なんか
に敏感なんですよつて。加えて風の動きや僅かな物音から、お兄さんの行動は手に取る
ように分かります」

「なるほどな。それは確かに厄介だ。さつきからの攻撃を見ると、君は地精寄りの悪霊
なのか？」

「はい、その通りです。私の所有するギフトは2つ。そのひとつが“土系の操作”です。
効果は見ての通り、土の形状を変化させたり、自由自在に動かしたりといったモノです
ね。無論、操れる範囲は私の霊格に依存しますが」

「へえ？ ちなみに、もうひとつのギフトは何なんだ？」

「ふふふ、流石にこれ以上は明かせませんよ？ もしも教えて欲しければ、私を捕まえて
みて下さいね♪」

「ま、それもそうだな……つとー！」

続いて迫り来る数本の土槍を弾きながら、日向は脳内で思考する。

（参ったな……こうなったら少し面倒だが、荒技を試して見るか）

刹那、日向は地面を踏み抜くと同時に姿を消した。

高速で街中を駆け巡り、少女が反応する前に見つけてしまう魂胆だ。

しかし――

(おかしいな……聞こえる声の大きさからして、少なくとも半径二〇〇m以内には居るはずだが……)

ほとんど音速で駆けている日向にとって、その程度の範囲を探ることなど一瞬だ。しかし少女の姿は一向に見えない。

訝しむ日向をからかうように、周囲から少女の声が反響する。

「ふふふ。ほらほら、ここですよー?」

「お兄さんこちら♪ 手の鳴る方へ♪」

まるで本当に遊んでいるかのように、楽しそうな声で話す少女。

仕舞いには『鬼さん』と『お兄さん』を掛けてくるほどの余裕振りだ。

この程度の挑発に乗るような日向ではないものの、依然として姿の見えない少女に少なからず疑問を抱く。

(ここまで探して見つからないとなると……他に残る場所は……)と、その時。

不意に日向は視界の隅で、地面に空いた小さな穴を発見した。

(穴? どうしてこんな所に……ッ! そうか!)

瞬間、日向は何かに気づいて足を止める。

その様子に、少女は不思議そうに問いかける。

「あれれ？ もう追いかけてこは終わりですか？」

「ああ。残念ながら、そろそろ捕まえさせてもらおうとするよ」

「——？ 一体どうやって——」

少女が眉を歪めると、日向は静かに拳を引いた。

そして、ニヤリと笑って一言、

「——さあ、出て来てもらおうか」

そう言つて——地面を殴りつけた。

日向の拳は大地を放射状に割り砕き、さながら爆心地のように巨大なクレーターを形成する。

倒壊した家屋の瓦礫や木材が宙を舞い、衝撃は地殻を抉つて土や砂礫を巻き上げる。ありとあらゆる物が盛大に頭上を飛び交う中、嫌に目立つ存在がひとつ。

地中から引つ張り出された白髪の少女は、キョトンとした顔で空中に打ち上げられていた。

「あ、あれれ？」

「ハハハ……見イつけた」

「あ、アハハ。見つかつちやいました……？」

まるで悪戯が成功したような笑みを向ける日向に、少女は苦笑を浮かべて冷や汗を流

す。

咄嗟に周囲の瓦礫や土塊を土槍へ変化させた彼女は、それらを撃ち出しながら慌てた声で問いかけた。

「ど、どうして私が地中に居ると分かったんですか!？」

「君を探し回っている時、おかしいとは思ったんだ。声は近くにあるはずなのに、君の姿はどこにもない。そんな時、地面に空いた小さな穴が目についた。そこで思い付いたのさ。君のギフトなら、地中に隠れることが出来るんじゃないかって。あの小さな穴は、地中から声を伝えるための伝声器のようなものだろう?」

迫り来る土槍を回避し、受け流し、時に砕きながら日向は答える。

完全に見破られたことを理解した少女は、それでも納得がいかないと訴えた。

「うう、流石です。で、でも! こんな大規模な攻撃をすれば、周囲のステンドグラスもただでは済まないんじゃない、」

「それなら、さつき全部確認したさ」

「え? そんな、一体いつ……ッ!」

その瞬間、ハッと少女は思い出す。

先ほど日向が、辺り一帯を駆け巡っていた時。

彼は彼女の姿を探すと同時に、周囲にステンドグラスが無いことを確かめていたの

だ。

「さあ、これでチェックメイトだ」

「っ！ まだです！」

少女は周りの土塊を変化させ、無数の弾丸を撃ち出した。眼下の日向へ、視界を覆い尽くさんばかりの弾幕が迫る。

日向はそんな凶弾の嵐を、

「——しゃらくせえ!!」

己が拳の一振りで、ひとつ残らず弾き飛ばした。

直後に足場を踏み抜くと、一瞬で少女の眼前に躍り出る。

目の前で拳を握る日向に、少女はニツコリと笑いかけた。

「ふふ、負けちゃいましたね」

「……ごめんな」

「気にしないで下さい。これでようやく私も——!?!」

日向が勝負を決めようとしたその時、突如少女の身に異変が起こった。白髪は徐々に黒く染まり、彼女は苦痛に喘ぐかのように声を漏らす。

「あ、駄目……皆、どうして……!」

「——! おい! 大丈夫——ッ!?!」

異変に気づき、日向が手を伸ばそうとするも、少女の前に発生した黒い瘴気によって弾かれた。

瘴気はやがて、少女を包み込むように広がっていく。

「あ、う、あ……お、兄さん……わ、私、を」

「なんだ!？」

完全に呑み込まれる寸前、少女は日向に何かを伝えようと、必死に声を振り絞り出す。問い返す日向が、最後に耳にした彼女の言葉は、

「私を——殺して下さい」

瘴気が黒い球体を成し、少女の姿が完全に呑まれた。

しばしの静寂の後。

不意に球体にヒビが入り、瞬間に全体へ亀裂が広がっていく。

まるで鳥の雛が卵の殻を破るように、砕けた球体の中から現れたのは——

「お前は……誰だ？」

黒い髪。

黒い装束。

黒い包帯。

日向の問いに、全身を漆黒へと染めた少女は、

「殺、サセナイ。ヒトリニナンカ、シナイ。絶対ニ——守ツテミセル！」
夕陽が暮れ落ち、夜の帳が下りる時間。

宵闇に佇む少女は酷く、醜く、狂気的な声で——優しく、叫ぶのであった。

第22話 決着

最初は普通だった。

普通に生まれて、普通に育つて。

普通に、両親から愛されていた。

いつからだっただろう。

だんだんと、普通じゃなくなってきたのは。

始まりはちよつとした変化だった。

いつも当たり前に見えていた光景が、少しだけ暗くなったように感じた。

その頃からだっただろうか。

私は友達と遊んでいる最中に、よく転ぶようになった。

しばらくして、変化は明確になった。

私を見る世界は、半分の明るさしか無くなっていった。

その頃から、私はあまり家から出られなくなった。

少しずつ、少しずつ、私の世界から光が消えていく。

嫌だった。

怖かった。

だから私は、ずっと窓からお天道様にお祈りした。

お願いします。

私に光をください。

私から光を奪わないでください。

毎日、毎日、私は窓からお祈りし続けた。

気づいた時には、私はほんの少しの光しか見えなくなっていた。

その頃からだっただろうか。

優しかった両親は、私に冷たくなっていった。

それでも私は、祈ることを止めなかった。

もう一度、外で皆と遊びたい。

もう一度、両親に愛して貰って言われたい。

もう一度、お天道様の光を見たい。

そんなある日、ふと、私は誰かに呼ばれているような気がした。

その人の元へ行きたかったけれど、私は表に出ることが出来なかった。

そして、次の日。

街から、子供たちが消えた。

何日過ぎてても、何年過ぎてても、彼らは帰って来なかった。

そして、私の世界から完全に光が消えた時。

私の世界が、暗い闇に閉ざされた時。

もう2度と、皆の声が聞こえないんだと分かった時。

私は、気づいてしまったんだ。

ああ、私は……「ひとりぼっち」なんだと。

だから、私は窓を――

――閉めたんだ。

『ヒ……ジャ……ナイ、ヨ』

「お前は……誰だ？」

夜陰に溶け込むかのように全身を漆黒へ染め上げた少女に、日向は真剣な双眸で問う。

少女はゆっくりと日向の前に降り立つと、無機質な声で告げた。

「私タチハ御霊^{みたま}。生ケ贄トナツタ、一三〇人ノ魂」

その返答に、思わず瞳を丸くする。

生け贄となった、一三〇人の御霊。

もしもそれが言葉通りの意味ならば、

「まさか君は……いや、君たちは、連れ去られたハーメルンの子供たちか？」

少女はそつと頷いた。

数多の考察が存在する、〃ハーメルンの笛吹き〃の伝承。

あらゆる可能性の中で、黒魔術の生け贄という悲劇の時代で命を落とした子供たち。自らがその御霊の具現だと、漆黒の少女は語る。

「それで、君たちの目的は何なんだ？」

「コノ子ヲ、アナタカラ守ルコト」

「守る？ 君たちは、その子のことを憎んでいたんじゃないのか？」

「違ウ。私タチハタダ、ソバニ居テアゲタカツタ」

漆黒の少女は、静かに首を左右へ振る。

そして僅かに悲しげな表情を浮かべると、憑代である少女について話した。

「コノ子ハ、ズットヒトリボツチダツタ」

「ひとりぼっち？」

「ソウ。ズット、ズットヒトリデ生キテイタ。ダカラ、私タチヲ求メタ」

彼らは少女の認識が誤りであつたと指摘する。

彼らが少女へ向かつたのでは無く。

少女自身が望んだからこそ、彼らは引き寄せられたのだと。

しかし疑問が拭いきれない日向は、眉をひそめて問いかけた。

「なら、どうしてその子に伝えてやらないんだ？ その子は、君たちが自分のことを憎んでいると思ってるぞ？」

「コノ子ニ、私タチノ言葉ハ届カナイ。生キルコトヲ諦メテイル者ニ、私タチノ言葉ハ響カナイ」

「生きることを……諦めている？」

「ソウ。コノ子ハヒトリデ生キルコトニ疲レテイタ。ヒトリボツチデイルコトニ、耐エラレナクナツテイタ。ダカラ、死ヲ選ンダ」

漆黒の少女は悲痛に顔を俯かせる。

そこで日向は、白髪の少女が最後に言った言葉を思い出した。

——「私を、殺してください」

漆黒の少女は、再び顔を上げて日向を見る。

「デモ、私タチハコノ子ニ死ンデ欲シクナイ。ダカラ、アナタカラ守ル」

「……なるほどな」

納得し、日向は構えを解いて頭を掻いた。

そして彼らを真つ直ぐに見つめ、最後に疑問を投げかける。

「ひとつだけ聞かせてくれ。もしもこの場で俺からその子を守ったとして、その後はどうするんだ？」

「？」

漆黒の少女は小首を傾げる。

日向は続けた。

「孤独であり続ける限り、その子は決して救われない。また今回のように、自ら命を捨てようとするんじゃないか？」

「心配ハイライナイ。コノ子ハ、私タチトヒトツニナル」

「……どういうことだ？」

彼らの言葉に、日向は訝しげな視線を送る。

漆黒の少女は、自身の胸に手を添えて答えた。

「モウスグ、私タチトコノ子ノ靈格ハ完全ニ溶ケ合ウ。ソシテ、コノ子ハ私タチトヒトツニナル」

「君たちとひとつに？ つまり、悪霊群の一員になるということか？」

漆黒の少女はコクリと頷く。

「ソウスレバ、モウヒトリジヤナクナル。ソウスレバ、ズットソバニ居テアゲラレル。コノ子ハ、救ワレル」

その時、日向は初めて彼らの意図を理解した。

彼らは白髪の少女を霊群の一部へ取り込むことで、孤独から救い出そうとしていたの

だ。

そんな彼らの想いを聞き届けた日向は、ふっと穏やかに微笑んだ。

「そっか。君たちは、その子のことが大好きなんだな」

「ム……」

ほんのりと、漆黒の少女は頬を染める。

本音を指摘されて恥ずかしかったのだろう。

しかし、だからこそ。

彼らの優しさを知ったからこそ、日向はスッと瞳を細め、

「だけどそれ、間違ってるぞ」

「そんな彼らを——否定した。」

「ツ！ ドウシテ!？」

「いや、どうしてって言われてもな……」

全身から黒い瘴気を立ち昇らせて戦慄く少女。

答えようとする日向だが、その前に彼らは攻撃を仕掛けた。

「ヤツパリ、アナタハコノ子ノ敵!」

途端に無数の土槍を造り上げて、日向に撃ち出す漆黒の少女。

しかし日向は、その全てを真正面から打ち砕く。

絶望的な地力の差に、彼らは齒噛みして叫んだ。

「私たちハ、間違ッテナンカイナイ！」

「いいや間違つてる。どんなに崇高な理屈を並べても、君たちはやっぱり子供だよ」

「ウルサイ！ 黙レ！」

がむしやらに攻撃を繰り出す漆黒の少女。

それでも、次第に日向は彼らへと近づいていく。

縮まる距離に比例するかのように、彼らの顔は悲哀に歪んだ。

「ドウシテ！ ドウシテ……！」

泣き言のように叫ぶ彼らに、日向は何も答えない。

淡々と歩み寄ってくる彼の姿に、いつしか彼らは恐怖心すら抱いていた。

そしてついに目の前へ立った日向に、彼らは「ヒツ」と思わず両腕で顔を隠す。

まるで年相応な仕草を見せる彼らに、日向はスツと両手を伸ばし——彼らの身体を抱き締めた。

「エ……？」

「大丈夫。俺は、この子を殺さないよ」

優しい声音で話す日向。

漆黒の少女は戸惑いを浮かべて問い返す。

「ダツテ、私タチハ間違ッテルツテ……」

「ああ。間違ひも間違い。大間違いだ。この子の望みが孤独からの解放なら、君たちの一部になることで、確かに救われるのかもしれない。けれど、それだけじゃ駄目なんだ」

「ド、ドウシテ？」

「だってそれじゃあ……君たちが救われないじゃないか」

その一言に、彼らは言葉を失った。

啞然と日向の顔を見つめた後、ゆつくりと問い返す。

「私タチガ……救ワレナイ？」

「ああ。君たちは言つたよな？　ずっとこの子のそばに居てあげたいって。でもそれじゃあ、君たちは幼くして死んだ無念や後悔を、ずっと持ちながら生きていかなきゃならないんだぞ？」

「ソ、ソレハ……」

彼らに困惑の色が浮かぶ。

「デモ、私タチガイナクナレバ、コノ子ハ本当ニヒトリニナツテシマウ」

「だから、さ。その役目を、俺に預けてみてくれないか？」

「エ？」

日向は少しだけ身体を離し、彼らの頭を撫でながら話す。

「君たちの代わりに、俺がこの子のそばに居る。俺が命を懸けて、この子のことを守ってみせる。もちろん、それで安心しろとは言わない。信じてくれとも言わない。だけどほんの少し、俺に時間をくれないか？」

「時間……ヲ？」

「ああ。この子を救うための時間と——そして、君たちを救うための時間をさ」

「ア……」

日向は朗らかに笑いかける。

彼らは放心したように日向を見つめると——やがて、小さく微笑んだ。

「……アナタハ、不思議ナ人」

「そうか？」

コクリ、と頷く。

「コウシテソバニイルト、トテモ温カイ気持チニナル。ソウ、マルデ……日向〃二居ミタイニ」

日向は思わず苦笑した。

彼らは少しだけ考えるような素振りを見せると——やがて、納得したように頷いてみせる。

「……ウン。アナタナラ、コノ子ノ〃窓〃ヲ開ケラレルカモシレナイ」

「窓を？」

「ソウ。コノ子ハ窓ヲ閉ジテシマツタ。光ヲ求メルコトヲ止メテシマツタ。デモアナタナラ、モウ一度コノ子ノ光ニ——太陽ニナレルカモシレナイ」

漆黒の少女はそつと日向から離れると、どこか嬉しそうに告げた。

「私タチハ、アナタヲ信ジル。コノ子ノコトヲ、ドウカヨロシクオ願イシマス」

日向も微笑み、それに応える。

「ああ、もちろん。だけど、君たちだつてしばらくは一緒にいるんだぞ？」

彼らは静かに首を左右へ振つた。

「私タチノ願イハ、モウ叶エラレタ」

「え？」

日向が声を漏らすと、少女の身体が輝き始めた。

仄かな光はやがて全身を包み、小さな粒子となつて消えていく。

「私タチノ願イハ、モウ一度誰カニ『愛情』ヲ貰ウコト。……アリガトウ。アナタノオカゲデ、私タチモ安心シテ逝ケル」

「……そつか」

それだけ言つて、彼らの魂を静かに見送る。

完全に消える間際、漆黒の少女は、最後に日向へ語りかけた。

「サヨウナラ。約束、忘レナイデ」

「ああ。絶対に忘れないよ」

日向の答えに、彼らはニツコリと笑顔を浮かべる。

次の瞬間、少女の纏う光が弾け、輝く粒子はハーメルンの夜空へと消えていった。それと同時に、日向は倒れ込む白髪の少女を抱き止める。

「う、ん……お兄さん？」

「よ。おはようさん」

目を覚ました少女に、日向は朗らかに笑いかけた。

彼女は日向の顔を見つめると——ギョツと、その背中を抱き締めた。

「どうした？」

「声が……聞こえました。あの日以来ずっと聞こえなかった、皆の声が」

震える声で話す少女。

日向は優しく、彼女の頭を撫でてやる。

「何て言ってたんだ？」

「……窓を、開けてごらん」って。君はもう、ひとりじゃないよ」って。でも、私怖くて、ずっとその窓を開けられませんでした。けれど、窓の向こうに、お兄さんの声がしたんです。そしたら、不思議と怖くなくなつて。気がついたら立ち上がって、窓に手

を伸ばしていました」

「ちゃんと開けられたか？」

「はい」

「何が見えた？」

日向は問いかける。

少女は涙を浮かべながらも、ニツコリと笑い、

「えへへ。眩しく、て……何も見えませんでした」

そう言つて再び日向の胸に顔を埋め——嬉しそうに、声を上げて泣いたのだった。

日向は手頃な家屋の一室に入ると、室内にあったベッドへ白髪の少女を寝かしつけた。

少女は日向に視線を向けて問いかける。

「……行くんですか？」

「ああ。少しここで休んでいてくれ。必ず後で迎えに来る」

「ふふふ、その台詞はフラグですよお兄さん。……でも、約束……です」

疲労が溜まっていたのか、少女はそう言つて眠りへついた。

日向は優しく微笑んで彼女の頭をひと撫ですると、やがてスツと真剣な表情で顔を上げた。

「そんじやま、急ぐとしますか」

“ハーメルンの笛吹き”が奏でる演奏は、これまで聞いたどの音色よりも美しい旋律だった。

妙なる魔笛は高く、低く——夢の中へと誘うように飛鳥の心を浸食する。

(……ああ。コレは少しずるいわ)

飛鳥は耳元で響く魔笛の向こうに、かつて捨てて来た世界の夢を見ていた。

幼い頃から抱いていた、籠の外の世界。

壁を越え、海を越え、国境を越え。

叶うことのなかったハロウインの夢を、失った家族と共に見る。

陶酔してしまいそうな甘美な夢に取り込まれる瞬間——ひとつの約束を思い出した。

“——いつか俺たちで、

俺たちのハロウインをしよう——”

(……そうね。私の“Trick or Treat”は、その時まで取っておきま

しよう)

そつと目を覚ました時、演奏はすでに終わっていた。

ラッテンは肩で息をしながら、困ったように笑っている。

「1曲分……という約束だったものね。夢は見られましたか、御客様？」

「……ええ。とても素敵な夢だったわ」

掛け値のない評価だった。

何より亡くなった家族の顔をもう一度見るような機会は、今後二度と訪れることはないだろう。

思い出せる最後の家族の顔が夢の中の笑顔だというのなら——それはそれでいいかもしれない。

パチパチパチと、気がつけば拍手を送っていた。

ラッテンは苦笑と共に膝を折り、光の粒子となつて消えていく。

「あーあ……負けちゃった。ま、さっきの一撃でほとんど致命だったんだけど。加えて全力の演奏とかやつちやつたもんだから……悪魔の霊格が保たなくなつたみたい」

「……」

「じゃあね、可愛いお嬢さん。ご静聴感謝します♪ マスターによろしくね」

「ごちらこそ。素敵な演奏をありがとう」

最後に笑顔を浮かべたラツテンは、敗北を認めて風と共に消える。

カラン、と落ちた笛を拾い上げると、教会の向こうからジンとレティシアが駆けてきた。

「飛鳥さん！ 無事でしたか!？」

「ええ。ちよつと髪が乱れてるけど、それぐらいよ」

「そうか、無事で本当に良かった。奴らの狙いを考えれば無体な仕打ちは無いだろうと思っていたが……いや、今はそれどころじゃない。詳しい説明はともかく、ステンドグラスを」

「ええ。ここに真実のステンドグラスがあるわ。あなたたちはそれを確保して」

「は、はい。でも飛鳥さんは？」

「魔王と戦いに行くわ。この子を連れてね」

飛鳥が指差すと、デインはズシリと動き出す。

驚くレティシアたちを尻目に、彼女は魔王の元へと急ぐのだった。

強大な2つの力の衝突は瓦礫の山を吹き飛ばし、一帯は焦土と化していた。

ヴェーザーは砕けた魔笛の先端を静謐な瞳で見つめて呟く。

「……おい、坊主」

「何だ？」

「お前、本当に人間か？」

「デジャヴを感じて、十六夜は肩を竦めた。

しかし彼の腕もボロボロだ。

拳は砕け、肉は内側から爆ぜている。

背中から倒れ込んでいることから、打ち負けたのは十六夜の方なのだろう。

だが腕一本と引き換えに敵の主力を叩けたならば、成果としては申し分ない。

ゆつくりと立ち上がり、十六夜は続行を促した。

「さ、続けようぜ。笛が壊れてもまだ戦えるだろ？」

「……いや、そうでもないらしい」

サラリ、とヴェーザーの身体が崩れ始める。

光の粒子となっていく両腕を見て、彼は皮肉げに舌打ちした。

「チツ。召喚の媒体が破壊されれば、そりゃこうなるわな」

「……消えるのか？」

「まあな。……あーくそ。くだらなねえ挑発なんぞに乗るもんじゃない」

「つれないことを言うなよ。こっちは楽しかったし、何より痛かったぜ？」

十六夜は右腕を押さえながら、脂汗を流して笑う。

本当なら今すぐ転げて喚き散らしたいほどの深手だが、そんな不恰好を彼の自尊心が許せるはずがない。

徐々に存在が希薄となっていくヴェーザーに、十六夜は踵を向け、

「じゃあな。何度も言うが、楽しかったのは嘘じゃねえよ。俺と真正面から殴り合える奴なんて、今までひとりも——と、いや。そういや出来そうな奴がひとりだけ居たな」
彼はふと、身近にいる黒髪の少年を思い出す。

いつかあの男とも全力の戦いをしてみたいものだ、十六夜は小さく笑うのだった。

「オイオイ、お前みたいな人間がまだいんのかよ。……まったく、せめてそいつが、お前よりかはまともな人間であることを願うぜ。……ま、達者でな」

ヤハハ！ と笑って去っていく十六夜。

見送ったヴェーザーはそつとひとり天を仰いだ。

「そうさ。お前みたいに傲岸不遜な人間は……前のマスターぐらいで十分さ」
遠ざかる少年の背に、在りし日の面影を垣間見る。

そんな執念が敗北を招いたのだと悟り、苦笑を浮かべて人知れず崩れ去ったのだった。

一際大きな震動が伝わった。

黒ウサギとサンドラは足を止め、互いに顔を見合わせる。

「今の揺れ、かなり大きかった」

「YES! どこかで決着がついたようですよ!」

好転していく戦況に喜色を浮かべる2人。

その一方で、黒い風を纏って上空に佇むベストは、脳裏で状況を整理する。

(ラッテンもヴェーザーも、倒されてしまったようね……)

沈みきった夕陽の方角を見つめ、少し、遠い目をした。

思えば自分のゲームメイクの甘さが招いた種だったかもしれないと、彼女は省みる。

時間稼ぎなど考えず、初めから彼らと共に勝負を仕掛けていたならば……ここまで苦

戦することもなかっただろう。

(破壊されていないステンドグラスは……残り58枚)

このまま魔道書が破壊されれば、彼女を神霊に押し上げている霊格も無くなる。

ただの悪霊に戻った彼女は、ホストマスター「主権者権限」さえも失うだろう。

ラッテンとヴェーザー。

成り行きで出来た主従関係とはいえ、自分に忠を尽くしてくれた、初めての大切な仲

間たち。

ペストはしばし彼らに黙待した後、

「……………止めた」

「え？」

「時間稼ぎはもう終わり。白夜叉だけを手に入れて——皆殺しよ」

刹那、黒き風は天を衝いた。

雲海を突き抜けた奔流は瞬間に雲を散らし、空中で霧散してハーメルンの街へと降り注ぐ。

「今までの余興とは違うわ。触れただけで、その命に死を運ぶ風よ……………！」

その言葉に、黒ウサギはウサ耳を逆立てた。

「や、やはり『与える側』の力！ 死の恩恵を与える神霊の御技ですか……………！」

上空から吹き荒れる死の風を避けながら、サンドラも戦慄く。

「ま、まずい！ このままじゃステンドグラスを探している参加者がッ！」

2人は慌てて街に視線を向けた。

辛うじて屋内に避難しているようだが、参加者を庇った『サラマンドラ』のメンバーが数人、死の風に吞まれて命を落とす。

その光景に、サンドラは奥歯を噛みしめた。

「よくも……『サラマンドラ』の同士を……!」

怒りで赤い頭髮が燃え上がる。

黒ウサギも覚悟を決めたように、懐から白と黒で彩られたギフトカードを取り出した。

(仕方ない……! こうなったら、勝負を仕掛けるしか——!)

しかし、彼女がギフトを発動させようとした瞬間。

視界の端で、今まさに黒い風へと巻き込まれようとしている参加者が映った。

『造物主達の決闘』の舞台にいた、樹霊コダマの少年だ。

(こ、この! 何でこんなタイミングに!)

少年の元へ跳びたいが、もう間に合わない。

彼を呑み込むかと思われた死の風は、

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

紅い鋼の剛腕に阻まれた。

命無き無敵の魔神は、吹き荒ぶ死の風をもとせずに少年を守る。

死の風を凌ぎきったティーンの上から、飛鳥が顔を覗かせた。

「今のうちに逃げなさい。ステンドグラスは後で処理すればいいわ」

「は、はい」

腰が抜けたようにへたり込んでいた樹霊の少年だが、すぐさま立ち上がって近くの建物へ逃げ込んだ。

飛鳥の無事を確認した黒ウサギは、歓喜の声を上げる。

「飛鳥さん！ よくぞ（ご）無事で！」

「感動の再会は後よ！ 前見て前！」

へ？ と振り返る黒ウサギ。

ペストの放った死の風が、彼女の目前に迫っていた。

「やらせるかッ！」

「余所見してんじやねえぞこの駄ウサギ！」

差し迫った死の風を、間一髪駆けつけた日向の拳と十六夜の蹴りが霧散させる。

その様子に、ペストは小さく眉をひそめた。

「ギフトを無効化するのが趣味なの？ あなたたち」

「おうともさ！ 実益を兼ねた良い趣味だろ！」

「ヤハハ！ 俺とも一戦交えてくれよ魔王様！」

死の風を霧散させた勢いで懐へ飛び込む2人。

同時に突き出した拳と蹴りを、彼女は初めて自らの両腕で受け止める。

建ち並ぶ建築物を粉々にしながら吹き飛ばすペスト。

サンドラはあんぐりと口を開けたまま、啞然と彼らの姿を見つめた。

「…………え、えーと？ あの人たち、ひとりはギフトを無効化して、もうひとりは砕いたように見えたけど」

「さ、さて？ 黒ウサギもあの御二人については知らぬことだらけでございしますが……」
黒ウサギも改めて目の当たりにし、そのデタラメ加減に舌を巻いている。

もしかして決着が着いたかなーと思つた刹那、幾千万の怨嗟の聲が、衝撃波と共に周囲の瓦礫を吹き飛ばした。

ペストは瞬時に傷を癒して服の解れを直し、日向と十六夜に微笑みかける。

「…………まあでも、どうやら所詮は人間のようね。この程度なら、死の風が効かずとも警戒するに値しない」

「何？」

「星も砕けない分際では、魔王を倒せないということよ」

ペストは無造作に腕を振った。

すると八〇〇〇万の怨嗟の聲が衝撃波となつて彼らを襲う。

それを再び無効化し、砕いた後、日向と十六夜は不敵な笑みで言葉を交わす。

「だ、そうだと十六夜？ どうやら俺たちは、星も砕けない分際らしい」

「カツ。おいおい、随分と素敵な挑発をしてくれるじゃねえか斑口リ。そういうことな

らこつちも……!」

「ちよ、ちよ、ちよつとお待ちください御二人共! 戦いたい気持ちですが、こ
こは作戦を尊重してください!」

慌てて止める黒ウサギ。

十六夜はむつと唇を尖らせた。

「……しようがねえな。で、どうすればいい? やると言ったのはお前だ。指示を出せ

黒ウサギ」

十六夜が鋭い瞳で催促する。

見つめ返す黒ウサギの瞳にも、強い光が宿っていた。

彼女は集結した主力を一瞥し、

「今から、魔王を討ち取ります。皆さんは魔王に隙を作って下さい」

「けど、あの風はどうする? このままで他の参加者たちの命が危ないぞ?」

日向の問いに、黒ウサギは白黒のギフトカードを口元に当てて微笑む。

「ご安心を! 今から魔王とここににいる主力——纏めて月までご案内しますよ」

は? という疑問の声は、刹那に消えた。

白黒のギフトカードの輝きと共に急転直下、周囲の光は暗転して視界を星が巡る。

温度は急激に下がり、大気が凍りつくほどの過酷な環境が彼らを襲う。

激しい力の奔流が収まり、目を開けて天を仰ぐ。

頭上には、箱庭の世界が逆様になって浮いていた。

石碑のような白い彫像が数多に散乱する月の神殿を見て、ペストは蒼白になって叫ぶ。

「チャ……」 チャンドラ・マール 「月界神殿」！ インドラ 軍神ではなく、チャンドラ 月神の神格を持つギフト……！」

「YES！ このギフトこそ、我々『月の兎』が招かれた神殿！ 帝釈天様と月神様より譲り受けた、『月界神殿』でございます！」

黒ウサギは満天の星と箱庭を誇るように両手を広げた。

神殿とは言うが、その名残のようなモノは白い石碑の彫像群だけだ。

彫像の結界の外に出れば、瞬く間に月面の過酷な環境があらゆる生物を死滅させるだろう。

「だ、だけど……！ ルールではゲーム盤から出ることは禁じられているはず……！」

「ちゃんとゲーム盤の枠内に居りますよ？ ただ、高度が物凄く高いだけでございます」

ペストは思わず絶句する。

つまりはハーメルンの街の頭上まで、天体を移動させたということだ。

「これで参加者側の心配は無くなりました！ 日向さんたちはしばし魔王を押さえてください！ 飛鳥さんはこちらへ！」

黒ウサギの要請に頷くと、早速サンドラは日向と十六夜へ向き直り、
「私が先陣を切る！ あなたたちは援護を——」

と、告げようとその瞬間、突如彼女の左右から、地砕きと共に嵐のような旋風が起こつた。

第三宇宙速度を遙かに超える速度で踏み出した2人は、瞬く間にペストの眼前へ躍り出る。

「さあ！ ラストゲームだ ブラック・パーチャー 黒死斑の魔王！”

日向の宣言に、ペストは全身から黒い風を放出して応えた。

「いいわ。全てのステンドグラスが発見される前に終わらせる……！」

「ハッ、やれるもんならやってみな！」

衝撃波を全身に食らいながらも突進する十六夜。

先ほどと同じように蹴りを入れるが、今度は軽く避けられる。

ヴェーザーとの連戦で想像以上に疲労が蓄積しているのもあるが、何より右腕が使い物にならないのが響いていた。

しかし一瞬でも隙を作れば十分だ。

回避したペストを待ち構えていたように、側面から日向が拳を叩き込む。

すでに黒い風での防御が無駄だと理解している彼女は咄嗟に両腕で防御をとるが、衝

撃を殺しきれずに月面へ叩きつけられた。

「くっ、この程度で……!」

瞬時に体勢を立て直すペストだが、途端に彼女へ荒ぶる炎弾が飛来する。

黒い風で阻んだペストは、攻撃の主を睨みつけた。

「……そう。あなたも居たんだったわね」

「『サラマンドラ』の同士の仇!」

サンドラは死の風の隙間を縫って轟炎を浴びせるが、ペストは瞬時に傷を癒す。

八〇〇〇万の群体神霊である彼女を一撃で倒すには、サンドラでは火力が足りないのだ。

「なるほどな! さっきの言葉は比喻でも何でもないってことか!」

「そうよ。私を打倒すると言うのなら、星を砕くに値する一撃を用意なさい」

「ハッ! 上等だぜ斑ロリ!」

双掌で高めた怨嗟と衝撃の渦を放つペスト。

日向と十六夜が先陣を切って無効化し、その隙にサンドラが轟炎を放つ。

日向たちが奮闘する中、黒ウサギはギフトカードから三叉の槍が描かれた紙片を取り出すと、そつと飛鳥に手渡した。

「……? 何、これ?」

「御静かに。これは『叙事詩・マハーバーラタの紙片』と呼ばれるギフトです。叙事詩はご存知ですか？」

「え、ええ。名前だけなら知っているわ。確か世界三大叙事詩のひとつでしょう？ 日本で例えれば桃太郎ぐらいには有名だと聞いたけれど」

黒ウサギは首肯で返す。

——『叙事詩・マハーバーラタ』。

最も有名なインド神話のひとつであり、『叙事詩・ラーマーヤナ』と並べて二大インド叙事詩とも言われる。

十万の詩節からなる、数々の伝承・神話を束ねた大長編叙事詩である。

紙片を飛鳥に握らせた黒ウサギは、作戦を説明する。

「この紙片から、インドラに縁のある武器を召喚します。しかし気をつけて下さいまし。この槍は強力な半面、ギフトゲーム中に一度しか使えないのです」

飛鳥の顔に緊張が走った。

「ま、待つて。もしかして私に使えというの？」

「YES！ 飛鳥さんはギフトの力を十全に発揮する才能が御座います！ 黒ウサギが隙を作るので、その槍を直撃させて下さい！ それでこのギフトゲームは勝利です！」

ぐつと黒ウサギが飛鳥の手を握る。

すると紙片は雷鳴と共に槍へ変わった。

仄かな輝きを纏うその姿は息を呑むほど眩く、飛鳥は軽くたじろいでしまう。

「帝釈天の神格が宿った槍……だけど私は、」

役割の重さとプレッシャーに表情を歪ませる飛鳥に、黒ウサギは明るく笑いかけた。

「大丈夫。ご自身をもっと信じてください。飛鳥さんの才能は黒ウサギが保証致します。それに今は、とつても強そうなお仲間がいるではございませんか！」

黒ウサギがディーンに向かって手を広げる。

無骨な鉄人形は、無言で静かに頷いた。

「……分かったわ」

覚悟を決めた瞳を向ける飛鳥。

黒ウサギも頷いて返す。

踵を返した彼女はもう一枚の紙片をギフトカードから取り出して、死の風の渦に飛び込んでいった。

飛鳥はその間に、ディーンにインドラの槍を渡す。

そこで彼女は一度だけ、躊躇するようにとんがり帽子の精霊を見た。

「この戦いが終わったら、生贄となった一三〇人の群体精霊も消える。そうならば一三一人目の群体であるあなたも消える。……本当にいいのね？」

「うん」

小さな頭を振って頷く精霊。

彼女が他の群体から離れて行動出来るのは、幾星霜の旅路の果てに高まった霊格が分裂したものだからだ。

精霊たちから一三人目と呼ばれていたのはそのためだろう。

しかしそれも、群体という特性があるからこそ維持できる奇跡。ハーメルンの魔道書が消えれば、彼女たちも消える運命なのだ。

飛鳥は苦い思いを噛み締める。

しかし彼らの覚悟を無下にするわけにもいかない。

彼女は真つ直ぐと、凜とした声で応じた。

「分かったわ。必ず、魔王を討ち取りましょう」

互いに頷く。

デインは何も語らず、強く槍を握り締めることで自らの意志を示すのだった。

最後の隙を作るため、黒ウサギは皆を追い抜いて飛び出した。

無謀な突撃に、サンドラは焦って声を上げる。

「だ、駄目だ黒ウサギ！ 何を考えて……!?」

「死の風を吹き飛ばします！ 皆さんは援護を！」

灰色の大地を蹴り、黒ウサギが駆ける。

ペストは苛立たしげに死の風を舞い上がらせて強襲した。

「あなたさえ倒せば……！」

「太陽に復讐を、でございますか？ ならばこそ、この輝きを乗り越えてござらんさい！」

黒ウサギが「マハーバーラタの紙片」を掲げる。

溢れた輝きは、緋色でも蒼い雷光でも無い。

それは正しくこの世を照らす絶対の光。

眩い太陽の輝きは彼女の身体を神々しく染め上げ、黄金の鎧を纏わせる。

強襲した死の風は太陽の光に焼き尽くされ、一瞬で霧散した。

「そ、そんな……!? インドラ 軍神にチャンドラ 月神にスリーヤ 太陽神……！ 護法十二天を三天までも操るなんて、

この化け物——!!!」

悲痛な叫びを上げるペスト。

彼女は大きく後退し、最低限の守りを固める。

黒ウサギは咄嗟に背後で控える飛鳥に叫んだ。

「今です飛鳥さん！」

黒ウサギの声を合図に、飛鳥は右手を翳して命令を下す。

「撃ちなさい、デイン！」

「DEEEEEEEeeeeEEEEEN!!」

紅い鋼の巨人が怒号を上げて投擲した。

飛鳥のギフトで威力を高めたインドラの槍は、千の天雷を束ねてペストを襲う。

黒ウサギに気を取られていた彼女は避ける間もなく貫かれ、月面高く打ち上げられた。

「この程度、なんかで……！」

迸る千の雷に焼かれるも、ペストはまだ抵抗する。

しかしインドラの槍が放つ天雷は直撃した後も衰えず、むしろ輝くように更なる雷を解放していく。

黒ウサギは肩で息をしながらも、勝利を確信したように断言した。

「無駄でございませよ。その槍は真正正銘、帝釈天の加護を持つ槍。太陽の鎧と引き換えに、勝利の運命ギフトを宿す槍なのですから」

天雷は千から万へ、万から億へと急速に光量を増していく。

衰えることを知らないインドラの槍は、敵を焼き尽くすまで止めどなく光を放ち続け

る。

——“太陽の鎧”と“必勝の槍”

『叙事詩・マハーバーラタ』の大英傑、カルナが手にしたと云われるギフト。

太陽神の息子であるカルナが、生来持つていた不死不滅の鎧をインドラに捧げること
で手に入れたのが、ただ一度のみの奇跡を宿す、穿てば必ず勝利する槍。

死神が“死”の恩恵を風に乗せて与えるというならば。

軍神が“勝利”の恩恵をもたらす武器が、この槍なのだ。

「そんな……私は、まだ……！」

「——さようなら。 ブラック・パーチャイ “黒死斑の魔王”」

飛鳥が別れの言葉を告げた刹那、一際激しい雷光が月面を満たす。

轟と唸りを上げた軍神の槍は、圧倒的な熱量をまき散らし、魔王と共に爆ぜたのだっ
た。

第23話 明日に希望を

——境界壁・舞台区画。

——“火龍誕生祭”運営本陣営。

魔王の仕組んだギフトゲームが幕を上げてから、10時間が過ぎようとしていた。

「よし！ 全員、ステンドグラスを掲げろ！」

「「おおっ!!!」」

ブラックパーチャ
“黒死斑の魔王”

との戦いが終わった後、避難していた参加者たちによつて舞台の捜索が再開され、すでに偽りの伝承であるネズミ捕りの男と、黒死病によつて倒れた者たちが描かれたステンドグラスは1枚残らず砕かれていた。

そして今、最後に残された真実の伝承——ヴェーザー河の描かれたステンドグラスが、参加者たちの手によつて一斉に天へと掲げられる。

“偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ”

その一文が成された直後、彼らの視界は割れるように開けた。

呆然としながらも周囲を見渡せば、数多の尖塔群とペンダントランプの灯火が見え

る。

黄昏時を彷彿とさせる街並みが、そこにはあった。

言葉が出せない参加者たちの前に、やがて霞の如く現れる白夜叉。

恥ずかしそうに頬を掻く姿は、外見相応の年に見えなくもない。

向き直り、言った。

「皆、よく戦ってくれたの。東のフロアマスターから礼と……謝罪を告げねばならんの。偉そうにふんぞり返っておきながら、私は終始封印されたままだった。いや、本当に申し訳なかったのう」

恥じ入る白夜叉に、しかし非難の声は皆無だった。

最強の『階層支配者』である彼女に寄せられる信頼は、この程度で揺らぐものではないのだろう。

白夜叉はお詫びの言葉を述べると、一転して優しげに微笑んで道を空けた。

「——故に、この言葉は此度の戦いの立役者である、この者にこそ相応しい」

白夜叉の背後からサンドラが前に出る。

彼女はしばし瞳を閉じた後、満面の笑みで告げた。

「……魔王とのゲームは終わりました。我々の勝利です！」

瞬間、参加者たちは爆発するように歓声を上げた。

マスターたちの言葉を聞いて、ようやく勝利を実感出来たのだろう。

呪いから解き放たれた者。

同士の命が救われて涙する者。

魔王の脅威が去ったことに安堵する者。

そんな彼らを温かく見回した白夜又は、参加者たちに号令を下す。

「傷ついている者にはすぐに手当を。無事な者は率先して手を貸してやるのだぞ。それらが終わったら……魔王を倒した功績の授与と、祝勝会を兼ねた誕生祭の続きだ！ 覚えのある者はドキドキワクワクソワソワしながら待つてるが良いぞ♪」

彼女の期待させるような言葉に、一層大きな歓声が上がる。

各コミュニティはこぞってそれぞれの分担につき、ゲームの後始末を始めるのだった。

——境界壁・舞台区画。

——赤窓の歩廊・時計塔頂上。

日向は白髪の少女を腕に抱き、見晴らしの良い時計塔の頂上へ足を運んでいた。

時刻は間もなく夜明け時だ。

地平線の空が徐々に白んでいくのを眺めつつ、日向は少女に問いかける。

「具合はどうだ？」

「もちろん大丈夫……ではないですね」

少女は苦笑気味に返答した。

「予想は出来てましたけど……やっぱり召喚の媒体となったハーメルンの魔書が消えた以上、私も元の世界へ帰されるみたいですよ」

まるでその言葉を裏付けするかのよう、彼女の姿が次第に希薄となっていく。

恐らくはこの世界に存在していられる時間も、そう長くはないのだろう。

ふと、日向は思い出したように尋ねた。

「そういうえば、まだ君の名前を聞いてなかったな」

「え？ わ、私の名前ですか？」

「ああ。教えてもらってもいいか？」

日向の要求に、少女はなぜか口ごもる。

顔を赤くして縮こまる彼女に、日向は首を傾げて疑問符を浮かべた。

「あれ？ どうしたんだ？」

「いえ、あの……何だかちよっぴり緊張しますね」

「いや、何でやねん」

思わず関西弁でツツコミを入れる。

「う〜」と悶えていた少女は、ようやく観念したように呟いた。

「……ユエ。ただのユエです」

「ユエ——か。良い名前だな」

「ほんとう……ですか？」

「ああ。確かとある言語だと、*ユエ* っていう意味もある言葉だな。響きも綺麗で、似合ってると思うぞ」

不安そうに見上げてくるユエに、日向は朗らかに笑って答える。

その言葉に安心したように息を吐くと、今度は彼女から日向へ問う。

「それじゃあ、次はお兄さんの番ですね。……逃げちゃダメですよ？　ちゃんとかわな

きやダメですよ？」

「あのな……そんなに心配しなくても、名前ぐらい普通に教えるよ」

日向は苦笑すると、改めて自身の名前を告げる。

「日向。天道日向だ」

「てんどう、ひなた……天道、日向」

決して忘れまいとするように、ユエは何度も日向の名前を復唱する。

しばらくして満足したように頷くと、

「えへへ……日向お兄さん」

「ん？ 何か言ったか？」

「ふふふ、何でもないですよ」

年相応の笑顔を見せるユエに、日向も同じく笑みを浮かべる。

その後も笑って会話を交わす2人。

やがて過ぎゆく時間を惜しむように、ユエは寂しそうな顔をした。

「……そろそろ、時間みたいですね」

「……そうだな」

ゆつくりと、彼女の身体が景色を透過し始める。

もはや完全に消えるのも時間の問題だ。

不意に、ユエは日向に尋ねた。

「お兄さんは、私がこの世界に召喚された理由について話した時のことを、まだ覚えていますか？」

「ああ、覚えてるよ」

日向は静かに首肯する。

ユエはどこか遠くを見つめるように話を続けた。

「あの時、私がこの世界に召喚されたのは、『イレギュラー』だって言いました。偶然に

偶然が重なったからこそ、私はこの世界に召喚されてしまったんだって。……でも今は、そうじゃない気がするんです」

「偶然なんかじゃ無かったと?」

「はい」

ユエは即答する。

「私はきつと、皆に導かれてこの世界に来たんだと思います。確証はないけれど、そんな気がするんです」

「……そうか。ユエがそう感じたんなら、きつと、そうなんだろうな」

「……はい」

ギユツと、ユエは自分の胸を握り締めた。

「だから皆には、『ありがとう』の気持ちでいっぱいです。皆のおかげで、お兄さんに会えたから」

「なら、俺もあの子たちお礼を言わないとな。あの子たちのおかげで、俺もユエに出会えた」

2人は互いに笑い合う。

そして最後に、ユエは日向に問いかけた。

「……また、会えますか?」

「ああ、会えるさ。きつとまた、すぐに会える」

日の光が、黄昏の街を照らし始める。

日向がその光に目を細め、再び視線を落とした時、すでにユエの姿は消えていた。代わりに手の中にあつたのは、彼女が目に見えていた白い布だけだ。

『約束ですよ？ お兄さん』

不意に、そんな言葉が聞こえた気がした。

日向は顔を上げると、ギョツと布を握り締め、

「ああ。約束だ」

温かに輝く太陽を見据えながら——確かに、そう誓ったのだった。

——境界壁・舞台区画・暁の麓。

——美術品出展会場。

参加者たちが祝勝会の準備を進めている中、飛鳥はひとり大空洞へと訪れていた。

最初にデインが展示されていた広場まで来た彼女は、最奥の隠し扉を開いて進み、デインを手にするためにギフトゲームを行っていた場所に出る。

その中心へ佇み、彼女はふつと呟いた。

「……ハーメルンの魔道書グリモアは消えたわ。これでよかったの?」

「はい。これで我々も、望む形で元の時代へ戻れます」

数多の声空洞に響く。

ハーメルンで犠牲になったとされる、一三〇人の精霊群。

飛鳥はしばし瞳を閉じ、覚悟を決めて問いかけた。

「ひとつだけ聞かせて。あなたたちが望む形での時間軸というのは?」

「……それを聞いてどうすると?」

「純粹な疑問よ。だって元の時間軸に戻れば、あなたたちは死ぬだけでしょ?」

控えめな声で彼らに問う。

飛鳥の疑問は当然だろう。

彼らはハーメルンの悪魔が呼び出される原因。

つまり、死を約束された御霊みたまなのだ。

箱庭で精霊として暮らすならまだしも、箱庭を出て行くというのは理解しがたい。

飛鳥は両手を広げ、笑顔で群体たちへ提示する。

「そんな恐ろしい場所に戻る必要は無いわ。箱庭に居場所がないなら、私たちのコミュニケーションに出来ない? ちょうど、あなたたちのような仲間が欲しかったところよ。一三一人も仲間が増えて皆喜ぶわ」

「——……、」

群体たちの気配が変わる。

敵意があるわけではない。

ただ、困惑している様子だ。

「……飛鳥。あなたの誘いはとても嬉しい。その言葉だけで、長かった旅が報われた」

「それでも、我々は戻らねばなりません。後の時代を紡ぐために」

「そんな優しいあなただから、どうか最後に聞いて欲しい。死者も神隠しも存在しない

——もうひとつの“ハーメルンの笛吹き”の可能性を」

群体たちは大空洞を輝きで満たし、“ハーメルンの笛吹き”の可能性を示す。

——1284年

ヨハネとパウロの日 6月26日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人

のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、

丘の近くの処刑場で姿を消した——

この碑文の、最後の解釈。

それは即ち——一三〇人の子供が新たな土地で、自分たちの街を造ろうとしたというもの。

親元を離れ、ヴェーザー河を下り、笛を吹きつつ、歌いながら未踏の地を目指した子供たち。

他の誰でも無い、自分たちで一から造り上げた、街という名のコミュニティ。そして笛吹き男とは、新たに造られた街のリーダー的存在だったという伝承。

「飛鳥。我々にも、帰らねばならないコミュニティがあるのです」

「1284年のあの日に」

「我々が旗揚げした、第2の故郷へ」

「……」

そう、と飛鳥は小さく呟いた。

彼らは飛鳥とは違い、全てを捨てて箱庭に来たわけではない。

むしろ箱庭という場所に、無理やり呼び出されて捕らわれていたのだろう。

飛鳥は諦めたように肩を落とし、力なく笑った。

「なら仕方ないわ。あなたたちの街造りが上手くいくように、箱庭から願ってます」

「ありがとう飛鳥」

「そんなあなただからこそ託せます」

「紅い鋼の巨兵・デインと——一三一人目の同士を！」

え？ という言葉は、激しい風と共に掻き消された。

解放された群体精霊の霊格は、徐々にひとつの人形を形成していく。

光の中から現れたのは、とんがり帽子の小さな精霊。

飛鳥に懐いていた、あの幼い少女だった。

消えた群体の声が反響する。

『我々が後の世代に授かる、開拓の功績をその子に授けました。私たちが箱庭に残せる、最後の生きた証。あなたに託します——』

それきり、大空洞から群体の気配は消えた。

残されたのは飛鳥の手の平で眠る、とんがり帽子の精霊だけだ。

眠たそうに目を擦った幼い精霊は、ゆっくりと身体を起こし、

「……あすかー？」

「……ええ。おはよう、メルン」

「めるん？」

「そう。あなたは『ハーメルンの笛吹き』の、正統な功績を継いだ地精。そして今から

——私たちの同士よ」

飛鳥の言葉に、んーと小首を傾げるメルン。

周囲を見渡し、ユラユラと頭を左右に揺らして考えた後、

「——はい！」

満面の笑みで、元氣よく返事をするのだった。

ゲーム終幕より48時間が過ぎた。

外では祝勝会を兼ねた誕生祭に加え、終日宴の席が設けられている。

数千人も的人员が魔王のゲームに捕らわれながら、ほんの僅かな犠牲で勝利を掴み取ったのだ。

功労者である「サラマンドラ」と「ノーネーム」には、惜しめない称賛の声が上がっていた。

今回のゲームに参加した者たちで、彼らを軽んじる者は最早ひとりも居ないだろう。日向と十六夜が考案した策は、ひとまずの成功を取めたのだった。

——一方の、舞台裏。

マンドラは宮殿の執務室でひとり、「サウザンドアイズ」の黒い封蠟が押された手紙を読んでいた。

書面に一通り目を通した彼は、ため息を吐いて苦笑する。

『全てが万事上手く進行し、魔王を撃退されましたこと、お祝い申し上げます。新生「サラマンドラ」が北の階層フロアマスター支配者としてご活躍されることを心より期待しております。』

追伸／星海龍王からお預かりした神珍鉄は、例の撒き餌たちに贈らせていただきましたか。

……流石は「サウザンドアイズ」。何もかもお見通しか。悪いことは出来んな」「何が？」

ガタン！ とマンドラは立ち上がる。

周囲には誰もいない。

だが聞き覚えのある声だった。

「まさか、＼ノーネーム＼の小僧……！ どこにいる!？」

「屋根裏にいるぞ!」

ズドガアン!

と天井を蹴破つて現れる十六夜。

どんな経路で潜り込んだのか、全身蜘蛛の巣だらけである。

ぺっぺつとホコリを払った彼は、やや軽蔑の嘲笑を浮かべて尋ねた。

「で、何が悪いことなんだ？ まさか、＼サラマンドラ＼が魔王を祭りに招き入れたことか？」

「……なつ、」

「いやいや、驚くところかそこ？ 普通に考えれば分かるだろ。連中は出展物に紛れてい

「たんだぜ？ それも一三〇枚もの笛吹き道化のステンドグラスを出展していた。主催者側が意図的に見落としてない限りは、不審に思うだろ？」

「違うか？ と目線で問う十六夜。」

「マンドラは背中に冷や汗を流しながら、帯刀した剣の柄を握っている。」

「十六夜は壮絶に面倒くさそうな表情で頭を搔くと、執務机に腰を下ろした。」

「ああいや、別に摘発しようとかそういうのじゃねえし。俺がここまで来たのは、ほら。なんだ。知的好奇心って奴だ」

「何……!?!」

「俺の主観だが。あんたは別にマンドラを殺そうとか、跡目が欲しいとかじゃねえんだよな。むしろこう……マンドラがしつかりすることで『サラマンドラ』を支えて欲しいとか。そういう意図が見てとれるというか。もしかしてシスコン？」

「……」

「は、冗談として。俺なりに考えてみたんだが……『階層支配者』の使命を思い出してピンと来た。要するに今回の誕生祭襲撃は、一種の通過儀礼みたいなもんじゃねえのかなーと」

『階層支配者』は、魔王の防波堤としての役目がある。

即ち、魔王とのゲームを乗り越えることで、周囲のコミュニティから一人前と認めら

れるという側面もあるのだ。

マンドラの手汗が滲むも、十六夜は無視して話を続けた。

「ルーキー魔王VSルーキーマスター？ いやいや、偶然にしちや出来すぎなくらい出来すぎだ。経験を積ませるといふ意味じゃこれ以上の相手はいない。これでサンドラは晴れて一人前の北のマスターとして認められるってわけだ！ いやホント、サラマンドラも安泰だな！」

「……………」

ぐつと歯噛みするマンドラ。

十六夜はスツと瞳を剣呑にし、

「……………おい、黙ってんじゃねえぞ。俺が笑っている内に話すのが身のためだぜ？ 魔王相手に、秩序の守護者がどうのと言って啖呵切った姿はどこにいった？」

剣の柄を壊れるほど強く握るマンドラ。

十六夜は机の上で上体を反らし、その姿を笑う。

「今回、死者は5名だけ？ ああ、よかったよなあ？ 死んだのがサラマンドラの連中！ これで俺の身内に何かあったらお前——サンドラもろとも潰してたぞ？」

「サンドラは関係無いッ！」

怒声を上げ、帯刀していた剣を引き抜くマンドラ。

十六夜は呆れたように肩を竦めた。

「あのなあ……もう一回言うぞ。俺は摘発しようとかそういうつもりはねえんだ。秩序なんて所詮、汚れながら守られるもんなんだろうからな」

「知ったふうな口をツ……!」

「ああ、所詮知ったかだ。だから俺は他人が悪事に加担しようが構わない。謀はかりごとも構わない。罪を犯すのも構わない。人を殺すのも好きにしろ。けど——やるといふなら覚悟しろ。」

「っ……!!」

「俺は俺の視界に入ったものを俺なりに、善悪付けて決めてきたわけだが。今回のケースは大概糞だ。関わる気にすらならねえんだが……そっちがやる気なら仕方ない。お前が俺に向けたその剣、振りかぶる暇も無いと思え」

ゆらり、執務机から立ち上がる。

その視線には明らかな侮蔑と憤りが込められていた。

「サンドラが関係無いだと？ テメエの身内が、テメエの通過儀礼なんで死んでんだ。知らぬ存ぜぬで通せると思ってるのか？ 祝勝会で偉そうに、参加者たちへ言ってたぜ？」

『誇りある戦いをした同士に喝采を!』とか。

『名誉ある死を遂げた同士に黙祷を！』とか。

ハッ、マジ笑わせんなよ。そういうのは事情を知っている連中だけが——」

「——知っていたとも」

何？ と十六夜は言葉を切る。

気づけばマンドラの握った剣は、小刻みに震えていた。

「知っていたと……言ったのだ。今回の一件を、魔王襲来を仕組んだのが、サラマンドラ」であることは、サランドラを除き、サラマンドラ、全員が知っている……!!! 知った上で、同士は命を落としたツ!!! 知った上で……恥じ入りながら、命を落としていったのだ」

「……」

彼を震えさせているのは怒りか、羞恥か。

切迫した表情でマンドラは十六夜を睨み返す。

「箱庭の外から来た貴様には分かるまい……! コミュニティの旗を! 名を! 名誉を守るという意味がツ!! 有力な跡目に裏切られ、長が病の床に臥せ……! 失墜寸前のコミュニティを支えるために命を賭すなどツ!! 箱庭の外の、ましてや人間なんぞに分かるはずがないツ!!!」

所詮、箱庭の外の部外者なのだ。

そう突き付けられて、十六夜は目を逸らして舌打ちした。

マンドラは激情を湛えながらも瞳を閉じ、剣を鞘に収め、

「……しかし、私がお前に勝てるとは思っていない。私は出来ない亜龍だ。百歳も下の妹にさえ劣る才しかない」

帯刀していた剣のベルトを解き、地面に置いた。

「気の済むようにしろ。貴様の怒りは真つ当なものだ。しかし、この場だけは……この命ひとつで許して欲しい」

「……」

はあ、と十六夜は毒気を抜かれたようにため息を吐く。

「別に、んなことどうでもいい。腹の底からどうでもいい。あー何？ 有力な跡目に裏切られた？ それってあれか。白夜叉が言ってた、長女のサラとかいう奴か」

「……そうだ。本来なら、成熟した力を持つ姉上が『サラマンドラ』を継ぐはずだった。父上が病に臥しさえしなければ、10やそこらのサンドラがマスターの座に就くなど……！」

あつそ、と十六夜は興味を失ったように背を向ける。

そう、継ぐはずだった。

しかしそうはならなかった。

ならばそれが全てなのだろう。

十六夜は特に言及しなかった。

「まっ、死んだ連中が承諾済みで死んだってんなら、それは俺の関与することじゃねえだろうよ。壊された街のことを抜きにすれば、損したのはお前ら。一番得したのは俺たちなんだ。わざわざ水を差す必要もない」

「……すまん」

出て行くこうとした十六夜は、謝罪の言葉で足を止める。

身勝手に頭を下げるマンドラに苛立ったのだろう。

踵を返し、獰猛な笑顔で話を切り出した。

「いや、そうだな。この機会にひとつ契約しておいてもらおうか」

「……………」

マンドラの顔が緊迫する。

どんな無理難題を押し付けられたとしても、この状況では断る権利がない。

十六夜は人差し指を立てて前に突き出し、壮絶に悪い笑みを浮べ、

「今回のはひとつ貸した。お前にじゃない。『サラマンドラ』へのな。——俺たちは今後、魔王と戦い続けていく。その中でもし、万が一にも俺たちのコミュニティに何かあった際……お前たちが、いの一番に駆け付けろ。それで許してやる」

返事を待たずに出て行く十六夜。

執務室の扉をぶつきらぼううに開け放った彼の背に、マンドラはひとり眩いた。

「——ああ、御旗に誓おう。その時こそ、『サラマンドラ』は秩序の守護者として駆けつける」と

——境界壁・舞台区画。

——『火龍誕生祭』運営本陣営。

ゲーム会場を取り囲むようにして設けられた観客席は、大勢の参加者たちで賑わっていた。

舞台の中央に立った黒ウサギは、花が咲いたような満面の笑みで宣言する。

「これよりギフトゲーム『造物主達の決闘』の表彰式を行いたいと思います。皆様はバルコニーにご注目下さい。それでは入場して頂きましょう！優勝コミュニケーション」
「ノーネーム」の春日部耀と、同じく天道日向の両名です！」

ワアツと大きな歓声が起こった。

盛大な拍手と喝采の中、日向と耀はバルコニーの中心に姿を現す。

2人は観客席に背を向けると、上座で佇むサンドラへ向き直った。

その様子を見て、黒ウサギが進行を続ける。

「優勝者である彼らにはなんと！ 此度の祭典の主催者ホストであるサンドラ様に、望む恩恵を進言する権利が与えられます！ 果たしてどのような恩恵が授与されるのか、黒ウサギもワクワクドキドキが止まりません♪」

彼女の言葉で、会場の熱気が一層高まる。

割れんばかりの歓声で溢れる舞台会場を背に、日向はこつそりと苦笑した。

「けど、あんまり優勝って実感は湧かないな」

「そうだね」

耀も隣で困ったように笑みを浮かべる。

当初は3つのコミュニティで総当たり戦を行うはずだったのだが、コミュニティ“ラッテンフエンガー”は事実上の棄権退場。

よってコミュニティ“ウィル・オ・ウィスプ”に勝利した日向たちが、暫定的に優勝という扱いになったのだ。

本来であればゲームマスターである“サラマンドラ”と対峙するという予定も、魔王襲来後の復興作業などでお流れとなってしまうていた。

「それにしても、本当に俺まで良かったのか？ 耀はともかく、俺はただのサポート役だス。」

「カッカッカ。気にするな。此度の表彰は、魔王討伐の功労者を讃える意味合いも含んでおるのでな。ま、ついでだついで」

「何だか、微妙にありがたみを感じないな……」

上座の横で呵々かかと笑う白夜叉。

そこでサンドラが静かに手を掲げると、会場の騒ぎがピタリと止んだ。

彼女は2人へ視線を向け、凜とした声音で語りかける。

「御二人共、優勝おめでとうございます。ゲームルールに従い、『サラマンドラ』は御二人が望む恩恵を進呈致します。何かご希望はありますか？」

サンドラの問いに、日向と耀は顔を見合わせる。

日向はどこか申し訳なさそうな表情を浮かべ、

「……なあ耀、本当にいいのか？」

「うん。私のことは気にしないで。日向のしたいようにすればいい」

「……ありがとな」

小さく笑って応える耀に、日向も苦笑して感謝を告げる。

その後顔を上げて居住まいを正すと、サンドラに向けて進言した。

「サンドラ様に進言します。私の望む恩恵は——」

日向の望みが語られる。

その内容にサンドラと、そばで控える白夜叉も少々も驚いたような顔をする。

やがて希望を言い終えた日向に、サンドラは慌てた様子で問いかけた。

「ほ、本当にそれでよろしいのですか？」

「はい。……もしかして不可能でしょうか？」

「い、いえ。希望自体は問題なく叶えられると思うのですが……」

どこか歯切れの悪い彼女に、首を傾げる日向。

そこに白夜叉が助け船を出す。

「サンドラが戸惑っておるのは、本当にその程度の望みで良いのかという意味だ」

「そんなに簡単なのか？」

「まあ、確かにそこまで容易というわけでもないが……仮にも望む恩恵を進言出来るといふ割には、いささかか勿体無いような気がするのう」

苦笑を浮かべて説明する白夜叉。

日向は腕を組んで考える。

「けど、他に叶えたい望みなんて無いしな」

「ふむ。なんなら2つでも構わんぞ？ 此度の魔王討伐の報酬とすれば文句も無かる

う。それほど飛び抜けた願いでない限り、私の方からも便宜を図るぞ？」

「そう言われても……」

うーん、と悩み続ける日向。

そこでふと、思いついたように問いかけた。

「そうだ、なあ白夜叉。『サウザンドアイズ』では、色んな種類のギフトを取り扱っているんだよね？」

「いかにも」

「ならもしかして——なんて商品もあつたりするかな？」

日向の疑問に、白夜叉は少しだけ考えるような素振りを見せる。

その後、小さく頷いた。

「うむ。あるぞ。現に上層の支店では、そう言った商品も扱っておる」

「よし、ならそれで頼むよ」

「良かろう。ではおんしの望む恩恵は、用意が出来次第私の方から手渡すでしょう。それで良いかなサンドラ？」

「は、はい！ あなたの望む恩恵、しかと承りました。北の階層支配者である『サラマンドラ』の御旗に誓つて、必ず叶えさせて頂きます」

サンドラが笑顔で宣言する。

その瞬間、再び歓声が舞台を揺らした。

北と東の共同祭典——『火龍誕生祭』は、こうして更なる盛り上がりを見せたのだつ

た。

——箱庭二一〇五三八〇外門区画。

——“サウザンドアイズ”支店。

それから1週間後。

東側に帰つて来た日向は、間もなく白夜叉に呼び出され、“サウザンドアイズ”の支店へと足を運んでいた。

サラサラと水路に水が流れ、桜に似た樹が立ち並ぶ街道を歩いていると、やがて向かい合う双女神の紋が描かれた看板が見えてくる。

視線の先では今日もまた、割烹着姿の女性店員が竹ぼうきでせっせと店前を掃いていた。

日向は歩み寄り、朗らかに笑って挨拶を告げる。

「どうも、おはようございます」

「あ、はい。おはようございます——」

カチン。

と営業スマイルで振り返った女性店員は、日向を見るなりまるで凍ったように動きを

止めた。

いつもと違う反応に、日向は首を傾げて問いかける。

「あの、どうかしましたか？」

「……えっ？ あつ、いえ！ ななな、何でもありません！ どどど、どうぞ中へお入り下さい！ オーナーが私室でお待ちです！」

ふと我に返った女性店員は、慌てて日向を店内へ促す。

実は以前に日向を叩いてしまつて以来、そのことを酷く後ろめたく思っている彼女であつた。

いつもなら入店時に大なり小なりお小言を貰つていたのだが、それすら無いことに違和感を覚えつつも日向は素直に暖簾をくぐる。

そのまま和風の廊下を進み、縁側にある白夜又の私室の前に辿り着いた。

日向はそこで足を止めると、閉め切られた障子の向こうに声を掛ける

「おーい、白夜——」

「お兄さんー！」

……る前に、和室の中から何者かが障子を開いて飛び出してきた。

日向は慌てて抱き止めつつ、自分の腹部に顔を埋めている人物に向かって話しかける。

「はは。久しぶりだな、ユエ」

「はい！ お久しぶりですお兄さん♪」

日向に飛びついた人物——ユエは、満面の笑みで顔を上げた。

「目の調子はどうだ？」

「バツチリです！ お兄さんの顔も良く見えます！」

日向を見上げて嬉しそうにはしやぐユエ。

空を閉じ込めたかのような澄んだ青い瞳には、確かに日向の姿が映っていた。

その様子を微笑ましげに眺めていた白夜叉は、私室の中から声をかける。

「ふむ、良く来たの。おんしの望む恩恵、これでしかと授けたぞ」

「ああ、ありがとう白夜叉」

——そう。

日向がサンドラと白夜叉に望んだ恩恵。

ひとつは、異世界からユエを正規に再召喚すること。

そしてもうひとつは——彼女に新たな光を授けること。

これこそが、あの時日向が進言していた願いだっただ。

「一応、おんしに与える恩恵という名目だったのでな。その娘の希望もあつてか、立場上はおんしに隷属という形になっておる」

「そうなのか？」

「はい。よろしくお願いします」

ユエはペコリと頭を下げる。

その姿に日向も微笑むと、

「ああ、よろしくな」

そう言つて彼女の頭を優しく撫でた。

えへへ、と嬉しそうにはにかむユエ。

そこでふと、日向は気づいたことを尋ねてみる。

「そう言えば、前と服装が変わつてないか？」

「あ、はい。白夜叉様が下さいました」

クルリと回り、ユエは笑顔で答える。

目の前の彼女の服装を例えるなら、恐らくミニスカの着物という表現が一番しっくりくるだろう。

白を基調とした着物に、これまた白い帯を腰元に巻いており、後ろで大きなリボンのように結ばれている。

年相応にはしゃぐユエの説明に、白夜叉は誇らしげに小さな胸を張つて答えた。

「ふふん。懐の広い私からの親切な贈り物だ。心して受け取るが良いぞ」

「で、本音は？」

「ユエちゃんにミニスカの着物を着せたかった！」

二秒で前言を覆す白夜叉。

そんな彼女に日向は苦笑し、ユエは隣で不思議そうに小首を傾げているのだった。

その後。

ユエを連れて本拠に戻った日向は、早速“ノーネーム”の面々に彼女を紹介することにした。

「と、いうわけで。この子が皆に話していたユエだ」

「初めまして、ユエといいます。ふつつか者ですが、これからよろしくお願いします」

ペコリ、と丁寧に辞儀したユエは、顔を上げると花が咲いたように笑う。

最初に応えたのは黒ウサギだった。

「YES! こちらこそよろしくお願ひするのですよユエさん♪」

彼女に続いて、飛鳥と耀も挨拶を返す。

「話は日向君から聞いているわ。私は久遠飛鳥よ。これからよろしくねユエちゃん」

「私は春日部耀。よろしく、ユエ」

「はい！ 黒ウサギさんも飛鳥さんも耀さんも、皆さんよろしくお願いします！」
その様子に、そばで控えている十六夜はヤハハと笑って口を開いた。

「ま、仲間が増えるのは良いことだ。そうだろ御チビ様？」

「はい。我々『ノーネーム』は、ユエさんを新たな同士として歓迎します」

柔和な笑みで答えるジン。

こうしてユエは、晴れて『ノーネーム』の一員となったのだった。

——箱庭二一〇五三八〇外門区画。

——『ノーネーム』農園跡地。

互いに自己紹介を終えた一同は、農園跡地でメルンへ土地の修復を頼んでいた。

主力メンバーはもちろん、子供たちも胸を躍らせるように彼女の活躍を期待していた

……が。

「むりー！」

ブンブンブンブン！

と激しく左右へ首を振るメルン。

水が涸れ、土壌が廃れ、砂と砂利しかない土地を前に、彼女は一目で匙を投げた。

飛鳥は困った表情でメルンに問う。

「……無理？」

「むりー！」

即答である。

地精である彼女がここまでハッキリとした態度をとる以上、やはり余程の霊格を持つ者でなければ厳しいのだろう。

飛鳥は申し訳なさそうに皆へ頭を下げた。

「ごめんない……期待させるようなことを言つて」

「お、お気になさらないでくださいまし！ また機会はありますよー！」

「そうだよ飛鳥。また違うギフトゲームで頑張ればいい」

しよんぼりした飛鳥を励ます黒ウサギと耀。

そんな中、十六夜は農園の砂利を一握りし、ふっとメルンへ尋ねる。

「なあ、極チビ」

「ごくちび？」

「そ。極めて小さいメルン」だから略して極チビ。それでもしもだが……土壌の肥やしになるものがあつたら、それを分解して土地を復活させることは出来るか？」

その提案に、日向も納得したように相槌を打った。

「なるほど。確かに『ノーネーム』には廃墟の木材やら、本拠の周りの林がある。これまで使い道が無かった資材でも、土地の肥料としてなら十分に活用出来るだろう」

「土壌を耕すなら、私でも力になれると思います！」

ふんすつ、と両腕に力を込めるユエ。

そんな彼らの提案に、メルンはおお？ としばし考える仕草を取る。

零からではなく、土壌を耕すための素材が他にあるというのならばあるいは――

「……できる！」

「ホント!?!」

「かもー！」

ガクツ、と飛鳥はやや右肩下がりに気が抜けた。

しかし試す価値はあるらしい。

ギフトカードを取り出した飛鳥は、デイーンを召喚して命令する。

「デイーン！ すぐに取り掛かるわよ！ 年長組の子も手伝いなさい！」

「「「「分かりました！」」」」

「DeN」

短く無骨な返事のデイーンと、元気よく飛び出していく子供たち。

飛鳥はそれを見送り、彼らが帰ってくるのを待つ。

地精として独立出来るだけの靈格を得たメルンは、はしやぎながら飛鳥の顔に跳び付いた。

そんな2人の姿に、日向は朗らかに笑って声をかける。

「何というか、2人は本当に仲が良いな」

「ふふ、そうね。箱庭に来るまで知らなかったけど、私って結構子供を可愛がるのが好きみたい。……それに、」

ふつと飛鳥の目が遠くなる。

箱庭よりも遙か彼方を映す瞳でポツリと、

「……私、本当は姉妹が居る予定だったの。だからかもしれないわ」

「……そっか」

日向はそれだけ答えた。

そう、姉妹がいる予定だった。

けど、そうはならなかった。

ならこの話はこちらで終わるべきなのだろう。

日向はそれ以上の言及をしなかった。

大きな巨人と戯れながら走り回る子供たちを見つめ、飛鳥は悪戯っぽくメルンを撫でる。

「さ、忙しくなるわよメルン！ 早く土壌を復活させて、みんなでハロウインをするのだもの。あなたには人一倍頑張ってもらおうわ」

「はい♪」

飛鳥の期待に、元気よく返すメルン。

まだまだ先のことだろうが、いつかこのコミュニティでハロウインをする日が来るだろう。

飛鳥が故郷に残してきた、小さな未練。

“Trick or Treat!!” と言える日を夢見て、明日の希望に胸を馳せるのだった。

第3章 そう……巨龍召喚

第24話 南側の収穫祭

冴え冴えとした満月が浮かぶ夜だった。

そこは周囲を竹林に囲まれた、とある静かな湖の畔。

夜風に踊る竹の葉の音色を楽しみながら、日向と黒ウサギは湖畔の岩場に腰掛けていた。

「風流だなあ、黒ウサギ」

「風流ですなあ、日向さん」

のほほんとした雰囲気でお話する二人。

その様子はさながら麗らかな春の日差しの下、縁側で湯飲みを手に寄り添い合う仲睦まじい老人夫婦のようである。

のほほんとした雰囲気、日向は再び口を開く。

「ほくと、風流だなあ、黒ウサギ」

「風流ですなあ……って、違いますよ日向さんっ!？」

シャキン！ とそれまでの緩んだ空気から急転直下、ウサ耳を逆立てて立ち上がる黒ウサギ。

「こんな風にのんびりとしている場合ではありません！ こうしている間にも、制限時間は一瞬と迫っているのですよ!?!」

ブンブンと両腕を振りたくって訴える黒ウサギだが、日向はふっと物悲しげな顔をして、

「あ、そうか。黒ウサギは俺との月見は嫌なんだな……」

「へ？ あ、いえいえ！ もちろんそんなことは無いといいますが黒ウサギが言いたいので、そういうことではなくてですね——」

「冗談だ」

「たちの悪い冗談はやめてくださいお馬鹿様っ!」

スパアーン！ と静かな夜にハリセンの快音が響き渡る。

日向はすりすり自分の頭を撫でながら、苦笑して黒ウサギに謝った。

「ははは、悪い悪い。けど、そんなに心配するなって黒ウサギ。これでもちゃんと考えるからさ」

日向はそう言つて手元に視線を落とす。

彼の手には一枚の羊皮紙が握られており、月明かりで淡く文面が照らし出されてい

た。

『ギフトゲーム名 “物語の祖”』

・プレイヤー一覧 “ノーネーム” 天道日向

・ゲームマスター “竹取物語” かぐや姫

・クリア条件

以下の文章を読み解き、物語を完結させよ。

—文章—

かぐや姫を手にするには五つの方法がある。

其の一、龍の首の宝珠を用いて、五色の光りを放て。

其の二、四つの鉢を合わせ、砕けぬ意志を証明せよ。

其の三、燃えぬ鼠の衣を纏いて、焦れぬ思いを示せ。

其の四、鳴き声の群れから貝を探し、命の線を結べ。

其の五、金と銀の枝を折り、夢色の郷を彷彿させよ。

正しき物語を紡ぎし時、かぐや姫は汝のものとなるだろう。

しかしゆめゆめ忘れることなかれ。

彼女には、未だ許されざる罪があることを。

彼女に罪がある限り、真の自由は訪れないことを。

願わくば、彼女に月の導き手があらんことを。

・敗北条件

満月が沈むまでに参加者側が勝利条件を満たさない場合。

参加者側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・勝利報酬

主催者は勝利した参加者側に ホスト “天ノ羽衣” と あまのはごろも “非時香果” ときじくのかくのこのみ を譲渡する。

主催者は勝利した参加者側の内一名に、該当する者が死亡するか、あるいは今後百年間に渡り隷属する。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

『竹取物語』印』

日向に宥められた黒ウサギは再び岩場に座り直すと、しゅんとウサ耳をへによらせ
た。

「むう。ですが今回の機会を逃してしまえば、もう他に日向さんが参加できるギフト

ゲームがないのですよ。うう、それもこれも、黒ウサギが至らぬばかりに……」

気落ちする彼女を励ますように、日向がぼんぼんと頭を叩く。

「気にするなつて。そもそもこれは、別に黒ウサギのせいってわけでもないだろう?」

「ですが……」

「あーもーじれつたい」

尚も言い募ろうとする黒ウサギだったが、そこで日向がおもむろに彼女の頬を両手で摘まむと、むによーんと左右に引つ張つた。

「ふあ、ふあにふるんれすかひいふあたはん」

「あのなあ黒ウサギ。そうやって俯いてばかりいると、見える勝機も見えなくなるぞ?」

「だ、だつふえ」

「まだ言うか」

「あうあうあう」

むによーん、むによーんと更に連打。

これには流石の黒ウサギも観念した。

「わ、分かりまひた分かりまひた! 黒ウサビがわるかつたれす!」

「そうか分かつたか——だが許さん」

「ふえー!?!」

素直に謝ったのにもかかわらず続行する気まんまんの日向にびっくり仰天する黒ウサギ。

結局、黒ウサギのほっぺが開放されたのは、もうしばらく経ってからのことだった。

「もうっ、酷いですよ日向さんっ」

未だにひりひりする自分の頬を撫でながら、涙目で抗議する黒ウサギ。

日向は「悪い悪い」と苦笑を浮かべつつ、

「ま、そうだな。折角白夜叉からゲームを紹介してもらったんだ。もう少し本腰を入れてやってみるか。だから黒ウサギも元気出せ、な?」

岩場から立ち上がってぐっと伸びをした日向は、振り返って朗らかな笑顔を黒ウサギに向ける。

その表情をしばし見つめた後、黒ウサギは急にはしーん! と一度自分の頬を叩いてから、決意を固めたように拳を握って顔を上げた。

「YES! 黒ウサギも、精いっぱい応援するですよ!」

「よし、その意気だ」

揃って意気込みを新たにする二人だが、そもそも、どうして日向がこのギフトゲームに参加することになったか。

事の起こりは、数日前へと遡る。

北側における、ブラック・パーチャイ“黒死斑の死神”との死闘から一ヶ月が経ったある日のこと。

この日、“ノーネーム”の中核を担うメンバーは本拠の大広間で一堂に会していた。中央に置かれた長机には、上座から順にジン、十六夜、日向、飛鳥、耀、黒ウサギ、レティシア、ユエ、そして年長組の筆頭として選ばれたリリが座っている。

このような会議の際、“ノーネーム”ではコミユニティの席次順に上座から並ぶのが礼式だ。

十六夜と日向の実績は極僅差ではあるものの、先の戦いで神格を得た悪魔——ヴェーザーを討ち取った戦果から、十六夜が二席目となっていた。

四席目に座る飛鳥は若干不満そうではあるものの、特に異論はない様子。むしろ問題は、上座に座るジンである。

端的に言ってガチガチだった。

ゴーゴンの威光による石化もかくやと言わんばかりに凝り固まった彼を、十六夜がヤハハと笑ってからう。

「おいおいどうした御チビ？ 俺より良い位置に座ってるのに、ずいぶんと気分が悪そ

うじゃねえか」

「だ、だって、旗本の席ですよ？ 緊張するに決まってるじゃないですか」

ギョツとロープの裾を握るジン。

情けないようではあるが、しかし無理からぬことでもあった。

そもその前提として、上座に座るのは「コミユニティのために試練へ参加できる者」、というのが箱庭の共通認識だ。

それに加えて、組織への貢献、献身、影響力なども求められる。

その点、今日ここに至るまでろくに戦果らしい戦果を挙げられていないジンが引け目を感じてしまうのも、ある意味では当然のことだった。

しかしそんな弱腰の彼を、珍しく厳しい口調で日向が諫める。

「気持ちにはわかる。けどなジン、お前は俺たちの旗頭として、もつと堂々とするべきだ」

「で、ですが……」

「いい加減慣れろよ御チビ。お前は自分の意志で「ノーネーム」の名刺代わりになるって決めたんだろうが。俺たちの名声は全て「ジンⅡラッセル」の名の下に集約されて広がっている。そのお前が上座に座らないでどうすんだよ」

そこで黒ウサギが起立して二人に同意した。

「YES！ 御二人の仰る通りでございます！ 現にこのひと月で届いたギフトゲーム

の招待状は、全てジン坊ちゃんの御名前で届いております！」

ジャジャン！ と黒ウサギが取り出したるは、それぞれ違うコミュニティの封蠟が押された三枚の招待状。

それも驚くべきことに、内二枚は参加者でなく来賓客として招かれたものなのだ。旗印を持たない「ノーネーム」としては破格の待遇だろう。

心から幸せそうに、黒ウサギはぎゅつと三枚の招待状を抱きしめる。

「苦節三年……とうとう我らのコミュニティにも、招待状が届くようになりました。それもジン坊ちゃんの御名前前で！ ですからどうぞ、胸を張って上座へお座りくださいな！」

にぱつとひまわりのように笑って上座を勧める黒ウサギ。

しかしジンの表情には陰りが差す。

「けど、それは——」

——それは、僕の戦果じゃない。

彼がその言葉を紡ぐ前に、飛鳥が口を挟んだ。

「それで？ 今日集まった理由は、その招待状についてなの？」

彼女の問いかけに、ジンは慌てて首肯する。

「は、はい。それも勿論あるのですが、今日は皆さんにコミュニティの現状をお伝えして

おきたいと思ひまして、こうして集まつて頂きました。……リリ、黒ウサギ。報告をお願ひ」

「かしこまりました」

「ひゃ、ひゃひつっ！」

ジンは一転して明るい表情を見せ、黒ウサギとリリへ報告を促す。

それに対して黒ウサギは手慣れた様子で対応するが、対照的に末席のリリは舌を噛んで涙目だ。

自慢の二尾も、今は力なく伏せっている。

「リリちゃんっ！ ファイトっ！」

そんな友人の小さな背中を後押しすべく、ぐつと両手を握ってユエがこっそりと声援を送る。

声援を受けたリリはこくりと頷くと、気を引き締めて報告を始めた。

「えっと、備蓄に関しては、当面は問題ありません。最低限の生活を営むだけなら、今後一年間は問題ないかと思われます」

「へえ？ そりやまたどうして急に？」

「ひと月前に十六夜様たちが倒した『黒死斑の魔王』が、推定五桁の魔王に認定されたからです。『フロアマスター』に『階層支配者』に依頼されていたこともあり、規定報酬が跳ね上がったと白

夜叉様からご報告を頂きました。これでしばらくは、皆お腹いっぱい食べられますよ。パタパタと嬉しそうに二尾を振るリリだが、隣に座るレティシアが少し眉をひそめてたしなめた。

「リリ。はしたないことを言うのはやめなさい」

「……え？ あつ、す、すいませんっ」

自分の発言が少々露骨だったことに気がつき、リリはかあつと顔を真っ赤にしながらかわてて頭を下げる。

日向は苦笑してそんな彼女をフォローした。

「まあまあレティシア。リリたちが喜んでくれるから、俺たちだって頑張れるんだ。俺はリリがそう言ってくれて嬉しいよ」

「……まったく、主殿は甘いな」

言葉とは裏腹に、レティシアは柔らかな微笑みを浮かべる。

「えへへ。良かったね、リリちゃん」

「う、うん。あ、ありがとうございませす日向様っ」

より一層赤みの増した顔で、リリが照れながら日向に感謝を述べる。

その様子を微笑ましそうに見つめながら、耀が続きを促した。

「推定、つてことは、本拠を持たないコミュニティだったんだ？」

「は、はい。本来ならたった三人のコミュニティが五桁に認定されることは滅多に無いことらしいんですが、『黒死斑の魔王』が神霊だったことや、ゲームの難度も考慮した、と白夜叉様は仰っていました」

初めて耳にする箱庭の基準に、日向は興味を引かれた。

「へえ、ゲームの難易度も桁数に関係するのか?」

「YES! ギフトゲームとは本来、神仏が恩恵を与える試練そのもの。箱庭ではそれらを分かりやすく形式化したものをギフトゲームと呼び、ゲームの難易度はそのまま己の格を表すのです」

ふむ、と一同は黒ウサギの話を傾聴する。

曰く、箱庭のコミュニティの格付けは、単純に強力な個人が複数所属しているからといって上がるものではないらしい。

最下層である七桁を除けば、それぞれの階層に求められる条件が存在するのだそう
だ。

「本拠の階級を上げる方法は数多くございますが、主な例を挙げるなら——」

“六桁の外門を越えるには、階層フロアマスター支配者が提示した試練をクリアしなければならない

”。

“五桁の外門を越えるには、六桁のコミュニティ

を三つ以上勢力下に置き、その門に旗を飾った上で、百以上のコミュニティが参加するギフトゲームの主催者ホストをしなければならぬ”

「……とまあ、こんなところでしようか」

前者の六桁の外門は、参加者プレイヤーとしての力量を求められる。

後者の五桁の外門は、主催者ホストとしての力量を求められる。

即ち六桁の魔王と五桁の魔王とでは、使用する“主催者権限”ホスト、マスターの質と規模がまるで違うのだ。

ピツと人差し指を立てた黒ウサギは、いつになく真面目な顔で補足する。

「六桁と五桁の魔王では雲泥の差でございます。六桁の魔王が相手ならば、力のある個人や組織力があればクリア可能ですけども、五桁以上の魔王はそうもいきません。五桁以上は“主催者”ホストとしての力も認められた猛者たちです。皆さんが戦った“ブラック・パーチャイ
黒死斑の魔王”もルーキーでこそあれ、ギフトゲームは太陽の星霊を封印するほど凶悪なものでした」

十六夜も珍しく真剣な面持ちで同意する。

「そうだな。もしペストが練達の魔王だったなら、俺たちは審議決議でゲームが中断された時点で詰みだった。黒ウサギが審議決議を行うことを見越していたのなら、見事と言わざるを得ない。……ま、交渉の場ではお粗末なもんだったけどな」

ハツと鼻で笑い飛ばす十六夜。

リリは話を本題へと戻す。

「えつと、それでですね。五桁の魔王を倒すために依頼以上の成果を上げた皆様には、金銭に加え別途に恩恵を授かることになりました」

「あら、本当なの？」

「YES！ これについては後ほど通達があるので、ワクワクしながら待ちましょう！」
おお、と日向たちは喜色のこもった声を上げる。

新たなギフトがいかほどのものかは不明だが、仮にも魔王を打倒した報酬なのだ。

きつと相当「面白い」ものに違いない。

ジンも満足そうに頷くと、リリに最後の報告を求めた。

「それじゃありり。最後に、農園区の復興状態の報告をお願い」

ジンが話を振った瞬間、リリはばあつと表情を輝かせ、今までにないほどの猛烈な勢いで報告を始めた。

「は、はい！ 農園の土壤はメルンとティーン、それにユエちゃんたちが毎日毎日頑張ってくれたお陰で、全体の1/4はすでに使える状態です！ これでコミュニティ内のご飯を確保するには十二分の土地が用意できました！ 田園に整備するにはもうちよつと時間がかかりますけど、葉菜類、根菜類、果菜類を優先して植えれば、数ヶ月後には

成果が期待できると思っています！」

ひよこん！ と狐耳を立てて満開の笑顔の花を咲かせるリリ。

あの荒れ果てた土地が、ほんの一部とはいえ、たつた一ヶ月で復興を成し遂げてみせたのだ。

飛鳥が十六夜と日向に次いで三席目に座っているのは、この農園に対する功績が大きい。

水源である水樹こそ日向と十六夜が入手したギフトだが、土地の復興に必要な地精の恩恵と、それを耕す巨大な労力は彼女が居たからこそ獲得できたものである。

リリと同じく農園の復興に携わっているユエは、彼らの働きを称賛した。

「メルンもディーンもとっても頑張ってくれていますよ。特にディーンは本当に働き者で、飛鳥さんがゲームに参加する時以外はずっと土地の整備をしていてくれるんです。私が土壌を耕すときも、メルンが分解した若木や材木なんかを休まずに混ぜてくれたりして、凄く助かっているんですよ」

「ふふふ、あの子たちを褒めてくれてありがとう。だけどユエちゃんだって、毎日休まずに土壌を耕しているんでしょう？ 貴女も十分立派だわ」

「い、いえ、私はそんな……」

飛鳥に褒められて頬を染めて照れるユエ。

小さくなった彼女は、そこでチラリと日向に視線を向ける。

日向はそんな彼女と目が合うと、そっと優しく笑って頷いてみせた。

それを見たユエは大きく表情を輝かせ、

「あ、ありがとうございます！」

と、元気に飛鳥へとお礼を述べた。

大広間全体が明るい雰囲気の中、黒ウサギはここぞとばかりにとある話題を提示する。

「さあ！　ここで本日の本題でございます！　復興が進んだ農園区に、特殊栽培の特区を設けようと思うのです！」

「「特区？」」

揃って首を傾げる日向たちに、黒ウサギが満面の笑みで「YES！」と答える。

「ありていに言えば霊草・霊樹を栽培する土地ですね。例えば」

「マンネンタケとか？」

「マンドラゴラとか？」

「マンドレイクとか？」

「マンイーターとか？」

「YES！　つていやいや最初の日向さん以外全員おかしいですよ！」

“人喰い華”な

なんて物騒な怪植物を子供たちに任せるわけにはいきませんっ！ それにマンドラゴラやマンドレイクみたいな超危険植物も黒ウサギ的にアウトですっ！」

「クソっ！ 俺もボケるべきだった！」

「そこ悔しがるどころですか!？」

痛恨の極みと言わんばかりに拳を強く握り締める日向に、黒ウサギは驚いてツツコミを入れる。

一方で、耀はこてんと愛らしく小首を傾げ、

「……じゃあ、ラビットタイターとか?」

「なんですかその黒ウサギをダイレクトに狙った嫌がらせは!？」

うがーッ!! とウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

レティシアは一向に話が進まないことに辟易し、率直に告げた。

「つまり主たちには、農園の特区に相応しい苗や牧畜を手に入れて欲しいということだ」
「牧畜って、山羊や牛のような?」

「そうだ。都合がいいことに、南側の」

龍角ドラコ・グライフを持つ驚獅子” 連盟から収穫祭の招待状が届いている。連盟主催ということもあり、収穫物の持ち寄りやギフトゲームも多く開催されるだろう。中には種牛や希少種の苗を賭けるものも出てくるはず。コミュニティの組織力を高めるには、これ以上ない機

会だ」

なるほど、と納得する日向たち。

黒ウサギは「龍角を持つ鷲獅子」の印璽が押された招待状を開くと、内容を簡単に説明する。

「今回の招待状は前夜祭からの参加を求められたものです。しかも旅費と宿泊費は「主催者」が請け負うという「ノーネーム」の身分では考えられない破格のVIP待遇！場所も南側屈指の景観を持つという「アンダーウツドの大瀑布」！境界壁に負けないほどの迫力がある大樹と美しい河川の舞台！皆さんが喜ぶことは間違いございません！」

黒ウサギが胸を張って紹介する。

彼女がここまで強く勧めてくるのは珍しい。

日向たちは顔を見合わせると、揃って悪戯好きそうな笑みを浮かべた。

「ほっほう？」 「箱庭の貴族」のお墨つきなんて、これはもう期待せずにはいられないな。さぞかし壮大な舞台に違いない。……飛鳥はどう思う？」

「あら、そんなの当然じゃない。だってあの「箱庭の貴族」がこれほど推している場所なのよ？ きつと目も眩むような素敵な場所に違いないわ。……そうよね春日部さん？」

「うん。これでガツカリな場所だったら……黒ウサギはこれから、箱庭の貴族（笑）だね」

「箱庭の貴族（笑）?!? 何ですかそのお馬鹿っぽいボンボン貴族なネーミングは?!? 我々『月の兎』は、由緒正しい貞潔で献身的な貴族でございますっ!」

「献身的な貴族つてのがもう胡散臭いけどな」

最後に十六夜がヤハハと笑ってからかうと、黒ウサギは拗ねたように頬を膨らませてそっぽを向いた。

思わず苦笑いを浮かべたジンは、コホンと咳払いして皆の注目を集める。

「方針については一通りの説明が終わりました。……しかし、一つだけ問題があります」
「問題?」

「はい。この収穫祭は二十日ほど開催される予定で、前夜祭を含めれば二十五日。およそ一ヶ月にもなります。この規模のゲームはそうそう無いですし、もちろん最後まで参加はしたいのですが……かといって長期間コミュニティに主力が居ないのは何かと心配です。そこでレティシアさんと共に一人残って欲し」

「嫌だ」

「だよな……」

即答だった。

あまりに予想通りの返事に日向も苦笑を浮かべるが、気持ちとしては同感だ。こんな面白そうなチャンスは滅多にない。

出来ることなら、全日参加して楽しみたい。

しかしこればかりはジンも譲れない。

コミュニティが力をつけ始めた今だからこそ、防備も固めておかねばならないのだ。ならばと、彼は折衷案を提示する。

「ではせめて、日数を絞らせてもらえませんか？」

「というと？」

「前夜祭を三人、オープニングセレモニーからの一週間を四人、残りの日数を三人——このプランでいかがでしょうか？」

ムツ、と顔を見合わせる日向たち。

耀が挙手して質問する。

「そのプランだと、二人だけ全部参加できることになるよね？ それはどうやって決めるの？」

「それは——」

当然、席次順で決める、と言いかけたジンだが、咄嗟に口を噤んだ。

箱庭の組織としては常識かもしれないが、それが外界から来た彼らの常識とは限らな

い。

どうしたものかと迷っていると、不意に十六夜が軽薄な笑みで提案した。

「なら前夜祭までの期間で、誰が何日行くのかをゲームで決めるってのはどうだ？」

「へえ？ 面白そうだな。ルールはどうする？」

「そうだな。〝前夜祭までに、最も多くの戦果を上げた二名が勝者〞——この辺りが妥当じゃねえか？ 期日までの実績を比べて、収穫祭で一番戦果を挙げられる人材を優先する。……これなら、不平不満はないだろ？」

確かに、それなら条件は五分と五分である。

他の三人も承諾した。

「よっしゃー！ その勝負受けて立つー！」

「ええ、それで行きましょう」

「うん。……絶対に負けない」

こうして四人の問題児たちは、〝龍角を持つ鷲獅子〞主催の収穫祭への参加を賭けて、ゲームを開始したのであった。

——と、ここでようやく話が冒頭に帰結するのである。

そして肝心の、現時点での日向の戦果成績だが……意外や意外、ぶつちぎりの最下位だった。

それも驚くべきことに、あの十六夜と同率で、である。

“ノーネーム”の席次ツートップの二人が、まさかの最下位争い真っ只中であった。しかし、これにはちゃんとした理由があるのである。

腰掛けた湖畔の岩場で両足をぶらぶらとさせながら、黒ウサギは盛大なため息を吐いた。

「はあ……。まさかジン坊ちゃんの評判と共に、日向さんや十六夜さんの戦果まで広まっていたなんて。今回は白夜叉様が特別にゲームを取り付けてくれたからいいものの、今後はもつと参加できるゲームが減っていくかも……」

そう、そうなのだ。

話を簡単にまとめると、“ノーネーム”の評判と共に日向と十六夜の戦歴まで周囲に伝わってしまったことから、彼らはゲームへの参加を著しく制限されてしまったのである。

結果として、ついには“サウザンドアイズ”の白夜叉しかゲームを紹介できない状況にまで陥ってしまったのだ。

だが、それも無理からぬことではある。

これまで人智を超えた強敵を幾度となく打ち負かしてきた彼らの実力は、最早最下層の範疇を逸脱している。

「主催者」側にも生活がある。

大敗すると分かっている参加させる訳にはいかないだろう。

「ま、彼の実力差が大きすぎる場合、それは対等なゲームじゃなくただの搾取になるからな。仮にゲームを強制しようものなら、それこそガルドの二の舞だ。せつかく上げた評判も地に落ちる。ならいつそ勝てるゲームを避けて器の大きさを示した方が、コミュニケーションにとっても有益だ」

「それはそうでございますけど……しかしこのゲームの恩恵は、逆転を狙えるものなのですか？」

「どうだろうか？ まあ、それはクリアしてから」

お楽しみだな——と、日向が続けようとしたその時。

突如、それまで静謐だった湖上に灼熱の炎が現出した。

球体状に渦巻くそれは、やがて闇夜を切り裂くように爆散する。

舞い散る火花が大輪となって咲き誇る中、唐突に声が木霊した。

「わっはっはっは！ 私！ 参！！ 上！！」

それは静かな景観におよそ似つかわしくない、とてもハイテンションな声だった。

唾然と事態の推移を静観していた日向たちは、ハツとして声の主を注視する。

「……えーつと、女性の方、ですよね？」

「ああ、女性だな」

そう。

燃え盛る炎の中から現れたのは、妙齡の女性だった。

腰元まで伸びる艶やかな濡れ羽色の長髪に、やや幼さを残しながらも美麗に整った成人の顔立ち。

女性にしては身長が高く、着重ねた紅い着物を押し上げる上下の肉付きは豊満だが、対照的に腰回りは見事なくびれを描いている。

目にした誰もが認めるだろう、絶世の美女がそこに居た。

「ふふふ、決まった……」

目を閉じてやり切ったように悦に入っている女性に、黒ウサギがおずおずと話しかける。

「あ、あの、どちら様でしょうか？」

「よくぞ聞いてくれました！ 私の名は」

「かぐや姫？」

「あるえっ!？」

言い切る前に暴露され、心底驚いた表情を見せる女性——もといかぐや姫。

しょんぼりと肩を落とした彼女は、ふよふよと力無く湖上を漂って日向たちの前までやって来た。

「はい。私が『主催者』のかぐや姫です……」

明らかにテンションがガタ落ちした、まったく覇気の無い様子で自己紹介するかぐや姫。

日向はやや困ったふうに頬を掻いた。

「その、ごめんな？ 悪気はなかったんだが……」

「あ、ううん、別にいいよ。でも、どうして私の名前がわかったの？」

「『契約書類』にばっちり書いてあるし……」

「あ、そうだった……」

日向の指摘で更にどよんと落ち込むかぐや姫。

この瞬間、日向と黒ウサギは直感した。

（なるほど、天然か）

（天然さんですね）

二人は瞬時にアイコンタクト、互いにこくりと頷き合う。

「いや、それにしても、最初の登場は凄かったな！ かなりキマツてたぞ！」

ぴくつ、とかぐや姫が反応する。

「そうですね！ 黒ウサギなんてもう思わず見惚れてしまいました！」

ぴくぴくつ、とかぐや姫が更に反応する。

彼女は遠慮がちに顔を上げ、ぽつりと問いかけた。

「……ほんとう？」

「ああ、本当だ！」

「もちのろんでございます！」

日向と黒ウサギの全力のヨイシヨに、かぐや姫はぶるぶると震えると——

「い、いやだなーもー！ そんなに褒められた照れちゃうよー！」

ようやく最初の元気を取り戻した。

ほっと安堵の息を吐き、日向は改めて質問する。

「けど、どうして今頃出てきたんだ？ もうゲームが始まってから結構な時間が経つてるのに」

「あ、あーつと、それはね……」

かぐや姫は露骨に視線を逸らすと、人差し指同士をつんつんとしながらバツの悪そうに答えた。

「い、いや、実は最初から姿を見せるつもりだったんだけどね？ まあ、ちよつと寝過ご

したとか何というか……」

「……それって、仮にも『主催者』としてどうなんだ？」

「うぐつ。だ、だからね!? お詫びと言ってはなんだけど、そっちのウサギちゃんも一緒にゲームに参加していいよ!」

「ほえ? 黒ウサギもでございますか?」

意外そうにウサ耳を傾ける黒ウサギ。

今回、彼女は審判として同行しているので、本来なら日向の手助けとしてゲームに参加することはできない。

が、『主催者』であるかぐや姫が認めるなら話は別である。

「でも、本当にいいのか? お詫びにしてはそっちのリスクが高い気がするが……それだけ自分のゲームに自信があるか?」

「ううん、違うよ。私としては、むしろ早く誰かにこのゲームをクリアしてもらいたいんだ」

「へ? どういうことですか?」

かぐや姫は苦笑して事情を説明する。

「いやあ、実はね、このゲームはとある人からの、私に対するおしおきなんだ」

「おしおき……」

揃ってオウム返しをする日向と黒ウサギ。

かぐや姫は「うん」と頷いた。

「ちよこつとへマをやらかしちゃってね？ 私的にはそこまでのことでも無かったんだけど、その人つてば予想以上に立腹だったらしくて。怒り心頭のその人いわく『いい加減堪忍袋の緒が切れた。しばらく下層でその馬鹿な頭を冷やしてこい』つてことですよ。誰かが試練をクリアするまで、この空間に閉じこめられているんだよ」

「つまり私たちがこのゲームをクリアすれば、かぐや姫さんは晴れてお許しを頂けると？」

「うん！ 私はクリア方法を知らないし、許されてるのは精々参加者の指定ぐらいなんだ。だからウサギちゃんを参加させるのも、ある意味では私のためでもあるんだよ」

「なるほど、そうだったんですか」

ぴよこぴよことうサ耳を動かして納得する黒ウサギ。

しかし日向は考えるように腕を組む。

「んー？ なあかぐや姫。君はこのゲームがクリアされたら、許してもらえらつて言われたのか？」

「そうだよ？ まあ私もほんのちよこつとだけ後ろめたさがあったからさ、仕方なくその条件を呑むことにしたんだ。だから君たちがこのゲームをクリアしてくれれば、私は

大手を振って元の居場所に帰れるんだよ」

そう笑顔で話すかぐや姫。

しかし日向は「んんー？」とより深く首を傾げた。

「どうしたんです日向さん？」

「いや、ちよつとこの『契約書類』に書いてある勝利報酬が気になったんだが……」

「『勝利報酬?』」

日向は「ああ」と言つて手元の『契約書類』に視線を落とす。

「この内容を見る限り、勝利報酬の一つがかぐや姫の隷属になつてるだろ? てことは、仮にゲームをクリアしても、かぐや姫は元の居場所には帰れないんじゃないか?」

「……………あつ」

虚を突かれたように絶句する二人。

先に復活したのは黒ウサギだった。

「そ、そうです! 日向さんの仰る通りなのですよ!」

「しまったー! ハメられたー! もつと『契約書類』をしっかりと見とくんだったー!」

かぐや姫は打ちのめされたように地面に両手をつく。

そして流れるように体育座りに移行すると、膝を抱えて地面にのの字を書き始めた。

「うう、酷いよう。本当に悪気は無かったんだよう。何もそこまでマジ切れしなくてもいいじゃんかよう……」

涙目で愚痴るかぐや姫に同情しつつ、日向と黒ウサギは話し合う。

「ですが、単なるお仕置きというには少々度が過ぎているのではないのでしょうか？ 隷属とはすなわち、主に身も心も完全に支配されることと同義です。そのためいかに酷い扱いを受けようとも、抵抗する権利すら与えられません」

「まあ、その辺りは最低限考慮されてるんじゃないか？ 現に隷属期間は主が死亡するか、あるいは今後百年に限定すると書かれている。参加者の人格についても、たぶん白夜叉が選定役を担っていたんだろう」

なるほど、と得心する黒ウサギ。

そう言えばこのゲームは白夜叉からの紹介だった。

彼女ほどの慧眼ならば、参加者の善し悪しを見定めることも容易いだろう。

「とにかくにも、まずはゲームをクリアしないと。かぐや姫が望むなら、その後に隷属を解消すればいい」

「……ううん。私は君たちについて行くよ」

首を横に振って、かぐや姫は日向の申し出を断った。

「……よろしいのですか？」

「うん。今帰ってもまたすぐに追い出されそうだし、もう少しほとぼりが冷めるまで待つことにするよ。それに、君たちは良い人そうだしね」

はあく、と深々とため息を零すかぐや姫。

その様子に苦笑しながら、日向は気を取り直してゲーム攻略に意識を向ける。

「よし。そうと決まれば話は早い。さっさとこのゲームをクリアしよう」

「YES! 早速謎解きに取りかかるのですのよ!」

「うん! こうなったら私も頑張つて考えるよ!」

気合いを入れて奮起する黒ウサギとかぐや姫。

しかしそこで日向は待ったをかけて、

「ああいや、謎解きならもう終わってる。だから後は、文字通りゲームをクリアするだけだ」

「へ?」

あっけらかんと、そう言つてのけた。

出鼻をくじかれた女性陣は慌てた様子で日向へと詰め寄る。

「え!?! 本当!?! 本当にもう謎が解けたの!?!」

「ああ。たぶんいけると思うんだが……もしもこれが正解なら、このゲームの制作者は本当にクリアさせるつもりがあつたのか?」

「え？ どういうことですか？」

日向の発言に小首を傾げる黒ウサギだが、日向は余計な考えを振り払うように頭を振った。

「いや、とにかく実際に確かめてみないと分からないな。黒ウサギ、ちよつと耳を貸してくれ」

「？ はいな」

びよんつ、と手招きする日向のそばに跳び寄つて、黒ウサギはしゃきつとウサ耳を伸ばす。

そのまま日向が何事かをひそひそとウサ耳打ちすると、

「え!？」

黒ウサギがびつくりしたように聞き返した。

「ほ、本当にその様な方法で、この試練をクリア出来るのですか!？」

「ああ、恐らくな。丁度舞台も整ってるし、やってみてくれるか？」

「は、はい！ 了解しました！」

日向の言葉を信じ、気合いを入れる黒ウサギ。

彼女が懐から白黒のギフトカードを取り出したところで、状況を把握していないかぐや姫が騒ぎ出した。

「ねえ、何？ どういこと!? 私にも教えてよー! 仲間外れは寂しいよー!」

「悪い悪い。心配しなくても、直ぐに分かるさ」

「え？ それってどういう……」

かぐや姫が再度疑問を呈する前に、準備の整った黒ウサギが輝くギフトカードを夜空に掲げる。

「それでは! 御二人を月へと御案内します!」

そんな彼女の声が響いた刹那——日向たちの視界は反転した。

「——えっ!?!」

変化が収まった直後、目前に広がる光景にかぐや姫は驚愕を露わにした。

見れば、いつの間にやら静謐な湖と竹林は消え失せ、代わりに石碑のような白い彫像群が散乱する白亜の大地が広がっていたのだ。

体感温度は急激に下がり、頭上には箱庭の世界と共に数多の星々が廻っている。

月の神殿を誇るようにポーズを決めた黒ウサギが、ぱちりとウインクして一同を迎えた。

「ようこそ!」

// チャンドラー・マハール
月界神殿へ!

「ち、〃月界神殿〃!?! ってことは、ここは月の上ってこと!?!」
 「正解だ」

かぐや姫の予測を肯定する日向。

彼女はすかさず日向に詰め寄った。

「ねえねえ、一体どうしてこんな場所に来たの!?! これも謎解きの一環なの!?!」

キラキラと瞳を輝かせ、興奮気味に尋ねるかぐや姫。

どうやらこの後の展開が楽しみで仕方がないようだ。

黒ウサギも気になるのか、期待するような視線を日向へと向けている。

ぐいぐいと顔を近づけてくるかぐや姫を押しとどめながら、日向は苦笑して話を始めた。

「まあまあ、ちゃんと順を追って説明するよ。まずは、そうだな。〃契約書類〃に書いてある、〃以下の文章を読み解き、物語を完結させよ〃の一文についてだ」

ふむふむと興味津々に聞き入る二人。

「文章の序盤に出てきた、かぐや姫を手にすることが可能とされる五つの方法。それに加えて、〃正しい物語を紡ぎし時、かぐや姫は汝のものとなるだろう〃という一文。この二つの文面から解釈するに、一見するとこの五つの中から正しい方法を選択することが、このゲームのクリア条件——すなわち、〃物語の完結〃を導くための糸口になると

考えられる」

「……うん。確かに、まずはそう考えるのが妥当だよね」

「ああ。けどこれらは、実は全て謎解きの真相を隠すためのフェイク。いわゆるミスリードってやつだ」

「ミスリード……で、ございますか？」

小首を傾げる黒ウサギに、日向は静かに首肯する。

「ああ。黒ウサギは竹取物語の内容を知ってるか？」

「は、はい。日本最古の物語として有名なお話ですので、簡単なあらましぐらいは承知しておりますが……」

「よし、なら詳しい内容は省くとして……作中において、かぐや姫はある日、五人の男性から同時に求婚を受ける。それを断るために、かぐや姫がそれぞれに無理難題を課すんだが……抽象的な表現に置き換えられているものの、冒頭の五つの方法はそれらを差していると考えられる」

当時、都でも絶世の美女と評判だったかぐや姫の元には、連日多くの男性たちから婚姻を求める声絶えなかったという。

その中でも有力な五人の男性にかぐや姫が提示した条件というのが、指定した品を彼女の前に持参すること。

そしてそれらの内訳は、それぞれ「龍の首の珠」「仏の御石」「火鼠ひねずみの裘きゆう」「燕つばきの産んだ子安貝」「蓬萊ほうらいの玉の枝」という、いずれも入手困難な珍しい代物ばかりであったとされている。

「いやー、そんなこともあったっけなあ。でも結局は、誰も課題を達成することが出来なかつたんだよね。持ち寄られる物は全て贋作偽作紛い物。皆私をお嫁さんにしたくて一生懸命なのは分かるんだけどさ、もうちよつと誠意つてものを見せて欲しかったよ」
やれやれと肩を竦めるかぐや姫に、思わず苦笑する日向と黒ウサギ。

気を取り直して、日向は説明を続ける。

「そう。かぐや姫の言う通り、結果的に誰もこれらの難題を成し遂げられた者はいなかつた。即ち、五つの方法全てにおいて、かぐや姫を手にするには出来なかつたんだ」
その瞬間、黒ウサギはハッと気づいたようにウサ耳を伸ばす。

「正しき物語を紡ぎし時、かぐや姫は汝のものとなるだろう」。

もしも今の日向の言葉を念頭にして、この一文の謎を読み解くのであれば——
「——真の結末は別にある、ということですか？」

「そうだ。そして文面には、その考えが正しいことを暗喩する表現も含まれている。ここで重要なのが文章の後半部分だ」

しかしゆめゆめ忘れることなかれ。

彼女には、未だ許されざる罪があることを。

彼女に罪がある限り、真の自由は訪れないことを。

願わくば、彼女に月の導き手があらんことを。

「この四つの文章が、真の結末へと至るヒントになっているのさ」

ここまで来れば、黒ウサギにも解答への道筋が見えてくる。

一方のかぐや姫は、うんうんと頷きながらも何が何やら分かっていないようだった。

「うん。つまり、どういこと？」

「ああ、結論を述べるとだな。『かぐや姫の罪』、『真の自由』、『月の導き手』――

これらは全て、竹取物語の結末。かぐや姫が育ての親である翁たちと別れて、月の都へ

と帰る場面を示唆していると思われるんだ」

――御伽噺おとぎばなし『竹取物語』の結末。

月の世界にて何らかの罪を犯したかぐや姫は、罰として穢れの多き地上へと追放される。

そして幾年かの年月が過ぎた頃、彼女の罪が償われたとして、月の世界から迎えがやってくるのである。

彼女を渡すまいとした翁たちの抵抗も虚しく、かぐや姫は空飛ぶ車によつて月へと帰ってしまうのだ。

その際に愛する翁たちに残した物が、
あまのはごろも 天ノ羽衣とまじくのかくのこのみ と 非時香果ときじくのかくのこのみ という不死の
 妙薬であつたとされている。

「あー。実は私、その人たちことはあんまり覚えて無いんだよねえ」

「ええ!?! 大切な育ての親だったのにですか!?!」

「いやー、何というかね。確かに今の話を聞くと、胸の真ん中辺りがなんだかチクリと痛むんだよ。だけどね、私はその翁つて人たちに対して、ほとんど何の感情も湧いてこないんだ」

かぐや姫の言葉に、信じられないと言った様相を浮かべる黒ウサギ。

その会話を聞いていた日向は、そつと今の話に補足を入れる。

「一説ではかぐや姫が月へと帰る際、そばにいた天女に羽衣を着せてもらったところ、それまで抱いていた人間の心が消えてしまったとされている」

「え?」

「うん。あれは人間を何かしら別種の存在へと変える力を持っているとされているんだ。多分、強い心を持っていればどうにかなるんだろうけどね。私の場合はきつと……自分から受け入れたんじゃないかな。その時の私がどんな気持ちだったのかは分からないけれど……想いが枷かせになることもあるからね」

——どうせ離ればなれになる運命なら、全てを消し去ってしまった方が幸せだと、当

時の彼女は思ったのかもしれない。

しみみりとなった雰囲気を払拭するように、かぐや姫は明るく笑って場を和ませた。

「うん！ だからね、君たちも『天ノ羽衣』を人間に使わせちゃ駄目だよ！ 実際にと

うなるかは分からないけれど、それで誰かが不幸になるのは悲しいからね」

「……そっか。優しいんだな、かぐや姫は」

「うえっ!? そそ、そんなこと無いよう！ もうっ、お姉さんをはからかつちやいけないんだよ！」

顔を真っ赤にして狼狽するかぐや姫。

そんな彼女を見て、日向と黒ウサギは微笑ましい表情を浮かべた。

「さて、とまあそう言うわけで。恐らくこの謎の解答に繋がる『正しき物語』とは、俺たちが月の導き手となり、かぐや姫を月へと帰すこと”で成されるはずだ。実際の月の都とは異なるが、月に帰るといふ行為そのものが罪の清算を意味するのなら、広義的にはこれでも物語の筋道は通るだろう。まあ今回の罪に関して言えば、悪戯のお仕置きっていうお粗末な内容だったけどな」

「よ、余計なお世話だよ！ それで、結果はどうなのウサギちゃん!」

「YES! ただ今箱庭の中枢に確認するので、少々お待ちください!」

黒ウサギが瞳を閉じ、ウサ耳をピクピクと動かし始める。

その様子をそばで見守りながら、かぐや姫はこっそりと日向にお礼を述べた。

「……あのさ、さつきはありがとね。私のことを気遣ってくれたんでしょ？」

「別に礼を言われるほどのことじゃないさ。何にせよ、これでゲームがクリア出来ればいいんだけどな」

「……ううん、きつと大丈夫だよ。そんな気がするからね。私の勘は良く当たるんだよ？」

「そうか？　なら、かぐや姫は」

「ん、かぐやで言いいよ。それより、君の名前を教えて欲しいな。なんせ、これからご主人様になるかもしれない人の名前だからね」

どこか嬉しそうに話すかぐや姫に、日向は苦笑を浮かべながらもはつきりと答える。

「日向。天道日向だ」

「天道日向……うん。あつたかそうで良い名前だね」

「そうか？　まあ、それじゃあ改めて——」

その時、黒ウサギが満面の笑みで宣言した。

「箱庭からの報告が届きました。……見事！　ギフトゲームクリアです！」

日向は朗らかに笑って、かぐや姫と言葉を交わすのだった。

「これからよろしくな、かぐや」

「うん！ こちらこそよろしくね、ご主人様！」

第25話 地域支配者

かぐや姫のギフトゲームから二日後。

この日、日向、ユエ、リリの三人は、貯水池と農園区を結ぶ水路の点検を行っていた。この二日間、日向は取りたてて新たな戦果を挙げようとはせず、日中はもっぱら子供たちと共に農園区の復興作業へと勤しんでいた。

本日も午前中の作業はすでに終わり、他の子供たちは一足先に本拠に戻って昼食の準備の真つ最中だ。

「へえ。それじゃありりの家系は、もともと農園を預かる一族だったんだな」
道中、リリの話に耳を傾けていた日向は、納得したように相づちを打つ。

「はい！ だからこうしてコミュニティのお仕事が出来るのはとっても嬉しいんです！
ご飯だつて、毎日美味しく食べられます！」

ひよこん！ と元気よく狐耳を立てて、本当に嬉しそうに話すりり。
自慢の二尾も左右へパタパタと大忙しだ。

「ふふふ、良かったねりりちゃん」

「うんー」

ユエとリリの仲良し二人組は、顔を見合わせて笑い合う。

そんな中、ふとリリは農園に続く雑木林を見つめ、そつと胸元で両手を組んだ。

「……本当に、皆様には感謝しきれません。荒れ果てた農園を見る度に、私たちの世代で土いじりは出来ないだろうなあつて……ずっと諦めていましたから」

泥だらけの小さな手を、愛おしそうに握るリリ。

そんな彼女の姿を微笑ましそうに見つめながら、日向はぽん、とその優しく頭に手をのせて、

「なら、これからは腕の見せ所だな。リリが作る美味しいご飯を期待してるぞ？」

「私も精いっぱい手伝うから、一緒に頑張ろうね！」

「……はいー」

二人からの声援に、リリは愛らしいたんぽぽのような笑顔を咲かせた。

その後、点検を終えて本拠へ戻る道に出ると、そこで偶然ディーンの右肩に腰掛けた飛鳥が通りかかった。

「あら日向君。農園の世話はもう終わったの？」

「ああ、ひとまずな。飛鳥は何をしてたんだ？」

「廃墟の家屋をバラして整備し直していたの。これまでは農園区の方を優先してきたけ

ど、居住区だっていつまでも放置してるわけにはいかないでしょう?」
なるほどな、と日向は納得して頷く。

「お疲れさん」

「デイーンもお疲れ様!」

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

ユエの労いに重厚な雄叫びで応えるデイーン。

そんな巨躯の紅い鉄人を、飛鳥はむっと眉をひそめてたしなめた。

「デイーン、何度言ったら分かるの。戦ってるとき以外は叫ぶの禁止と言ったでしょう?」

「……Den」

素直に頷くデイーン。

その様子がどことなく姉に叱れる弟のようで、日向たちは思わず顔を見合わせて苦笑する。

「あら、三人とも何を笑っているの?」

「いや、ちよつとな」

曖昧に笑って誤魔化す日向に首を傾げながら、思いついたように飛鳥が提案した。

「これから本拠に戻るなら、ついでに乗せて行ってあげましょうか?」

「いいのか?」

「ええ」

「サンキュー。じゃあお言葉に甘えて」

日向は飛鳥の了承を受け取ると、ユエとリリを抱えてディーンの左手に跳び乗った。

「二人共、落ちないようにしっかりと掴まってるんだぞ?」

「はい♪」

「は、はいっ!」

ユエが迷わず日向の左腕に抱きつくと、つられてリリもぎゅつと反対の右腕に抱きついた。

飛鳥は日向たちが同乗したことを確認すると、改めてディーンへ指示を出す。

「行くわよ、ディーン」

「Den」

ディーンは単眼の頭を小さく縦に振って、重鈍な動きで歩き出す。

しばらく四人で和やかに会話していると、ふと脇にある小道から十六夜が姿を現した。

「何だ、えらく大きな足音がするかと思ったら、ディーンに乗ったお嬢様たちか」

「十六夜君こそこんなところで何を……って、どうしてそんなにびしょ濡れなの?」

「まあ、ちよつと野暮用でな」

素つ氣ない返答に首を傾げる飛鳥。

一方で日向には思い当たる節があつたのか、デイーンの上から問いかけた。

「その様子だと、上手くいったみたいだな」

「ああ。ま、それなりに楽しめたぜ？」

思わせぶりな笑みを浮かべた十六夜は、軽く跳躍して飛鳥とは反対側のデイーンの肩へと跳び乗った。

「失礼するぜ」

「失礼するなら降りなさい」

「じゃあ失礼しない」

「ならどうぞ。……それで、さっきのやり取りから察するに、何か成果があつたのかしら？」

「おう。何とか間に合つたつてところだな」

「となると、あとは耀だけか」

噂をすればなんとやら。

十六夜の登場から間を置かず、日向たちの頭上から強い旋風と共に耀が降ってきた。

「皆、今帰るところ？」

「ああ。耀もか？」

「うん。ねえ飛鳥、私もディーンの上……失礼していい？」

「ええどうぞで」

「おいコラお嬢様」

十六夜が抗議するが、飛鳥はしたりでそっぽを向く。

耀は我関せず抱きつくようにディーンの上へと寝そべった。

「日向も十六夜も、何か成果あったの？」

「ああ。それなりにな」

「俺も上々だぜ。まあ期待してろよ」

ヤハハ！ と十六夜は腕を組みながら軽快に笑う。

そう、と耀は呟くと、それきり何も言わず、静かにディーンの上で脱力した。

その様子を少しだけ疑問に思った日向たちだったが、疲れているのだらうと思い、それ以上の追求はしなかった。

その後もディーンの上の歩みに揺られながら、彼らは本拠への帰路に就くのであった。

昼食をとった後、日向たちはいつぞやのように本拠の大広間へと集まっていた。

言わずもがな、この一週間に渡って取り組んだゲームの勝敗を決するためである。

なお、ユエとリリは家事全般の取り仕切りに戻ったため、この場には列席していない。問題児たちは各々の戦果を報告し、ジンとレティシアが審査役を務める。

そこでふと、日向が気づいたように問いを発する。

「あれ？ 黒ウサギはいないのか？」

「ああ、先ほど『サウンドアイズ』に向かつてな。この場は私たちだけで執り行う」

「審査基準は聞いてあるので、僕とレティシアだけでも大丈夫です。それに、あと残っているのは十六夜さんの報告だけですから」

「そっか」

日向が納得したところで、ジンはこほん、と軽く咳払いをしてから本題に入った。

「えー、細かい戦果は後に置いておくとして、まずは皆さんが挙げた大きな戦果から報告していきたいと思います。……よろしいですか？」

全員が了承の意を示したことを確認し、ジンは審査を開始する。

「では、初めに飛鳥さんですが、牧畜を飼育するための土地の整備と、山羊十頭を手に入れたそうです。飼育小屋と土地の整備が調い次第、連れてくる手筈になっています」

「子供たちも『山羊が来る！』『乳がいつばい来た！』『これでチーズも作れる！』と全員喜んでいた。派手な戦果や功績ではないが、コミュニティとしては大きな進展だと思っ

ぞ」

フフン、と自慢げに後ろ髪を掻きあげる飛鳥。

華やかな戦果ではないものの、コミュニティの生活のためにはとても貴重な成果である。

レテイシアは手元の報告書をペラリと捲つて話を続ける。

「次に耀の戦果だが……ふふ、これはちよつと凄いぞ？ 火龍誕生祭にも参加していた
“ウィル・オ・ウイスプ”が、わざわざ耀と再戦するために招待状をお送りつけてきた
のだ」

「アーシヤやジャックたちのコミュニティが？ するともしかして、例の三枚の招待状
の内の一枚って……」

日向が立てた予想に、レテイシアは然りと頷いた。

「ああ、その通りだ。 “ウィル・オ・ウイスプ”主催のゲームに勝利した耀は、ジャック・
オー・ランタンが制作する炎を蓄積できる巨大なキャンドルホルダーを無償発注したそ
うだ」

「なのでこれを機に、竈・燭台・ランプといった生活必需品を、全て “ウィル・オ・ウイ
スプ”に発注することになりました。こちらは中々に値段が張りましたが……先行投
資と思えば悪くありません。これで本拠内は恒久的に炎と熱を使うことができます」

「……へえ？ そいつは本当に凄いな」

十六夜が喜色と感心の混じった声を上げる。

掛け値無く大した成果だと彼も思ったのだ。

今の台所は薪を入れるタイプの竈だが、これからはその手間もいらなくなる。

燭台に火を灯し続けられるのなら、夜の読書も蝋燭を消費しないで済む。

読書家の日向や十六夜にとっては、この上なくありがたいギフトだろう。

「なるほど、俺たちが知らない間にそこまで設備の強化プランが進んでいたんだな。流

石は耀だ」

「うん。今回は本当に頑張った。アーシャたちも、日向によろしくって言ってたよ」

「そっか。今度は俺も行ってみたいな」

そう言って朗らかに笑う日向。

その笑顔を見つめ、耀はこっそりと表情に影を落とした。

実はこの件に関して、彼女は日向に後ろめたい事情があったのである。

罪悪感に胸を締め付けられながら、それでも——と、耀は毅然とした面持ちで前を向く。

どうしても、今回の勝負だけは譲れないのだ。

実際、彼女は自分の成果に自信があった。

これを越える戦果は流石に無いだろうと、仄かに余裕さえ抱いていた。

十六夜は背もたれの椅子から上体を起こすと、女性陣を見回してニヤリと笑った。

「いや、意外だったぜ二人とも。金銭を賭けた小規模なゲームが多い七桁で、なかなか大きな戦果を挙げたじゃねえか」

「どうも上から目線でご親切に。……それで、十六夜君はどんな戦果を挙げたのかしら？」

皮肉を交えつつ、飛鳥は胡乱げに十六夜へ問う。

しかし十六夜は不敵に笑って飄々と質問を受け流した。

「ま、俺のは後回しだ。それより先に日向の戦果を聞こうじゃねえか。御チビ様？」

促され、ジンは慌てて報告書を確認する。

「は、はい。えー、日向さんの戦果ですが——」

カチン、とそこでジンが硬直する。

突然の沈黙に、訝しんだレティシアが声をかけた。

「ジン、どうしたんだ？」

その呼びかけでハッと我に返る。

なんとか持ち直したジンだが、それでもまったく落ちつかない様子で発表した。

「ひ、日向さんの戦果の一つ目は……神格武器である、あまのはごろも天の羽衣の入手です」

カチン、と今度はもれなく全員が凍りついた。

否、その中でただ一人——逆廻十六夜だけが、心底面白そうな笑みで渦中の人物へと問いを投げる。

「オイコラ日向。一体どんなゲームに挑んだらそんな物を手に入れて来るんだよ？」

「白夜叉に紹介してもらったゲームの報酬でな。まあ、正直これは俺にも予想外だった」
少しばかり苦笑して答える日向。

だがそこで、バン！ と勢いよく飛鳥が机を叩いて立ち上がった。

「ち、ちよつと待つてもらえるかしら!?」 神格武具つてつまり、黒ウサギが持っているあの「インドラの槍」と同格のギフトつてことでしょう!？」

飛鳥が取り乱すのも無理はない。

なにせ彼女はほんのひと月ほど前、実際に神格武具の一つである「インドラの槍」をその手で放ち、かのギフトの圧倒的な凄まじさを直に体感したばかりである。

あの神霊であった「黒死斑の魔王」^{ブラックパーチャー}ですら一撃で消滅させるほどの、文字通り究極の神具。

箱庭に存在する全てのコミュニティが目標とし、欲して止まないものの一つだ。

無論、使いこなせるか否かは使い手の力量次第だが、上手くすれば魔王に対抗する上で絶大な戦力になり得るかもしれない。

ジンは飛鳥の言葉を肯定しつつ、更に重要な観点を指摘する。

「は、はい。『ノーネーム』の工房にも神格の付与された武器はいくつかありますが、やはりそう簡単に手に入るものではありません。ましてや今回は、宿っている恩恵の都合が良すぎるんです」

「……う？ どういうこと？」

耀が小首を傾げる一方で、十六夜は猛烈な勢いで脳内の情報を検索し、すぐさま解答を導き出した。

「『天ノ羽衣』……なるほど、羽衣伝説か。ならその武器に神格を与えたのは、さしずめ豊穰神の石柱ってところか？」

「ああ。正確には豊宇気毘売神トヨウケビメっていう女神だそうだ」

「『羽衣伝説?』」

飛鳥と耀が口を揃えて疑問符を浮かべる。

「日本じゃそこそこ有名な伝説だったと思うけど、飛鳥たちは知らないか？」

「確かに聞いたことはあるけど、詳しい内容までは知らないわ」

「私も。確か天女の羽衣を男が隠しちゃってどうこう……みたいな話だっけ？」

「ああ、大体そんな感じだ。詳しく説明するとだな——」

——『羽衣伝説』とは。

古くから日本で語り継がれてきた説話であり、各地によって少しばかり内容に差異はあるものの、大まかな共通点は以下の通りである。

その昔、空から舞い降りてきた天女が湖で水浴びをしていたところ、とある男がその天女に恋をして、近くの木にかけてあった天女の羽衣を隠してしまう。

羽衣を無くした天女は天界に帰ることが出来ず、下界で数年間、男と幸せな日々を送る。

しかしある日、天女は偶然にも隠されていた羽衣を見つけてしまい、男の元を去って天界へと帰って行ってしまう——というのがありました。

「一説によると、その天女のこそが後の豊穰神である豊宇気毘売神とされていて、なおかつその天女が纏っていた羽衣は、竹取物語に登場する『天ノ羽衣』と同一のものであるとされているんだ」

「竹取物語って、あの有名な？」

「ああ。たぶん飛鳥の予想で合ってるぞ。実は俺が挑んだギフトゲームは、この竹取物語を原型にしたものだな。『天ノ羽衣』はそのゲームの勝利報酬だったんだ」

「ならもしかして……日向はかぐや姫に会ったの？」

「ああ、会ったぞ。というか、今は俺に隷属してる」

「「え？」」

一瞬、日向の台詞に理解が及ばず、飛鳥と耀は素つ頓狂な顔をする。

日向は苦笑すると、手短かに経緯を説明した。

すると、彼女たちはどこか遠くを見るような眼差しを浮かべ、

「……今更だけど、何でもありね箱庭は」

「そうだね。まさか本当に月のお姫様まで居るなんて。ちよつと感動かも」

「まつ、すぐそこに『月の兎』が居るんだ。他に似たようなのが居たって不思議じゃねえだろ」

「あつ、何か今、とたんにありがたみが無くなったわ」

「私も。そっか、黒ウサギとおんなじか」

十六夜の言葉でそれまでの感慨を一瞬で消し去る飛鳥と耀。

もしもこの場に黒ウサギがいたら、きつと涙目で打ちひしがれていたに違いない。

日向は黒ウサギの残念な扱いを憐れみつつ、話を戻して説明を続ける。

「と、まあそう言うわけだな。『天ノ羽衣』には豊穰神の恩恵が宿っている。これを活用すれば、農園区の復興も一段とスムーズに進むはずだ」

ようやく納得した飛鳥たち。

そこでレティシアがもつともな疑問を提示する。

「だが、では誰が使うんだ？ 神格武具を十全に扱える者など、そうそう居ないと思う

が」

「そこは妥協するしかないな。かぐや——かぐや姫曰く、使いこなせないまでも、身につけているだけでそれなりに効果は望めるらしい。その中で候補を挙げるとすれば……ユエにメルン、リリの辺りになるだろうな」

「なるほど。確かに彼女たちなら、その身に宿す恩恵も土壤に関連したものだ。その價格が底上げされれば、おのずと成果も上がるだろう」

日向に同意するレティシアに続いて、飛鳥も自らの意見を述べる。

「私はユエちゃんかリリちゃんに託すべきだと思うわ。今後は農地そのものを復活させるよりも、実際に土壤を耕したり、作物を育てていくことが主流になっていくはずですよ。長期的に考えれば、その方が効率的なはずよ」

的を射た指摘に、反論の声は上がらなかった。

場面ごとに各々で使い分ける選択肢もあるが、それでは練度が高まらない。

であれば、やはり使用者は一人に限定すべきだ。

「となると、おのずと答えは出るんだよな。実はこの羽衣について、人間には使わせないようにとかぐやからは念を押されているんだ」

「え、どうして？」

「何でもこの羽衣には、人間の在り方や心を変容させてしまう効果があるらしくてな。

実際にどんな影響があるのかは分からないらしいが、触らぬ神に祟り無しだ。その点、
霊体のユエなら問題も無いしな」

「では、この恩恵はユエさんに預けるといふことでよろしいですか？」

ジンの確認に全員が肯定する。

話題に区切りがついたところで、十六夜は更に問いかけた。

「それで？ 一つ目は、つてことは、二つ目以降があるんだろ？」

「まあな。二つ目は『非時香果』ときじくのかくのこのみ つていう果実で、これも竹取物語に登場する代物だ。一応、作中では不死の妙薬として描かれている」

「ふ、不死の妙薬!？」

久遠飛鳥、本日二度目の驚愕である。

「……そんなものが本当にあるの?」

耀も一見落ち着いている風ではあるものの、内心では同様に驚いていた。

なまじジャックという実在する不死の存在を知っているがために、信憑性は否が応にも高まってしまふ。

彼女たちの中で期待や懐疑心などが渦巻く中、日向は苦笑して首を横に振った。

「期待を裏切るようで悪いが、実際に不死になれるわけじゃないらしい。一応、つて前置きをしたのもそのためだな。精々がいかなる病も治し、あらゆる傷を癒やす程度だそう

だ。ま、要するに万能薬だな」

「それでも十分に凄いギフトだと思っただが……」

冷静にツッコむレイシアの一方で、飛鳥と耀はホツと安心したような、それだけでちよつぴりガツカリしたような、ちよつと複雑な表情をしている。

実際になりたいかどうかと言われれば首を傾げてしまうものの、やはり不死という言葉には少なからずロマンを抱くのだろう。

ここで日向は話を締め括った。

「今のところ、俺の報告は以上だな」

「……今のところ？」

妙な言い回しに耀は僅かな違和感を覚えたが、考える前にジンが進行を再開する。

「さて、これで残るは十六夜さんの戦果ですが……」

「ああ。それじゃ、今から受け取りに行くとしようかね」

不敵な笑みと共に立ち上がる十六夜。

飛鳥は怪訝な面持ちで問いかけた。

「……受け取りに行く？ 一体どこへ行くの？」

「『サウザンドアイズ』にさ。黒ウサギも行ってるなら丁度いい。主要メンバーには全員聞いておいてもらいたい話だからな」

含みのある言葉に、日向以外は揃って首を傾げる。

一同は大広間を後にすると、「サウザンドアイズ」の支店へと足を運ぶことにしたのだった。

噴水広場を通り抜け、水路の橋を渡り、日向たち「ノーネーム」の面々は一路、「サウザンドアイズ」の支店を目指して歩いて行く。

道脇に植えられた街路樹は桃色の花卉を散らして、今は初々しい青葉をつけようとしていた。

箱庭にやって来た当初は桜に似ていると思われた木だが、二ヶ月経つてようやく移り目を迎えたようだ。

しばらくして目的地が見えてくると、本日もおなじみの女性店員が、店先に散乱した桃色の花卉を竹箒でせっせと掃いていた。

彼女は忙しそうに手を動かしていたが、一行を見つけるなり露骨に顔をしかめると、「……またあなたたちですか」

「どうも。今日もお仕事お疲れ様です」

そんな女性店員へ、日向は朗らかに挨拶する。

彼女はキツと眼光鋭く日向を睨むと、さながら氷のように冷たい声音で告げた。

「私の言いたいこと……分かりますよね？」

「ようこそいらつしやいました？」

「違うわよ！」

氷から高熱の水蒸気へと、昇華のごとく一瞬で怒りの沸点を突破した女性店員は、八重歯を剥いて日向に怒鳴る。

彼女の怒気にあてられて、ぶわつと周囲の花弁が舞い上がった。

日向は慌てて首と両手を横に振り、

「じ、冗談ですよ冗談。ウチは『ノーネーム』お断り、ですよね？」

「分かっているなら最初からちゃんと答えなさい！」

「す、すいませんっ！」

女性店員に一喝され、日向は反射的に頭を下げる。

それでひとまず溜飲が下りたのか、彼女は小さくため息を吐いた。

「まったく、あなたはいつもいつも……とつとと用件を済ませて帰ってください」

「あはは……はい、ありがとうございます。それじゃあお邪魔しますね」

一礼して暖簾をくぐる日向。

もちろん、その後十六夜たちも続くのだが……。

「……なんですかその表情は」

十六夜、飛鳥、耀。

三人が三人とも非常に生暖かい目でニヤニヤと笑っているのを見て、女性店員は思わずツッコんだ。

「いやあ？ いつの間にやらずいぶんと仲良くなったもんだと思つてな」

「そうね。以前なら是か非でも通そうとしなかつたのに、どういった心境の変化かしら？」

「愛のなせるわざ」

「違いますっ!!!」

若干頬を赤らめつつも、きつぱりと否定する女性店員。

そこで暖簾をどかしつつ、日向が店内から顔を出す。

「おーい、皆入って来ないのか？ 表で何してるんだ？」

「何でもありませんっ！ いいからあなたはさっさと行きなさい！」

「えっ!? あ、はいわかりましたっ！」

急に怒鳴られた日向は頭上にくくつも疑問符を浮かべながら、慌てて店内に引つ込んだ。

十六夜たちのニヤニヤがうなぎ登りである。

「照れたな」

「照れたわね」

「照れたね」

「あなたたちもさっさと入りなさい！」

怒り心頭に発す、と言った様子で竹箒を振り上げた女性店員を尻目に、十六夜たち最後までニヤニヤとしながら暖簾をくぐった。

店内で日向と合流する。

「なあ、一体外で何を話してたんだ？」

「いや別に。なあお嬢様？」

「ええ、何でもないわ。ねえ春日部さん？」

「うん。日向は何も気にしなくていいよ」

「？　そうか？」

首を傾げる日向だったが、十六夜たちは曖昧に濁して誤魔化した。

その後、一同は勝手知ったる人の家と言わんばかりに中庭を通って座敷へと向かう。

のだが。

「や、やめてください！ 白夜又様！ 黒ウサギは『箱庭の貴族』としての沽券にかけて、あれ以上きわどい衣装は着ないと言ったではありませんか……！」

「えー？ 私は結構好きだよ？ 動きやすいし、足下は涼しいし」

「ば、馬鹿を言うなかくやよ！ 黒ウサギの言う通りです白夜叉様！ この白雪も神格のはしくれとして……こ、このようはずかしい格好をして人前に出るわけには……！！」

障子の向こうから聞こえてくる女性陣のあられもない悲鳴に、日向たちは揃って足を止めた。

声の主は三人。

黒ウサギにかぐや姫、そして聞き慣れないが白雪と名乗る女性である。

障子に映る白夜叉の影絵は、ノリノリで彼女たちに迫っていた。

「ふふふ、黒ウサギと白雪は初心だのう。おんしらは何もわかっておらん。清く正しく美しく、尊いがゆえに、穢し堕とし辱めたいと人は強く望むものよ。おんしらのように高嶺の花は特にそうなのだ！ さあ早く、かくやを見習って艶めかしい素肌を晒すがい！ でなければその発育した豊満でエロい体にエロいことを仕込みたいというエロい欲求が爆発したエロい暴徒がおんしらを姦策に嵌めてエロエロにしようとして動きだすに違いない！ そうッ！！ まるで今の私のようにッ！！」

「黙れ、この駄神ッ！！」

「姦策ってなに？」

刹那、迸る轟雷と竜巻く水流、そして灼熱の炎が盛大に障子を突き破った。ついでに白夜叉も吹っ飛んできた。

十六夜がスツと足を出す。

「てい」

「ゴバアツ!? お、おんしいい加減せいよツ!? 足で受け止めるなど言っておるだらうツ!!」

「なら吹っ飛んで来るなよ」

「だな。というか、一体何をやったら黒ウサギに金剛杵を使わせるほど——」
怒らせられるんだ、とは、続かなかった。

水煙の向こうに見えた黒ウサギたちの姿に、日向は言葉を失ってしまう。

「……黒ウサギ? どうしんだその格好?」

ひや、と水煙の向こうで情けない声が響く。

「や、やだ、なんで日向さんたちがここに?」

「いや、なんでって言われてもな……」

「とりあえず、この水煙が邪魔だな」

ばつと十六夜が腕を振るって水煙を散らす。

視界がクリアになった途端、黒ウサギと見知らぬ女性が自分の体を抱きしめるように

その場でへたり込んだ。

ただ一人、かぐや姫だけは両手を腰にあててふんぞり返っていたが。

水煙が晴れて見通しが良くなったことで、後ろの仲間たちの目にも三人の姿が映り込む。

黒ウサギたちの服装にしぼし唾然としていた一同だったが、やがてぽつりと飛鳥が言った。

「……着物？」

「えつと、ミニスカの着物？」

「ユエと同じ……じゃないな。露出度が違いすぎる」

「ああ。例えるならワンサイズ小さいミニスカの着物に、エロいガーターソックスだ」
うむ、と白夜叉が小さな胸を自慢げに張る。

黒ウサギたちが着せられていたのは、体のラインがはつきりと分かるよう小さめに着付けられた着物を、股下でバツサリと切り取った奇形の着物だった。

加えて肩から胸までを大胆に開き、肌の露出を増やしている。

彼女たちのように豊満な肉付きをした女性がこれほど布地の少ない衣装を着ていれば、嫌でも視線は釘付けになるだろう。

加えて花柄レースのガーターソックスという、もはや統一感も何もない衣装である。

はあく、と深いため息を吐いたレティシアが、黒ウサギたちの元まで歩み寄る。

「三人とも、とりあえず着替えなさい。特に黒ウサギ。そんな全身濡らした格好では、」
「何ッ!?! 黒ウサギが濡れ濡れだど!?!」

ズドオオオオオオオオン!!!

と、本日二度目の轟雷が白夜叉を貫いたのだった。

一方。

「やつ、二日ぶりだねご主人様! どうどう? この着物似合ってる?」

「ああ、まあ確かに似合ってはいるな……というか、かぐやは割とその格好を気に入ってるっぽかったのに、どうして白夜叉を攻撃したんだ?」

「え? うーん……なんか、身の危険を感じたから?」

ああ、なるほど。

と、その場にいた全員が完全に納得をしたのは余談である。

「まあコンセプトは悪くなかった。しかし次からはきちんと俺に相談してからだな」
「これ以上その話を引き延ばすのはやめてくださいっ」

スパンツ、といつもの服装に戻った黒ウサギが軽めに十六夜の頭をハリセンで叩く。

「そうだと十六夜。この話は後で時間をかけてゆつくりと」

「後先の問題でもありませんっ」

スパッツ、と日向の頭も軽めに叩く。

そんな彼らの目の前で、上座に座った白夜叉が少し焦げた頭を横に振った。

「いや、あの服も今日の話に無関係ではない。本来は黒ウサギに着せる衣装ではなく、この外門に造る新しい施設で使う予定の正装での」

「し、施設の正装!?! あのエッチな着物モドキがでございますか!?!」

そんなお馬鹿な!?! と驚愕する黒ウサギだが、白夜叉は「うむ」と思いのほか真剣な面持ちで首肯した。

「い、一体どんなお馬鹿な施設を作るつもりなんです!?!」

「いいから少し落ち着けよ。施設そのものは至って真つ当な代物だ」

十六夜にたしなめられ、黒ウサギはしぶしぶ引き下がる。

白夜叉は話を再開した。

「小僧の言う通りだ。やや話が逸れてしまったが、この件については『フロアマスター階層支配者』の活動の一環でな。このところ東区画下層では魔王らしい魔王も現れておらんし、ちよいと発展に協力しようと思つての。しかしさて、どこから手を付けたものかと悩んでおつた折りに、十六夜と日向から提案があつたのだ。『発展にはまず、潤沢な水源の確保が

望ましい”とな」

「あれれ？ 日向さんも関わっているのですか？」

黒ウサギに意外そうに尋ねられ、日向は頷いて経緯を話す。

「ああ。ほら、ちよつと前に早魃騒ぎがあつただろ？ あの様子を見る限り、どここのコミュニティも水の工面には苦労してるみたいだったからさ。そこで俺と十六夜で話し合つて、白夜叉に提言したつて流れだ」

「うむ。街中に張り巡らされている水路だが、あれは使用料を払える中級以上のコミュニティしか使えないのが現状。東の七桁の外門では、多くの組織が都市外にまで水を汲みに行つておる。定期降雨は行つていゝものの、十分な貯水が出来るコミュニティは、果たしていくつあるものか」

存外まともな話に面食らいながらも、黒ウサギはこくりと頷いた。

「そ、そうですね。北側のように降雪量が多いわけでも無く、南側のように大河が都市部を貫通しているわけでもありません。こればかりは土地柄として諦めるしかなかつた問題です」

「その通りだ。そこで一つ、”階層支配者”の権限で大規模な水源施設の開拓を行おうというわけだ。そこで小僧たち二人の内、十六夜には水源となるギフトを取りに行つてもらつたのだが……よもや隷属させてくるとは思わなんだ。まだまだ修業不足だのう、

白雪?」

白雪と呼ばれた女性の正式な名前は白雪姫。

美麗衆目の顔立ちと、後頭部で結い上げた艶やかな黒髪に白地の着物が特徴的な人物である。

聞けば彼女は、以前に日向や十六夜が出会ったあのトリトニスの大滝に潜んでいた蛇神らしい。

前回の雪辱を晴らすため、自信満々に十六夜へ試練を課したところ、ものの見事に返り討ちにあつたそうだ。

ニヤニヤと笑う白夜叉に、白雪姫はムスツとしてそっぽを向いた。

「御話は分かりました。しかしそうならそうと言つてくだされば良いものを……こんな小僧を介さずとも、我が主神の求めならば喜んで協力致しましたのに」

白雪姫は愚痴をこめて返す。

しかし白夜叉は予想外なほど真剣な声音で制した。

「いや、それでは意味が無いのだ。『階層支配者』が全てを成して甘やかせば、下層は墮落する一方。施設は用意しても、最後の一押しはやはりその地域に住まうものが成さねばらなん。この度の一件で二人に依頼したのは、最下層から実力のあるコミュニティが現れたことを広く知らしめ、競争心を高めようという狙いもあつたからの」

ましてやそれが無旗無名の「ノーネーム」ともなれば、自分たちにもやれるかもしれないと勢いづくコミュニティも出てくるだろう。

そんな白夜叉のプランを聞いてもしかめっ面の晴れない白雪姫だったが、十六夜を一瞥して諦めたように息を吐いた。

「ふう……まあ、致し方ない。異議を唱えても契約が覆るわけも無く。トリトニスの滝は移住してきた水精群に預け、我は小僧に従いましょう」

「そりやどうも。ま、心配せずとも俺から命令することはしばらくねえよ。施設が完成するまでは白夜叉に身柄を預ける契約だしな」

と、話が纏まりかけたところで、ふと黒ウサギが思い出したように問いかけた。

「あれ？ それでは結局、日向さんへの依頼とはどのような内容だったのですか？」

「日向には水源施設を開拓するにあたって、どうしても必要になるもう一つの要素を満たすためのギフトを入手するよう頼んだのだ」

「もう一つの要素？」

黒ウサギはこてんと小首を傾げる。

うむ、と頷き、白夜叉は詳細を語る。

「水源施設を造るのはいいが、こと水を扱う以上、どうしても避けられない課題が出てくる。その最たるものが水質の汚濁や汚染だな。この課題が解決できなければ、水源施設

の開拓など夢のまた夢だ」

「なるほど。しかし日向さんが手に入れたゲームの報酬には、水質を浄化できるような恩恵は無かったと思います……」

「そこが悩みの種で。身近で浄水効果を持つギフトとしては水仙卵華が代表例だが、アレは北や南側ではギフトゲームのチップに使われる程度には高価なものだ。水源施設を丸ごと賄えるほどの数を揃えようと思えば、決して容易なことではない。かといって前述したように「階層支配者」として甘やかすわけにもいかんしの。さてどうしたものかとあれこれ打開策を模索していたおり、日向から面白い申し出があつのだ」

「面白い申し出？」

うむ、とどこか感心した様子で頷いてみせる白夜叉。

そこで日向が自ら答えた。

「まあ、ちよつとだけ発想の転換を試してみたんだ。水質を浄化する恩恵を利用した仕組みを造ることは難しい。ならいっそのこと、恩恵そのものを必要としない仕組みにしてみたらどうかってな」

「恩恵を利用せずに……そんなことができますのですか？」

日向は力強く笑って頷いた。

「できるさ。恩恵を使わずに水質を浄化するなんて、俺が元居た世界じゃ当たり前だよ

うに行われていたことなんだ。ならあとは、先人の知恵を借りればいい」

「な、なるほど。それで、その方法とは一体どのようなものですか？」

「ここでキーになるのが、かぐやの力なんだ」

「かぐやさんの？」

話題に出たかぐや姫は、えっへんと豊かな胸を張る。

服も着替えており、今は出会った当初の紅い着物を纏っていた。

「ああ。実はかぐやには、炎を操る以外にももう一つのギフトがあつてな。その能力つていうのが、『竹を生み出す』ことなんだ」

「た、竹でございますか？」

予想外の解答にオウム返しで問いかける黒ウサギ。

日向は首肯して続けた。

「そうだ。黒ウサギは活性炭つて知ってるか？」

「活性炭……炭ですか？」

「ああ。この活性炭を使った方法が、俺の元居た世界じゃ結構使われてな。本来は木炭や石炭なんかを利用するが、実は竹炭の方が効果は高い」

日向は簡単に活性炭について説明する。

——活性炭とは、特定の物質を選択的に分離、除去、精製するなどの目的で吸着効率

を高めるための処理を施した、多孔質の炭素を主成分とする炭のことである。

水のような極性分子は吸着力が低い一方で、逆に細孔より小さな粒状の有機物を選択的に吸着しやすいという特性を持っている。

そのため現代日本でも脱臭や水質浄化など、有害物質の除去に広く用いられているものだ。

「加えてこの活性炭を製造する方法が、約1000℃の炎で資材を燃焼させることだな。これもかぐやと相性が良い」

日向が説明を続ける中で、耀がふとした疑問を口にする。

「そう言えば、どうして彼女は炎が使えるの？ かぐや姫と炎つて、あまり関係が無い気がするけど」

「いや、そうでもない。かぐや姫は、またの名前を^{かぐ}夜比売命^{ひめ}。この^{かぐ}“^{かぐ}“^{かぐ}”^{かぐ}”という字は火を意味する言葉だな。日本神話で有名な火の神である^ひ“^{かぐ}”^{かぐ}”のそれと同様の綴りだ」

へえ、と感嘆の声を上げる耀。

日向は説明の締めくくりに入る。

「まあ、実際にはもう少しいくつかの行程を経て水質を完全に浄化するわけなんだが、使用された活性炭は順次各コミュニティに配布される手筈になっている。これを土壌に

混ぜると、地力の活性化なんか結構な効果があるからな。作物不足の改善にも、少しは役に立つだろう」

「そ、そこまで考えているのね」

思わぬ方面にまで配慮されていることに対し、飛鳥は純粹に感心した。

日向と十六夜は、満を持して白夜叉に向き直る。

「さて、これで話が終わったわけだが」

「そろそろ、例のものを渡してもらおうか？」

彼らは何も、無償でかぐや姫と白雪姫を貸し出すわけではない。

報酬を催促する二人に、白夜叉は微笑んで了承する。

「ふふ、分かっておる。『ノーネーム』に託すのは前代未聞であろうが……地域発展のために、片や神格保持者を貸し出すほどの功績を立てたのだ。他のコミニティも文句はあるまいさ」

三人のやり取りに、周囲の緊張が高まる。

この報酬次第で収穫祭の参加が決まるのだ。

白夜叉は両手を前に伸ばし、パンパンと小さな手で拍手を打った。

すると座敷は光に包まれ、やがて一枚の羊皮紙が彼女の前に現れる。

虚空から羽ペンを取り出した白夜叉は文末にサインを書き込むと、リーダーであるジ

ンに視線を移した。

「それでは、ジン＝ラッセル。これはおんしに預けるぞ」

「ぼ、僕ですか？」

「うむ。これはコミュニティのリーダーが管理するもの。おんしがその手で受け取るのだ」

ジンは促されるまま白夜叉の対面に座り、受け取った羊皮紙の文面に目を通す。

直後、彼は硬直したまま動かなくなった。

近頃固まってばかりの彼であるが、今回はその中でも一番の固まり具合である。

しかし、それもそのはずだ。

なぜなら――

「こ、これ……まさか……!?!」

「どうしましたジン坊ちゃん？」

ピヨンと、ジンの後ろに回り込む黒ウサギ。

すると彼女もジン同様、驚愕したまま動きを止める。

羊皮紙の文面には、次のようなことが書かれていた。

『 一〇二〇五三八〇外門 利権証 一』

*階層支配者フロアマスターは本書類が外門利権証であることを保証します。

*外門利権証の発行に伴い、外門の外装をコミュニティの広報に使用することを許可します。

*外門利権証の所有コミュニティに右記の アストラゲト “境界門” 使用料の八〇%を納めます。

*外門利権証の所有コミュニティに右記の “境界門” を無償で使用することを許します。

*外門利権証は以降より、 “ のコミュニティが レギオンマスター 地域支配者であることを認めます。

“サウザンドアイズ” 印』

「が……外門の、利権証……！ 僕らが “地域支配者” ！？」

「うむ。外門の利権証は地域で最も力のあるコミュニティに与えられるもの。 “フォレス・ガロ” が解体して以降、 “サウザンドアイズ” が預かっていたが……今のおんしらになら、返しても問題なからう」

ふふふ、と口元を隠しながら笑う白夜叉。

——外門利権証とは、箱庭の外門に存在する様々な権益を取得できる特殊な「契約書類」である。

外門同士を繋ぐ「境界門」の起動や広報目的のコーディネートなどを一任するもので、コミュニティが施した装飾や規模がそのまま地域の復興に繋がることもあるほどの重要な利権だ。

同列の外門同士を比べ合う際には、外門の装飾がそのまま地域の格付けにもなる。

この利権証を所持するコミュニティはその影響力から「地域支配者」と呼ばれるのだ。

「し、しかし、今の僕らには外門に飾る旗印がありません。外門が無印では地域のコミュニティから異論が上がるかも」

「おいおい御チビ、頭使えよ。仮にも俺たちは水源施設をこぞつて地域に無償提供するんだぜ?」

「ああ。ここままでしてやれば常日頃から名無しと声高に罵っている連中も、口を噤まずにはいられないだろ?」

ハツと言葉を呑み込むジン。

彼らはそこまで計算して事に及んでいたのだ。

ジンは大きく息を吸い込み、困惑した視線を黒ウサギに向ける。

「黒ウサギ……」

「……………」

ジンの呼びかけにも反応せず、顔を俯かせたまま微かに震えている黒ウサギ。

彼女はおもむろに立ち上がると、静かに日向と十六夜の前に立った。

しれつとした様子で、彼らは黒ウサギに問いかける。

「どうした？ 何か不満があるってんなら聞くだけ聞かず？」

「ちなみに報酬の割り当ては俺と十六夜で三：七だ。審査の際はその点を考慮して——」

日向の言葉はそれ以上続かなかった。

なぜならば、いきなり飛び込んできた彼女を抱きとめなければならなかったからだ。

同じく黒ウサギを抱きとめた十六夜は、怪訝そうに眉根を寄せた。

「おい、どうした黒ウサギ？」

「……………」

ぼつりと、黒ウサギが呟いた次の瞬間。

まるで堰を切ったように、彼女の感情が爆発した。

「……………凄いです。凄いです凄いです凄いです！ 凄すぎるのですよ御二人共っ

!! まさかたった二ヶ月で、利権証まで取り戻して頂けるなんて……………！ 本当に、本

当にありがとうございますっ!!」

ウツキヤー♪ と奇声を上げながら彼らに抱きつく黒ウサギ。

普段以上のオーバーアクションに面食らう二人だが、十六夜は触れ合う胸の柔らかかさに、日向は彼女の満面の笑顔にすぐさま気を取り直した。

（おお、こりや役得だ。つーかこの細い体にどうしてこれだけのポリウムがあるんだ？）

（胸が当たってるんだが……まあ、喜んでくれてるならいいか。それにしても、やっぱり大きいな……）

体を押しつけるのもいとわずに、力いっぱい彼らを抱きしめる黒ウサギ。

普段の彼女なら赤面必至だが、そんなことも忘れるくらいに嬉しかったのだろう。

そしてそんな彼らを後方から見ていた問題児二人は、落胆したように顔を見合わせる。

「……やつぱり、私たちの負けなのかしら？」

「……そうなるかな。ごめんね、飛鳥」

「いいのよ。春日部さんこそいいの？」

「うん。だって仕方がないよ。黒ウサギもジンも……あんなに喜んでるんだから」

そう、と飛鳥は短く返して黒ウサギたちを見る。

日向と十六夜を中心にはしやぐ彼らを、二人はどこか遠い場所のここのように見つめ

続けていたのだった。

第26話 湯殿の会話

白夜叉から外門利権証を受け取り、〃ノーネーム〃が〃レギオンマスター地域支配者〃への就任を果たしたその日の夜。

今宵、本拠では小さな宴の席が設けられていた。

「そ、それでは！　〃ノーネーム〃の〃地域支配者〃就任を祝しまして……乾杯!!!」
『かんぱーい!!!』

開宴の音頭を取るのは、やや緊張気味のジンである。

彼がグラスを掲げると同時に、主力陣と年長組の子供たちが一齐にグラスを打ちつけ合う。

もちろん、中身は果実ジュースである。

「わー！　お料理がいっぱいだー！」

「みんなおいしそー！」

かつてないほどの豪華な食卓に、瞳をキラキラと輝かせる子供たち。

白いクロスが敷かれたテーブルの上には、所狭しと様々な料理が並んでいる。

そのどれもこれもが本来なら金銭面に余裕がある時でも出さないような豪華で贅沢なものばかりだが、今夜に限っては大盤振る舞いだ。

「YES! まだまだあるので、皆でジャンジャン食べましょう!」
『わーい!!!』

そんな黒ウサギの言葉を皮切りに、子供たちが待つてましたとばかりにこぞつて料理へと手を伸ばす。

和食に洋食、中華フレンチイタリアン——様々なメニューが目白押しだ。

また本日は宴を盛り上げるための一興として、黒ウサギもその腕を振るつたらしい。彼女の料理は川魚の表面を軽く炙って油で揚げたものに、とろみのある餡をかけた品だった。

黒ウサギ自身、かなりの力作であるそうだ。

主力陣を始めとして、子供たちにも絶賛されたのだが、十六夜の——
「黒ウサギ。これ多分、餡をかけないで酢漬けにしたほうが美味い」
——という一言でいろいろ台無しになった。

そんな一抹の盛り下げはあったものの、宴は順調に進行し、ほどなく宴もたけなわとなる。

いよいよ間近に迫った収穫祭の話題などに花を咲かせながら、各々が思い思いの料理

へ次々に食指を伸ばしていく。

中でも圧巻なのが耀だった。

次から次へと料理の皿を手を取っては、脅威のスピードで平らげていく。

仕草は至って普通なのに、気づいたら皿の上にあつた料理が跡形も無く消えているのである。

そんな風に黙々と食べ進めていた彼女だったが、ふととある料理を口に運んだ瞬間、ピタリとその動きを停止した。

彼女が口にしたのは、一見すれば至って普通の白身魚のムニエルである。

しかしながら、もう一度フォークで切り分けて口の中へと運んでみれば、身は噛んだ瞬間にほろりと崩れ、胡椒の風味とレモンの酸味が絶妙なバランスで素材の味を引き立てていた。

食べた瞬間、料理人の手腕をありありと感じさせられる品だった。

それも、かなりのハイレベルだ。

技量はリリりに匹敵するが、しかし、彼女とは明らかに質が違う。

まさかこれほどの使い手が他にも身近にいないとは……。

痛恨のミスと言わんばかりに、耀は悔しげな顔をして——自然と、この料理を作った人物が知りたくなった。

「このムニエル、凄く美味しい。誰が作ったの?」

「ん? ああ、それは俺だ」

へ? と、耀は聞き覚えのある声に驚きながら振り返る。

「……え? これ、日向が作ったの?」

そう、なんと名乗り出たのは日向だった。

その事実にも主力陣も目を見張り、食事を中断して彼の周りを取り囲む。

「嘘! 日向君で料理が出来たの!?!」

「まあ、それなりに。別館なんかじゃ、たまに子供たちのご飯を作ったりもしてるぞ?」

「お兄さんの料理はすごく美味しいんですよ。思わずほっぺが落ちちやうくらい。子供たち全員に大人気なんです」

「はい。他にも忙しい時には下拵えを手伝って頂いたりして、とつても助かっているんです」

ねー、と、ユエとリリが仲良く顔を見合わせて説明する。

日向は頬を掻くと、謙遜するように苦笑した。

「いや、別にそこまで褒められるほどのものじゃないぞ? 耀が食べたのもたまたま得意なメニューだったってだけで、料理の腕自体は世間一般レベルだからな」

「いやいや、素直に中々のもんだぜ？ 少なくとも今回に限って言えば、黒ウサギの料理よりも美味しい」

「十六夜さんはいつも一言余計なのです！ ……事実ですけど」

ヤハハと笑う十六夜に、悔しがりながらもフオークを止めない黒ウサギ。

同士の意外な一面を見て、レティシアは興味本位に尋ねてみる。

「しかしこれほどの腕となると、相当料理の経験があるんじゃないか？」

「まあ、二元の世界じゃ毎日自分で作ってたしな。家庭料理ならそこそこ作れると思うけど」

「うっ」

日向の何気ない発言に、飛鳥がクリティカルヒットをもらったように呻く。

お世辞にも料理が得意とは言えない彼女にとって、今の台詞は乙女のプライド的に堪えたようだ。

大財閥の令嬢ゆえに仕方がないことではあるのだが、押し寄せる敗北感は拭えなかった。

「ここ、これからよこれから！ ね、春日部さん!？」

「え？ ……えーつと、私は一応料理出来るよ?！」

「ええつ!？」

「ちなみにだが、俺もそれなりに経験はあるぞ」

「十六夜君も!？」

黒ウサギは言わずもがなである。

周囲の同世代とのまさかの女子力差に、一気に肩身が狭くなる飛鳥。

打ちひしがれた様子の彼女を、ジンと黒ウサギが慌てて励ます。

「だ、大丈夫ですよ飛鳥さん！ 練習すれば、きつとすぐに上手くなります！」

「そ、その通りなのですよ！ よろしければ黒ウサギもお手伝いしますから！」

「……ええ、ありがとう二人とも」

ほろり、と一筋の涙を流す飛鳥。

その日の料理は特別な隠し味でも入っているのか、ちよつぱり複雑な味がした。

そんなこともありながら、宴は過ぎていくのだった。

その後、宴もお開きの時分となり、後片付けを終えてから、その夜は解散となった。

入浴を済ませてから自室に戻った耀は、今は膝に乗せた三毛猫と共に寛いでいる。

やや肌寒い夜風が吹き込む窓辺の椅子に腰掛けながら、彼女は小さくため息を吐い

た。

「……三毛猫。私は収穫祭が始まってからの参加になったよ。前夜祭はお預けだね」

『……そうか。残念やったなお嬢』

「うん。だけど仕方ない。日向と十六夜は本当に凄いもの。水不足をあっという間に解決したり、レティシアを助け出したり、魔王の謎を解いた時も、本当にとんでもない男の子たちだなあって、思わず感心しちゃったもん」

——だから、仕方がないんだ。

そう自分に言い聞かせるように。

耀は細く笑って、星が瞬く夜空を見上げた。

「……それに、凄いのはあの二人だけじゃない。飛鳥だって凄い。あんなに凄惨だった土地を、たった一ヶ月で土壤に整えたんだ。本当に凄い」

ユエや子供たちの努力はもちろんだが、土壤が復活するキツカケを作ったのは、間違いなく彼女の功績だ。

そんな耀の言葉を、三毛猫はフンと鼻で笑う。

『そんなもん、ワシらが居ったところじゃ全然凄くも無かったやないか』

「それは技術の発達があつてこそだよ。人の手であの土地を農場にしようと思ったら……きつと、何世代もかけて復興しなきゃいけないかつたはずだもの」

それを、わずか一ヶ月で成し遂げた。

まさに「恩恵」と呼ぶに相応しい奇跡だろう。

友人の華々しい成果を誇る耀だが、その笑顔はどこか物寂しい。

気になった三毛猫は喉を鳴らして問いかける。

『…………お嬢、何かあつたんか？』

「…………何も無いよ」

ただ——と言葉を切り、窓から農園区の方へと視線を向ける。

「…………三毛猫。あの農園はね。日向と十六夜が水を撒いて、飛鳥が土地を育んだんだ。だから最後に私が苗を用意すれば、「農園は四人で造つたんだ！」って、胸を張って言えるかなあ…………とか。それで一日でも多く収穫祭に参加したくて、今回は頑張つてたんだ」

でも駄目だった。

後ろめたい真似に手を染めて、罪悪感を抱きながらも自信満々に掲げた成果は、しかし、彼らの足下にも及ばなかった。

そしてそれは、決して今回に限つた話ではない。

これまで耀は、ここぞというゲームの一番で戦果を挙げられない状況が続いている。

前回の魔王とのゲームでは、戦わずして敗北するという醜態まで晒してしまっている。

のだ。

彼らと共に“打倒魔王”を掲げていくには、自分の実力は圧倒的に足りてない。だからこそ、幻獣が数多く生息しているという南側に一日でも長く滞在して、一つでも多くの出会いが欲しかった。

並のゲームならいざ知らず、魔王のゲームで、今の自分では生き残れない。

それは誰よりも、耀自身が人一倍痛感していることだった。

“ノーネーム”の主力であり続けるためには、魔王相手に一人で戦えるだけの力があるのだ。

「……三毛猫」

『うん?』

「日向も十六夜も飛鳥も、皆凄いな」

『……せやな』

三毛猫は短く相槌を打つ。

耀は夜空に輝く十六夜の月を静かに見つめ、

「でも、私は……あんまり凄くないね」

『……』

「やっぱり、投げやりな気持ちでコミュニティに所属したのが駄目だったのかな」

そう言つて、耀は悲しげに俯く。

「……あのね、三毛猫。『火龍誕生祭』の時、日向は私のことを『友達』だつて言つてくれたんだよ。私、あの言葉が本当に嬉しかった。飛鳥もそう。この箱庭にやつて来てすぐの時、私と友達になろうつて言つてくれた。黒ウサギも、私のことを同士だつて言つてくれるし、十六夜も……確証は出来ないけど、たぶん、仲間だつて思つてくれてると思う。でもね、でも、それは——」

ギユツと、耀は膝の上で拳を握り締める。

「——それは、偶然素敵な友達が出来ただけで……私には、その関係を維持する力がな
い」

『……お嬢……』

三毛猫は言葉が見つからず、黙つて耀の手へと擦り寄つた。

応えるように、耀も顎の下を撫でてやる。

そのまま両手で三毛猫を抱え、膝ごと抱きしめるように丸くなった。

——その後、三毛猫はこっそりと寢室を抜け出した。

ランプの灯りはすでに消されており、窓からの月明かりを頼りに階段を下りる。

耀に初めて友達ができて、誰よりも安心していたのは彼だった。

十四年前、耀と同じ日にこの世へと生を受け、以来、ずっと一緒に過ごしてきた三毛猫だったが……もう、自分の命が長くないことを悟っていた。

病にかかっている訳ではない。

それはごく当たり前な——生物のとして寿命が尽きるという意味だ。

あとはこの箱庭でゆっくりと余生を送るつもりだったが……どうやら最後にもう一つだけ、やるべき仕事ができたらしい。

(日向にはこの世界にやって来た時、湖で溺れていたところを助けてもらうた恩がある。なら狙いは……もう一人の小僧や)

抜き足、差し足、猫の足。

猫である三毛猫にとって音も無く廊下を駆ける程度は造作もないが、何せ相手は問題児屈指の規格外だ。

警戒しすぎるに越したことはない。

自慢の肉球の静音性能をフル活用しながら、三毛猫は猫とは思えないような奇妙なステップで階段を滑り降りていく。

館のランプを消して回っている年長組の話を盗み聞きしたところ、いま彼らは湯殿にいららしい。

普段なら書庫で書物を漁っている時間だが、今日は黒ウサギたちと長く騒いでいたために、時間がずれ込んでいるのだとか。

(……しかし風呂場か。小僧の服を毛玉まみれにしてやるのも悪くはないが、きつちり落とし前を付けてもらうにや、ちよいと軽すぎるな)

湯殿に辿り着いた三毛猫は、そつと脱衣所を確認する。

てつきり中は日向と十六夜の二人だけだと思っていたのだが……脱衣所のカゴには、他に女性と思われる服が三つ置いてあったのだ。

(ぬう……おのれ、これはやはり日向もろとも制裁を加えるべきか……！)

湯殿からは楽しそうな男女の声が聞こえてくる。

ますますもって許し難いと私怨を燃やした三毛猫は、十六夜の制服が入ったカゴに飛び乗ると、ガサゴソと中身を漁り始めた。

やがて学ランの下にあつた硬いものを見つけると、閃いたように猫の瞳を輝かせる。

(小僧が頭につけとるアレか……よし、コイツでええやろ)

三毛猫は目的の物を啜えると音も無く飛び降り、脱衣所を後にしたのだった。

ひゃー、と、幼い声が湯殿に二つ。

ユエとリリの二人が、それぞれ日向と十六夜に頭を洗われていた。

一体どうしてこうなったのだろうか、リリは泡だらけの頭を悩ませる。

確か数十分ほど前の自分は、この一ヶ月ですっかり仲良くなった友人と共に、日頃お世話になっている日向や十六夜の背中を流して差し上げようとしてこの場に同席したはずなのだ。

それがいつの間にもやら背中を流して差し上げるべき方に逆に頭を洗ってもらっているという、ちよつとよく分からない状況になっていた。

果たして本当にこのままで良いのだろうかと内心首を傾げ、ふと真横で同様に頭を洗われている友人の元へと目を向けてみれば、

「ねえねえリリちゃん！ 見てみて！ お兄さんに泡で狐耳を作ってもらっちゃった！
これでリリちゃんとお揃いだね♪」

とても楽しそうに、この状況を満喫していた。

ふわふわの泡で形作られた真っ白な狐耳は、同じく綺麗な白髪をしている友人にとても良く似合っている。

というか狐耳の完成度が凄い。

泡で出来ているからよくよく見れば偽物ということはすぐに分かるのだが、とにかく見た目が完璧すぎるのだ。

本家本元の自分ですら、一瞬本物の狐耳だと思ってしまったぐらいである。

(日向様ってやつぱりすごいなあ……)

と改めて尊敬の念を抱きつつ、同時に自分と同じ姿になって本当に嬉しそうにはしゃぐ友人の笑顔を見てみれば、おのずと自分も嬉しくなってしまうわけ。

「えへへ、そうだね」

結局、リリもあまり深くは考えないことにした。

その後しばらく巧みな指使いにうっとり身を委ねていた彼女たちだが、やがて背中から声がかかった。

「よーし、そろそろ流すぞー」

「はーい」

「こつちも流すぞ」

「は、はいっ」

ぎばあ、と頭上からお湯がかけられる。

何度かそれを繰り返し、やがて完全に洗剤が流れ落ちる頃には、彼女たちの髪はすっかりツヤツヤになっていた。

「よし、終わったぞ」

「はふうー。ありがとうございます、お兄さん」

「ほれ、こつちも終了だ」

「あ、ありがとうございました、十六夜様」

すつかり身も心も脱力しきった様子でお礼を述べるユエと、ちよつぴり恥ずかしかったのか頬を染めながら感謝するりり。

ふと、そこでユエに日向が声をかけた。

「それにしても、まさかユエが自分から洗って欲しいって頼みにくるなんてな」

「えへへ、ごめんなさい。十六夜さんに洗ってもらっているレティシアさんを見ていたら、なんだか羨ましくなっちゃって。……あ、あの、もしかして迷惑でしたか？」

少し心配そうな表情で見上げてくるユエ。

日向はしつとりと濡れた彼女の白髪に手を置くと、優しく微笑んで、

「これくらい、ユエがして欲しければいつでもするさ。それよりも、ちゃんと満足したか？」

「はい！ とつても！ とーつても気持ち良かったです！」

満面の笑顔で頷くユエ。

その隣で、りりも素直に感想を告げる。

「あ、あの、私も十六夜様に洗って頂いて、とつても気持ち良かったです！」

「そりゃ良かった。ま、確かにユエの言う通り、レティシアだけについても不公平だから

な」

ヤハハと屈託なく笑う十六夜。

そのまま四人揃って湯船に移動すると、そこにはレティシアが苦笑を浮かべて待つていた。

現在の彼女は特注の大きなリボンを外しており、その外見はいつもの愛らしい少女から、艶やかで美しい大人の容姿に変わっている。

体に巻いたタオルを押さえながら、レティシアは少し呆れたように口を開いた。

「やれやれ……十六夜は本当に何でもやりたがるんだな」

「人を節操無しみたいに言うなよ。俺はただ、レティシアの髪が湯船で濡れている姿が見たかっただけだ」

飄々と肩を竦める十六夜に、日向も困ったように笑いながらも同意する。

「ははは……まあ実際、ユエやりりならともかく、その姿のレティシアと混浴するのは流石にマズいかなあ……とは思ったんだけどな。本音を言えば、俺もずつと見るのを楽しみにしてたんだ。なんせ黒ウサギが『一見の価値ありますっ!』って太鼓判を押してきたぐらいだったからな」

「むっ……そうか。ふふ、では感想を聞いてもよろしいかな?」

レティシアは湯船から立ち上がると、浴槽の縁へと腰掛けた。

星と月明かりで瑞々しく濡れた金髪は、さながら秘境に眠る黄金の如く神秘的な輝きを纏っている。

昼間のように太陽の下で煌々と照り輝いているのはまた違った美しさに、ユエとりも熱いため息を吐いた。

「ふう……レティシアさん、すごく、お綺麗です」

「はい……とつても、お美しいと思います」

「そうだな。女の髪は濡れると印象が変わるもんだが、レティシアの髪は本当に劇的に変わる」

「ふふ。お褒めに預かり光栄です主殿。よろしければ、もう一人の主殿にもご感想を賜りたいのですが？」

同性異性を問わず魅了してしまうような蠱惑的な笑みを浮かべながら、レティシアは日向に流し目を向ける。

そんな彼女の要求に対して日向は――

「……………え？」

と、まるで呆けた返事をした。

「あ、ああ、悪い。今何か言ったか？」

どうやら話すらまともにも聞いていなかったらしい。

普段の彼らしくない様子を不思議がる一同だったが、不意に十六夜が何かを思いついたのか、心底面白そうに悪戯好きな笑みを浮かべた。

「ふむ。望んだものも見れたことだし、悪いが俺は先に上がらせてもらうぞ。子供組ものぼせると体に悪いから、そろそろ上がらせた方がいいな。こっちは俺に任せて、日向とレティシアはゆつくり入浴を楽しんでくれ」

「む、そうか？ それではお言葉に甘えさせてもらおうとしよう」

「……は？ お、おいちよつと待て十六夜！ それなら俺も——」

「そうですねー。実は私、ちよつとくらくらしてきちやつたところなんですよー。あ、いっつも長風呂のお兄さんは！ もちろん！ まだまだ入っていたいですよー！ 大丈夫です、私たちは十六夜さんと一緒に上がらせてもらうので。ね、リリちゃん！」

「え？ あ、うん。……うん？」

十六夜とユエの二人は何だかよく分からず頭に疑問符を浮かべたりリリを捕まえると、いそいそと湯殿から出て行った。

結果的に、湯殿には日向とレティシアだけが残る形となる。

「あ、あいつら……！」

「ふふふ、まあまあ主殿。こうなったら十六夜の言う通り、二人で入浴を楽しむとしようじゃないか。なにせ、主殿は長風呂なのだろう？」

くすくすと楽しげに話すレティシア。

まんまとしてやられた日向は苦々しい表情を浮かべるが……やがて、諦めたように力を抜いた。

「はあ……まあそうだな。なら今夜は心ゆくまでレティシアの美貌を堪能するか」

「む。そこまで面と向かって言われると、私も少々気恥ずかしいものがあるが……付き合うでしょう」

浴槽の縁から腰を上げ、再び湯船へと浸かり直したレティシアは、片方の手首を握つてぐつと大きく背伸びをする。

日向はさつと視線を逸らすと、誤魔化すように話題を振った。

「そ、そう言えば、確か吸血鬼って水が苦手なんじゃなかったか？ 一部の伝承の中には、そんな記述もあった気がするんだが」

「いや、まったくそんなことはないぞ？ むしろ、私は湯浴みが好きなほうだ」

「へえ。けど、レティシアには『魔王ドラキュラ』って異名があるんだろ？ ドラキュラって、あのドラキュラ公のことだよな？ まさかとは思うけど、本人だったりするの
か？」

目を丸くして意外そうな顔をするレティシア。

まさかそちらに話が飛んでくるとは思わなかったのだろう。

——日向が述べるドラキュラ公とは、一四〇〇年代に実在した、ヴラド三世という貴族が名乗っていた異名のことである。

大量の農民・貴族を串刺し刑に処したなど、様々な怪伝説を持った貴族であり、吸血鬼ドラキュラのモチーフになった人物だ。

日向の興味本意の問いかけに、レティシアは少し不機嫌そうに唇を尖らせた。

「いや、主殿？ その、詳しくは知らんが……ドラキュラ公というのは、男性のはずだろう？ それとも主殿には、私が男性に見えると？」

「もしそうだとしたら、今この場で俺が抱えている悩みは全て解決するんだけどな」

苦笑を浮かべて答える日向。

その回答が面白かったのか、レティシアは明るい声で笑った。

「はっはっは、それは残念だったな。まあ、なんだ。確かに無関係ではないが、系統的には全く無縁の男だよ」

「まあ、やっぱりそうだよな」

「ああ。私がドラキュラと呼ばれるのは、むしろ語源の方だ。ドラキュラとは、龍の子」という意味があるだろう？ 我ら吸血鬼は最強種・龍の純血によって生み出された種だからな」

「……へえ、それは初耳だな？」

日向の双眸がほのかに知的な輝きを帯びる。

龍という単語に興味を惹かれたのだろう。

「龍の純血っていうと、神霊や星霊と並ぶ、箱庭最強種の一角って噂のヤツだろ？ でも他の二種と違って、この存在にだけはまったく予想が立たないんだよな」

「そうか？」

「ああ。聞いた話じゃ、『系統樹が存在しない幻獣』——なんていう風に言われているらしいが、それがそもそも矛盾してる。幻獣っていうのはつまり、霊格が高まって系統樹に爆発的な変化が起きた場合に生まれる種のことだろう？ 系統樹が存在しないってことは、無から発生した生命体ってことになる」

「その通りだが？」

当然だろう？ と言わんばかりに首を傾げるレティシア。

日向は唾然として、しばし言葉を失った。

「……………あー、うん。なるほどな。そうかよく分かった……………悪い、やっぱり説明してもらってもいいか？」

「説明も何も、言葉の通りだが……………龍の純血というのは、誕生するのではなく発生する。ある日突然、何の前触れもなく、強大な力が集結して形を成した種。それが龍種の純血だ。後世は単一生殖をした場合にのみ純血として生まれ、異種と交わった場合は亜龍と

して生まれる」

「へえ、単一生殖が可能なのか。だったら体長はかなり小さかったんじゃないか？」

「そんなことはない。龍の純血はいずれも想像を絶する巨体という話だ。特に吸血鬼を造った龍は、世界を背負った龍だったと、伝承に残っているほどだからな」

は？　と思わずまぶたを三度ほど瞬かせる日向。

というのも、今の話に限りなく近い存在が彼の知識の中にあつたからだ。

——『世界を背負った龍』とは、一部の神話に記された世界構造、もしくは世界観に似通った記述が存在する。

時には最高神の化身として神話の中で息づくそれは、宗教上の宇宙観だ。コスモロジー

例えば古代エジプトの宇宙観では、『星は植物に覆われて横たわる女神の姿であり、天の神は体を屈折させて大気の神に持ち上げられている』、というものがある。

世界Ⅱ神という宗教上の宇宙観は、少なからず存在しているのだ。

しかしレティシアの話によれば、そんな神話の宇宙観を持った生物そのものが実在しているという。

(……いや。箱庭に来る以前の吸血鬼たちの文明度が不明な以上、その龍が存在していたかどうかはまだ分からない。この類いの宇宙観は、文明が未発達時代に生まれるものだからな。……でも、もしも)

もしもそんな、神話の中でのみ許された龍が存在しているとしたら。

胸の奥から沸々と沸き上がってくるものを感じながら、日向は天井の星空を見上げて笑みを浮かべた。

(……ははは。本当に、あの人の言っていた通りだな。十六夜が聞いたら喜びそうだ)

そんなとある問題児の様子をありありと脳裏に浮かべつつ、自身も興味津々な日向は更にレティシアへと質問を続ける。

「文献とかは残っていないのか？」

「詳しい記録は残っていないらしい。我々吸血鬼は造物主である龍によつて造られ、その世界の系統が乱れないように監視する種族だった、という口伝だけが残っている。吸血行為による種族変化は、系統樹の守護者としての名残であるということだな」

私を知るのここまでだ、とそこでレティシアが話を置く。

この時、日向の心の中では感心が半分、呆れが半分といったところだった。

考えてみればありえない話ではない。

箱庭のようにでたらめな世界が現実存在しているのだ。

それが他にもあるからと言って、驚くことではないのかもしれない。

むしろ疑問はそれ以外に山ほどあるが……その辺りについては、今後自分で調べるとしよう。

「……ん？　ならもしかして、鬼種きしゆは精霊よりも幻獣寄りなのか？」

「いや、そうとも言えないな。鬼種は独立種であることが多い。個体によって霊体なのか、系統樹に依存していた獣なのかが変わる。我々吸血鬼は、その半々と言ったところだ」

そっか、と日向は相槌を打つ。

「……質問はそれで終わりか？　なら、今度は私から質問しても？」

「ん？　ああ、別にいいけど、俺に何か聞きたいことがあるのか？」

「日向は、元居た世界ではどのような生活をされていたのだ？」

今度は日向が目を丸くする番だった。

レティシアは湯船の中を進んでゆっくりと彼に近寄ると、普段見せないような表情でねだった。

「前から聞きたいと思っていたのだ。飛鳥や耀の故郷も気になるが、日向と十六夜はことさら気になる。強大な力を持つギフトもそうだが、箱庭では重宝される膨大な知識量も謎だ。故郷の世界では、その分野について研究していたのか？」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

やや返答に窮する日向に対して、レティシアはずいつ、とより一層身を寄せながら問い詰める。

「そうなのか？　では趣味か何かで？　それとも他に理由でも？」

「ずいつ、ずいつと言葉と共に段々近づいてくる彼女を前に、降参宣言よろしく日向は首を縦に振った。

「うっ……わ、分かった！　話す！　話すからもう少し離れてくれ！」

「承知した」

日向が赤い顔で視線を逸らしながら了承したとたん、あっさりと身を引くレティシア。
ア。

してやったりと言わんばかりの彼女に日向は盛大なため息を吐くが、考えてみれば、別段隠すことでも無い。

一呼吸置いた後で、ぽつぽつと話し始めた。

「まあ、そうだな……とりあえずレティシアの質問に答えるとするなら、俺の知識はほとんど、一人の女性に教わったものだ」

「ほう、それは博識な御仁だな。と言うことは、相当なご年配の方だったのか？」

「いや、見た目は二十歳そこそこぐらいで……そう言えば、実際の歳を聞いたことは無かったな」

今更になつてそんな事実が気がつき、日向は思わず苦笑する。

一方でレティシアは興味が尽きないのか、更に疑問を投げかける。

「あまり長い付き合いではなかったのか？」

「そんなことはないと思うぞ？ 俺が五歳の時に出会って、別れたのは十五の時だから

……大体十年間は一緒に暮らしていたことになるな」

ふと、そこでレティシアは日向の台詞に違和感を覚えた。

「……うん？ 一緒に暮らしていた？ 他の家族とはどうしていたんだ？」

何気ないレティシアの質問に、日向は少しだけ困ったような笑みを浮かべる。

それでも、間を置かずに答えた。

「……実を言うと、俺は物心つく前に両親に捨てられてな。その人に引き取ってもらうまでは、ずっと孤児院で生活してたんだ」

思いがけない生い立ちに、レティシアは思わず絶句する。

軽い世間話程度のもりだったのに、暗い過去を思い出させてしまったようだ。

彼女はすぐさま申し訳なさそうな顔で謝罪した。

「そ、それは……すまない。少々無遠慮が過ぎてしまった。許して欲しい」

暗い表情で頭を下げるレティシアに、日向は朗らかに笑いかけた。

「ははは、別に気にしなくていいよ。さつきも言った通り、捨てられたのは物心もつく前で両親の顔なんて覚えてないし、結果的にだけど、そのお陰であの人に出会えたんだ」

ふっと、在りし日を思い出すように、どこか遠くを見つめる日向。

脳裏に浮かぶのは幼少のみぎり。

今でも決して色褪せることの無い、子供の頃の大切な思い出。

灰色の空。

降り続ける雨。

孤児として預けられた、とある児童養護施設の屋上で。

後に天道日向と名付けられる少年は、一人の女性と巡り会った。

「今にして思えば俺の……『天道日向』の人生は、きっと、あの時から始まったのかもしれない」

凍てついていた自分の心に——生まれて初めて、愛情という名の温もりを与えてくれた人。

常に孤独だった自分に——生まれて初めて、居場所を与えてくれた人。

誰からも疎まれていた自分に——生まれて初めて、必要だと言ってくれた人。

あの日、あの時、あの場所で。

後に天道日向と名付けられる少年は、

——『忍音』と名乗る、

一人の女性と巡り会った——

第27話 日向の過去

その日は弱い雨が朝から延々と降り続いていた。

梅雨時の空は憂鬱なくらいに鉛色で、地上に建ち並ぶ無機質なビル群と相まって、まるで色の抜け落ちたモノクロ絵を見ているようである。

そんな世界の片隅で、少年は一人、雨に打たれながら佇んでいた。

夜の帳のような黒髪には水滴が滴り、一体いつからそこに居たのか、服は完全に濡れてピッタリと肌に張りついている。

およそ子供とは思えないほどの感情がこもっていない声で、少年はぽつりと呟いた。

「……寒いな」

それは果たして、何を指しての言葉であつたか。

自らが置かれている状況か。

あるいは人という存在にか。

あるいは世界そのものにか。

いずれにせよ、まだ五歳という幼い齢にありながら、少年の心はまるで氷のように冷

え切っていた。

なぜか、と問われても、少年は首を傾げるだろう。

気づいた時には、すでにそうになっていたのだから。

物心つく前に両親に捨てられ。

拾われた施設でも腫れ物として扱われ。

今もこうして立ち入り禁止の屋上へ無断で出ていたとしても、誰かに注意されるどころか気に留められることもない。

少年にとって、この世界はあまりにも冷たかった。

まるでそうあれかしと世界が望んでいるかのように、現実には彼の心から熱を奪っていったのだ。

それでも、希望をもって見たこともある。

少しでも何かを変えようと、誰かに認めてもらえるようにと、努力をしてみたこともある。

だが、結果はいつも同じだった。

何も変わらず、誰にも認めてもらえない。

いや、事実はもつと残酷だった。

否定された。

忌諱された。

嫌悪された。

唾棄された。

誰も彼もが、まるで化け物のように少年を見た。

終わりの見えない道を、歩き続けるには限界がある。

いつしか少年は、全てを諦めていた。

「さて……そろそろかな」

そしてだからこそ、少年は決めたのだ。

もしもこのまま何も変わらないなら、このまま誰にも認めてもらえないなら、そしてそれが、この世界の日常だと言うのなら——己自身で、全てを非日常へと変えてしまおうと。

五年間も耐えたのだ。

五年間も堪えたのだ。

誰も自分に構わないのなら、こちらだって、誰かに構う必要などないはずだ。

「それじゃあ、始めようか」

ありていに言えば、これはただの我が儘だ。

世間で言うところの子供の癩癩と言えるかもしれない——が、そんな生易しい表現で

は済まないだろう。

何せ自分は今から、生まれて初めて本気を出す。

これまでの生涯で一度たりとも振るうことの無かった、文字通りの全身全霊を世界に向ける。

それでもしも壊れてしまうようなら……この世界そのものでさえも、自分を受け入れられないということだ。

そうなれば、もう思い残すこともない。

全てを終わらせた後で、自分も潔く舞台から退場するとしよう。

そして遂に、少年が一步を踏み出そうとした時——不意に、屋上に繋がる扉が開いた。

そのままコツコツと靴音が聞こえ、誰かが少年の背後までやって来る。

そして、静かに口を開いた。

「やあ、君が噂の少年かな？」

声は女性のものであった。

美しく澄んだアルトボイスは、さながら心地の良い音色のごとく響き渡る。

これまでに出会った誰よりも綺麗な声だと、掛け値なしに少年は思った。

と同時に、自分に向けられる言葉に負の感情が感じられないのは初めてで、少年は僅かに興味を惹かれた。

振り返り、その姿を確認する。

腰まで届く長く艶やかな黒髪を赤い御紐で結んだ女性は、胸元を開けたネイビースーツの下に白いシャツを着込み、靴は踵が高めな黒いハイヒールを履いていた。

女性にしては背が高く、立ち姿は凛としていて、整った顔立ちからは落ち着いた大人の印象を受けるが、同時にどこか幼くも見える。

少年は女性の姿を確認した後、質問に答えた。

「どんな噂かは知りませんが、たぶん僕で合ってますよ。そういう怪しいお姉さんは誰ですか？」

「おや、これはずいぶん物言いだね」

「見ず知らずの人を警戒するのは当然でしょう？」

「ふむ、なるほど。それは確かに感心な心がけだ。しかし君も男の子なら、女性には親切に接するものだよ。たとえそれが、初対面の相手であつてもね」

そう言つて女性は美麗に微笑んだ。

少年はしばし彼女の言葉を考えるような素振りを見せ、やがて素直に頭を下げた。

「……ごめんなさい。何せこれまで、他人と接する機会が極端に少なかったものですから」

「気にしなくていいよ。それよりも、まずは君の質問に答えようか。私の名は忍音^{シノビネ}。君

は何ていうんだい？」

「僕に名前はありますか？」

「む、それは困ったな」

女性はさして驚いた様子も無く、うーんと腕を組んで考える。

すると何かを思いついたのか、ポン、と手を打った。

「よし！ それなら私が君の名前を考えてあげよう！ どうだい？ 君が良ければだけ

ど」

「……僕の……名前を？」

「ああ」

女性は朗らかに笑って頷く。

対称的に、少年は複雑そうな顔をした。

「……お姉さんは、僕が怖くないんですか？」

「私が？ 君を？ ははは、そんなことあるわけじゃないじゃないか。ただの子供を恐れる

ほど、私は小心者じゃないからね」

その言動に、少年は今度こそ目を丸くした。

これまで自分を普通の人間として扱ったのは、目の前の彼女が初めてだ。

少年はじっと女性を見つめる。

少なくとも、嘘をついているようには見えなかった。

「……他人からすれば、僕は化け物らしいですよ?」

「私からすれば、君はただの人間だよ」

「これでも、ですか?」

刹那、少年は真横に腕を振るった。

たったそれだけで大気が強烈に渦を巻き、局地的に全ての雨露を吹き飛ばす。

凄まじい風圧が女性の元まで届くが、それでも彼女の泰然とした姿勢は崩れない。

「ああ、それでもだよ」

「……」

「君が何をしようと、何を見せようと、君自身が人間であることは変わらない。ほんの少し周りより力が強かろうが、ほんの少し周りより頭が回ろうが、君はれっきとした人間だよ。そして同時に、ほんの少し周りよりも——つまらない人間だ」

「——ッ!?!」

ガコン! と、少年の足下から音が砕く音が響く。

見れば彼の右足は、地面に小さなクレーターを作っていた。

剣呑な雰囲気を持ちながら、少年は低く女性に問う。

「……僕が、つまらない人間?」

「ああ、そうだよ。理由を教えてあげようか？　これはあくまで、私の推測なんだけどね。君は恐らく——何かに感動したことが無いだろうか？」

「……感動？」

「そうさ。『感動とは即ち、生きるのに必要な糧であるッ!!』……というのは、とある人からの受け売りだけどね。だから感動を知らない君は、ある意味では死人と同じ。この世界で誰よりもつまらない人間なのさ」

ギリツ、と、少年は奥歯を噛み締める。

顔を俯かせた彼は、やがて凍えるような鋭い声で口を開いた。

「……訂正、してください」

「何をだい？」

「僕は、確かに感動というモノを知りません。それでも——この世界の誰よりも劣るだなんてことだけは、認めるわけにはいきません」

「私が訂正したところで、事実は何も変わらないよ。そしてそれは、君が一番良く分かっているんじゃないのかい？」

「……違います。そんなこと、ありません」

「いいや、違わないよ」

「違うッ!!」

轟、と少年を取り巻く大気が悲鳴を上げる。

殺気を含ませた凄まじい怒りの奔流をぶつけられてなお、女性は揺るぎもしなかった。

「僕は、劣ってなんかいない!! だってそれじゃあ、僕はアイツらに敗北したことになる!!」

「……敗北?」

「僕の周りにいた人たちは皆、僕のことを化け物だと言った!! 出会う人全てが、僕に恐ろしいものを見るような目を向けた!! だけどそれは、僕がアイツらよりも強いから!! 僕が特別な存在だからツ!!」

「……………」

「もしも僕が、アイツらよりも劣っていると認めたら——僕は本当に、この世界にとつて、必要の無い存在になってしまう!!」

少年の叫びにも似た独白を、女性は黙って聞き届ける。

「だから、僕は今から証明するんだ!! この世界で、僕が誰よりも凄いんだってことをツ!!」

「……そのために、君は誰かを殺すのかい?」

「……………」

不意に放たれた女性の言葉に、少年の体がビクリと震えた。
真剣な眼差しで女性は続ける。

「君が今からやろうとしていることは、多くの人を巻き込むよ。確実に、取り返しがつかないことになる。もしそうなってしまったら、この世に君の居場所は本当に無くなってしまうだろうね」

「……僕の居場所なんて、最初からどこにもありませんよ」

「かもしれないね。だけどそれは、これまでの話だろう？ これから先のことなんて誰にも分からない。それでも今、君がその力を振るったら、そんな未来の可能性すらも粉々に打ち砕いてしまうんだよ？」

「……構いませんよ。これ以上希望に縋るくらいなら、僕は諦めることを選びます。この世界に僕の居場所なんて無い。誰も僕を必要としない。この世に……“奇跡”なんてモノは無いんです」

「……それが、君の結論かい？」

「ええ。五年も悩んで出した結論です」

そうかい、と呟いて、女性はそつと瞳を閉じた。

そして次の瞬間、射抜くような双眸を浮かべ、

「——だったら、ここで私を殺してみなさい」

真つ直ぐに、ただ一言、そう告げた。

少年は驚愕に目を見開く。

両手を左右に広げながら、女性は更に少年を煽る。

「ほら、どうしたんだい？ この世界を相手取つてみせると言うのなら、私にその覚悟を示してみなさい」

「……本気ですか？ 僕がその気になれば、お姉さんを殺すのは簡単ですよ？」

「そうだね。生憎と私の体は、一般的な女性のそれと大差ない。君がその拳を軽く振るうだけで、紙切れのようにちぎれ飛ぶだろう。……でもね、私は敢えて断言するよ。君に、私は殺せない」

はつきりと、女性は宣言した。

少年は拳を握り締め、最後通牒のように問う。

「……僕の覚悟は本物ですよ？」

「なら、どうして拳が震えているんだい？」

「——ッ！ これは……！」

指摘された途端、少年は咄嗟に自分の右拳を押さえた。

それでも、震えは止まらない。

「ほら、その震えが何よりの証拠だよ。どんなに達観したように振る舞っていても、君の

本質は変わらない。ただの寂しがり屋な子供のさ」

「う、うるさい」

「気に障ったかい？ でも事実だろう？ どんなに理屈を並べ立てても、君の本心は一つだ。本当は居場所が欲しいんだろう？ 本当は誰かに必要とされたいんだろう？」

「ち、違う」

「だから違わないと何度も言ってるじゃないか。覚悟だ何だとカッコつけてないで、素直になつたらどうだい？ 声に出せばいいんだよ。『誰か僕に構ってください』ってね」

「うるさい、黙れ……」

「黙って欲しいなら私を殺せばいいじゃないか。ほら、君は周囲の人間より優れているんだろう？ それを証明したいんだろう？ だつてそうしないと、君は本当にこの世界で必要の無い存在になつてしまふんだから」

「黙れ、黙れ！」

「もう一度言うよ。君に、私は殺せない」

「あああああああああああッツッ!!」

その瞬間、少年は足場を碎いて踏み込んだ。

目にも止まらぬ速さで瞬く間に女性の眼前へと迫り、勢いよく振り抜かれたその拳は

「……………どうして」

彼女に届く寸前で、止められていた。

「どうして……………僕は……………」

少年の目に涙が溢れてくる。

瞳は揺れ、声が震える。

女性はそつと、両手で彼の拳を包み込んだ。

「だから言っただろう？ 君に私は殺せない」と

「……………覚悟が、無いからですか？」

「違ふよ」

女性は屈み、少年の涙に濡れる顔を見つめて微笑むと——ぎゅつと、その小さな体を抱きしめた。

「……………こんな優しい子に、誰かを傷付けられるわけが無いじゃないか」

「——ッ！」

たった、それだけの言葉。

しかし、その言葉は確かに——少年の心に届いた。

生まれて初めて感じる他人の温もりは、少年のこれまで凍てついた心を瞬く間に溶かしていく。

胸の奥から激しい熱の奔流が込み上げ、更に涙が溢れて来た。

沸き起こる感情を抑えられず、少年はおもむくままに心情を吐露する。

「僕は、僕は……」

「うん、いいよ。私が受け止めてあげる。君の素直な気持ちを聞かせてごらん」

「……僕は、ずっと居場所が欲しかったんです」

「……私が、君の居場所になるよ」

「ずっと、誰かに必要とされたかったんです」

「私が、君を必要とするよ」

「僕は、僕は……」

「子供なんだから。泣きたいときは、素直に泣いていいんだよ？」

「……う、うわああああああん!!!」

少年は泣いた。

まるでこれまでの五年間の想いを、全て清算するかのよう。

女性の胸の中で、いつまでも泣き続けた。

やがて、女性は少年に問いかける。

「……ねえ。もし良かったら、私の養子にならないかい？」

「ぐすつ……ええ？」

「実は、今日君へ会いに来たのはそのためなんだ。この施設を離れて、私と一緒に暮らすんだよ」

「で、でも、僕と居たら、きつとお姉さんも周りの人から疎まれて……」

「構うもんか。さつきも言っただろう？ 私には君が必要なんだ。後は、君次第だよ」

少年は顔を俯ける。

しばらくして、ぽつりと呟いた。

「……僕も、お姉さんと一緒に居たいです」

「……そつか。それじゃあ私は、今日から君のお義母さんだ」

女性は少年から身体を離し、優しげな声で話しかける。

「君は、さつきの提案を覚えているかい？」

「……提案？」

「ああ。君の名前を、私が考えるという提案だ」

「え、えつと……」

「私が決めてもいいかい？」

少年は少しだけ戸惑うような素振りを見せた後、やがて、こくりと頷いた。

女性は少年に額を合わせ、ゆつくりと彼の名前を告げる。

「君の名前は日向。天道日向だ」

「てんどう、ひなた……」

「ああ。とても温かそうな名前だろう？」

「は、はい」

少年は顔を赤くして応える。

女性は微笑むと、次に少しだけ表情を真剣なものにした。

「……日向君。今から言う私の言葉を、しっかりと覚えておいて欲しい」

「え？」

「君にはこれから、多くの不幸が降りかかるかもしれない。いつかまた耐え切れなくなって、何もかもに絶望して、自分を見失う時が来るかもしれない」

「……」

「だけどね？　いつか君を認めてくれる世界が、君を必要としてくれる人々が、きつとどこかに現れる。君のその力は、絶対に呪いなんかじゃない。君は決して、いなくてもいい存在なんかじゃない。君のその力は、誰かのために振るえる力だ。そして君は、それが出る優しい心を持っている。私が言うんだから間違いないさ。だから、もしもそんな世界に、そんな人々に出会えたのなら——」

女性は慈愛に満ちた微笑みを浮かべ、

「——君の力で、守ってあげてね」

と、とても優しい声音でそう言った。

「あ、あの……」

「ふふふ。今はまだ、分からなくてもいいさ。私の言葉を信じるか否かは、これから長い時間を掛けて、君自身で決めるといい」

「わ、分かりました。えっと……お義母さん」

ズキーン!!!

その瞬間、女性の胸をハートの矢が貫いた。

顔を俯けてプルプルと震える女性は、しばらくしてバツと勢い良く顔を上げると、

「日向君！ いや、ひー君！」

「え？ ひ、ひー君？」

「すまないんだけど、今の言葉をもう一度言ってくれるかな？」

「ええ？ えっと、はい。……お義母さん？」

「ぐふっ……もう一度」

「お義母さん」

「がはっ……もう一回」

「お義母さん」

「かふっ……もう一声」

「お義母さん」

バキューン!!!!

ドキューン!!!!

ズドキューン!!!

と、連続して矢が胸を貫く。

堪らずに、女性は少年を抱き上げた。

「あーもう！ ひー君は可愛いなあ！ この可愛いさは世界で私だけのものだよ！」

少年を抱きしめながらクルクルと回る女性。

豊かな胸に顔を埋めた少年は、息が出来ないのか必死に両手をバタつかせる。

女性が拘束を緩めると、ぷはっと顔を上げて大きく息を吸い込んだ。

女性は苦笑しながらごめんごめんと少年の頭を優しく撫で、そつと柔らかな笑みを浮

かべた。

「……ひー君。私が見つけた君の名前にはね、二つの意味があるんだよ」

「二つの意味、ですか？」

「うん。一つ目はね、ひー君が太陽のように明るく元気な子に育ちますように、つていう

お願いだ」

「二つ目は、何ですか？」

「ふふ、それはね……」

女性はもう一度、少年を優しく抱きしめる。

「私はこれから母親として、ひー君に精一杯の愛情を注ぐよ。だけどひー君は、それを私に返す必要は無いんだ」

「え？」

「その代わりに、いつかひー君に大切な人たちが出来たら……その時こそ、全力で愛情を向けてあげて欲しい。君の名前の二つ目の意味はね…… 太陽のように、皆を明るく照らせる存在になりますように」 っていう願いだよ」

「太陽のように……」

「そうさ。今日君が感じた温もりを、いつの日か周りの人々にも向けられるような。そんな誰かを想える優しい人間に育って欲しい。それこそが、私の一番の願いだ」

「……はい」

今度こそ、少年は力強く頷いた。

女性は満足げな笑みを浮かべると、よしと声を上げて背筋を伸ばす。

「それじゃあ、もうこんな場所とはおさらばだ。院長と話がついているから、早速私たちの家に向かうとしよう。そんなに大きくは無いけれど、日当たりの良い素敵な場所なんだ。きつとひー君も気に入るよ」

「はい。」

女性は朗らかな笑顔で手を差し伸べる。

少年もまた、朗らかな笑顔でその手を握る。

二人は手を取り合つて寄り添い歩く。

その姿はまるで、本当の親子のようで。

——いつの間にか、雨は上がっていた。

それからおよそ十年に渡る長い時を、日向は忍音と共に過ごした。

彼女は最初の言葉に違うこと無く、日向に精いっぱい愛情を注いだ。

唯一、家事だけは苦手で——というかあまりにも壊滅的だったため——日向が行つて

いたものの、学校に行けない日向に自らが教師役となり、持ち得る知識の全てを与えた。

暇さえあればどこにでも彼を連れ出して、国内外を問わず様々な場所へ訪れた。

正月やクリスマスといった行事は毎年欠かさずに執り行い、常に二人一緒に楽しんだ。

だ。

それは、平凡ながらも穏やかな日常。

日向がずっと、焦がれ続けていた幸せな生活。

「あの人と一緒に過ごした時間は、間違ひなく俺にとつて幸せな日々だった。それだけは、今でも迷ふことなく断言できる。……けど、時間が経つにつれて、同時にこうも思つたんだ」

多くのことを経験する度。

周囲と変わらない日常を送る度。

ああ、自分はやつぱり。

“この世界の平凡にはなれないんだ”と。

「……そして、そんな事実を確信した頃。ある日突然、あの人は俺の前から姿を消したんだ。別れの言葉も置き手紙も無く、いつものように『行つてくるよ』と笑顔で家を出て行つたとき、二度と帰つて来なかつた」

今にして思えば、前兆はあつた。

行方知れずになるまでの数日間、彼女の態度は明らかに普段と違つていた。

悲しそうな、それでいて辛そうな。

彼女自身、そんな素振りは見せまいとしていたようだが、日向にはそんな彼女の心の機微が伝わつていた。

「探そうにも、手がかりは一切残つていなかった。まるで最初から居なかつたかのよう
に、忽然と消えてしまつたんだ」

その後の足取りも、当然だが分からなかった。

「それから二年経つても、結局あの人は戻つてこなかった。正直に言つて、あの人の居ない日々は退屈で味気ないものだったよ。けど、そんなある日……空から一通の封書が落ちてきたんだ」

それは、異世界からの招待状。

彼女が語っていた世界への入り口。

「この時、俺は思つたんだ。ああそうか、あの人は最初から、こうなることが分かつていたんだって。だからこそ、俺は迷わなかつた。それに、何だか後押しされているような気がしたんだ」

—— “この先に、君の望む世界がある”

そう、彼女に言われているような気がした。

そして、日向は箱庭の世界に行き着いた。

そこで十六夜に出会い。

飛鳥に出会い。

耀に出会い。

黒ウサギに出会い。

—— “ノーネーム” に出会つたのだ。

これこそが、これまで天道日向の歩んで来た人生の全てである。

「……あの人が今どこかで生きているのか、それとも死んでいるのかは分からない。全てを捨ててこの世界に来たつもりだが、それだけは今でも未練だよ」

——それでも、後悔はしてないけどさ。

と、日向は朗らかに笑って話を終わる。

ふと目の前で湯船に浸かるレティシアに視線を向けてみれば、彼女は何やら思い詰めたような表情をしていた。

日向は首を傾げて問いかける。

「レティシア？ どうしたんだ？」

「……え？ あ、ああいや、何でもない。少しのぼせてしまったようだ。そろそろ、私も上がらせてもらおうよ」

レティシアは湯船から出るために立ち上がる。

この時、彼女の内心は盛大に乱れていた。

足取りが覚束ず、思考もまともに定まらない。

それだけ今の話は、事実は、彼女にとつて信じがたいものだった。

(まさか、まさか、まさか……！ お前なのか、忍音……!!)

日向は知らない。

今より三年前、〃ノーネーム〃には二人の参謀が居たことを。

遠き日に姉妹の契りを結んだ、二人の女性が居たことを。

そしてその妹に当たる人物の名が——忍音であるということ。

(そんな、それでは……！もしも、今の話が本当だとするのなら、忍音は——箱庭の外に追放されていたというのか……!?)

急速に顔が蒼白になっていくのが分かった。

心の中では一心に、ただ一心に、一つの事を願ひ続けていた。

それで事実が変わるなら。

それで星の廻りが変わるなら。

億千万でも願ひ続ける覚悟があった。

——どうか間違いであつてくれ。

——とうか人違いであつてくれ。

——頼むから、同名の何某であつてくれ。

それでなければ……今日までの三年間が、報われない少女が居るのだ。

レティシアは血の気の引いた顔のまま、浴槽の縁に足をかける。

そのまま力を込めて湯船から上がろうとした瞬間——ツルツと、足を滑らせた。

「——ツ!?!」

「レティシアアツ!!!」

ばっしやーん!!!

と盛大な音と共に水しぶきが上がる。

背中から勢いよく湯船へと倒れ込んだレティシアは、咄嗟に反応した日向の腕によって抱きとめられた。

ほつと安堵の息を吐き、日向はレティシアに声をかける。

「ふう、危なかつたな。大丈夫か?」

「あ、ああ。すまない、ありがとう主殿」

慌てて謝罪する彼女だが、その様子はどこか落ち着きがない。

いつも冷静沈着な彼女にしては非常に珍しい光景だ。

「一体どうしたんだ? さっきも何だか心ここにあらずって感じだったが……」

「そ、そんなことはないぞ? きつと湯船に浸かりすぎて、少しぼーっとしていたのだらう」

「そうか? ならやつぱりのぼせたのかもしれないな。早く上がって休んだほうがいい」

「ああ、そうさせてもらうよ。それでその……そろそろ離して欲しいのだが……」

そう言われ、改めて状況を認識する日向。

現在、彼は湯船に倒れ込んだレティシアを抱きとめている状態だ。

当然体は密着しており、日向の腕の中に収まっている彼女の頬には、ほんのりと赤みが差していて――

「……っ！ わ、わるッ!?!」

「なっ!?!」

日向が慌てて離れようとしたその時、元々倒れ込んだ衝撃で緩んでいたのか、レティシアが体に巻いていたタオルがはらり――とひとりでに広がった。

タオルはそのまま物理法則に従って湯船の中へと落ちていく。

当然ながら、彼女の艶やかな肢体は露わとなり、日向の前に惜しげも無く晒される。

「~~~~~ツッ!?!」

ぼんっ！ と音でも鳴りそうな勢いで顔を真っ赤に染めたレティシアは、すぐさま大事な部分を両手で隠して湯船の中へと沈み込んだ。

「……………」

二人は無言になり、静寂が湯殿を支配する。

やがて律儀に視線を逸らしていた日向は、そつと湯船に浮かんでいたタオルを拾い、レティシアに向かって差し出した。

「……………」

「……いや、こちらこそ」

タオルを受け取り、静かに体へ巻き直す。
すると、再び無言の時間が流れる。

「……その、見たか？」

不意に、レティシアが問いかけた。

顔を赤くした日向は僅かに躊躇するも、素直に答えることにした。

「……一瞬だけ」

「……そ、そうか」

二人で更に顔を赤らめ合う。

そのまま湯船に浸かり続けること数十秒。

やがて、日向が口を開いた。

「そ、そろそろ出るか。またのぼせたりしないか心配だしな」

「う、うむ。そうだな。そうしよう」

二人はどちらからともなく立ち上がる、やはり無言で湯殿から出た。

そして脱衣場に戻ったところで、十六夜のヘッドホンが無くなったことを知っていた。

第28話 嵐の中の邂逅

明くる日の朝、南側へと出発する当日。

予定の時刻になっても、十六夜は集合場所である本拠の前に姿を見せなかった。

初日から参加組の飛鳥は、今日も深紅のドレススカートを風になびかせ、足下には遠出用の鞆を置いている。

日傘を傾けながら、飛鳥は心配そうに頬に手を当てて口を開いた。

「十六夜君、まだ見つけられないの？ 夜通し探していたのでしょうか？」

「YES。今も子供たちを総動員して探しているのですが……うう、そろそろ出ないと間に合わないのです」

おろおろし始める黒ウサギの隣で、同じく初日から参加組の日向は落ち着き払った様子で言う。

「ま、そんなに心配しなくても大丈夫だろ。あいつのことだ、そろそろ何かしらの決断をするさ」

彼の言葉を肯定するように、ジンが本拠の入り口を見て声を上げた。

「あ、来ましたよー」

本抛の中から十六夜が出てくる。

しかしその頭にはいつものヘッドホンはなく、代わりにヘアバンドがのつていた。

ぽかん、とした表情で黒ウサギが問う。

「ど、どうしたんですそれ？」

「頭の上に何かないと髪が落ちつかなくてな。それより話がある」

スツと十六夜が道を空けると、その後ろからトランクを引いた耀と三毛猫が進み出てきた。

彼女は十六夜の隣に並び、その顔を見上げて小さく首を傾げると、

「……………本当にいいの？」

「仕方ねえさ。アレをのつけてないと、どうにも髪の収まりが悪い。とつくに壊れたスクラップだが、無いと困るんだよ」

前髪を掻き揚げて飄々と笑う十六夜。

そのやり取りを見て、日向たちも察するように顔を真合させた。

つまり十六夜は、ヘッドホンを探すために本抛に残るというのだ。

耀はぱちぱちと瞬きしながら十六夜の顔をしばし見つめ——ふつと、柔らかな笑みを浮かべた。

「ありがとう。十六夜分まで頑張ってくるね」

「おう。ついでに友達百匹くらい作ってこいよ。南側は幻獣が多いらしいし、俺としてはそっちの期待も大きいぜ?」

「ふふ、わかった」

頷き、耀はトランクを引いて日向たちと合流する。

これで初日組の顔ぶれが出揃った。

見送りに出てきたレティシアは、可憐なメイド服姿で彼らへと微笑む。

「では皆、道中はくれぐれも気をつけてな。本拠のことは私たちに任せて、存分に収穫祭を楽しんでくるといい」

「YES! よろしくお願いするのですよレティシア様!」

元氣よく返事する黒ウサギ。

ふと、そこで日向とレティシアの目が合った。

その瞬間、二人は同時に顔を赤くすると、これまたさつと同時に視線を逸らした。

「……ひ、日向も、気をつけてな」

「……あ、ああ。ありがとうレティシア」

どこかぎこちなく会話する二人。

そんな彼らの様子を見て、他の面々はひそひそと小声で話し合う。

(ねえ、あの二人、何かあったのかしら?)

(うん。明らかに様子が変だよね)

(レティシア様が顔を赤らめているなんて、滅多にない光景なのですよ)

(確かに……)

井戸端会議よろしく身を寄せ合って相談し合う飛鳥たち。

ただ一人、その輪に加わっていない十六夜は日向たちの様子を眺めながら、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

そんな彼に飛鳥が問いかける。

(ちよつと十六夜君、何か知っていそうな顔ぶりね?)

(説明を要求する)

(ヤハハ。いやな? 実は昨晚、ちよつとした小細工を使って日向とレティシアだけを一緒に混浴させたんだが……ここまで言えば分かるだろ?)

ピーン、と飛鳥たちは察した。

そしてすぐさま十六夜と同様にニヤニヤとした笑みを浮かべ始める。

(ふふ、なるほど、そういうことね)

(十六夜……グツジョブ)

(ヤハハ。そう褒めるなよ。まあ、何があったのかは知らねえが……少なくとも、何かは

あつたんだろうな)

(な、何かつて、何でしょう?)

(い、いけませんジン坊ちゃん！ ジン坊ちゃんにはまだ早すぎます！)

黒ウサギは慌ててジンを話題から遠ざける。

そうして井戸端会議を終えたところで、ちょうど日向とレティシアも会話を終えたよ
うだ。

十六夜たちの方へと振り向く彼らだが……そこではたと首を傾げた。

「ああ、悪い。ちよつと話し込んでしまつて……つて」

「皆、私たちを見てどうしたんだ？ 特に主殿たちの表情が気になるのだが」

ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ。

問題児たちは、今日も非常に元気であつた。

その後、初日組は手を振りながら本拠を後にした。

こうして日向、飛鳥、耀、黒ウサギ、ジンと三毛猫、計五人と一匹は南側に向けて旅立ったのだった。

居残り組の十六夜とレティシアも、小さく手を振ってそれを見送る。

やがて彼らの背中が完全に見えなくなった頃、ふと、レティシアは十六夜に問いかけた。

「十六夜……その、本当に良かったのか？ 外門利権証を手にしてまで勝ち取った順番を、こうもあつさり譲ってしまつて。ヘッドホンなら私たちが」

「出てこねえよ」

スパットと、言葉を切るように十六夜は言った。

「これだけ探しても見つからないんだ。恐らく、隠した本人にしか分からない場所にあるんだろう」

レティシアの顔が緊迫する。

これまであえて口には出さなっていたが、彼女も同じ結論に達していたのだ。

「俺がアレを外したのは風呂呂に入ってる間だけ。それはお前や日向も見ていたから間違いない。ヘッドホンがひとりでどこかへ行くはずはねえだろ？ つくも神でも憑いたってんなら、ま、それはそれで面白そうだけだな」

クツと冗談めかして笑う十六夜だが、レティシアの表情は優れないはまだ。

「それは……しかし、一体誰が」

「さあな。状況証拠からして一番怪しいの春日部だが、あいつはそんな真似をするようなヤツじゃない。だからこそ先に行かせたんだしな」

では誰が？ とレティシアが更に問おうとするも、十六夜はひらひらと手を振った。

「ほつとけほつとけ。そのうち出頭するだろう。どうせ素人の作ったヘッドホンだ。一銭の価値も無いしな」

「……素人が作った？ まさか、知人が作った物なのか？」

むむつ、と彼女は眉根を寄せる。

もしかすると、十六夜にとって大切な思い入れのあるモノだったのかもしれない。

むむむむむつ、と腕を組んで本気で悩み始めるレティシアの姿を前にして、十六夜は面倒くさそうに話題を変えた。

「そんなことよりも、日向から聞いたぞ？ 昨夜はずいぶんと面白そうな話をしていらしいじゃねえか」

「ゆ、昨夜か……」

ほんのりとレティシアの頬に赤みが差す。

うっかり湯殿での出来事を思い出してしまったのだろう。

(こりや、やつぱり何かあったな)

確信を深めながら、十六夜はニヤツと悪戯好きそうな笑みを浮かべ、

「どうした？ ひよつとして、日向に迫られでもしたか？」

「せまつ……!!? ば、馬鹿なことを言うな！ そんなわけないだろう！」

必至に否定するレティシア。

いつも冷静な彼女にしてはらしくない取り乱し様だ。

本音を言えば根掘り葉掘り聞き出したいが、今はそれ以上に聞きたいことがある。

「ま、その話は置いてだ。とにかく昨夜、あいつに色々と話したことは間違いないだろう？」

レティシアは羞恥で奥歯を噛み締めていたが、やがて気を取り直すように小さく咳払いをした。

「こほん。ま、まあ、確かに色々と話したが……主殿も聞きたいのか？」

「ああ、聞きたいね。何なら授業料だつて払うぜ？」

ヤハハと笑う十六夜。

レティシアはしばし考えた後、ならばと提案する。

「それでは、主殿の故郷について教えてもらえないだろうか？」

ぴたり、と十六夜は笑みを止め、すうつと目を細めてレティシアを見た。

「それが、話の対価だと?」

「ああ。日向にも昨夜、故郷の話聞いたんだ」

「……ふーん?」

十六夜はレティシアの顔色を伺うが、そこには単なる好奇心とは別の思惑が見て取れた。

まるで何かを懸念するような、不安を帯びた表情だ。

十六夜は少しばかり考える。

が、別段秘密にするような話でもない。

ややあつて、彼女の要求に応えることにした。

「……うまい朝食と緑茶、あと茶請け。話をするにも、まずは場所を整えてからだ」

一転してヤハハと軽快に笑う十六夜。

レティシアは片足を半歩ほど引いて膝を折り、両手でスカートの裾を摘まみ上げると、優雅に微笑んで一礼した。

「承りました、マイマスター。今日の朝食はこの私が、腕によりをかけて作らせて頂きます」

茶目つ気を込めて仰々しく了承する。

洗練された所作で冗談を言う彼女が可笑しかったのか、十六夜は高く哄笑を上げて食

堂に向かった。

——箱庭二一〇五三八〇七外門区画。

——ペリベツド通り・噴水広場前。

《アストラルゲート境界門》の起動は定時に行われる。

基本的に個人での使用は緊急時以外は禁止されているため、起動時には行商を目的とするコミュニケーションなどが一斉に集まってくる。

使用料は一人につき《サウザンドアイズ》発行の金貨一枚。

最下層に在籍する多くのコミュニケーションにとって決して安い出費ではないが、それでも需要が尽きないのはやはり、この箱庭の都市の交通には欠かせないギフトだからだろう。

そんな《境界門》の起動を待つ傍ら、飛鳥は門柱に刻まれた虎の彫像を凝視すると、フンと小さく鼻を鳴らした。

「収穫祭から戻ってきたら、いの一番この悪趣味な彫像を取り除きましょう」

「ま、まあまあ飛鳥さん。それはコミュニケーションの備蓄が十分に蓄えられてからでも」

「いやいや黒ウサギ、飛鳥の意見にも一理あるぞ？ なにせこの門は、これからジンを売

り出していく上で重要な広告塔になるんだからな。先行投資と思ってコーディネートしておくのも悪くない。というわけで、まずはジンの全身をモチーフにした彫像と肖像画を」

「お願いですからやめてくださいい！」

ジンが顔面蒼白で叫ぶ。

流石にそれは恥ずかし過ぎるにもほどがある。

飛鳥は心底残念そうにため息を吐き、

「じゃあ、黒ウサギを売り出しましょう」

「何で黒ウサギを売り出すんですかつ！」

スパン、とハリセンで軽めなツツコミ。

飛鳥はむうつと唇を尖らせた。

「名案だと思ったのに」

「ただの迷案じゃないですか！ 黒ウサギが辱めを受ける以外何の利益もありませんよ！」

冗談ではないとウサ耳を逆立てて固辞する黒ウサギ。

その隣でじつと彫像を見つめていた耀は、不意にポン、と閃いたように手を打つと、

「……じゃあ、黒ウサギを売りに出そう」

「YES♪ って何で黒ウサギを売るんですかああああああ!!!」
スパアーン!

と今度は強めにハリセンを叩き込む。
耀もむうつと唇を尖らせた。

日向はやれやれと首を振り、

「こちら、あんまりわがままを言うもんじやないぞ、黒ウサギ?」

「わがまま?!、これわがままなんですか?!」

さらつと放たれた言葉に衝撃を受ける黒ウサギ。

最早ツツコむ気力もなく、彼女はぐったりと肩を落とした。

十六夜が欠けたところで、彼らが問題児であることに変わりはないのだ。

早くも行き先に不安全開の黒ウサギだが、そこで日向が仕方なしと言わんばかりに肩を竦めつつ、

「仕方ない。なら折衷案として、十六夜の彫像と肖像画を」

「「それだツ!!!」」

全員の心が一つになった瞬間だった。

その後、黒ウサギは二枚の招待状を取り出して注意事項を確認する。

「我々が今から向かうのは、南側の七七五九一七五外門。// 龍角ドラコウを持つライオン驚獅子ライオンが主催

する収穫祭でございます。しかしそれとは別に、舞台主である巨躯の御神木「アンダーウッド」の精霊からも招待状が届いております。両コミュニティには前夜祭のうちに挨拶へ向かいますので、それだけは心に留めておいてください」

「「え〜」」

「留めておいてくださいっ！」

もうっ！ と頬を膨らませる黒ウサギ。

そんなやり取りもしておき、間もなく「境界門」の起動が始まった。

青白い光が門の周囲に満ちていくと、待機していた利用者たちが次第に列を作り出す。

日向たちは「地域支配者」レギオンマスターとして、列の脇から門が開かれるのを待っている。

「皆さん、外門のナンバープレートはちゃんと持ってますか？」

「大丈夫よ」

黒ウサギの問いかけに答え、飛鳥が手に持った鈍色の小さいプレートを見せる。

このナンバープレートに書かれた数字が、そのまま行き先の外門となるのだ。

耀は手に持ったプレートをじつと見つめ、ふと本拠のある方へ視線を向けた。

その様子に気づいた日向は、首を傾げて問いかける。

「どうした耀？ 何か忘れ物か？」

「……うん。ただ、十六夜のこと気がなって」

ちやんとヘッドホンが見つかるかな？ と心配そうに呟く耀。

飛鳥と黒ウサギも気になっていたようで、同じく本拠の方角を見つめた。

「そうね……まさかあの十六夜君が、ヘッドホン一つで辞退してくるとは思わなかったわ」

「YES。あれほど楽しみにしていましたのに……」

「きつと、あのヘッドホンは十六夜にとつて大切なものなんだよ」

チャラ、と耀は首にかけて木彫りのペンダントを握りしめる。

そんな彼女の傍らで、日向は朗らかに笑って言った。

「大丈夫、きつとすぐに見つかるさ。それに十六夜は、耀を信頼しているからこそ代わりに任せただ。その期待に応えるためにも、収穫祭であつと驚く成果を上げてやろうぜ」

「……うん。そうだね」

耀もしつかりと頷いて微笑みを見せる。

“境界門”が起動したのは、その直後だった。

本拠で朝食を摂った後、十六夜は茶請けのお遣いに行つた年長組の子供たちが帰るまで、農園を見物することにした。

道中、水樹から供給される水路を跨ぎ、奥の雑木林を抜ける。

木陰から陽の下に出ると、見渡す限り焦げ茶色の大地が広がっていた。

砂と砂利しか無かつた一ヶ月前からは想像もつかない劇的な変化に、十六夜は思わず感嘆の声を上げる。

「へえ……」いつは驚いたな。ちゃんと農園の土壤が出来てるじゃねえか」

十六夜はその場で膝を折り、そつと手のひらで土を掬つてみる。

十分な水気と栄養を含んだ土壤は素手で掘り返せるほど柔らかく、確かな重みを感じられた。

荒れ果てた土地からここまで復活させるのは、並大抵の努力ではなかつただろう。

散歩がてらに少し見て回ろうかと思案したその時、背後の雑木林からリリとユエの声がかした。

「あ、十六夜様！」

「農園を見に来られたんですか？」

「おう。話には聞いていたが、中々立派な土壤に仕上がってるじゃねえか」

「はい！ まだもう少しだけ土地の整備が必要ですけど、種子と苗が届くのが待ち遠し

「いですー！」

ひよコン！ と狐耳を立てて話すりり。

自慢の二尾もパタパタと大忙しである。

「ちようどこれから整備に向かうところなんですよ。お兄さんから頂いたこのギフトを少しでも早く使いこなせるように、私も張り切って頑張りますー！」

おー！ とやる気に満ちた顔で小さな拳を振り上げるユエ。

そんな彼女は現在、背中から両腕にかけて巻き付けるように灰色の衣を纏っていた。

以前に日向がかぐや姫のギフトゲームで入手した神格武具、あまのはごろも“天ノ羽衣”である。

ギフトの効果について、十六夜はユエに尋ねてみた。

「それで？ 実際に身に着けてみて、何か変化はあったのか？」

「はい！ 霊格の向上が肌で感じとれます。今でも以前とは雲泥の差ですよー！」

ほう、と感心の声を漏らす。

流石は神格武具というだけあり、その肩書きに恥じない効力を秘めているようだ。

「何はともあれ、土壌の完成も間近ってことか？」

「はい。……本当に、もう少しです」

りりは感慨深げに大地を見つめる。

すると肥沃な土壌から雑木林へ、吹き抜けの風が頬を撫でた。

それは以前のような乾いた風ではない。

まさに、土地の息吹とも呼べる風だった。

リリは胸いっぱい農園に吹く風を吸い込み、熱っぽい吐息を漏らした。

「風に……水の匂いがします」

「うん」

「土の匂いもしました」

「そうだな」

「生きている、土地の匂いがしました……い」

感極まるといった万感の声を上げるリリ。

その様子にユエは微笑まじげな表情を浮かべ、十六夜も僅かに瞳を細めた。

彼女からは星の数ほど感謝の言葉を贈られてきたが、それでもまだ足りないほどの想

いがあるのだろう。

十六夜は肥沃な土壌を一瞥し、からかうように笑った。

「しかしこうやって改めて見ると、本当に広いな。こんな立派な土地をチビたちだけで

世話できるのか？」

「それは無用の心配だ、主殿」

雑木林の中から、続いてレティシアが現れる。

その手には茶葉と茶請けが入った籠が下げられていた。

十六夜は首を傾げて意味を問う。

「どういうことだ？ リリが農園を預かる家系つてのは聞いてるが」

「そうだ。何を隠そうこのリリこそ、いなり稲荷の神に連なる豊穰の一族。代々我らの農園を預かってきた家系の一人娘なのだよ」

パンツ、と背中を叩かれると、狐耳を真つ赤にして俯くりり。

予想外の返答に十六夜も目を瞬かせた。

「いなりみょうじん稲荷の神つて……稲荷明神のことか？」

「え、えつと、似ているけどきつと違います。母ははさま様の伝聞では、ウカノミタマ宇迦之御魂神より神格を

戴いた白狐が祖だと伺つてますけど……」

十六夜はますます面食らつたように瞳を丸くする。

——宇迦之御魂神とは、穀物神・商業神・興業神など幅広い側面で信仰を集める神霊の名だ。

「ウカ宇迦」とはそもそも穀物を指す言葉だが、農耕信仰が多岐に拡大されて広がつたため、様々な側面で信仰を集める神霊に成つたとされている。

リリの先祖はこの眷属なのだ。

十六夜の居た二〇〇〇年代でも工業発展が進み、商業神や屋敷神として様々な場所で

祀られていた。

都心でも宇迦之御魂神の使いとして狐の社が祀られているのは珍しいことではない。

十六夜は顎に手を当てて興味深そうに笑った。

「宇迦之御魂神と言えば、伏見稲荷大社の主祭神。そこから神格を得たとすると、リリのご先祖は狐神の命婦みよぶつてことか。……中々凄いじゃねえか。そいつも元は『ノーネーム』に所属していたのか？」

「は、はい。しかしその時にはすでに老齢だったらしく、後代の私たちが農園を引き継ぎました。以降は神格を継ぐものが現れずに八代を過ぎたのですけど、母様が九代目にして神格を継ぐことになり、現在に至ります」

「へえ〜！ じゃありりちゃんのお母さんって、とっても凄い人だったんだね！」

「え、えへへ」

母親を褒めてもらったのが嬉しかったのか、はにかむように笑うリリ。

ふと、そこで十六夜は何かを思い出したように言った。

「そう言えば、ユエの羽衣に宿っている神格は豊宇気毘売神トヨウケビメから与えられたものだったな。確かその二神は古くから同一視される女神だったはず。中々相性が良いじゃねえか」

ヤハハと屈託なく笑う十六夜。

その言葉にリリとユエは顔を見合わせると、照れながらも嬉しそうに笑い合った。

「それで、リリの母親は？ やっぱり魔王に連れ去られたのか？」

「……はっ」

一転して顔を伏せ、リリは狐耳を萎れさせる

同じく神格を得ていたレティシアも捕まえられていたのだ。

当然のことだろう。

十六夜はリリの母親についてレティシアへ視線で問うが、彼女は首を横に振った。

「私たちはそれぞれ別々に投獄されていた。他の者たちの行方は分からず仕舞い。交渉人を介して自由を得たものの、魔王の正体すら分からないのが現状だ」

レティシアも沈鬱そうに顔を伏せる。

「フロアマスター階級支配者」である白夜又でさえ、仇の魔王は見当がつかないという。

彼ら「ノーネーム」が探るには、雲を掴むより難しい相手だろう。

重い空気に気がついたリリは、気を使わせまいとして慌てて声を上げる。

「で、でも、母様がいなくても大丈夫です！ 農園の手入れについては書物も残っていますし、道具だって残ってます！ だから、私たちだけでも大丈夫なんです！」

「ううっ、リリちゃん。なんて健気な子……」

ムンっ、と胸の前で握り拳を作るリリと、その姿にほろりと感動の涙を流すユエ。

しかし十六夜は話を全く聞いていないかのように腕を組んだままだ。しばし沈黙した後、幾分真剣な面持ちで問う。

「……宇迦之御魂神の眷属、だったな。その本殿に通じるコミユニティは箱庭に無いのか？」

「え？ ええと……はい。多分あります。本殿ではありませんが、南側五桁には天門へ通じる霊山が聳えているって、黒ウサギのお姉ちゃんが」

「ならその霊山を登って、宇迦之御魂神に直接所在を聞けばいい。神格を与えた主祭神なら、眷属の位置ぐらい把握しているはず。上手くすれば魔王の位置も正体も分かる。……おお、我ながら名案じゃねえか」

ヤハハ！ と笑う十六夜。

リリは大きく息を呑んで驚き、二尾をバタつかせて問う。

「で、でも、五桁の霊山を登るのは物凄く大変です。皆様にそんな苦勞をかけては、「話をよく聞けよ。これは魔王の正体を探る一環だ。何もリリのためだけというわけじゃない」

飄々と肩を竦める十六夜。

しかし隣で話を聞いていたレティシアは、浮かない顔で沈黙している。

気になった十六夜は、訝しげに問いかけた。

「どうした？ 何か問題でもあるのか？」

「……え？ あ、ああいや。そうだな。その方法は非常に有効だ。箱庭はとてつもなく
広大だが、主祭神なら眷属の居場所がわかるはず」

「だろ？」

「ああ。……確かに盲点だった。収穫祭が終わり次第、天門について調べるとしよう」
二人は視線を交わして頷き合う。

そのままリリに向き直った十六夜は、農園に手を広げて不敵に笑う。

「そういうことだ、リリ。そう遠くない内にお前の母親も戻ってくるから、それまでに農
園をどうにかしておけ。もしもこのまま出迎えたら、きつと大目玉だぜ？」

からかうように笑う十六夜。

捻くれた物言いだ、それがリリを氣遣ったものであることは明白だ。

リリは嬉しくも恥ずかしそうに紅潮した狐耳を伏せ、二尾をパタつかせて礼を述べ
た。

「……ありがとうございます。農園は、私たちが立派に元に戻します……！」

「私も一緒に手伝うからね！ 行こう、リリちゃん！」

「うん！」

花やかな笑顔を見せたりりは十六夜たちに一礼すると、ユエと共に農園を目がけて

走っていく。

その姿をレティシアは微笑ましげに見送るも、内心には小さな影が差していた。

(……箱庭に居れば、なのだがな)

その後、十六夜とレティシアは農園脇の小道を進み、休憩所として設置される予定の場所で白いテーブルの椅子に腰掛けた。

手に提げた鞆からティーセットを取り出してセツティングしているレティシアは、もうすっかりメイドが板についているようである。

ふと気になることを思いついて、十六夜はテーブルに肩肘をつきながら問いかけた。

「なあレティシア。一つ聞きたいんだが、お前は元魔王だったんだよな？ それならやっぱり、ギフトゲームに負けて『ノーネーム』に隷属させられていたのか？」

「まさか。私の主は今も昔も十六夜たちだけだ」

「そうなのか？ けれど俺は、前に魔王を倒せば条件次第で隷属させられるって話を聞いたことがあるんだが。レティシアは違うのか？」

ああ、なるほど。

とレティシアは納得したように相槌を打つ。

「そうだな。話せば長くなるので掻い摘まむが、私が発動させた『主催者権限』ホストマスターは、ちよつとした暴走状態になっていてな。だから私は『ゲームクリアによって倒された』のではなく、『ゲームから切り離された』というのが正しいんだ」

「……? じゃあ切り離された『主催者権限』はどうなった?」

「暴走したまま封印された。南側の……いや、どこに封印したかは聞いていない。聞いたところで封印を解くつもりも無いしな」

そこで話を切ると、レティシアは早速本題に入る。

「では、次は私が質問する番だな」

「はいはい。それで? 俺のメイドは何を聞きたいんだ?」

ふむ、とレティシアは思案する。

本音を言えば出生や私生活のことを聞きたいが、あまりに直球すぎるのも芸がない。

まずは少し変化球から投げ込むことにした。

「そうだな……まずは、あのヘッドホンかな。友人か知人が作ったものなのか?」

「友人なんて大層なもんじゃねえさ。さつきも言ったが、同じ施設に居たチビが実験で作っただけの代物だ」

「……施設?」

「ああ。親がいない子供や、捨て子を引き取る児童福祉施設……って言っても、箱庭には

そういう施設はなさそうだな」

さて、どう説明したものかと腕を組む十六夜。

一方のレティシアは、直接出自を聞かなかつたことに内心こつそり安堵していた。

昨夜の日向との一件からも、軽はずみな質問は出来るだけしないようにと心掛けていたのだが、どうやら正解だったようだ。

(私の思い過ぎしならいいのだが……日向と十六夜は、ほぼ同等の実力を備えている。仮にもし、日向の存在に忍音が関係しているとするのなら。あるいは十六夜にも——)

——「ブローネーム」に関係する何者かが関わっているのかもしれない。

これは彼女が抱く懸念の是非を確かめるためにも、確実に明らかにするべき事柄だ。

そんなレティシアの心情を察したのだろう。

十六夜は組んだ腕を解き、ポツポツと身の上を話し始めた。

「施設って言っても、十二歳ぐらいまではあっちこっち盪回しだったな。ああ、身内じゃないぞ。施設から施設、施設から養父母、養父母から施設ってな感じだ」

「……? どうしてそんなこと?」

「そりやお前、俺が優秀だったからに決まってるんだろ。養子にしたいってんで引く手数多だったんだが、クーリングオフも早かったってこと」

ヤハハ! と十六夜は笑ってのけるが、レティシアはとてもそんな気になれず、そつ

と視線を落とした。

……どんなに強大な力を持っていたとしても、当時の十六夜が幼い子供であったことに変わりはない。

日向とはまた異なる環境だが、たとえ義理の親とは言え、そう何度も入れ換わるのが健全だとは思えなかった。

彼女は何も言わず、十六夜の話を静聴する。

「……ま、俺はガキの頃からサービス精神旺盛だったからな。求められた分だけ応えてやったんだが、どうも刺激が強すぎたらしい。親を名乗った連中はどいつもこいつも最後は必ず土下座で」

『——頼むから、施設に帰ってくれ……！』

「と言われてはいサヨウナラ。中には利用しようとしてくれた面白い奴もいたが、結局ソイツも同じ幕切れさ。……フン、今考えてもつまらない幕切れだった。色々と利用されてやったのに、最後がアレだ。いい加減腹が立ったから、ソイツの脱税記録と横領の証拠を全部検察とテレビ局に送りつけてやった」

ハッ、と鼻息を荒くして十六夜はティーカップを煽る。

「それが、いつだ？ ああ、確か十歳の頃だ。それ以来、利用しようとして来ると近づくは片っ端からドン底に叩き落してやったんだが、面白かったのは最初の頃だけだった

な。資金稼ぎにはなったがそれもすぐに飽きた。それでいよいよやるのが無くなった時に——集めた資金で一つ、ゲームをすることにしたんだっけ？」

「ゲーム？」

「そ。まあギフトゲームみたいなものだな。賞金も出し惜しみせず出してやった。ルールは『一週間以内に俺を見つけろ』の一つだけ。簡単なものだろう？」

「あ、ああ」

「それでルールを明記した紙と、賞金の札束を山済みにして、その写真をネットにばら撒いてやったのさ。したら馬鹿な連中がウヨウヨと動き始めてちよつとした騒ぎになったんだが……それも、面白かったのは最初だけだな。大半は三日で諦めて『難しすぎる』だの『ヒントを出せ』だの『主催者は勝たせる気が無い』だの、まあ好き勝手言い出す始末だ」

不機嫌そうに肩を竦める十六夜。

ここでようやく、レティシアも表情を緩めて茶化した。

「いやいや、それは主殿も悪い。良いゲームにしたいのなら、プレイヤーはちゃんと厳選すべきだろう」

「ハッ、返す言葉も無え。ガキだったと思って目を瞑ってくれ」

的確な駄目出しに苦笑いを浮かべる。

十六夜は二杯目の緑茶をカップに注ぎながら、どこか気鬱な瞳で幼い頃の話を続けた。

「——ゲーム中に隠れていた場所がな。人里離れた山奥だったんだよ。そこにアタツシユケース三〇箱分の金を積んで待つてたんだが、一向に誰も来ない。しかも夏の終わりで湿度も高く、あげくの果てには嵐までやってきやがった。山奥で轟々と響き渡る雷鳴はなるほど、カミナリ神鳴り」とはよく言つたもんだ」

「……」

「そんな嵐の中、いよいよクリアできる人間が現れそうに無いと悟つた時。何だか色々馬鹿らしくなつてきてな。ヒントを出せというから出してやつたのに気づかぬえし、見つかるように一人でうろついているのに見つけられぬえ。テメエらの目は山椒魚さんしょうお並みに退化してんのかとガキなりに憤慨して、いよいよもつて収まりつかなくなつて、こうなつたら世の中の半分ぐらい滅茶苦茶にしてやろうかと小刻みに拳を震わせながら隠れ家に帰つたら——」

——そう。

雷鳴轟く嵐の山中で、逆廻十六夜は出会つた。

“家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い”

そんな召喚に応じた彼の故郷にも、たった一度だけ、忘れられない出会いがあつたの

だ。

それが彼女——金糸雀カナリヤとの邂逅だった。

第29話 アンダーウッド

轟々と唸りを上げる嵐の山中、暴風雨に晒される屋内で、十六夜はすつとひび割れた窓の霜をなぞった。

彼がゲームの隠れ家にしたのは、山奥に廃棄された老人介護施設である。

カンテラの明かりを頼りに腕時計を確認すれば、パネルには23:56と表示されていた。

タイムリミットまで残り4分。

幼い十六夜は落胆し、小さなため息を吐いた。

「……23:56 現在。俺の発見者無し」

「——23:57 現在。君の発見者一名」

これでゲームクリアかしら？ と。

軽い調子でかけられた声に、十六夜はバツと勢いよく振り返った。

声は女性のものであった。

まるで歌でも歌っているかのような声色の侵入者は、暗闇の奥で息を潜めている。

十六夜は壁を背にして警戒心を高めつつ、静かに返答した。

「……ああ、そうだ。あんたがゲームの攻略者だよ。主催者として祝ってやるから姿を見せろ」

「……これはまた、ずいぶんと口の悪い主催者ね」

呆れたような声音だが、それさえも耳に心地いい。

一字一句、女性が言葉を紡ぐ度、十六夜の好奇心は募ってゆく。

「ところで、自己紹介は必要かしら？　十六夜君？」

「……へえ？　よく調べたな」

「そりやそうよ。だってこれは君を見つけ出すためのゲームだもの。まず君が何者かを知るところから入るのは必然でしょ？」

フフン、と得意げな声が響く。

「そりやそうだ。けど、よくこんなところまで来られたじゃねえか。侵入者の罠だって、廃屋内には山ほど仕掛けておいたはずだけど？」

「ああ、うん。まああれぐらいなら別に平気かな。ピアノ線だけは、他の人が危ないから外させてもらったけど」

ポン、と足下にピアノ線の束が投げ込まれる。

それは現金を入れたアタッシユケースの隠し場所に設置していた罠だった。

十六夜は怪訝に眉根を寄せる。

「……よく金だけ持ち出さなかったな」

「だって私、君に興味があつて来たんだもの」

ケラケラと明るい笑い声。

それと同時に、謎の女性はカツカツとハイヒールを鳴らして光の当たる場所まで歩み出る。

その姿を目にした十六夜は、呆れたような顔をした。

「……あんた、そんな格好で山に登つたのか？」

「当然。これが私の勝負服だもの」

女性は片手を腰に当ててポーズを取る。

真っ白なロングコートの下に赤紫のキャミソールを着込み、足にはヒールの付いた黒いロングブーツを履いている。

特に印象的だったのは、左右対称の貝殻を付けたイヤリングだろう。

多くの場合、左巻きの貝殻は遺伝子異常によつて生まれるもので非常に希少だ。

差し込む月明かりに照らされた顔は、意外にも美人だった。

ウエーブを引いたショートカットの金髪が整った小顔を引き立てている。

年齢は控えめに見ても二十代前半に見えた。

「……意外に若いな、おぼさん」

「ハッハー！ 若いと言いなながらおぼさん呼ばわりとは酷いな十六夜君。私のことは尊敬と敬意と敗北感を込めて『金糸雀お姉様』と呼びなさい」

——ピクリ、と十六夜の眉根が吊り上がる。

同時に先ほどまでの親しげな気配を消し、斬れるような敵意を金糸雀へと向ける。

「……オイ。『敗北感を込めて』ってのはどういう意味だ？ 俺は主催者で、アンタは攻略者。ならアンタは恭しく俺から賞金を頂戴するのが筋ってもんじゃないのかい？」

その言葉に金糸雀は目に見えて分かるほど落胆し、肩を落として十六夜を見つめた。

「……あのさ、十六夜君。逆に聞くけど、君はどんな理由でこのゲームを主催したの？」
「何？」

「まさかとは思うけど……『世界の誰かに、自分を見つけて欲しい』——なんて、そんな糞くだらないセンチメンタリズムで、ゲームを主催したんじゃないわよね？」

刹那、金糸雀の眼光が十六夜を貫いた。

少なくとも、十六夜はそう錯覚した。

（俺が……ゲームを始めた理由？）

『自分を見つけて欲しい？』

——まさか、と全力で首を振った。

想像しただけでも鳥肌が立つ。

ではなぜ？ と考えてみるも答えが出ない。

金糸雀は大きく仰け反り両手を広げる。

廃墟に吹き荒ぶ嵐のような風は彼女の纏うロングコートを靡かせ、小柄な体軀を大きく見せた。

「違うでしょう十六夜君。君が求めていたのは、自分に比肩する強大なチャレンジャーでしょう？ それを探すためのゲームだったはず。君が不満や憤りを感じていたのは、攻略者が現れないことじゃない。十六夜君がしたかったはずの血湧き肉躍るようなものにならなかった、程度が低すぎる自分のゲームに対してだ」

「……っ、」

反射的に、十六夜は拳を握りしめた。

彼女の言葉が凶星だったからだろう。

金糸雀は雷光を背に一步、また一步と彼の元に近づき始める。

「もう一度言うわ。私が勝者で、君は敗者。この喧嘩は君が売って、私が買ったもの。攻略者が出た以上、君は主催者として勝者を讃える義務がある。それが出来ない人間は、そもそも主催者なんかをやるべきじゃない」

ギリツと、十六夜は奥歯を噛み締めた。

「……俺に、負けを認めろと？」

「そうよ。そして主催者として、攻略者に勝利宣言を。それでこのゲームは終わるわ」

「……………」

「そして、君のゲームが終わったら……私と、次のゲームを始めましょう」

——は？ と十六夜は間の抜けた声を上げる。

金糸雀は構わず続けた。

「そうねえ。次は私が主催者に成りませうか。君の用意したお金を使えば、そこそこの舞台は調えられるしね。……ふふ。その時は私が君に、本物の『主催者』^{ホスト} だってやつを見せてあげるわ」

どう？ と首を傾げる金糸雀。

しばし口を開けて呆れ返っていた十六夜は——ふっと、思いついたように呟く。

「なら……ゲームの賞品は？」

「うーん、そうねえ……」

彼女は十六夜の視線に合わせる様に膝を折る。

互いの額を重ね合わせ、悪戯っぽく告げた。

「もし私が勝てば、私に口の悪い息子が出来る」

「……………」

「もし君が勝てば……私は一生、君の遊び相手になりましょう。オプションで、素敵な居場所も用意するわ」

どうかしら？ と微笑みかけて問う金糸雀。

十六夜は難しそうな顔で腕を組んで悩んだ後、仰々しい物言いで領いた。

「……しようがねえな。このクソゲーの勝者はアンタだ、金糸雀」

「ありがと。次は私が『主催者』として、君を招くわ」

金糸雀はそう告げて十六夜の手を取り、幼い手を引いて行く。

——この二人のゲームは、約二年に渡って続けられた。

国境を越え、大陸を越え、イグアスの滝の悪魔を探し、世界の果てを確認しに行った二人は最後に、一つの児童福祉施設に辿りつく。

『カナリアファミリーホーム』。

十六夜を受け入れるためだけに造られた、児童福祉施設だった。

——箱庭七七五九一七五外門。

——『アンダーウッドの大瀑布』。

——ファイル・ボルグの丘陵。

「きや……！」

「わっ……！」

ビュウ、と勢いよく丘陵に吹き込んだ冷風に、軽い悲鳴を上げる飛鳥と耀。

多分に水気を含んだ風に驚きつつ、吹き抜けた先の光景に息を呑んだ。

「ははは……これは、黒ウサギの勝ちだな」

眼下に広がる景色を見下ろした日向は、してやられたと言わんばかりに苦笑する。

彼らの視界に飛び込んできたのは、樹の根が網目模様に張り巡らされた地下都市と、清涼とした飛沫が舞い散る水舞台だった。

街の中心部に聳える巨躯の水樹は、トリトニスの大滝に通じる河川を跨ぐように屹立し、無数に枝分かれした太い幹から滝のように水を放出している。

「二人とも、見て！ 水樹から流れた滝の先に、水晶の水路がある！」
耀がいつにもない歓声を上げて注目を促す。

巨大な水樹から溢れた水は幹を通って都市へと流れ落ち、緑色の水晶で彩られた水路を經由して街中を勢いよく巡っていた。

天を衝くかの如き巨躯の水樹と、河川の隣を掘り下げて形成された地下都市。

この二つを総じて、人々は「アンダーウッド」と呼んでいるのだ。

(あら、あの水路の水晶……?)

飛鳥は水晶の輝きを目にして首を傾げる。

記憶違いでなければ、北側でも同じようなものを見た気がしたのだ。

「飛鳥? 何か気になるものでもあったのか?」

隣から日向が問いかける。

飛鳥は水路を見つめたまま、思い出すように返答した。

「いえ、あの水晶……緑のガラス? なんだけれど、確か北側でも——」

「二人とも、上!」

えっ、と今度は頭上を見上げる。

彼らの視線の先、遙か上空では、何十羽という角の生えた鳥が飛んでいた。

耀は興奮を露わにしながら、空に舞う鳥の群れを熱っぽい眼差しで見つめている。

「角の生えた鳥……しかもあれ、鹿の角だ。今まで見たことも聞いたこともない鳥だよ。

やっぱり幻獣なのかな? 黒ウサギは知ってる?」

「え? ええまあ、何と言いますか……」

いつになくハイテンションな耀の疑問に、黒ウサギはなぜか言い淀む。

どう答えたものかと迷っていたところで、日向が驚いたように呟いた。

「鹿の角が生えた鳥って……おいおい、まさか本当にアトランティスでもあるのか?」

「え？ 日向はあの鳥がなんだか知ってるの？」

「ああ、たぶんな」

「ホント？ 何て幻獣なの？ ちょっと見てきても大丈夫かな？」

今にも飛び出そうな勢いで尋ねる耀に、日向は苦笑して首を横に振った。

「残念ながら、アレは止めといた方がいいかもな」

「え？ それってどういう——」

耀が疑問を呈しかけたその時、突如激しい突風が日向たちの周囲に吹き荒れた。

啞然としている彼らの耳に、懐かしい声が響く。

『友よ、待っていたぞ。ようこそ我が故郷へ』

巨大な翼で旋風を巻き上げて降り立ったのは、いつぞやの“サウザンドアイズ”のグリフォンだった。

彼が嘴のある大きな頭を寄せると、耀も応えるように喉を撫でた。

「久しぶり。ここが故郷だったんだ」

『ああ。収穫祭で行われるバザーには、“サウザンドアイズ”も参加するらしい。私も護衛の戦車を引いてやってきたのだ』

見れば彼の背中には、以前より大きく立派な鞍と手綱が装備されている。

契約している騎手を乗せるためだろう。

グリフォンは黒ウサギたちにも視線を向け、翼を畳んで前足を折った。

『フム。箱庭の貴族』に友の友よ。お前たちも久しいな』

「YES！ お久しぶりなのです！」

「久しぶりだな」

「お、お久しぶり……で、いいのかしらジン君？」

「き、きつと合っていますよ」

言葉の分からない日向に飛鳥、そしてジンはとりあえずその場の空気で返事をした。

グリフォンは嘴を背中へ向け、一同に提案する。

「フィル・ボルグの丘陵から街までは距離がある。南側には野生区画というものが設けられているからな。東や北よりも、道中は気をつけねばならん。もし良ければ、私の背中を送っていいこう』

「本当でございますか!？」

喜びでピヨコン！ とウサ耳を立てる黒ウサギと、話が分からずに首を傾げる日向たち。

耀はグリフォンから一步距離を置き、深々と頭を下げて感謝した。

「ありがとう。差し支えなければ、名前を聞いてもいい？」

『無論だ。私は騎手より『グリー』と呼ばれている。友もそう呼んでくれ』

「うん。私は耀でいいよ。それで、こっちは日向と飛鳥、それにジン」
『分かった。友は耀で、友の友は日向に飛鳥、そしてジンだな』

バサバサと翼を羽ばたかせて了承するグリー。

その間に日向たちは黒ウサギに説明を受ける。

「へえ、ここはフィル・ボルグの丘陵って言うのか。それじゃあ大樹の麓に見えるあの平原は、モイ・トゥラ平原とか？」

ピクリ、と日向の台詞にグリーが反応する。

『ほほう。耀の友はなかなか博識だな』

その言葉の意図が分からず、耀は日向に問いかけた。

「ねえ日向、あの平原の名前がモイ？　なんとか平原かもって、どういうこと？」

「ん？　いや、この場所の名前がフィル・ボルグの丘陵だっていうから、それにちなんで言ってみただけだ。フィル・ボルグっていうのは、ケルト神話に登場する民族の名前だからな。そして同じくそのケルト神話に登場する重要な場所の一つに、“塔の平原”を意味するモイ・トゥラって名前の平原があるんだ。ま、ここにあるのは塔じゃなくて大樹だけだな」

へー、と日向の説明に耀が感心したように相づちを打つ。

話がひと段落したところで、日向たちは頭を下げてグリーの背中へと跨がっていく。

自力で飛べる耀は、皆が乗り込むまでに先ほどの鳥について質問した。

「ねえグリー。あの鹿の角が生えた鳥も、やっぱり幻獣？」

『……鹿の角が生えた鳥の幻獣？ まさか、ペリユドンの奴らか？』

グリーは頭を上げ、鷹の眼孔で周辺を探る。

「アンダーウッドの大瀑布」とは反対に位置する遠くの水場に、件の鳥の群れを見つけた。

『彼奴らめ。収穫祭中は外門へ近づくなと警告したというのに。よほど人間を殺したいと見える』

「……？ 食人種なの？」

『違う。ペリユドンは人間を殺すのだ』

「YES！ 言わば殺人種なのですよ！」

ヒヨコ、と黒ウサギがグリフォンの背中から顔を出す。

「黒ウサギもそれほど詳しいわけではありませんが、元はアトランティス大陸という場所から来た外来種だと聞いております」

その台詞に日向が反応する。

「へえ、やっぱりあるのかアトランティス。ならいつか行ってみたいな」

楽しみが増えた、と今後に向けてより一層期待に胸を膨らませる日向。

耀は会話を続ける。

「アトランティス大陸って、あの有名な？」

「YES。そして件のペリュドンですが、先天的に影に呪いを持ち、己の姿とは違った影を映すとか」

『その解呪方法が “人間を殺す” ことなのだ』

「そっか。だから日向も忠告してたんだね」

「ああ、そういうことだ」

納得したように頷く耀。

先のことといい、相変わらずの博識ぶりだと彼女は素直に舌を巻いた。

『フン。どこの神がかけた呪いかは知らんが、実に悪趣味だ。生存本能以外で “人を殺す” という理由を持たされた彼奴らは、典型的な “怪物” なのだろう。普段なら哀れな種族と思いい見逃すが、今は収穫祭がある。再三の警告にも引かぬなら……耀には今晚、ペリュドンの串焼きをご馳走することになるな』

ニヤリと嘴で笑うグリー。

彼は翼を羽ばたかせて旋風を巻き起こすと、巨大な獅子の足で大地を蹴った。

瞬く間に外門から遠のいていくグリーに、耀は辛うじて追従する。

『やるな。全速力の半分程度とはいえ、二ヶ月足らずで私に付いてくるとは』

「う、うん。黒ウサギが飛行を手助けするギフトをくれたから」

「YES! 耀さんのブーツには補助のため、風天のサンスクリットが刻まれております!」

背中の上でちよつぱり誇らしげに胸を張って答える黒ウサギ。

しかしそんな余裕があるのは彼女を含めて一握りだけだ。

ジンなどあまりの風圧で飛び立つと同時に吹き飛ばされ、あわや転落というところを間一髪日向に受け止められた。

飛鳥も二の舞にならないよう歯を食いしばって手綱を握っている。

黒ウサギの腕に抱かれている三毛猫は、必死の形相で懇願した。

『お、おじようおうおおお!! も、も少し! も少し速度落としてと旦那につうたうえてえええええええ!!』

風圧で顔面がプルプルと波打つ様子をはたから見れば滑稽だが、割と本気で命が危険だった。

耀は慌てて減速するよう頼み込む。

「グ、グリー。後ろが大変。速度落として」

『ム? おお、すまなかつた』

速度を緩め、街の上空を優雅に旋回する。

髪を乱れさせて肩で息をしていた飛鳥も、少し余裕が出来たのだろう。

そつと背中から顔を出して、眼下の街並みを見渡した。

「わあ……掘られた崖を、樹の根が包み込むように伸びているのね」

半球状に広く掘り進まれた地下都市は、樹の根の広がりに合わせて開拓している。

飛鳥の感心を含んだ感想に、ジンを後ろから支えている日向も続く。

「へえ。これだけ川辺に近いと氾濫や嵐なんかの災害が恐そうだが、水樹の根が都市を守っているんだな」

所々に人為的な柱も存在するが、多くは樹の根と煉瓦のようなもので整備されていた。

「『アンダーウッド』の大樹は樹齢八千年とお聞きします。樹霊コダマの住み木としても有名

で、現在は二〇〇〇体の精霊が棲むとか」

『ああ。しかし十年前に一度、魔王との戦争に巻き込まれて大半の根がやられてしまった。今は多くのコミュニティの協力があって、ようやく景観を取り戻したのだ』

魔王と聞いて、日向たちは顔を見合わせる。

グリーはそれに気づかないまま上空を旋回しつつ、ゆつくりと街を下っていく。

『今回の収穫祭は、復興記念を兼ねたものでもある。ゆえにいかなる失敗も許されない。

『アンダーウッド』が復活したことを、東や北にも広く伝えたいのだ』

強い意志を込めて訴えるグリー。

網目模様の根っこをすり抜け、地下の宿舎に着いたところで日向たちを下ろす。

彼は大きく翼を広げて遠い空を仰いだ。

『私はこれから、騎手と戦車を引いてペリユドン共を追い払ってくる。このまま放置しては参加者が襲われるかもしれんからな。耀たちは“アンダーウッド”を楽しんでくれ』

「分かった。気を付けてね」

言うや否や、グリーは旋風を巻き上げながら飛び去っていった。

その背を見送った耀は、少し困ったように黒ウサギに問う。

「……殺人種なんているんだね。もし私があの幻獣からギフトを貰ったら、どうなのるのかな？」

「分かりません。しかしペリユドンに関しては迂闊に仲良くなならない方がよろしいでしょう。無理に近寄らない方が無難ですよ」

「……そう。分かった」

強めに釘を刺され、少し肩を落とす。

そんな耀に、日向が励ますように声を掛けた。

「ま、そう気を落とすなって。他にも幻獣は沢山いるだろうし、折角十六夜から全日参加

の権利を貰ったんだ。友達になれる機会はいくらでもあるさ」

「……うん。そうだね」

耀は力強く頷く。

日向の言う通り、落ち込んでいる暇はない。

権利を譲ってくれた十六夜の恩に報いるためにも、この収穫祭中に一匹でも多くの幻獣に出会わなければならないのだ。

耀は小さく微笑み、日向に礼を述べる。

「日向。励ましてくれてありがとう」

「ああ。どういたしまして」

その時だった。

不意に宿舎の上から、二人にとって聞き覚えのある声が木霊した。

「ああーッ！ 誰かと思つたらお前ら、耀と日向じゃん！ 何？ お前らも収穫祭に――」

「アーシャ。そんな言葉遣いではいけませんよ」

賑やかな声に誘われて頭上を見る。

そこには「ウィル・オ・ウィスプ」の少女アーシャと、カボチャ頭のジャックが窓から身を乗り出して手を振っていた。

「アーシャ……君も来てたんだ」

「まあねー。コッチにも色々と事情があつて……さつと!」

窓から飛び降りてくるアーシャ。

自慢の青髪ツインテールを揺らす彼女に、日向は朗らかに笑つて再会の挨拶をする。

「久しぶりだなアーシャ。元気だったか?」

「う、うん。久しぶり……」

若干頬を赤らめながら答えるアーシャ。

ゴスロリ衣装の後ろで手を組みながらもじもじとしている彼女は、やがて誤魔化すように口を開いた。

「と、ところで! お前らはもう出場するギフトゲームは決まつてるのか!?!」

「いや、俺たちは今さつき着いたばかりだからな。まだ何も決めてないよ」

「なら『ヒツポカンプの騎手』には絶対に出場しろよ! 私も出るからさ!」

「……ひつぽ……何?」

耀は小首を傾げると、尋ねるような視線を黒ウサギに向ける。

答えようとした黒ウサギはしかし、ジンの背中を叩いて説明役を譲った。

ジンはコホン、と一息置いて説明する。

「ヒツポカンプとは別名『海馬』^{シホホス}と呼ばれる幻獣で、タテガミの代わりに背びれを持

ち、蹄に水掻きを持つ馬です。半馬半魚と言っても間違いではありません。水上や水中を駆ける彼らの背に乗って行われるレースが、〃ヒツポカンプの騎手〃というゲームではないかと思えます」

「はは、ちゃんと勉強の成果が現れてるな、ジン」

「は、はい！　ありがとうございます、日向さん」

日向はそう言つてジンの頭を少しだけ強めに撫でる。

褒められたジンは嬉しそうに年相応の笑みを浮かべた。

「……そう。水を駆ける馬までいるんだ」

一方で、耀は両手を胸の前で組み、ギユツと強く握り締める。

半刻も経たないうちに、二種類も幻獣の情報が聞けたのだ。

南側が本当に幻獣の宝庫なのだと、実感がわき始めてきたのだろう。

「前夜祭で開かれるギフトゲームじゃ一番大きいものだし、絶対に出ろよ！　そこで今度こそお前らに勝つてやるんだからな！」

「ははは、おう！　望むところだ」

「楽しみにしてる」

親しげに会話を交わす日向たち。

一方のジャックはジンの前にフワフワと麻布を揺らして近づき、礼儀正しくお辞儀を

した。

「ヤホホ、お久しぶりですジンⅡラッセル殿。いつかの魔王戦では御世話になりました」
「い、いえ。こちらこそお久しぶりです」

「例のキャンドルスタンドですが、この収穫祭が終わり次第届けさせて頂きますヨ。その他の生活用品一式も同じくです。……しかしながら“ウィル・オ・ウィスプ”製の物品を一括注文して頂けるとは！ いやはや、今後とも御鼻屑にお願いしたいですな！」

ヤホホホホ！ と陽気な声で笑うジャック。

飛鳥はそつと前に出て、ドレスの裾を優雅に持ち上げてお辞儀をする。

「お久しぶりジャック。今日も賑やかそうで何よりだわ」

「ヤホホ！ それはもちろん、賑やかさが売りなものですからね！ 飛鳥嬢もご健勝なようでご何よりですよ。前回のゲームではデーンに不覚をとりましたが、いつかりベンジを——」

「え？」

隣で聞いていたジンが疑問の声を上げる。

飛鳥は慌てて話題を変えた。

「そ、そんなことよりもジャック！ あなたはゲームに参加しないの？」

「ヤホホ。私は主催者がメインなもので。ゲームの参加者、というのが苦手な性分なの

ですよ。今回の収穫祭も招待状が届いたので足を運びましたが、目的は日用品の卸売りです」

「あら、それじゃあ参加者はアーシヤ一人だけなの？ 楽勝じゃない」

「うん」

「そうだな」

「オイッ!!」

問題児たちの挑発にツインテールを逆立たせて怒るアーシヤ。

その様子を見て黒ウサギたちも笑い声を上げた。

その後、日向たちはやジャックやアーシヤと共に貴賓客専用の宿舎に入った。

土壁と木造の建物だったが、内部は意外にしっかりとした構造になっている。

半分が土造りにもかかわらず空気が乾燥していないのは、水樹の根が常に水気を放出しているからだろう。

所々に浮き出た水樹の根は談話室で椅子のようにも扱われており、その内の一つに腰掛けた耀は大きく息を吐いて「アンダーウッド」の感想を述べる。

「……凄いところだね」

「ああ、まさに大自然って感じだな。北側は建築物が多かったが、南側は環境に適して過ごしているみたいだ」

「YES! 南側は箱庭の都市が建設された時、多くの豊穡神や地母神が訪れたと伝わっております。自然神の力が強い地域は、生態系が大きく変化しますから」

「そうなのね。でも、水路の水晶は北側の技術でしょう? 似たようなものを誕生祭で見たわ」

へ? とウサ耳を傾げる黒ウサギ。

ジャックは感心したように答えた。

「良く分かりましたねえ。飛鳥嬢の言う通り、あの水晶の水路は北側の技術ですよ。十年前の魔王襲撃からここまで復興できたのは、その技術を持ち込んだ御方の功績だから」

「そ、それは初ウサ耳でございます。一体どこのどなたが……」

黒ウサギを含め、一同は顔を見合わせる。

ジャックはカボチャ頭の顎つぼいところに手を当てて説明する。

「ヤホ。実は『アンダーウッド』の大樹に宿る大精霊なのですが……十年前に現れた魔王による傷跡が原因で、未だ休眠状態にあるのだとか。そこで『龍角を持つ驚獅子』のコミュニケーションが『アンダーウッド』との共存を条件に、守護と復興を手助けしているらしいのです」

「では『龍角を持つ驚獅子』で復興を主導されている御方が……?」

「そう。元北側の出身者。おかげで十年という短い月日で、再活動の目処を立てられたと聞き及んでおります」

「そうですか……凄いい御仁でございますね」

黒ウサギは胸に手を当ててジャックの言葉を噛み締める。

——箱庭最大の災厄「魔王」によって襲われた土地に、颯爽と現れて復興を手助けする救世主。

そんな両者の関係が、「ノースーム」と問題児たちに似ていると思ったのだ。

そこでふと彼女が日向に視線を向けると、彼は何やら考え込むようにして腕を組んでいた。

不思議に思っ、黒ウサギは日向に問いかける。

「日向さん、どうかされましたか?」

「……ん? ああいや、別に大したことじゃない。その北側の人物について、素直に感心してただけだよ」

そうですか、と納得する黒ウサギ。

しかし日向は内心で思考を続けていた。

(これは、帰ったら十六夜や白夜叉ともう一度話し合う必要があるな……)

会話が切り良くなったところで、ジャックが椅子から立ち上がる。

「ヤホホ。それでは今より『主催者』にご挨拶へ行きますが……どうです？　ここで会ったのも何かの縁ですし、皆さんも御一緒というのは」

「YES！　もちろんなのですよ！」

「そうだね。荷物を置いてきますから、少しだけ待っていてください」

ヤホホと陽気に笑って承諾したジャックは、アーシャと共に宿の外で待つ。

荷物を置いた日向たちは彼らに連れられて地下都市を登り、大樹の中心に在る収穫祭本陣営まで足を運ぶのだった。

——『アンダーウッドの地下都市』

——壁際の螺旋階段。

螺旋状に掘り進められた『アンダーウッド』の地下都市をぐるぐると回りながら登っていく。

深さは精々20mといったところだが、壁伝いに地上を目指すといたささか距離がある。

しかし日向たちに億劫な素振りなど微塵もなく、初めて訪れた都市を心から楽しんでいた。

収穫祭ということもあって、道沿いにいくつも並んでいる出店からは美味しそうな香りが漂っている。

道中、耀は「六本傷」の旗が飾られている出店にふっと目を奪われた。

「……あ、黒ウサギ。あの出店で売ってる「白牛の焼きたてチーズ」って」

「ダメですよ。食べ歩きは「主催者」への挨拶が済んでから——」

「美味しいね」

「いつの間にか買ってきたんですか!？」

黒ウサギのツツコみを華麗にスルーして、耀は小さな口の中に熱々のチーズを放り込む。

ほくほくと湯気を立ち上らせるチーズは焼きたて特有の薫りと食感があり、単品で食べていてもまったく飽きない。

二口、三口と幸せそうに食べていく耀の姿を見て、注意した黒ウサギはおろか、飛鳥やアーシャも羨ましそうな視線を向ける。

そんな彼女たちの視線に気づいた耀は、広い心で手に持った包み紙を差し出すと、

「……匂う?」

「匂う!」

「匂う!? 匂うって聞かれた!? そこは普通『食べる?』って聞くはずなのに『匂う?』っ

「て聞いたよコイツ!!」

「うん。だって、もう食べちゃったし」

「しかも空っぽ!？」

「残り香かよ!! どんなシユールプレイ望んでるのお前!？」

ペロ、と満足気な表情で指を舐めとる耀。

三人は後ろ髪引かれながら、名残惜しそうに出店から離れていく。

先頭を歩いていたジャックは、姦しい女性陣のやり取りにカボチャ頭を抱えて笑っていた。

「ヤホホホホホ! いやまったく、春日部嬢は面白いですねえ。賑やかな同士をお持ちで羨ましい限りですよ、ジン||ラッセル殿」

「はい。でも賑やかさでは『ウイル・オ・ウイスプ』の方が上だと思えます」

「ヤホホホホ! いやまったく恐れ入ります!」

ぺちつ、とカボチャ頭を叩きながら高らかに哄笑を上げるジャックは、そこではたと気づいたように辺りを見回した。

「おや、そう言えば日向殿はどこに行かれたのでしょうか? いつの間にやら姿が見えませんが」

「え?」

言われて、ジンは背後に振り返る。

咄嗟に日向の姿を探すが、ジャックの言う通りこの場には見当たらなかった。

程なくして他の面々もそれに気づき、皆で一斉に首を傾げる。

周囲に目を向けながら日向を探していると、ややあつて後方から歩いてくる彼の姿を
発見した。

「日向さん。どこに行かれていたのですか？」

「悪いな。ちよつとそこの出店に並んでたんだ」

そう笑つて話す彼の手には、なにやら船皿らしきものが乗つていた。

その上にはふわふわに焼き上げられたたこ焼きに似た食べ物が八個ほど並んでおり、
惜しみなくかけられたソースの香りが盛大に食欲を誘つている。

ゴクリと喉を鳴らしながら、女性陣は憤慨して日向を咎めた。

「ひ、日向さんまで何してるんですか！」

「まったくよ！ 見損なつたわ日向君！」

「そうだそうだ！ お前らばっかりずるいぞ！」

ポロツと本音が出てくる辺り、彼女たちも我慢の限界のようだ。

しかし日向はニヤツと悪戯好きそうな笑みを浮かべると、白々しい声で言つた。

「おいおい、酷い言われようだなあ。せつかく皆で食べようと思つて買つてきたのに」

「「え？」」

日向の言葉に、思わず固まる女性陣。

「せっかくこうして南側まで来たんだ。食べ歩きには早いにしても、少しくらい満喫したってバチは当たらないだろう？」
 “主催者”だって、参加者が楽しんでくれたほうがきつと喜ぶだろうしな」

「ひ、日向さん……！」

黒ウサギが感極まったように日向を見つめる。

飛鳥やアーシャも同様だ。

彼の優しさに感動しつつ料理へと手を伸ばそうとするが、日向は露骨に首を横に振って、

「——と思ったけど、やっぱりダメだよな。黒ウサギたちの言う通りだ。残念だけど、この料理は捨て」

「あー！ あー！ あー！」

「待って！ 私が悪かったわ日向君！ お願だから待って！」

「頼むから私たちにも食べさせてくれー！」

「——るのは流石にもつたいないから、やっぱり皆で食べようぜ」

日向の台詞にパアッと女性陣の顔が輝く。

感謝の言葉を述べながら、爪楊枝を受け取って料理を口に運ぼうとして、

「日向、これ美味しいね」

「ははは、買ってきた甲斐があつてなによりだ」

誰よりも早く、真つ先に耀が味わっていた。

黒ウサギたちは慌てて抗議する。

「ちよつ、抜け駆けはズルいですよ耀さん！」

「そうよ春日部さん！　というか、あなたはさつきまで食べていたでしょう!？」

「どんだけ食い意地張つてんだよ！　あーもう！　早く私にも一個くれ！」

どの集団よりも賑やかに進む日向たち。

騒がしくも楽しそうに歩きながら、網目模様の根を上がつて地表を指すのだった。

螺旋階段を登りきった一同は、眼前に聳え立つ水樹の大きさに圧倒された。

根元から全容を見上げた耀は、そのあまりの巨大さに呆けた表情で口を開いた。

「……黒ウサギ。この樹、何百mあるの？」

「『アンダーウッド』の水樹は全長500mと聞き及んでおります。境界壁ほどではあ

りませんが、御神木の中では大きな部類だと思いますよ」

「……そう。ちなみに、私たちが今から向かう場所は？」

「中ほどの位置ですね」

「……………そう」

つまり単純計算で250m。

それも梯子や備え付けの足場を伝って行かなければならない。

耀は隠す素振りもなく面倒臭さを全面に押し出すと、

「……私、飛んで行っていい？」

「団体行動を乱すものじゃないわよ日部さん」

「そうだと耀。アーシャじゃあるまいし」

「うんうん。ってオイコラどういう意味だ!？」

うがー！ つと八重歯を剥いて詰め寄ってくるアーシャを日向がどうどうと宥めてみると、ジャックが高らかに哄笑を上げた。

「ヤホホホホ！ 春日部嬢のお気持ちも分かりますが、本陣まではエレベーターがありますからさほど時間はかかりませんよ」

エレベーター？ と予想外の単語に首を傾げる日向たち。

しかしジャックはそれ以上説明せずにどんどん先へと進んで行く。

やがて太い幹の麓までたどり着くと、彼は木造のボックスに乗って全員を手招きし

た。

「このボックスにお乗り下さい。全員乗ったら扉を閉めて、そばにあるベルを二回鳴らして下さい」

「ん、これか？」

カランカランと、日向がベルの縄を二回引く。

すると上方で水樹のこぶから水が流れ始めた。

彼らが乗り込んでいるボックスと繋がっている空箱に、なみなみと大量の水が注がれていく。

乗用ボックスと連結している滑車がカラカラと回ると、徐々に上昇し始めた。

「わっ……!?!」

「昇り始めたわ!」

「へえ、なるほどな。反対の空箱に注水して引き上げる仕組みになってるのか」

「ヤホホ! ご名答です。原始的な手段ですが、足で上がるよりはよほど早い」

ジャックの言う通り、水式エレベーターは数分ほどで本陣に到着した。

吊られたボックスを固定する金具を取り付け、木造の通路に降り立つ。

木の幹に取り付けられた通路は何枚もの板木を繋げた構造で一見危なく思えたが、乗ってしまえばそんな不安はすぐに消えた。

見かけより頑丈な造りなのだろう。

安全のため両側にも柵が設けられており、身を乗り出さない限りは落下の心配も無さそう。

しばらく幹の通路を進むと、収穫祭の主催者である「ドラコングライフ龍角を持つ鷲獅子」の旗印が見えた。

「旗印が一枚、二枚、三枚……七枚？ 七つのコミュニティが主催しているの？」

「いえ、残念ながらNOですね。『龍角を持つ鷲獅子』は六つのコミュニティが一つの連盟を組んでいると聞いております。中心の大きな旗は、連盟旗でございますね」

黒ウサギが指さす旗印の数は七枚。

〃一本角〃

〃二翼〃

〃三本の尾〃

〃四本足〃

〃五爪〃

〃六本傷〃

そして中心に連盟旗・『龍角を持つ鷲獅子』が飾られていた。

「これが連盟旗……でも、連盟って何のために組むの？」

「はいな。三つ以上のコミュニティが連盟を持つ場合、その証として連盟旗を作る事が出来ます。用途は色々御座いますが……一番の目的はやはり、魔王に対抗するためですね」

「魔王に？」

「YES！ 例えば連盟加入コミュニティが魔王の襲来を受けた場合、他のコミュニティは助太刀のためにギフトゲームへ介入することが可能になるのです」

「……そう。助けに来てくれるんだ」

「まあ、絶対に可能かと言われればそうでない時もちろんあります。介入するか否かは連盟コミュニティが判断することですし、あまりに分が悪いと助けに来てくれないことも多いです。ちよつとした気休めですね」

そっか、と相槌を打って旗印を見上げる。

他のメンバーは二人が話している間に、本陣入り口の両脇にある受付で入場届けを出していた。

「ヤホホ。ウィル・オ・ウイスプ」のジャックとアーシャです」

「『ノーネーム』のジン＝ラツセルです」

「はい。ウィル・オ・ウイスプ」と『ノーネーム』の……あ」

受付をしていた樹霊コダマの少女は、コミュニティの名を聞いてハッと顔を上げる。

彼女はメンバーの顔を一人ずつ確認して行き、飛鳥で視線を留めた。

「もしや『ノーネーム』所属の、久遠飛鳥様ではないでしょうか?」

「ええ。そうだけど、あなたは?」

「私は『火龍誕生祭』に参加していた『アンダーウッド』の樹霊の一人です。飛鳥様には弟を助けて頂いたとお聞きしたのですが……」

ああ、と思い出したように声を上げる飛鳥。

『ブラック・バーチャル』の黒死斑の魔王と戦った時に助けた、あの樹霊の少年のことだろう。

受付の少女は確信すると、腰を折って飛鳥に礼を述べた。

「やはりそうでしたか。その節は弟の命を助けて頂き、本当にありがとうございました。おかげでコミュニティ一同、一人も欠けること無く帰って来られました」

「そう、それは良かったわ。なら招待状をくれたのはあなたたちなのかしら?」

「はい。大精霊かあさんは今眠っていますので、私たちが送らせて頂きました。他には『一本角』の新頭首にして『龍角を持つ鷲獅子』の議長でもあらせられる、サラードルトレイク様からの招待状と明記しております」

日向たちは一斉に顔を見合わせて驚いた。

「サラ……ドルトレイク?」

日向が不思議そうに首を傾げる。

その姓には聞き覚えがあった。

振り返った日向はジンに向かって問いかける。

「ひよつとして、〃サラマンドラ〃の……？」

「え、ええ。サンドラの姉である、長女のサラ様です。でもまさか南側に来ていたなんて……もしかしたら、北側の技術を流出させたのも——」

「流出とは人聞きが悪いな、ジンⅡラツセル殿」

聞き覚えのない女性の声が背後から響き、ハツと一同が振り返る。

とたん、熱風が大樹の木々を揺らした。

激しく吹き荒ぶ熱と風の発生源は、空から現れた女性が放つ二枚の炎翼だった。

「サ、サラ様！」

「ふふ、久しいなジン。会える日を待っていた。後ろの〃箱庭の貴族〃殿とは初対面かな？」

燃え盛る炎翼を消失させ、樹の幹に舞い降りるサラⅡドルトレイク。

姉妹であるサンドラと同じ赤髪を靡かせる彼女は、健康的な褐色の肌を大胆に露出している。

その衣装は踊り子と見間違えるほどに軽装だ。

強い意志を感じさせる瞳の頭上には、サンドラよりも長く立派に生え育った二本の龍

角が猛々しく並び立っていた。

亜龍としての力量を推し量るにはそれだけで十分だろう。

サラは口元に僅かな笑みを浮かばせて仰々しく頭を垂れる。

「南側へようこそ、『ノーネーム』と『ウィル・オ・ウイスプ』。下層で噂の両コミニティを招くことが出来て、私も鼻高々といったところだ」

「……噂？」

日向が眉をひそめて問いかける。

サラは頷き、踵を返して歩き出す。

「ああ。しかし立ち話もなんだ。皆、中に入れ。茶の一つでも淹れよう」

手招きをしながら本陣の中に消えるサラ。

両コミニティは怪訝そうに顔を見合わせるも、招かれるままに大樹の中へと入っていった。

第30話 襲来

五月晴れだった。

川辺に薫る初夏の気配を感じながら、十六夜はふつと空を見上げて呟いた。

「おつ、黒点発見。やっぱり太陽が氷河期に入り始めてるつてのは本当なのかね」

彼の呟きは誰に聞かれるでもなく、風に流れて消えていく。

暇つぶしがてらにこうして川辺を散歩してみたものの、特にこれといって面白いものがあるわけでもない。

「いつそのこと隕石でも落ちてこねーかなー、と冗談で考えるくらいには、この時の十六夜は退屈だった。」

「あーあ、つまんね」

吐き捨てるように心情を吐露し、止めていた足を再び動かし始める——その時だった。

「……………ん？」

ヒユウ、と。

川辺を横薙ぎの風が吹き抜けた。

その風に乗った一枚の封書が不自然な軌道を描きながら、十六夜の持つ学生鞆の隙間にひらひらと投書された。

「……………何だ、今の?」

鞆の中から封書を取り出す。

裏面を見ると、そこには達筆でこう書かれていた。

『逆廻十六夜殿へ』と。

「……………?」

辺りを見回す。

しかし人影が無ければ気配もない。

「……………さて。どっかにポストシユートのプロでもいたのかね?」

クツと喉で笑い、封書の開け口に手をかける。

しかしそこで、ポケットの中の携帯が着信音を鳴らした。

十六夜はひとまず封書を鞆に戻し、携帯の通話ボタンを押して耳に当てる。

電話の向こうからは、幼くも元気な少女の声が聞こえてきた。

『やつほーイザ兄! また学校サボったんだって? さつきカナリアアマミリーホームに連絡があつてさあ、先生たちの機嫌が悪いのなんのって』

「そうか、悪かったな。もし次に連絡が来たら退学扱いにしといてくれ」
『いいの?』

「ああ。金糸雀が死んで、もう学校に行く義理も無いからな」

『……そっかー。うん、しょうがないね。高校に通うイザ兄つてのも新鮮だったけど、柄じゃないもんね』

そうだな、と軽く相槌を打つ。

『あ、そうだ。実は今黒ずくめのすっごい変な格好した弁護士がカナリアファミリ―ホームに来ててさ。イザ兄に金糸雀先生の遺書を持って来たつて言ってるんだよ』

「……遺書? 金糸雀のか?」

十六夜は不審そうに眉根を寄せる。

今際に連れ添ったが、そんな話は一つも出なかったはずだ。

『私も怪しいとは思ったんだけど、サインは金糸雀先生のものなんだよねー。それに弁護士も直接渡すつて聞かないからさ。取り敢えず一度カナリアファミリ―ホームに来てくんない? 焔もヘッドホンの調子が気になるみたいだし』

「んー……ま、気が向いたらな。ヘッドホンは良い調子だと、焔に伝えとけ」

ピツ、とそこで通話を切る。

大きな欠伸と背伸びをして、憂鬱気に青空を見渡した。

——さて、と十六夜は考える。

明日から世間はゴールデンウィークだ。

学校も仕事もない自分には連休なんて関係ないが、それでも浮き足立つのが日本人の性というものだろう。

天下泰平、世は事もなし。

穏やかで代わり映えのしない退屈な日々には殺されぬよう、今日も感動を探しに行こうか——。

——“アンダーウッド” 収穫祭本陣営。

——貴賓室。

日向たちが招かれた貴賓室は、大樹の中心に位置する場所だった。

そこは同時に大河の中心でもあるようで、窓を覗けば網目状の根に覆われた“アンダーウッド”の地下都市が一望できる。

サラは“一本角”の旗が飾られた席に座り、一同に着席を促した。

「改めて、自己紹介をさせてもらおう。私は“一本角”の頭首を務めるサラードルトレイク。そして聞いた通り元“サラマンドラ”の一員でもある」

「じゃあ、地下都市にある水晶の水路は」

「無論、私が作った。だが勘違いはしてくれな。あの水晶や“アンダーウッド”で使われている技術は、全て私が独自に生み出したもの。盗み出したわけではないからな」

「そ、そうでしたか」

ホツと胸を撫で下ろすジン。

そのことが気がかりだったのだろう。

「それでは次に、両コミュニティの代表者にも自己紹介を求めたいのだが……ジャック。彼女はやはり来ていないのか？」

「はい。ウィラは滅多に領地からは離れませんので。ここは参謀である私から御挨拶を」

「そうか。北側の下層でも最強と謳われる参加者を、ぜひとも招いてみたかったのだがな」

「……北側、最強？」

飛鳥と耀が揃って頭に疑問符を浮かべる。

唯一その名に聞き覚えのあった日向は、確認を込めてサラに尋ねる。

「ウィラって確か、“ウィル・オ・ウィスプ”のリーダーのことですよね？」

サラはこくりと頷く。

「そうだ。『蒼炎の悪魔』ウィラザイグニファトウス。生死の境界を行き来し、外界の扉にも干渉できる大悪魔。しかしその実態はあまり知られていない。三年前に私が南側へ移籍して以降、突如頭角を見せたと聞く。……風説によると『マクスウエルの魔王』を封印したという話まであるそうだが。もしも本当なら、六桁はおろか五桁最上位と言つても過言ではないな」

「ヤホホ……さて、どうでしょうか。そもそも五桁は、個人技よりも組織力を重視致しません。強力な同士が一人居たところで、長持ちはしませんよ」

ジャックは笑つてはぐらかす。

表情から読み取るうにも、カボチャ頭では分が悪い。

詮索は出来そうにないと判断したサラは、次に視線をジンに移す。

「ジャックの言う通り、五桁のコミュニティは強力な一人だけでは成立しない。その個人を打ち破る者が現れば、容易く瓦解してしまうからだ。……その顕著な一例が東側の『ペルセウス』だ。そうだろう、ジン？」

「え？」

「ふふ、誤魔化すな。最下層の『ノーネーム』が五桁の『ペルセウス』を打ち取つたのはもう有名すぎる話だ。それに例の『黒死斑の魔王』ブラック・バーチャイを打倒したのもお前たちだろう？」

「そ、それは……」

ジンはチラリと日向に目配せする。

彼が頷いたことを確認してから、ジンはサラの言葉を首肯した。

「は、はい。確かに『黒死斑の魔王』を倒したのは、僕らのコミュニティです」

「やはりそうだったか。今の『サラマンドラ』に魔王を倒すだけの力は無いからな。強力な助っ人が力を貸したのだろうと思っていた。離郷した私だが、礼を言わせてくれ。

……『サラマンドラ』を救ってくれてありがとう」

「い、いえ」

深く頭を下げて一礼するサラ。

彼女の物言いは高圧的だが、不思議と不快感はない。

彼女が持つ風格には相応だと思えるからだろう。

サラは日向たちの顔を見回すと、屈託のない笑みで収穫祭の感想を求めた。

「それで、収穫祭はどうだ？ 楽しんでもらえているだろうか？」

「そうですね。まだ到着したばかりで多くは見れていませんが、活気と賑わいは今まで味わった中でも一二を争うと思います」

「それは何より。ギフトゲームが始まるのは三日目以降の予定だが、それまでにバザーや市場も開かれる。南側の開放的な空気を少しでも愉しんでくれたら嬉しい」

「ええ。そのつもりよ」

日向と飛鳥が笑顔で答える。

その隣で耀は、瞳をキラキラとさせながらサラの龍角を見つめていた。

「どうした？ 私の角が気になるのか？」

「うん。凄く立派な角。サンドラみたいにつけ角じゃないんだね」

「ああ。コレは自前の龍角だ」

「だけどサラは “一本角” のコミュニティなんだよね？ 二本あるのにいいの？」

小首を傾げて尋ねる耀に、サラは苦笑して返答する。

「我々 “龍角ドラコ・グライフを持つ鷲獅子” の一員は、身体的な特徴を反映したコミュニティを作っている。それは確かだ。しかし頭につく数字は無視して構わないことになっている。そうでなければ、四枚の翼がある種などはどこにも所属出来ないだろう？」

「……あ、そっか」

「それと他には、各コミュニティの役割に応じても分けられているな。 “一本角” ・ “五爪” は戦闘を担当。 “二翼” ・ “三本の尾” ・ “四本足” は運搬を担当。 “六本傷” は農業・商業全般。これらを総じて “龍角を持つ鷲獅子” 連盟と呼ぶ」

「そう」

耀は短く返事をして、連盟旗を見上げた。

鷲の上半身と獅子の下半身。

巨大な翼と強靱な四肢を持つ鷲獅子。

通常のグリフォンと異なる点があるとすれば、その額に龍角が生えていることだろう。

二本もある龍角の一本は醜くへし折れている。

耀はたと首を傾げた。

「……あれ？ それなら『六本傷』は何を指しているの？」

「『龍角を持つ鷲獅子』のモデルである鷲獅子が負っていた傷と言われている。コミュニティの組み分けとしては……まあ、全種を受け入れているのではないかと。商才や農業などの知識というのは、普通に生きているだけでは手には入らないものだからな」

「そっか」

「収穫祭でも、『六本傷』の旗は多く見かけることになるだろう。今回は南側特有の動植物をかなりの数仕入れたと聞いた。後ほど見物に行くといい」

小さく頷いた耀は、そこで黒ウサギと目が合う。

ポン、と両手を叩いた彼女は、おもむろにサラへ質問した。

「南側特有の植物っていうと……ラビットイーターとか？」

「まだその話を引っ張るのですか!? そんな愉快に恐ろしい植物が存在がしているわ

け」

「あるぞ」

「あるんですか!？」

「そんなお馬鹿な!? とウサ耳を逆立てる黒ウサギ。

耀はキラリと瞳を光らせると、

「じゃあ……ブラックラビットイーターは？」

「だからどうして黒ウサギをダイレクトに狙うのですか!？」

「あるぞ」

「あるんですか!？」 ど、どこのお馬鹿様が、そんな対兎型最強プラントをッ!？」

「どこの馬鹿と言われても……発注書ならここにがあるが——」

「バシッ! と一瞬でサラの机から発注書を奪い取る黒ウサギ。

そこにはお馬鹿っぽい字でこう書かれていた。

『対黒ウサギ型決戦プラント：ブラック★ラビットイーター。総計八十本の触手で対象を淫靡に改造す——』

グシャ!

「……フフ。名前を確かめずとも、こんなお馬鹿な犯人は世界で一人シカイナイノデスヨ」

ガツクリとうなだれ、しくしくと涙を流し始める黒ウサギ。

起訴も辞さないのですよッー!? と大河に向かって魂の慟哭をあげる彼女からは、ひしひしと深い哀愁の念が漂ってくる。

悲しみに沈んだ彼女はやがて、青髪を緋色に変幻させつつ立ち上がった。

「……サラ様。収穫祭に招待いただきありがとうございます。我々はこれから向かわなければならぬ場所が出来たので、これにて失礼致します」

「そ、そうか。ラビットイーターなら、最下層の展示会場にあるはずだ」

「情報を感じます！ それでは、また後日です！」

「え、ちよ、ちよつと黒ウサギ!?!」

グワシ！ と飛鳥たちの襟首を鷲掴み、黒ウサギは一目散に飛び降りて行った。

自分以外のメンバーをぶら下げながらピョンピョンと流れるように跳び去っていく彼女の姿を見送りつつ、日向は呆れたようにため息を吐く。

「それじゃあ、サラ様。同士を追わなければならぬので、俺も失礼させてもらいます」

「サラで構わんよ。よければ口調も砕いていい」

「……いいのか？」

「ああ。私は器が大きいからな」

「それはそれは、流石は『龍角を持つ鷲獅子』、連盟の議長様だ」

フンとふんぞり返るサラに、大仰に肩を竦めておどける日向。

やがて二人はクツと喉を鳴らして笑い合う。

そこにアーシヤが割り込んだ。

「ちよちよ、ちよつとちよつと！ 何ちよつぴり良さげな雰囲気になつてるんだよ!」

「おや？ 別にそんなことは無いが？」

「そうそう。気のせい気のせい」

「あれ!? なにこの露骨な疎外感!？」

「ヤホホ！ アーシヤも大変ですねぇ。それでは我々も挨拶が済んだことですし、そろそろお暇するとしましょうか」

「ああいや、少し待ってくれ。実はまだ話があるんだ。お前の名は日向で良かったかな?」

「ああ」

日向が答えると、サラは頷いて彼に告げる。

「では日向は、後で『ノーネーム』のメンバーにも伝えて欲しい。それも出来るだけ確実に」

はて、と首を傾げる日向とジャック。

サラはいくぶん真剣な面持ちを浮かべると、彼らへの用件を口にした。

「今宵、夕食の時間にもう一度集まって欲しいと伝えてくれ。十年前に『アンダーウッド』を襲った魔王——巨人族について、相談したいことがあると」

——『アンダーウッドの地下都市』。

——最下層・展示会場保管庫。

その時、展示会場の保管庫にはあられもない絶叫が木霊していた。

「きゃああああああああああつ!!」

「キシヤアアアアアアアアア!!」

他のメンバーに遅れて保管庫にやって来た日向が目にしたのは、全長5mはありそうな怪植物が伸ばす無数の触手によって拘束され、今まさにちよつと良い子には見せられないことをされそうになっている黒ウサギの姿だった。

「……なあ、これ、一体何があつたんだ?」

日向は目の前の状況が信じられず、恐らくは一部始終を見ていたであろう飛鳥たちへと問いかける。

いかに対黒ウサギに特化した食兔植物といえど、所詮はただの植物だ。

色々規格外な箱庭なら魔王クラスが居たとしても不思議ではないが、少なくともそんなものを展示しようとは思わないだろう。

にもかかわらず、*“箱庭の貴族”*として並みの神仏をも遙かに凌駕する実力を誇るあの黒ウサギが、手も足も出せずに餌食（意味深）になろうとしているのである。

飛鳥と耀はどこか残念なものを見るような表情を浮かべながら、こうなつた経緯を説明した。

「まず、黒ウサギが金剛杵であの植物を焼き払おうとしたのよ」

「ふんふん」

「で、いざ駆け出したところで床にあった植物の粘液に滑つて転んで」

「な、なるほど？」

「そのひょうしに金剛杵を落つこととして」

「へ、へえ」

「おろおろしているところを触手に捕まって、今の状態になつた」

「黒ウサギ……」

話を聞き終えた日向は飛鳥たちと同様に残念なものを見るような視線を黒ウサギに向ける。

そんな彼女は今もなお必至に抵抗を続けていた。

「そ、そんな目で黒ウサギを見ないでくださいまし！　というか誰か助けてください！　こ、このままでは黒ウサギはとっても大変なことに——きやつ、ちよつ、どこを触つて!？」

「おつと、流石にこれ以上はまずいな」

日向たちだけならともかく——いや決して良くはないが——この場にはジンも居るのである。

ここから先の展開は彼の情操教育上とってもよろしくない。

日向は目にもとまらぬ速さで踏み込むと、ブラック★ラビットイーターの頭部と思われる部分を振り抜いた拳で打ち据えた。

「キシヤアアアアアアアア……」

その一撃が致命傷となり、ブラック★ラビットイーターは保管庫の床へと倒れ伏す。

こうして枝の触手・花弁の触手・樹液の触手とあらゆる場所から触手を生やしたカオスプラントは、その短い一生を終えたのだった。

また、それと同時に黒ウサギを拘束していた触手もバラバラと解け、空中に投げ出された彼女を日向がお姫様抱っこで受け止める。

「よつと。大丈夫か黒ウサギ?」

「は、はい。助かりました日向さん」

無事に着地して、日向は黒ウサギを床に下ろす。

耀は無常にもその命を散らしたブラック★ラビットイーターの亡骸を見つめながら、心底残念そうに呟いた。

「……もつたいない」

「お馬鹿言わないでください！ これ以上黒ウサギは！ 黒ウサギはっ……！」

涙目でプルプルと震え始める黒ウサギ。

それだけ今回の一件が堪えたのだろう。

へんにやりと垂れ下がるウサ耳を見て、日向は見かねたように彼女の頭を優しく撫でた。

「よしよし、あんまり落ち込むなって黒ウサギ。せっかくの祭りに、そんな顔は似合わないぞっ。」

「うう、日向さん……」

「今日は俺が奢ってやるから、たまには黒ウサギも羽目を外して楽しめよ。そうすればきつと気分も晴れるさ」

「……ぐすつ。ありがとうございます」

「気にするなって。普段黒ウサギに世話になってるのは俺たちの方なんだから、軽い恩

返してみたいなもんだ。それに男なら、女性には親切にするものだってとある人にも教わつたしな」

その台詞に、黒ウサギはほんのりと頬を染める。

ここまで明確に女の子として扱われるのは彼女としてもあまり経験がなかった。

黒ウサギは紅潮した顔を隠すようにしばし俯いたあと——ふっと、花が咲いたように微笑んだ。

「……ふふ、それは素晴らしい御言葉ですね。誰から教わつたのですか？」
「さて、どうだったかな」

はぐらかす日向に、黒ウサギもクスリと笑みをこぼす。

そんな彼らの様子を少し離れた位置で見守っていた飛鳥たちは、二人には聞こえないよう声を潜めて話し合う。

(日向君で、たまに男らしいことを言うのよね)

(うん。やっぱりジゴロだね)

(それは流石にどうかと……そもそも、日向さんのアレは男女問わずですし)

ひそひそと井戸端会議を続ける飛鳥たち。

日向はそんな彼女たちに気がつくど、

「おーい、三人で何を話してるんだ？」

「別に、何でもないわ」

「うん。何でもないよ」

「そうですね。何でもありません」

「……何か、前にもこんな場面があつた気がするな」

うーんと首を傾げて悩む日向。

そこでいつの間にか保管庫の入り口に立っていた黒ウサギが、満面の笑顔で呼びかけた。

「皆さーん！ 早くお祭りを満喫しましょう！」

先ほどまでの沈鬱はどこへやら。

そんな黒ウサギに日向たちは揃つて苦笑を浮かべると、収穫祭の会場に向かつて歩き出す。

「ところで日向君。当然、私たちにも奢ってくれるのよね？」

「うん。だつて男の子は、女の子には親切にしないとイケないもんね」

「え？ 二人とも女の子だったのか？」

「……日向君。歯を食いしばりなさい」

「待て待て飛鳥、悪かつた、悪かつたから右手を下ろしてくれ」

「飛鳥、あそこにちようど良さそうな串焼きの屋台があるよ」

「……耀？ それって普通に食べるんだよな？ 決して串を別の用途に使おうとか考えてないよな？」

お仕置きを目論む飛鳥たちに、日向ははあ、と小さくため息を吐く。

「まったく、二人とももう少しレイシアのようなお淑やかさをだな——」

言いかけて、日向はハツと口をつぐむ。

だが時すでに遅く、飛鳥と耀は一転して悪戯好きそうな笑みを浮かべた。

「あら日向君？ どうしてここでいきなりレイシアの名前が出るのかしら？」

「さ、さあ、何でだろうな？ 特に深い意味はないぞ？」

「えー？ ホントかなー？」

ニヤニヤと笑う二人。

うつと呻いた日向は、観念したように両手を挙げた。

「わ、分かった分かった。今日は全部俺の奢りだ。ジンも好きなの買っていいぞ」

「あ、は、はい！ ありがとうございます！」

その後、日向たちは日が暮れるまで収穫祭を満喫した。

“アンダーウッドの地下都市”にあるバザーや市場を見て回り、農園に植えるための苗や種子を物色する。

ここで見られない毛皮製の商品を驚きながら試着したり、生花で染色された民族

衣装を試着したりと、実に姦しく過ごした。

植物や牧畜についてもある程度の目処は付けたが、ギフトゲームの商品を手に入れてからでも間に合うということで保留となった。

決して、日向の懐事情を鑑みたわけではない。

“ヒツポキャンプの騎手”を始めいくつかのギフトゲームに参加登録を終えた頃。

茜色に染まる空を見上げて、黒ウサギが皆に提案した。

「そろそろ宿舎に帰りましょうか」

「そうだな」

一同は螺旋状に掘られた壁を登って行き、あてがわれた宿舎に戻る。

談話室に集まった日向たちは椅子に座って今日一日を振り返った。

「前夜祭は思ったよりもギフトゲームが少ないみたいだな」

「YES！ 本祭が始めるまではバザーや市場が主体となります。明日は民族舞踏を行うコミュニケーションも出てくるはずなのです。フッフ、楽しみですねー♪」

今にも小躍りしそうな雰囲気です。ウサ耳を左右に振る黒ウサギ。

普段から明るくハイテンションな彼女だが、今回はいつも増して楽しそうである。

思い返せば、黒ウサギは初めから“アンダーウッド”に来ることを楽しみにしていた素振りがあった。

「……ねえ、黒ウサギ。もしかして前々から『アンダーウッド』に来たかったの？」
「え？ ええと、そうですね。興味は有りました。黒ウサギがお世話になった同士が、南側の生まれだったので」

「同士……？ それって——」

「はい。魔王に連れ去れた仲間で、当時は我々のコミュニティで参謀を務めていた御二人でした。……幼かった黒ウサギを、コミュニティに招き入れてくれた方々です」

黒ウサギの話に、日向たちは驚いたように顔を見合わせる。

「それじゃあ黒ウサギは、『ノーネーム』の生まれじゃないのか？」

意外な話だった。

彼女の献身ぶりを見れば、『ノーネーム』が故郷だと思うのは当然だろう。

黒ウサギは両手を胸の前で組み、大事な宝物を抱きしめるように語る。

「はい。黒ウサギの故郷は、東の上層に在ったと聞きます。何でも、『月の兎』の国だったとか。しかし絶大な力を持つ魔王に滅ぼされ、一族は散り散りに。頼るあてもなく放浪していた黒ウサギを迎えてくれたのが、今の『ノーネーム』だったのです」

ギユツと両手を握り、幸せそうにはにかむ。

日向たちは言葉を失っていた。

今の話が本当なら、黒ウサギは二度も魔王に故郷を奪われたことになる。

彼女の見せる献身的な姿勢は「月の兎」である以上に、その体験から来ているのかも
しれない。

「黒ウサギを同士として迎え入れてくれた恩を返すため……絶対に、「ノーネーム」の
居場所を守るのです。そして皆が帰って来た時は、胸を張ってお帰りなさいと言うので
す！」

ムン、と両腕に力を込めて気合いを入れ直す黒ウサギ。

日向たちはそんな彼女の様子を、微笑ましげに見つめていた。

「……なら、その日までにコミュニティを復活させないとな。名も旗印も取り戻して、
あつと驚かせるのも面白そうだ」

「YES！ きつとビックリ仰天なのですよー」

花が咲いたような笑みを浮かべる黒ウサギは、ふつと窓の外に目を向ける。

格子の隙間から差し込む黄昏色の光を見つめながら、心の中で遠き日の恩人たちへ思
いを馳せた。

（——金糸雀様、忍音様。黒ウサギには、とっても素敵な同士ができました。いつかきつ
と、紹介して差し上げますからね）

——201X年・5月5日。

——カナリアファミリーホーム門前。

金糸雀の遺書について連絡がきてから数日後。

十六夜は真つ白な塗装をされた無骨な建物の前に立ち、腰に手を当てて呟いた。

「帰ってくるのは久しぶりだな、カナリアファミリーホーム」

小さく笑って門前を見上げる。

五階建ての真つ白な外観は初めて目にする者には研究施設か何かに思われるだろうが、よくよく見れば子供の落書きでいっぱいだった。

「さて、久しぶりにチビたちの顔でも見に行くか……と」

そう言って入り口に手をかけた瞬間、中から門が開かれた。

それと同時に、施設の中から二人の少年少女が十六夜を出迎えた。

「ヤッホーイザ兄！ 久しぶりだね！ 焔と一緒に待つてたよん！」

「……別に待つてたわけじゃないけど。……お帰り、イザ兄」

「おう。出迎え御苦労だな鈴華、焔」

両手を広げて仰々しく労う十六夜。

この二人は十六夜と同じくカナリアファミリーホームに引き取られた子供たちである。

健康的な褐色の肌と、パイナップルのような髪型の少女が、あやざとすずか彩里鈴華。

ボサボサの頭に眼鏡を掛けた少年が、さいこうほむら西郷焔。

鈴華が十六夜の背中をよじ登っている間に、焔は小首を傾げて十六夜に問う。

「俺の作ったヘッドホンの調子はどうか？」

「悪くないな」

「そう。よかつた」

「そんなことよりさいザ兄。変な弁護士がずっとホームに居ついて怖いんだよねー。ちよいちよいと追っ払ってよ」

ブンブンと両手を激しく振りながら、十六夜の肩に乗っかる鈴華。

「おいおい、俺を訪ねてきた客だろ？ 一、三日居つくぐらい今までもあったじゃねえか」

「それはそうだけど……今回のおっさんはなんだか、凄く怖いんだよね。変態的な意味で」

「変態？」

「そ。そこそこカッコいいし真つ黒な服も似合ってるんだけど——お嬢さん。私とお茶でもどうですか。結婚を前提に』とか誘われてドン引きだよ。他の子にも同じこと言ってるみたいだし」

「……………ほお？ そりゃ悪かったな」

肩車した鈴華の足首を、勢い良く持ち上げる。

バランスを崩した鈴華はきやー、と悲鳴を上げながら三回転して肩から落下。

十六夜はそのまま彼女を置いて行き、カナリアファミリーホームの中に入って行く。受付に居た年配の女性に聞いたところ、客人は今施設内を散策しているらしい。

戻ったら伝えると言われたので、受付に備えてある椅子に座って待つことにする。すると途端に、十六夜の背後から小さな手が巻きついて来る。

「ねえねえイザ兄ー。あの変態弁護士はー？」

「ホーム内を散歩中だと。またチビたちをナンパでもしてるんじゃないか？」

「げ、マジか。皆が危ない！」

シユタ、スタタタタタタタ！

と髪を揺らしながら去っていく鈴華。

その背中を見送り、背もたれに身を預ける。

しかし間を置かず、ボサボサ頭の焰が隣の椅子に飛び乗り、

「コレ、新作」

「あん？」

「ヘッドホン二号。『Crescent moon No. 2』。イザ兄にあげる」

ポン、と膝の上に置かれるヘッドホン。

十歳になったばかりの焔が作ったにしてはすごいふんと精緻な造形をしており、ヘッド部分にはトレードマークである炎のシンボルが貼られている。

「あげるって言つてもな……渡すならヘッドホン以外にも何かあるだろう？ 何で同じものをダブらせるんだよ」

「イザ兄は目覚まし時計とか使わないじゃん」

「使わないな。でも前にお前が作った天球儀は良かったぞ。アレは今でも部屋に飾つてる」

「……アレは、金糸雀先生が手伝つてくれたから作れた。俺一人じゃ作れない」

そつと顔を伏せる焔。

チツ、と舌打ちしてそつぽを向く十六夜。

「金糸雀先生……本当に死んじゃったんだな。何があつても死なない人だと思つてた」
「病死じゃしようがねえ。しかも原因不明の病魔ときた。流石の金糸雀のクソババアでも、手の打ちようがねえだろ」

「……うん」

十六夜は壮絶に面倒くさそうな顔で一度天井を仰ぎ、新作のヘッドホンを手に取つて頭に取り付けた。

「ん……？　おい、焔。ヘッドバンド部分のサイズが大きすぎないか？　ガバガバだぞ」
「大丈夫。アーム部分を耳に当てて、スライドの横にあるボタンを押して。それで頭の形にサイズ調整される。フィット感重視ってやつかな」

「へえ？　目の付けどころは面白いな」

ヤハハと笑って言われた通りにボタンを押す。

カシャン！　とヘッドバンドの部分が折りたたまれると、アーム部分がギュツと十六夜の耳を挟み込む。

「なるほど……けど、少しキツイな。これじゃ音がこもって聞こえにくいんじゃないか？」

「む……なら、改良してくる。貸して」

ほい、と十六夜がヘッドホンを手渡す——が、不意にその手が固まった。

十六夜が頭から取ったヘッドホンは、先ほどまでとは形が変わっていたのだ。

「……おい、焔。何だこのヘッドバンドの形は」

「ヘッドバンド部分でサイズ調整した結果。バンド部分を折り畳んで調整すると、どうしても立ち上がってこうなる」

「いや、そうじゃなくてだな。お前コレ、どう見てもネコ耳じゃねえか」

——そう。

改めて目にしたヘッドホンは、まるでネコ耳のような形に変形していたのだ。どうやら女性受けを狙ったものらしい。

焰はひとしきり説明を終えると、受付の椅子から立ち上がった。

ネコ耳ヘッドを改良するのだろう。

ついでに鞆を預けた十六夜は、後でヘッドホンと一緒に受け取りに行くことを約束する。

そうして焰とも別れた十六夜は受付で一人きりになり、再度背もたれに身を預けた。

(……。一年ぶりに来たけど、何にも変わってねえな)

十六夜は天井に付着している染みを見ながら苦笑いを浮かべる。

——このカナリアファミリーホームは、十六夜のように常識から逸脱した能力や才能を持つている子供たちを収容する施設である。

とは言え十六夜に比肩する程の驚異的な力を持つ少年少女はおらず、本当に些細な力がほとんどだ。

例えば西郷焰は、一度バラバラにした物なら瞬時に構造を理解できる。

この少年は圧倒的な“理解力”と“再現力”、そして“創造力”に長けていたことで、このカナリアファミリーホームに送られることになったのだ。

(……けど、これまでそんな不思議つ子を集めていた金糸雀はもういない。焰と鈴華の

世代で、このカナリアファミリーホームも終わりだな)

らしくない郷愁を感じていることに、一層の苦笑いを浮かべる。

デジタル時計で時間を確認してみれば、すでに十五分も経っていた。

このままでは埒が明かないと思い、椅子から立ち上がる。

と、背後に人の気配を感じた。

「——君が、逆廻十六夜君かね？」

(……へえ、これは噂以上に面白いな)

内心、驚いていた。

物思いに耽っていたとはいえ、こんな距離まで十六夜に悟られずに近づいた男は初めてだった。

背後に立つ男に興味が増らみ始めているのを感じた十六夜は、嬉々として振り返り、

「……………」

言葉を失った。

鈴華からは『黒い服の怪しいおじさん』という話を聞いていた。

なるほど、確かにその通りだ。

しかし問題はそこではない。

この日本という国で日常的に着用することはまずないであろう、真っ黒な燕尾服に黒

い山高帽、そして丸い片眼鏡。

似非イギリス紳士三点セットっぽい服を着た二十代半ばほどに見える男が、微笑を浮かべて十六夜を見ていたのだ。

「……………あー、そうだな。ボーラーハットとはいい趣味だ」

「うん？ ああ、ありがとう。だが賛辞の前に質問に答えて欲しいね。君が逆廻十六夜君か？」

「そうだ」

返事をする間、十六夜は男を注視する。

顔立ちは二十代半ばに見えるが、その佇まいは年齢以上に洗練されているようにも見える。

細身の体に似つかわしい整った顔立ちも好意的な印象を受けた。

しかし何より気にかかるのは、片眼鏡の奥に光るあの瞳だ。

初めは値踏みみされているのかと思っただが、少し違う。

片眼鏡の奥にある静謐な瞳は、十六夜のことをすでに見抜いているかのような錯覚をさせた。

「……………氣にくわねえ目だな」

「ふふ、よく言われるよ。以前、金糸雀にも出会い頭に言われた」

「だろ。それで、遺書はどこにある？」

「奥の一室を借りてある。そちらで渡そう。なにせ量が量だ。持ち運ぶのは重たくてね」

カツカツとホームの中に入っていく。

十六夜は黙って燕尾服の男の後について行く。

にわか雨の気配を見せ始めた空を窓の内側から眺めつつ、目的の部屋まで辿りついた十六夜を待っていたのは、

——厚さ10cmほどもある、

金糸雀の自伝小説だった——

——“アンダーウッドの地下都市”

——春日部耀の個室。

談話室を後にした後、各々の荷物を部屋まで運び一時解散となった。

部屋に戻った耀は、水樹の根を掘り出して藁葺きのように敷き詰めたベッドに身を投げ出した。

といつても、直接飛び込んだわけではない。

ベッドの表面に被せられた白いシーツの上から寝そべったのだ。

「……木の根と藁葺きの匂いがする」

落ち着く香りに身を任せ、思わず寝落ちしてしまいそうになる。

眠たげにまぶたを揺らす耀はしかし、ハツと思いついたように顔を上げた。

「……いけない。寝ている暇はない」

そう。

何せ耀は、固い決意と約束を胸にこの南側に来たのである。

友達百匹とまではいかないが、一種類でも多くの幻獣に出会わなければならない。

順番を譲ってくれた十六夜の恩に報いるためにも、時間を無駄には出来ないのだ。

「……そう言えば、十六夜のヘッドホンは見つかったのかな？」

ふっと、彼がいつも頭に付けていたトレードマークを思い出す。

あのヘッドホンには確か、特徴的な炎のエンブレムが貼られていた。

あれは昔、耀の父親が好きだったメーカーと同じマークだ。

（確か父さんは『今は手には入らないビンテージ物だ』って言ってたけど……十六夜の

ヘッドホンも、そうなのかな？）

もしかしたら、それが理由で必死に探しているのかもしれない。

「……うん。考えても分からないから、帰ってから聞こう」
思考を切り替える。

今は十六夜の心配よりも、彼との約束を果たすことが最優先だ。
幸いなことに、三毛猫は未だ散歩に出かけたまま帰ってこない。

一人で外に出るなら今しかないのだ。

「一度着替えて、街の外に出よう。野生区画なら色々な幻獣たちが居るはず」
ゴソゴソと荷物をあさり始める。

私生活からあまり物を必要としない耀だ。

鞆は小さく、最低限の物品しか入れていないはずなのに——身に覚えの無いソレが出てきて、彼女は一瞬……頭が真っ白になった。

「……………え」

嘘、と呻くように呟く。

転がり出た「ソレ」は……絶対に、特に、耀の鞆の中には、絶対にあつてはいけ
ない物だった。

「えつと……え、え？」

突然の衝撃に、耀はフラフラと立ち上がってそのまま部屋の柱に頭を打つ。

しかしそんな痛みは気にならない。

——だって、コレが、こんな物が出てきたら、まるで私が、十六夜を嵌めたように思われて”——

「耀さん！ 緊急事態で御座いますッ！」

「バタン！ と勢いよく扉を開け放つ黒ウサギ。」

「耀は咄嗟にソレを背中に隠す。」

「しかし、突如として響き渡った激震に、思わず尻餅をついて倒れ込んだ。」

「わっ……じ、地震？」

「違います！ 襲撃ですッ！！ “アンダーウッド” は現在、魔王の残党に襲われており

ます！！ 我々もすぐに加勢を——」

——と、そこで黒ウサギの言葉が途切れる。

「彼女の視線は床に転がった、十六夜のヘッドホンに釘付けになったからだ。」

「よ、耀さん？ どうして、十六夜さんのヘッドホンがここに……？」

「ち、違っ……?!？」

「耀の混乱に拍車がかかる。」

「無理もないだろう。」

「耀は本当に何も知らないのだ。」

「弁明しようにも口下手が災いして言葉が浮かばず、両者の間に沈黙が流れる。」

堪らずに黒ウサギが口火を切ろうとしたその時——宿舎の壁をぶち抜き、巨大な腕が彼女たちの視界に飛び込んだ。

「きゃ……！」

二人は同時に跳ね飛ばされる。

耀が風穴から外を確認すると、ギョロリと覗く大きな目玉と視線があつた。

とつさに跳び退いた耀だが、襲撃者は構わず巨腕を振って宿舎を薙ぎ倒す。

「耀さん——」

黒ウサギは体勢を崩した耀を庇うように抱き締め、宿舎の外に飛び出した。

襲撃者を目撃した耀は、戦慄と共に眩く。

「きよ……巨人……！」

——そう。

全長三〇尺もある巨軀。

巨大な長刀を片手に握る二の腕は、まるで大木のように太い。

顔には二つの穴がある仮面を着け、ギョロリと瞳を覗かせている。

黒ウサギは巨人の姿を見つめながら、臨戦態勢をとって叫んだ。

「YES！ 彼らは人類の幻獣——それが巨人族でございます!!!」

第31話 戦場

「オオオオオオオオオオオオオオオオ———!!!」

天地を鳴動させるかのような猛々しい雄叫びを轟かせ、巨大な凶体で襲い来る仮面の巨人。

唸りを上げて振り下ろされた大剣は大地を真つ二つに叩き割り、地下都市に激震を走らせる。

すでに外壁は衝撃で崩れ始めており、大樹の根によって何とか支えられている状況だ。

耀は旋風を駆使して敵の攻撃をかわしながら、黒ウサギへ切迫した声を向ける。

「黒ウサギ！ さつき魔王の残党って言ってたけど、まさか『主催者権限』ホストマスターが!」

「違います！ この不埒者どもはギフトゲームを無視して襲ってきました！ つまりは典型的な無法者の集団でございます！」

縦横無尽に跳び回りながら説明する黒ウサギの声音には、明らかな怒気が込められていた。

自由な箱庭に存在する数少ない法律さえ省みぬ蛮行に、心底腹を立てているのだろ
う。

そんな最中、巨人の一振り回避した二人の耳に、飛鳥の声が響いた。

「春日部さん！ 黒ウサギ！ 大丈夫!!」

「YES！ こちらは心配いりませ——ッ!? 飛鳥さん、後ろです!!」

え？ と背後を振り返る飛鳥。

そこには今まさに彼女に向かつて巨大な湾刀を振り下ろさんとする巨人族の姿があつた。

飛鳥は咄嗟にディーンを召喚しようとするが、凶刃は瞬く間に空気を切り裂いて彼女に迫る。

(やられる……っ!!)

悲鳴を上げる暇も無く、死を覚悟した飛鳥がギュッとまぶたを閉じたその瞬間——

「させねーよ」

間一髪両者の間に割り込んだ日向が、湾刀の腹に蹴りを打ち込んで刀身を粉々に粉碎した。

鈍色の破片が宙を舞う中、日向は驚異的な踏み込みで瞬く間に巨人族の懐へ飛び込むと、強弓のように固く引き絞った拳を振り抜いた。

山河を打ち砕くほどの威力が敵の胴体を捉えた瞬間、巨人族は為す術なく吹き飛ばされ、一体目を巻き込みながら地下都市の外壁に衝突して気絶する。

「あ、ひ、日向君……」

「よっ、飛鳥。油断大敵だぞ?」

啞然とする飛鳥の側に歩み寄って朗らかに笑いかける日向。

今の飛鳥には、その笑顔が何よりも頼もしく思えた。

「え、ええ、ごめんなさい。助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。怪我がなくてよかった」

「飛鳥さん! 日向さん!」

すぐさま二人の元へ黒ウサギと耀が合流し、今後の方針を話し合う。

「これからどうする?」

「もちろん、巨人族と戦いましょう」

確固たる決意を見せる飛鳥に、日向も頷いて同意する。

「よし。なら飛鳥と耀はひとまず地上に向かうべきだな。地下都市でディーンが暴れば確実に崩壊を助長するだろうし、耀も広い場所の方がギフトを生かしやすいだろう」

「YES! それでは日向さんも地上に加勢してください! 上にはもつと多くの巨人族たちが来ています! 都市内は黒ウサギにお任せをツ!!!」

言いながら、金剛杵を掲げて稲妻を迸らせる黒ウサギ。

新たに現れた巨人族は避ける間もなく全身を焼かれ、断末魔を上げて倒れ伏す。

しかし間髪入れず、地上から更に三体の巨人族が落ちてくる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ——!!!」

ズドオン!!!

と地鳴りを上げて地下都市に降り立った巨人族は、黒ウサギに鎖を投げつけて捕縛を試みる。

だが彼女には日向や十六夜に匹敵するほどの俊足がある。

迫り来る鎖の隙間を縫うように巨人族へ肉薄すると、すれ違い様に
擬似神格・金剛杵^{ヴァージュラ・レブリカ}の稲妻を叩きつけた。

「この程度ならば何体来ても黒ウサギの敵ではありません！ 皆さんは地上の援護を
！」

「わ、わかったわ！」

「よっしゃ！ んじゃ行くぜ二人共！」

「きやつ、ひ、日向君っ!？」

飛鳥が答えるや否や、日向は彼女を抱えて地上へと一気に跳躍した。

耀もすぐさま旋風を巻き上げて後に続くが、そこでふと眼下の惨状が目にとまる。

無惨にも倒壊した宿舎の姿に、彼女は唇を嘔み締めた。

「……………」

恐らく、ヘッドホンも無事では済まないだろう。

無実を証明しようにも、肝心のヘッドホンが壊れてしまえばそれも難しくなる。

もしも誤解が解けなかつたら、今の楽しい生活は泡沫のように消えてしまうのではないか。

そんな不安が胸をよぎるが――

「耀！ 地上に出るぞ！ 気を引き締めろ！」

「――っ！ う、うん！」

日向の叱咤で意識を現実に取り戻す。

耀は頭を振り、脆弱な思考を払いのける。

（そうだ。今は余計なことを考えてる場合じゃない）

纏う旋風の出力を高め、一息に地上まで加速する。

地下都市から飛び出して視界が開けると、そこは乱戦状態だった。

平原と大河の岸で、けたたましい剣戟の音が鳴り響く。

飛び散る火花が夜の帳を照らし出す。

轟々と燃え盛る炎の矢と、竜巻く風の障壁がぶつかり合って霧散する。

この世の奇跡の結晶である「恩恵」^{ギフト}を用いた闘争が、夜陰に沈む「アンダーウッド」の麓で繰り広げられていた。

「そ、想像以上の事態ね……!」

巨人族の総勢は精々二百と言ったところだが、敵は個で十の味方と相對している。

巨軀の襲撃者一体に、何人もの獣人や幻獣が挑んでようやく足止めをしているのだ。

それでも数で勝る「アンダーウッド」の住人が優勢かと思われるが、入り乱れた戦場には様々な声が飛び交っていた。

「大樹に居る者は灯りを消せ!! 奴らは夜目が利かないツ!!」

「駄目だ!! 「二翼」の奴らには夜目が利かない者もいる!!」

「知ったことか!! このままでは押し切られるだけだろうがツ!!」

「そもそも見張りは何をしていた?」

伝染病のように瞬く間に広がる混乱の嵐。

「アンダーウッド」の住人たちは今や、烏合の衆となつてバラバラに戦っている。

「情報の伝達がまったく機能していないな。連盟という指揮系統の枝分かれが裏目に出たか」

「うん。これじゃ数の有利も意味がない」

冷静に戦況を分析する日向に、耀も真剣な面持ちで首肯する。

「今必要なのは新たな戦力よりも、戦線を立て直し、味方を纏め上げる人材だな。となる
と、サラが一番の適役だが——」

「日向君。どうやらそれは無理みたいよ」

そこで飛鳥が上空を指差す。

見上げてみると、夜空で一際光を放つ人影が見えた。

炎の翼を広げて飛翔するサラと、それに追いつがる三体の巨人。

一見して他の巨人族よりも小柄だが、仮面の他に金属製の冠、笏や杖といった装身具
を身に纏っている。

彼女と切り結ぶ実力も、明らかに別格のソレだった。

それらの特徴を見て、日向が何やら思案する。

「巨人族、ケルト神話、冠や笏——なら、あいつらの正体はドルイドか？」

「ドルイド？」

耀の疑問に、日向は「ああ」と答えて説明する。

「ドルイドっていうのは、古代ケルト宗教であるドルイド教の司祭のことだ。膨大な知
識と魔術を備え、当時のケルト社会では最上位の階級であり、時には王すらも超える権
威を誇ったとされている」

その説明を聞いた飛鳥は、納得したように頷いた。

「なるほど、どうりで他の巨人とは比べものにならないはずだわ。日向君の予測が正しければ、あのサラと戦っている三体が敵の主力でしょう。加勢したいけど、私たちが下手に割り込んで均衡を崩したら、大打撃になるかもしれない。今は混乱している地上の戦いを——」

と飛鳥が的確に今後の方針を述べていると、不意に日向が足場を踏み砕いて跳躍した。

第三宇宙速度を遙かに超える速度で瞬く間にサラの眼前に躍り出ると、今まさに彼女に肉薄せんと迫っていた巨人族の一体を殴りつける。

完全な不意打ちに防御する間もなく横つ面を殴られた巨人族は、さながら隕石のごとくきりもみしながら落下していき、そのまま地表の巨人族を巻き込んで大地に巨大なクレーターを形成した。

「……………」
まるで水を打ったように静まり返る戦場。

敵も味方も唖然とその手を止める中、空中で体勢を立て直しながら、日向がサラに言い放つ。

「ほら、演説の舞台は整えたぜ！　ここからはあんたの仕事だろ、議長様!」

「……………えっ？　あ、ハッ!」

日向の言葉に、サラはいち早く我を取り戻す。

まだ完全に状況を把握できたわけではないが、戦線を立て直す好機には違いない。

サラは急加速して残りの巨人族を振り払うと、炎のように燃え盛る赤髪を靡かせて叫んだ。

「主^{ホスト}催者^トが 参^ゲ加者^{スト}に護られては末代までの名折れツ!

龍^{ドラ}角^コを持^グつ 鷲^{ライ}獅子^フ」

の旗本に生きる者は己の領分を全うし、戦線を立て直せ!!!」

サラの一大喝で、困惑していた 龍角を持つ鷲獅子 もふつつと戦意を滾らせ始める。

それと同時に、日向が戦場の最前線へと降り立った。

居並ぶ巨人族の軍勢の前に、彼はゆつくりと背後に振り返ると、未だ動かぬ 龍角を持つ鷲獅子 の面々を見据えて言い放つ。

「おいおいどうした? 議長様のお言葉が聞こえただろ? 故郷を荒らされ、大切な収穫祭まで踏みじられて……それでもまだ闘志に火が点かないってんなら」

ニヤリと、日向は明らかに挑発的な笑みを浮かべ、

「俺が一人で片付けるぜ?」

堂々と、自信満々に言つてのけた。

そんな彼の姿を誰もが固唾を呑んで見守る中——不意に、小さな綻びが生まれた。

「……う、うおおおおおおおッ!!!」

その叫びはさながら、巨大なダムに生じた小さなひび割れ。

ひび割れはやがて亀裂となり、静寂という名の堤防を砕きながら瞬く間に全体へと伝播していく。

そしてついに亀裂は限界に達し——ダムが決壊した。

「!!!」うおおおおおッ!!!」

溢れ出た水は激流となり、あつという間に全ての雑念を押し流す。

氾濫はやがて収束し、共に戦う同士たちの心が通い合う。

抱く想いは、ただ一つ。

故郷を荒らしたこの不埒な侵略者共に、我らが怒りの鉄槌を。

「『龍角を持つ鷲獅子』の御旗を背負う全ての者に告げる。巨人族共を……殲滅せよッ!!!」

サラの号令を起点に、おお！ と鬨の聲が上がる。

これを勝機と見た誰かが、大樹の上で『龍角を持つ鷲獅子』の旗印を広げて照らした。

戦意を取り戻した各コミュニティは、旗印の下に集って本来の役割に就く。

『一本角』と『五爪』は最前線に出て、裂帛の咆哮の共に巨人族へと襲いかかる。

“二翼”と“四本足”は戦車を引いて後方からそれを援護する。

“三本の尾”と“六本傷”は負傷者の運搬と物資の供給を迅速にこなす。

一転して一糸乱れぬ連携を発揮し始めた味方陣営を前に、飛鳥と耀はポカンと口を開けていた。

「……………大打撃だったね。巨人族が」

「……………そうね」

彼女たちは今まさに最前線で戦っている黒髪の少年を見つめる。

立ちほだかる巨人族を片っ端から千切っては投げ、千切っては投げ、あつという間に防衛戦を押し上げていくその姿は、まさに無双と呼ぶべき戦いぶりだ。

その破竹の勢いたるや、本当に彼一人で全てを終わらせかねないほどである。

「えーと、私たちはどうする?」

「とりあえず、街の防衛戦に加わりましょう。敵の数が多そうなところに落としてくれる?」

「大丈夫?」

「ええ。落下途中でディーンを召喚して、隙ができたところを畳み掛けるわ」

「わかった。私は上空から援護する」

「お願いね」

有言実行。

耀によつて敵地の上空まで運んでもらつた飛鳥は、そこで空爆よろしく投下される。落下の勢いで深紅のドレススカートをはためかせながら、彼女は懐からワインレッドのギフトカードを取り出し、戦火のただ中で叫んだ。

「来なさい！ デイーン！」

召喚の呼び声と共に、無印の円陣が浮かび上がる。

そこから現れたのは、重厚な外装を持つ巨軀の紅い鉄人形。

その衝撃は大地に巨大な亀裂を生み、一帯を大きく震撼させた。

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

月夜を揺らす雄叫びが響く。

その姿に巨人族が、鷲獅子が、数多の亜人たちが戦慄する。

突如現れた識別不能の紅い鉄人形。

戦線の動きが止まった隙を見て、飛鳥は盛大に一喝する。

「先手必勝よ！ 叩き潰しなさい！」

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

大地を踏み抜いて突進を仕掛けるデイーン。

身近にいた二体の巨人族は仮面の頭を掴まれたまま、互いに頭部を叩きつけられる。

堪らず、巨人族の戦士も吼えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ——!!!」

鉄腕を無理やり引き剥がそうとするが、デイーンの剛力は揺るがない。

左右に掴んだ頭を連続して叩きつけ叩きつけ叩きつけ、敵の戦意を消し飛ばす。

とうとう意識を失った巨人族の一体を持ち上げたデイーンは、

「投げつけなさい!」

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

命令されるまま、他の巨人族に向かって投げ飛ばした。

相手の巨人族も度肝を抜かれただろう。

巨躯の仲間が胸元に飛んで来る事態など、想像だにできなかったに違いない。

二体の巨人族はボーリングのように絡み合いながら、大河の中ほどまで吹き飛ばされた。

上空でその豪快な戦いぶりを目にした耀は、援護も忘れて唾然とする。

「デイーン……凄……い……!」

想像以上の強さに、耀は素直に舌を巻くが——刹那、琴線を弾く音がした。

「……え?」

反応する間もなく、一帯は濃霧に包まれた。

眼下の戦場も同様だ。

上空1000m地点に浮いている耀の元まで届く濃霧。

これでは視界など役に立たない。

「どうして急に……?!?」

「きゃあ!!」

ハッと下を見る。

サラを襲っていた二体が、飛鳥とディーンを目標を変えて襲いかかっているのだ。

しかも最悪なことに、他の巨人族に巻きつけられた幾重もの鎖がディーンの動きを鈍くしている。

ディーンの動きを封じられれば、飛鳥は無防備になってしまう。

「飛鳥——ッ!!」

耀は旋風を駆使して急降下した。

ありつたけの速度で勢いをつけた彼女は、さらに己の重量を「ゲノム・ツリ生命の目録」に保管された最も重い獣に変化させる。

大気突き破り数多の衝撃波を生みながら打ち下ろされた渾身の一撃は、

「ウオオオオオオッオオオオオ——!!!」

——巨腕の一振りですべて防がれた。

「……………なっ……………!?!」

さながら、虫でも払うかのように。

冠と仮面をつけた巨人族は、耀の全霊の一撃を苦も無く弾き飛ばしたのだ。

辛うじてガードした耀だが、そのまま大河の水面を何度もバウンドして対岸まで吹き飛ばされる。

衝撃を風圧で和らげたために無傷だが、もし地面に叩き付けられていれば大怪我を負っていたかもしれない。

しかし幸いにもその程度で済んだのは、耀の体が常人より遙かに強固であるおかげだ。

(もしこんなのを、飛鳥が受けたら……………!)

きつと——彼女の華奢な体は粉々に砕け散るだろう。

耀は最悪の想像を頭を振って払った。

一刻も早く飛鳥の元へ駆けつけるため、旋風を巻き上げて飛翔する。

鷹の瞳を持つ彼女だが、濃霧に覆われた地上では視界が悪くて見えない。

加えて嗅覚も惑わされ始めている。

何らかのギフトが使用されていることは明らかだった。

(こっぴなったら……………!)

耀は急上昇し、空中で停止する。

この濃霧がギフトの力なら、こちらもギフトの力で対抗すればいい。

両手を広げた耀は、ありったけの風を双掌に収束し始める。

(飛ぶ以外のことは初めてだけど……きつと出来るはず……！)

否、出来なければいけない。

出来なければ、飛鳥の命が危ないのだ。

「っ、この……吹き飛ベツ——！！！！」

轟と竜巻いた風が水平に走り、やがて立ち昇るように霧を掻きまわす。

しかし、当然のように出力不足。

濃霧が晴れる気配はない。

徒労で終わるかと思われたがしかし、耀の行動を察した幻獣たちが同時に雄叫びを上

げた。

「GEYAAAAAaaaaaa!!!」

呼応するかのように数多の旋風が巻き上がる。

人の言語野では理解できない幻獣たちの雄叫びだが、耀の耳には一つ一つがはっきり

と聞き取れていた。

(グリーと、その仲間たちが……)

心中で礼を告げ、霧が薄くなったと同時に走り出す。

手遅れでないことを切に祈りながら、駆けつけた先に——拍子抜けするぐらい無事な彼女がいた。

「飛鳥……!」

「か、春日部さん……きやつ!」

安心した耀は勢い余って飛鳥の胸に飛び込んでしまい、二人揃って横転する。

デインから降りていたお陰で落ちなくて済んだが、それでも尻餅をついてしまった。

「よかった……! でもあの状況で無傷なんて、やっぱり飛鳥は凄い……!」

「当然よ……と言いたいけれど。私の力で倒したわけじゃないわ」

「え?」

「周りを見れば分かるはずよ」

飛鳥の重い声に促され、周囲を確認する。

霧は薄くなり人影が見えるようになり始め、巨人族の姿が——

「………嘘」

無意識に、そう呟いた。

霧が晴れた先の巨人族は——全滅だった。

特に異様なのは、倒れている巨人のおよそ半数が鋭利な刃物で頭・首・心臓を的確に裂かれて死亡していることだ。

敵の主力であつた二体の内一体も、同様の殺され方をされている。

耀が飛鳥の元に駆けつけるまでに要した時間は、僅かに一分。

なのに戦場に居た巨人族の半数が、全て同一の殺害方法で絶命していたのだ。

「まさか、これだけの数の巨人族を、たった一人で……!? 一体誰が——!?」

その事実には戦慄し、息を呑む。

あの一瞬で巨人族の半数を皆殺しなど、人智を超えた所業である。

こんな怪物じみたことが出来るのは、彼女の知る限り二人しか居ない。

だが、しかし、彼らのそれとは明らかに、戦闘の質が違つていた。

「——お怪我はありませんか?」

「え……え?」

ハツと我に返る。

突然の声にすぐさま警戒心を高めた耀だったが、次の瞬間には解いていた。

決して意識的なものではない。

声の主は亜人でも、幻獣でも、亜龍の類でもないが——一目見て分かつた。

この女性が、巨人族の半数を屠つたのだと。

「……………」

純白で美しい白髪を、頭上で纏めている黒い髪飾り。

静謐さを放つ白いドレススカートと、精緻な意匠が施された白銀の鎧。

顔の上半分を隠す、白黒の舞踏仮面。

全身を白黒で塗り固めているであろうその姿は、余すことなく巨人族の血で染まっていたのだ。

「……………あなたが、これだけの巨人族を？」

仮面の女性は答えず、二人を一瞥して無事を確認する。

そして、

「……………心強い同士をお持ちですね」

「え？」

ぼつりと告げた仮面の女性の視線は、彼女たちの背後に向けられていた。

耀と飛鳥は首を傾げつつ、誘われるように振り返る。

そこでは積み重なって倒れた巨人族たちの背に立った日向が、真剣な眼差しで女性を見つめていた。

「……………日向？」

見れば、彼の周囲に横たわる巨人族にだけは、刃に裂かれた形跡がない。

きつともう半数は彼が倒していたのだろう。

相も変わらぬの規格外ぶりだと耀は再認識するが、しかしそんな彼の顔つきには、普段の余裕が見えなかった。

しばらく日向と目を合わせていた女性は、やがて踵を返して歩き出した。

唯一血で染まっていない黒い髪飾りと、纏められたポニーテールを揺らして去っていく。

啞然とその背を見つめる耀と飛鳥。

その後方で日向は小さく息を吐くと、彼女たちの元に歩み寄った。

「二人ともお疲れさん。耀も飛鳥も怪我は無いか？」

「う、うん」

「ええ。大丈夫よ」

そっか、と安堵の表情を浮かべた彼は、そのまま先ほどの女性が立ち去った方向を静かに見つめる。

その隣で飛鳥は一言、苦々しく告げた。

「彼女、強いわね」

「……ああ」

日向もいつになく重い声音で首肯する。

プライドの高い飛鳥が無条件で認めざるを得ないほど、あの仮面の女性は圧倒的な強者なのだ。

もしかしたら彼女とは、この収穫祭で競い合うことになるかもしれない。

その事実にある者は奮い立ち、ある者は齒がみし、またある者は彼我の実力差に氣を落とす。

三者三様の反応を見せる最中、不意に安全を知らせるための鐘が鳴らされた。

日向は飛鳥と耀に振り返ると、氣を抜いたように朗らかに笑って口を開く。

「さて、そろそろ帰るか。きつと黒ウサギも心配してるだろうしな」

「そうね」

「うん」

濃霧に覆われた“アンダーウッド”は、耀と幻獣たちの働きによって払われた。

日向と飛鳥に続いて帰路に就く耀は、夜空に輝く満天の星々を見上げる。

川辺の清涼な空気を背伸びと共に吸い込み、一晚遅れの満月を眺め――

「……………あ、」

十六夜のヘッドホンを思い出した。

同時に過去最大級の悪寒が背筋にはしる。

彼女は冷や汗を流しながら、旋風を巻き上げて急いで宿舎に戻るのだった。

遺書の九割を読み終える頃には、外は豪雨になっていた。

十六夜は席を立てて窓際に背中を預けると、水の弾ける音と共に遺書の内容を吟味する。

（あのクソババア……こんな分厚い遺書を残しておきながら、ほとんどが思い出話じゃねえか。作り話でも何でもいいから、もう少し読み手を楽しませようってつもりはなかったのか？）

やれやれ、と首を横に振る。

金糸雀の遺書に書かれていたのは、本当に自伝まがいの思い出話だった。

あの嵐の夜の出会いから、世界中のあちこちへ十六夜を連れ回したこと。

世界三大瀑布を一つ一つ巡り、悪魔が潜むという伝承に挑んだこと。

星は本当に球体なのか、世界は本当に平面でないのか、自前の船で確かめに行つたこと。

そんな二人の古き良き思い出を綴ること、およそ600ページ。

……率直な感想を言おう。

金糸雀は、極度の親バカだったに違いない。

(……まあ、楽しかったからいいんだけど)

豪雨はさらに強さを増し、当分止む気配はない。

そんな外の風景を眺めていた十六夜は、唯一書かれていない思い出があったことに気づく。

(そういうえば……戦場を見に行ったことだけ、一言も書かれてなかったな)

金糸雀は本当に、十六夜が行きたいと言えどどこにでも連れて行った。

それこそ彼が彼が戦場を見たいと言えど——最も凄惨な場所に見学へ連れて行ってくれた。

その旅行の最後に、「二度とここには連れてこないから」と金糸雀は告げた。

戦場に行きたければ、己の意思と足で行けと、初めて突き放したのだ。

だから十六夜も、金糸雀が生きている間は足を運ぶまいと誓った。

……その程度の信頼関係はお互いにあったのだと、今更ながらに自覚して苦笑した。

(……、)

金糸雀と過ごした七年間。

それ以前の十年間。

その人生の濃度は比べるまでもない。

純粹に一言、「楽しかった」と胸を張って言える日々だった。

しかしそれでも……胸の奥にある一番空虚な部分が満たされたかと言えば、否だ。イグアスの滝壺に住む悪魔に挑んだ。

そして十六夜は生還した。

——しかし、悪魔は存在しなかった。

神が住まうというキリマンジエ口を、僅か十歳で踏破した。

その景色は神秘に溢れていた。

——しかし、神など存在しなかった。

星は本当に球体なのか。

世界は平面に広がっていないのか。

七海の謎を十六夜は走破した。

——しかし、それは既知内のことだった。

そんな数多の旅の果てに、十六夜は悟った。

世界で一番幻想的ファンタジーなのは、「逆廻十六夜」という存在なのだ。

以来、十六夜の気性や奇行は落ち着き始めた。

普通の人間など所詮、斬って叩いて撃てば死ぬのだ。

その事実が十六夜の心の籠になり、そして良心になり、やがては常識になった。

人間の社会で暮らしていくには、相応の背丈に合わせてやらねばならない。

——天は俺の上に人を創らず”

それを比喩でも何でももない、純粋なつまらない事実として彼は受け止めた。

金糸雀の死後に残ったのは、つまらない世の中を嘲笑うような作り笑いだけだった。

(……続きでも読むか)

なにせむかつくことに、まだ60ページもありやがるのだ。

腹が立ったから、一文一句ガッツリ読み込んで誤字でも探してやろうか、と思つてページの最後の一行を読んだ。

『——あつ、そうだわ。書き忘れるところだった。今日、デジタル時計をしてきてるわね？ 十六夜君が次に時計を見る日時は、5/5 15:49 48. 27秒じゃないかしら?』

「何?」

思わず独り言が出た。

そして反射的に腕時計を見る。

十六夜のデジタル時計は、5/5 15:49 48. 27秒を指していた。

「……へえ? どういうことだコレ」

十六夜の口から意図せず喜色の声上がる。

言わずもがな、相手は遺書である。

十六夜の行動をコンマ数秒まで言い当てることなど不可能なはずだ。

「ハッ、なんだよ。ずいぶんと面白い手品を残してくれたなクソツタレ。さっぱりトリックが分からねえぞクソババア」

——そうだ、こうでなくちゃいけない。

生涯自分を楽しませると約束した女の遺書が、ただの思い出話で終わっていいはずがない。

この残り60ページこそ金糸雀の最後のサプライズだと確信し、十六夜はページを捲った。

『——だから、そのクソババアと言うのを止めなさい』

「——っ——!!?」

ガタンツ!!!

と勢いよく立ち上がる。

周囲を確認し、室内に監視カメラや怪しい物が無いかも確かめる。

当然ながらそんなものはどこにもなかった。

この部屋にある怪しいものと言えば、部屋隅の燕尾服の男ぐらいである。

気がつけば、十六夜の表情からは笑みが消えていた。

この二枚目の冒頭は異常過ぎる。

まるで、十六夜の独り言を聞いていたかのような文脈で書かれていたのだ。

「ハッ……流石は金糸雀主催のラスト・サプライズ。最高に面白いじゃねえか……！」

久方ぶりに胸を高鳴らせながら、十六夜は筆跡を確かめる。

しかしそれは紛れもなく金糸雀のものだった。

訝しがりながらも、次の文章に目を通す。

『さてと。君も薄々わかっているとは思うけど。コレは私からの最後のゲーム。〃主催者〃は存在しない私。対戦相手も存在しない私。挑戦状も私。よって十六夜君、君の勝利条件はただひとつ！ 存在しない〃私〃と〃君〃を見つけ、入り口に提示せよ——！』

バサアツ!!!

と突如として遺書が舞い上がり、カナリアファミリーホーム内の至る場所へと散乱していく。

不自然な紙吹雪に唾然としていた十六夜だが、手元にひらひらと落ちてきた遺書の一枚に目を通し、

『ちなみに18時までに見つからなかつたら——私の賞品として、みんなを連れて行きます。』

「……………な……………!?!」

嫌な予感がした。

「主催者」となった金糸雀は、絶対に偽りのルールを書くことはない。

すぐさま部屋を飛び出し、焰や鈴華の個室を探索し、その他の全ての部屋も確認する。しかしどこにも、誰もいない。

戦慄した十六夜は、自然と時刻を確認した。

現在の時刻は16:00。

カナリアファミリーホームから、人が雲散霧消した瞬間だった。

第32話 バロールの死眼

——“アンダーウツドの地下都市”。

——宿舎残骸。

巨人族を撃退した後、耀は一直線に宿舎まで戻ってきていた。

いくら樹の根に支えられているとはいえ、宿舎自体は至つて普通の建物である。

床が抜ければ落ち、柱が壊れれば瓦解する。

ましてや巨人族の豪腕を突つ込まれたのであれば、倒壊するのは当然だ。

耀は瓦礫を旋風で吹き飛ばし、十六夜のヘッドホンを探す。

(お願い……！ もしヘッドホンが壊れてしまつたら……！)

切実な思いで願う耀。

彼女の心の中は今、度重なるアクシデントでぐちゃぐちゃになっていた。

その中でも、特に彼女を追い詰めたのが——

(南側でも……また、活躍出来なかつた……！)

あれだけ強い決意でやって来たのに。

友人に順番を譲ってもらってまでやって来たのに。

今度はちやんと参戦出来たのに、手も足も出せずに敗北してしまった。

これで十六夜のヘッドホンまで壊れていたら、本当に居場所が無くなってしまう。

強く、強く、強く願われた想いは虚しく、瓦礫の下から出てきたヘッドホンは、

「……………あ、」

粉々だった。

辛うじて炎のエンブレムが残っているだけのスクラップだった。

せめて外装の部分だけでもどうにかなっていたら、箱庭の奇跡で元に戻せたかもしれない。

ない。

しかし粉々だった。

耀は震える手で炎のエンブレムを拾い、その場にへたりと座り込む。

(どうしよう……………だって、このヘッドホンは十六夜が大切にしていた——)

——そう。

あれだけ楽しみにしていた収穫祭を差し置いてまで探していた、彼の大事な宝物。

これを見つげ出すためにコミュニティに残って、代わりに、私に頑張って来いって、な

のに、その宝物を、私が盗んだことにされたら……………これまで箱庭で手に入れた大事なも

のが、全て崩れ去ってしまう。

「……春日部さん？ どうしたの？」

ビクッ!!

と耀の背筋が跳ねた。

後ろから近づいて来る友人の足音が、今は死神の足音に聞こえる。

耀の動悸は爆発しそうなほどに加速していた。

「か、春日部さん？ ちよつと、顔が真っ青よ！ 大丈夫!?」

「あす……か……!」

炎のエンブレムを胸に抱き締め、震えながら立ち上がる。

いつそ逃げようかと脆弱な意志に囚われそうになったその時——折れた大樹の根が、

耀の頭上に落ちてきた。

—— “アンダーウッド”。

—— 収獲祭本陣営。

巨人族の撃退から間もなく、“ノーネーム”はサラの元へと呼び出されていた。

代表としてやって来た日向と黒ウサギが貴賓室に入ると、そこにジンの姿を見つけて

ホッと安堵の息を吐く。

「ジン坊ちゃん！ 今までどちらにいらしたんですか!？」

「ちようど本陣営に呼び出されていたところだったから、大樹の中に匿われていたんだ。心配かけてごめん、黒ウサギ」

「そうだったのか。とにかく、無事でなによりだ」

「そう言つて笑う日向に対し、ジンは途端に申し訳なさそうな顔をした。

「すいません、日向さん。こんな大変な事態に、参戦することも出来ず……」

「ジン。今は後悔よりも先に、やるべきことがあるだろう？ 自分を恥じてる暇があるなら、少しでも責務を全うしろ」

「うっ……」

いつになく厳しい口調で諫められ、己の不甲斐なさを噛み締めるジン。

しかし日向はそこでふっと笑い、そんな彼の胸にポン、と軽く拳を当てて、

「頼りにしてるぞ、リーダー」

その一言で、ジンは弱々しい表情から一転、気を引き締めるように力強い面持ちで頷いた。

「は、はいっ!」

「ヤホホ。『ノーネーム』の皆さんもご無事なようで何よりです」

「ああ。ジャックとアーシャも無事で良かった」

「ノーネーム」と同じく招集された「ウィル・オ・ウィスプ」のメンバーに、日向も朗らかに笑いかける。

「フンツ、あんなデカブツ共にアーシャ様が後れを取るわけないじゃん」

「で、実際のところどうだったんだジャック?」

「滅茶苦茶ビビってましたねえ。落ち着かせるのに苦労しましたよ」

「ちよおつ!? ジャックさん何言っちゃってるんですかあつ!?」

「ヤホホホ! 事実を言ったままですよ?」

ジャックのネタバレを聞いた日向たちは、一斉に憐憫の眼差しをアーシャに向ける。

「アーシャ……」

「な、なんだよ日向。……待て、見るな! そんな目で私を見るなあつ!」

うぬああああつ! と羞恥で悶えるアーシャを華麗に放置して、一同はサラへと向き

直る。

「サラ様。これは一体どういうことですか? 魔王は十年前に滅んだと聞いていました

が」

ジンの追求に、サラは背もたれにのけぞりつつ天井を見上げた。

「……すまない。今晩詳しい話をさせてもらおうと思っていたのだが、彼奴らの動きが存外早かった。実は両コミユニティを「アンダーウッド」に招待したのには訳があつ

たのだ。……話を聞いてくれるか？」

「はい」

「ヤホホ……まあ、聞くだけでしたら」

即答するジンと、曖昧に笑って誤魔化すジャック。

サラは身を乗り出して事情を説明する。

「この『アンダーウッド』が魔王の襲撃を受けていたという話は、すでに聞いたな？」
「ああ。さつきジンが言っていた通り、十年前のことだよな？」

日向の言葉に、サラは首を縦に振って続ける。

「そうだ。魔王を倒すことは出来たのだが、傷跡は深く残ってしまった。そして魔王の残党が、『アンダーウッド』に復讐を目論んでいるらしい」

「……なるほど、それがさつきの巨人族なのか？」

「そうだ。しかしそれだけとは限らん。私もさつきまで巡回に行っていたのだが、やはり周囲の様子がおかしい。ペリユドンを始め殺人種と呼ばれる幻獣まで集まり始めている。グリフォンの威嚇にすら動じないととなると、何かしらの術で操られている可能性もある」

サラは滔々と推測を述べる。

頷きながら、黒ウサギは新たな疑問を覚える。

「しかしあの巨人族は、一体どこの巨人族なのですか？ あの仮面は見覚えがありませんが」

ふむ、とそこでサラは一旦会話を切る。

考えを纏めるようにしばし間を取った彼女は、やがてとつとつと話し始めた。

「あの魔王の残党は……箱庭に逃げ込んできた巨人族の末裔。その混血たちだ」

やはり、と黒ウサギは得心した。

「箱庭の巨人族はその多くが敗残兵だ。ケルトのフォモール族などが代表格なのだが、北欧の者たちも多い。敗残してきた経緯から、基本的に戦いを避ける穏やかな気性で、物造りに長けた種なのだが……五十年前に『侵略の書』と呼ばれる魔道書を手に入れた部族が、『主権者権限』^{ホストマスター}を用いて巨人族を支配し始めたのがキツカケだ」

む、と黒ウサギは考えるようにウサ耳を伏せる。

「『侵略の書』……？ もしやゲーム名は、Labor Gabalaと呼ばれるものだったのでは？」

「知っているのか？」

「え、ええ。しかし知っているとはいっても、軽くウサ耳に挟んだ程度の知識でございませぬ。別名では『来寇の書』^{らいこう}と呼ばれる『主権者権限』で、土地を賭け合うゲームを強制できる書だとか」

「そうだ。数ある『主催者権限』の中では最もポピュラーな能力とも言える。彼奴らはそれで次々とコミユニティを巨大にしていたのだ」

——しかし、その魔王の一族は戦いに敗れて滅んだ。

巨人族は敗残兵に戻つたのだ。

「……だが、巨人族は今でもこの『アンダーウッド』を狙い続けている。元々が気性の穏やかな一族であるにもかかわらずだ。つまりここには、ヤツらがそれほどまでに執着する何かがあるってことか？」

日向の指摘を、サラは静かに首肯する。

彼女は椅子から立ち上がると、壁に掛けてあつた連盟旗を捲つた。

その後ろにあつた隠し金庫の中から人の頭ぐらいの大きな石を取り出し、一同に見せる。

「連中の狙いは、この『瞳』だ」

「『瞳』……ですか？ この岩石が？」

ジンが目の前に置かれた石を見て尋ねる。

サラは頷くと、厳かな声で告げた。

「ああ。今は封印されているが……もしも開封されれば、一度に一〇〇の神霊を殺すことが出来ると言われている」

一斉に、息を呑む音が貴賓室に響いた。

箱庭最強種の一角である神霊を、一度に一〇〇体も薙ぎ倒すという。

背筋に戦慄が走るのを感じながら、黒ウサギはおずおずと尋ねる。

「一体、これはどんなギフトなのですか？」

その問いに答えようとしたサラだが、不意に、そこで日向が口を開いた。

「……もしかして、『バロールの魔眼』か？」

ガタンツ!!!

とジンと黒ウサギは腰を浮かせるほど驚いた。

「バ、バ、『バロールの魔眼』!?」

「ご、御冗談をツ!? 『バロールの魔眼』と言えば、ケルト神話群において最強最悪とされた死の神眼!! 視るだけで死の恩恵を与える、魔王の瞳ではありませんか!!!」

血相を変えて声を荒げる。

日向の予想が間違いであって欲しいという願いはしかし、驚愕に目を見開くサラによつて打ち砕かれた。

「驚いた……よく分かったな」

「そりゃ、ここまでお膳立てされればな。ケルト神話、巨人族、来寇の書、そして一〇〇の神霊を殺すほどの凶悪な瞳——まるで『魔眼のバロール』を連想しろと言っている

ようなもんだ」

飄々と肩を竦める日向だが、サラは頼もしい存在を見つけた言わんばかりに期待の混じった笑みを浮かべる。

「フツ、どうやらお前たちを南側に招いたのは、決して間違いではなかったようだ」

「で、では、その瞳は本当に——」

「ああ。日向の言うとおりだ。正確には『バロールの死眼』という」

黒ウサギたちの息を呑む音が貴賓室に響く。

しかしながら、その凶悪さを考えれば無理もないだろう。

——『バロールの死眼』とは、死の恩恵を与える心眼である。

紀元前五世紀にまで遡って語られるケルト神話に記述された、巨人族の王バロールが所持したとされる神眼。

この瞳が一度瞼を開けば、太陽の如き光と共に死を与えると伝承されている。

以前日向たちが戦った『ブラック・パーチャー黒死斑の魔王』が、風に乗せて死を運んでいたとするならば。

『バロールの死眼』は、光と共に死を強制する瞳なのだ。

「し、しかし、『バロールの死眼』はバロールの死と共に失われたはず。それがなぜ今さら」

「そうおかしなことではない。聞けばケルト神というのは多くが後天性の神霊と聞く。ならば神霊に成り上がるための霊格が確率されていることになる」

「すなわち、第二第三のバロールが現れても何ら不思議ではない……ってことか」

締め括るように言った日向の台詞に、サラは真剣な面持ちで頷いた。

彼女の言葉通り、神霊は功績を積むで後天的に成り上がることが出来る。

“黒死斑の魔王”がいい例だろう。

彼女は八〇〇〇万の死霊群であることは別に、ハーメルンの笛吹きによる信仰と恐怖を取り込んで神霊に昇華した。

つまり神霊への転生とは、“一定以上の信仰を集める”という試練を乗り越えた先にある恩恵なのだ。

「い、言われてみれば確かに。ケルト神の半分以上は、国威と共に信仰を得た種族です。権威あるドルイドたちの信仰が、祖霊崇拜と自然崇拜が主流だったからという記憶があります……」

「そうだ。人は信仰を集めれば神に成れる。ケルト神話群はその顕著な一例だ。ゆえに箱庭の中では偶発的に“バロールの死眼”を開眼させる巨人族は、少なからず現れたらしい。一説では、“侵略の書”の副産物とも言われているがな」

そう言つて視線を机上に落とすサラ。

そこにあるのは、魔王の力が宿る瞳。

「連中は何としてもこの神眼を取り戻したいのだろう。適性が無ければ十全の力を発揮しないが、それでも強力なギフトであることは変わりない。私たちが収穫祭で忙しい時を狙って、今後も襲撃を仕掛けてくるだろう」

「ヤホホ……その襲撃から街を守るために、我々に協力しろと？」

サラの要請に、ジャックとアーシャはあからさまに嫌な顔をした。

彼らは戦闘力こそあるが、そもそも武闘派のコミュニニティではない。

「ウィル・オ・ウイスプ」は、あくまで物造りが主体の組織である。

前回のように巻き込まれたならともかく、進んで戦いに臨むのは主義に反するのだから。

アーシャは青髪のスインテールを左右に振って難色を示した。

「確かにウィラ姉は強いよ。でも、性格が致命的に戦闘向きじゃないんだよね。だから滅多なことじゃギフトゲームにも参加しないし。それにこの件はまず、フロアマスター「階層支配者」に相談するのが筋つてもんだろ？ 相手はギフトゲームすら無視する無法者だぜ？」

正論を論され、サラは沈鬱そうに黙り込む。

その指摘は正しかった。

「階層支配者」とは今回のように無法行為を行う連中を裁くことが使命。

ましてや相手は「主催者権限」すら持ち合わせていない無法者である。

問答無用で虐殺されても文句は言えない。

しかしサラは、辛そうな顔で首を横に振った。

「残念ながら……現在南側に「階層支配者」は存在しない」

「……は？」

「先月のことだ。時期としては「黒死斑の魔王」が現れたのと同時期になる。七〇〇〇〇〇〇外門に現れた魔王に「階層支配者」が討たれたのだ。その後の安否は今も分からん。しかも魔王の正体すら不明ということ」

「なっ!？」

予想外の返答に絶句するアーシャ。

他の面々も同様だ。

まさか「階層支配者」が不在になっているとは思いもしなかったのだろう。

サラは静かに天を仰ぎ、南側の現状を話す。

「巨人族が暴れ始めたのはそれからのことなのだ。本来なら「アンダーウッド」に移住してくるはずであった「本角」の同士……ユニコーンの群れも、奴らの襲撃で壊滅的な打撃を受けたらしい。以後、連絡も途絶えたままだ」

「そ、そんな……!」

黒ウサギは蒼白になった。

実は以前、日向たちを箱庭へ招き入れた日に、彼女はトリトニスの滝で一頭のユニコーンと接点があつたのだ。

しかし今の話を聞いた限りでは、そのユニコーンも決して無事では済まなかつただらう。

「我々は白夜叉様に代行として、この南側から新たな『階層支配者』を選定してもらえないかと相談した。しかし秩序の守護を司る『階層支配者』として相応しいコミュニケーションなど、そうそう見つかる物ではない。そこで白夜叉様から話を持ちかけられたのが……『龍角ドラコ・グライフを持つ鷲獅子』連盟の五桁昇格と、『階層支配者』の任命を同時に行うというものだった」

そこでこれまで静聴していた日向は、納得したように頷いた。

「なるほどな。つまり今回の収穫祭は単なる土地の再興を誇示するためだけのものではなく、『龍角を持つ鷲獅子』の五桁昇格と『階層支配者』の任命を賭けた、一世一代の大勝負つてわけだ」

ごくりと、ジンと黒ウサギは息を呑む。

サラも重々しく頷き、事の重要性を語る。

「そうだ。『階層支配者』に任命されれば、『主催者権限』と共に強力な恩恵を賜る。巨

人族を殲滅するには「主催者権限」を用いたギフトゲームで挑むしかない。南側の安寧のためにも、この収穫祭は絶対に成功させねばならないのだ」

強固な決意で宣言するサラ。

初めて知る真実に言葉を無くす一同だが、黒ウサギは同時に納得もしていた。

——「龍角を持つ鷲獅子」は、下層においても有数の規模を誇る連盟だ。

遙か遠い「ノーネーム」の二一〇五三八〇外門にさえ、「六本傷」の分家が存在している。

そして規模と同様に、活動の歴史も長い。

その由緒ある連盟の議長席に、新参であるはずのサラードルトレイクが座っている。

いかに南側の住人が大らかな気性とはいえ、群れの主ともいえる議長席をやすやすと譲るはずがない。

縄張り意識の強い一部の幻獣などはなおさらだ。

しかしサラは「階層支配者」である「サラマンドラ」の元跡取り娘である。

その経験も見込まれ、僅か三年という所属歴で議長に任命されたのだろう。

（サラ様は御父上の隣ですつと「階層支配者」の活動を見てきたはず。「龍角を持つ鷲獅子」連盟の将来を見据えれば、彼女を議長に据えるのは当然の流れだったのかも）

黒ウサギはサラの素姓や人格を詳しく知っているわけではないが、仮にも「サラマン

ドラ”は元同盟コミュニティだ。

その跡取り娘であっただけに、噂程度には聞いていた。

彼女が星海龍王の龍角を継承すれば、”サラマンドラ”は最盛期を迎えるだろうと噂されていたほどの逸材である。

しかし当のサラは、憂鬱気に赤髪を触つて苦笑を浮かべた。

「次期 “階層支配者” という立場を捨てて “龍角を持つ 鷲獅子” 連盟に身を置いた私が、現在は南側の “階層支配者” になろうとしている。さぞや滑稽に見えるだろうが……生憎と手段を選んでいる場合ではない。南側の安寧のためにも、両コミュニティの力を貸していただけないだろうか？」

「そう言われましてもねえ……」

ジャックは事情を聞いてもまだ難色を示す。

それでも引き下がるという選択肢を持たないサラは、”バロールの死眼”の上に手の平をのせ、

「無論、タダとは言わん。多くの武功を立てたコミュニティには、この “バロールの死眼” を与えようと思う」

「は……!？」

「聞けばウイラ”ザ”イグニファトウスは生死の境界を行き来するほどの力があると言

う。ならばこの「バロールの死眼」も十全に使いこなせよう。我らの手元で腐らせておくよりは、彼女の下で力を振るつた方が有益というものだ。……どうだろう、ジャック」

「それは……まあ、おっしゃる通りですが。確かにウイラならば、「バロールの死眼」の適性は高いでしょう。しかし、我々以外のコミュニティに渡つた時はどうするのです？ 下層でウイラ以外に「バロールの死眼」を使いこなせる例外など……きつと居ませんよ？」

——チラ。

とジャックが日向たちを見る。

「『ノーネーム』であれば別だとも思っているのだろう。」

サラもその視線に気づき、頷いて返す。

「安心して欲しい。「バロールの死眼」を譲渡するのは、「ウィル・オ・ウィスプ」か「ノーネーム」のいずれかに限らせてもらう予定だ」

「ぼ、僕たちもですか？」

「し、しかしサラ様。黒ウサギたちの同士に適性持ちはないと思われまますよ？」

困惑する二人に対して今度はサラが驚き、思い出したように切り出した。

「すまない、すっかり忘れていた。実は白夜叉様から「ノーネーム」へ、新たな恩恵を預

かっていたのだった」

「白夜叉から？」

「ああ、話はすでに聞いているだろう？ The P I E D P I P E R o f H A M E L I N をクリアした報酬のことだ。アレさえあれば、『バロールの死眼』を使いこなすことが出来るはず」

パンパン、とサラが手を叩いて使用人を呼ぶ。

現れた使用人は両手に小箱を持っており、蓋には向かい合う双女神の紋が刻まれている。

「サウザンドアイズ」の旗印で封印された小箱を渡されたジンは、面食らって驚く。

「これが、新たな『恩恵』……？」

「そう。お前たちは『黒死斑の魔王』主催ゲーム、The P I E D P I P E R o f H A M E L I N を全ての勝利条件を満たしてクリアした。これはその特別恩賞。開けてみるといい」

ジンは神妙な顔で頷き、小箱の封を解く。

中には笛吹き道化——『グリムグリモワール・ハーメルン』の旗印を刻んだ指輪が入っていた。

(……ハイ、どい?)

耀が目を覚ましたのは、緊急の救護施設として設けられた場所だった。

ベッドの周りを仕切る白いカーテンの向こうからは、先の戦いで負傷した者たちを治療する声が響いている。

戦いとは無関係に運び込まれた耀は、少し恥ずかしくなつてベッドの上で小さく体を縮こませた。

恐らくは気を失つていたのでろう。

後頭部にはまだ鈍い痛みが残っている。

問題は瓦礫と樹の根に下敷きにされた自分が、なぜその程度の怪我で済んだのかということだ。

「あら、気がついた?」

すつと、カーテンの隙間から飛鳥が入ってきた。

その腕に巻かれた包帯を見て、耀は思わず息を呑む。

「飛鳥……! その腕の傷」

「ああ、これ? 軽く擦つたぐらいよ。気にしなくていいわ」

よっこいしょ、と少し年頃の娘としてはどうかと思われるかけ声と共に椅子へと腰掛

ける飛鳥。

それで全てを把握した。

彼女が身を挺して、自分を助けてくれたのだ。

「……飛鳥」

「それより春日部さん。コレについて、説明してくれる？」

スツと差し出されたのは、炎のエンブレム。

十六夜のヘッドホンのトレードマークだ。

責められると思った耀は、ベッドの中でさらに小さくうずくまる。

「春日部さん。……あなたが十六夜君のヘッドホンを持ち出したの？」

「……」

「それとも違うの？」

「……違う」

ヒョコツとベッドの中から少しだけ顔を覗かせて、耀は控えめに呟いた。

飛鳥は腕を組み、難しそうな顔をする。

「じゃあ、春日部さんは無関係ということでもいいのかしら？」

「……わからない。けど、私の鞆に入ってた」

「入れた覚えは？」

「無い」

即答する。

それは事実だ。

彼女が荷造りをした時には確かに入っていないかった。

しかし、ならばどうやって鞆の中にヘッドホンが入り込んだのか。

「ええと、話を纏めるところこういうことね。春日部さんが荷物を整理した後、犯人は十六夜君のヘッドホンを持ち出し、春日部さんの鞆の中に紛れ込ませた。……これが可能なのは？」

「……私？」

「春日部さん以外でっ！」

苦笑いしながら訂正する飛鳥。

自分のことを微塵も疑っていない友人に、耀は少しでも元気を取り戻す。

ゆっくりと体を起こして、考える。

「そう言われても……私以外でそんなことが出来るのは——」

——ハッと息を呑み、連想する。

耀は苦虫を噛み潰したような顔になった後、

「……飛鳥。そのエンブレム、貸して」

「え？ どうしたの急に」

「犯人の匂い。残ってるかも」

ポン、と飛鳥は両手を打つ。

耀の嗅覚は犬並だということのを忘れていた。

彼女のギフトはこういう状況でこそ無類の力を発揮するギフトなのだ。

「……………」

「どう？？」

「……………うん。やっぱり残ってた」

しかし、耀の表情は再び歪む。

犯人は分かった。

が、どうして彼がこんなことをするのか分からない。

何か事情があったのかと思いきや耀だが、不意にカーテンの向こうから声がした。

聞き慣れたその声に、彼女はハッと顔を上げる。

「えつとつと。『ノーネーム』の春日部さんと。ここでいいですか、三毛猫の旦那さん

？」

『ああ、ありがとな。鉤尻尾の姉ちゃん』

「いえいえ。あんな複雑な事情を聞いて見ぬふりをしては『六本傷』の名折れです。力

不足は承知ですが、クツシヨン役にでもなりますよ」

シヤラ、とカーテンが開く。

現れたのはペリベッド通りの噴水広場にカフェテラスを持つ、鉤尻尾の店員と三毛猫だった。

「どうもですよー常連さん！ 向こうの方で打ちひしがれていた、三毛猫の旦那さんをお連れしました！」

『うおい!!? そんな暴露は必要ないやろ!』

「えー? でも本当に、この世のドン底みたいな顔で参ったじゃないですか」

『そ、それは姉ちゃん。色々な事情が……』

「……三毛猫」

ビクウ!

と三毛猫が店員の猫娘の腕の中で跳ねる。

彼を受け取った耀は、哀しそうな顔で問う。

「どうして……?」

『そ、それは、お嬢があまりにも不憫やったから。仕返しにつて……』

「……」

そんなことで——と責めたい気持ちだが、いくつも浮かんでは消えた。

耀は冷静になり、まぶたを閉ざしてこれまでのことを顧みる。

このまま三毛猫が犯人だと十六夜に突き出すことは簡単だ。

しかし、その原因は本当には無いのだろうか？

元はと言えば、自分の弱さが招いたものではないだろうか？

仮にこのまま全ての結果だけを十六夜に突きつけてしまえば、それこそ自分たちの関係は崩壊してしまうだろう。

「……飛鳥」

「なに？」

「やっぱり犯人が分かっただけじゃ駄目だ。なんとかしてヘッドホンを直さないとけない。……手伝ってくれる？」

「ええ、喜んで」

ベッドから降りて、気持ちを一新する耀。

ここは箱庭の世界。

きつと何か奇跡的な方法があるはずだ。

二人はそれを探るため、もう一度宿舎へ急ぐのだった。

——“アンダーウッドの地下都市”。

——宿舎の瓦礫前。

「諦めましょう」

無事に壊れたヘッドホンの残骸を見つけるなり一言、飛鳥はスパツとそう言った。そのあまりに鋭い言葉のナイフに、耀のハートがダメージを受ける。

「……ええと。もう少し頑張ってみない？」

「無理よ」

即答だった。

耀はガツクリと肩を落とす。

「元の形に戻すなんて物理的に不可能よ。だからヘッドホンを直すことよりも、十六夜君の機嫌をとる方向で考えを進めましょう」

即座にヘッドホンを見限って、他の手を探そうと提案する飛鳥。

耀としては是が非でも直したかったが、現物がこの有様ではどうしようもない。

「でも、どうしたら機嫌が取れるのかな？」

「そうね。第一候補としては……ブラックラビットイーターを、黒ウサギとセットで贈るわけないでしょうこのお馬鹿様っ!!」

スパアーン!

と背後からハリセン一閃。

耀は目を丸くして驚き、

「それ、名案!」

「ボケ倒すのも大概にしなさい!!」

スパパアーン!

とさらにハリセン一閃。

黒ウサギの後に続いて日向やジン、ジャックやアーシャたちもこの場にやって来た。

どうやらサラの元から帰ってきたらしい。

日向の腕の中には、しょんぼりとうなだれた三毛猫が抱かれていた。

「黒ウサギに通訳してもらって、三毛猫から話を聞いたんだが……なるほどな。これは

また、盛大に木っ端微塵になったもんだ」

粉々に砕けたヘッドホンの残骸を見て、日向は思わず苦笑する。

耀はどう反応しているか分からず顔を逸らしていると、そこに黒ウサギが勢いよく詰

め寄った。

「まったくもう……耀さんっ。どうして黒ウサギたちに相談してくださいさらなかったの

すか!」

「え、えっと……それは、巨人族が襲ってきてそれどころじゃ」

「その話ではありませんっ！ 収穫祭の滞在日数のことでございます！ 相談してくださいれば黒ウサギはもちろん、日向さんや飛鳥さん……十六夜さんだって、耀さんを優先的に参加させました！ なのにどうして相談してくれなかったのですかっ!?」

耀の肩を掴み激しくブンブンブンブンブンと揺さぶって問い詰める黒ウサギ。

耀は危うく脳震盪を起こしかけたが、今はそれどころではない。

「で、でも。ゲームで決めるって約束が」

「所詮はゲームでございます！ 我々は同じ屋根の下で暮らし、同じ苦楽を共にし、同じ旗の下で戦う同士です！ 悩んでいることがあるのなら、まずは我々に相談するのが筋でございますっ！ ましてや耀さんが、戦果を誤魔化すほどに悩んでいたなんて……!」

黒ウサギは、まるで気づいておりませんでした……!!」

ハッと耀と飛鳥はお互いに顔を見合わせる。

二人の視線は、自然にジャックとアーシャに向けられた。

「ジャック、アーシャ……あなたたち」

「ヤホホ……ここに来るまでの道中、彼女たちとお話させてもらったのですが……どうやら、まずいお話だったようで」

「い、いやほらその、軽い世間話程度のつもりだったんだけどさ……」

ポリポリとカボチャ頭と頬を搔く二人。

黒ウサギは半泣きになって耀と飛鳥を見つめる。

「『ウイル・オ・ウイスプ』から招待を受けたギフトゲームは……御二人が一緒にクリアされたと、ジャックさんたちから伺いました。御二人は素晴らしい連携プレーを見せてくれて、すごく参考になったと……敗北したゲームを、とても誇らしげに語ってくれました」

黒ウサギの切実な声に、耀と飛鳥は何も言えずに俯いてしまう。

彼女の言う通り、『ウイル・オ・ウイスプ』のゲームは二人で勝ち取った戦果だったのだ。

しかし耀には、もつと後ろめたい事実があった。

恐る恐る、視線を日向に向けてみると、

「……まあ、実は俺も招待されていたみたいだな」

「……っ……」

三毛猫を抱きながら困ったように笑う日向に、耀は我慢できず泣きそうになる。

——そう。

あの招待状は確かに『ノーネーム』を招くために送られたものだったが、より具体的に言えば、『火龍誕生祭』で競い合った耀と日向の二人に宛てた手紙だったのだ。

それを自分が先に知ったのを良いことに、彼には告げず成果を独占しようとした。どんな事情があつたにせよ、大切な友人を騙したことには変わりない。

全ては自分の蒔いた種であり、決しておいそれと許されることではないだろう。

「ち、違うのよ日向君！ 春日部さんも決して悪気があつたわけじゃ……！」

悲痛な面持ちで唇を噛み締める耀の隣で、飛鳥が必死に弁明する。

しかし耀は、小さく首を横に振つた。

「ありがとう飛鳥。でも、たとえどんなに取り繕つても、私が日向を騙したのは事実だから。……本当に、ごめんなさい」

震える声で、耀は深々と頭を下げた。

その声はか細く、弱々しく、まるで今にも消え入つてしまひそうだった。

そんな彼女の姿を見て、日向は小さく息を吐くと、

「そうだな。なら、耀には責任を取ってもらおうか」

「……っ、……はい」

「日向君！」

咄嗟に飛鳥が待ったをかけるが、日向は構わず真剣な眼差しで頭を下げる耀を見つめる。

鋭い視線を感じて、耀の心臓が早鐘を打つ。

日向はおもむろに三毛猫を両手で抱き直すと、耀の頭の上のせ、
「それじゃあ、今すぐ三毛猫と仲直りすること」

「……………え？」

ポカんと、耀は呆けた表情で顔を上げた。

主人の頭に乗つけられた三毛猫も似たような表情を浮かべている。

「え、あの……………そ、それだけ？」

「いやまだあるぞ。十六夜にも、ヘッドホンを壊したことを後できちんと謝ることももちろん、三毛猫も一緒にな」

耀はさらに困惑したような表情を見せる。

返す言葉が見つからない彼女に、日向はふつと笑いかけると、

「確かに、嘘をついたのは悪い。黒ウサギの言うように、皆に相談しなかったも……………まあ、よくない傾向だとは思う。現に今回の一件は、それが原因で起こったんだしな」

「……………うん」

「けどなあ……………俺が思うに、耀の場合は別に独りよがりとかそういうのじゃなくて、単に周りに頼るのが苦手なだけなんだよな。北側での大会の時もそうだったけど、素直に頼ることに慣れてないって感じだ。残念だが、こればかりは今すぐにどうこうできる問題じゃない。仲間に頼り頼られを繰り返すことで、ゆつくりと身につけていくべきもの

だからな」

「……」

耀は何も言わず、真摯に日向の言葉を受け止める。

「と、いうわけで。耀の目先の課題は、仲間に対して素直に頼れるようになること。その第一歩として、まずは皆とのわだかまりを無くすこと。今は、それだけでいいさ」

そう言つて日向は言葉を締め括る。

しかし耀の表情には不安の色が見て取れる。

「……本当に、それでいいの？」

「ああ。だって耀は、ちゃんと心から反省して、俺に謝つてくれたじゃないか。だから俺も許すよ。これぐらい笑つて水に流せるのが、本当の友達つてもんだ。——だろ？」

ニツと、そう言つて日向は朗らかな笑みを浮かべる。

「あ……」

その笑顔を見た瞬間、たちまち耀の中の不安はどこかへと消えてしまった。

代わりに芽生えてくるのは、嬉しいような、安心するような、ちよつぴり照れるような、そんな気持ちだ。

胸にこみ上げてくる温かなものを感じながら——耀は、自然と笑みを浮かべていた。

「……わかった。ありがとう、日向」

「別に礼を言われるようなことじゃないさ。それに、まだ終わりじゃないだろう?」

「うん。ちゃんと十六夜にも謝るね。私なりに、精いっぱい誠意をこめて」

「ああ。それに素直に謝るつてのは、想像以上に難しいもんだ。今さら泣きついたつて条件は変えないぞ?」

日向は冗談めかしてニヤリと笑う。

耀もくすりと微笑んだ。

「ふふ、わかった。一生懸命頑張ります」

「おう。死ぬ気で頑張れ」

『お嬢〜! 本当にごめんなく!』

「うん。私も心配かけてごめんね、三毛猫」

耀と三毛猫も無事に仲直りをする。

そんな彼らの様子をハラハラと見守っていた黒ウサギたちは、ホツと安心したように息をついた。

「春日部さん。私でよければ、またいつでも力になるわ」

「うん、本当にありがとう飛鳥。迷惑かけてごめんね」

「黒ウサギにも、いつでも頼ってくださいね!」

「ありがとう黒ウサギ。黒ウサギも心配かけてごめんね」

「わ、私も……その、たまには、相談ぐらい乗ってやつてもいいからな！」

「えっと、アーシヤはちよつと頼りない……かな？」

「うおいつ?! そこは素直に感謝しとけよッ!!」

「ははは、残念だったなアーシヤ」

日向たちに笑顔の花が咲く。

ジャックとジンは、そんな彼らの姿を見て嬉しそうに会話を交わしていた。

「ヤホホ！ 素敵な同士をお持ちですね。どうなることかと思いましたが、これにて一件落着ですな」

「はい。耀さんも元気を取り戻せたようで何よりです」

そこでジンは耀に歩み寄り、小首を傾げて問う。

「ところで耀さん。やはり、ヘッドホンは駄目そうですか？」

「う、うん。どうにか直そうとはしてみただけど……」

「いえ、壊れてしまったものは仕方ありません。……ですが、もしかしたらどうにかなるかもしれない。僕に考えがあるので、聞いてもらえますか？」

突然のジンの申し出に、耀は目を丸くする。

この壊れたヘッドホンを修復する手立てがあるというのだろうか。

しかしその時、緊急を知らせる鐘の音が「アンダーウッド」に響き渡った。

網目模様の樹の根から樹霊コダマの少女が、盛大に慌てた様子で声を上げる。

「た、大変ですッ!! 巨人族がかつてない大軍勢を率いて…… アンダーウッド」を強襲し始めました!!!」

——直後。

地下都市を震わせる地鳴りが、一帯に響いたのだった。

第33話 黄金の竖琴

——カナリアファミリーホーム。

——5/5 17:38。

十六夜は散らばった遺書を全て集め終わると、窓際で居眠りをしていた燕尾服の男を椅子ごと蹴り上げた。

「うわお!」

「うわお! じゃねえよ。いつまで寝てんだこのエセ弁護士」

若干余裕のない声で責める十六夜。

男はやれやれと立ち上がると、山高帽のほこりを軽く払って被り直し、十六夜に向かつて首を傾げた。

「ふあくあ。それで、何の用だい。ゲームの決着は付いたのかな?」

「いいや。まだ肝心な部分だけが解けていない」

「……ほお? つまり大まかには解けたわけだ」

キラリ、と片眼鏡の縁が光る。

十六夜は集めた六〇〇ページの遺書を見せて解を示す。

「出題は『存在しない』私」と君を見つめ、入り口に提示せよ。まず当然だが、存在しないものを提示することは出来ない。これは形ある何かの比喩だと推測出来る。

——ではなんの比喩なのか。答えはその前の文章にある」

“主催者”は存在しない私。

対戦相手も存在しない私。

挑・戦・状・も・私。

「上記の二文とは違いこの最後の一文だけが、存在が確立されている。仮に挑戦状＝遺書と置き換えるなら、遺書の中で唯一語られることの無かった私金糸雀と君十六夜のエピソード。——すなわち戦場見学が、存在しない私と君の解答だ」

「おお……正解だ、十六夜君」

パチパチと手を叩く燕尾服の男。

しかしそれ以上のアクションは無い。

十六夜はすうつと目を細めて威嚇する。

「……お前が“入り口”じゃないのか？」

「ほう、私が？ 面白い推理だね。ぜひ聞かせて欲しいな」

微笑を浮かべる燕尾服の男。

残り時間はあまりないが、他にあてもない。

「……ここからの推理は俺的にかなり眉唾なんだが。遺書には『みんなを連れていく』と書かれていた。これをストレートに解釈するなら、死者の世界に連れていくという意味だ」

「ほうほう。それで?」

「つまり手紙が指している入口ってのは、死者の世界への入り口……だと、思うんだが」
珍しく言葉を濁す十六夜。

燕尾服の男は興味深そうに顎を撫でてクツクツと笑う。

「つまり、私は死者の国の水先案内人だと?」

「いいや……そんなチャチなもんじゃないと思ってる」

「というと?」

ズイ、と山高帽を傾けて迫る男。

十六夜は警戒と疑心を高めながら口にした。

「——南米にはあるんだよ。燕尾服と山高帽を常備する、生と死の神霊を祀る宗教が」

「……ほお?」

「神霊の名は『十字架クロアキバの男爵』。生と死、人間界と神界が交わる永遠のクロスポイントに立つと伝えられる燕尾服の死神。……そしてその死神は、生命という側面から全知を

得るといふ」

十六夜は真つ直ぐに燕尾服の男の片眼鏡を覗き込む。

この世の全ての生命に通じるといふ瞳なら、遺書に細工をして書き換えることも可能だろう。

「十字架の男爵」と呼ばれた男は、やれやれと首を左右に振る。

「なるほどね。実に面白い推理だ。しかし口になっている君自身は、ずいぶんと半信半疑なようだが？」

「……………」

「ふふん？ 思ったより疑り深いな。君の性格を鑑みると、もつとテンション上げて喜ぶと思つたのだがね。……しかしそうだな、君の疑問に二つ答えよう。まず遺書についてだが、私は手を加えていない。その遺書は正真正銘、金糸雀の書いたものだ」

「……………もう一つの疑問は？」

燕尾服の男は、ニヤアと口元を歪め。

「——ご名答。私はクロア＝バロン。」

「神々の世界」への道を預かる神霊の一人だ」

ユラリ、と燕尾服を揺らして立ち上がる。

——途端に、男の存在感が肥大化した。

「……ハッ、なるほど。特大のハツタリ、というわけでもなさそうだな」

「無論だよ。しかし君は、今も疑い続けているようだね？」

「そんなことねえよ。……と言いたいのが、アンタが相手じゃ強がりにもならないな」

飄々と肩を竦めるも、背中には冷や汗が流れている。

十六夜のその姿に、“十字架の男爵”はガツカリしたように肩を落とした。

「……なるほど。金糸雀が心配するわけだ」

「なに？」

「ツマラナイ奴だと言ったんだ、十六夜君。いやはやまったく残念無念の吃驚仰天、的はずれの当て外れ。やれやれ、君はもつと面白い人間だと聞いていたのだがね。それだけ強大な超常の力を宿しながら、それを解放する術を無くしてしまってる。あるいは精神的な封印と言ってもいい。——単刀直入に言うと、君はこの世界に適応しすぎてしまった。そんな状態でゲームをクリアさせわけにはいかんなあ」

カツン、と踵を鳴らす。

山高帽を押さえながら、燕尾服を揺らして一步近づく。

「まずは荒療治だ。我が領地——生と死の交差点へ誘おうッ！」

「なっ!?!」

刹那、吹き荒れた風が全ての窓を打ち砕き、室内に雨風が流れ込んだ。

硝子の破片は暴風に乗って渦を巻き、小部屋の壁を紙でも切るように崩していく。

足場はやがて無くなり、十六夜は虚空へ落ちていく。

全身を覆う落下の感触は、未知と呼ぶにはあまりに不気味。

重力に身を任せた落下ではなく、世界そのものが希薄になっていくイメージの中で、十六夜の耳に届いたのは――

「さあ、ここからは私主催のボーナスステージ。君が世界より授かった強大な力……このクロアールバロンに、提示してみせるがいいッ――!!!」

徐々に輪郭を形作っていく生と死の世界の中で、嬉々として叫ぶ―― “十字架の男爵” の宣言だった。

大樹の根から飛び出した日向たちが目の当たりにしたのは、半ば壊滅状態となった “一本角” と “五爪” の同士たちだった。

「これは……どういいうことだ? いくら何でも “龍角ドラコックを持つ驚獅子ライフ” 連盟の崩壊が早すぎん」

訝しげに眉をひそめて戦場を俯瞰する日向。

他の面々も予想外の事態に困惑する中、空から旋風と共にグリーが舞い降りた。

相当激しく戦っていたのか、自慢の翼は度重なる戦闘で荒れており、獅子の後ろ足には痛々しい切り傷を負っている。

耀の隣に降り立った彼は血相を変えて訴えた。

『耀……！…… ちょうどいい、今すぐ仲間を連れて逃げろッ！』

「え？」

『彼奴らの主力に化け物がいるッ！ 先日とは比べ物にならないッ！ このままでは全滅だ！ お前たちだけでも東へ逃げ、白夜叉殿に救援を……！』

刹那、琴線を弾く音が響いた。

その音色に聞き覚えのある耀はハツと顔を上げる。

（この音……濃霧の時と同じ……！）

先の戦闘を思い出すが、しかしそれを伝えるだけの余裕は与えられなかった。

琴線を弾く音は二度三度と重なり、音色の数だけ最前線の仲間たちが次々と倒れていく。

音源から離れている耀たちでさえ、気を抜けば意識が飛びそうになるほどだ。

『ヤツだ……！…… あの竖琴の音色で見張りの意識を奪われ、二度の奇襲を許してしまっ

た。今は仮面の騎士が戦線を支えているが、それもいつまで保つか……!」
グリーの悲痛な言葉を翻訳する黒ウサギ。

途端、ジャックは驚愕して声を上げた。

「仮面の騎士……!?! ま、まさかフェイス・レスが参戦しているのですか!?!」

「ま、まずいぜジャックさん! あいつにもしものことがあつたら、クイーン・ハロウィン」が黙ってねえよ! すぐに助けに行こうツ!!」

ジャックは麻布に火をつけて業火を纏い、アーシャはその上に乗って最前線を目指す。

「仮面の騎士……?」

聞き覚えのない人物に、ジンと黒ウサギが首を傾げる。

耀がグリーから更に詳しい情報を聞き出している間、飛鳥が手短かに説明する。

「前の襲撃の時に私たちを助けてくれた女性よ。地表に現れた巨人族のおよそ半数を、一瞬で始末するほどの実力者」

最後の方はまるで自分にも言い聞かせるような口調だった。

あのプライドの高い飛鳥が素直に実力を認めるほどの相手に、黒ウサギたちも相当な手練れなのだと理解する。

「一体、どのような御方なのですか?」

「……よくわからないわ。前に見た時も仮面で顔を隠していたし。日向君はどう思う？」

「うん？ そうだなあ……」

話を振られた日向は腕を組んで考える。

とはいえ、彼もあの謎の女性について知っていることはほとんど無い。

ややあつて、率直な第一印象を答えることにした。

「『白黒の騎士』——つて表現が真つ先に思い浮かんだな。あとは……たぶん美人だと
思うぞ？」

「『……………』」

なぜか黙り込む飛鳥たち。

そんな彼女たちの様子を不思議に思ったのか、日向は首を傾げた。

「あれ？ みんな急に静かになつてどうしたんだ？」

「……いえ、別に」

日向から少し離れた位置でさつと顔を寄せ合つた飛鳥たちは、彼に聞こえないよう小声でひそひそと話し合う。

（ねえ、日向君つてやつぱり年上っぽい女性が好みなのかしら？）

（可能性はありますね。今にして思えば、サラ様と最初に会つた時も見惚れていたよう

が気がするのですよ)

(あはは、それは流石に気のせい……じゃ、ないのかなあ?)

黒ウサギの言葉に苦笑するも、話していく内にだんだんと自信を無くしていくジン。

日向は頭に疑問符を浮かべるばかりである。

その間にも、耀は真面目にグリーに情報を確認していく。

「……この豎琴を弾いている巨人って、仮面の人でも勝てないの?」

『というよりも、攻めあぐねている。あの音色は近くで聞くほど効力が高い。それで昨日、サラ殿も十全に力を発揮出来なかったそうさ。となれば、神格級のギフトと見て間違いない』

「神格……それで、仮面の人と豎琴の巨人は?」

『先ほどまで共に戦っていたが、豎琴のほうは姿を消した。仮面の騎士は音色に耐えながらも戦いに臨んでいる。……それと豎琴の主は、巨人族ではない』

「え?」

『背丈はお前たちと大差ない。深めのローブを被った人間だ。巨人族が従っているところを見ると、ヤツが指揮者なのかもしれん』

唸るような鳴き声を漏らすグリー。

その間にも巨人族は続々と攻め込んできた。

遠くでは巨人族の雄叫びと幻獣たちの断末魔が重なり合って響いている。

『それに奴だけではない。空から確認した巨人族の数は五〇〇超。かつてない大軍隊だ。戦闘を請け負う“一本角”と“五爪”が壊滅状態では、もう……』

「……………」

想像以上に厳しい状況に、耀は思わず歯がみする。

先の戦闘で、巨人族の戦闘力は彼女も身に染みて痛感していた。

あまりの凄惨さに言葉を失う耀に代わって、黒ウサギが日向たちに状況を説明。

するとジンは日向に向き直り、

「日向さん、僕に考えがあります」

「ああ。あの巨人族たちが本当にケルトの末裔だと言うのなら、これ以上ないくらいの有効打になるだろう。……ジン、やれるな？」

「はい」

決意を込めた面持ちで頷く。

確認を終えたジンは前に出て、一同に作戦の内容を告げる。

「皆さん、聞いてください。先ほど“サウザンドアイズ”からギフトが届きました。僕の予測が正しければ、このギフトで敵の戦線を瞬間的に混乱させることが出来るはずで
す」

「ほ、ほんとに?」

「はい。しかしそれだけでは足りません。豎琴の術者を破らなければ、同じことを繰り返すだけです。敵の主力を逃がさないためにも……耀さん。あなたの力が必要です」
力を貸してくれますか、とジンは耀に向き直る。

彼の申し出に耀はまぶたを瞬かせて驚いたが、すぐに眉根を寄せた。

「……それって、私に見せ場を譲るってこと? 私なんかよりも日向の方が」

「それは違うぞ、耀」

彼女の言葉を否定する日向。

その顔はいつになく真剣そのものだ。

「……日向?」

「これは俺にも、飛鳥にも、黒ウサギにも出来ない——耀、お前にしか出来ないことなんだ」

そう言って日向は真っ直ぐに耀を見つめ、

「だから、お前の力を……俺たちに貸してくれないか?」

真摯に、はつきりとそう告げた。

その偽りのない眼差しに、耀が抱いていた疑念は霧散する。

彼女は力強く頷き、覚悟を決めた。

「……………わかった。作戦を教えてください」

耀は指示された通り、上空でジンの合図を待った。

その高度、およそ1000m。

巨躯の水樹よりもさらに高い。

鷹の目をもつ彼女には地上の様子がありありと分かったが、巨人族には彼女を捉えられないだろう。

（奇襲を仕掛けるにはこれ以上ない位置。これでジンの言う混乱が本当に起こるなら……………）

耀はじつと機会をうかがう。

普段なら、こんな大役は日向に任せるべきだろう。

あるいは、この場に居ない十六夜のどちらかに。

彼らなら奇襲など必要とせずに、混乱に乗じて正面から突き破るくらい平然とやってのけそうだ。

そして誰にも真似できないような劇的な勝利で朗らかに、あるいはヤハハと笑うのだ。

根本的に向いてない。

……やっぱり、朗らかに笑うくらいがちょうどいい。

耀は思考を切り替え、作戦に集中するのだった。

一方、地上にて。

日向たちはできるだけ前線に移動していた。

グリーの背中に乗って低空飛行を続けながら、巨人族の合間を縫うように進む。

「そういえば、グリーさんの騎手はどくなされたのですか？」

『先ほどの戦いで落下し、川に流された』

「そ、それは……すみません」

『何、心配するな。その程度で死ぬほど私の騎手はやわではない』

フツと嘴を上げて笑うグリー。

その彼の手綱は今、飛鳥が握っていた。

彼女の言葉は支配するだけではなく、対象の力を引き出すことも出来る。

「巧みに、速く飛べ」と飛鳥から命令されたグリーは今、巨人族の大剣や鎖をスルスルと抜けながら戦場を翔け抜けている。

普段以上に優雅な飛翔を見せる彼は、自分自身に驚いていた。

『飛鳥のギフトは凄いな……！　まるで霊格がそのものが向上しているようだ！』

「そ、そうなのですか？」

『ああ。潜在能力を引き出すというよりは、対象に己の霊格を一時的に上乘せするギフトなのかもしれん。私一人で巨人族の合間を縫って飛び進むなど、とてもではないが不可能だ』

なるほど、と黒ウサギは得心がいったように頷く。

それなら飛鳥のギフトが同格以上の相手に通用しにくい理由も説明できる。

(しかしそれが本当なら……飛鳥さんの力はギフトというより、むしろ——)

「ジン君！　この辺りでどう!？」

「え、あ、だ、大丈夫です!」

ガチガチに緊張するジンに、日向は後ろから頭に手をのせて落ち着かせる。

「大丈夫だ、きつと上手くいくさ。周りは俺と黒ウサギが守る。やつらに目にも見せてやれ」

「——！　は、はい!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ——!!!」

立ち止まったその瞬間、巨大な大剣が左右から唸りを上げて振り下ろされる。

しかし瞬時にグリーの背中から飛び降りた日向と黒ウサギが、天地を穿つ拳と蒼い稲妻でそれを打ち払う。

「出番だぞ、ジン！」

「YES！　今こそジン坊ちゃんが受け継いだギフト——ジューニャー精霊使役者”の力を使う時です！」

日向と黒ウサギの声が戦場に響く。

ジンは応えるように「グリムグリモワール・ハーメルン”の指輪をはめた右腕を掲げた。

「隷属の契りに従い、再び顕現せよ

——ブラック・パーチャイ黒死斑の御子”——ツ!!!」

刹那、漆黒の風が戦場に吹雪いた。

蠢くように生物的で、不吉を具現化させたような黒い風は瞬く間に戦場を吹き抜けていく。

召喚の際に発生した円陣には笛吹き道化の旗印が刻まれ、その中心へ黒い風が収束される。

やがて人型へと変化していく黒い風は、圧縮された全ての空気を放出して爆ぜた。

爆心地に白と黒の斑模様の光が溢れ、その中から姿を現したモノは――

「――どこに逃げたの、白夜叉あああああああッあああああああ!!!」

戦場とは無関係な駄神の名を叫び。

一撃で、一〇〇の巨人族を薙ぎ払った。

一瞬面食らった飛鳥だが、流石に何を召喚したのか気づいた。

「ちよ、ちよつと待って！ 新しいギフトってまさか、〃黒死斑の魔王〃なの!?」

「YES! ハーメルンの魔道書から切り離されているため神霊では無くなっています
が、大戦力であることは間違いありません!」

「ああ。それにこの戦場において、恐らくペストは無類の力を発揮するはずだ」

「はい! なぜなら彼女――〃黒死病の魔王〃には、黒死病を操る力があります! も
し伝承が正しければ、ケルトの末裔には抜群の効き目があるはず……!」

そう、それこそがジンの作戦の狙いだった。

――ケルト神話群に記される、巨人族の逸話。

その中の一説・ダーナ神話群と呼ばれる巨人族の闘争を記した史実には、黒死病を操
ることで他の巨人族を支配していた記述がある。

〃治療法が確立されていない病を操る〃とは、最強最悪の支配体系の一つだろう。

ましてやペストが操る黒死病には八〇〇〇万もの死霊というバックアップがある。

そこで彼女の力で伝承に則り、巨人族の混乱を煽る算段だったのだが――

「――出て来い、出て来い、出て来なさい白夜叉ツ……!! よくも元魔王の私に、あんな下劣でイヤラシイ服装の数々を……!!」

「ウオオオオオオツオオオオオ――!!!」

「五月蠅いわ、この木偶の坊ツ!!!」

一喝。

腕の一振りで放たれた衝撃波は、怨嗟の声を上げて巨人族を薙ぎ倒す。

その一間だけ黒い風の密度が下がり、ペストの姿が露わになる。

ほんの一瞬だけしか見えなかつたが、ジン、日向、飛鳥、黒ウサギの四人は同様に目を疑った。

「……メイド服でしたね」

「……メイド服だったな」

「……フリフリのメイド服だったわね」

「白夜叉様……」

ほろり、と思わず同情の涙を浮かべる黒ウサギ。

彼女が激怒して暴走している理由も、なんとなく察しがついたのだろう。

しかし一見して無差別に攻撃しているペストだが、隷属は上手くいつているらしい。

その証拠として、黒い風を受けた「龍角ドラコ・グを持つ驚獅子ライオン」の同士は無傷で戦っている。対して直撃を受けた巨人族は、全身に白黒の斑模様の斑点を浮かばせ、次々と倒れていた。

——ジンのギフト「精霊使役者」とは、霊体の種族を隷属させて使役するものである。

飛鳥の力とは違い、限定的な種族しか作用しないことに加え、隷属関係を結ばない限り発動しないギフトだが、自然霊にも僅かながら効果はある。

火霊を操って火（花）を発生させたり。

風霊を操って（そよ）風を発生させたり。

水霊を操って水（蒸気）を発生させたりするなど、多彩な一面もある。

だが一度契約を結べば、その支配力は絶大だ。

いかに強力な魔王を隷属させようとも、「ペルセウス」のルイオスのように未熟であればその力は激減する。

だが「精霊使役者」のギフトがあれば己の霊格に関わらず、相手が魔王であっても完全に支配することが出来るのだ。

怒り狂ったペストは順調に巨人族を掻き乱し、殲滅していく。

すると予定通り、琴線を弾く音が聞こえた。

前回の戦闘と同じように濃霧が一带を包み込み始め、視界の全てが奪われていく。

「な、何よこの霧は……ッ!？」

「ウオオオオオオッオオオオオ——!!!」

ペストが戸惑った一瞬の隙を突き、巨人族の一体が裂帛の咆吼と共に巨大な湾刀を振り下ろす。

しかしその刃が彼女に届く刹那、日向が横合いから盛大に巨人族を殴り飛ばした。

「よっ。久しぶりだなペスト」

彼女と背中を合わせるようにして着地した日向は、朗らかに笑って声をかける。

対称的に、ペストはぶすつとした顔をした。

「何、私を助けたつもり？ 余計なお世話ね。あの程度余裕で対処できたわ」

「いや、そんなつもりはないさ。ただ……一つだけ言わせてくれ」

「……なに？」

途端に真剣さを漂わせ始めた日向に、ペストも仕方なく耳を貸す。

振り返った日向はグツと力強く親指を立てて一言。

「そのメイド服、めちやくちや似合ってるぞ！」

「死ねッ!!!」

瞬間、漆黒の風がおどろおどろしい怨嗟の声を上げて日向に向かって吹き荒れた。

だが悲しいかな、隷属の身である彼女は主の許可無しに仲間を傷つけることはできないのだ。

「ジン！ 私にこの男を殺させなさいッ!!」

「そんな無茶な!?!」

激しい怒りと共に放たれた死の風は、まるで鬱憤を晴らすかのように巨人族たちを瞬く間に制圧していく。

日向は戦場に似つかわしくない笑い声を上げながら、しかし、心の中ではただ一つのことを思っていた。

（耀……後は任せたぞ）

濃霧が発生した直後、耀はペンダントを握りしめて眼下を注視する。

耳を澄ませ、ソナーのように超音波を発生させて音源の位置を探る。

（この濃霧と音色は、視覚も嗅覚も聴覚も惑わせる。だけど元が音波なら、この方法で位置を探知することが出来るはず）

——そう。

これが耀にしか出来ないという探索方法。

この方法なら距離感を狂わされたとしても、ぶつかり合う音の波で位置を把握するこ
とが出来る。

問題点があるとすれば、上空から離れすぎているために、多少の位置修正が必要とい
うことぐらいだろう。

(……！ 見つけた！)

感知した耀はすぐさま「ゲノム・ツリ生命の目録」の力を解放し、流星のように流れ落ちて行く。
針の穴を通すかのような正確さで竖琴の音源を指す。

フードを被った敵の手の中には、豊穣と天候の神格を持つ「黄金の竖琴」が握られて
いた。

倒すとまでは行かずとも、あの竖琴さえ奪えばこちらの勝利は確定する。

「今だ——！」

濃霧を突き破って耀が落下する。

逃亡している最中に視覚外から現れたことで虚を衝かれたのだろう。

滑り落ちるように飛翔した耀は、フードの敵の手中から「黄金の竖琴」を奪い去る。

迎撃されないうちに上空へと逃れ、自身の勝ち取った戦果を腕の中でしっかりと抱き
しめる。

そしてこの瞬間——巨人族と「アンダーウッド」の勝敗が決した。

——「アンダーウッドの地下都市」。

——新宿舎。

翌日の朝のこと。

宛がわれた新宿舎で日向たちを出迎えたのは、意外な人物だった。

返り血を落とした仮面の女性が、精錬された物腰と純白の鎧を纏って彼らを待っていたのだ。

ジャックは彼女を紹介するように、両手を広げてヤホホと笑った。

「彼女こそ、＼クイーン・ハロウィン＼の寵愛を受けた騎士、フェイス・レス顔亡き者！　どうか親し

みを込めてフェイスと呼んでやってください！」

「そっか、俺の名前は天道日向だ。よろしくな、フェイス」

朗らかに挨拶する日向に対し、小さく頷くフェイス・レス。

対照的に後ろで控えている飛鳥は、複雑そうな面持ちで彼女を見つめる。

圧倒的な彼我の実力差を知る飛鳥としては、不用意に親しくすることが躊躇われたのだろう。

初めて対面する黒ウサギも彼女を一目見るや否や、別格の空気を肌で感じていた。

「なるほど……『グイーン・ハロウイン』の寵愛者。世界の境界を預かる星霊の力を借り、ヘッドホンを召喚するということですね？」

「ヤホホ！ お察しの通りですよ！ 彼女は現在我々『ウィル・オ・ウイスプ』に客分として招いているニューフェイスでしてね！ 彼女なら、代わりの品を召喚できるはずですよ！」

「……顔が亡いのにはニューフェイスなのか？」

「ヤホッ!？」

「お、おいコラ日向！ そこにツツコむんじゃねーよ!!」

狼狽えるジャックに慌ててフォローを入れるアーシヤ。

心なしフェイスも「え？ そこにツツコむの？」といたげな眼差しを向けている。

そんなやり取りの傍らで、耀の表現が目に見えるほど明るくなっていく。

が、少し不安そうに眉根を寄せた。

「だけど……異世界からの召喚って、凄く高額なんじゃ……う？」

「ヤ、ヤホホ！ 高額どころか本来なら、断固として拒否しますよ。しかし『ノーネーム』とは長くお付き合いさせてもらおう予定なので……まあ、お友達料金ということで手を打たせてもらいました」

「はい。今後も日用品の類は『ウィル・オ・ウイスプ』製の物を使うということで契約し

ました」

「そ、そつか……ありがとう、ジン」

安堵したように笑顔を向ける耀。

ジンは慌てて首と両手を横に振った。

「と、とんでもありません。皆さんには数えきれないくらいの恩があります。これぐらいはどうということもありません。それに、まだ問題点が残っています」

「……問題？」

「はい。厳密には『クイーン・ハロウィン』の力で召喚するわけではなく、星の廻りを操って因果を変える——要するに、『耀さんは初めからヘッドホンを持ち込んでいた』という形での再召喚です。なので耀さんの家にヘッドホンがないと成立しないのです
が……」

心配そうに告げるジン。

しかしそんな彼の懸念をよそに、耀の瞳はどんどん嬉色に染まっていった。

「……大丈夫。十六夜が持つてるヘッドホンと、同じメーカーのヘッドホンがある」

「ほ、本当ですか!？」

「うん。それに父さんはビンテージ物だって言ってた。あれならきつと、十六夜も満足してくれると思う」

「あら、けれどそのヘッドホンはお父様のものなのでしょう？ 勝手に持ち出しているの？」

「それは大丈夫。父さんも母さんも、行方不明のままだから」

さつくりと己の身の上を話す耀。

自身も両親を亡くしている飛鳥は、なんとも言えない表情で俯いてしまう。

「ご、ごめんなさい。そうとは知らず……」

「ううん、気にしなくていいよ」

耀は父から送られたペンダントを取り出し、ギュツと握りしめた。

日向も思わず苦笑を浮かべる。

「まあ、仕方ないさ。俺たちの中の誰一人、自分の身の上を詳しく語ったやつはいないしな」

「……ええ。その通りね」

飛鳥も困ったような笑みで同意する。

日向の言う通り、自分たちはまだお互いのことを何も知らないに等しいのだ。

耀も頷き、真剣な眼差しを見せる。

「うん。だからヘッドホンを渡すのを機会に、十六夜や皆ともつと話そうと思う。やつと出来た友達だもの。関係を維持する努力を、自分からしていかないと」

気持ち新たに、前を向く。

“家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い”

そんな無責任で、横暴で、何よりも素敵な招待状に、自分は応えたのだ。だから、少しずつ周囲に目を向けて行こう。

捨ててきた分だけ身軽になった心で、今度は自分から歩み寄って行こう。

自分を仲間だと、友達だと言ってくれた彼らのために。

彼らと共に、この素晴らしい世界で生きていくために――

一行は“アンダーウッド”の螺旋階段を登り、網目模様の根を登って川沿いの地表に出る。

そこにはフェイス・レスが用意した“黄道の十二宮”を描いた陣があった。

「こゝ、黄道の門を使うとは……ずいぶんと本格的ですね。しかし扱えるのですか？」

「……」

フツと口元だけで笑うフェイス・レス。

口数の極端に少ない彼女だが、自信家ではあるようだ。彼女は十二宮の陣の中心に耀を座らせ、“クイーン・ハロウィン”の旗印が刻まれた

剣を取り出す。

すると太陽の光が地に描かれている十二宮の紋章を輝かせ始めた。

儀式を見守る飛鳥は、緊張をほぐすように黒ウサギへ尋ねる。

「えーと、ねえ黒ウサギ。どうしてハロウィンと太陽と『黄道の十二宮』が関係あるの？」

「ええとですね。ハロウィンは元々、一年間の太陽の周期を二分化して行なわれる祭りのことを指します。そして周期が変わるその時に、異世界の境界が崩れ去るのです」

そこへジンが補足する。

「ケルト民族は独自の太陽暦を持つほど高度な天文学を修めていたそうです。ただ彼らがどのような宇宙観コスモロジーを持っていたのかは定かでなく……ハロウィンはその数少ない文化の名残を残す祭事なのです」

「な、なるほど。それで『黄道の十二宮は』？」

飛鳥がおおずと問いかける。

今度は彼女の隣にいる日向が答えた。

「簡単に説明すれば、黄道とはすなわち『太陽が通過する軌跡』のことだな。十二宮とは別名『十二星座』で、文字通り太陽の軌道線上に存在する星座を指す。発祥としては確か……メソポタミアが起源だったか？」

「そうですね。箱庭内では十二宮の星座をいくつ支配しているかで、太陽の主権を決めるほど重要な要素になっています」

「YES！ 今行なわれている儀式は、＼グリーン・ハロウィン＼の力で世界の境界を崩し、＼黄道の十二宮＼の力でそれを安定させる複合術式なのです。……しかし＼グリーン・ハロウィン＼の力を借りているとはいえ、人間が召喚を可能にするとは……」

感心する黒ウサギの言葉に、飛鳥は一層息を呑む。

「あの人……人間なの？」

「YES。様々な武器で身を固めておりますが、人間で間違いありません。それも皆さんに匹敵する程、強大な才能の持ち主でしょう。＼ウィル・オ・ウイスプ＼が北側の下層で最強のコミユニティというのは、あながち間違いではないかもしれません」

そう、と相槌を打つ飛鳥。

一方の耀は、陣の中心で座ったまま必死にヘッドホンへの想いを高めていた。

（父さんのヘッドホン………父さんのヘッドホン………ごはんいや父さんのヘッドホン）

因果を変えろと言えば大仰だが、要するに召喚前の耀の行動を、少しだけ事実から変えるだけである。

このまま半日間、耀がヘッドホンの事を考え続ければ、後はフェイス・レスがどうに

かしてくれるらしい。

(巨人族のこともあつて、今日の夜には十六夜も収穫祭に来る。絶対に成功させないと……！)

ただひたすらに、成功を願いながら。

耀は強い思いを胸に、儀式へと臨むのだった。

——ビルの側面を足場に、両者は飛び退いた。

刹那、足場にしたビルが衝撃で吹き飛んだ。

地雷のような踏み込みで爆破され、瓦礫と共に粉塵を巻き上げて倒壊していく最後のビルディング。

十六夜と「十字架の男爵」は共に肩で息をしているが、互いに外傷は無い。

どんな一撃も効かない十六夜と、いかなる傷負も瞬時に癒える神霊。

「十字架の男爵」は山高帽を傾け、困りきったように周囲の廃墟を見回す。

「やれやれ。境界の一部を切り出して作った舞台だったのだが、あつという間にポロポロになってしまったなあ」

そう言つて「十字架の男爵」は己が作り出した舞台を見渡す。

——ボールの内側に作られた世界、と例えれば分かりやすいだろう。

球体の世界に並列して建築されたビル群と、上下左右に登り坂が続いている車道。

最初こそ整然とした街並みが広がっていたその世界は、今は見るも無惨に荒廃している。

「まったく。そもそも君のその体は何だ？ 即死の呪いを与えてなぜ生きている？」

「さあな。俺が聞きたいぐらいだ」

投げやりに返す十六夜。

その声音には戦いを始めた当初の興奮は無い。

いぶかしげに思った「十字架の男爵」だが、ゲームを盛り上げるために一つ提案する。

「どうする？ こんな瓦礫の山ではテンションも上がらないだろう？ 君が望むなら舞

台を作り直すか？ 今度は山あり谷あり森あり奈落ありの、スペクタクルな舞台を」

「いや、もういい」

はっ？ と言葉を切る「十字架の男爵」。

十六夜は腕時計を確認し、まぶたを閉じたまま天を仰いだ。

「17:58……時間切れだ、クロアールバロン。倒しきれないのは悔しいが、ボーナスステージはこれ以上いらない」

「……ほう？ 満足したのかい？」

「だから悔しいと前置きしただろうが。人の話はちゃんと聞けよ」

チツ、と舌打ちをする。

しかし心底悔しいというわけではない。

十六夜は両手を広げ、今日の出来事を強く噛み締めた。

「生と死の神霊。その神力は死を招くことと、死者の蘇生。世間一般に広がっているゾ
ンビの原点はアンタにある。そうだろう？」

「これはこれは……本当に博識だな君は。その通りだよ」

「つまりアンタは、俺がゲームオーバーになってチビたちが死んだとしても、蘇らせばいい
と思っている。そうだろう？」

「……まあ、否定はしない」

「けど俺はそれが気に食わない。……人間は斬って叩いて打てば死ぬ。そんな事実があつたから、今日まで自制心を保てたんだ。なのに、斬って叩いて打って死んでも甦る？ ハッ、そんな糞みたいいなもんを目の当たりにしたら、明日からの自制が辛くなるだけだ」

だから、もういい。

十六夜の勝ち逃げ宣言に、
“十字架の男爵”は落胆を隠そうともせず
に嘲笑った。

「いやはや……自制とはまた、君らしからぬ物言いだ。己が愉悅こそ君が生きていくために必要な動力源。我々快樂主義者にとって、失つてはならない活性剤のはずではなかったのかね？」
「感動に素直になれ」とは金糸雀カナリヤが最初に教えてくれた言葉のはずだが？」

十六夜は言い返さずにまぶたを閉じた。

そのまま閉ざされた空を仰ぎ、両手を広げる。

「ハッ。アンタ、伝承ほど全知じゃないんだな」

「うん？ まあ、そうだね。私は精霊から成り上がりの神霊だ。全知の領域にはまだまだ達していない」

「だろ？ だからアンタは、金糸雀の言葉の真意も分かっていない」

何？ と声を上げる。〃十字架の男爵〃。

十六夜は顔を正面に戻し、両手を広げたまま周囲の倒壊したビル群を指す。

「見ろよ、この砕け散ったビルディングを。俺がその気になって暴れたら、人間社会なんてほんの数分でボロボロだ。これじゃあ癩癩の一つも起こせやしねえ」

「……………」

「『感動に素直になれ』——ああ、そうさ。アイツはどに足を運ぶにしても同じことを俺に言った。大陸を巡り、七海を渡り、世界の遺産を見て回って、俺に山ほど感動を分

け与えて——世界を壊さないよう、俺に感動のろいを植え付けたのさ」

十六夜の力が、世界を壊してしまわいように。

ありつただけの素晴らしいものを見せることで、金糸雀は十六夜の力を封印したのだ。

「……ま、そういうことだ。たとえどんなに面白くても、俺の枷が壊れるようなものはいらない。俺の日々は明日も明後日も、この世界で続いていくんだからな」

ホント惚れたら負けつてやつだよなー、と十六夜は苦笑いを浮かべて再び空を見上げる。

そこで初めて、〃十字架の男爵〃は逆廻十六夜という人間性を理解する。

——彼は、この世界が好きなのだ。

「……そうか。金糸雀は本当に、君という最大級の異端をこの世界に適合させたのだね」
「そうさ。トラブルメーカーであった逆廻十六夜は今や、賢明さに定評のある神霊・クロアⅡバロンに太鼓判をもらえるほどの社会適合者。記念に認定書の一つも欲しいところだね」

ヤハハ！ と笑う十六夜。

屈託のない笑い声なのに、今は酷く乾いて聞こえた。

そんな彼の冷めた心を見抜き、山高帽で顔を隠すように傾けていた〃十字架の男爵〃

は——強い決意を胸に、顔を上げた。

「——しかしそれでは駄目なのだ、十六夜君」

「何っ?」

「金糸雀がラストゲームにかけた真意。今こそ理解した。そしていかにゲームの幕を引くべきなのかもッ! 金糸雀が残したその封印……無理やりにも解かねばならんだ——!」

山高帽を脱ぎ捨て、球体の中心を指す。

途端、球体の世界は地響きを上げて急激に収縮し始めた。

閉ざされた世界に逃げ道は無い。

十六夜は驚愕の声を上げた。

「な、何をするつもりだお前……!?!」

「この疑似境界を収縮させて無に還す。そうなれば主催者も参加者も関係ないッ!! 助かりたくば、私か世界そのものを破壊するかのどちらかしかないッ!!!」

強固な決意を浮かべる。十字架の男爵。

彼は両手を大きく広げ、十六夜に訴える。

「さあ、どうする逆廻十六夜ッ!! 君は金糸雀と共に死の国へ向かうのか!? それは君の望むところではないはずだッ!! 死にたくないのなら未知の領域を見せてみる!!!」

「っ……………」

収縮せよ、

収縮せよ、

収縮せよと急かすように大地は軋みを上げ、やがて山のように詰みあがった空の瓦礫と、地上にある瓦礫の山がぶつかり合うほどの高さにまで収縮され、せめぎ合う。

十六夜は何度も拳を振り下ろすが、閉ざされた世界を裂くには破壊力がまるで足りない。

「解つてるのか!? このまま敗北すれば無論、子供たちも死ぬ!! それでもいいのか!?」

「——っ……この糞メガネ……!」

十六夜は奥歯を砕きそうなほど噛み締める。

両腕の回転率を上げて乱打するが、それでも活路はまるで見えない。

幾度も幾度も叩き付けるうちに、とうとう拳が砕けて血が滲む。

「この戯け!! 星も砕けぬ一撃で、〃神々の世界〃が裂けるわけなからうツ!!」

「だったらどうしろってんだよ糞メガネツ!!」

「言葉どおりだツ!! 星を打ち砕く一撃を振り下ろせツ!! 君がギフトを使えば、脱出することぐらい訳もない!!」

想像以上の要求と未知の言葉に、十六夜は面食らって驚いた。

「……ギフト……!?」

「そうだッ!! 君が今使っている力は、その上澄みの部分に過ぎないッ!」

“十字架の男爵”の助言を受け、両腕を見つめる十六夜。

「俺の力が……ただの表層部分だと……?」

「そうだ……! 君の裡うちに眠る力があれば、確実に“神々の世界”を切り裂ける……!」

十六夜は冷や汗を掻きながらも、気持ちは再び昂揚し始めていた。

——全力を出すなど、産声を上げたときにしか機会が無かった。

それが今、余すこと無く力を振るって良いのだと言われたのだ。

(……裡の、力……!)

昂揚感を胸に、無意識に右手を掲げた。

そしえ無意識ゆえに気づく。

この構えが、逆廻十六夜の力を引き出すのに適しているのだと。

「そうだ……それでいい。君はまだ自分のギフトを使いこなせないだろう。今はただ、

闇雲に降り下ろすだけでいい」

“十字架の男爵”は両手を広げ、燕尾服をなびかせながら見つめる。

「覚悟しろ……クロア＝バロン——!!!」

刹那、一条の光が十六夜の手中から現れ天地を引き裂いた。

収縮していく世界の外殻をいとも容易く貫く光は、終わる世界を支える一本の柱にも

見えた。

その力に、“十字架の男爵”は確信する。

(そうだ……逆廻十六夜。君こそが人間として、神々の世界を打ち砕く存在。そして—

—シノビネ忍音が語っていた、人でも神でも無い、もう一つの原典の可能性を打ち砕く存在

だ——!!!)

——その瞬間。

十六夜はついに自滅の道を辿っていた世界を己の手でこじ開け、境界を飛び出したのだった。

第34話 SUN SYNCHRONOUS ORBI

T i n V A M P I R E K I N G

机に突っ伏した状態で、十六夜は目を覚ました。

窓の外を見ればいつの間にか雨は上がっており、今は美しい茜色の空が広がっている。

ふと、そこで十六夜は手元の腕時計を確認する。

パネルには18:15と表示されていた。

「……あー、クソ。なんか、すげえ腹減ったな」

「お！ なら夕食は食べていくかいイザ兄！」

ガバツと背後から抱きつく鈴華。

気配がまつたく無かったことに内心驚く十六夜だが、もちろんそんな素振りも微塵も見せない。

「降りろ鈴華。抱きつくなら最低Dカップ以上になってからにしろと何度言えば分かる」

「な、なんだとう!? 鈴華さんは将来いつばい出ていつばい引つ込んでいつばい出て女の子になる予定なんだぞ! 青田買いしとくとお得なんだぞ!」

「はいはい、予定は未定な。いいからどけ」

むんずつ、と首根っこを掴んで引つpegす。

むすーつと頬を膨らませた鈴華は、スタタタタ! とドアまで駆けて行く。

「ふうんだ! イザ兄のことなんてもうしんないもんね! そこで餓死してるバカヤロー!」

「いや、それは困るな。夕食は食べるから用意しといてくれ」

コキコキと擬りを解しつつ、ふあ、と大きな欠伸をひとつ。

鈴華は不機嫌そうな顔つきから一転、神妙な面持ちで十六夜を見つめると、

「……………ん、分かった。待ってるからねイザ兄」

一瞬、不自然な間を置いて去って行く。

入れ替わるように、今度は焰が入ってきた。

「お目覚めかイザ兄」

「ああ……………つて、またそのヘッドホンか」

「おう。ネコ耳部分を調整改良してみた。これできつくなり過ぎないはず」

「ふうん? まあ、それも後で受け取りに行く。今は遺書の続きを読むから、鈴華と一緒に

に夕食の準備でもしといてくれ」

「……………分かった。絶対に取りに来いよ、イザ兄」

やはり不自然な間を置いて、焰も去っていく。

その背を見送った後、十六夜は再び机の上にある遺書のページを捲った。

『よだれ垂らして寝るなんて、汚いわよ十六夜君』

「うるせえクソババア」

『ふてくされないでよ。これでも安心してらんだからね？ 君がゲームクリアできない可能性も、0ではなかったのよ。だからこうして遺書が届いている現状は、とても嬉しく思ってる。…………おめでとう、十六夜君。ここまで到達して、君はようやく権利を手に入れた』

「……………」

『ふふ。何を言ってるのか分からないって顔してるわね。うん、今は分からなくていい。ここまではある種の予定調和だから。でも人の手で扉を開くにはいくつか可能性の収束と分裂が必要なの。その収束点は本来、極僅かな範囲で偶発的に起こるものなんだけど…………ああ、いいや。理論の説明はクロアにでも任せよう。ここで問題なのは、君に渡す招待状のことよ』

「招待状？」

十六夜が首を傾げた直後。

ヒラリと、遺書の下から封書が舞った。

『それが招待状。君の運命を変える手紙。君が今日体験したことが、君の日常になる手紙。……だけど君はこの手紙を開けずとも、この世界で幸せになれる可能性がある。その手紙のことを忘れて生きていく権利が、君にはある。焔や鈴華と共に生きる優しい未来が、この世界にはある。私は君にそれを再確認して欲しくて、このゲームを持ちかけたんだ』

「……大物をぶつけ過ぎだ。おかげで少しばかり冷や汗かいたぞ」

『何を情けない。十歳の頃の君なら喜び勇んでぶっ殺していたでしょうに。……まあ、私がそうしないように育てただけどき。君は傲慢な物言いとは裏腹に、常識へ傾き過ぎた。それだけの超常を有しながら、世界と折り合いをつけられるぐらいに。……だから、君に選択肢を与えるべきだと思ったの。きつとどちらを選んでも名残惜しい思いは残るだろうから。最後の選択は、君の手で行うべきなんだ』

「……………」

ペラリと、無言で次のページを捲る。

『前述した通り、君にはこの世界で幸せになれる可能性がある。私が保証しましょう。しかし手紙を開ければ、その保証はすべて霧消してしまいます。』

多くの困難があなたを待ち受けるでしょう。

屈辱的な目にも遭うでしょう。

大切な友人と喧嘩してしまうこともあるでしょう。

しかし、その両手に溢れるほどの人たちを救うかもしれない。

……だから、よく考えて欲しい。

家族を、友人を、未来を、世界の全てを捨てる覚悟があるのなら——手紙を開けなさい』

遺書はそこで終わっていた。

金糸雀にとつての別れは、死別した時に交わしたつもりでいるのだろう。

十六夜は招待状を手に取り、再度遺書を読み返す。

「……手紙を開ければ帰ってこれない。そういうことでもいいんだな？」

当然返事は無い。

しかし十六夜は確信していた。

——遠い日の戦場見学で彼女は、戦場へ行くなら自分の意志で行けと言った。

あれはこの時のために告げられた言葉であつたに違いない。

この600ページにもなる膨大な遺書に書かれることの無かつた、金糸雀の万感の思いを、十六夜は感じ取っていた。

「……ハッ。あれこれと考えるほどのもんじゃないか」

スツと椅子から立ち上がり、招待状の開け口に手をかける。

一度だけ視線を扉の方へと向けた十六夜は、

「じゃあな、鈴華。焰」

ただ、それだけを告げて。

手紙の封を開けたのだった。

—— “アンダーウッド” の地下都市。

—— “ノーネーム” 新宿舎。

耀は落ち込んでいた。

それはもう、かつてないほど落ち込んでいた。

現在、部屋の隅で膝を抱えて丸まっている彼女は、死んだ魚の方がまだ活き活きとしているのではないか？ と思えるほどの虚ろな瞳で虚空の一点を見つめ続けている。

そのあまりの負のオーラに侵食されてか、清涼な室内の空気も心なし彼女の周りだけどんよりと淀んでいるかのようだ。

その様子を少し離れた位置から見守っている日向たちも、何とも言えない憐憫の眼差しを浮かべていた。

「……」

チラリと、飛鳥が黒ウサギに目配せする。

その目には『何とかしなさい』という無言の圧力がこもっていた。

「……！」

ブンブンと首を横に振る黒ウサギ。

全力の拒否だった。

チラリと、彼女は目配せをジンにパス。

「……」

ここでジンがまさかのスルー。

流れるようなパスワードでそのまま日向に目配せを通す。

「……」

日向も同様に、他の誰かにパスを送ろうとするのだが――

「「……」」

じーっと、三人が無言で日向を見ていた。

満場一致だった。

とても断れない雰囲気だった。

日向は困った顔をするが、やがて小さくため息を吐くと、覚悟を決めた顔で強く一歩を踏み出した。

その勇姿を、飛鳥たちもごくりと固唾を呑んで見つめる。

やがてそつと耀の隣に腰を下ろした日向は、努めて明るく話しかけた。

「ま、まあほら、元氣出せつて耀。案外、十六夜も氣に入るかもしれないぞ? ソレ」

「……………本当にそう思う?」

「ああ、もちろ——ごめん、やっぱごめん」

肯定しかけた言葉を、日向は咄嗟に引つ込めた。

彼女の手元にある「ソレ」を目にした瞬間、自信は一瞬で砕け散った。

耀が手にしていたのは、確かにヘッドホンだった。

先刻、フェイス・レスによって召喚された「ソレ」は、間違いなくヘッドホンではあった。

ただしその形状は、日向たちが見慣れていたものとは、ちよつぴり何かが違っていて。

「……………」

耀は自分の手の中にある「ソレ」を、感情の抜けきつた瞳で見つめながら思う。

——「どうして、こんなことになってしまったんだろう？」
そんな彼女の思考は、自然と「ソレ」を召喚した場面に戻るものであった。

ほんの数十分ほど前のこと。

フェイス・レスによる召喚の儀式の最中、不意に耀の体から眩い光が溢れ出した。目を開けていられないほどの強烈な光に全員が視界を塞ぐ中、やがて輝きが収束する。

しばらくして完全に光が消えた後、再び彼らが目を開くと、耀の頭上にはヘッドホンが出現していた。

途端、飛鳥は瞳を輝かせて耀に抱きつく。

「可愛い！ そのヘッドホン、とつても可愛いわ春日部さん！」

「え？ か、可愛い？」

「どういふことだろう？」 と小首を傾げた耀は、頭のヘッドホンを外して確認。

瞬間、さつと青ざめた。

前に元の世界で見た時には、確かに普通のヘッドホンだったはずなのに。

彼女が装着していたヘッドホンは、誰がどう見ても、どこからどう見ても、どうしよ

うもなく紛れもなく、完全無欠にパーフェクトに——ネコ耳のヘッドホンだったのだ。

「な、なんで!? ちゃんと炎のトレードマークも付いてるのに、形が変わってる……!?」

飛鳥に揉みくちやにされながら困惑する耀。

日向たちも、なんとも微妙な面持ちでネコ耳のヘッドホンを見つめていた。

「あ、あのネコ耳のヘッドホンを、十六夜さんに贈るのですか?」

「さ、さあ? 耀さん次第じゃないかなあ」

「アレを十六夜が付けるのか……シニールだな」

「ヤホホ……でも、意外と喜ぶのではないでしょうかねえ?」

「可愛い……」

若干羨ましそうなアーシヤを除き、そんな無責任な笑い声を上げる一同。

儀式を終えたフェイス・レスは疲労の色も見せず肅々と剣を鞘に収め、耀の元まで歩

み寄ると、無言で彼女を見つめ続けた。

「……………」

「……………」

なんだろう? と再び小首を傾げる耀。

仮面のせいで感情も読み取れず、ただ見つめ返すしかない。

互いに口数が少ない者同士、一向に進まないを会話を見て、日向はやむなく割って

入った。

「えーと、どうしたんだフェイス？」

「……彼女のギフトを、見せて欲しい」

「え？」

「召喚の際、想定していた星の軌道が大幅に歪みました。……こんなことは初めてです。もし失敗だとしたら、原因は彼女が所持するギフトしか考えられません」

だから確認させて欲しい、とフェイス・レスは言った。

彼女の言葉に困惑しながらも、耀はペンダント——ゲノム・ツリー“生命の目録”を外して渡す。

受け取ったフェイス・レスは、手の平に乗せて確かめる。

「……？ これは？」

「私のギフト。父さんが作ってくれたもの」

「YES！ 耀さんのギフトは“生命の目録”といって、仲良くなった異種族の力をギフトとして発現できるとしても貴重な代物なのですよ！」

シャキン！ とウサ耳を伸ばして同士を誇る黒ウサギ。

フェイス・レスは顎に手を当てて考える素振りを見せたあと、ふつと耀に問いかけた。

「異種族のギフトを手に入れる……と言いましたね。ではこの内外を突き進む螺旋図は、系統樹を司っていると解釈してもよろしいでしょうか？」

「……？ うん、たぶん」

「……なるほど」

耀が首肯すると、フェイス・レスは得心がいったように頷いてペンダントを返す。

すると踵を返し、凜とした背中を向けて去っていくが、去り際に思い出したかのように告げた。

「……召喚に失敗した代わりと言ってはなんですが、一つ、ご忠告を。そのペンダントに宿る力は、*“他種族のギフトを戴く”* というものだけではありません」

「え？」

「そのペンダントは既存の系統樹をなぞるのが役割ではないということです。収集した生命の欠片から独自の形で成長する系統樹を創り造し、次のプロセス——*“目録”* からのサンプリング、*“進化”* と *“合成”* をするのが本来の役割のはず」

「えーと……うん？ あなた、意外に喋る人？」

「耀。話が理解できないのは分かるが、それだと嫌みにしか聞こえないぞ？」

思わず苦笑する日向。

口べたな彼女なりの精いっぱいのコミュニケーションをどう捉えたかは分からないが、フェイス・レスはしばし沈黙した後、聞き取れないほどの小さな声で——

「——気を付けて。本来ならそのギフトは、人間の領域を大きく逸脱した代物ですから」

それだけを告げて、彼女は「アンダーウッドの地下都市」の崖を飛び降りて姿を消した。

残された日向たちはしばし無言で立ち尽くしていたが、ハツと黒ウサギが我に返り、「……えーと。結局、ヘッドホンの問題は未解決ですか？」

あつ、と声を上げる耀。

その手には炎のエンブレムが貼られたネコ耳ヘッドホン——「Crescent moon No. 16」だけが残っていた。

——箱庭七七五九一七五外門区画。

——「アンダーウッドの大瀑布」。

——フィル・ボルグの丘陵。

陽が沈み、星の煌めきが夜空を飾り始めた頃。

「アンダーウッド」に到着した十六夜は、まるでショーウィンドウに並ぶおもちゃを眺める子供のように、爛々と瞳を輝かせて言った。

「——緑と清流と青空の舞台。ハハツ、北側の石と炎の真逆じゃねえか！ ちよつと出来過ぎじゃねえ？ いや、俺は歓迎だが？ むしろ抱き締めたいぐらい大歓迎だが？」

ちよつくら抱き締めに行つていいか、レティシア？」

「構わんよ。黒ウサギたちには私とユエから伝えておこう」

「気をつけて行つて来てくださいいね！」

レティシアは苦笑しながら了承し、ユエは笑顔で送り出す。

十六夜は辛抱たまらんと言わんばかりに走り出すと、*“アンダーウッド”*の大樹を目がけて跳躍した。

巨大な幹をピョンピョンと軽快に跳び登つていく。

そうしてあつさりと*“アンダーウッド”*の頂上に辿りついた十六夜は、寝転がるための水樹の葉と枝を押さえて確認。

多分に水分を含んだ葉は不思議な弾力で手の平を押し返してきた。

「よしよし、いいぞ。シチュエーションとしては最高だ。これで着の一つでもあれば良かったんだが……ま、今日は星空だけでいいか」

どつと勢いよく葉つばのベッドを弾ませて寝ころぶ。

「*“アンダーウッドの大瀑布”*の力強い水音を堪能しながら、箱庭の星空を眺めた。
「……星の位置は箱庭も変わらねえんだな」

デネブ、アルタイル、ベガ——夏の大三角を指先でなぞる。

(鈴華や焰はどうしてるかな……ま、あの二人ならふてぶてしく元気にやつてるか)

らしくない郷愁を、軽く首を振って払う。

その時、ふと背後に誰かの気配を感じた。

「よう、一人で星空の観賞か？」

「まあな。なかなか洒落た趣味だろ？」

ヤハハと寝転がりながら笑う十六夜。

日向はそんな彼の隣に腰を下ろす。

「黒ウサギが探してたぞ。主催者^{ホスト}への挨拶を済ませろつてさ」

「へいへい。ちゃんと後で行きますよつと。……それより、よく俺の居場所が分かったな？」

「まあ、お前のことだからな。どうせ最初はこの景色を楽しもうとして、一番見晴らしが良さそうなところに向かうだろうと思っただ」

「ハッ、違いねえ」

短く笑う十六夜。

ふと、日向は思い出したように話を切り出した。

「そういえば、お前のヘッドホンのことなんだけだな」

「ああ、あれか。春日部の三毛猫が自白でも開始したか？」

ニヤリ、と十六夜は不敵な笑みを浮かべる。

日向は思わず苦笑した。

「なんだ、気づいてたのか」

「まあな。つーかこんなあからさまな証拠を残されたんじや、探偵を気取る気にもなれねえよ」

十六夜はポケットから猫の毛が入った小瓶を取り出すと、目の前にかざした。

「最初は春日部がやらせたのかとも勘ぐったが、そんな素振りは見せなかつた。それに春日部ならもつと上手くやるだろう。となれば、あの三毛猫が単独でやったと考えるのが妥当だ」

「なるほどな。まあ、そもそも耀はそんなことをするようなやつじゃないしな……怒ってるか？」

「別に？ レティシアにも言ったが、どうせ素人が作った代物だ。一銭の価値も無い。焰のご要望通り、広告塔として付けてやっていただけだ」

「へえ、ずいぶん律儀じゃないか」

「俺の義理堅さに感服したか？」

「ああ。脱帽しすぎて言葉も出ない」

クツ、と互いに喉を鳴らして笑い合う。

十六夜はスツと上体を起こして日向に尋ねた。

「そんなことより、手紙に書いてあった『グイーン・ハロウィン』の寵愛者つてのがよっぽど気になるね。強いのか？」

「強いな」

日向は即答する。

あの日向が素直に実力を認めるほどの相手に、十六夜は好奇心を膨らませる。

「……そんなに強いのか？」

「ああ、強い。正直言って、俺も勝てるかどうか分からない」

——『ま、当然負けるつもりは無いけどな』。

そう言って日向は星空を見上げる。

十六夜も満足したように星空を見上げた。

「そうか。ならその一点だけは、巨人族の連中に感謝しないとな。おかげで収穫祭にいられる時間が延びた」

「本格的に祭りを楽しめるのは、まだまだ先になりそうだけだな。どうせ是が非でもフェイスに相手してもらおうとか考えてるんだろ？」

「ま、それも確かに面白そうだけだな。けど今回の収穫祭は、それ以上に楽しみなことがあるんだよ」

「楽しみなこと？」

「ああ」

日向は首を傾げて問い返す。

十六夜は不意に日向を見ると好戦的な笑みを浮かべ、

「——ようやく、お前と戦り合える機会が出来たんだからな」

心底喜色の籠もった声で、そう告げた。

日向は驚いたように目を丸くするが——やがて、同じく好戦的に笑う。

「なるほどな。確かに参加するギフトゲームによつては、お互いに競い合う展開もありえるか」

「ああ。第一目標はあくまで農園に必要な苗や牧畜だが、ゲームの延長上で戦り合うなら黒ウサギのやつも文句はねえだろ」

二人は視線を交わし合い、ニヤリと口元を吊り上げる。

「負けないぜ?」

「ハッ、そりゃこつちの台詞だ。精々俺を楽しませろ」

静かだか重い戦意を漲らせる日向と、絶好の獲物を前にした肉食獣のように獐猛な戦意を滾らせる十六夜。

彼らはしばし睨み合い——ふっと、戦意を霧散させた。

「ま、ともかくにも、まずは巨人族をどうにかしないと。お前と戦り合うにしてもそ

れからだ」

「ヤハハ！ おうよ！ 首どころか全身くまなく洗って待つてやがれ！」

「言つとけこの快樂主義者」

日向と十六夜がそんな会話を交わしていると、不意に近くの葉っぱがガサゴソと揺れた。

「あーっ！ やつと見つけましたよ十六夜さん！ 早く『主催者』に挨拶を……つて、

あれれ？ 日向さんもご一緒ですか？」

「ああ。ついさつき合流してな」

「ちようど二人で敵情視察をしてたところだ」

咄嗟に誤魔化す日向と十六夜。

黒ウサギは不思議そうにウサ耳を傾げる。

「敵情つて……巨人族ですか？」

「いいや。この『アンダーウッドの大瀑布』のことさ」

——へ？ と十六夜の言葉に瞳を瞬かせる黒ウサギ。

日向は立ち上がると、眼下に広がる『アンダーウッド』の景観を見渡して言った。

「実は前から十六夜と話し合つてな。南側の下層で、屈指の景観を持つ水舞台。『

世界の果て』の迫力とスケールには劣るものの、美しく整えられた土地は見事の一言に

尽きる。そこでなんだが……なあ、黒ウサギ。俺たちも、こんな舞台を作りたいと思わないか？」

ニヤリ、と不敵に笑って黒ウサギを見つめる。

虚を衝かれて固まる黒ウサギだったが、すぐすまその真意を理解して問い返した。

「つまり敵情視察とは……」レギオンマスター「地域支配者」として、レギオンマスター「アンダーウッド」を超える水舞台を整えるということですか？」

十六夜も立ち上がり、大きく両手を広げて首肯する。

「そうだ。それはなにも二一〇五三八〇外門に限ったものじゃない。更に領地を増やせば、出来ることだって多くなる。ギフトだって集まりやすくなる。……今はまだ農園や水源施設を整える程度だが、聞けばこの「アンダーウッド」は十年で復興を遂げたそうじゃねえか。だからまずは十年、この「アンダーウッド」を目標にするってのが俺と日向の合意だ。この水舞台の景観は、目標として相応しいからな」

ヤハハ！ と高らかに哄笑を上げる十六夜。

日向は静かに夜空を見上げ、黒ウサギに語る。

「……星空に旗を飾り、地上で最も華やかなコミュニティ。これならきつと、多くの人々の耳に届くはずだ。それこそ、行方不明の同士たちにも」

「——っ！」

思いも寄らぬ真意に息を呑み、ギョツと胸の前で両手を握り締める黒ウサギ。

十六夜は素知らぬ振りをしたまま、巨人族が進行してきた方角を見据える。

「だが、なによりもまずは巨人族だ。魔王の残党だかなんだか知らねえが、やることなすこと無粋にもほどがある。〴〵龍角ドラコグを持つ鷲獅子ライフ〴〵の就任を待つまでもない。前夜祭の内に俺から乗り込んで決着を付けてやる。色々と面白そうな奴もいるみたいだし、本祭は是が非でも楽しまねえといけなからな」

「感動を求めて、か？」

「そうさ。人間が生きて行くには感動がないと腐っちまう。チャンスがあれば徹底して補充しておかないとな」

日向の言葉にヤハハと笑って同意する十六夜。

黒ウサギはそんな二人を見つめ、柔らかに微笑んだ。

「何だかお二人を見ていると……懐かしい方たちを思い出します」

「それって、黒ウサギの知り合いなのか？」

「それはもう。なんとと言っても、コミュニケーションの前参謀だった方々です。御二人は義理の姉妹だったのですが、〴〵主ホスト催者〴〵をする時はいつも揃って同じことを言うのです。

『主催者は参加者を感動させるのが義務だ。金銭のやり取りはその場で切れる縁だけで、感動が完全に消えることはない。なぜなら感動とは、生きるのに必要な糧であるか

「らなのだツ!!」とか、二人仲良く語っていました」

でもリピーター率は良かったんですねー♪

と楽しげに話す黒ウサギ。

日向と十六夜は虚を衝かれたように驚いて返す。

「……………ふうん? ソイツらはどんな奴だったんだ?」

「そうですね。姉君はレティシア様とは別のベクトルの金髪で、とても快活な方でした。対照的に妹君は艶やかな黒髪が特徴的で、落ち着いた大人の魅力に溢れる方でしたね」

「……………へえ。その二人は、黒ウサギと仲が良かったのか?」

「仲がいいも何も、御二人とも黒ウサギが幼い頃にコミュニティで保護してくれた大恩人でございます。姉妹揃って無類の子供好きで、優しく、聡明で……………黒ウサギの憧れの方々でした」

黒ウサギは夜空を見上げ、ふっと目を細める。

「たとえどんなことがあつたとしても……………あの御二人だけはきつと無事です。不思議とそんな風に思わせてくれる方々でした。だからこの窮地にこそ、黒ウサギが駆けつけ、昔の大恩をお返しするのです! そして日向さんや十六夜さんたちのことを紹介して、今より素敵な毎日を送るのですよ!」

ムンツ、と健気にも気合いを入れる黒ウサギ。

日向と十六夜は黙り込んだまま、静かに夜空を見上げた。

その瞳は先ほどと比べ遙か遠くを見つめているようで、何も映してはいない。彼ららしからぬ表情に、黒ウサギは少し不安を覚えた。

「……どうしました、御二人とも？」

「……いや。何でもないよ」

「ああ。……そう言えば、アルタイルの星はどれだったかな」

星空をなぞりながら、十六夜は誤魔化すように呟く。

黒ウサギは自慢げにその隣で星を指した。

「もう、アルタイルは鷲座の首星ですよ。きっとあの辺りの星が——」

——え？ と黒ウサギが声を上げ。

日向と十六夜が目を見開く。

すると一陣の不吉な風が三人の間をすり抜けた。

日向たちの見間違えでなければ——一瞬、複数の星が光を無くしたのだ。

「……なんだ、今のは？」

日向は訝しげに眉を顰める。

しかし異変は、間を置かず連続で発生した。

——目覚めよ、林檎の如き黄金の囁きよ——

そんな不吉な声を聴いた瞬間。

“アンダーウッド”に、黄金の琴線を弾く音が響いた。

宿舎に到着したレティシアとユエを出迎えたのは、ぶくつと仏頂面を浮かべたペストだった。

予想だにしなかった相手に、レティシアは目を丸くして驚く。

「お前は……」

「こんばんは、純血の吸血鬼さん。まさか同じメイド服を着ることになるとは思わなかったわ」

ふう、とペストは憂鬱そうにため息を吐く。

突然すぎる再会に戸惑うレティシアだったが、彼女とのギフトゲームを思い返してハツとした。

「……そうか。The PIED PIPER of HAMELINの勝利条件を全て満たしてクリアしたから、隷属に成功したのか」

「そつ。魔王の隷属は、『主催者権限』を強制されたゲームに完全勝利を収めることによつて達成される。……忌々しいけれど、あなたたちはそれを成し遂げた。だから隷属の契約を結ぶために、私は箱庭に召喚されたのよ」

どこかうんざりしたように話すペスト。

同じく箱庭へと再召喚された身の上のユエは、素直に感嘆の声を上げた。

「ふえ〜、箱庭つて凄いなだね。私の場合も元の世界に送り返されたところを再召喚してもらったんだけど、確かペストちゃんて肉体そのものが完全に消滅しちゃってたんだよね?」

「……ペストちゃん?」

慣れない呼ばれ方に微妙な顔をするペストだが、見た目だけで言えばユエとそう変わらない年齢であることに気づき、ひとまずは納得することにした。

「まあ、そうね。正直、魔王と箱庭の制約がここまで強力だとは思わなかったわ。肉体だけでなく、魂を木端微塵にされたのよ? それを元の形に戻されるなんて、思ってもみなかったもの」

そう。

魂の死を超越して、彼女は箱庭へ呼び戻された。

非常識極まりない力を体感し、何とも言えない複雑な表情を浮かべるペスト。

しかしレティシアは明るく笑い、彼女の肩を親しげに叩いた。

「はっはっは、まあそうふて腐れるな。命あつての物種とも言うだろう？ お互いに遺恨はあるかもしれないが、私は歓迎するつもりだ。ちやうど新しいメイドも欲しいと思つていたところだしな。これからは同じ旗の下で戦う同士としてよろしく頼む、
ブラック・パーチャ―
黒死斑の御子」

「レティシアさんの言う通りだよ！ これからよろしくね、ペストちゃん！」

「……ふん。旗もないのに何を言っているのかしら」

柔和な微笑みを浮かべるレティシア。

心から嬉しそうに笑うユエ。

対照的に、呆れたように肩を竦ませるペスト。

「はあく。……荷物を置いたら、ジンの部屋に来て。その後は『主催者』に挨拶だそう
よ」

短くそれだけを伝えて、メイド服のスカートを揺らしながら宿舎に入っていくペスト。

レティシアとユエはお互いに苦笑を浮かべつつも、意識を切り替えて話をする。

「それではレティシアさん。私もお兄さんの部屋に荷物を置いてきますね」

「ああ。私も自室に荷物を置いてくるよ」

そうしてユエと別れたレティシアは一人、荷物を持って自室へと向かう。

黒ウサギは先ほど十六夜を探しに行った。

しばらくは帰ってこないだろう。

……ジンと一対一で話すには、今しかない。

(金糸雀と忍音が外界に追放されていたことを告げるには、今しかない。コミュニケーションが力を付け始めた今だからこそ……今後について話し合わねば)

覚悟を決める彼女だが、内心は複雑だった。

自室の窓を開け、張り巡らされた樹の根の隙間から星空を見上げる。

「金糸雀、忍音……お前たちが、十六夜と日向を箱庭に送り込んだのか……？」

レティシアの独白は、誰に届くでもなく夜風に溶けて消えた。

かつて同じ御旗の下に集い、同じ名を担いで戦った同士たち。

しかしもう二度と、あの日のように彼女たちと肩を並べることはないだろう。

少なくとも金糸雀は箱庭の外の世界で、故郷に帰ることもなく……静かに息を引き取ったのだ。

「――」

胸を締め付けられる想いだった。

自身、過去に魔王によって捕らわれていたレティシアも、当時は郷愁でいっぱいだった

た。

コミュニケーションに帰ることが出来るなら、たとえどんな醜態を晒してでも帰ってきたかった。

——そしてそれは、異世界に飛ばされた金糸雀や忍音も、きつと同じだったに違いない。

自分一人だけ帰ってきてしまったことに対する後ろめたさと、未知の土地で散ってしまった同士の訃報。

辛すぎる事実に関心を痛めるレティシア。

しかし、同時に彼女の胸に浮上した困惑は、悲しみと同等かそれ以上のものがあつた。綺羅と輝く満天の星々を見上げたレティシアは、血を吐くような想いで心情を吐露する。

「金糸雀と忍音は箱庭の外に追放されていた……しかしならば……！ 他.の.同.士.た.ちは、一.体.ど.う.な.つ.て.い.る.と.い.う.の.だ……！？」

——そう。

それこそがレティシアを最も苦しめている原因だった。

例えば、リリの母親。

彼女の母親も魔王に拉致されたまま行方が分からなくなっている。

もし彼女も箱庭の外に追放されていたら、とてもではないが救出は不可能だろう。最悪、箱庭の都市外でもまだあてがあつた。

しかしあらゆる時代と異世界に通じている、箱庭の外に飛ばされていたというのなら、それは――

「あの星々から砂粒一つを見つけるよりも、更に困難ではないか……!!!」

窓の縁を握り潰すくらいに握り締め、声は消えそうなほど儂く……レティシアは強く歯がみした。

だが、いつまでも隠しておくわけにもいかない。

この事実をジンに伝え、今後について話さなければならぬ。

なぜなら彼らの背中を押しているのは、仲間を救おうという固い決意だからだ。

だが現実問題、それは不可能に等しい。

方針の転換は必須だ。

たとえ同士から後ろ指を指されることになろうとも、レティシアは血を流す覚悟で説得に臨むつもりでいた。

そして出来るのであれば……一度コミュニケーションを解散し、新たな“名”と“旗印”を持つべきとまで考えていた。

(……黒ウサギやリリが聞けば、きっと泣くだろうな……)

一方は、里親のため。

一方は、両親のため。

三年間、歯を食いしばって耐えてきた努力が実らないと告げられる彼女たちを思うと、レティシアの心情は一層辛いものがあつた。

(しかし本来、もつと早くにそうするべきだったのだ。なのに私は主殿たちの背中にいらぬ夢を見て……: 不必要な重圧までかけていた)

今こそ、真つ当なコミュニケーションの形として再出発するべきだ。

決意を胸に、踵を返してジンの部屋へと向かおうとする。

——不吉な声と音色が響いたのは、その直後だった。

——目覚めよ、林檎の如き黄金の囁きよ——

えつ、と呟いたレティシアの体から力が抜ける。

同時に琴線を弾く音色が三度響き、彼女の意識を混濁させていく。

何が起こっているのか分からない。

飛びそうな意識の中、かろうじて背後を見たレティシアは、クスクスと笑うローブの詩人を目撃した。

「——ふふ、トロイヤ作戦大成功。お久しぶりですね、"魔王ドラキュラ"。巨人族の神格を持つ音色はいかがですか？」

「き……貴様……何者、」

「あらあら、ほんの数ヶ月前の出会いも忘れちゃうなんて、少し酷いのではないですか？……しかしそれも、すぐ気にならなくなるわ。だってあなたは——」

——もう一度、魔王として復活するのだから。

——目覚めよ、林檎の如き黄金の囁きよ。

目覚めよ、四つの角のある調和の粹よ。

豎琴よりは夏も冬も聞こえ来たる。

笛の音色より疾く目覚めよ、

黄金の豎琴よ——！

その詠唱に、日向と十六夜はハッと我に返った。

「この詩は……まずい、黒ウサギ！ 耀が巨人族から奪った『黄金の豎琴』はどこにある!？」

「え!? そ、それならサラ様が管理しているはずですが、」

「すぐに破壊するんだ!! あの豎琴は——」

「——如何にも。貴様らの想像通り、あの豎琴は『来寇らいこうの書』の紙片より召喚された

トウアハ・デ・ダナンの神格武具。敵地にあつて尚、目覚めの歌で音色を奏でる神の楽器だ」

低く、老齡を思わせるしわがれた声。

しかし居場所を特定させないように細工されているのか、周囲に反響して出所がわからない。

正体不明の謎の声を聴き、日向たちは背中合わせになつて警戒する。

しかし声の主は一向に姿を見せず、嘲笑うかのように彼らへ告げた。

『そう急くな、〃箱庭の貴族〃とその同士よ。今宵は開幕の一夜。まずは吸血鬼の姫——
——魔王ドラキュラ〃の復活を喜ぶがいい——！』

刹那、夜空が二つに裂けた。

晴れ晴れとしていたはずの夜空は暗雲に包まれ稲光を放ち、〃アンダーウッド〃の空を昏く染め上げていく。

二つに割れた空から——彼らは、神話の光景を見た。

「まさか……あれが……?!？」

『そう。神話にのみ息づく、最強の生命体——龍の純血種だ——!!!』

「——GYEEEEEEEEYYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAaa

を揺らしている。

一層大きな雄叫びが、一帯を震撼させると、巨龍の鱗が雨のように降り注ぎ、その一枚が巨亀や大蛇となつて街を襲い始めた。

「鱗から分裂して新種を作り始めた……？ まさか、本当に龍の純血種かどうか!? そんな、本物の最強種が下層に現れるなんて……!!」

「詮索は後だ黒ウサギッ！」

「ごちゃごちゃ言つてねえですぐに降りるぞ！」

日向と十六夜の一喝に、黒ウサギも我に返つて頷く。

大樹の頂上から飛び降りようとした三人はしかし、地下都市から高速で飛翔するロブの詩人と、その腕に捕らえられた——

「——!? レティシアッ!!」

「日向……十六夜……黒ウサギ……！」

混濁した瞳の彼女は、日向たちを視界に捉えたことで僅かに意識を取り戻す。

空を見上げた彼女は、巨龍と空中に浮かぶ城の影を確認し、ようやく現状を悟つた。

（私の「ホストマスタ主権者権限」の封印を解いた……!? コイツ、まさか——!?）

敵の正体に蒼白になるがしかし、その腕から逃れるだけの力はない。

己の運命を受け止めるようにまぶたを閉じたレティシアは、眼下の三人に訴える。

「——十三番目の、太陽を……!」

「え?」

レティシアの微かな声に耳を傾ける。

天高く掲げられた彼女は、全霊を込めて叫んだ。

「十三番目だ……十三番目の太陽を撃て……!　それが、私のゲームをクリアする唯一の鍵だ——!!!」

断末魔にも似た叫びと共に、レティシアは巨龍に飲み込まれて光となる。

その光はやがて黒い封書となり、魔王の「ギアスロール契約書類」となって「アンダーウッド」に降り注いだ。

『ギフトゲーム名』SUN SYNCHRONOUS

ORBIT in VAMPIRE KING

・プレイヤー一覧

・獣の帯に巻かれた全ての生命体。

※但し獣の帯が消失した場合、無期限でゲームを一時中断とする。

・プレイヤー側敗北条件

・なし（死亡も敗北と認めず）

・プレイヤー側禁止事項

・なし

・プレイヤー側ペナルティ条項

・ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは時間制限を設ける。

・時間制限は十日毎にリセットされ繰り返される。

・ペナルティは“串刺し刑”・“磔刑”・“焚刑”からランダムに選出。

・解除方法はゲームクリア及び中断された際にのみ適用。

※プレイヤーの死亡は解除条件に含まず、永続的にペナルティが課される。

ホストマスター側勝利条件

・なし

プレイヤー側勝利条件

一、ゲームマスター・“魔王ドラキュラ”の殺害。

二、ゲームマスター・“レティシアードラクレア”の殺害。

三、砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ。

四、玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主導者の心臓を撃て。
宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催し
ます。

”

” 印』